ガンダムSEED－閃光のライトニング－

抹茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガンダムＳＥＥＤ－閃光のライトニング－

【Ｎコード】
Ｎ７５４６Ｓ

【作者名】
抹茶

【あらすじ】
工業・電子系を専攻としていた殻木浩介は、一人の男の子を救って死んでしまった　しかし、それは女神が運命を捻じ曲げて起きてしまったのである。
そして女神は謝罪をする為に主人公を別の世界に転生させて貰える事になった。
そして殻木浩介が行った先はガンダムＳＥＥＤの世界
殻木浩介は、戦いに意味を見出せるのだろうか？

ＰＨＡＳＥ００（前書き）

初めて小説を書きました。
まぁ主は文章能力は皆無といっても良い位下手です・・・。
それでも努力して書いたので良ければ呼んでいってください。

PHASE00

そこの部屋の第一印象は白だった

何処を見渡しても永遠に続く白だけしかなかった「・・・ここは何処だ？」

思わずそう呟いてしまったが仕方ない

しかし何故此処に来てしまったのだろうか？

「数分前の出来事を遡って考えて見るべきだな」

～回想～

俺の名前は殻木浩介　一応電子・工業系を学んでいる普通の大学生だまぁ名前のとおり男だ。

俺は自宅に帰る途中に何時も行ってる馴染みの公園へ、向かっていた。

何故かは自分もわからない・・・。しかしそれでも週に1度は公園に足を運んでいた

ある程度公園を散歩し風景を眺めたら自分で適当に満足すると言う感じだ。

そして何時もどおり家に帰って食事をして眠ると言う。

同じ工程を繰り返すはずだった・・・。

しかし、その日は違った。何時も通りこの信号を渡って真っ直ぐ行ったら自分の家に到着だったが、突然男の子が飛び出して来た。

最初は驚いたが直ぐに俺も男の子を救う為にとびだし、そして男の子を突き飛ばした。

そして俺は、その子の代わりに車に轢かれて２０年の人生を終えた。

～回想終了～

そうか俺は車に轢かれちゃったんだな・・・。

「結局親父とお袋には何の恩返しも出来なかったな」

まぁ充分生きたんだし満足か

「でだ・・・お前さんは誰だい？」

俺は過去にやった事は後悔もしないしグダグダと文句も言わない（例えそれが自分の死に関係あったとしてもだ）というか今この目の前で起こってる現実の方が絶対重要だろ。

そう言う訳で俺はこの白い部屋で目の前に居る女性に話しかける。

しかし女性と言うよりかは、美女と言った方が良いかも知れない。

桜の花のように美しいピンク色をした長い髪と晴れ渡る冬空の様な瞳。

とても人とは思えないほどの美しさ、まるで女神を見てるような感じだ。

「今回の件については大変申し訳有りませんでした。」

そして行き成り深々と頭を下げられた。

「別に良いよ。過去の事をグダグダ言う気も無いし、それなりに良い人生だったと自分でも思うしさ。」

「そうですか。私は貴方が住んでいた世界で言う神と呼ばれる存在で、あなたは「あそこでは死ぬ運命じゃなかった。でも手違いで運命が狂って死んじゃったでしょ」・・・はい、そうです」

「本当にすいませんでした」

「だから気にすんなって言ってんだろ。それなりに納得出来た人生をアンタは否定するつもりか?違うだろ」

「え?でも、本来だったらこっちの不手際で死んでしまったのに、気にすんなで一蹴するのも変ですよ!?普通だったらもっと怒る所なのに。」

そんなもんかな?って言うか俺がおかしいのかな?最近の若者って後悔しながら生きて死んだ時に未練を残すって少ない気がするんだが。

で、俺に至っては明日死のうが来年死のうが結果は殆ど変わり無い物だろって、簡単に割り切れるもんなんだよな。

「あなたと話してると調子狂いますね」

女神と話してそんな事言わせるの滅多に無いんだろうな

「しかし貴方は本来の運命だったらあと８０歳も余生が有ったんですよ？」

（オイオイ・・・。俺は本来の運命だったら１００歳まで生きてる予定だったのかよ。）

「そうかい、じゃあ元の自分の世界の生は終っちまったし、例えばアニメや漫画などの別の世界に転生させて貰えるかい？」

「ええ、その程度でよければ出来ますよ。あっ、でも少し待ってください」

殻木がどの世界に行こうか迷ってる間に女神が何かを取り出してきた。

「何此れ？」と思わず目の前の上だけ丸い穴がぽっかり開いてる段ボール箱を指してしまった。

「いや、私は貴方を転生させる事は出来るんですが、力を多大に使用するので何処に行けるかまではランダムに決めないと駄目なんです」

つまり…彼女は転生させる時に多くの力を使うから世界や能力に至

っては此方では決められず、運任せに成るのだ。

（…あれ？此れミスったら即死フラグ立つ世界にも行くって事だよね？）

と内心冷や汗を掻いてしまった殻木だった。

「それじゃあ引きますね」と殻木も軽く諦めつつも覚悟を決め箱を選んでみた。

・行く世界　・チート1個目　・チート2個目と書かれた箱が3つ有った。

取り敢えず行く世界から殻木は引いてみた。書かれていた世界は『ガンダムＳＥＥＤ』

「行き成り死亡フラグ満載の世界ですか…。次のチートでマトモな物引かないとマズイなこれは」

そういって二つ目の箱の中身を引いてみた

『パイロット能力　、一般の兵より少し強くて敵の攻撃とかに反応しやすい』

（・・・これってやり直し効かないよね？）とついつい思ってしまった

「やり直しは出来ませんよ？取り敢えず最後の奴引いてください」

と女神にまで急かされた。

完全に諦め気味に最後の箱の中身を引いてみた。其処に書かれていたのは

『メカニックと電子能力のチート化更にはＭＳ改造が一人でも出来

る完成度が高い技能』
このカードに殻木は少しだけ喜んでしまった。彼は元々電子・工業系を専攻としていたのでこの技量は何かと嬉しいのだ。

「さて決まりましたけど、今回此れほど運が悪いのは貴方が初めてですね」と軽く苦笑していた。

「えぇ、そうですね。今回ばっかりは運が悪かったかも知れません。でも能力に製造系チートが有るので嬉しいですよ。あ、無理かもしれませんけど出生場所はオーブでお願いしますね」

「誕生場所まで願うんですか。…まぁ良いでしょう、此れ位やらないと流石に貴方が可哀想なんで」
と女神にまで同情されてしまったが、1人で無理だったら他の人と頑張れば出来たんじゃね?と考えてしまった。

「本来自分の手違いで殺してしまった人間は自分の手で解決しないと駄目なんですよ」と言ってきた

「成るほど、神にも色々と事情が有るんだな」

「それでは、準備が出来ましたので送りますね」

「はい、お願いしますね」

そう言うと突然俺の足元が光りだした

「そうそう、縁がありましたら何処かで会いましょうね」

それを言い終えた後俺の意識は無くなった

ＰＨＡＳＥ００（後書き）

如何だったでしょうか？自分はパイロットチートは苦手なので別の方面でチートを加えさせてもらいました。まぁパイロットとしての能力は簡単に言えばザフトの赤服と同じかちょっと上に設定させてもらいました。
多分チートでは無いと思います。

人物・機体紹介（前書き）

今まで遅くなって申し訳有りません

今回改めて機体情報やパイロットの情報を公開します

人物・機体紹介

オリジナル主人公

名前：シュウ・K（クサナギ）・ライトニング

身長　１８９．７ｃｍ

体重　６８．６ｋｇ

ＭＳ適正　射撃Ｂ＋　格闘Ｂ　反応Ａ＋　命中Ｃ

髪型：鋼の錬金術師のエドの髪の色を黒にしアホ毛を無くした状態

顔：　エヴァンゲリオンのカヲル君の顔

好きな物：静かな場所に行く事・コーヒー

嫌いなもの：平穏を壊す物　調子に乗る者

搭乗機

初期ＭＳ　ジン・アサルト改

ｏｐ機体各部にブースターを装着　頭部モノアイ露出　高性能の索敵・サーモグラフフティ完備

固定装備　左足：二連装ハンドガン　ホルダー付き

キマイラ（ＰＨＡＳＥ１０以降搭乗）

機体情報

頭部　元のディンの頭部は微妙という事なのでジンアサルト改の頭部をそのまま使用

背中　元のディンの羽を６枚から４枚に変更　羽の中心部にビームキャノンを搭載

両腕　ジンアサルト改の両腕をディンに移植

両足　局地にも対応するディンの脚に収納式のバクゥのキャタピラを使用

その他　宇宙戦闘可・サーモグラフティ・高性能索敵機

ジン改の各部ブースターの考えをディンにも着用

基本武装

左腕：収納型射出式アーマーシュナイダー

右腕：ビームソードシールド（判らない方はシナンジュの盾と一緒だと思えば良いです）

両足：二連装ハンドガン（シュウが気に入ってるので転用）

両肩：ビームキャノン（頭を挟んで肩を突き出ている。ＩＷＳＰのビームキャノンの真似）

両腰：ディンの元々のホルダー（メインは７６ｍｍ重突撃銃と９０ｍｍ散弾銃が入ってる）

両手：状況によって持っていく武器が変わる。

ＯＰ　後ろ腰に大型武器なら一個装着（スナイパーライフル等）
　　小型系なら１０まで可能（小型：グレネード系・マガジン）

追加武装：ガトリングシールド（ＰＨＡＳＥ２３にて登場）

オリジナルヒロイン

名前：シラユキ・カグヤ　（ＰＨＡＳＥ１０にて登場）

身長：１６２．７ｃｍ

体重：５４．３ｋｇ

ＭＳ適正　射撃Ｃ＋　格闘Ａ－　反応Ｃ　命中Ｂ

髪型：水色のショートでポニーテール　元々ロングヘアだったらしいがパイロットに成ってからポニーテールにしたらしい

顔：遊戯王ＧＸの明日香の顔

好きなもの：デザート全般

嫌いなもの：独りに成る事・勝つ為に手段を選ばない人達

搭乗機

初期ＭＳ：バクゥ　二連装レールガン装備

エンジェル　（ＰＨＡＳＥ１７にて搭乗）
機体情報

原型はＭ１アストレイ

背中のパックにディンの羽を追加
常に８枚の羽で空中を飛び姿勢制御を同時に行う。その姿からシュウはエンジェルと名づけた

両足　バクゥのキャタピラをエンジェルにも転用　収納式

基本武装

頭部：イーゲルシュテルン
両腰：ガンブレード　（ＦＦ８のスコールの武器　弾丸には貫通弾を使用　最大６発まで装填）
右腕：アンチ・ビーム・シールド

追加武装：
両腕　ビームサーベル装着　（判らない方はユニコーンガンダムのビームトンファーを想像してくれれば良いと思います）　（ＰＨＡＳＥ２５にて登場）

左肩　ビームライフル装着　（此方もデュエルＡＳのシヴァがビームライフルに変わったと思えば良いです）　（ＰＨＡＳＥ２５にて登場）

ＰＨＡＳＥ０１（前書き）

とりあえず主人公は原作知識は軽くですが持っています。
主人公がザフトか連合どっちに付けるかは未だに謎と成っておりますが
話の展開によってどっちに付くかは決まっていきます。
まぁ頑張って書いたので読んで下さい

PHASE01

ジリリリリン

「ふぁ～、もう起きる時間かぁ・・・全く宇宙は相変わらず変わらないもんだな。って・・・何で起きたらもう成人に成ってるんだよ！？どう考えても普通にオカシイだろ。チクショウめ俺の幼少期のキャッキャッウフフ生活を期待してたのに」

（何を言ってるんですか貴方は？）

「ヤヴェよ、俺何か幻聴聞こえるや。早く精神科の病院で治してもらわなきゃ・・・」

（ヒドイ扱いですね。船の構造・この世界の貴方の名前・出生・能力・今の職業等を教えようと思ったのですが、そう言う扱いなら教える気が無くなりましたよ）

「すんませんしたー！！冗談、冗談だから教えてくださいよ。女神様」

（一瞬で態度変えましたね・・・。まぁ良いでしょう。まずこの世界では貴方はシュウ・K（クサナギ）・ライトニングと言う名前です。一応出生はオーブにしては、いますが残念ながら貴方が五歳の時に両親とも事故で亡くなりました）

「そうか、この世界では、もう親父とお袋は居ないのか。まぁ前世も両親は仕事でずっと独りだったから気にする事じゃないな」

（その後貴方は孤児院に引き取られて十歳の時位にプラントに上がり、その貴方の持っている電子・工業系の知識にて天才児と呼ばれました。そして、研究で得た資金で貴方は、ジャンク回収艦を買いジャンク屋をしています。今乗ってる戦艦は元はホームという戦艦を改造してるそうですよ？）

「オイオイ、ホームって言えばガンダムＳＥＥＤアストレイで出てくる戦艦じゃねぇか。そういえば改造したって俺はどんな事をしたんだ？」

（そうですね・・・。破損したＭＳや武装を少し形は変わりますが元通りに直す事が出来るとか。後は、ジャンク品の武器改造して自作したりくっ付けたり色んな事出来ますね。）

「え？それって有る意味戦艦チートじゃないか？」

（うーん、まぁ大丈夫じゃないでしょうか？あと私からのプレゼントでちょっと面白いものをハンガーに積み込んで置きましたよ。私からはこれ位ですね。何か聞いておきたい事が有りますか？可能な限り答えますが。）

「面白いものは、後で自分で調べるとして。今はＣ．Ｅ．何年だ？そして何月何日だ？あと今俺はどこら辺に居るんだ？」

（今はＣ．Ｅ．７０年１０月３１日です。そして貴方は今Ｌ１宙域の世界樹のデブリの近くに居ますよ。）

「そうか、それだけ判れば後は自分で何とかするさ。ありがとさん女神様」

（そうですか、一応言っときますけど貴方が原作に介入する事で歴史も変える事も出来ますので、貴方は如何したいか良く考えて下さい。では、貴方の人生に幸あらん事を願っています・・・。）

運命の女神が幸多い事願っているって実際に幸せが降り注ぐ気がして成らないんだが・・・突っ込んだら駄目だよな。

「さてとまずは、ホームだと同じ艦に会ったら意味が判らなくなるから何か名前付けとくか。一応元世界樹でジャンク品を集めてみるか。」

～ブリッジ～

（オートパイロット　行き先を指示してください）

「とりあえず、世界樹のデブリまで行って貰って、ミストラルでジャンクを回収だな」

（ピッ・・・了解　目的地　世界樹跡地）

「さて、次は面白い物が有るって言ってたハンガーに行くか。」

～ハンガー～

これはジンか？いやジンにしては装甲が厚いし羽の数が多いな。それに各部にブースターが付いてる？これは、無理やり接続した感じがあるな、とりあえず端末確認だな。

（端末）

機体情報　ジンアサルト改　ｏｐ機体各部にブースターを装着

主に高速移動・高速戦闘・回避運動に重点を主にしている　頭部モノアイ露出　高性能の索敵・サーモグラフフティ完備

固定装備　左足：二連装ハンドガン　ホルダー付き
故障部位　両腕・頭部接続部　各部位バーニア接続部

「幾らなんでもサービスしすぎだろ女神様・・・。それにこの二連装の武器も始めてみる武器だし、使い勝手もそこそこ良さそうだけど、故障部位が最初から多すぎだろ！・・・まぁ無理やりくっ付けた感は有るけど少し補修すれば良い感じに使えそうだな」

（ピー　目的地の世界樹　デブリに到着しました。　次の目的地を指示してください）

「デブリに付いたか。ここは一度大きな戦争が有った場所だったからなジャンク武器や色んな物が大量に有るはずだが、マトモな電子接続部とジャンク武器見つかる事に期待だな」

～デブリ内～

「しっかし、色んな物が壊れた状態で放棄されてるな。とりあえず其処まで酷い壊れ方してない２５０ｍ級戦艦でも漁って見るか」

（だが幾らなんでも壊れ方が変な物もあるな。まるで無抵抗って言うか連携が取れずに各個撃破された感じがするな）そう考え事しながら使えそうな部品を探していると

「ん？丁度良い感じの２５０ｍ級の奴があるな。中身を貰っていくか」
とブリッジだけが破壊され他の所は、全く壊れてない戦艦を見つけ中に潜り込んでいった。

～３時間後～

「結構集まったからそろそろ戦艦に戻るか・・・。ん？これは、ワ

イヤーか？しかも頑丈だから多少荒く使っても千切れにくそうだな。ついでに持って帰るか」

～戦艦　ハンガー～

結構集まったから修理して一度どれ位武器が有るかリスト化するべきだな

対装甲リニアガン×７　７６ｍｍ重突撃銃×２　重斬刀×１　キャットゥス　５００ｍｍ無反動砲×１　特火重粒子砲×１　装甲盤×７

電子接続部×４　ＭＳ用ワイヤー×１

「結構武器とか補給できたな・・・。ただ重粒子砲と無反動砲は一個しかないから壊れたら即アウトだから使い道を考えるべきだな。

それにリニアガンは電子回路さえ弄れば突撃銃のＯＰ装備として充分使えるな・・・」

まぁそれでも一回に装填出来る弾数は１０発だが使う機会が少なさそうだが無いよりかはマシだな

「さてとハンガー内でも戦艦の行き先は指定は出来るんだが・・・次は何処へ向かおうかなぁ。とりあえずヘリオポリスに行って色んな物を買っとくか」

（ピッ・・・目的地　ヘリオポリス）

「さてと、早速ジンに武装を付けて修理でもするかな」

そしてふと作業する手を止めてしまう

「俺は、敵を撃てるのか？俺はこんな兵器を持ってしまったが・・・殺せる事が出来るのか？だけど戦場で躊躇いを持ったら、こっちがやられるな・・・。

躊躇いを持つべきじゃない…戦場を出るなら撃たれる覚悟を持って戦うべきだろうが！クソッ訳が判んなくなって来たな」

考えれば考えるほどシュウは、彼は未だに戦う事に対しての意味を考えてしまう。それは彼は一度も殺し合いをして来なかったからだ

そしてC．E．７１　１月１日　シュウはヘリオポリスに到着した

しかし彼は未だに戦う理由を見出せないまま戦火の渦に巻き込まれようとしていた

ＰＨＡＳＥ０１（後書き）

如何だったでしょうか？主人公であるシュウ・Ｋ・ライトニングは元は日本人なので戦争に対して少し抵抗を持っております。え？何故幼少期を出さないのか？
まぁそれは、作者の表現不足で書けませんでした・・・。申し訳ありません。

ついでにジャンク回収艦の名前を希望します。一応ご意見など有りましたら。ドンドン言ってください

ＰＨＡＳＥ０２（前書き）

今回は、あのガンダムＳＥＥＤで有名なキャラを二人ほど登場させました。
まぁヘリオポリスと言えば、もう判る人も居ますよねｗ
今回も努力して書いたので良ければ読んで行って下さい。

PHASE02

C．E．７１　1月

「ようやくヘリオポリスに到着したか。幾ら考えても戦いの理由は、結局思いつかなかったな」
そう、彼はヘリオポリスに着くまで戦いの理由を考え続けて居たのだ。

「やっぱり自分のジャンク艦に篭ってても、余り良い考えが出て来ないもんだな。気分転換に、ヘリオポリス内部にでも行くか。」
シュウはそう言ってジャンク艦を出てヘリオポリス内に入った。

～ヘリオポリス内部～

「やっぱり中立国の中は静かな物だな。このコロニーがガンダム製造してて、それが原因で戦火に巻き込まれるなんて悲しく成るもんだな」
と少し悲しそうに呟いてしまった。

そしてシュウは前世と同じように公園へと足を向けて行ってしまった。

（やっぱり公園に来ちゃったか・・・。もしかしたら心の中じゃ不思議と平穏な場所を求めてしまうから、不思議と来ちゃってるのかな？）
そう考えると不意に鳥の羽ばたいて此方に飛んでくる音が聞こえてきた。

そして俺の肩に止まって「トリィ？」と緑色をした鳥型のロボットが首を傾げて鳴いてきた。

「トリィ」

「ん？君はトリィって言うのかい？」

「トリィー！」

「そっかそっか、俺はシュウって言うんだ。でだ・・・目の前に居る青年は誰だい？」
と言って顔を目の前に向けた。

「はじめまして、僕はキラ・ヤマトって言います。あなたの左肩に居るトリィの持ち主みたいなものです」

「・・・ッ！そうか君はキラ君って言うのか。じゃあ俺も名前教えて貰ったんだし、礼儀としてこっちも言わせて貰うか。　んじゃあ改めて言うけど俺の名前は、シュウ・K・ライトニングって言うんだ、まぁ気軽にシュウって呼んでくれ」
とシュウは驚きを隠す様に気軽に言った

「わかりました。…シュウさんは、ヘリオポリスは初めて来た人ですか？」
とキラは聞いてきた

「ん？なんで判ったんだい？何も言ってないのにさ・・・。」
とシュウは、少し警戒した口調で聞いた

「いえ、ヘリオポリスに長く住んでいて殆どの人は知っているんで

すけど。何となくですけど何故かあなたは、初めて会った感じがするんで。」

「そうか。まぁ初めてなのは、本当だよ。それにヘリオポリスは中立安全だと思ったし、それに此処は静かだから来たのかもね」

「そうですか。確かに中立の場所に居れば戦火に巻き込まれずに平和に暮らせますからね。」
と暫くキラと笑いながら話をした。

「さてと、そろそろ自分の家に戻るよ」

「そうですか。シュウさんは、何処らへんに住んでるんですか?」

「あぁ、俺ジャンク屋やってるから自分の戦艦を持ってるんだよ。それが今の俺の家になってる。」

「そうですか。失礼な事聞いちゃって、すいません」

「いや、気にして無いから良いさ。それより戦場のハゲタカっぽい仕事だから、中立の人間にはちょっと気に障ったかな?だとしたら悪かったね」

「いえ、大丈夫です。気にしてないんで」

「そうか、キラ君　キミと話してて楽しかったよ。またどっかで会おうね」
とそこで俺は、キラと分かれて自分の船が有る港に向かっていった。

そして戻る途中で

「さて・・と、原作通りに進むんだったら、そろそろヘリオポリスが戦火に巻き込まれるね。キラ君キミの戦う意味を見せて貰うよ」

とシュウは誰にも聞こえない声でそっと呟いた

～戦艦内～

「さて・・・俺も戦火に巻き込まれたら、イヤでも戦わないとマズイんだよな。とりあえずヘリオポリスから少し離れるか」

（ピッ・・・了解　目的地　Ｌ３宙域　半径２０ｋｍ　コロニー無し）

「設定はこれで問題ないな。次はコロニーで戦闘中に弾を回避されたり被弾しなくてコロニー内部に当ったらコロニー崩壊の原因に成るからＭＳ用のスモークグレネードを相手に投げつけて、こっちの位置を判らなくさせて一方的に戦闘不能にさせるしか無傷で勝つ方法は殆ど無いな」

そしてシュウは目的地に到着するまでＭＳ用スモークグレネードを作り続けていた。可能な限りコロニーに被害を出さない為に、そして敵パイロットを殺さない為に

そして６個目が完成した時に条件に有った宙域に到着のコールが鳴り響いた。

「目的地に着いたか、じゃあジンアサルト改にジャンク屋のマークを着けて出撃するか」

（機体端末）
武装：二連装ハンドガン・重斬刀・７６ｍｍ重突撃銃ｏｐ対装甲リニアガン
機体状態：　ＡＬＬ　ＧＲＥＥＮ

（天井のロックを解除します）
と言う単調な機械音と同時に天井のハッチが開く音がした。

「ジンアサルト改　シュウ・Ｋ・ライトニング出る！」

そうしてシュウの乗るジンアサルト改は果てしなく続く宇宙へと飛び出した。

「しかし機体名少し長いから形は殆ど変わらないからジンって略して言うか」

「それにしてもコイツはホント運動性高いな。しかも改造したかい有ってか、機体の隅々まで自分の思い通りに動いてくれるから、ホント使いやすいな。
かるく最高速度で動いて見るか・・・ってＧが凄いが、乗りこなせれば充分強いな！」
と軽く自分で改造したジンを賞賛してると

急に「そこのジン止まれ！！」と言う声が聞こえてきた。

止まって索敵センサーを確認してみると、後方１ｋｍにメビウス・ゼロと言う連合が開発したＮＴ専用戦闘機が近づいて来た。どうやら此れに呼び止められたらしい

「人が楽しんでる時に邪魔しやがって撃ち落してやろうかな」

と少々物騒だが聞こえない様に呟いてしまった、シュウだった。

「こちら第7艦隊所属ムウ・ラ・フラガだ。ジャンク屋のＭＳ　機体がコロニーの警戒ラインに入ってるから至急引き返せ」

「あぁ、すまない。改造したら良い機体に成ってな、試運転で飛ばし過ぎてしまったら警戒内に入るとはね……以後気をつけるよ。フラガさん」

「確かに良さそうな機体じゃないの　そいつは、どうやって作ったんだい？えーと・・・何て呼べばいいんだ？」

「あぁコイツは、１５体位壊れたジン集めて作った奴だ、誰にも言わないでくれよ？そっちが名前教えてくれたんだし礼儀として自分も教えなきゃね。俺の名前は、シュウ・Ｋ・ライトニングだ。それじゃあ失礼するよ」
と言って来た道を引き返そうとして

「今度から気を付けてくれりゃ、それで良いさ」と言われて通信を切られた。

それを聞いたシュウはちょっと苦笑してしながら来た道に沿って自分の戦艦に帰って行った。

「全く今回は、原作の二人と会うのは少々予想外だったな。まぁこの後イヤでも絡みそうだから、顔合わせと思えば良いか」
と呟きながら自分の戦艦に戻って行った。

ＰＨＡＳＥ０２（後書き）

はい、今回ムウ・ラ・フラガさんとキラ・ヤマトの登場とさせて頂きました。
しかし原作キャラの口調とか全然わかんないぜ　ｏｒｚ

ちなみにジン１５機で作ったのは嘘だろ！と思った人
そうですね、あの時には流石に貰ったじゃザフトのスパイ扱いになるのでジャンク屋の身分を使って、ああ言いました。

さぁ次は、いよいよ待ちに待った主人公の戦闘が始まります。
未だに戦闘への理由が思いつかない主人公はどうなるのでしょうか？
乞うご期待！
そしてシュウは最後まで生き残れるのか・・・。それは作者も判りませんｗｗ

PHASE03

「そろそろヘリオポリスが襲撃される日だな。確か日にちで言うと２５日あたりに襲撃されるんだったよな?今は、２０日だからまだ時間はあるな。取り敢えずジンに今回開発した新武器と武装を何個か積むか。」

そう、今回シュウはコロニーに被害を出さない為にスモークグレネードと併用して新しい武器を作っていたのだ。そしてシュウはヘリオポリス襲撃が来る前に直ぐに出撃できるよう準備を行った。

（機体端末）

メイン武器：７６ｍｍ重突撃銃　ｏｐ　対装甲リニアガン

腰：スモークグレネード・各射撃武器マガジン

左足：二連装ハンドガン

背中：７６ｍｍ大口径対ＭＳ用スナイパーライフル（残った一つの７６ｍｍ突撃銃と余ったジャンク品で作成）

そう今回、コロニーに被害を出さない為に、シュウはスナイパーライフルを製作していた。

「殺さずに確実に戦闘不能にまで追い詰めるべきだな」

戦う理由が未だに無いシュウは、無意識に敵兵を殺す事に抵抗をし、不思議とそう呟やいていた。

そして遂にザフト軍が連合が作成したガンダムを奪取する日がやってきた・・・。

「遂にこの日が来ちまったか、イージスとすれ違ってストライクの

近くに着くまでザフト軍のＭＳとして認識をしてしまう奴を、俺のジンに積んでストライクの近くに行ったら認識が中立軍に戻るプログラムを組み込んでおくか」
そしてプログラムを作成中に時間を確認し

「そろそろ作戦が始める頃か」とポツリと呟く。

～３０分後～

そしてシュウは、プログラムをこの短時間で完成させた

「結構時間は喰っちまったがコイツの機動性なら直ぐにヘリオポリスに着くな……ハッチ解放！」
そう言った瞬間

（ハッチ解放　どうぞ）　と言う単調な機械音が聞こえてきた

「ジン　シュウ・Ｋ・ライトニング出る！」

そしてシュウのジンが飛び出た。ストライクに乗ってるで有ろうキラを救出する為に

またヘリオポリスを壊したくないと思ったために

シュウは自分のジンが出せる最高速度でヘリオポリスへと向かった。

機動性ではＸシリーズを上回るので３０分位でヘリオポリス内部に侵入することが出来た。

そして入って直ぐにイージスとすれ違い

「ストライクやXシリーズは、PS装甲を持つからBEAM兵器以外は効かないから気をつけろ」
イージスのパイロットに通信で言われ
即座に「了解」と慣れない軍の返し方をして、通信を切った。
「プログラムが正常に働いてるな」とプログラムの出来に関心しながら
再び機体の持つ最高速度でストライクの居る場所まで近づいた、そしてストライクの近くに行った瞬間にザフト軍表記が中立軍表記へと元に戻った。
「あなたは・・「良いから、さっさと後方に下がれストライク！」
えっ？あっ、はい！ありがとうございます。気をつけてくださいね」
そう言ってストライクは此方に背を向け後方に飛び去っていった。
「貴様、何故ザフト軍のジンに乗っていながら連合に味方する！」
そう言ってザフト軍のパイロットが激怒してくる。
「お前等ヘリオポリスは中立だぞ！連合とザフトの火種を中立（ここ）に持ち込んでくるな！！」
「先に中立を破ったのは連合だ。今の状況も判らずに、あのような物を作るから……邪魔をするなら先にお前を撃つ！」
と言いながら76mm重突撃銃を構えて撃ってくる。
「クッ」
シュウは、急に撃ってこられて驚いたが冷静に対処する為に左にサ

イドステップをして、銃弾を避けた。
確かにザフト兵の言ってる事は正しいが
「だからと言ってそれが中立コロニー内で戦う理由に成ってるとでも思ってるのか！」
とシュウは、表面上だけであるが激怒し

（先にスモークを投げてお互いの位置を判らなくさせてやる）
と思い腰に付けてあったスモークグレネードを自分と敵の間に複数ばら撒いた。

そしてお互いの姿を煙で見え辛くしてシュウは「サーモグラフティ起動」と呟いた。

そしてシュウのコックピットの画面から敵のジンのシルエットが浮かんできた。

「戦争を吹っ掛けた奴に先も後も関係ない・・・中立の平穏を乱すなら、俺はお前を無力化する」
と言いながらシュウは、背中に掛けておいた狙撃銃を構えてジンの右肩を撃ち貫いた。

「黙れ黙れ黙れ！ナチュラルは黙ってコーディネーターに従えばいいんだよ！貴様もだ、邪魔をするなら先に貴様から落としてやる。」
そう言いながら左腕で重斬刀を抜きこっちに斬りかかって来た。

「なっ・・！」
シュウはザフト兵の予想外の行動に驚いてしまったが、反射的に持

っていたライフルを咄嗟に前に出し重斬刀を防いだが代償として、ライフルが折れてしまい使い物に成らなくなってしまった

そして使い物に成らないと一瞬で判断したシュウは、持っていたライフルを敵に投げつけショルダータックルを喰らわした

シュウの咄嗟の判断と乗っていた機体の装甲の厚さとバーニアの数の多さだからこそ出来た芸当だろう。

そしてジンの体勢を崩した後、本能的に左足に装着してあるホルダーの中に入っていたハンドガンを抜き出してマガシンの中に入っていた弾を全部使って敵のジンのコックピットを撃ち抜いた

「えっ？」シュウは咄嗟に自分のやった行動に驚きを隠せなかった

「殺す気なんて無かったのに・・・なんで・・・」

と言いながら操縦桿から手を離しガタガタと震えてしまった。

当然の事だろう、今まで殺し合いの無い平穏な生き方をしていたのに、目の前のジンに乗っていた兵士と殺すか、殺されるかの戦いでコックピットを撃ち抜いて殺してしまったのだから。

そして「うぅ・・・」と嗚咽を漏らしながらコックピットで涙を流してしまったシュウだった

何分ぐらい泣いていただろうか？判らなかったが、結果的に敵兵を殺してしまって涙を流してしまったが後悔は、しなかった。

「何時かは殺さない事を心情としていても不運な事は起きるんだ。それが少し早く起きてしまっただけだ。そう考えるとこの兵士には、

感謝だな・・・ありがとう」
そう言いながらシュウは、結果的に殺してしまった兵士に感謝し、
索敵レーダーを確認しストライクが居るであろう方向にバーニアを
起動させ飛び出して行った。

ＰＨＡＳＥ０４（前書き）

投稿遅れて申し訳御座いません
やっぱり下書きで時間が掛かりました・・・。
今回は、拠点編＋強敵戦の二本でお送りします。

シュウは赤服よりちょっと強いだけなので如何対処するのか？

PHASE04

「レーダーを見ると、確かこの辺りの筈なんだが？」

そういってシュウは、モノアイカメラで周囲を確認し始めた。

「・・・・！！」

「ん？今何か声が聞こえたような？」

シュウは声のした8時の方向に機体を向けた。

そこには膝を着いているストライクとヘリオポリスの住民とキラ君

そして、拳銃を構えた女性整備士が居た。

「オイオイ、ずいぶんとまぁ穏やかじゃない空気が出来上がってんじゃないの」

そう呆れながらもシュウは、ストライクの横に行き同じように片膝を付きジンから降りた。

だがジンは元々はザフト軍のＭＳの為皆に凄く怯えられていた。

怯えられたのを見てシュウはショックを受けていたが、取り敢えず話が先な為

「オイ！銃持ってるアンタ、何故ヘリオポリスの住民にそんな物騒なもん向けてんだ？」

と民間人に銃を向けているので多少苛付きながら聞いた。

「貴方は誰ですか!?所属軍・所属部隊・目的を答えなさい!!」
と言いながら今度はこっちに拳銃を向けてきた。

「所属は中立軍って正確に言えばジャンク屋だ。ストライクのモニターで見ただろ?まぁ目的は、そこに居る青年と戦火に巻き込まれるヘリオポリスの防衛かな?」

「ふざけないで!第一ジンはザフト軍の物よ。それに普通のジャンク屋がジンを手に入れられる訳無いでしょう!しかもナチュラルの貴方が何故コーディネーターのMSに乗れるの?ザフト軍のパイロット?どうなの答えなさい!」
と女性整備士が怒鳴りながらも聞いてくる。

「はぁ、アホらしいな……まずキラ君を助けに来たのは、本当だ」
と女性整備士の質問に呆れながら、被っていたヘルメットを外した。

「えっ、シュウさん!?」「知り合いなのかキラ?」「うん、ヘリオポリスの公園で偶々会ったんだ。」
と青年たちの話が聞こえて来たがシュウは取り敢えず無視していた。

「次にジンの話だな。アンタも技術者の端くれなら聞いた事有るだろ?当時10歳の子供がプラントの電子・工業系大学に入り主席で出た奴が居るって」

「えぇ、でもあれは、伝説的扱いで今頃20歳で何処かの会社技術部の頂点に居るんじゃ?」

「その人間が俺なの」

「えっ！？」
と多少驚かれたが

（本当に、本当にあの時は大変だったなぁ・・・）
と思いながら多少遠い目に成ってしまった、シュウだった。

「話し戻るけど、まぁ知識と技術をフル活用して作り上げたんだよ。このジンはな」

「ちょっと信じられないけど、何で貴方は、何処にも所属しないの？」

「ん？まぁ色々有ったんだけど、大半は面倒だったからかな」

「面倒だったからって、まぁ良いわ。それより何でヘリオポリスがしゅうげ「ザフト軍のＣＰ（コンピューター）にハッキングしたから」

「へぇ～ハッキングねぇ……ハッキング！？連合の電子班ですら、苦戦する事を何でそう簡単に答えれるわけ？」

「アンタ等のハッキング方法がハッキリ言って悪すぎる、足跡残しすぎまるで見つけて下さい。とでも堂々と言ってる様なもんだぞ？」

「正に規格外ね」と言われたが

（まぁクジ引きだったが運良く手に入れた公認チートだしな）と思ってしまった

「だったら何でその情報を教えてくれなかったの？」と言われちまったが

「何でそんな事教えなきゃ成らんのだ?第一教えたとしても狂言として一蹴されるのが良いオチだ」と返しといた

「さてと話は、終わりだ。そろそろアイツが来る頃だから隠れとけ、適当に追い払うからさ」

「「「アイツ?」」」とハモって聞かれたので

「敵の指揮官が出て来るんだよ。それも飛びっきり危ねぇ奴がな」と答えながら自分の愛機に乗りかけた時に

「僕も手伝います」とキラが答えながらストライクに乗りかけていた。

そして少し睨みながら「覚悟はあるのか?」と質問をした

「友達が殺されるのを黙って見たくないんです」と覚悟を決めた眼差しでこちらを見てくる。

「そうか、ヘリオポリス内の地図を送るから、指定したポイントまで付いて来てくれ」

そう言ってストライクにデータを送りシュウは「また、行く事に成っちまったな」と辛そうな声を出しながら、P(ポイント)15に向かった

そう　そこは、先ほどシュウが敵兵と殺しあった場所だった。

そこでシュウは有る物を回収しようとしていた。

「ライフルのスコープに重斬刀それに突撃銃、少し壊れてるが予想範囲内だから、此処で何とか修理と改造は出来る物だな」

「っと、その前にストライク用のシールドがそこに有るから装備しときな、あとはコロニー内で射撃してビームライフルが外れたらコロニーのダメージが蓄積しやすいから代わりにこれを使ってくれ」とシュウは背中に掛けておいた７６ｍｍ突撃銃（ＯＰ　対装甲リニアガン）をストライクに渡した。

「あの、何でこんなにしてくれるんですか？」
とキラは、恐る恐るシュウに聞いてみた。

「ん～、何でだろう？」
と言いながら武器の修理・改造に取り掛かっていた。

「まぁ多分だけど、不当な暴力を認められなかったからかな？その為だったら味方に対しての支援は、惜しまないけどね」
と言いながらシュウは、その天才的な手腕で重斬刀とスコープの修理を終え、スコープを突撃銃に溶接し始めた。

「認められない不当な暴力ですか？」と不思議そうな顔をしたキラだった。

「うん、良いかいキラ君。俺は、殺し合うと言う権利が有ると言う事は、同時に撃ち撃たれる覚悟が有る人の事を指すと思うんだ。それに今回のヘリオポリスの襲撃で戦争に全く関係無い人も多く死んでしまった事だろうね。だから俺は、銃を持たない普通の人が死んでしまった事は、容認出来なかった。だから此処に居るんだ。まぁ俺が味方するのは、ザフトでも連合でも無い力無き人達の為に戦うんだ。」

と言い完成させた７６ｍｍ突撃銃（ＯＰ　ＡＯＣＧスコープ）を確認していた。

「そうなんですか、でも僕は、「君は君の戦いの理由を納得出来るまで探し続ければ良いさ」・・・はい」

（ビーー！ビーー！ビーー！）

そしてシュウのジンの敵が接近しているのを示す警戒音が鳴らされた

「ちっ！話は終わりだ、キラ君。初めての実戦だが気を抜くなよ。相手はシャレに成らない奴だからな・・・。」

と言いながら確実にダメージを与える方法を頭で画作し続けていた。

「知っているんですか？」と聞かれ

「戦った事は、無いが噂では何度も奴の武勇伝を聞いたよ。どれもぶっ飛んでる位の撃墜数だ」

と返しといた

そして指揮官の乗ったシグーが目の前に現れてきた・・・。

（ちょっとマジでやらないと、こっちが死ぬかもな）

と少々焦ってしまったシュウだった。

（そういえば、ストライクには、３つの兵装が有ったな。）

高機動で動く　エールストライク

隙はデカイが当たれば打点がデカイ　ランチャーストライク

そして接近戦に持ち込めば確実に致命傷を与えれる　ソードストライク

（どれもＰ１７（ポイント）にある。だが奴は、確実にストライクを狙うだろうな。俺が囮に成って戦えば兵装を装着して…。だが俺は生き残れるのか？いや生き残るんだ！迷うな！恐れるな！戦うんだ！）

「キラ君アイツは、俺が引き付ける、その間に君はＰ１７（ポイント）に行って、どれでも良いストライク専用の兵装を付けて来るんだ！」

「えっ、しかし「早く行け！！」クッ！判りました。」

そう言ってストライクは、Ｐ１７（ポイント）へ向かった

そしてシグーはストライクを追う様に向きを変えようとした。

しかし

「オイオイ、どっち向いてんだお前？お前の相手は俺だろうが！！」

そう言って７６ｍｍ突撃銃を構えてシグーに撃った。

しかし相手は歴戦のパイロット単調な攻撃が当たる筈が無い。

そしてシグーの向きがストライクの行った方向からこっちに変わった。

「さぁ楽しい殺し合いをしようじゃないか・・ラウ・ル・クルーゼ！！」

と震えながらも笑っていた、まるで此れから始まる殺し合いを楽しむかのように。

そして行き成りシグーの持っていたシールドから２８ｍｍバルカン弾が地上にばら撒かれた。

シュウは急いで上に飛び上がりシグーに対して重斬刀で斬りかかった。

だがクルーゼ機も咄嗟に反応し重斬刀を抜き出していた。そして鍔迫り合いが起きた。

そして数秒後お互いに後方に下がり、７６ｍｍ突撃銃をほぼ同時に取り出し撃ち合いが起きた。

そしてお互いに１０分ほど撃ち続けて・・・

クルーゼ機は、右足を俺の機体は左腕が被弾し使い物に成らなかった。

そして咄嗟に推進剤爆破を恐れて左腕を強制パージをした。

その判断が功を制したのか元左腕から爆発が起きた。

「やはりクルーゼは、戦闘の化物だな・・・」

と忌々しげに呟くシュウだった。

そして手持ちの武装の残りマガジンを確認する

（マガジン数：突撃銃３本　ハンドガン１本）

「少し賭けに出るか」と呟いた

「君、名前はなんていう?」とクルーゼが聞いてきた。

「人に名前を聞く前にまず自分からと教えて貰わなかったのか?」

(まぁ、お前の名前聞かなくても知ってるけどな・・・)

「ハッ!確かにそうだな。私の名前は、ラウ・ル・クルーゼだ。再び言おう君の名前は?」

「チッ・・・シュウ・K・ライトニングだ」

とイラつきながらも答えた。

「単刀直入に言おう私の「仲間になれか?」・・そうだ」

「拒否する。あんたの目的は、知らないが　お前等が地球にNジャマー(ニュートロン)を打ち込んでから入る気失せたわ」

「そうか、君ほどの人材を失うのは辛いが仲間に成らないのなら此処で落ちてもらう!」

そう叫びながら重斬刀を持ってシュウに突っ込んで来た。

そしてシュウは「此処で俺は落ちない!賭けはアンタの負けだ、ラウ・ル・クルーゼ!!」

「全ブースターリミッター解除!」そう言いシュウはブースターのリミッターを全て解除した

そしてシュウはクルーゼ機に体当りを喰らわした直後バーニアをフル稼働をさせた。

「なにっ！？」と言う声が聞こえた気がしたが気にしない

そして失った左腕以外のブースターのリミッターが解除したのだ

当然掛かるGと速度は恐ろしい物だろう。

途中でビルにぶち当たったが今のGと速度では、ジンとシグーを受け止める事は出来ず、大きな穴をあけた後紙屑の様に崩れ落ち残骸と化していた。

そしてシュウは、この解放モードを一度計測した事が有った。

そして危険があると考えリミッターを掛けたほどだ。そうその速度は、Xシリーズなど話に成らないほどの速度だった。

そしてシュウのジンとクルーゼ機は、P（ポイント）9に有る山に突っ込んだ

そして互いの機体がREDゲージで有る事を示す警報鳴り響いた

シュウは、最後の気力を振り絞ってジン改を操作し重斬刀を振り下ろした。

だが当たった場所は左腕だった

「ちく…しょぉ…」思わずそう呟いてしまった

そしてシュウは、それを最後に気を失ってしまった。

ＰＨＡＳＥ０４（後書き）

如何だったでしょうか？今回はラウ・ル・クルーゼＶＳシュウ・Ｋ・ライトニング
でしたね。正直言って自分で書いててｇｄｇｄ感あるなと思ったほどでした。
まぁ次話も少し時間掛かりますが頑張って書きます。

感想やレビューまた何か有りましたら気軽に言って下さい

ＰＨＡＳＥ０５（前書き）

とりあえず戦闘終了後の拠点フェイズに入りました。
まぁ今回は、少なめですがそれでも頑張って書いたので読んで行って下されば嬉しい限りです。

PHASE05

「ん？此処は・・・ッ！！」

シュウはベッドの上で目覚めた、しかしクルーゼの乗るシグーに殺されない為にリミッター解除をしてしまった上に山にぶつかったので肉体的ダメージが大きいのだ。

そして医務室のドアが急に開かれ、３人の連合兵が入ってきた。

どうみてもパイロットの金髪の人、先程話した女性整備士、そして指揮官と思われる黒髪の女性

「目が覚めたか。取り敢えずの所生きてるようだな。」

と知らない女性に怒ってる様に言われた。

「何で怒ってるんですか？」と取り敢えず聞いてみた。

「怒ってなどいないのだが……」と反論されてしまった

「今回助けて下さり、有難う御座います。自分はシュウ・K・ライトニングと言います。気軽にシュウとでも呼んで下さい」

「マリュー・ラミアスよ」「ナタル・バジルールだ」「ムウ・ラ・フラガだ、先日ぶりだな」

と三者三様の返し方をしてきた。

「しかし、何故お前さんは、山に突っ込んでいたんだ？」とムウさんに言われ

「ラウ・ル・クルーゼと戦っていたから」と言った瞬間

「「「！？」」」３人の顔が驚愕に染まった。

「と言っても結果はクルーゼ機に損傷を与えただけで落とす事は出来ませんでしたけどね」

「いや、アイツから生き残ってるだけでも凄いのに傷まで与えるなんてな…」

と言いつつもムウはクルーゼ機にダメージを与えていたことに唖然としていた

「そうなのか？…まぁ良いや、とりあえず俺のＭＳ見せてくれ。後は、今此処どこなんだ？」

とシュウは終わった事を気にする事無く自分の愛機と今居る場所について尋ねていた。

「あぁ、ＭＳについては、こっちだ付いて来い」

と言われベットから起き上がりナタルという人に着いて医務室から出て行った

「取り敢えず　今はユニウスセブンに行っている。ほら、此処を真っ直ぐ進んだらデッキだ。整備してるのは、コジロー・マードックだ挨拶しとけよ？」

と歩きながら説明を受けそしてハンガーへと続く扉をナタルさんは、指していた

「はい、ありがとうございます」そう言いながら

（アルテミスの傘は落とされたんだな）思ったシュウだった。

～ハンガー内～

入って直ぐにキラ君と鉢合わせた。

「シュウさん!?もう動いても大丈夫なんですか?」と少々困惑した表情で聞かれた。

「あぁ大丈夫だよ。それよりマードックさん何処に居るか、判るかい?」

と大丈夫そうに体を動かしながらマードックの位置を聞いた。

「マードックさんですか?マードックさんでしたら僕と大尉の機体の整備終って直ぐにシュウさんのＭＳの修理してましたよ?」と教えられたので

「ありがとう、キラ君。それより後で話をしたいんだけど良いかな?」そう気軽に言ったはずなのだが

「・・・はい」と俯きながら返事を返して来たキラ君だった。

「大丈夫、そんなに堅苦しい事聞くんじゃないよ、自分が動けない間に何が有ったか教えて欲しいんだ」と言いシュウは、その場を離れ自分の機体に向かった。

そして自分の機体の目の前に辿り着いた瞬間に、喧騒が起きていた。

「整備長、焼ききれたコード全部変えました。「良し他の所を手伝

え！」はい。」

「整備長、余りの忙しさに泣きたいです！「よし、泣け！泣きながら作業続けな！」了解しました」

「整備長、寝させて！「もう懇願じゃなくて、言い切ってるじゃねぇか、作業しろ！！」うぅ、眠たい」

と言う声が響いてきた。

あとの2つ位が整備に関係して無い気がしたが、気のせいだと思う。

「コジロー・マードックは居るか！」とシュウは目的の人物と会う為に整備士達に向かって叫んだ。

その瞬間一人の整備士が作業をやめこっちに来た。

「あぁ何だ坊主？俺がマードックだが如何したんだ？」と少し苛付いている様な感じが出ていた。

「えぇ、そこのジンしゅう「ガンッ！」いってぇぇぇ・・何すんだよ！」

そうシュウは、行き成りマードックにスパナでぶん殴られたのだ。

「アホか！何が原因で山にぶち当たりやがったが知らないが、機体を直す方も大変なんだぞ！？……次からは気をつけろ」

そう怒ったのは、ジンがボロボロなのも有るが、マードックは機体以上にパイロットも心配だったのだ

「すいません、気をつけます」

とマードックに素直に謝ったシュウだった。

「わかりゃ良いさ、次から気をつけてくれよ？」
と言われシュウは、その場を離れた。

そしてシュウはホームの存在を思い出し、こっちまで持って来て良いかマリューさんに聞きにブリッジまで向かった。

～ブリッジ～
「マリューさん自分のジャンク艦をこっちまで持って来て良いですか？」
と一応聞いてみた。

「えぇ、でも時間掛かるんじゃ・・？」と聞かれて

「ジャンク艦をユニウスセブンまで来させます。ちょっとだけ端末借りますね」
そう言ってシュウは、端末を打ち出した。

（ホーム端末）
（目的地を設定してください）カタカタ　（目的地　ユニウスセブン　最高速度）

（ピッーー　目的地　ユニウスセブン　了解）

「さてと、これでアークエンジェルがユニウスセブンに着く頃には、ホームも着くでしょう。…って皆さんどうかしました？」
と皆呆然としながらも

「アイツが、規格外なだけなんだ」とほぼ全員から言われてしまった。

（そりゃ、運良く手に入れた公認チートだからね）と内心呟いてしまうシュウだった・・・。

「しかし、ユニウスセブンか・・・。何か有った気がするんだが、何だっけかな？」

正直何か有った気がするのだが先程衝撃で少々忘れてしまったシュウだった。

そして3週間後ユニウスセブンに到着し、新たな火種がシュウとアークエンジェルのクルーに降り注いだ。

それは誰もが予想外すぎることで、考えられない事だった。

ＰＨＡＳＥ０５（後書き）

はい、アークエンジェル内での拠点フェイズです。次は、シュウがユニウスセブンに着くまでの暇潰しを書いて行こうと思います。
まぁ原作知識は偶に忘れてる設定を掛けときました。
そしてアークエンジェルに降る新たな火種・・・。原作知ってる人なら判りますね
そしてシュウは、生き残る事は出来るのか？

ご意見・ご感想あればドシドシ言って下さい

ＰＨＡＳＥ０６（前書き）

はい、今回ＰＨＡＳＥ０６・拠点フェイズを投稿しました。
まぁ今回も上手に書けたかは謎ですが
それでも努力はしたので読んで貰えると嬉しい物です
それではＰＨＡＳＥ０６お楽しみ下さい

PHASE06

「……ヒマだな」
そうシュウは、ホームに帰ろうと思えば帰れるのだが、マリューのご好意に甘えて客室を一つ借りているのだ。

さて話は変わるが、キラ君はあの後ストライクのエールストライカーパックを装着してこっちに来ようとしたらしいのだが、他のジンの部隊と遭遇して戦っていたらしい。

一応倒したらしいが（幾ら初陣だからって時間掛かりすぎだろ）とシュウは思ってしまった

結局シュウの所に着いた時には、既に戦闘は終っておりクルーゼ機が火花を散らしながら撤退してたらしい。ちなみにヘリオポリスは、1時間後にジン・D装備が来て崩壊してしまった。

「考えてみりゃ原作通り進んではいるが、やっぱりクルーゼ戦じゃ俺の負けだよな」
シュウは、余り強さに興味が無かったのだ、強大な力を持つと自分に力に驕ってしまうからだ。

「だが周りの人を救うんだったら、もっと強くならないとな」
そう呟きシュウは、椅子から立ち上がりシュミレーター室へと向かった

～シュミレーター室～
誰も居ないと思いゆっくり歩いて来たのだが如何やら先客が居るようだ。

その後ろ姿は何度も見た事のある人物なので思わず

「キラ君とフラガ大尉？」と言ってしまった。

「シュウさん？何故此処に」「シュウか。あと大尉は着けなくて良いぞ」

とフラガとキラに言われ

「あぁシュミレーターを使って訓練しに来たんだがもう少し時間掛かりそうだな」

と少しだけシュミレーターを使うのを諦めそうになったが

「いや、使えば良いさ」

とシュミレーターから降りてフラガさんに言われた。

流石に自分の訓練も有る筈なのに簡単に譲るのは裏があると思い

「本音は？」と聞いたら

「ばれたか、正直言ってキラとシュウの実力を見せて欲しいもんでさ」と言われて

「そうですか」と返しておいた。

「じゃあキラ君戦ってくれるかい？」「はい」

と言いながらキラ君とシュウはお互いに、シュミレーターに乗り込み機体情報を打ち込んだ。

ストライク（エールストライカーパック

イーゲルシュテイン×２
アーマーシュナイダー×２
５７ｍｍ高エネルギービームライフル×１
ビームサーベル×２

ジンアサルト改
７６ｍｍ重突撃銃×２（ｏｐ　対装甲リニアガン）
重斬刀×１
２８ｍｍバルカンシステム内装防盾×１
二連装ハンドガン×１
各マガジン×３

「お～、シュウの方は、ホント重装備だねぇ」とフラガに茶化すように言われたが

「ストライクのＰＳ装甲削るのにどれだけの弾薬が必要なのか判らないんで、　取り敢えず最初は、多く武器を用意しとくのは仕方ないと思いますけどね」と愚痴をこぼしながら返しといた

そしてシュウとキラは、シュミレーターだがお互いの愛機を具現化させ作り物の宇宙へと飛び出した

「さてストライクはどこ・・・ビッービッー・・・ッ！」
とストライクの居場所を探そうとしたがけたたましい音がコックピット内に鳴り響きシュウはすぐさま後方に下がった。

そしてその直後にシュウのジンが居た場所には、命を奪う一筋のビームが通り過ぎていった。

シュウは直ぐに撃って来た方向に向きストライクをロックオンして

2丁ある７６ｍｍ突撃銃をストライクに向け連射した。
だがストライクには、ＰＳ装甲（フェイズシフト）を展開しているので其処まで機体にダメージを負わせる事は出来ないだろう

「シュウさん、ストライクにダメージを与えようと思っても無駄ですよ」
と此方の狙いに気付かずに完全にＭＳの性能に頼り切っていた。

「そんな事は判ってるさ」と返しておき１マガジン８０発×２丁＝計１６０発を撃ち込んだ。キラ君も避けようとしたが、８割は確実に当っているだろう。

そしてすぐさまビームライフル連射の反撃が帰ってきた。
流石のシュウもビームライフルを当る訳には行かないので、上昇・ローリング・宙返り等まるで曲芸士みたいに避けた。

「チッ！流石に当るとマズイんでな。ここは、他の場所に退かせて貰う」

そう、この作り物の宇宙には、三種類の場が用意されているのだ。
・今の何も浮遊していない宇宙

・数箇所に穴が開いて破棄されたと思われる３００ｍ級戦艦

・そして最後にＭＳを隠すには絶好なＭＳや隕石や戦艦の残骸が漂っているデブリベルト

そしてシュウはデブリベルトへと身を隠しに向かった。それを追撃

するように追ってきたストライク

（そうだ、そのまま付いて来い）と思いながら

デブリベルトに有る大きな鉄と石が混じった大きな岩に身を隠し、７６ｍｍ重突撃銃のリロードを開始し始めた。リロードが完了した時には、ストライクが漸くデブリベルトへと来たが此方の位置が判らない様だ。

そして今自分は、９時方向のデブリベルトに居るのだがストライクが３時の方向に向いた瞬間

「そういう時は、身を隠すんだ！！」

そう叫んで此方に背を向けているストライクに２丁の７６ｍｍ重突撃銃を撃ち込み始めた。

「なっ！？」

シュウの予想外の位置にキラは、驚きを隠せず硬直し撃ち放たれた２丁の突撃銃の弾は全弾直撃してしまった。

そしてシュウの狙い通りストライカーパックは、破損しＰＳ装甲（フェイズシフト）はＥＮ（エネルギー）切れで起動しなくなり先程まで色鮮やかだったストライクは元の色とも言える灰色を機体全体に晒していた

キラは、自分の不甲斐無さに舌打ちしていたが

シュウは「此れで対等だ」と言って殆ど弾の入って無い２丁の７６ｍｍ突撃銃を捨てた。

そしてシュウとキラの第２戦が始まった。

「やはりPS（フェイズ・シフト）装甲が起動しなくても、性能は落ちない物だな」
と呟きながらアーマーシュナイダーを持ってコックピットを突き刺そうと突っ込んで来たが、態々受ける気もないので抜き出した重斬刀の面で受け止めていた。

そしてシュウは、ブースターを巧みに操りホバーの真似事をしながら後方に下がり２８ｍｍシールドバルカンを撃ち込み始めた。

だが当ればストライクにとっても命取りに違いないのだから回避され、今度はイーゲルシュテインを撃ち込みながら突っ込んで来た。

「避けるのは簡単だが、次のアーマーシュナイダーの連激に繋げられるのは厄介だな」
と呟きながらシールドを構えてイーゲルシュテインを防いだ。

そして次に繋がるアーマーシュナイダーを後方に下がるのでは無く、直撃する前にショルダータックルを喰らわして怯ませ、再びデブリ群に隠れたが

どうやらさっきのショルダータックルで咄嗟にアーマーシュナイダーを右肩に刺していたようだ。

そしてストライクは、先程の事を考えて身を隠し始めた様だ。

「先程の教訓を生かしたようだな。だが此方の機体には、高性能索敵機とサーモグラフティが装着されてるのを忘れていたのは、失敗だったな」
と呟きながらサーモグラフティと索敵機をフル活用しストライクの位置を特定した。

そして必要最低限のバーニアしか使用せずにストライクの後方に回り
「此れで終わりだ」
と呟きながらＰＳ装甲（フェイズシフト）の起動しなくなったストライクのコックピットに重斬刀を突き刺した。

――――バトル終了――――

「ありがとうございました」と言われ

「いや、こっちも良い経験に成ったよ」と返しておいた。

「しっかし改造ジンでストライクを倒すなんて凄いな」とムウさんに言われ

「機体の持つ機動性の発揮・デブリの有効活用・武装の選択どれか一つでも間違えてたら、きっと自分が負けましたよ」
と言いながらシュウは、自分の実力を謙遜していた。そう自分の実力に酔わない為に謙遜するのであった

「あ、そうだ。アーマーシュナイダー一本くれないか？」
とシュウは大切な事を思い出したかのように聞いてみた

「アーマーシュナイダーを一本ですか？」とキラは不思議そうに聞いてきたので

「うん、さっきの事でアーマーシュナイダーの有用性・使いやすさを考えてみると自分のジンに一本組み込みたいんだ」

「待ってて下さい。聞いてくるので」キラ君がシュミレーター室を小走りで出て聞きに行っていた

そして数分後キラ君が帰ってきて、ナタルさんに話した所多少渋られたらしいが

「ストライクに乗るキラを倒したのだから御褒美みたいな感じにあげて良い。1本じゃなくて一応2本渡しとけ」とナタルさんに言われたらしい

「よっしゃ！二本貰えたのは予想外だが、ホームが来るまで派生武器でも考えるか」
とシュウは嬉しそうに割り当てられた部屋に戻りに行った。

「元気ですね」「元気なこって」
と後ろでムウとキラに何か言われた気がするが気のせいだな。と思ったシュウだった

そして深夜・・・。
今のシュウの表情はシュミレーターでは無かったけわしい表情が有った。

「今のところイレギュラーで有る俺が動いてても未来は変わらない様だな。だが余り派手な行動をしない様に気をつけるか・・・。」
と呟いた
そしてＰＣ（パソコン）を起動し３つの設計図が目の前に表記し始めた。

ＮＯ１：ストライク　ＩＷＳＰパック

（これは、原作無視に成るから見せない様に永久凍結っと・・・）

そう思いながらプランが見られない様に何十にもロックを掛け始めた

ＮＯ２：射出式内臓ワイヤーアーマーシュナイダー

（これは、アーマーシュナイダーの持ち手にワイヤーを括り付けて射出・回収式だから見られても構わない物だな）と思いロックを掛けずにそのままにしておいた。

そして最後に

ＮＯ３：「キマイラ」

（これを使用するのは、まだ早いな。それに此れは元は出来ているがパーツが足りなさすぎる…）

「作成はするが、今データを見られるのは、正直マズイな」

そう呟きながら持てる技術を使ってキマイラのデータにロックを掛けた。

そして気付いたらユニウスセブンの到着まで１週間を切っていた。

シュウはユニウスセブン到着までの残りの時間をキマイラの開発に回していた。

皆を救う為の力を得る為に

ＰＨＡＳＥ０６（後書き）

どうだったでしょうか？今回はクルーゼに負けてしまった様な物ですから。
トレーニングとしてキラ・ヤマトＶＳシュウ・Ｋ・ライトニング戦を出しました
キラ君が負けて不快に成ってしまった人申し訳ないですＯＴＺ

さて主人公専用オリジナル新機体を名前だけ登場させました。
どんな機体と成るのか楽しみですねｗ
自分ですら名前を考えただけで機体は全然考えてません。すいませんまぁそれでもマトモな機体にする予定なんで期待しといてください。

そしてシュウは生き残れるのか！？まぁこれは、後書きのお約束と言う事で。

感想・レビュー何か有りましたらドンドン言って下さい

ＰＨＡＳＥ０７（前書き）

シュウ「今回時間掛かったな作者さんよぉ？」

抹茶「えぇ、そうですね。ホントすいませんでした。」

シュウ「今回は、時間は掛かったがちゃんと投稿したな。だが１週間越えは無いよなぁ？」

抹茶「シュウさん、何でそんなにドスの聞いた声が出てるのかな？」

シュウ「ん～暇だったからかなぁ。あと早くキマイラに乗せやがれ」

抹茶「拒否。時間掛かるから無理。もう少し待て。」

シュウ「めっさ否定してきたな。まぁ良い乗れる事を期待しておこう」

シュウ・抹茶「では、本編お楽しみに」

PHASE07

「さてユニウスセブンに着いたようだな。だが補給とは言え辛い物を感じるな」
とシュウは、苦虫を潰した様な顔をして呟いた。

「あぁ死人の物を漁る物盗りみたいな感じだが、生き残る為だから仕方ないさ」
とフラガさんと話した

「そう・・・ですね、せめてアルテミスで充分の補給が出来ていればな」
そう言いながら気を失っていた事を悔やむシュウだった。

「確かに補給が出来ていれば便利だったが、そう簡単に事が進む訳が無いだろう」
後ろから女性の声が聞こえた、振り返ってみたらナタルさんだった。

「ナタルさんでしたか、何か用ですか？」

「あぁアークエンジェルから補給をする為にミストラルを出すんだが護衛をして欲しい」

「客室を借りているんだし、それ位やりますよ」
そう言ってジン改の準備をする為にハンガーへと向かった

（装備）
７６ｍｍ突撃銃（ＯＰ　ＡＯＣＧスコープ）
後ろ腰　アーマーシュナイダー×２

左腰　重斬刀
右足　二連装ハンドガン

「さて出るか」と呟きながらカタパルトを使用せずにハンガーからブースターを使用して飛び出した

そして全体を見回せる位置に着いた

「どうやら、まだ始まってないようだな」と言いながら人が集まっている場所を確認した。

その瞬間凍りついたユニウスセブンに折り紙の花々が一面に飛んでいった

「これは、生きている人が持つべき永遠の罪だな……」
そう呟きながらシュウも此処で死んでいった人達に対し黙祷を開始した

そして黙祷が終了後作業員がミストラルに乗り込み作業を開始し始めた

そして何分経っただろうか？判らなかった。だが不意にジン改の索敵センサーが何かを捕らえたようだ

「他の奴は、気づいてないようだな。まぁ俺が確認すれば早いか」とデブリに紛れ込みながら索敵センサーに引っかかった目標を確認しに向かった。

どうやら強行偵察型ジンらしい

「気付かなかったら放置、気付いたら落とす」
そう呟きながら腰に掛けていたアーマーシュナイダーを構えた
そしてジンは何かを探していたようだが見つからずに離脱し様としていたが
直後アークエンジェルの居る方向に向いてライフルを構え始めた。
どうやらセンサーに何かが引っ掛った様だ。
「チッ！気付かなければ良かった物を！」
と言いながらシュウも隠れていたデブリから飛び出し強行型ジンに向かって突撃していった。
瞬間強行偵察型ジンがこっちに気付いてライフルを構えてきたが
「遅い！」そう叫びながら
1本目のアーマーシュナイダーを頭部のモノアイを突き刺し2本目のアーマーシュナイダーをコックピットに刺しパイロットを貫いた。
そして強行偵察型ジンは、僅かに腕を動かしたが直ぐに沈黙した
「やれやれ面倒事は、勘弁して欲しいもんだぜ」
とシュウは愚痴りながら、アーマーシュナイダーが刺さった事以外に損傷がない強行偵察型ジンを回収しジャンク艦のハンガーに入れておいた
「モノアイとコックピットを修復すれば、まだ使えるな」と強行型の有用性を考えていた

そしてジャンク艦から出て元の位置まで戻った瞬間にストライクが居ない事に気付いた。

さすがに一機では真面に警備も出来ないので通りがかったミストラルに話を聞いてみた

聞いてみたところストライクは救命ポッドを拾ってアークエンジェルに戻ったらしいそうだ。

「確か救命ポッドの中に入ってる人はラクス・クラインだったはずだな」

とシュウは原作を思い出し呟いた。

「俺は興味が無いから見に行く気が起きないな」と言い再び周りの警戒をしていった

「しかし彼女も戦争の為の道具扱いか・・・」と人を道具の様に扱う事に苛付いたシュウだった

その後3時間位補給を続けていたが、安全に終わりシュウは久々に自分の家ジャンク艦に戻りゆっくり寛いでいた。

「ただいまー、まぁ何も帰ってこないんだけど寂しい物だな」と久々に一人に減った事を思い出す。

「さて、この後事務次官と会えると思うが、Xシリーズ4機と戦うのか、危険だな。わざわざ蛇の道を進むほど阿呆じゃないんでな此処で一旦アークエンジェルとは離れるか」と呟きながらハンガーへ向かった

そしてハンガーに着くと同時に

「さて強行型を修理してジンの固定武装を追加するか」

と言って使い慣れた工具を取出し強行偵察型ジンの修理を開始していた

～新情報を追加～

強行型ジン　修理完了　使用可

ジンアサルト改　固定武装：左腕　内臓型射出式アーマーシュナイダー

「やはりキマイラは、元を変えるべきだなジンだと機動性と空中戦が期待できないな。元はディンにするべきか？まだまだ改良の余地ありだな。」

と誰も居ないジャンク艦でシュウの声だけが響いた

「さて俺は、Ｘシリーズとご対面はイヤなんでな、それに今は力を貸せるほど強い訳でもないし此処は、先に地球に降ろさせてもらうか」と凶悪な笑みを浮かべた

「おっと先に話を付けておかないとな」そういってアークエンジェルへと回線を開いた

「ラミアス艦長　私は、用事が有りますので此処で失礼します」と言ってみた

「えっ！？援護してくれないのですか！？」と驚愕していた

「例えジャンク屋でも長く連合と居たら怪しまれます、それで攻撃

を受けるのは此方も御免なので」
とハッキリ言い切った

「そう・・・ですか、今まで有難う御座いました。無事な航海を祈っています」
と言いながら敬礼してきた。

「お互いに無事で居ましょうね」と言い、こちらも敬礼しながら回線を切った。

そしてシュウはジャンク艦の大気圏突入パック装着の準備を始めた。

そう今回地球を目指す意味は、キマイラのパーツを入手する為に向かうのだ。

そして向かう場所は、アフリカ北部　通称砂漠の虎が居る所で有名な場所を目指した。

ＰＨＡＳＥ０７（後書き）

シュウ「今回俺は、地球に航路を取ったか正しい選択だな」

抹茶「ただ単に死にたくないだけでしょうが・・・」

シュウ「あっ？何か言ったか今？」

抹茶「ごめんなさい、お願いだから、その拳銃を仕舞ってください」

シュウ「判れば良い、さて今回キマイラの元と成るＭＳは何に成るんだ？」

抹茶「陸用のＭＳを宇宙も行ける様に考えてるんですけど。未だに閃きませんね」

シュウ「そうか、良い機体を待ってるぞ」

抹茶「りょーかい。さてシュウは生き残れるのか？」

シュウ「生き残りたいがな・・・」

ご意見・ご感想ありましたら、ドンドン言って下さい

ＰＨＡＳＥ０８（前書き）

抹茶「はい、今から地球・砂漠の虎が始まります」

シュウ「砂漠か、クソ暑いのしか思いつかんな。」

抹茶「まぁまぁ落ち着いてくださいよ。この後本編で楽しい事が起きるんですから」

シュウ「お前の言う楽しい事が一抹の不安を覚えさせてくれるよ」

抹茶「酷いですね。これでも頑張って書いてるんですよ?」

シュウ「はいはい、頑張ってるな」

抹茶「投げやりですね、まぁ良いでしょう」

シュウ・抹茶「「では、本編お楽しみください」」

PHASE08

「何でこんな事に成っちゃったんだろう・・・」と不意にそう呟いてしまった。

そうシュウは今、地球に下りて十数分で戦闘に成ってしまった。

相手はバクゥ３機　１小隊の基本だな如何でも良い事を思いながら、取り敢えずさっきの事を振り返ってみていた

～回想～

「ふぅようやく、地球に下りれたか、でも此処は何処だ?」と呟いた

「とりあえず軍を見つけたら街までの道を教えてもらうか」と呟いた瞬間、近くにＭＳの反応が３つ有った。

「ちょうど良い所に居たな、聞いてみるか」と言い乗っていたジン改で追い掛けてみた。

「オーイ、そこのバクゥ待ってくれー」と言いながら追い掛けていたが・・・気付かれなかった。

「仕方ない…信号弾無いから此れで気付いて貰うか」
と言いながらバクゥの小隊に向けて試作型閃光弾を撃ちこんだ

「あっ・・・やっと止まった」
と言い止まった事に感謝しながらもバクゥに近づいたら急に撃って来た

～回想終了～

「うーん、やっぱり閃光弾撃ったの失敗だったか」
と言いながら迫ってくる8発のミサイルをバルカンシールドで全部撃ち落とした

だがミサイルは目くらましだったようで1機のバクゥが突進してきた、とっさにシールドで防いだが吹き飛ばされる

「グッ！やってくれるな。だがこっちもこっちの戦いをさせてもらう」
と言いスモークグレネードを2個バクゥに投げつけた

だがグレネードと勘違いしたのか右に避けられた。
だが「それを待っていた！！」
と言い収納型アーマーシュナイダーを一機のバクゥの左足に括り付け引っ張った。

「お前等が素早く動くならそれを止めてやるよ」
と良いながら重斬刀で右前足と頭部を斬り戦闘不能に追い込んだ。

後の二機が慌ててレールキャノンを撃って来て再び格闘に移ろうとしていたが

「一度同じ事されたら二度目は喰らうかよ！！」
と叫びながらワイヤーアーマーシュナイダーに括り付けていたバクゥを2機居るうちの一機にぶつけた

だがもう一機は、構わず突っ込んでビームサーベルを展開していた。

「チッ、当るとマズイな」と少々焦りながらも７６ｍｍ突撃銃を構えて前足を狙い撃った。

当たり所が良かったのかキャタピラが煙を上げバクゥが前のめりに体勢を崩した、そしてシュウは、すかさず重斬刀に切り替えモノアイを潰した。

「ふぅ厄介な目に有ったな。だが砂漠の戦闘は初めてだから慣らすには丁度良かったな」
と一安心して呟いたが

「ビー！ビー！ビー！」
と警告音が鳴り背中を狙っていたビームキャノンの連射をとっさに左にローリングして避けた。

「やれやれ行き成りなご挨拶だな、砂漠の虎さんよぉ」
と言いながら所々カスタムされたオレンジ色のバクゥに向かってそう言った。

「一応部下がやられてるんでね、その報復とでも言っておこうか、それに君の実力も気に成るしねぇ」
と言いながらキャタピラを起動させ迫って来た。

「本音は其処か？まぁ良い、一応お前さんの部下は生きているぞ？無駄に殺す気には、成れないが。アンタの場合手抜が出来ないんで死んでも怨むなよ！」
と喋りながらもバルカンシールドで牽制し重斬刀で突撃した。

だが相手は、砂漠の虎その程度ではかすりもしないだろう。

バルカンは、右に避けられ重斬刀は後方に下がられ当らなかった。

「チッ！やっぱりこの程度の連激じゃ当らないか」

「甘いねぇ、もっと上手く狙わないと」

と苛立たせる様に挑発するが、そのような言葉にまどわされるほど腐ってはいない。

そしてラゴゥのビームキャノンが放たれた。

咄嗟にシールドで防いだが、盾は少し溶けてバルカンが使い物に成らなかった。

「本気で殺す気だなあのオッサン」

と言いながら再び重斬刀を持ち斬りかかった、だが避けられると思ったのだろう。

次の瞬間必要性が無くなった盾をラゴゥに投げつけた、だが此れも読めていたのか左に避けられたが、咄嗟に重斬刀を仕舞い右足に積んだ二連装ハンドガンと７６ｍｍ重突撃銃をラゴゥに向かって撃ち始めた。

だが最後には、空中に避けられたが

「これを狙っていたんだよ！」

そう叫びながらアーマーシュナイダーを射出し、そしてラゴゥのの左足にワイヤーを括り付けた。

だがさすがに砂漠の虎もマズイと思いワイヤーを斬った　だがその

一瞬が攻撃に充分な時間だった。

「うぉぉぉぉ！」叫びながら重斬刀を持ちラゴゥに斬りかかった。

だが最後の最後でビームキャノンが火を噴き足を破壊しにきたが、シュウは今更その事を気にはしなかった。そう無傷で勝てる戦いなど何処にも無いのだから。

そして重斬刀は当った・・・だが当ったのは後方のキャタピラを斬り落としただけで終った

そして足の無いジンを駆るシュウは、そのまま砂漠へと沈んだ。

そして直ぐにコックピットを開き「投降する」と言いながら両手を上げた。

「ほぅ、もう終りかね？それに私が殺さないとでも？」
と聞いてきたので

「砂漠の虎は、無闇に人を殺さないと聞いているが？」
と言い返した。

「ふふふ良いだろう、捕まえさせてもらうぞ。抵抗しないでくれよ？」
と言われ

「判ってるさ」
と後から来たザフト兵の指示に従いながら大人しく捕まった。

PHASE08（後書き）

抹茶「いやー、負けましたねぇ」

シュウ「あぁ、そうだな。幾ら俺でも能力は赤服よりちょっと強いぐらいだから
砂漠の虎に勝てるはずが無い」

抹茶「そうですね。それに簡単に勝てたら面白くないですしね」

シュウ「あぁだが負けた事は悔しいが・・・俺は、この後どうなるんだ？」

抹茶「さぁ？どうなるんでしょうね？」

シュウ「オイッ！作者お前だろうが」

抹茶「考えるんですけど結構迷うんですよね」

シュウ「そうか、まぁ良い展開に成ってくれるのを期待するよ。」

抹茶「まぁ期待してください。頑張りますので」

抹茶「さてシュウは生き残れるのか？こうご期待！！」

シュウ「だから生き残りたいって言ってんだろうが！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい

ＰＨＡＳＥ０９（前書き）

抹茶「はい、今回楽しい楽しいフェイズ9が始まりますよー」

シュウ「どうしたんだ作者、何時もと違って何か投げやりな感じが」

抹茶「んー昨日から頑張って書いてたんでちょっと変な気分なんですよねーw」

シュウ「寝てないんだな。まぁ良い書いてるだけでも褒めてやろう」

抹茶「わーい、もっと褒めて褒めて」

シュウ「うわっ！こいつウザッ！」

抹茶「結構酷いな、まぁ良いや。今回キマイラの全ぼうが遂に明かされます」

シュウ「おぉ、予告から1・2話位しか経ってない気がするがスルーだぜ」

抹茶「だってぇーキマイラに必要なパーツが全部あれなんですよー」

シュウ「言わなくて良いからな？本編読むからむしろ言うな」

抹茶「そう？じゃあ前書き長かったけど」

抹茶・シュウ「本編をお楽しみください」

PHASE09

「出ろ」そうザフト兵に促された。

そう、俺は砂漠の虎と戦って敗北し、MSごとレセップスでバナディーヤまで移送された。

そして一つの屋敷の前まで歩いて「此処は砂漠の虎の要塞みたいなものか？」と呟いた

だが何時までも立ち止まるのは駄目なのか

「止まるな進め」と後ろの一人のザフト兵に銃で小突かれ再び歩を進めた。

そして、一つの部屋の前まで進み

「隊長、入ります」

とザフト兵が言い、続けてシュウも部屋へと入った。

「ダコスタ君ご苦労さん、此処からは彼と二人きりの方が良い」

「なっ！？しかし隊長もしコイツが暴れたら」と少し話していたが

「ダコスタって言ったっけアンタ？大体手錠付けられて丸腰の俺が何か出来るとでも？」

と言っておいた。

「ほら彼もそう言ってるんだし」と砂漠の虎は、言った

「クッ！判りました隊長・・・命令に従います」
と言って俺を睨みつけながら部屋を出て行った。

「良い奴だな、だけどあんまりいじめんなよ？砂漠の虎」

「ダコスタくんは、イジメやすいんだよ。あと名前で呼んでくれアンドリュー・バルドフェルドだ」

「そうかい、じゃ俺も名前で呼んでくれ本名は、シュウ・K・ライトニングだ。シュウって呼んでくれ」
名前を教えて貰ったので礼儀として、こちらも名前を教えておいた

「まぁ、お互いの自己紹介が終った所で、話をしようじゃないか」
と言われ、まるで座れとでも促してる様なので黙ってソファに座った。

「さて、急だがシュウ君、君に一つ聞きたい同じＭＳパイロットとして……どうしたらこの戦争は、終わると思う？」と言い、鋭い瞳を突きつけてきた。

「戦争は、ゲームじゃない制限時間すらない、そうじゃないか？ではどうやって勝敗を決める？何処で終わりにすれば良いのか？……敵を全て滅ぼしたらかね？」
とまるで答えを求めるかのように聞いてくる

「（今俺は、試されてるんだろうな）俺は、判らない……俺はそんなに賢くないし、強い訳でもない。でも確固たる信念を持つ人がその答えを見つけられると思う」
と試されてる事に対し自分の答えを馬鹿正直に言った。

「ほぅ？なら君はパトリック・ザラやシーゲル・クラインはたまた連合のお偉いさんは、その意思を持っていると？」と聞かれたが

「違う、あれはただ片方を滅ぼしたり話し合いで解決するだけのただ単に自己満足だ。それに、他にそれしか道が無いと考えてるだけだ。悩んで悩み続けた人が持つ信念こそが戦争を止められる」

「君は面白いな、だがその人物が現れると思っているのかね？」

「あぁ、居るさ。まだ原石だが目覚めたら確固たる信念を持つ人間がな」

「ほぅ、多少気に成るが後の楽しみだな、それに君は面白いな。一緒に居てて飽きないよ」
と笑いながら言われ

「そりゃどうも」と軽く受け流した

そして、おもむろにバルドフェルドさんが一本の鍵を取り出し、そして俺の手錠の穴に差し込んで鍵を解除した。

「なっ、何で鍵を！？」とバルドフェルドに問いただした。

「そうだねぇ、君が面白いし。部下として欲しいからかな？」と軽く笑われた。

「チッ！あのダコスタって奴の苦労が一瞬だが理解できそうだな」
と舌打ちしながら答えた

「それで答えはどうだい？」

「そうだな、幾つか条件が有る。まず一つ目は、部隊はいらないから、自由に動ける権限がほしい。
二つ目は、コイツは、俺独自に設計した奴だが必要なパーツがザフト軍の物なんだ。それを用意して他の人には、黙ってくれれば良い」

「ほぅ、一つ目は飲むとして、二つ目の設計したＭＳを見せてもらおうか」

「良いだろう、コイツだ」
とバルドフェルドに向かって隠し持っていた数枚に纏められた資料を投げつけた。

「此れは凄い発想だね、でもパーツがどれだけ必要なんだい？」

「そうだな、まずディンを丸々1機、ラゴゥのビームキャノン、バクゥのキャタピラ、シールドダガーは独自に開発するからシグーの盾、後は、ディンの頭部を俺の乗ってたジン改の頭部に変える。あと腕は、そうだな此れも俺のジン本体は使い物に成らないからそれをくっ付ける。それに宇宙でも使用可能にする為に色々とコーティングをかける。それがキマイラの形だ」

「なるほど、確かに色々な生き物がくっ付いてる神獣キマイラと全く同じだな。良いだろう直ぐ手配するから開発するための準備をしてくれ」

「それだったら俺の乗ってたジャンク艦を使いたい、あれを使うと

効率良く作れる」

「あい、判った。それじゃあこれから宜しくだなシュウ・K・ライトニング君　一応キミは赤服扱いだからね」

「オイオイ行き成り赤服扱いで良いのかよ？」

「良いんじゃないの？実質取り仕切ってるの俺だし」と言ったので

「そうだったな」と苦笑しながら答えた。

「んじゃま、俺は、ジャンク艦居るから完成するまでそっちの機体を代用させて貰うぞ」

「いや、ＭＳが完成するまで出なくて良い。君の機体が早く出来る事を期待するよ」

そう言って俺は一時的にバナディーヤの砂漠の虎のお世話に成った。

そうキマイラが完成し、バルドフェルドが敗北するまで

PHASE09（後書き）

シュウ「遂にキマイラ作成に着手したか」

抹茶「そうですね、それに砂漠の虎に降る方がパーツが早く手に入れやすいんで」

シュウ「成るほど。多少疑問点は残りそうな読者が居そうだがどうするんだ？」

抹茶「うーん、活動報告で機体の武装・パーツ・キマイラの形を書き出しておこうかと思うんで」

シュウ「絵で書いた方が早いんじゃ？」

抹茶「ピキッ！俺は絵は大の苦手なんだーーー」

シュウ「そ・・・そうだったのかすまなかった」

抹茶「判ってくれれば良いよ。さて最後のあれをやるか」

シュウ「結局俺も言わされるんだろう？」

抹茶「もちろん」

抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！！」

ご意見・ご感想あればどんどん言って下さい

疑問点なども言ってくれれば答えますので

ＰＨＡＳＥ１０（前書き）

抹茶「はいＰＨＡＳＥ１０始まりますよー」

シュウ「今回は時間掛かったな？」

抹茶「そうですね。正直キマイラを強くしすぎたかな？って自分でも軽くやりすぎちゃった感が出ています」

シュウ「そうか、まぁ良い機体程生き残れる者さ」

抹茶「そうですね、作者としてもシュウさんに死なれると面倒なんで」

シュウ「むしろ死んだら話進まないだろ？」

抹茶「どうでしょうね？まぁ常に新しい話を考えてるんで死んだ時の対策も当然練りますよ」

シュウ「そうか、って言うか俺は死ぬ展開じゃないかこれ？」

抹茶「気のせいでしょ、さて長くなりましたが」

シュウ・抹茶「では本編をお楽しみください！！」

PHASE10

～ジャンク艦　ハンガー～

「ふぅ、ようやく完成したな」そう呟き自分専用機であるキマイラを見上げた

「完成させたのは、良いがスペック確認しないとな」そう言って機体情報端末を開いた

（キマイラ　端末）

「機体情報・スペック表示っと・・・」

スペック　装甲Ｂ　運動性Ａ＋　射撃Ａ　格闘　Ｃ

「まぁこんなもんだろ、後はブースターのリミッター解除時の使用制限時間と生存率はと」

最高使用制限時間：５分　使用時生存率５％

「生きれる確立がたったの５％か……衝撃吸収剤でも居れて生存率を上げるとして、基本はキマイラの切り札になるな」

そして端末を閉じて一休憩し様と思ったらハンガーの扉が開かれた

「やぁ、例の物は完成したかね？」とバルドフェルドが訪ねて来た

「あぁ完成はしたさ、スペックは当初の予想通りＸシリーズの性能を超えてやがる」

と自分の作った機体を自画自賛した。

「ほぅ、それは凄いな。だけど君は今キマイラを作っても足りなさそうな顔をしてるね」

とさらりと言われた

「まぁ否定はしないさ。だけど用件は、それだけじゃないんだろ？」
そうシュウは、キマイラだけじゃ満足しなかった。だが、もう一つの方も作成もしていた。

「おや、わかるのかね？まぁ良いだろう大天使が虎の領域に入ったんだよ」と笑っていた

「そうか、でだ、いつ攻めに行くんだ？」
と気に成るように言った、だがシュウは可能な限り武器を作成する為の時間が欲しいのだ。

「明日から数えて1週間後だ。君はどうするかね？」と訊ねられたので

「そうだな、初披露もさせたいが今は出さないさ。ストライクの戦い方でも見学するかね」と言っといた

「そうか、じゃあレセップスに君も乗っていくんだな」

「あぁ勿論だ。こんな所でレセップスとジャンク艦が一緒に居たんじゃ疑われちまう」

「さて俺はキマイラを使ってシュミレーターで練習するわ」

「判った。シュウくん悪いがバクゥのパイロットを鍛えられないか？」と鋭い目付きで言われた

「それは命令か？」と聞き返したが

「命令でもあるし命令でもないって感じかな」と苦笑して来た。

「んー、まぁ良いさ。俺は最強とか自惚れてる奴をボッコボコにすれば良いんだろ？」
と一応聞いてみた。

「あぁ、そうだな。５人居るから実力の差ってのを教えてあげろよ？」

「了解」
そう言いながらシュウはバルドフェルドと共にシュミレーターまで向かった

～シュミレーター室～
「やっぱ俺らって強いよなー」「そうそう、宇宙に居るXシリーズ乗ってる奴より強いだろ」「言えてるわー」「毎回失敗する位ならこっちに回せっての俺等が上手く使ってやるからさ」

「「「「ハッハッハッ」」」」「……」
そう言った間抜けなモブ４人と女性が一人シュミレーター室に居た

「全員整列！」バルドフェルドがそう言った瞬間５人が並んで敬礼した。

「さて急で呼び出して悪いが君達には、彼と戦ってもらう」

「シュウ・K・ライトニング　一応扱い的には赤服だ」
と言いながらも５人の能力で一番強そうな奴を探していた。

「さてとやり合う前に何か質問は有るかね？」と5人に訊ねてた

「隊長、もしかして彼はナチュラルですか？」とモブAがバルドフェルドに聞いている

「あぁ、そうだ」と代わりにシュウは答えておいた

「「「「なっ！？」」」」モブの４人が驚いていた

それと同時に（此れで5人の中で実力が誰が強いか判ったな……）と思ってしまった

「何故劣等種が此処に居るんですか！！」「赤服なんて嘘だろうが！この雑魚が！」「はっ！どうせ上手く隊長に取り繕ったんだろ？」と他のモブからも言葉の暴力が出るが・・・

「彼が強いから軍に入れた。文句があるならシュミレーターで決着を付けたまえ」

とバルドフェルドが言い出した

「ッ！了解」とリーダーらしきモブ兵が答えシュミレーターに入ったてみた

「バルドフェルドさん、男の４人は弱いが女の人は厄介だろ」と聞いてみた

「判ったのかね？」と聞き返してくる「あぁ、こっちを見続けて冷静に能力判断し様としてた」と返しといた

「彼女は強いよ、ただ敗北を知らなくね。是非実力の差ってのを叩き込んで欲しい」と頼まれたので

「判った、あいつ等に絶望を見せてあげるよ」
と言いシュミレーターに潜り込みキマイラの情報を打ち込んだ。
更に追加で今回作成した武器を1個を腰に付けた。そして
情報を送り込んだ後キマイラとともにシュウは砂漠の世界に飛び込んだ。

「はっ!!ようやく来たな劣等種、コーディネーター様の力見せてやるよ!それに何だその変なMSはカッコ悪いんだよ!!」と言ったがモブAは同時に完全にシュウを怒らせる一言を言っていた

「ふっ・・・ふふふふふ言いたい事はそれだけか?お前ら全員一片の慈悲も無く潰す!!」
と言いモブのバクゥの一機の目の前までキャタピラとブースターを利用し一瞬で距離を詰めビームソードシールドで右足を斬り落とした後、左手で腰の新兵器を抜き体勢を崩したバクゥに撃ち込み即座に爆発が起きた。

「グレネードランチャー・爆炎弾　高威力だな」と呟いた
だが一瞬と呼べる時間の間に敵全員が正気を取り戻し

「各機散解!」とモブの一人が言った、そして4機のバクゥが俺を囲んだ。

「ふむマズイな。だが「ウォォォォ」ほらこう言う功を焦るアホがいる」
と一機のバクゥがビームサーベルを展開して迫ってくる

「うーん死んじゃうかもなー、まぁ少し本気で潰しに掛かるか」
そう言って4枚の翼を広げて空へと飛び立った。そして格闘後の攻撃で外したので体勢を崩していたバクゥにビームキャノンを打ち込み撃破した。

だがビームキャノンを撃ち終わった瞬間残りの3機のバクゥのミサイルとレールキャノンの雨がキマイラ目掛け飛んできた

「チッ!……15秒間リミッター解除」とボソリと呟き、そしてシュウの機体は爆煙に包まれた。

「はっ!所詮劣等種はおｒ「俺らには勝てないか?余り俺を舐めるなよ?」
そう言ってグレネードランチャーをバクゥに撃ち込んだ

「何をやった!!」そう言った後にバコォーーン・・・次は貫通し爆破が起きた。

「徹甲留弾これも使えるな」

「あとは雑魚が1人とお嬢ちゃんか、俺を本気にさせたんだから、嬉しく思えよ?」

「なっ!何で落ちないんだ!」と叫ぶが

「さぁ何でだろうな?まぁ敵に教えるほど俺は優しくないんでな・・・30秒間リミッター解除」
と最後だけ聞こえないように呟いた

そしてシュウのキマイラが消えた。いや消えたという表現は間違いだろう……。目視出来なくなったと言った方が正しいだろう。

そして気付いたときには、モブの後ろに回りこみレールキャノンに３発目を撃ち込んだ。

そしてモブのバクゥは驚愕し後ろに下がったが

「あっ今レールキャノン撃つなよ?」と言った瞬間レールキャノンが暴発した

「あーあ、人の話を最後まで聞かないから」と言いながらも

「スーパーアシッド弾は即効性だから使いやすいな」
と言いながらも試作弾の尽きたグレネードランチャー無造作に砂漠へと投げ捨てた

「さて嬢ちゃん、残りはアンタだけだがどうする?」と聞いてみた

「あたしをさっきの人と同じ様に考えたら痛い目にあうわよ!」
と言いながらミサイルを撃ち放ってきた。

だが素直に当りたくないので足のキャタピラを展開し後方に下がり左腰のホルダーに行ってる７６ｍｍ重突撃銃を抜き出し収束して迫ってきているミサイルを撃ち落した。

そしてミサイルに集中している隙に右からバクゥが飛び掛ってきたが、すぐさま反応しバクゥの側面に入り込み７６ｍｍ重突撃銃を撃ちこんだが、バクゥがブースターを無理やり前に吹かし銃弾を避けたが肝心のバクゥは頭から砂に突っ込んでいた

「普通に痛そうだな……」と思わず呟いてしまった。

そして「幾ら模擬戦とは言え今撃ったら後味最悪だ」と言い体勢が戻るのを待った。

「ふんっ！お情け？舐めないで！」と言われ

「いや、このまま終ったら楽しくないんでね。それに個人的に嬢ちゃん気に入ったし」と言っといた

「なっ・・な・・・何言ってるの！？ふざけないで！」と言って真っ直ぐ突っ込んで来た

「熱くなるのが君の悪い癖かな？」

そう言ってアーマーシュナイダーを射出した、だが空中に跳びミサイルランチャーを撃って来たがシールドで防御し着地点にビームキャノンを撃ち込んだ。

「此れ位避けれるだろうな」と呟いたがビームキャノンは直撃して爆発が起きた。

「マジかよ」と呟いて

――――――バトル終了――――――の文字が出てきた。

そしてシュミレーターから出たらモブ達が

「これで良い気になるなよ！」と言いながらシュミレーター室を出て行った

「おーおー見事な三下セリフだな」とシュウは言った。
そしてバルドフェルドが「どうだったかな?」と聞いてくるので
「正直期待はずれですね。あの4人は早めに死んでも可笑しくないけど、嬢ち「私にはシラユキ・カグヤって名前があるんです!!」……まぁシラユキには才能が有るんで鍛えれば強いと思いますよ?」と言っといた
「ふむ、そうか。たしかシラユキは何処にも着いて無いんだったな?無いんだったらシュウ君の部下になっとけ」と楽しそうに言った
「了解しました」
と言っているので俺はコイツの保護者みたいな事をしないといけないのか……。
「はぁ…」「なっ!なんでため息つくのよ!」「イヤ、なんでも無いさ」と喋っていたら
「ではシラユキ君　訓練じゃシュウ君に頼れよ?嫌がっても私が強制的に許可する!」
とハッハッハと笑っていた。
「ちょっ!バルドフェルドさん何言ってるんですか!」
と反発しようとしたが
ガシッ!!
「ヒッ!シ・・・シラユキさん?」

「シュウさん楽しい楽しい訓練をしましょうね？」
と笑顔で言ってくる、正直さっきの負けを結構気にしてるらしい

「たっ、助けてーーーー！イーーーヤーーー」

そして俺は襲撃までシラユキさんと訓練した……。

マジで死ぬかと思った、だって朝から夜までやるんだもん

そうそう、バルドフェルドさん覚えとけよ？

PHASE10（後書き）

シュウ「キマイラ強いな・・・」

抹茶「ね？そうでしょ？まぁ少し早いフリーダムみたいなものと思えば良いだろ？」

シュウ「そういえばシュミレーターでリミッター解除したが大丈夫なのか？」

抹茶「ええ、それは、大丈夫ですよ。あの生存率は、5分間ずっと動かし続けた時の生存率だから1分以内だったら特に大きな問題はありませんよ？」

シュウ「そうか、まぁもう一つ個人的な質問だがシラユキ・カグヤはこの作品のヒロインなのか？」

抹茶「さぁ？まぁそれは後々考えます。もしかしたらヒロインになるかも？って感じです」

シュウ「そうか、まぁ期待してるわ」

抹茶「そうですか、待ってて下さい。では何時ものあれをやりましょう」

シュウ「あぁ、判った」

シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！！」

ＰＨＡＳＥ１１（前書き）

抹茶「はいＰＨＡＳＥ１１何とか完成させました」

シュウ「毎回思うんだが、お前投降早いんだな？一体どんなチート使ってるんだ？」

抹茶「チートとは酷いですね？まぁ良いでしょう、結構疑問に成った人も居るんじゃないかと思うんで、お答えします。」

シュウ「で、どうなんだ？」

抹茶「はい、俺大学生なんですけど講義半分聞きながら書いてます」

シュウ「そうか、ってお前真面目に授業受けろよ！！」

抹茶「結構、俺真面目に受けてますよ？ただ説明が下手糞な授業が偶に有るんですよ」

シュウ「そうだったか、でもそれ位自分でも理解しような？」

抹茶「チッ！判りましたよ！」

シュウ「え？オイッ！今舌打ちしたよな！？」

抹茶「気のせいでしょう？では長くなりましたが」

シュウ・抹茶「本編を楽しんでください」

PHASE11

「大天使ねぇ、久々に見たけど今更興味も湧かないな」とシュウは呟いた

「ほぅ？君は、一時的に世話に成っていたのかい？」そうバルドフェルドに聞かれたので

「あぁ中立でジャンク屋遣っていた時に一時的だがな、まぁ情報はお情け程度だが世話に成ってたから教えられないな」と話を切ったってこなかった

「そうか、まぁ良いだろう」と情報を教えなかったのに文句一つ言

「深く聞かないんだな？」

「話すつもりの無い人に無理やり話させるのは、好きではないんでな」

「そうか……それじゃあ、砂漠の虎のやり方見せてもらうよ？」
そう言ってシュウは会話を辞めて大天使に目を向けた。

そしてストライクが飛び出してきた。

「ランチャーストライクか、だがちょっと間違いかな」
と言ってバクゥとストライクの戦いを眺めた。

やはり砂で足を取られるうえバクゥの高機動に翻弄されアークエンジェルにまでダメージが蓄積した。

「やれやれ、感情をぶつけるだけで戦争に勝てる程ここは甘くないぞ」と呟いた。

だが急にストライクが跳びバクゥの連激を回避した。そしてストライクがバクゥに蹴りを食らわせ、もう1機は、突っ込んで来た所をアグニの銃口を押し付け撃ち出した。

そして炎が砂の海を照らし出した。

「どうするんだい？バクゥ1機やられちまったが？」バルドフェルドに聞いてみる

「なぁに対策は練っているさ」
と言った瞬間後ろから何か聞こえてきた、そしてアークエンジェルの近くまで行ったがイーゲルシュテインに撃ち落された。

「さぁ大天使殿はどうするかな？」とバルドフェルドは言っていたらスカイグラスパーが飛び出しレセップスの方向に行った。

「レーザー照射してそれを照準にして撃つつもりだろうが…遅すぎだな」と言い切った

「「え？何故そう言い切れるんですか？」」とダコスタとシラユキが聞いてくる

「お前ら居たんだな…」とボソリと言ったら「「居ましたよ！」」とはもってくる

「そうか、さっきの質問だな。まず一つ目は敵の占領地に居ながら何も気にせずにのんびりしてた事、武装が積めなくても索敵するべきだったんだよ。二つ目は、最初の第一波は迎撃システムと回避運動で運良く当らなかっただけだ、しかもあの戦闘機は武装を積んでいても余り期待出来そうに無いだろう」
とハッキリ言っといた

「それに第二波は防げないだろ、多分直撃だな……ドォォォンほらな？」
と予想してた事を見事に的中させ、二人を驚かせた。

「さて、これでストライクは如何出るかねぇ？」とバルドフェルドが言っていた時に

（そろそろ種が割れる頃かな？）と一人物思いに耽っていた。

そう思った瞬間ストライクの動きが変わった。まず1機目のバクゥに対し肩のバルカンで牽制し回し蹴りを食らわせていた。

その間にも第三波のミサイルが大天使に迫る、ストライクが破壊しようとするが、それを邪魔するようにバクゥが割り込む、しかしストライクは、そんな事すらお構い無しと言うようにバクゥごとアグニでミサイルを叩き落していた。

そしてアグニでどんどんミサイルを撃ち落しているが、それを見たシュウは

「やれやれＥＮは無限に在る訳でも無いのに……このままじゃ確実にＰＳ（フェイズ・シフト）装甲が落ちるな」と言っといた。

再びバクゥがストライクに迫るので銃口を向けるが撃たなかった。アジャイルも居るので後方に下がるが、コーディネーター同士ではストライクが乗っているパイロットが幾ら強くても弾に当たりＥＮが減少していくだろう。

「そう言えば隊長何故ストライクは先程ビーム砲を撃たなかったんですかね？」とシラユキが聞いてくる

「お前は、もう少し勉強したり考える事を努力しろ！まぁ良いストライクは、ビーム砲を撃ちすぎるとＥＮ消費も半端無い、しかもＰＳ装甲（フェイズシフト）にもＥＮは取られるんだ。当然ＥＮがなくなった瞬間ＰＳ装甲（フェイズシフト）は機能しなくなり、普通にダメージを受ける。Ｘシリーズは ＥＮ消費率が半端無く酷いからな」と説明しておいた。

「ほぅ？じゃああれはＥＮ切れしたら弱体化するのかね？」とバルドフェルドが聞いてきたので

「あぁ、一概には言えないがそうかもな。しかも実弾武器しか反応しないから俺とバルドフェルドさんの持つビームキャノンとかのＢＥＡＭ兵器は、ＰＳ装甲（フェイズシフト）は、反応しない。実弾武器しか持たない奴は、実弾の雨を食らわせて無理やりＰＳ装甲（フェイズシフト）を落とす以外方法が無いんだ」

と教えといた。

「おや、言わないんじゃなかったのかね？」と言われ

「気が変わったんだよ」と返した

「素直じゃないですね」とシラユキが茶化すように言った瞬間

「シラユキ　後でシュミレーターでたっぷりしごいてやる」と言っといた

その瞬間「すいませんでした」と震えながら言ったので

バルドフェルドさんが「な…何をしたのかね？」と聞かれたので

「速さに成らす為にキマイラのリミッター解除1分版をやらせてる」と凶悪な笑みを浮かべて居たのでバルドフェルドも少し引いていた。

再び戦場に目を向けるとアジャイルがミサイルを放ち

（ストライクも落ちたか？）

とシュウが思った瞬間ミサイルとアジャイルが撃ち落された。

そして幾つかのバギーがストライクの方向に走り出しワイヤーを張り付けた。

（あれは、ワイヤー通信かな？）と思った。

だが肝心のバギーの方が判らないので、バルドフェルドに聞いた。

「なぁ何なんだあれ？」

「ん？レジスタンスだよ。懲りない奴らだねぇ」

「命を無駄にするアホ共か…」

と呟いた瞬間ストライクが有る場所を目指して跳び出した

そしてバクゥ3機も追撃する為に付いて行った

「直ぐに考えれば、敵の意図ぐらい判る事だろうが…」
とシュウは相手の考えも判らないバクゥのパイロットに多少の苛立ちを覚えていた

そしてあるポイントに着いたのかストライクがバクゥの方に向いた。
そしてそれと同時にストライクのＰＳ装甲が無くなり元の灰色へと戻っていた

そして3機のバクゥが格闘で止めを刺そうと思った瞬間ストライクが後ろに高く跳び退き3機のバクゥがストライクの居たポイントに足を踏み入れ、地面が陥没した。

3機はなすすべなく陥没に巻き込まれ、その後凄まじい爆発がバクゥを呑み込みバラバラになった。

「廃校の天然ガスを利用した罠だな…。やれやれ予想通りモブは全員死亡更に五機のバクゥの損失……撤退だな?」と険しい顔をした砂漠の虎に聞いた。

「そうだな、撤収する」
そしてダコスタとシラユキを見ると、悪い夢でも見たような顔をしていた。だが悔しいがこれは、現実なのだ。

「しかし、あのパイロットはナチュラルじゃないんだろう?」と俺に聞いてきた。

「あぁ、会ったら気に入るかもしれないな」と言っといた

「それは楽しみだ。まぁいづれにせよ今回の敵は、手応えの有る相

手のようだな」
そして俺と虎の視線の先にはストライクと大天使の姿があった。

～バナディーヤ～
「さてバナディーヤに戻ってきたが此れからどうするんだ？」
とバルドフェルドに聞いてみた

「そうだねぇ、レジスタンスの連中にお仕置きしに行くんだけど君はどうするんだい？」
と逆に問われ

「そうだな……昨日の今日だ損失もデカイんだし俺も出るわ」

「判った、じゃあ前と同じで夜の１時にタッシルを落とす」

「了解、俺は準備があるから一旦自分のジャンク艦に戻るわ」
そう言って上官室を出て時間を確認した。

「今は、作戦から帰ったばかりだから１０時か…作戦開始までに完成させる」
と言ってある物を完成させる為に走り出した。

「取り敢えず食料・水・医療薬品を入れられる何かを作らないとな……ジャンクパーツで不恰好ながらもコンテナ作って武器庫とでも言って騙すしかないな」

シュウは、この後タッシルが壊滅的打撃を受けるので用意をし始めた。

「老人に子供、戦争に関係無い人達だけは、死なせたくない」

そう呟きながらも時間は掛かったが医療キット・コンテナ版を完成させた。

「今何時だ?」　（15時51分）

（マズイな、薬と食料は余り軍の奴等にはばれない様に内密に行きたいな。ダコスタに言ってバギーを借りるか）そう思いながら再び走り出した。

～レセップス内～

「ダコスタ君!バギーの鍵貸してくれ!」と言いながら扉を蹴って中に入った

「ウワッ!?ビックリしたなぁ。バギーの鍵ですか?壊さないで下さいよ?」と言って出した瞬間にヒッタクリ

「恩に着る」と言って再び走り出した。

後ろから「シュウさんのドロボ――――――!!」と聞こえたが

（俺には、何も聞こえねぇし、無視してやる!）と思いながら走っていたらハンガーにシラユキが居た

「シラユキ今暇か?暇だったら、一緒に町に行こう」と言ったら

「えぇ!も…もしかしてデート?でも幾らなんでもシュウさんは鈍感だし……」

と何かブツブツ言っているが無理やりバギーに乗せて街まで走り出していった。

「オイオイ、シュウさんとシラユキさんがデートだと!?」「驚くべき事実だ!」「号外だ号外!」「クッソォ!俺が狙っていたのに」「急いで皆に知らせるんだ!」と何か色々と騒ぎに成ってしまった。

「おっちゃん!薬と水と食料あるだけ売ってくれ!」

「え?まぁ良いけど此れ位の値段に成るけど良いのかい?」と打ち出した電卓をこっちに向けてくる。

「え?これだけの値段?今回大量に引き出して良かったー」と言って金を払っていた。

「ふふふ……そうですよね。シュウさんだから仕方ないですよね?気にしないのよ私」

(何か後ろから怖い声が聞こえてきたなぁ、後で何かプレゼントしなくちゃいけないのかな?)

とシラユキが後ろから何故か不気味なオーラを出しており内心冷や冷やしていたシュウだった

そして何度か食料・水・医療系を買っては、バギーに積んで用途が済んで帰ろうとしたら、途中でアクセサリーを飾ってあった店が有り

「シラユキちょっと待っててな?」

「あぁはい、どうぞ」

と気が抜けており

(シラユキ　ホントに大丈夫か?)と思いつつも中を覗いた。

「へぇ結構あるんだな?」と呟いたら、急に店の人が来て
「何かお探しですか?」と聞いてきた。
「あぁ幸運を呼ぶ石を探してるんだが、あるかな?」
「えぇ有りますとも、此方なんてどうです?ラピスラズリのネックレスです。邪念を取り除き幸運を呼ぶと言われています。」
と出してきたネックレスは、ロングロープとエッグ型に削られた宝石で作られたネックレスだった。
「へぇ良い形だな。どれ位するんだ?」
「此れぐらいですね。お客様は初めてなので2割引しますよ?」
「そうか、だったら買おう」と言ってネックレスを買ってバギーに戻った。
「おーい、シラユキ大丈夫かー?」と聞いてみた。
「良いんです、良いんですどうせ私なんか不幸ですから」と自分の世界に行っていた。
「やれやれ、仕方ない」と言って先程買ったネックレスをシラユキに無理やりつけた。
「へっ?あれ隊長お帰りなさい。あれ此れは?」
「あぁ何だ良く似合うじゃん」と言った瞬間

「え?これ隊長が買ってくれたんですか?」

「ん?そうだけど気に入らなかった?」

「いっ、いえいえ寧ろ嬉しいです」と顔を赤くして答えていた

「でも隊長これら合わせると結構高かったんじゃ?」

「ん?普段給料とジャンク品売って必要最低限の生活用品しか買わなかったから、キャッシュにまだ金有るんだよ」と答えといた。

「そうですか。ありがとうございます」と言われたので

「気にすんな」と言ってシラユキを基地まで送って再びジャンク艦に向かった。

~ハンガー内~

そして今回買った物を全てコンテナに入れて、キマイラの腰に装着した。

「漸く完成したけど……疲れたー」と言って時間を確認した。

(22時34分良い感じに作り上げれたな)

「失礼します隊長、バルドフェルド隊長がレセップスまで来て欲しいそうです」

「判った。キマイラはレセップスに積んだら良いのかな?」

「そうですね。そうして下さい」と喋りキマイラを起動させレセッ

プスまで移動した。

そしてハンガーに到着しキマイラを降りて、近くを通りがかった整備兵にバルドフェルドの居る場所を聞いた。

「バルドフェルド隊長ですか？艦長室だと思いますよ？」

「そうか、ありがとな」と言って艦長室に向かう前に

後ろから大量の「リア充死んでしまえ！」と聞こえた気がするが気のせいだろう

（それに誰と誰が付き合ってんだ？どうしてこっちに矛先が？謎だな？）と少し首を傾げてしまった。

～艦長室～

「入るぞ～」そう言って入った瞬間コーヒーの匂いが漂ってきて

「これはハワイコナだと！」と思いっきり言ってしまった…

「おや、判るのかね？」

「あぁコーヒー好きなんでな。貰えるかい？」と言ったら

「そこに有るから好きにしたまえ」とコーヒーメーカーを指をさして居た。

そして傍に置いてあったコーヒーカップを取り特製コーヒーを入れて一口飲んだ後

「用件は何だ？」と睨み付けた。

「なに、君はタッシルの人間を救う気なのかね？」

「あぁ、此れが俺の意思であり俺の全てだ。戦争に関係ない一般人を巻き込みそのまま放置ってのは、我慢できないからな」

「そうか、君の意思を聞けただけ充分さ」

「怒らない上官は、初めてだな。まぁ理由を聞くなんて今はコーヒーを楽しむ時なんだから無粋な事は聞かないさ」

その後作戦時間が来るまで、バルドフェルドさんとコーヒーを語り合い・飲みそして楽しんだ。

正直言ってバルドフェルドさんの知識の量は凄かった。

そして数時間後「ダコスタです。失礼します」と言う声と共にダコスタが入って来た。

そして「うっ！…たっ…隊長換気しないんですか？」と辛そうに言って来た。

「わざわざ、そういう事言いに来たの？」

「いえ、、そう言う訳では」と話していたので

「ダコスタくん諦めろ、今の時はコイツには常識が通用しない……」

「そうですね。隊長　出撃の準備整いました」「「了解」」

そして俺とバルドフェルドとダコスタはハンガーに向かって歩き始めた。

そして俺はキマイラに乗り込み、バルドフェルドは指揮車に乗り込んでいた。

「さてこれより拠点に対する攻撃を行う！昨日はレジスタンス共がおいたが過ぎた、お仕置きをしてやれ！！」と一言多いながらも命令をしていた

（こんなマイペースな上官でも実力は俺以上なんだよなぁ）とついつい思ってしまう。

「目標　タッシル！　全機出撃！！」

そう言って俺のキマイラ・シラユキのバクゥ・あとはそこそこの実力のモブ兵のバクゥ2機がレセップスから出撃した。

そしてタッシルに全速力で向かい、ほどなくして着いた。

街は、家々の灯りが消され殆ど闇と同化していた。

「これから街を襲うんだが、あまり良い気に成らないな」とシラユキと話していた。

「そうですね。無力な人たちを襲うんですから良い気には成れないですよ」と少し落ち込み気味だった。

「そうだな。しかしバルドフェルドも救う気は有るらしいぞ？」と助言しといた

「えっ！？」
と言ってダコスタが歩いて向っているのが見える。どうやらダコスタが拡声器を使って何かを叫んでいた。その直後街は直ぐ灯りを取り戻し騒がしくなっていた

そしてバルドフェルドからの通信で「各機に告げる１５分経ったら街に攻撃を開始する」と告げられた

「ほらな？」「良かったです。殺さなくて」と言っていた。

（シラユキも俺と同じ考えを持っているのか？）と思っていたら

「でも街壊すって事は、その人達生き残れませんね」と泣きそうに成っていたが

「作戦終了時に俺に着いて来い。俺のやりたい事を見せるよ」

「え？あっ、はい判りました」と了承していた。

そして作戦時間が来てシュウ達はタッシルへ攻撃を開始した。

キャタピラで家を踏み潰し・銃で大きな物を破壊し燃やしていった。
そしてタッシルは直ぐに炎に包まれ残骸だけしか残っていなかった

作戦終了の合図が来た後ダコスタがバルドフェルドに何か話しているようだ。

そしてバルドフェルドから通信が来て「そっちの用事をやっていいぞ」と言われ

「有難う御座います！！」と言って街の人が居る場所に向った。

「隊長、私もついていきます」

「あぁ、好きにすりゃいいよ」
と言って住民の目の前まで行った。

だがキマイラを見たタッシルの住民達はみんな親しい人と抱き合って死を待っている様な感じだが

「殺す気は無いんだ、今から医療品・食料・水の入ってるコンテナをパージするから好きに使え」
そう言って腰にぶら下がってるコンテナをパージし扉を開けた、住民は驚きは隠せなかったようだがそれでも感謝する人間も多数居た。

「さて部隊に戻るぞ」と言いながら部隊に戻る時に

「お優しいんですね隊長」とシラユキが言ってきた

「あぁ死ぬべきじゃない戦争に無関係な人間が死んで行くのは辛い物がある」
と言いかえしながら部隊と合流した。

しかしシュウは多少焦っていた

（幾ら救済したとは言え男達が黙ってないだろうな……しかもストライクが来るかも知れないから、最悪一人で戦う事を想定しないとな）
と思いながら撤退をしていた、そしてシュウの思惑は見事に的中した。

ＰＨＡＳＥ１１（後書き）

シュウ「今回は長めに書いてたんだな？」

抹茶「そうですね、中々話が切れなくて結構書いちゃいました」

シュウ「そういえば、シラユキをメインヒロインに上げたんだな？」

抹茶「そうですね、原作キャラとイチャイチャさせるわけねぇーだろうが」

シュウ「確かにな、って言うかあれ出てくる女性殆ど付き合っては別れてるよな」

抹茶「そうですね、男女関係は難しいですね」

シュウ「イヤ、リアルであんだけドロドロな恋愛関係だったら何時か刺されるだろう？」

抹茶「ですね、女性を怒らせると怖いんで気を付けないと駄目ですね」

シュウ「全くだ」

抹茶「そうそう、ご感想をくださったみつきさん有難う御座います」

シュウ「有難うな、ガンダムＳＥＥＤ―閃光のライトニング―楽しんでくれよな」

抹茶「では、そろそろ後書きを閉めさせてもらいますか」

シュウ「そうだな、じゃあ何時ものあれやるぞ？」

シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば治しますので
ー閃光のライトニングー　次回お楽しみに！

ＰＨＡＳＥ１２（前書き）

抹茶「さてＰＨＡＳＥ１２完成させました」

シュウ「おぉ、ここ最近結構投稿しているがちゃんと寝ているのか？」

抹茶「一応寝てますよ？でも多少寝不足ですね。まぁ小説を書く事は好きなんで、辞めませんけどねｗ」

シュウ「そうか、投稿するのは良いが無理はするなよ？」

抹茶「そうですね。人間ぶっ倒れたら厄介ですから」

シュウ「良く判ってるじゃないか、さて今回は、どう言う展開だ？」

抹茶「そうですね、今は取り敢えずタッシル壊した後バナディーヤまでの帰路の時に起きた事を書きました」

シュウ「そうか、どうなるのかは判らないが楽しみだ」

抹茶「そうですか、作者の自分は、もう判ってるのですけどそれでも読みたくなりますｗｗ」

シュウ「そうか、前書き長いけど大丈夫か？」

抹茶「大丈夫じゃないですね。問題大有りですよ」

シュウ「そうか、何かさっきのエルシャ○イのセリフの気がするが

無視だな」

シュウ・抹茶「では本編お楽しみ下さい」

PHASE12

「頼むから何も起きないでくれよ?」と思わず呟いてしまった

「どうしたんですか隊長?何か心配事ですか?」とシラユキに聞かれ

「あぁ、幾ら俺が支援物資を渡したとは言え街を壊されたんだ黙っては無いだろうな」と答えた

「そうですね…何故レジスタンスの方々はMSに勝率が低いのに挑んでくるんでしょうね?」
と不思議に思って此方に聞いてきた。

「憶測だが、此処は元連合やザフトの占領地奪っただけ奪ってヤバく成ったら逃げる、そう言う自分勝手な行動に怒りを感じて、レジスタンスを立ち上げたんだろうな」と考えた事を言ってみた。

「それでも、幾ら奪われるからと言って武器を持ってMSに喧嘩売るって唯の自殺行為ですよ……悲しすぎます」と泣きそうに成っていた。

「そうだな、悲しい事だ。だが俺らは、一介の兵士なんだ。変えるには、軍を抜けるか新たな考えを持つ人が出て来ないと流れは変えられないんだ」
と自分の無力さに苛立ちを覚えたシュウだった。

「じゃあシュウさんは、新たな考えを持つ人が現れたら如何するんですか?」と質問してきた。

「まずは、見定める…。力を貸すに値するのかね。それで力を貸すに足る人物だったら俺は、軍を抜けてその人達のグループに就くかもな」と答えておいた。

「その時は、私も連れて言って下さい！」とシラユキが思いっ切り言ってきた。

「へっ？良いかシラユキ、そんな簡単な事はすぐに答えちゃ駄目なんだ。ゆっくり考えないと駄目だぞ？」と軽く諭した。

「私は本気です！大体私が見張ってないと何しでかすか判りませんからね、それに私は貴方の部下ですから」とモニター越しで微笑んでいた。

「あ　あぁ・・・ありがとうな」と言って

（シラユキのあんな笑顔始めてみたな。何故かな？体温が少し高いな、熱でも出したか？）

とシュウは一人物思いに耽った。

だが、それも一瞬のうちに終った何故なら……後ろから小型の何かが索敵センサーに引っ掛っているからだ。

「チッ！やっぱり来たのかよ、命を無駄にするバカ野郎が！！

とシュウは向かってくるバギー群に叫んでしまった。

「あーあー聞こえるかね？バギー群が迫って来ているが、向こうが攻撃して来るまで一切こっちから手を出すな」とバルドフェルドさんが通信をしてきた。

「万が一攻撃して来たら?」と少し震えた声で聞いた…

そして「殺せ」と冷たい声が聞こえてきた。

「ッ!了解しました」と唇を噛みながら答えた。

通信が切れた後「クソッ!これしか手段が無いのかよ…」と苛立ってしまった。

そしてバギー群がバクゥに対してミサイルランチャーを撃ってしまったので

「正当防衛だ、やれ」と聞こえてきた。

「クソッ!クソォォォォォ!」と叫びながら７６ｍｍ重突撃銃を抜きバギー群に向かって構えた。

(何か手段は……?待てよ?確か地面に対して銃弾を撃つと何かしらの衝撃が出るはずじゃ?一か八かの賭けだ!バギーに当らない様に銃弾を撃って、衝撃で転ばさせる!)

そう思いバギーに当らない様に撃ち放ち、衝撃で転ぶバギーが大量に居た、そして大抵のレジスタンスは投げ出され地面が砂だから、悪くて重傷あたりで済んだ。

そしてシュウは、それを全部成功させ(何とか殺さずに済んだな)と思っていた。

そして「隊長、任務完了です…」とシラユキが暗い面持ちで話し掛けて来た。

「そうか、こんな任務二度と遣りたくない物だな」と言った瞬間
ビッー！ビッー！ビッー！と唐突にキマイラから警告音が鳴り響き
「ッ！シラユキ避けろ！！」と言ったが
「えっ？」と状況に付いて行けず、シラユキのバクゥの頭がビームライフルで撃ちぬかれた。
「カグヤァァァ！」と思わず叫び、通信を開きシラユキの端末の情報を調べた。
（シラユキ・カグヤ　パイロット状態　気絶　ＭＳ状態　移動不安定）と表示されたが、
（こんな事を許せるのか？許せない・・・許せない・・・許せない！）
とシュウの中で沸々とストライクに対する怒りが溜まってきていた
「バルドフェルド隊長、ストライクと殺り合わせてください」と懇願してみた
「…良いだろう、シラユキ君の方は別のバクゥのパイロットに任せるが、５分だ。５分経ったら戦場から離脱しろ」とバルドフェルドも此方の意思を汲み取りその命令を下した
「充分すぎる時間ですね？ＰＳ装甲（フェイズシフト）を落とすには充分だな」
と言いシラユキを傷つけた、エールストライカーを睨み付けた
「さぁ、殺しあおうか？ストライクのパイロット」と声を変声機で

変え、そう言い放った

「何故こんな事をしたんだ！」と叫んできたが

「何故？先に仕掛けたのは、お前達だろうが！！……リミッター解除　５分！」

とシュウは行き成り危険な切り札を解放した。

そしてシュウの駆るキマイラは、シュミレーターで起きた事の様に、目視では既に確認出来ない速さへと移った。

「なっ！？」と驚いて居たが、シュウは容赦しなかった。

（もうヘリオポリスでの優しさは、甘さは出さない。目の前の敵を潰す！！）

そう思いながら、左右の腰のホルダーに入ってる９０ｍｍ散弾銃と７６ｍｍ重突撃銃を抜き出しストライクに向けて撃ち放った。

時にローリング・格闘を仕掛けると思わせて、近くでショットガンを撃ち放つ・素早さによって背中に回る等、徹底的にＰＳ装甲を落としに掛かった

「お前は、力を持ちすぎた、そのせいで傲慢に成り　更には、友人に対して傷付けるのはかまわなくなって来た。違わないだろうストライクのパイロット？そして女性でも出来たのか、ソイツを守る為だけに力を振るうのか？それだったら君には、失望したよ」

と言いながら銃弾の雨を続ける

そして一瞬だけ立ち止まった所を撃ち抜こうとこっちに銃口を向けるが既にキマイラは居ない、と言う事を何度も繰り返した。

「貴方に僕の何が判る！そう言う貴方は、どうなんだ！レジスタンスを殺しておいて！」
と言って来たが

「殺す？人聞きの悪い、近くで倒れてるレジスタンスの連中は悪くて重傷だ、それにタッシルには、俺が物資支援を行った」と答えた。

「だが貴様等連合は、人の事を言えるのか？取れるだけ物資を取り、危険になったら自分達だけ逃げる、少し傲慢すぎやしないか？少しは考えてみろ。戦う意味をな……」
と呟き一旦リミッター解除を辞めた。此処までの間に3分間は、リミッターを解除したが肉体への負担が大きすぎた。

「クッ！それは、僕ｎ「僕には、関係無い……か？所詮お前も目の前で暴力を行われているのに、自分だけ良ければ其れで良いと目をそむけるのか、違うだろ？」と言ってみた。

「うるさい、僕は、僕はっ！」と言ってビームサーベルを抜いてこっちに突撃してきた。

「戦う意味すら持たないお前が、俺に文句が言える立場じゃないだろうが！！」
と言ってキャタピラを起動させ側面に回り込みコックピットの有る場所を格闘でぶん殴ってパイロットを気絶させ

「仮にもＰＳ装甲が有るんだ、命を失わなくて良かったな」と言っといた。

そしてシュウは少しだけ冷静に戻り

「君は、もっともっと強く成れるんだ。だからこんな所で道に迷わないでくれ…キラ君」
と懇願するように呟きその場を離れた。

そしてシュウは（バナディーヤに全員着いたのだろうか？何故だかとても疲れてしまったな。リミッター解除をしたからかな？）と色々と思っていた

「少し休むか…」
そう言ってキマイラのオートパイロットを使用し基地までの間シュウは少しの休みを得た。

そして後にこの戦闘が、更にキラ君を進化させる切欠の一つになった。

PHASE12（後書き）

シュウ「いやぁ、暴れたなぁ」

抹茶「暴れさせ過ぎましたけど、キラ君の砂漠の虎編は自分は苦手なんで、オリキャラで制裁?をさせて頂きました」

シュウ「今回ストライクがフルボッコだが結構批判出てくるかな?」

抹茶「そうですね。例えば何故キラを種割れさせなかったのか?等が取り上げられそうですね」

シュウ「だろうな、何か言い訳でも有るのか?」

抹茶「そうですね、砂漠の虎編の間は種割れは、自分が死に掛けるか・戦艦がボロボロに成って発動してるという独自解釈をしています。不快に成ってしまった人には申し訳ありませんでした」

シュウ「そうそう、今回も感想が来ていたな」

抹茶「そうですね。みつきさん・ジョンさん、ご感想有難う御座いました」

シュウ「二人とも有難う」

抹茶「みつきさん、何時も閃光のライトニングを楽しんでもらい有難う御座います。
ジョンさん、反省点を言ってくださり有難う御座います。日々精進していきます」

シュウ「感想をくれた2人に感謝だな。反省点が判ると次から気を付けられるから他の人もドンドン言ってくれ」

抹茶「さて長くなりましたが何時ものあれ遣りましょう」

抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）は生き残れるのか?次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたら、どんどん言って下さい。
また間違っている所・直して欲しい所等もありましたら言って下さい。

ＰＨＡＳＥ１３（前書き）

抹茶「さてＰＨＡＳＥ１３書き上げました」

シュウ「何時もどおりお疲れさん」

抹茶「有難う御座います。自分としては１２時越える前に投稿したいんですけど中々大変なんですよ」

シュウ「そうか、まぁ頑張ってるから良いんじゃねぇのか？」

抹茶「そうですかね？まぁ読んでくれている方々が居るだけで自分は、充分嬉しいんですけどね」

シュウ「そうか、今回はどんな話なんだ？」

抹茶「はい、今回はバナディーヤの基地に戻った後の拠点フェイズと成ります」

シュウ「そうか楽しみだな」

シュウ・抹茶「では本編をお楽しみ下さい！」

PHASE13

「ん、此処は何処だろうか？」と辺りを見回して情報収集をした。

（どうやら俺はさっきまでベッドで寝てたようだな）と思いつつ背伸びをした

コンコン

「入りますよー。シュウ隊長起きてますか？」とノック音が聞こえた直後シラユキの声が聞こえてきた

「あぁ、起きてるから入って良いぞ」と返事したらバァン！と言う音共に

「隊長起きたんですか！体のほうは大丈夫なんですか？」と扉を思いっきり開けて入って来た

「心配してくれるのは嬉しいが、思いっきり扉を開けないでくれ壊れるからさ」と突っ込んどいた

「あ、すいません」と謝ってきた

「それでだ、一つ疑問なんだが何で俺は医務室で寝てたんだ？」と聞いてみた

「それはですね。隊長がキマイラをオートパイロットで基地まで戻ってくるってのは通信兵が伝えてきて知ってはいたんですけど、ハ

ンガーに到着しても隊長が幾ら待っても降りて来ないんで不審に思って開けたら気絶してたんですよ、しかも体の所々に内出血が有ったんで即医務室行きでしたよ」
と長ったらしい説明だったがシュウは大体の事情を理解したが
何か聞きたそうな顔をしていたシラユキが居た

「シラユキ何か聞きたそうだな？だが時には、知ってはいけない事もあるんだ」
と教えずに帰そうとしたが

「隠しても無駄ですよ隊長。あれは、バルドフェルド隊長が私だけに秘密で情報をくれました」
と既に此の状態の真相を知っていたらしい

「そうか、嘘偽りじゃないか、正確に聞いていこうじゃないか」とこれから言われる事を聞いてみた

「はい、あの機体は隊長自ら設計し作成したＭＳ－キマイラ今までのＺＡＦＴ軍の機体のどれよりも性能が高くて隊長が軍に入る為の条件でしたね。そしてあの機体は普通に運用すれば問題無い最高の機体です。でもあれでは、不完全　リミッターを解除したら最強の名前を有るがままに出来る……。
でも一度リミッター解除して最高稼働時間５分まで使ってしまえば生存率５％　勝てない敵も確実に落とそうと思えば出来ますが代償としてパイロットの命ですね」
と聞いていたがシラユキは、危険なＭＳの真実を話して行くたびにどんどん悲しそうな顔に成って行。

「そこまで、言われていたか、それで真実を知って一体どうするん

だ？」とシラユキに問い始めた

「何でそんな自分の命を奪うＭＳに乗ってるんですか！自分の命が失うんですよ！！」と叫んできた。

「そうだな、俺も死ぬかも知れないな、今回３分間起動させただけで体中が内出血だ。正に命を狩ってくる化物だな」と答えといた

「だったら「悪い、それでも俺はこの戦い方を止められないのかも知れない」
とシラユキの言う事を遮り自分の考えを言い切った。

「ッ！隊長のバカ！命知らず！！」
そう言って部屋を出て行った。

「はっ…ハハハ、馬鹿に命知らずか正に俺にうってつけの言葉だな」
とシュウは言ってしまったがむなしくなってしまった。

「これでまた独りに戻ったか、周りの人間を傷付けない為にも独りで動く方が良いんだ」と言ったが

「あれ？何で涙が？独りには成れてた筈なのに」
と涙を流す理由が判らずに泣いてしまった。そしてシュウは、泣き疲れ再び眠りに入ってしまった。

「ふぁー朝か、取り敢えずシラユキに謝って、バルドフェルドさんに会いに行くか」
そう思い横にたたんで置かれていた赤服を着込んでいたが

「隊長　お早う御座いま…す」と言葉の途中でこちらを見て唖然としていた。

何故なら

「へっ？シ…シラユキ？」
と言って上着を着込んでる最中であって今俺上半身は裸だったからだ

「キッ、キャアアアアアアアアア」
そして直ぐにシラユキは顔を赤くして叫びながら部屋を出て行った。

「悲鳴！？シラユキの声か！」「シュウ隊長が何か遣らかしたんだな！」「何をやったんだ！変な事だったらぶっ殺してやる！」「俺も参加するぜ！」
と下から数人の兵士の声が聞こえてきた。

「あれぇ？」と言いながらも服を着込み

（結構嫌われたと思ったんだけどな）と思いつつ

シラユキが自分に会いに来た理由が思いつかず首を傾げてしまった

「「「

（……俺シラユキと話する前に生き残れるかな？）と思いつつ全力でその場から逃げ出した。

「罪人が逃げたぞ！追え！追え！」と言って追い掛けて来た。

「「「「「「「止まれぇぇ！シラユキさんに何やったーーー！」」」」」」」

「止まるかアホ共！大体俺がシラユキに何かすると思ってんのか！」そう叫び返して朝一番の命懸けの鬼ごっこが始まった。

～1時間後～

何とか誤解が解けて異端審問会議に掛けられなくて済んだ。

「朝からもう疲れてきたわ」と言い軽くため息が出て来そうに成っていた。

そしてシラユキが部屋にまた来て

「お疲れ様です、シュウ隊長」と苦笑いしながら話し掛けて来た。

「あぁ、二度とやりたくないな。男性陣の目が純粋に恐ろしかった…」

「……それよりも昨日の事で嫌われたんだと思ったんだが何故来たんだ？」と聞いてみた

「隊長まず一つ間違ってますよ、私は嫌ってはいませんよ。ただたんに怒っただけです。それに私昨日部屋に帰って悩み続けました。

それで私それでも隊長には、離れません。むしろ隊長のストッパー役に成ります。だから一緒に強くなりましょうよ」と言ってきた。

「それがシラユキの答えか？」

「はい、そうです。あなたが味方を守る為に力を振るうなら、私は一緒に戦場に出てあなたを守ります。それが私の答えです」と覚悟ある目だった

「そうか、お前の決めた覚悟なら俺は止めないよ。だけど俺を止めるには、正規のＭＳじゃ無理だから俺がシラユキ専用機を作ってやるよ」

「そうですか、ありがとうございます。後作るなら私にも隊長と同じリミッター解除を付けてください」と言ってきた

「良いのか、危険なんだぞ？」と聞いた

「あなたと同じ境遇で居たいですから」と言ってシュウの危険性を分かち合おうとしていた。

「そうか、判った。時間は掛かるが少しだけ待っててくれ」と言って右手を差し出した。

「えっと、なんですか？」と不思議に思っていたので

「ん？これから改めて宜しくな。って感じの握手なんだが、何かマズイか？」と聞いてしまった。

（そうだった、シュウ隊長って鈍感でしたね）と軽くシラユキはシ

ョックを受けつつも握手した。

「さてと俺は、一旦バルドフェルド隊長に会いに言ってくるわ」

そうシラユキに告げて部屋を出て行き、バルドフェルドの居る部屋に向かった。

そしてこの後キラとシュウは再び会う事に成ってしまった

ＰＨＡＳＥ１３（後書き）

抹茶「さて今回は、キマイラの真実を知ってしまった。シラユキの行動を出してみました」

シュウ「そうか、そろそろ～ＳＩＤＥを登場させた方が良いんじゃないのか？」

抹茶「そうですね、色々と努力は、してはいるんですけどまだまだ練習中です」

シュウ「そういやあの異端審問会議ってなんだ？」

抹茶「あぁあれですか？あれはバカテスを参考にしてみました」

シュウ「そうか、あれのせいで死にそうに成ったが小さい事は気にしねぇ」

シュウ「そういえばシラユキ専用ＭＳを登場させる気なんだってな。どうするんだ？」

抹茶「うーん、考えてはいるんですけど結構悩みます。一つ出来上がっているんですけど原型が連合のＭＳ使っちゃってるんで個人的に拒否りました。」

シュウ「そうなのか、結構シラユキ専用機でたら嬉しがる人も居ると思うからちゃんと考えないとな」

抹茶「そうですね」

シュウ「そうそう、今回も新しい方が感想をくれたんだよな？」

抹茶「はい、スミスさん・４５７６さん・Ｋさんご感想有難う御座いました」

シュウ「ありがとな、これで作者の方が一つ一つ直して行ってより良い形にするから期待してくれ」

抹茶「それでは長くなってしまいましたが、後書きを閉めさせていただきます」

抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

ＰＨＡＳＥ１４（前書き）

抹茶「はいＰＨＡＳＥ１４書き上げました」

シュウ「はい、お疲れ様　っ旦　お茶どうぞ」

抹茶「悪いね～しかしお前何気にお茶淹れるの美味いな」

シュウ「コーヒー淹れてれば自然と…」

抹茶「そうか、まぁ良いだろう」

シュウ「さて今回はどんな話なんだ？」

抹茶「まだまだ拠点フェイズですよ」

シュウ「いい加減拠点フェイズから抜け出せよそろそろ読者が戦闘シーン出せ！って言って来ても可笑しくないぞ？」

抹茶「そうですね、でも拠点フェイズも偶には長くても良いじゃん！」

シュウ「逆ギレしないでくれ」

抹茶「すいません」

抹茶・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE14

「入るぞ」そう言ってバルドフェルドさんの部屋に入った。
「おぉ、どうしたのかね？しかし君に赤服は全然似合わないねぇ」
と言われてしまった。

「うっさい、それより何で話したんだ？」
とバルドフェルドに真意を聞こうとしたが
「何の事だい？」とわざとはぐらかして来た。

「何の事って言わないと判んないのか？キマイラの事だよ！」
と流石に苛々しているシュウだった

「おや、キマイラの真実を話したのが気にくわなかったのかい？」
と不思議そうにバルドフェルドが聞いてきた

「あぁ、シラユキに話したら確実に止められるのは、目に見えていたからな……」
と少し真実を知られるのは辛かった。

「でもシラユキ君はキミの傍に居たいって言ったんだろう？彼女の意思も尊重しなきゃ」
とシュウが怒っているのにも拘らずこっちを諭してきた

「盗み聞きか？余計にタチが悪いんだなアンタは」と睨み付けた。

「盗み聞きではないさ、あの真実を話していたら急に面持ちが暗く

なって行ってね。最終的には考え事と来た、少し考えれば判る事さ」
と真剣な声に変わった。

「そうか、じゃあ俺の勘違いとアンタの話の流れに乗ってしまったか、これ以上話す事は無いな、危うく俺の真相すら話しそうだ」とかるく笑いながら言った

「ふっ、キミの真相も気に成るが今は聞かないでおこう」
と深くは聞いてこなかった。

「そうしてくれると助かるよ」
と聞いて来なかった事に感謝するシュウだった。

「それよりキミは昼は食べたのかね?」
と突然変な事を言い出した。

「はっ?何言ってんだアンタ?」
と逆に聞いてしまった。

「いやいや他意は無いんだよ。ただ単にもう昼飯時だから外で食事しないか?って事さ」
と笑って言っていた。

「アンタ此処の隊長なんだからもうちょい何か威厳らしい物を…いや、あんたに何言っても無駄だったな」と軽くバルドフェルドの行動を考えれば無理だった

「でだ、アンタもしかしてそんな格好で出るのか?」
と目の前のバルドフェルドだった人物を見る。

「何か変かな？」
と言って自分の服装に疑問の文字すらなかった。そう今バルドフェルドが来ているのは派手なアロハシャツ・カンカン帽・更には大きめなサングラスと来た

「えーとだな、多分今街に行ったら結構目立つな、うん確実に目立つ」
と何度も目立つ事を言ってしまった

「まぁ良いじゃないか、さぁドネル・ケバブを食いに行こう！」
とテンションが高かった。

「判った、付いて行くから引っ張らないでくれ。あと俺も着替えるから待ってくれ」
と説明して、着替えに行った。

そう言ってシュウは自分の部屋に言って半そでのYシャツ・青のジーパン・黒のサングラスに着替え外出した

「そっちの方がキミらしいねぇ、今度からそれで基地内歩いたらどうだい？」
と冗談で言ってきたが

「勘弁してくれ、こんな格好で歩いてたらシラユキかダコスタがまず怒るのが目に見えてる」
と言ってしまった

「キミも大変だねぇ」とバルドフェルドが慰めてくるが

「大変さの原因には、お前も入っているんだけどな？」と呆れる様

に言った。

「でだ、店は此処なんだな?」と話していたら着いていた。

「あぁ此処のドネルケバブが美味しいんだ。特にヨーグルトソースを掛けると美味い!」
と気持ち悪い位に力説してくる。

「そうかい、じゃあヨーグルトソースで食ってみるか」
とドネルケバブが出て来るのを密かに待ってしまった。

そして注文して数分後パンの上にトマトやレタス等の野菜それとこんがり焼けた牛肉だろうか?美味しそうな肉のスライスが乗っていた。

「普通に食っても美味そうだな。でもこの肉なんなんだ?」と疑問に成った事を口にした。

「ん?羊だよ羊、羊肉が使われてるんだよ」と料理を持って来てくれた店員が答えた。

「そうか、いただきます」と言ってヨーグルトソースを掛けて食い始めたシュウだった

「な?美味しいだろ」とバルドフェルドさんが同意してくる。

「あぁ、コイツは飽きない味だな。此処に住むのも中々悪くないな」
と思った事を口にしながらドネルケバブを食っていた。

そして食い終わって食後のコーヒーを楽しんでいた時に大量の荷物

を持った少年と金髪の少女が来て直ぐ横の席に座ってきた。（……ッ！キラ君にあれがカガリ・ユラ・アスハか）とシュウは思ってしまった。

そしてドネルケバブが出て来た時にキラ君が「何此れ？」と珍しそうに言っていた。

（うん、俺も最初は思ったけど美味かったぞ）とシュウは心の中でキラに言っといた。

そしてカガリがチリソースに手を取った瞬間

「あいや待った！」と目の前のバルドフェルドが止めに掛かった。

二人は驚いていたがそれとはお構い無しに

「ケバブにチリソースなんて何を言っているんだキミは！此処はヨーグルトソースを掛けるのが常識だろうが！」と力説していた。

「はぁ？」とカガリは不思議そうに成っていたが、話はまだ続く

「いや常識と言うよりも、もっとこう！ヨーグルトソースを掛けないなんて料理の冒涜に等しい！」
と話をしていた

「なんなんだお前は・・・」とカガリが言ってしまった。

（うん、誰もが最初は思っちゃうよね）とカガリの言った事に頷いていた。

そしてカガリはドネルケバブを掛け
「他の人間に私の食べ方をとやかく言われる筋合いは無い！」と言って見せ付ける様に食っていた

（言っている事は正論なんだけど大人気無いな）とついつい思ってしまう。

そしてキラ君が未だにドネルケバブに何も掛けてないので二人がどっちにするか口論していた。

「正直如何でも良い気がするな」とポツリとシュウは呟きながらコーヒーを楽しんでいた。

そして口論が終ったのか急に静かに成ったと思って再び見たらキラ君のケバブはどっちでも無くミックスになっていた。

（はぁ、大変そうだな）と思っていたが

「ほら君も来たまえ」
と急にバルドフェルドに引っ張られ持っていたコーヒーカップを落としてしまった。

そしてシュウは溜息をつきながらキラとカガリの席に行き再びコーヒーを頼んだ。

「しかし凄い両の買い物だねパーティでもやるのかい？」
とバルドフェルドが聞いて買い物袋を覗き込んだが

「よけいなお世話だ！だいたいさっきから何なんだ？誰もお前等を招待してないぞ！」

とカガリが怒ってきた

「それなのに勝手に座って・・・」

と言ってキラがカガリをテーブル越しに掴んで、すかさずシュウがテーブルを跳ね上げ女性であるカガリを引っ込めると同時に何かが店内に入って来た

「クッ！無事か！？」とシュウは聞いて他のテーブルを盾にし腰に掛けてあった銃を抜いた。

「死ね！コーディネーター！」「青き清浄なる世界のために！」と言って襲撃者が怒号を飛ばしながら銃を撃って来る。

だが店の物陰から次から次へと民間人に変装した兵士が出てきて襲撃者を撃ち殺した。そして他にも何人か出てきて応戦していた。

「かまわん！全て排除しろ」

と聞こえて、シュウはハンドガンで先に連射率のあるｖｚ２１のマシンガンを持つ奴を撃ち殺し武器を強奪し始めた。

「ったく！撃ち合いたいんなら別の場所でしやがれ！！」

と叫びながら確実に一人一人殺していくシュウだった。

しかし一人のテロリストがバルドフェルドに銃口を向けた、だがキラが飛び出て近くに有った銃を投げた。

そして銃は暴発しそれに怯んだテロリストに対して蹴りを喰らわせた。

「ヒュウ～♪やるねぇ」と言ってしまった。

何とかブルーコスモス達は全滅したが店内には硝煙の匂いが漂い、死体・怪我人が至る所にあった。

なにやらキラとカガリが言い争いするが取り敢えず現状確認を開始し始めた。

「どうやら死んだのはブルーコスモスだけで怪我人は民間人か、何人か怪我をした民間人を手当てして遣れ！」と的確に指示を出していった。

そして部下の一人が「隊長達ご無事でしょうか！？」と聞いてきたので

「あぁ大丈夫だ」とシュウは答え

「ああ、私も平気だよ。彼のお陰でな」

と言いながらサングラスを取ったので俺もついでで取っておいた。

（変装とは言えサングラスは面倒だな）と場違いな事を思ってしまったシュウだった。

そしてカガリから「アンドリュー・バルドフェルド」と言って此方を睨み付け

「シュウ…さん？」とキラは、自分が敵側に回っていた事を唖然としていた。

～基地～

「あ、あの僕等本当に良いですから」とさっきからキラが何度も繰り返しその言葉を言っているが

「駄目駄目！お茶を台無しにして、その上命を助けて貰ったんだ、このまま返すわけにも行かないでしょ、ねぇ？」と言ってこっちに話を振って来た

「あぁそうだな、仮にも俺の上官と認めたくないが助けてくれたんだ感謝するよキラ君」と言っといた。

「いえ…それよりシュウさんは、何故ザフト軍に？」と不思議そうにしていたが

「まぁそれは、何時か話すよ」と言って話を切った。

「だいたい彼女なんか服ぐちゃぐちゃじゃ無いか。せめてそれだけでも何とかさせて欲しい」と言ったが

「いやっ、私は全然平気だから！」と言って首を振って拒否ろうとしたが。

「それじゃボクの気がすまないさ！」と言っていた。

「カガリ嬢こいつには、感謝する時は相手の遠慮を無視して来るから気をつけろよ」

と苦笑していたシュウだった

「お前なぁ他人事だと思って……」
と恨めしそうに言ったが

「だって他人事だもん」とサラリと言った。

そして目的地に着き、車から降りて基地に向かったが

「隊長！ブルーコスモスに狙われたんですって！」とダコスタが飛び出して聞いてくる。

「そこまで知ってるなら聞く必要性無いんじゃないのかな？」と思わず言ってしまった。

そしてバルドフェルドが「客人の前だよ」と言って

「あ…これは失礼しました」そう
ダコスタが言って道を退きそのまま行っていたら後ろからため息が聞こえてきた。

「気にしないでくれたまえ」
と相変わらず気さくにバルドフェルドが二人に言った

「彼は僕には勿体無い副官なんだが、どうも人生の楽しみ方を知らない。シュウ君みたいに気軽に成れば良いのにねぇ」と言って来て

「ホントだよな、この前なんか小言を長い間聞かされたし」と自分の事なのに苦笑していた。

「あの…街を出る時って何時もあんな感じなんですか？」とキラ君

が尋ねてくる。

「あぁ、護衛の事かい？鬱陶しいからよせとは、言うんだけど辞めないんだよねぇ」と笑っていた。

「アンタは一回自分の身分を理解してくれ。まぁ言っても無駄と判ってるんだけどな。まぁ俺はいったん着替えて来るわ、2人ともごゆっくりどうぞ」とバルドフェルドと二人に言って部屋に戻った。

～部屋内～

「ふぅ、しかしキラ君と遭遇するとはね、予想外だったよ」とブツブツ呟きながら赤服に着替え込んだ。

「隊長ご無事でしょうか！？」

と言って部屋に入ってきた。しかしシュウはまたまた着替え中な訳で…

「キャアアアアアアアア」と再び叫ばれてしまった。

「またか」「シュウ隊長も運が悪いよな」「鈍感で運も悪いって泣けるよな」「何時もの事か、無視だな無視」と遂には他の兵士からも同情や無視され少々泣き出しそうなシュウだった

「うぅ、すいません」とシラユキが顔を赤くしながら言ってくる

「あぁ気にしてないから大丈夫だって、それより隊長に呼ばれてるから行ってくるわ」

と言って部屋を出た

～バルドフェルド部屋前～

「ドレスを選んだのはアイシャだよ。それに毎度のお遊びとは？」
とバルドフェルドは聞き

「変装してお忍びで出かけてみたり住民を逃がして街だけ焼きそれにお情けで物資を提供って事だよ」
と言い返してきた。

「ふむ、お情けで物資を与えたのは、間違いだね」と軽くバルドフェルドが答え

「何？」とカガリが疑問を口にした。

「だって物資をあげたのが情けじゃなくて本心だったら如何するんだろうね？」
とバルドフェルドがカガリに聞いていた

「お前等コーディネーターがそう言う事有る訳無いだろうが！」と叫んでいたが

「さて本当はどっちかな？ナチュラルのシュウ・K・ライトニング？」
とバルドフェルドは部屋に入ったこっちを見て話しかけてきた

「なっ！お前が物資を渡してくれたのか？それにナチュラルって…」
と自分の言った事に対してしまったと思った顔をしていた

「はっ、ハハハ俺がやってたのはお情けなのか？だったらとんだ面白い偽善者だな俺は」
とシュウは自分の行動に笑ってしまった。

「ちっ違う、お前のやったことは「今更遅いよ。彼は戦争に巻き込まれる人を本心から願って救おうとしたのにねぇ」ッ!?」
そう言ってカガリが言おうとした事に対してバルドフェルドが本当の事を言い出した。

「失礼する」そう言って部屋を出て屋上へと向かった。

~屋上~

「……今まで俺のやってきた事は何だろうな?」と自分自身に問いかけ始めた。

「一般の人を殺したくないから戦うのは、悪い事なのか?」と呟き始めた

「多分悪い事じゃないと思いますよ」と別の声が聞こえた。

「シラユキか、慰めにでも来たのかい?」と聞いてみた。

「いえいえ慰めるなんて甘い事しませんよ。隊長普通に立ってください」と言われたので立った。

そして　パシーン　と頬を思いっきり叩かれていた

「なっ!?」

「今更何甘い事言っているんですか、貴方は他人に軽く言われただけで挫折するんですか!違うでしょ、その一心が有るから頑張れるんでしょうが!だったら貴方は迷わずその道を歩き続けて下さい。私はそれに従って道に迷ったら正してあげますから」と笑ってきた

「……そうか、小さな事に迷い過ぎなのかもな俺は、ありがとうな」とシラユキに感謝した。

「どういたしまして」とお互いに笑っていた。

そして基地の入り口でキラと遭遇し

「キラ君次会う時は戦場だ。だからキミも容赦なく撃って来い、そして君の戦う意味が速く見つかる事を期待しとくよ」と言っといた

「はい、ではお元気で」とキラは返してきてキラと別れた。

PHASE14（後書き）

シュウ「次の話では戦闘に成るんだな？」

抹茶「えぇ、そうなりますね」

シュウ「楽しみに待っているが今回ｇｄｇｄ感が否めなかったんじゃないのか？」

抹茶「いや、気のせいでしょう？」

シュウ「いや、気のせいじゃない気がするぞ？」

抹茶「確かに落ち込み気味の主人公を元に戻す方法がテンプレ過ぎましたかね？」

シュウ「さぁ？それは読者が決める事だ、さて今回も感想が着てたんだよな？」

抹茶「えぇ、鉄人８３号さん・みつきさん御感想有難う御座いました」

シュウ「ありがとう」

抹茶「こう言うご愛読してくれる方々が居るだけで主の力になります」

シュウ「でも無理するなよ？」

抹茶「そうですね。でも書きたい時には思いっ切り書きたいんです」

シュウ「そうか、では後書きを閉めようか」

シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）は生き残れるのか?次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

ＰＨＡＳＥ１５（前書き）

抹茶「はい、ＰＨＡＳＥ１５の完成しました！」

シュウ「お疲れ様、毎日投稿しているがお前にネタ切れという４文字は無いのか？」

抹茶「え？有りますよ、ただ書いてる間に色々と閃いてくるんでスラスラ書けるだけです」

シュウ「まぁ時々ｇｄｇｄ感・誤字脱字見つけたりしたら落ち込むんだろ？」

抹茶「そうですね、毎回慎重に書いてはいるんですけど、それでも誤字・脱字が見れるから訂正出来る所は可能な限り訂正してるよ」

シュウ「そうか、取り敢えず前書きは此処までだな」

抹茶「えぇ、今回は前書きは何も閃かなかったです」

抹茶・シュウ「では本編をお楽しみ下さい！」

PHASE15

「隊長、バルドフェルド隊長がお呼びだそうです」
とシラユキに言われた

「あぁ判った。直ぐに向かうよ」
そう言ってバルドフェルドの入る部屋に向かった

「おーい、入るぞ」とノックをして聞いてみたが

「あぁ入りたまえ」と少々怒気が入ってる声が聞こえた

「どうしたんだ?苛ついちまって。お前らしくない」と聞いたら

「これを見たら判るさ」と書類をこっちに渡してきた。

どうやらジブラルタルからのMS輸送の情報だが……此れは確かに酷い

「確かに此れを見たら苛立ちも覚えたくなるわな。バクゥじゃなくてザウートって的を戦場に出してるだけだな」

「あぁ、今回ばっかしは、戦力全部回さない限り勝てないもんさ」
と苛立ちが漸く収まっているようだ

「しかも、足を取られる砂漠でXシリーズを二機回されても困るものじゃないのか?」
とシュウは当然とも言える疑問を口に出した。

「あぁ、しかもかえって邪魔に成りそうだな。だって此れから来るパイロット地上戦の経験無いんでしょ？」
と今入って来たダコスタに聞いていた。

「えぇ、エリート部隊ですからね」と相槌を打っていた。

「正直厄介なお荷物だな。クルーゼ隊ってのは、プライドも高いし扱い辛いはずだ。もっと柔軟な思考を持ってた奴ならな」と正直クルーゼ隊から来る二人に期待する事を諦めたシュウだった。

「それに俺はクルーゼが気に食わん、君もそう思うだろ？」とこっちに話を振ってきたので

「あぁ仮面で他人に目を見せない奴を信用するのは無理な話だ」
とシュウも同意するようにそう返しといた

「ハハッそれは僕も同意するよ。さてそろそろXシリーズのパイロットが来るらしいから迎えに行こうじゃないか」そう言ってバルドフェルド・シュウ・ダコスタは甲板へと向かって歩き出した

そして甲板に着いたときに

「うわ、なんだよこりゃ酷いところだな！」
と金髪の青年が文句を言いながら手をかざして砂混じりの風を防いでいた。

もう一人の白髪の青年も驚いて顔をしかめていた。

「砂漠はその身で知ってこそが重要なんだよねぇ」
とバルドフェルドが言って笑みを浮かべながら近づいた。だが二人は、砂で目をやられながらもこっちを警戒してる様だった。

「ようこそレセップスへ。指揮官のアンドリュー・バルドフェルドだ」といった瞬間、

「クルーゼ隊イザーク・ジュールです！」「同じくディアッカ・エルスマンです」
と二人は敬礼し答えてきた

「宇宙から大変だったな、歓迎するよ」
とバルドフェルドは心にも思ってない事を言い出していた。

「ハッ！ありがとうございます。…それより隣の方は？」
とディアッカが俺の事に付いて聞いてきた

「ん、彼かい？遊撃隊兼僕の戦場での補佐かな」と事実でもない適当な事を言われたが

「シュウ・K・ライトニングだ、宜しく頼む」と敢えて嘘とは言わず自分の名だけ名乗っておいた

「さて戦士が消せる傷を治さないのは、それに誓った物が有るからだ、と思うが違うかね？」
と言ったがイザークは戸惑った後気分を害してそっぽを向くが

「そう言われて顔を向けるのは屈辱を受けた……その復讐の為に残しているのかね？」
とバルドフェルドは更に追い討ちを掛けていた
流石に白髪の青年は苛ついたのか怒鳴るように「そんなことより足つきの動きは！」と言ったが
「あれは、アークエンジェルだ。更に読み方じゃ大天使覚えとけよ青年」とシュウは二人に教えといた
「なっ、貴様何故その事を知っている！」と怒りの矛先がこっちに向かってきた。
「アホらし、そんなのちょっと調べれば判る事だろうが」と言っといた
「それよりもバルドフェルド隊長　話を切ったのはすいません。…続きを」
とシュウはバルドフェルドに謝り続きを促した。
「あぁ、判った。さてあの艦なら此処から西方１８０ｋｍ離れた地点　レジスタンスの基地に居るんだよ映像見るかね？」と先程まで飛ばしてた無人探査機のデータを抜き出していた。
そしてバルドフェルドは丁度搬送されて来た二機のＸシリーズを見上げて
「成る程　同系統の機体だな。アイツと良く似てる」
と呟いた。まるでこの後戦うストライクに魅入られてる様だ。

そしてディアッカが「あの、バルドフェルド隊長は既に連合のＭＳと交戦したと聞きましたが」

「ん？交戦したのは、僕じゃなくて彼」と言ってコッチを指差してきた。

「なっ！で、どうだったんですか？」とこっちに今度は聞いてきた

「ストライクと殺しあって正直ガッカリしたけど、まぁ次は同じ事は無いだろうね」

と言っといた。しかし二人は何の事か全く理解出来ておらず首を傾げていた。

そしてお互い話す事が無く沈黙が続いたが「隊長！」と言う声でその沈黙が壊れた。

「動き出しちゃったの？」とバルドフェルドが来た兵士に問うた。

「はっ！東に向かい進行中です」とオペレーターだったのか伝えて元の場所に戻って行った。

そしてイザークが「足つきが来たか！」と興奮して声を上げる。

すぐさまシュウは近くに居た兵の一人に地図を持って来るよう命令し大天使達が向かう場所を確認した

「タルパティア工場区跡地に向かっているのか。まぁ、此処を突破しようと思うなら僕が向こうの指揮官でもそう動くだろう」と大目に見るように言ってやっていた

「隊長どうするんですか？」とダコスタが聞いてくる

「うーん、もうちょっとゆっくり出来ると思ったが仕方ない」

「出撃ですか！」とイザークが今か今かと出撃を待っている

「レセップス発進する！ピートリーとヘンリー・カーターに打電しろ！」「はっ！」

そう言った途端にクルーが慌ただしく動き始めた。

「うーん女性に先にアクション起こさせるなんて悪い事をしたなぁ」と言っていた

（きっとアイシャさんの事を言っているんだろうな）とシュウは思った。

「んじゃ俺はちょっと先に動きますよ」と言って自分の機体に向かっていった。

「地雷撤去かね？」と聞かれ

「えぇ母艦を壊されるとシャレに成んないんで」と言ってハンガーに向かって行った。

「隊長出るんですか？」とハンガーを歩いていたらシラユキが近づいてきて聞いてきた。

「あぁキマイラで地雷を破壊してくる、今回は地雷を踏まない為にも空中で動ける奴が良い」

そう言ってキマイラに乗り込み

「シュウ・K・ライトニング　キマイラ　出る！」
と言って4枚の翼を広げ空中へと飛び出した。そして今回も新兵器を持ち出した。

「さてと？どこら辺かな？」
と言いながらセンサーを確認し位置を割り出し始めた。そして大まかな位置が判ったと同時に

「んじゃ試作ガトリング試し撃ちしますか」
と言って１００ｍｍ口径の６連装ガトリングを構え砂漠に向かって撃ち込み始めた

そしてシュウが狙った場所は、センサー通り大量の地雷が埋まっておりガトリングの弾が当ったのか次々に爆発し最終的には誘爆していった。

「破壊完了、撤収する」と言って誘爆していく地雷を背に撤退していった。

だが先に向かったのはレセップスではなくジャンク艦だった。何故なら試作ガトリングが予想以上に良い出来だった為シュウは、此れ以降も使う為に戦場で壊すのも勿体無いのでハンガーにガトリングを仕舞い込み、レセップスに戻って行った。

そしてレセップスに着いた時には他の空母二機は、既に戦闘に成ってるらしい

だがシュウは今はザフト軍の一員なので勝手に動くわけにもいかないので

「キマイラの補給頼むわ」
と整備兵に伝えて、次の命令を貰う為にバルドフェルドの居る所に向かった。

「バルドフェルド隊長！納得できません！どうして我々の配置がレセップスの艦上なんです！？」
とシュウはバルドフェルド達を見つけたが、イザークがはバルドフェルドの命令に納得できず苛々し遂には怒鳴っていたが

「おいおいクルーゼ隊ってのは上官命令に対して反抗しても良いように出来ていたのかな？」
それを見かねたシュウがそうイザークにたずねた。

「いえ、しかし！ストライクとの戦闘経験では俺達の方が……」

「負けの経験の間違いでしょ？」とアイシャさんが言っていたが

「アイシャさん流石に言い過ぎでは」とシュウはアイシャさんを注意するが

「なにぃ！？」とイザークがアイシャの挑発に乗り更に怒っていた。

「はぁ…君たち二人に一つ言わせて貰うけどさ、君たち砂漠のバクゥのスピードに着いて来れるのかい？空も飛べずに重たい装甲と銃持っちゃってさ、そんなんじゃこっちに着いて来れないでしょ？」
とシュウは溜息を吐き、流石にイザークの身勝手さに苛々しそう言い放った。

「そんなことは」となおも言いそうなのを

「もうよせ、イザーク。命令なんだ。失礼しました」
と言ってイザークを引きずるようにこの場から離れた。

「彼のような真似誰にでも出来るわけ無いしな……いや一人居るかな？」
そうバルドフェルドは言うとこっちに視線を向けてきたが

「流石に買い被り過ぎですよ」とシュウは自分の実力の低さを判っているので、そう答えておいた

「それじゃ自分はそろそろ出ますよ」そうバルドフェルドに告げ再びキマイラの元へと向かい始めた。

「隊長出撃ですか？」とハンガーに入った瞬間シラユキが聞いてきたので

「あぁ、今回は大天使とストライク潰しに掛かるが付いて来れるか？」と敢えて聞いておいた

「えぇ、貴方を守ると決めた時から離れませんよ」と決心があった

「……ありがとな」と言ってシュウはキマイラにシラユキはバクゥに乗り込んだ

「そうそう隊長、私にもザウート貰ったんですけど私のバクゥが其処まで破損が酷くなかったんで隊長の戦艦のハンガーに積んでおきましたよ」

「そうか、戦場前で喋る事じゃないが今回専用機作る時にパーツが

足りなかったんで正直助かる」
と言ってカタパルトに付いた。

「キマイラ出る！」と言ってシラユキの事も考えて今回はキャタピラを使用して動き始めた

「さて行くぞシラユキ！」「はいっ！」
そう言ってシュウとシラユキは火線飛び交う中ストライクとアークエンジェルを目指して進んだ。

「見つけた！今回は落とさせて貰うぞ！」
と言って今回持ってきた特化重粒子砲とキャットゥス５００ｍｍ無反動砲を構えて撃ち込んだがやはり今まで潜り抜けて場数のせいか特化重粒子砲は戦艦を動かしギリギリ避けられキャットゥスに至ってはイーゲルシュテインに撃ち落されてしまった。

「チッ！のらりくらりと避けやがって！」
そう言ってキャットゥスを腰に掛け特化重粒子砲をチャージ式に変更しアグニと同じ様に火線を強くして放とうとしたが

「アークエンジェルはやらせない！」と言ってストライクがこっちに膝蹴りをしてきた

「ガッ！ふざけんなよ！」
と言い重たい重粒子砲を砂漠に投げ捨てキャットゥスを構えてストライクに撃つがストライクがサイドステップで左に避けていた。そしてキャットゥスは偶々ストライクの後ろに居た友軍のザウートに当たり爆散した

「あっ……やっちまった」とシュウは思わず言ってしまったが既に時遅く

「なっ！シュウ・Ｋ・ライトニング貴様裏切ったな！」とシラユキ以外のザフト兵に言われ数機のＭＳの銃口が此方に向き始めた

「チッ！こうなるとは流石に予想外すぎるわ！」そう言ってシュウは迷い無くキャットゥスも捨て腰に着けている左右のホルダーに入っている、７６ｍｍ突撃銃を抜き出し此方に銃口を向けているＭＳに向けて構えた

「ナチュラルに死を！」そう言ってザウート３機とバクゥが３機そして上にはアジャイルが５機居るが

「俺を止めるならもっと持って来い！」そう言って翼を広げ空を飛び、アジャイルを撃ち落し始めた元々戦闘機がＭＳに勝てる筈も無く難なく落せたが、５機のＭＳが此方を取り囲んでおりザウートのキャノン砲とバクゥのミサイルとレールキャノンが此方に放たれそうに成って居たが一機のバクゥが後ろから来たバクゥにレールキャノンを撃たれ爆散した。

「なっ！シラユキ何遣ってるんだお前！」とモニター越しに叫んだ

「言ったでしょ隊長、貴方は私が守るって。それに貴方が軍を裏切っても私の隊長は貴方だけです！」と言って他の４機と戦闘をし始めた。

「やめてくれ！そんな事して何に成る！お前の人生無茶苦茶じゃな

いか！」と言ったが

「私元々養子でちゃんとした親がいないんですよ。…意外でしたか？コーディネーターの中でもそんな事はあるんですよ。そして急に私の父と母だった人は、理由も無く離婚し私の前から離れて行った。だから私は独りは寂しくて、独りには成りたく無いから軍に入った。でも結局は、一緒だった養子で捨てられた子は軍でも劣等みたいな扱いだった。でも隊長だけが私を見捨てなかった。だから私は貴方に付いていくんです！」

とシラユキは自分から離れるのを頑なに拒んだ。だが一機のザウートがシラユキのバクゥに狙いを定めたが

「わかった、俺の負けだ。お前の好きな事をしたら良いさ」

と言ってシュウはシラユキを助ける為に狙いを定めて居たザウートに対してビームキャノンを撃ち放った

「はい、好きにしますね」

そう言って、今は敵であるバクゥとザウートに対し俺とシラユキは武器を構えた。

「俺がバクゥ一瞬で壊すから1機のザウートを落してくれ」と頼んでおいた

「はい」

「リミッター解除３０秒」

と言ってバクゥの後ろに一瞬で回りビームソードシールドでバクゥを縦に切り裂いた。

流石に化物を敵に回したと思ったのかもう一機のバクゥは後方に下

がろうとするが

「戦場で勝手に敵扱いした上にこっちを殺そうとする奴は実力の差ってのを判ってなかったな」

と言って残ったもう一機のバクゥも７６ｍｍ突撃銃で武器を攻撃し戦闘能力を無くして置いた。

そしてもう一機のザウートも煙を上げながら撤退していた。

「さて此処には、もう用は無いが大天使に恩でも売っておくか」

とシュウは呟き大天使の居る方向に向かって走り始めた

「こちらカラギ　アークエンジェル応答しろ」と言って通信を開いた。

「今からそっちを援護する、中立のマークを出すから撃つなよ？」

と一方的な通信を送り返事を聞く前に無理やり通信を切っておいた

そうして言葉通りアークエンジェルの近くに居るアジャイルに向けて銃口を向けて撃ち落した。

そしてザウート数機がこっちに対して狙いを定めてくるが

「動きの遅いＭＳが俺のキマイラを落そうなんて甘い考えするなよ？」

そう言ってビームソードシールドでモノアイカメラと肩のキャノン砲を切り裂いていく

だがシュウも普通のパイロットな為隙も見せるが

「隊長はやらせない！」
と言ってシラユキがその隙をカバーするように動き回りながら攻撃をしていた

そして自分達の周りが片付いたので他の援護に回ろうとしたら、どうやら戦闘機がレセップスと戦って被弾してしまい地面へと不時着していた。

「戦場で気を抜いたら落ちるが今回は運が良かったな」
と近づいてスカイグラスパーのパイロットにそう言った

「なっ！ザフトの機体！」と言ってこっちに武器を構えるが

「落ち着いてくれ。こっちは向こうに敵扱いされて今そっちの援護してんだよ。アークエンジェルまで運ぶから静かにしてくれ」と言って戦闘機を持ち上げ

羽を広げて再びアークエンジェルに向かって飛んで行ったが

工場跡区の鉄材に引っ掛ってるのか、動けないアークエンジェルをシュウはビームソードシールドで原因の鉄材を切り裂いた。だがその直後にコックピット内に煩い位の警告音が鳴り響いた。

そしてすぐさま反応したシュウはブースターを使い咄嗟に右に避けた。

その直後アークエンジェルを狙っていたバスターの砲撃が横切って、一安心したが

「もっと丁寧に運べ！」カガリ嬢は頭をぶつけていたのか頭を押さ

えて怒っていた

そしてスカイグラスパーをアークエンジェルのハンガーに置いた後に急にザフト軍の機体の動きが止まった。どうやら指揮官であるアンドリュー・バルドフェルドが落されたらしい。そしてレセップスはジブラルタルの方向へと進路を向け他の戦艦やＭＳもそれに従うようにジブラルタル基地へと撤退して行った。

「ふぅようやく終ったか、いやこれで連合も此処を狙い始めるかな？」とシュウは一人予想していた。

だが（ビッービッービッー）と再びロックオンアラートがの警戒音が鳴り響いた。

「そこのＭＳ止まれ！」

と言われたのでモニターで確認したが後方に先程と同じ同型機が後方に存在していた

「やれやれ、あんたらに俺が止められと思うなよ？」

と助けたのにこんな扱いをされシュウは流石に苛ついた。

「この状況で何を言っている！警告は一回までだ！」と言ってきたが

「アホらし、帰るか……リミッター解除１５秒」

と呟きスカイグラスパーですらも目視できない速度で後方に下がった

「なっ！？」流石に驚いてるようだが

「また会いましょうね大天使殿」そう言って自分の戦艦に戻った。

PHASE15（後書き）

シュウ「今回はシラユキの過去が明かされたな」

抹茶「そうですね、今度後書きで呼びましょうか？」

シュウ「やめてくれ、何かカオス化しそうな気がする」

抹茶「そうですか、ではまた今度にしましょう」

シュウ「それよりシラユキの過去をどうしてあんな風にしたんだ？」

抹茶「うーん、これと言った物は無いんですけど、良く展開で「私は孤児だったんだ！」って言うテンプレを使ってみました。」

シュウ「あまりテンプレ使うと読者が怒るぞ？」

抹茶「だからオリジナルストーリーを展開してるじゃないですか」

シュウ「オリストーリーは当たり前だからな？」

抹茶「そうでしたね。そうそう今回もご感想を下さったみつきさん有難う御座います」

シュウ「みつきさん結構感想くれるから主は嬉しがってるよ」

抹茶「否定はしない」

シュウ「そっか、じゃあ後書きを閉めようか」

シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）は生き残れるのか?次回お楽しみに！！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

ＰＨＡＳＥ１６（前書き）

抹茶「ＰＨＡＳＥ１６の完成です」

シュウ「おぉ、毎日投稿してるが大丈夫なのか？」

抹茶「えぇ大抵は昼に書き上げて夜は誤字・脱字してるんですけど、それでも残るって不思議ですよね」

シュウ「それはお前の注意力散漫だからだろ？」

抹茶「言わないでくれ結構気にしてるんだ」

シュウ「まぁ読者の方も主の努力だけでも認めて欲しいものだ」

シュウ・抹茶「では本編をお楽しみ下さい！」

PHASE16

～ジャンク艦～

「隊長此れから如何するんですか？」とシラユキに聞かれた

「ん？そうだな今更ザフトに戻った所で俺等に居場所なんて無いさ、だから中立国の連なるインド洋を抜けてオーブに向かおう」

「オーブですか？」と不思議そうにしていた。

「あぁ、あれは中立国と名乗っているが実際は自衛と言う理由でMSを開発してる所なんだよ。更にはXシリーズ・アークエンジェルに至っては、オーブの上層部が関わってる」と言って資料をシラユキに渡した

「……凄い、でもこれって普通じゃ入手出来ませんよね？どうやって手に入れたんですか？」

「俺の一番得意なハッキングで盗んだ。他にも色々見たがオーブの造ってるM1アストレイは、マトモに動かせない位OSが最悪だ。そのOS完成をさせる代わりにM1を一機貰う」

だが結局はオーブも同じだ。平和の国と名乗っておきながら最終的には国民を巻き込む。

（今の世界に善や悪なんて無いな。戦争してる人間全員が腐ってやがる。……だが俺も人の事を言えないな）とシュウは色々と物思いに耽っていた

「そういえば隊長は何故Ｍ１アストレイを欲しがっているんですか？」

「それは、コイツを見てくれれば判るさ」と言って機体の設計書を渡した。

「これはＭ１アストレイだけど形状が少し違う？しかも４枚羽なのに更に追加で８枚の羽ですか……それにこの武器って正規じゃ使われて無い武器ですね」と言ってきたので

「よし、一通り目を通したな？ソイツはキマイラと原理は似ているが少し違うんだ。まずＭ１アストレイの羽を４枚追加するのに必要なディンの羽は、キマイラを造った時に予備として２セット置いてあるから大丈夫だ」

「まぁ簡単に言えばＭ１の背中のバックパックにディンの羽４枚着けて空は飛ぶんだ。しかも完成したらキマイラの運動性を遥かに超える。武器は２つのガンソードがメインだが、剣と同時に銃も使える様考えたら不思議とそう言う結論に至った」

「そうですか……隊長は二機目の自分専用機を作るんですね」と判りやすく説明したつもりだったがシラユキは何か勘違いを起こしていた。

「えっ？これは、俺専用機じゃなくて、お前専用機だぞ？機体名はエンジェルにしてる」と言っといた

「へっ？」だが未だに状況に付いて来れないらしい。

「いや、だからなコイツが完成したらお前が乗るの。ほら前にキマ

イラには正規のＭＳじゃ付いて来れないから造ってやるって言ったじゃん」と言っといた

「そうなんですか！？ありがとうございます。…しかし何故Ｍ１アストレイを原型にしようとするのですか？」と不思議そうにしていた。

「ん？個人的な意見だけど、Ｍ１がＯＳをどうにかすれば一番マトモな機体だからかな？」
と適当に答えた

「んじゃ、話も終わった事だしオーブに行きますか」
と言ってオートパイロットの目的地をオーブに設定しといた。

「あの隊長はオーブに付くまで何をなさるのですか？」と聞かれたので

「ん？以前見せた爆炎弾あるよね、あれを改造してフェイク弾を作る」と答えておいた

「え？フェイク弾ですか？」と何が何だか謎のような顔をしていた。

「えーとね、簡単に言えば機体に衝撃を与えて体勢をずらし更には煙を出して壊れた様に見せる弾だ」
と弾の説明をした。

「何故そんな弾を？普通に爆炎弾を使って破壊した方が早いのでは？」と言われ

「んーそうなんだけど、大天使がオーブに立ち寄りそうな気がする

んだよね」と答えといた。

「なんですかそれ？もしかして隊長の勘ですか？」と聞かれたので

「あーうん、まぁ勘で良いかな」と軽く笑っていた。

（まぁ事実としては、原作じゃオーブ出て直ぐにオノゴロ島でニコル君死んじゃうから救済策かな？あとは、トール君は盾がコックピットに直撃で死ぬからスナイパーライフルで盾をずらして生かすか）と色々と救済策を考えたシュウだった。

そしてジャンク艦は、アークエンジェルよりも早く出ていたのでモラシム隊に絡まれる事無く無事に海を渡れたるが

「悪いシラユキ先にオーブに行っといてくれ。オーブには着港の許可を貰ってるから、後はオートパイロットに任せれば勝手に着くさ」と言っといた

「え？隊長はどうするですか？」と聞かれたので

「キマイラを使って周囲の探索をする。幾らジャンク屋とは言えど此処で襲われるのは癪だからな」
と言ってキマイラに乗り込んだ。

「そうですか私の機体は海には行けないので、ご無事帰ってくる事を祈ります」
とこっちを見上げて言ってきた。

「ハハッ美女に見送られるって最高だな」とシュウは笑いながら機体を発進させた。

～シラユキＳＩＤＥ～
隊長が美女って言ってきて正直恥かしかった。
しかし何故いきなり出撃を行ったのだろうか？
彼は何時もそうだ考え事をしては、真剣な顔で物事を考えて勝手にどっかに行ってしまう。
それに今回作った新しい弾何かを成す為に作られた感じだ。
そうこの先誰かが殺されるのだろうと予測は出来るだろう
だが隊長からは、一度もされていない。…つまり考えられることは
「もしかしてまだ信用されてないのかな？」
と隊長の向かった先に目を向けながらため息をついてしまった。
～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「さて此処かな？」と言って周りを見回した。やはり索敵センサーにはＭＳの反応が多く有った。
どうやらアークエンジェルは原作通りモラシム隊と交戦してる様だった。
「さて今回も援護するかね」そう言って
「先にＭＳを出撃させる母艦から壊すか」
と呟きながら索敵センサーを確認し隠れている母艦を探し始めた。

……如何やら此処から北西に２ｋｍ離れた場所に居るらしい。

「戦場から離れてれば安全と思ってる奴は、一度痛い目を見ないと安全な場所なんか何処にも無いって事が判んないのかな？」

と言いながら片腕でガトリングを持って潜水艦の居る場所へと向かった。

そしてレーダーに従い敵が表示されて居る付近を動き回っていると薄らだが大きな何かが海面からでも見る事が出来ていた

「見つけた…落ちろ！」と言いながら水中に居る何かに向かってガトリングを撃ち込んだ

どうやらガトリングの弾が当ったのか大きな何かは緊急浮上してきた。

そしてどんどんと全容が明らかになり

「ボズゴロフ級潜水母艦か」

とシュウは出てきた潜水艦の正体を呟きながらガトリングを腰に掛けグレネードランチャーを左腰のホルダーから抜き出し潜水艦に対して向けた

「さてと厄介なＭＳを出される前に戦闘不能にまで追い込んでおくか」

と言ってＭＳの格納庫と思われる場所にグレネードランチャーに事前に入れといた徹甲留弾を数発撃ち込んだ。

予想通りシュウの撃ち込んだ場所は格納庫だったのか当った場所が爆発した直後連続して爆発が続いていた。そして一度だけ大きな爆

発が起きＭＳ越しとは言えシュウも一瞬目を逸らした。

「…少しやりすぎたな」

と流石のシュウも逸らした目を再び潜水艦に向けた瞬間そう言ってしまった。

シュウ自体も潜水艦を完全に破壊する気はなく戦闘不能に追い詰めれれば十分だと思っていたが、潜水艦は既に元の形状は存在せずただ煙を吐き出す鉄屑と化していただけだった。

一瞬殺した相手に対して申し訳無い気持ちに成ってしまったが

その感情は一瞬で消えた何故なら

（ビッー！ビッー！ビッー！）

と警告音が鳴った直後アグニの火線が自分の目の前を横切ったからだ。

「やれやれザフトの次は連合か？」

とシュウは直ぐに鉄屑から戦闘機に目を向けそう呟いてしまった

～ムウ・ラ・フラガＳＩＤＥ～

俺と嬢ちゃんはグーンとゾノを出撃させた　潜水艦を探していた。

だが直ぐ近くで大きな爆発音が聞こえた後黒煙が上がったので確認しに行った。

「オイオイ何だよこりゃ？」と言ったが潜水艦の惨状を見れば言いたくも成るだろう

砂漠で会ったディンを元にしているようなＭＳが潜水艦だった物の近くに飛んでいたが見るからにに無傷で落としたのだろう。どうやら異常に強いらしいが、此処で敵に回られたら厄介でしかない。

先手必勝と言う事で落そうとアグニを放った距離が遠かった為敵機には掠らずもせず近くを通り過ぎていた。そして敵機も此方の存在に漸く気付いたのかモノアイを此方に向けていた

（クソッ！当たらなかったか）

とムウは敵機に攻撃を外したことに対して舌打ちし直ぐに

「嬢ちゃん、作戦変更だ！あの機体を落とすぞ！」と呼びかけ

「判った！」という返事が返ってきた。

（さて今まで本気で相手は戦ってないようだが俺の力が何処まで通用するものかね？）

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「やれやれ道を遮る敵を潰してやったのに何で俺を狙うかねぇ？」と言ってみた

だが敵である自分に相手がそんな事を答えてくれる筈がない。

「仕方ない、アークエンジェルの方に向かってるグーンも潰しに掛かるか」

とため息を吐きながらグレネードランチャーをしまいストライクとアークエンジェルの居る場所へと向かった。

直ぐに戦闘機も此方を追いかけて来たが、やはり戦闘機では改造したキマイラの速度には追い付いて来れないようだ。

そして早い機体で良かったのかストライクとアークエンジェルは水中の敵に対して未だに戦闘を繰り広げていた。

「やれやれやっぱり手伝いに来て正解だったな」
と呟きながら直ぐにサーモグラフティを起動させグゥンの居る場所にガトリングを撃ち始めた。

如何やらグゥンはストライクに集中した為か空からの攻撃に予想出来なかったのか被弾する機体が多く居た。

そして大半の機体を損傷させたので、そのまま帰ろうとしたら通信が来てしまった…大天使からの様だ。

（さてはて何ようかね？）
と一瞬シュウは何ようか思ったが通信を受けようと思い回線を開いた

「そこのＭＳ援護感謝いたします、だけどこのまま帰す訳にはいきません一度ハンガーに着艦して貰いませんか？」とマリューさんに聞かれたが

「何故？其方に着艦しても俺にメリットが無い……それに苦戦しているから助けてやっただけだ」
と返した

「ではその機体の名前だけでも教えてください」と引き下がらないので

「キマイラだ。これで充分か？」と言ったが

（ビッービッービッー）とロックオンの警戒音がなった。

「そうか、これがアンタ等のする事か、覚悟は良いんだろ？」
と言ってガトリングを肩に掛けながら聞いておいた

「えぇ悪いけど、貴方を此処で落として置かないと敵に回ったら厄介だからね」
と言われ通信を切られた。

「はぁ、昨日の味方は今日の敵ってか？」
と言いながらも後ろには二機の戦闘機水中にはストライクが居る為少々シュウの方が分が悪いのだ

「仕方ない軽く一当りしてから引くか…リミッター解除1分」
と言いすぐさまアークエンジェルに撃っても問題無い場所をガトリングで撃ち込み始めた

「残り３０秒か撤退だな」と呟きジャンク艦に向かって誰も追い付け無い速度でその場を去った

～マリュー・ラミアスＳＩＤＥ～

「ふぅ、落とせ無いとは言え何とか去って行ってくれたわね」とマリューは呟いた

「えぇ、しかしあの機体は何なんでしょうね？」とナタルが聞いてくる

「多分キマイラがあの機体の名称なのでしょうね。しかしあの機体はザフト軍の機体に良く似てたけど何なのかしらね？」と不思議に成っていた

「そういえば被弾状況は？」とマリューが聞いてみたところ

「そ…それが」と言い辛いらしい

「酷い状況なの？」とナタルさんが顔を顰めて深刻なのか聞いてみた。

「いえ、むしろ弾が当っても殆ど意味が無い場所だけ撃たれました」と言われ

「じゃああの機体のパイロットは手加減をしていたの？」と手加減できる力量にマリューは恐ろしさを感じた

（今は敵に回らない事を祈るばかりね）と少しだけ思ってしまった。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「さてとジャンク艦は……っと見つけた」と言ってハンガーに着艦した。

「ただいま」とシュウは言ってみた所

「おかえりなさい隊長」とシラユキが言って笑っていた。

「そういえば俺もう隊長じゃないだからシュウって普通に呼んでくれ」

と軍では無いのでそう言ったのだが

「えぇ！」と言ってシラユキは驚いていた

「何かマズイのか？」とシュウは思わず聞いてみた。

「いっ、いえ判りましたシ・・シュウさん」
とシラユキは此方の名前を言う時少々顔が赤かった。
だがシュウはそんな事が判る事も無く（シラユキ　何で顔赤いんだ？）と思っていた
そうこうしている間にどうやらオーブ領に入ったのか
「そこのジャンク艦、すぐさま転進せよ、それが認められない場合自衛権を使って貴艦を排除する」
と管制塔からの通信でそう言って来たが
「1週間前に着港すると伝えておいたシュウ・K・ライトニングだ。確認して欲しい」と言い
「今確認を取っているエンジンを切ってその場で待機していろ」
と管制塔のオペレーターから言われ
「了解」
と言ってシュウは大人しくジャンク艦のエンジンを切った。
「シュウさん大丈夫なんでしょうか？」とシラユキが不安げに聞いてくる
「攻撃して来たら誰に喧嘩売ってるのか判らせるから大丈夫だよ」
と微笑んで答えた。
「顔は笑っていてもやることが最悪じゃないですか！」とシラユキは怒ってきたが

「貴艦の情報は確かに有った。着港してくれ」
と管制室から言われたのでシュウは再びジャンク艦のエンジンを起動させセドックに入って行った

「ほらな?無事に入れただろ」と言ってシュウはジャンク艦から降りたが

「着いてきてください」と銃を持った何人かのオーブ兵に囲まれた。

「シュウさん……全然無事に入れて無いじゃないですかぁぁぁ!」
とその現状にシラユキは思いっきり叫んだ

どうやらシュウはオーブに着港しても忙しさは残るようだった

ＰＨＡＳＥ１６（後書き）

抹茶「はい、今回はオーブ軍に捕まった所で終了させてもらいます」

シュウ「今回で捕まるの２回目だな…」

抹茶「細かいこと気にしちゃ駄目ですよ」

シュウ「そうか、それより今回他のＳＩＤＥ出したけど如何してなんだ？」

抹茶「常々～ＳＩＤＥ出した方が良いんじゃねぇか？と友人に言われたので使ってみました。」

シュウ「そうか、それでＳＩＤＥはこれ以降も使用するのか？」

抹茶「えぇ、適当にキャラの心情とか出した方が良いと思いまして」

シュウ「そうか」

抹茶「んじゃ後書き閉めますか」

抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ１７（前書き）

抹茶「ＰＨＡＳＥ１７完成！」

シュウ「お疲れさん、さて今回はどんな話に成るんだ？」

抹茶「はい、まずシュウは拉致られた後皆さんも良く知ってる場所に行きます。
そこで有るものを作る手伝いをします。そしてシュウの過去が今回なんと出されます」

シュウ「あぁ忌々しい過去だな。あいつ等のせいで」

抹茶「はーい今ちょっとシュウが危ないモードなんでこのまま本編入りたいと思いまーす」

抹茶・シュウ「では本編をお楽しみ下さい！」

PHASE17

「全くオーブは好きだが苦手な此処に来る事になるとわな」と忌々しげに呟いた

「すいません、しかし貴方の力が必要なのです」とオーブ兵は申し訳無さそうにしていた

そして車は一つの格納庫に入り

「すいません、此処で降りてください」
と言われたのでシュウとシラユキは指示に従って降りた。

そして一人の人物が此方に向かって歩いてきていたがシュウはその人物を睨み付けていた

「久々だなエリカさん、俺としてはアンタとは二度と会いたくなかったんだけどな」

「えぇ本当久しぶりねシュウ君　一応話だけでも聞いてくれる?」

「一応話を聞こう……って言うかもう知ってるんだけどな」と判りきった事を言った

「どうせM1アストレイの事だろ?せいぜい俺の能力を買ってモルゲンレーテに尽くしてほしいとかだろ」

「なっ!?何で判ったの」とエリカはシュウがその事を知っている事に少々焦っていた

「ハッキングすれば調べやすい事だ。あんたら隠す気あんの？」と聞いといた

「えぇ、だから貴方の力を借りたいの」と言ってきたが

「正直言ってイヤだね」とハッキリ言っといた

「理由を聞いても？」と聞いてくる

「理由？判って無いなら教えてやるよ。まずXシリーズ・アークエンジェルおまけにM1アストレイ…自由の国とは、良く言ったもんだな。確か侵略しない・侵略を許さない・他国の争いに介入しないだっけ？それを堂々と破るようなものだもんな。それにxシリーズやアークエンジェルはウズミのせいじゃなくても、最高責任者としては許されない事だ。そしてヘリオポリスもオーブの物って考える所が気に食わない」とシュウは喋ってる最中ずっと苛立ちを隠せなかった。

「そう…だったら何をしたら考えてくれるの？」と聞いてきた

「判ってるじゃないかM1をこっちに一機回せ、その代わりOS作りはやってやる」と言っといた

「正直M1は厳しいけど動かせないMSを動かせる様に成るんだから納得するしかないわね」
とエリカはため息をついてそう言った

「んじゃ案内してくれ、本来ならオーブで心身休めれたのに無理やり移動させられてこっちも気が立ってんだよ」とシュウも今回の事

には苛立ちを隠す気にすら成らなかった

「判ったわ。着いて来なさい」
とエリカは言いシュウとシラユキはそれに従うように大人しく着いていった

「アサギ・マユラ・ジュリ！」とエリカがインカム越しに言った

「はーい」「その人誰ですかぁ？」と二人のパイロットが答えたが

「さっさとＭＳを動かしてくれ」とシュウは頼んだ

「りょーかいしましたー」
と言ってパイロットは機体を動かしているようだったがかなり遅かった

「これじゃ連合のスカイグラスパーの方が断然マシだな」
とシュウはＭ１のＯＳの悪さに隠す気もなくため息を吐いた

「そうですね、このままじゃ戦場出ても即撃破されて死にますね」
とシラユキが同じく同意するようにそう言った

「ひっどーい」「人の苦労も知らないで」と言って来たが

「あぁ、そっちの苦労なんて知りたく無いね。自分達だけ安全な所で見ておいて……苦労？笑わせる」
とシュウは今まで見せた事のない冷たい表情で言い放った

「とっととＯＳを見せてくれ有る程度基礎を作り直して帰るから」
そう言って目の前に表示されたＯＳを確認しながらキーボードを打

っていく。

そしてシュウは何かを思い出したように突如キーボートを打つのを止めて

「シラユキ先にオーブの街に入っててても良いぞ？」と言ってみたが

「いえいえ、大丈夫ですよ。私はシュウさんを待ってますから」と返してきたので

「そうか、悪いな。…直ぐ済ませる」と言って再びＯＳの方に集中した。

～１０時間後～

「よっしゃ、完成だ」と言ってシュウは疲れから背伸びをした。

「どんな感じに仕上げたの？」とＯＳを横から眺めそうエリカが聞いてきた。

「新しい量子プルーチンを構築して、シナプス融合の代謝速度を４０％向上、更に一般的なナチュラルの神経接続に適合するようにイオンポンプの分子構造を書き換えといた。まぁ、言うよりやった方が早い」

と言ってシュウは席を離れて帰ろうとしたが

「やっぱりモルゲンレーテで働かないの？」とエリカは再び聞いてきた

「ふざけるな…お前らがやった事を俺は忘れない。もう一度言ったら今度はお前等のモルゲンレーテを潰す」そう怒気を完全に含ませ

エリカを睨みつけながらそう言っておいた

「じゃあ墓参りにでもに会いに行くの？」

「会いには、行かねぇよ。もう悲しめないんだからな。それに俺はあんた等はどんな事が有っても絶対に認めない」そう言ってシュウはモルゲンレーテを去っていった

～エリカＳＩＤＥ～

「私とした事が最悪ね」と呟いてしまった

そう彼の両親はモルゲンレーテで働いていた。

でも彼は仕事だからしょうがないと何時も我慢していた。

でもＭＳ開発時に死んでしまった。

そう原因は過労死

モルゲンレーテの人間はライトニング家の両親の技術の高さに感嘆し同時に期待していたのだが逆にその豊富な技術を持って居る事に恨みを覚えた人間が仕事を押し付けていた人物も少なからず存在していた

そして働きすぎで病に掛かり病死していった。

当然ライトニング家を良く思っていた人達は泣いていたが、逆に一人残ったシュウ君は子供とはいえ私は恐ろしかった。皆泣いてる中シュウ君だけモルゲンレーテの人達を殺すような目付きで睨みつけていた事を思い出す

「絶対に復讐してやる」
そういう目付きだった覚えが有る。今は過去の事を悔やみながらも立ち直ってるのか

でも「私達に対する恨みは変わらないんでしょうね」そう呟いた
～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

～ジャンク艦～
「クソッ！苛々するな、此処の連中は俺を利用して、また親父とお袋の二の舞にするのかよ！」
とやり場の無い怒りを叫んだ

「シュウさん苛立たないで下さい。落ち着いて」と言ってシラユキが落ち着かせてくるが

「怨みたくても怨めないんだ！親父とお袋の育った地を壊したくないって気持ちも混ぜ合わさってこの怒りを何処にぶつければいいか……判んないんだ！」と言いながらシュウは遂に泣き崩れ始めた

「シュウさん、大丈夫です。大丈夫ですから…私が着いていますから」
とシラユキはそう言った後自分を抱き寄せてくれた

そして思いっ切りシュウは泣いた。慰めてくれる人が今まで居なかったから…。

（ようやく安心できる人が傍に居てくれる）とシュウは思った。

そして泣いた事を恥かしがりながらもシラユキには感謝したが

「シュウさんの泣き顔というレアな物が見れたので役得です」と笑っていた。

正直シュウは（嫌がらせですか？）と聞きたくなったが此れも彼女なりの冗談だろう

～翌朝～

「しかし良く泣いたなぁ」とシュウは昨日の事を思い出していた。

しかしシラユキは昨日の事を気にしなかった様に

「おはようございますシュウさん」と普通に挨拶してきた。

「あぁお早う、んじゃ今回はオーブ市内回ろうか」と言ってみた

「はいっ楽しみましょうね」そして二人でオーブ市内に出かけていった

～3時間後～

「大体楽しんだな」「えぇ、そうですね。久々ですこんな日々」と喋っていたら

だが急に街が騒がしく成って来た「何でこんなに街が騒がしいんだ」

「オイ！あんた等もシェルターに逃げようぜ！」とシュウとそう歳違わないような青年がが言ってきた

「何で皆さん逃げ回ってるんですか？」とシラユキ理由もわからず

青年に聞いたが

「連合の船が来ているんだよ！俺は巻き込まれたくないから先に行くわ！」と言いながら避難していた

「シュウさん連合の船といったら・・・」

「あぁ間違いなくアークエンジェルだな。災厄を持ってきやがって！」と言いながら現状を眺めておく

そしてアークエンジェルはオーブ領海内に入りエンジンを切っていた

「やれやれ、このままじゃ絡まれるから一旦ジャンク艦に戻るか」と呟きながら、シュウは来た道を引き返そうと踵を返していた。

「シュウさんこれから如何します？」

「そうだな、アークエンジェルと絡むと良い事が無い、エンジェルの完成を急ごうか」

そう言ってシュウとシラユキはオーブの観光を辞めジャンク艦へと戻っていった

～ジャンク艦　ハンガー～

「さてガンソード二本と盾がコイツの基本装備なんだが如何する」とシラユキに聞いた

「如何するとは？」

「んー他にも武器が付けられるんだけどバランス型か格闘型か射撃型の３つがあるんだ」

とシュウはエンジェルをどれに特化させるか三種類の説明をして聞いておいた

バランス型：その名の通り射撃と格闘どっちも行えるオールマイティなタイプだ

格闘型：ガンソードに付いてる射撃武器以外全て格闘しか出来ないようにカスタム　機動性と格闘性能を上げる

射撃型：機体の武器が着けれる場所に射撃武器しか着けないで格闘はせずに中・遠距離専用だ　レーダーと装甲の機能を上げる

「どれにする？」

「ではバランス型でお願いします」とシラユキは頼んできた

「あぁ判った。一応パーツが余れば状況次第で武器の換装が出来るかもな」
と他の二つの可能性も有ると教えといた

そして「今のところ俺たちは可能な限りアークエンジェルには関らないつもりで居るからな」と教えといた

「今の所ですか？」と不思議に思ったらしい

「あぁ今からアラスカ基地に向かうらしいがきっとお前も驚く展開で帰ってくるぞ」
とシュウは笑いながらシラユキに教えといた

「シュウさんが驚くって言うと毎回怖い気がするんですが」と言われ

「気のせいだ」と言っといた。

「さてとアークエンジェルが出たら俺らも出るからな」と教えといた

「何をするんですか？」と任務を聞いてこようとして

「人命救助」とだけ答えといた。

シラユキが不思議そうな顔をしていたが

（絶対にトール君とニコル君は救ってみせる！）と固い意志を持っていたシュウだった。

そしてエンジェルを完成させシュウは「少し出かけてくるわ」とシラユキに告げジャンク艦を後にした。

～墓地～

「ただいま、親父　お袋俺帰ってきたよ」と目の前の2つの墓にそう呟いた

「結局あんた達は何一つ言わずに俺を置いていったんだよな……でもさ俺二人を怨んじゃいないよ」

「怨むのは親父とお袋を殺したあいつ等だけだ。…だって俺はあんた達の遺言で「怨まないであげてね」って言われたけどやっぱりモルゲンレーテの連中だけは、許せなかった」

「その後は、やっぱりあんた達の死を認められなくて宇宙に上がっちまったよ。でもあんた達の血をやっぱり引き継いでるのかな？電

子系工業系得意なんだよね。でも今更こんなこと言っても何も起きないや」と言って持ってきた花束を両親の墓の前に静かに置いておいた

「そうそう俺信用できる人を見つけれたよ、今度来る時は連れてくるよ」
と言って踵を返してその場を離れようとしたが…。

「……何でアンタ等が此処に居るんだよ」と目の前の二人に言い放った。

そうエリカ・シモンズとウズミ・ナラ・アスハの二人だ

「すまなかった」と一言だけ言ってきた

「ハッ！独りに成った俺に対して情けか？……ふざけるな！あんた等は結果さえ出ればその間の工程はどうでも良いみたいな考えには苛立ちを隠せねぇんだよ！」と言ってシュウは怒り始めた

「違う！違うの！」とエリカが言ってきたが

「違う？何が違うんだ？結果的にはモルゲンレーテの連中に俺の両親を殺されたのには違いない。今はＭ１はアスハ家が完成すらされたが元の図は両親が書いた。だがそれに対する感謝も親を殺した事に対する謝罪も一つも来なかった。それとも『今までの努力で死んでいって悲しむ人は居ないでしょう』とでも言うつもりか？もう懲り懲りしてんだよ。そして昨日は俺をモルゲンレーテに誘ったのは俺を両親みたいに利用するだけ利用して殺す気なんだろうが！そうだろ？答えろよウズミ・ナラ・アスハ！」
とシュウは二人に対して塞ぎ切れない怒りが爆発した。

「「……」」

「やっぱりあんた等は何も答えられないんだな、正直言ってガッカリだよ。この国の命運が尽きるのも案外速いかもな」
と言い放ってジャンク艦へと戻っていった

～帰路　道中～
「居るんだろシラユキ？」と細い道でそう呟いた

「えぇ、判りましたか？」と聞いてきたので

「あぁ、足音が聞こえたしな」と言い返した

「他人に対して怒りをぶつける俺に幻滅したかい？」とシラユキに対してシュウは、そう聞いた

「いえ、誰だって怒りたい時だって有りますよ。…でも幾らなんでも悲しすぎますよ。シュウさんだけ残されて独りぼっちに成り続けるなんて」
とシラユキは嘗ての自分と姿を重ねたのか泣き出しそうになっていた

「大丈夫、大丈夫なんだ。俺は確かに大変だったかも知れない……でもシラユキと会うって言う最高の幸せが来たんだ。充分満足さ」
と言ってシラユキを抱きしめながら笑った

（全く女神様のくれる幸せって充分良い物だな）と思った

「そうですか？困った時は私にも相談してくださいよ？信頼できる人が出来たってさっきお墓の前で言ってたじゃないですか。」と泣

き止んで笑っていた

「判った、ちゃんと相談するさ。今回は泣かしちまったから何か一つするぞ」

「そうですかじゃあ罰としてデザートを奢って下さい」と言ってきた

「あぁ良いぞ、好きなだけ食って良いからな」

と言ったが後にこの言葉を言ったシュウは真面目に悔やんでしまった

～夜　食後～

「女性はデザートに成ると幾らでも入るんだな……」

そう言ってシュウは軽くなった財布を眺めてしまった。

PHASE17（後書き）

抹茶「はい意外な過去お疲れ様でした」

シュウ「あぁ、しかしモルゲンレーテの連中にはウンザリ来るな」

抹茶「さて取り敢えずシュウの怒りの対象は何処まで入るんですか？」

シュウ「ん？まずモルゲンレーテの連中とウズミだけ許せないな」

抹茶「ではオーブの街は好きなのですね？」

シュウ「あぁ仮にも俺と両親の育った地だ怨める筈が無い」

抹茶「そうですか、復讐が全体まで言ったらシン君みたいでパクリじゃんって感じがするしね」

シュウ「それ次の作品のキャラなんだがまぁ良いか」

抹茶「小さい事を気にしないで下さい、さて今回もご感想を下さった、みつきさん有難う御座います」

シュウ「ありがたいな、最近主は一応書いてはいるんだが「ネタをください！」って叫び出すほど重傷なんだ」

抹茶「酷いですね、事実ですけどそんな事言わないで下さい」

シュウ「良いじゃねぇかこういう主の生存報告しないとマズイし」

抹茶「ほぼ毎日に近い位投稿してるのに生存報告いらないですよ」

シュウ「そうか、んじゃ後書きを閉めるか」

シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）は生き残れるのか?次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ１８（前書き）

抹茶「さて今回は１８と１９同時投稿します」

シュウ「ほぅ、何でそうしたんだ？」

抹茶「いや、今回は読者をお待たせしたのも有るけど、今回はオーブ後の戦いに成るので、歯切れ良くする為にＸナンバー戦は終了させたいなと思って」

シュウ「なるほど、んじゃ今回はネタが無いからそのまま本編だな」

抹茶・シュウ「では本編をお楽しみください」

PHASE18

「そろそろか」とシュウは呟やいた
そしてシュウの予想通り数分後アークエンジェルがオーブから出航された。

「取り合えずだ。オーブでMSなんか出したら後が面倒だから、俺らもジャンク艦で戦場近くまで行くか」そう言ってジャンク艦の機能のオートパイロットを起動させた

「でもシュウさん着いて行ったらアークエンジェルにばれるのでは？」とシラユキに言われたが

「ばれても構わないさ、ばれたらばれたで艦から目視出来ない程度まで離れるだけさ。それに戦場に行くなら速めに到着したいしな」と言っといて起動させたオートパイロットの設定を終えた

「さて俺らも準備をするか」「了解しました」と言って二人でハンガーへと向かった

「シュウさん今回はどうなさるんですか？」と作戦内容を聞いてきた

「ん？そういえば説明してなかったな、まず二つの機体を見て欲しい」
と言って二枚の機体が書かれてる資料をシラユキに投げ渡した

「まず黒いMSはブリッツだ、この機体はソードストライクによって破壊されるんだが何か救う手立てが有るかな？」と一応シュウは

シラユキにも案を聞いてみた。

「この前作ったフェイク弾をブリッツに何発か食らわせて体勢を崩す事により当る所が悪い所にしないのが重要だと思いますが」

「やっぱり結局はそれしか思いつかないんだよな……もう一つの戦闘機だが、これは戦闘が初めての初心者が乗っててイージスの盾が投げられて破壊されるんだ」

「これはもイージスの盾を何かで行く方向を変更させないと死んでしまいますね」

「うーん、でも都合の良い武器って言っても前に強行型ジンから手に入ったスナイパーライフルが有るんだが、俺は生憎射撃が得意じゃないんだ。」とシュウはそう言い切った

「じゃあ私のエンジェルで機体を隠しながら盾を微調整させましょうか？」と聞いてきたので

「あぁ、頼む。こっちはやられた二人を直ぐに回収する」と言ったが

「隊長流石に救う二人も戦場で傷を負ってる可能性が大きいんで今回キマイラに緊急医療セットを付けて行きませんか？」とシラユキが提案してきた

「あぁ判った。一応エンジェルにも医薬品を積んでおいてくれ」

と言ってシュウはシラユキの案を採用し機体の準備に移った

～機体武器～

キマイラ
グレネードランチャー
腰の左ホルダー　各グレネードの弾丸
腰の右ホルダー　７６ｍｍ重突撃銃×２
腰　緊急医療セット
右足　二連装ハンドガン　右腕　ビームソードシールド　左腕　収納型射出式アーマーシュナイダー

エンジェル
左右腰　ガンソード×２
ビームサーベル×１　右手スナイパーライフル×１　左腕　耐ビーム・コーティング・シールド
緊急医療キット

「んじゃ行くぞシラユキ準備良いか？」と聞いて

「はいっ！何時でも行けます」と言いかえしてきたので

「じゃあ先に出るから少し後から来てくれ」
そう言ってシュウはキマイラで戦闘区域へと飛び出して行った

作戦
・ニコル・アマルフィとトール・ケーニヒの救出

ストライクがブリッツに対し斬り付けを行う際にフェイク弾を用いブリッツの体勢を崩させコックピット以外の場所を斬りつけさせる。トール・ケーニヒの場合別の小島群に潜伏させたエンジェルの狙撃によってイージスの盾の方向をずらしパイロットを生存させる。また爆破しそうになった場合はコックピットの部分を切り取る

「取り敢えず一度中立と言う立場で戦場に立つべきだな」と言いながら中立軍のマークに変更した。

～キラ・ヤマトＳＩＤＥ～

僕達は出てきたＸシリーズ４機と戦闘を行っていた。

ストライクのランチャーではＸナンバーには当らないようだ。取り敢えずアグニのＥＮ供給ケーブルを抜いて少佐のスカイグラスパーからエールストライクパックを受け取って戦うしかないだろう

だが不意にレーダーが他の機体を捉えたようだ

「この区域に何かが近づいてくる？」とキラは近づいた機体を確認した。

どうやら中立軍のマークを発してる様だが機体は…キマイラ！？

「何故キマイラが此処に？だが中立軍と言う事は此処に攻撃を仕掛けてくる事は無いのかな？」

と呟きながらエールストライクのパックをつけて再び戦闘を行った。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「おーおーやってるねぇ」とシュウは戦場を見てそう呟いた。

「もうデュエルとバスターはグゥルが破壊されて海に落ちたようだな」

と冷静に状況判断を開始した。

「どうやら残ったのはイージスとブリッツだけ、後は小島に入れば原作通りだな」

と言ってグレネードランチャーに弾を込め始めた。今回使うのはフェイク弾そして徹甲留弾がメインだ

そして戦場を眺めていたら二機は巧みに連携を取っていた。イージスが射撃で牽制しブリッツで格闘戦を仕掛ける。普通だったら機体にダメージを与えれそうな戦法だがストライクは、咄嗟にシールドを構えて攻撃を防いでいた。そしてブリッツがグレイプニールを放ったがストライクは咄嗟に判断しサーベルで切り捨てた。間髪入れずにブリッツが右手のトリケロスを構えて放とうとするが、スカイグラスパーが突っ込みブリッツの右腕にミサイルを撃ち放った。そしてブリッツの方はスカイグラスパーに気を取られ、ストライクが一気に敵の懐に入り込みサーベルで右腕を斬りおとした。

「戦場で一点にだけ集中しすぎると、ああなるから怖いんだよな」と全体に注意を回してないブリッツのパイロットに対してそう呟いた

そしてそのままブリッツをグゥルから蹴落とした。だがパイロットの腕が上手いのか海面すれすれでブリッツは体勢を立て直した。

「しっかしブリッツって右腕落されると武装が一気に減るんだよなぁ。これじゃ一旦撤退した方が良いんだが原作じゃそのままストライクに攻撃しかけて大破だから辛いんだよな」

そしてブリッツから目を離しイージスとストライクに目を向けるとグゥルが撃ち落されて小さな島に着地していた。このまま撤退した方が良いのかも知れないのだがイージスは、ジャンプしアークエンジェルに攻撃を仕掛けていた。そしてもう一機のスカイグラスパーがストライクのＥＮを気にしたのかソードストライカーを射出した。

「おっとそろそろ気をつけないとな」
と呟きイージスの背中に回っていた。

だが二機はこっちの事を無害と判断したのだろうか、何の反応も示してはくれなかった。

そしてイージスの方は余りにもアークエンジェルの通過が認められないのか攻撃を繰り返していたが、遂にアークエンジェルからミサイルとバルカンの直撃を受けてしまった。

そして今までイージスが無視していたストライクがイージスに斬りかかるが咄嗟にイージスは後ろに下がり斬られたのはライフルだけで済んでいた。

だがストライクの方が何か不味い事を言ったのかイージスは先程戦艦の攻撃が直撃して危険な状況にも関わらずビームサーベルを抜いてストライクに斬りかかったが全く機体にかする事すら出来ていなかった。そして怒り任せに攻撃したツケだろうか遂にイージスのＰＳ装甲が落ちた。

「そろそろか」とシュウは言ってブリッツの出現予想地点にグレネードランチャーの銃口を向け始めた。

そして＜アスラン下がって！＞
とブリッツのパイロットの叫びとともにブリッツはランサーダートを一本持ってストライクへと突撃して行って

そしてストライクはシュートゲーベルが弧を描いてブリッツに切りかかろうとするが

「さて原作ブレイクだ」と言ってシュウはブリッツの背中に3発のフェイク弾を背中に撃ち込んだ。

そしてブリッツはフェイク弾の衝撃によって前に倒れようとする所をストライクによって斬られた。しかし切られた場所はコックピットではなくコックピットより少し上の頭部と胴体の間を切り裂いて爆破した。

「これで一つ目の仕事は終った」と呟いた。

そして今頃に成ってバスターとデュエルが島に上陸したが今更後の祭りでしかなかった。

一応デュエルとバスターがブリッツが破壊されたのに直ぐ気付きストライクに対して攻撃を仕掛けようととしたがアークエンジェルによる援護射撃でストライクにはマトモに近づく事すら出来ていなかった。

「仲間が殺されたのに近づけられないで仇を討てれないか……案外辛いものだな」

とシュウは仲間を殺されザフト軍に対してそう言った。

だが戦場に出たからには、死なない人間等存在しないのだ。つまり言葉は悪いがブリッツのパイロットは友人を助けようとストライクに対して特攻を行ったが、それもただの蛮行でしか無かったのだ。

そして、こちらを一度だけ見たストライクは、退艦命令を受けたのだろう直ぐにアークエンジェルへと戻って行った。そしてストライクを回収したアークエンジェルは最高速度で戦場を後にした。そして残ったXシリーズも空を飛べるMSがイージスしか居ない上その

イージスもＥＮ切れで追撃が出来ないので撤退していった。そして戦場には、ブリッツの残骸とキマイラそして此方に近づいて来るエンジェルしか残されていなかった。

～ニコル・アマルフィＳＩＤＥ～

アスランのイージスを庇って僕のブリッツは大破してしまった。

僕は死ぬんだろうか？体中が痛くてもう何も出来ない。

だが不意に何か大きな物が着地する音が聞こえた。何だろうか？

そして足音が聞こえてきた。誰かが機体に近づいてくる。そして機体のコックピットを覗いてきた様だ

「オイ！少年生きてるか？今すぐ助けるから待ってろよ」

そう男性の声が聞こえてきた。痛みに耐えながらも声が聞こえた方に顔を向け目を少しだけ開いた。

黒髪の男性が僕を救う為に必死にコックピットをこじ開けて僕を救出してくれる。

「直ぐに応急処置するからそれまで頼むから死なないでくれよ」と呟き声が聞こえてきた

（この人は戦争とは関係ない優しい人なのかな？）と思いつつも意識を失った。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「なっ、オイ大丈夫か！」

と助けた少年に聞いたが何も返ってこないが苦しそうな呼吸だけが

聞こえてくる。

「どうやら気が失ったようだが安全じゃ無いんだろうな」
と呟きキマイラから降ろしていた医療キットコンテナへと運び入れた。

「シュウさん直ぐ此処に乗せてください」
そう言ってベットに乗せて生命維持装置と必要最低限の傷に対しての治療を行い、一度機体と医療コンテナをジャンク艦に戻し医務室へと運び入れ再びオーブへと向かった。

「頼むから生きてくれよ。死んじまったら残されたお前の友人が悲しむだろうが」
と言ってシュウとシラユキは少年の容態を見続けながらオーブの病院へと搬送した。

どうやら死に掛けらしいが緊急措置が役立ったのか一命は取り留めたそうだ。

「良かったですねシュウさん」と安心してこっちに言ってきた。

「あぁ、だがもう一つ仕事がある」
と言って再びジャンク艦に搭乗し、最高速度でアークエンジェルの居る場所へと向かった。

次はトール・ケーニヒを救う為に

PHASE18（後書き）

PHASE19へどうぞ

ＰＨＡＳＥ１９（前書き）

では本編をお楽しみください

PHASE19

「シュウさん、幾らジャンク艦の最高速度を出しても、間に合わないかもしれないです！」
とシラユキは考えてきた事を言ってきた

「うん、確かにこのまま艦の速度で行っても救いたい人物が救えないかも知れないな」

「はい、此処は私達のＭＳを出してもう一気に先行してジャンク艦は当初の予定地点に待機させる他ありません」
と話してきた

「うん、シラユキの言ってる事が正しいな。じゃあキマイラとエンジェルは先程の武装のまま戦闘しに行こう」と言っといた

「はい、直ぐに行きましょう」と言って二人は自分の専用機に乗り込んだ。
～機体武器（再度確認用）～
キマイラ
グレネードランチャー
腰の左ホルダー　各グレネードの弾丸
腰の右ホルダー　７６ｍｍ重突撃銃×２
腰　緊急医療セット
右足　二連装ハンドガン　右腕　ビームソードシールド　左腕　収納型射出式アーマーシュナイダー

エンジェル
左右腰　ガンソード×２

ビームサーベル×1　右手スナイパーライフル×1　左腕　耐ビーム・コーティング・シールド
緊急医療キット

「行くぞ、シラユキ　今回は、戦闘機のパイロットだから当たり所が悪かったらフェイク弾ですらダメージになるからな」と言いながら先にキマイラがジャンク艦から飛んで行った

「はい、判りました。予定では群島の見付かり辛い場所にて狙撃ですね」
とシラユキはもう一度作戦内容を聞いてきた

「あぁ、俺は状況によって特殊弾を使い分けて撃ち込んでいくから、シラユキはフェイク弾でも何でも使って良いから盾が戦闘機のコックピットに当らないよう頑張ってくれ」
とシラユキの能力を見て頼み込んだ

「了解しました。その任務果たして見せます！」
と言ってエンジェルが身を隠す為に先行して行った

「あれだけやる気があれば成功するな。さて俺も行くか」
と言って進行速度を上げていった。

そしてシュウも少々時間が掛かったが戦場に到着した。だがどうやらアークエンジェルが不利な状況だ。

「親しい友人が殺されたたのが原動力か…確かに怒りが原動力の時は強いがその分足元が疎かに成るな」と上空から戦場を眺めていた

如何やら今はストライクがまたグゥルに乗ったデュエルを海中に落

したようだ。だが何もせず落されるわけにも行かないのだろうデュエルが海に落ちながらライフルを連射していた。そして連射したビームはストライクのライフルに直撃しストライクは直ぐにライフルを手放すがその直後ビームライフルは爆散してしまった。そしてダメージを防ぐ為に爆風をシールドで防いだがその隙をイージスが見逃す訳も無く盾をかざして体当りしストライクを吹っ飛ばした。

そして先程からバスターがアークエンジェルに攻撃を仕掛け続けており遂には、その銃口は艦橋を狙って撃とうとしていたが、スカイグラスパーが攻撃を仕掛けグゥルを破壊した。咄嗟にバスターは壊れかけているグゥルを踏み台にして飛び上がりスカイグラスパーにその銃口を向けた。そして両者は撃ち合いすれ違って行くバスターは二丁繋げた対装甲散弾砲を放ちスカイグラスパーはアグニを撃った。そしてバスターは右腕を破壊されスカイグラスパーは左翼に散弾を受けて火を出したが大破する事無く波打ち際に着水した。

そしてアークエンジェルは主砲をバスターに向けるが、既にパイロットはバスターのコックピットのハッチを開けて手を挙げて投降していた。

それを見ていたシュウは「動けないんだから、それが正しい判断だな」と言い切っていた

そしてシュウは再びイージスとストライクの戦闘に目を向けたが二機はなおも戦闘を続けていた。サーベルで斬り合い互いにぶつかり合っては、再び離れそしてまた斬りかかる。

「しかし完璧にイージスのパイロットは我を忘れてるな」

と先程からイージスの動きが可笑しいのでシュウはそう言っといた

そう怒って戦いに勝てる何て甘い事は存在しない。故にイージスのパイロットが今の状態で幾ら打ち合ってもストライクにダメージを与えられないだろう。何故ならイージスがストライクにサーベルで斬りかかっても右手を素手ではねのけられ、シールドで突き飛ばされる。

正直に言ってしまえば今のストライクのパイロットとイージスのパイロットでは技量の差が違いすぎるだろう

「差が大きいのは当然だな……今までアークエンジェルのクルー達は厳しい戦いを何度も切り抜けて来たんだ。イージスのパイロットにも戦闘経験が幾ら有ろうが、お互いの潜り抜けてきた戦場を見たらどっちがより強くなるかイヤでも判る」

とシュウは怒り心頭してるイージスのパイロットに対してそう言い放った。

そしてストライクがサーベルで斬りかかって行くが、急にイージスは動きを変え、それを見切り後方に下がり飛び上がった

そしてそのままイージスは空中で変形しスキュラをストライクに向けて放った。ストライクは急な攻撃に虚を突かれギリギリの所でスキュラを避ける事は出来たが大きく体勢を崩していた。

そしてその隙を見逃す訳が無くイージスはストライクに攻撃を仕掛けようとしたが、もう一機のスカイグラスパーが飛んできた

「慢心ってのは怖いな…時に自分の命すら危険に晒すんだから」

と呟き、シラユキに何時でも撃てる様にコールを掛けておき自分はグレネードランチャーを構えた。

そしてイージスは突っ込んで来たスカイグラスパーに対し持っているシールドを投げつけていた。そう、まるで邪魔をして来た虫を追い払うように……

だがシュウはイージスが盾を投げた瞬間に咄嗟にフェイク弾をスカイグラスパーの支障の無い場所に打ち込み体勢を大きく崩した後、他の孤島に潜伏していたエンジェルがスナイパーライフルでシールドを撃ちシールドの進行方向を多少変更した。

そしてシールドはコックピット以外の場所をえぐり爆発を起こした。だがコックピットは、無事残っており森に突っ込んだがパイロットは、森に突っ込んだ代償で重傷を負っていた。

だが、そのコックピットが無事な事はキラには爆発が邪魔をして見えてすらいなかった。

「ふぅ、何とか生き残ってくれたが、雨は体力を奪うからな。早めに戦闘が終って欲しいものだ」

とシュウは残ったコックピットを見つめそう呟いた

そして再びシュウは二機に目を向けたが、既に人の戦いでは無かった。既に二機のＭＳは、敵機に対し確実な殺意しかなく機体がボロボロでも構わずに戦闘を続けていた。まるでどっちかが死ぬまで終らない獣の戦いのようだ。

そして遂にイージスがＭＡ形態に変形してストライクに組み付きスキュラを放とうとしていたがＥＮ切れを起こしたのかスキュラは放たれずイージスのＰＳ装甲が落ちた。

だが暫く見守っているとイージスから爆発が起き二機は吹き飛んだ。

「やはり全て原作どおりか…」と何も出来ない無力感を改めて実感したシュウだった。

（だけど何時までも物思いに耽ってはマズイな）とシュウは思った。

だが急に索敵センサーにＭＳの反応が起こった。

「こんな時に敵ＭＳか…ディンが３機か、しょうがないシラユキに任せて俺は負傷したスカイグラスパーのパイロットを救出だな。アスランとキラを助けて原作が可笑しくなったらマズイし」

そう言ってシラユキに通信をした。

「シュウさんどうします？」と先程のディン３機の対処を聞いているのだろう

「今回はエンジェルの性能をしっかり確認しておきたいなら戦ってきても良いぞ、ガンソードは近・中距離武器だから問題無いだろう」と返しといた

「判りました。私が対処しときますのでシュウさんは、パイロットさんを救出してくださいね」

そう言って通信は切られエンジェルはディンの居る方向に飛んでいった。

～シラユキ　ＳＩＤＥ～

「さてエンジェル私達も頑張ろうか」と言って機体をディンの前まで飛んで行った。

さすがに目の前の３機は中立軍で何処でも見たこと無いＭＳを見て

対処に困っていたようだが、一人が馬鹿にしたのか武器を構えてこっちに突っ込んで来た。

「シュウさんが作ってくれたＭＳを馬鹿にする事は私が許しません！」

と言ってシラユキは腰に掛けていたガンソードを一本抜き始めた。

だが射撃メインのディンは少し離れた距離から７６ｍｍ突撃銃を撃ち放ってくるが、エンジェルの機動性の前では掠りもしなかった。

そして一気に距離を詰めガンソードでコックピットに向かって薙ぎ払っていた

だが実体剣だから其処まで通用しないと思うのは甘い事なのだ。エンジェルがガンソードにＥＮを送り込んだ瞬間剣の部分が急に超伝導し始めた。そうして剣は細かくな振動を起こし始めディンの装甲を易々と切り裂き胴体と足は別れ爆発が起きていた

「……シュウさんも結構えげつない物作りますね」と試しに使ったシラユキですら軽く苦笑いしていた。

そして残った二機のディンは咄嗟に危険性を理解したのか二手に別れエンジェルに攻撃し始めた。だがシラユキは更に上空へと上昇し二本目のガンソードを抜きソードに付属してるリボルバー式の銃を使い攻撃をした。

一機は簡単に避けるが、もう一機は避ける必要性すら無いと思ったのか腕をクロスさせ防御に入ったが次の瞬間撃ち込んだ銃弾は腕を貫き頭部を破壊した。

そして目の前が見えないディンに止めとばかりにガンソードで切り

裂いた。

「避けないと駄目ですよ。全て貫通弾ですからね」と落ちていくディンに対し呟きその後爆発が起きた。

もう一機は勝てないと判断したのか逃げ出したが

「逃がすと思ったんですか？」

と言って逃げれないようにディンの背中の羽を斬りおとした。そしてディンは空を飛ぶ事が出来ずに地面へと墜落していく

だが羽を落した位では沈まないのは当然なのか、ディンは逃げるのを諦め再び７６ｍｍ突撃銃を撃ち放ってくるが

「そんな攻撃当たりません！」と言って何事も無かったように簡単に避けた。

そしてエンジェルは落ちていくディンが地面に着地しかがんだ所を狙い縦に真っ二つに切り裂いた。

「しかし、はじめて使う武装・機体なのにまるで手足のように動きますね…さすがシュウさんです。全くあの人は、予想以上のＭＳを作り出してくれますね……此れだったらリミッター解除を使う必要性もありませんね。……成るべくなら使いたくありませんけど」

そう言ってシラユキはキマイラの居る地点に戻った。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

スカイグラスパーのパイロットは何とか必要最低限の治療を済まし、無理に動かさず簡易ベッドで寝かせて一安心していたが如何やらエンジェルが帰ってきたようだ。

「如何だったシラユキ？エンジェルを使った初の戦闘は」と聞いてみた

「結構使いやすいですし、武装もガンソードが有ればそこそこ戦えますね」と返してきた

「あぁ、そりゃガンソードはソイツの固定武装だしな。それに超伝導の剣は中々に驚き物だったろ？」

「えぇ確かに驚きましたよ、しかもエゲツナイ位強かったですし」と言われたので

「そりゃ、エゲツナイ強さにしたかったから色んな事考えてあの結果だ」
と笑って話していたら、何かが近づいてきた。

「シュウさん如何します？」と聞いてきたので

「まだ攻撃はするなよ？……あれはオーブから来た救出艇だな」と言ったら

「そしたら、今回助けた人預けて私達はこっちの任務を続けましょうか」と言われたので

「あぁ、次の戦闘場所は、アラスカだが今はこのエンジェルとキマイラをオーブに確認させるわけにもいかないジャンク艦の中に隠しとこう」
そう言ってキマイラとエンジェルをハンガーに倒した状態で入れ、ジャンク品を上にかぶせた。

そして隠しきれた時に近くに漸く救出艇が近くに着地して来た。

「お前等何故此処に？それにシュウとか言う奴お前ザフト軍じゃ？」
と降りてきたカガリ嬢がそう聞いてきた

「ん？移動中だったんだがさっきまでここ等辺戦闘してたんだな。
あとザフト軍だが面倒だから抜けたよ」と敢えてわざとらしく言った。

「嘘をつくな！さっきまで戦闘していたのに近くに居たお前等が気付か無い筈が無いだろう！」
とカガリ嬢が怒ったので

「あぁ、嘘だけど何か？情報は常に本当の事が入ると思ったら大間違いだよ？」

「なっ！お前は私を舐めているのか！」と言って来たが

「あなた方の仕事はお喋りするんじゃなくて人命救助でしょ、早くしたら如何ですか？」
とシラユキがカガリにそう言っていた

「なっ！お前に指図されなくても今からこっちもやろうと思ってたんだ！」
と言って壊れた二機のＭＳにカガリ嬢は近づいて行った。

そしてカガリは二機を見てストライクの方に近づいて行ったが人が居ない事に気付いたのだろ。こっちに再び戻ってきた。

「おい、お前等キラを知らないか？」と聞いてきた

「ん、キラか？イヤ見ては居ないぞ？」
とシュウは言い返したが、当然此れも嘘だ。

シュウは有る程度トールの治療をし終えた後、次はキラの治療に移りマルキオ導師に預けた。

彼はキラ・ヤマトの存在を知っていたので直ぐに身柄を引き取ってくれた。

（どうせ後でフリーダムでも受け取って戻ってくるだろう）とシュウは考え事をしていたが

「ホントか？嘘じゃないだろうな」とカガリが先程の事を考えそう言ってきた

「嘘をついて利益を得れるんなら幾らでもやってるわ。俺が助けたのは別の人間　ソイツは以前救出した人と一緒の病室にしてくれ」
と言ってジャンク艦の医務室に何人かオーブ兵を入れてトール君を連れて行かせた。

「ご協力感謝する」とキサカが言ってきたが

「救える命を救っただけだあんた達が感謝する理由が何処にも無い」
と言い返した。

「しかし何故、前回助けた人と同じ部屋にするんだ？」とカガリが聞いてきた

「んー何か救った二人が何か気が合いそうだったからかな？」と言っておいた。

「なんだそれは？まぁ良い、そっちが助けた人なんだ。それ位の要望は聞くさ」
と言ってカガリ嬢は助けた二人を一緒の病室にする事を約束してくれた。

「そういえばお前達はこれから如何するんだ？」と最後に救出艇に乗る前にカガリがそう聞いてきた。

「ん？今はブラリブラリと地球の旅を楽しむさ」
と言ってシュウとシラユキはジャンク艦へと歩き出した

そして救出艇は先程助けたイージスのパイロットとトール君を乗せて去っていった。

「さて俺等も準備するか」と言った

「えぇアラスカで戦うんですからかなりの激戦を考えたほうが良いですね」と言ってきたので

「あぁ武器コンテナを用意する。あとアラスカには恐ろしいものが眠ってるから移動中に説明しておく」と言って二人はジャンク艦に乗りアラスカを目指した。

アークエンジェルそしてキラが乗ったフリーダムと会う為に…。

ＰＨＡＳＥ１９（後書き）

シュウ「今回は此処までか」

抹茶「あぁ、そうだな」

シュウ「次はアラスカ戦だな」

抹茶「超激戦なんで、戦闘描写も大変ですよ」

シュウ「手は抜くなよ？」

抹茶「えぇ、でもフリーダム対キマイラ・エンジェルはしないと思います」

シュウ「しないと思うって言葉はやる可能性も有ると言う意味でも居有るんだが？」

抹茶「どうでしょう、希望があれば少しだけ出しますよ？」

シュウ「フリーダムとやりあうと大変そうだが楽しみだ」

抹茶「さて今回みみみさんとＲＧＣ－８０さんご感想有難う御座います」

シュウ「ありがたいな」

抹茶「えぇ、今回はＰＨＡＳＥ１７の悪い所を多く言われたので向上心が出てきます」

シュウ「全く慢心なんかするなよ?」

抹茶「はい、気を付けます。では閉めましょうか」

抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）は生き残れるのか?次回お楽しみに!!」

ＰＨＡＳＥ２０（前書き）

シュウ「今回は時間が掛かったな？」

抹茶「えぇ、少しネタが足りなくて大変でしたね」

シュウ「そうなのか、一瞬作者が寝落ちが多いのかと思っていたが」

抹茶「寝落ちはしてません。と言うか毎日書いてると少しずつネタの消費が激しいんですよ」

シュウ「そうなのか、まぁ今回は少し多めに書いたんだろ？」

抹茶「えぇ何時もは２０００～４０００文字なんですけど今回は７０００文字位書きました」

シュウ「頑張ったな、まぁ本編も気に成って来たから此処で閉めるか」

抹茶・シュウ「それでは本編を楽しんでください！」

PHASE20

～シラユキ　ＳＩＤＥ～

「幾らアラスカで調べたい事が有るからって、連合の兵に紛れ込んでもしたい事ですか！！」

とシラユキは一人ジャンク艦で叫んでいた

「はぁー何で私あんな事言ったんだろ」と項垂れてしまった

～回想～

「うーん、アラスカとザフトの情報が欲しいなぁ」とシュウがポツリと言ったので

「そうですね。情報が無いと安心して戦闘なんて出来ませんからね」

とシュウとシラユキはアラスカ基地の情報の無さに困っていた

「二機で作戦始まってから直ぐに基地に突入しても良いけど、それやって基地内で自分の位置が判らなきゃ無意味だし」

とシュウは未だに諦めきれず情報の手に入れ方を考えていた

「いっその事　シュウさんがアラスカ基地に連合軍入隊志望の兵って事で行ったら良いんじゃないんですか？」とシラユキが冗談で言ってみたのだが

「あっ、その手があったか」

そうシュウは言ってシラユキの冗談を真面目に受け取り始めた

「えっ！？冗談で言ったのに採用するんですか！？」

とシラユキは冗談で言った事を真面目に採用していたので焦ってしまった

「冗談でも使える案は採用するよ？」
と言って、止めたとしてもシュウは一人で勝手にジャンク艦を抜け出してやりそうだった

「言うんじゃなかった…」
と今回ばっかりは、冗談で言った事を真面目に悔やんだシラユキだった

「んじゃ、準備したら、とっとと出るわ」と言ってシュウは準備をして行く予定をしているが

「ちょっ、キマイラ如何するんですか！？」
と置いて行こうとするキマイラを如何するのか聞いてみた

「あっ、そうだね。んじゃアラスカのレーダーがキマイラに干渉できないプログラムとＭＳを隠せそうなマントでも着けて森に隠すわ」
と言ってキマイラに乗り込みプログラムの作成を開始していた

「あぁ、もう好きにしてください」と軽く呆れ返ってしまったシラユキだった

～回想終了～

全くシュウさんアラスカの内容が知りたいなら、此処からでも調べれそうなのに現地まで行かないと駄目なんでしょうか？

（あの人の唐突な行動は以前の砂漠の虎と比べたらマシですし一応

話も聞いてくれるけど、自由奔放さは全く一緒です…）とシラユキは少し拗ねたようにそう思ってしまった

「まったく、もう少しシュウさん考えて動いて欲しいものです」と呟きながらシラユキはエンジェルの準備を始めていた

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

俺は今アラスカ基地で採用試験を受けていたが、余りの能力の高さに即採用されてしまった

実際に今までの事を考えれば当然なことかな？と思えてしまうほどだ

「しかしキミも大変な時期に入ったねぇ」と試験をやってくれた人が言ってくる

「いえ、大変な時期だからこそやり甲斐も有りますよ」と思ってもない事を口にした

「ははっ、そうかい。今人事部の人に問い合わせてキミの配属先聞いてるから待ってくれよ？」

「了解しました」と答えたが（情報さえ手に入れば此処からはおさらばだ）と思うシュウだった

「うん。聞いてきたけどキミの配属先は、アークエンジェルのメカニック兼パイロットあと暇があれば電子系の仕事だね。しかし君もよりにもよって大変なところに配属されたねぇ」

と試験官が同情の言葉を言ってきたが

「いえ、ザフトの領地を抜けて此処まで来れたアークエンジェルに

は尊敬してたので嬉しいですよ」
と適当に答えておいたシュウだった

「そうかい、まぁ、それでも今はアークエンジェルの中には搭乗出来ない事に成っているんだよね」
と情報を教えてくれた

「入れない？何故ですか」とシュウは疑問に成ったので聞いてみたら

「理由は判らないが、司令部のサザーランド大佐の命令なんだよ」
と教えてくれた

「はぁ、では暫くはお暇を貰えるのですか？」と聞いてみたが

「いや、そんな事無いよ取り敢えずキミは暇なんだから書類整理でもしてくれ、邪魔に成らないよう一人部屋の方が良いだろ？」と試験官が気を使ってそう聞いてきたので

「えぇ、そうしてくれた方が作業がはかどってありがたいですね」
と答えた

「そうか、じゃあ希望通り一人部屋は幾つか空いてるから案内しよう」
と言って試験官は人事部の人間から部屋の鍵を受け取って鍵の部屋番号と同じ番号が張られている部屋へとシュウと試験官は向かった

そして二人は部屋の目の前まで行き

「此処だ、好きに使いなさい」と言って鍵を解除して部屋を開けてくれた

「とりあえず、書類は後で持ってくるけど、此れは鍵だ。無くさないでくれよ？」
と言われシュウは試験官から鍵を渡され試験官は去っていった

そしてシュウは部屋の中に入り置かれている物を再度確認した。目に付いたのは机とノートパソコンとベッドそして一般兵用の端末が置かれていた

「これは、俺の予想以上の速さで目的を済ませそうだな」
と言ってシュウは一般兵用の端末からコードを伸ばしｐｃに繋げた

「さて今回は、目的はアラスカ基地に隠されてる物と地図だな」
と呟きながらシュウはアラスカ基地に対してハッキングを開始したが、さすがに最高機密もあるようで幾重にもロックが掛かっているだが、さすがに最高機密もあるようで幾重にもロックが掛かっている

「さすが最高レベルの機密だ。そう簡単には覗けさせてはくれないか……だが、この程度のレベルだったら俺は止められないな」と言ってシュウは足跡を残さずハッキングを完了させた

「地図はダウンロードするから良いとして、アラスカに隠されてる物を覗こうか」
と言って更にフォルダを開いた。

「やはり狙いはサイクロプスによるザフト軍の戦力の大幅的な戦力の激減が目的か」
と言ってシュウは苛々し始めた

「やはり一般兵はコマ扱いかよ！……こんなんじゃ何時まで経っても戦争は終らないな」
と呟きながら色んなフォルダのデータを開いた

「次はザフトだが、やはりパナマ侵攻はガセか。まぁ本拠地を潰した方が楽って考える奴の方が多いんだろうな」と言って連合とザフトの両方からドンドン情報を手に入れたシュウだった。

「さて戦争が始まるのは明日から数えて三日後…すぐにキマイラに戻ってジャンク艦に撤退だな」
と言って、今後も使えそうな一般兵用端末をシュウはポケットに入れ深夜を待った。

～深夜～
「よし寝静まったな」と呟きながら部屋の扉を開き入り口を目指した。

カツコツカツコツ　と入口を目指していると急に足音が聞こえて来た

「ヤバイ警備兵か」とシュウは声を潜めてそう言い大きな柱の陰に隠れて警備兵をやり過ごした

「ふぅ危なかった。あと少しだから頑張ろう」と呟きながら小走りでキマイラまで目指した。

何度か警備兵が近くには通り過ぎて入ったがそれでもシュウは難な

くキマイラに辿り着いた

「よし、コイツに乗れば後はこっちのもんだ！」そう言ってキマイラを起動させ立ち上がらせた

だが起動させてもアラスカ基地はキマイラの存在には気付けないだろう。未だにキマイラに干渉できないプログラムが起動しているので確認するには目視しかなかったが、キマイラ見つけれる機体等無いに等しいだろう

～ジャンク艦ハンガー～

「全くこんなに速く戻って来られるのは計算外だったよ」

とジャンク艦に着艦しキマイラに降りながらそう呟いてしまった。

「まぁまぁ、それでも速く無事に戻れた事と色んなデータを入手出来たことを喜びましょうよ」

「あぁ、そうだな。とりあえずアラスカが攻められるのは明日から三日後だ、準備を済まして待機だ」

と言って機体の武装を確認し始めた。

「エンジェルの方はシュウさんがいない内に準備は済ませて置きましたので、そっちを手伝いますよ」

と言って手伝ってくれた。

「あぁ、シラユキありがとう。でも先にアラスカ基地の地図ともう一つの資料を読んでおいてくれ」

と言って二つの資料を投げ渡した

「……シュウさんの探していたのはサイクロプスなんですね。半径

１０ｋｍって確実にザフト軍に大打撃与えられますけど残された連合の兵士はコマ扱いですか」
とシラユキも兵のコマ扱いに怒りを覚えているのか資料を持つ手に力が入りグシャグシャに成っていた

「あぁ、しかもアークエンジェルも防衛隊入りだ、ようするに命令に従わない使えない物を厄介払いするには良い所ってわけだ」
と返してキマイラに武装の取り付けを開始していた。

「よし、これで俺も準備完了だな。一応今は取り敢えずは現状のまま待機だ。戦争が始まったら一番にアークエンジェルの護衛が最優先その後は周りの敵を確実に落としていく事だ」
とシラユキに任務の説明をした

「了解です。最終的にはアークエンジェルの味方に付くんですね」
と聞いてきた

「あぁ、あの部隊だけ今の連合に疑問を感じている所だ、守って損は無いだろ。どうせサイクロプスの事を知れば軍から抜けてオーブみたいな中立に着くのは目に見えてる」
そう言ってシュウ達は戦争が始まる三日後まで艦内で大人しく待機していた。

（武装確認）
キマイラ
左手７６ｍｍ突撃銃　右手９０ｍｍ対空散弾銃　左右ホルダー　グレネードランチャー・各種マガジン
腰１００ｍｍ６連装ガトリング　＋基本装備
エンジェル
左手ビームライフル　右手対ビーム・コーティング・シールド　左

右腰ガンソード

～三日後～

遠くから爆撃音が聞こえて来た……。

「戦争が始まったか、人間は争わないと駄目な生き物なのかね？」

とシュウは悲しそうに呟いた

「仕方ないですよ、今やナチュラルとコーディネーターって言う差別みたいな扱いですからね」

「あぁ、だから何時かは、この戦争の元凶を潰してやりたい物だな。さて話は御終いだ。シラユキ出るぞ」

「了解」

「シュウ・K・ライトニング　キマイラ出る！」「シラユキ・カグヤ　エンジェル出ます！」

そう言って二機は背中の翼を広げて戦場へと飛び出た

「取り敢えずゆっくりでも良いから成るべく被弾せずにアークエンジェルまで行くぞ」

と言って進んでいくが途中でグゥルに乗ってるジン隊がこっちに銃口を向けてくるが

「遅いな」

と呟きながら９０ｍｍ対空散弾銃を構え突撃しコックピットに銃口を押し当て撃ち込んだ。もう一機は突然の行動に驚いたのかもたついて居たので７６ｍｍ突撃銃を連射しＭＳは沈黙した。もう一機の方を確認したら、エンジェルが一本のガンソードで武装を斬り落し

た後もう一本でコックピットを貫いた。

「うーん、ガンソード高威力にしすぎたな」
とシラユキから話は聞いていたが実際に見てみると凄く強いという印象しかなかった。

しかしやはり此方を遂に敵と認識したのか何機か再びこっちに近寄ってきたが

「邪魔だ！」
と叫びながらビームソードシールドで切り裂きエンジェルがビームライフルで付近のＭＳを撃ち落していく

「チッ！こう数が多いと鬱陶しいんだよ！」と叫びながらシラユキに持っていた銃を投げ渡し

「援護してくれガトリング砲で敵を一掃する！」「了解」
そしてキマイラは腰のガトリングを掴み目の前の大勢の敵に向かって撃ち込んだ

だがシュウの狙いはＭＳを撃ち込むのではなくグゥルを撃ち込み始めた。

そしてディンは羽をと言う感じで空を飛んでる機体を地上に落しエンジェルが先程渡した銃で地上の敵ザウートやバクゥの砲撃を止めるという役割分担をし始めた。

だがそれは何時までも続く事は無くガトリングは弾が尽きたので腰に再び仕舞いシラユキから銃を返して貰ってシュウとシラユキは再びアークエンジェルへと向かった

～マリュー・ラミアスＳＩＤＥ～

私達はアラスカ基地正面ゲートの防衛をしていた、流石にＭＳも何も居ないので戦況はこっちのほうが最悪だ。

だけど任務なのだから仕方ない、此処で朽ち果てるわけには行かないけど生き延びてみせる。

だが「艦長2時方向の敵ＭＳが壊滅したようです！」「えっ！嘘でしょ」と驚きを隠せなかった。

しかし嬉しい誤算だった未だに敵が攻めてくる中敵数が減るというのはアークエンジェルのダメージを受ける量も減ってくる、

しかし「更に2時方向からＭＳニ機　片方はデータバンク照合無しもう一機はキマイラです！」

とオペレーターの声が飛んでくる

「何でこんな時にっ…」と唇を噛んでしまった

（もし彼等が敵なら私達は一瞬で落されるだろう、あの機体と何度も戦ったが実際に勝てた事は一度も無い。此処でわたし達の命は尽きるのだろうか……）と思っていたら

「聞こえるか、アークエンジェル？此方キマイラのパイロットだ。直ぐに此処から撤退しろ！」

と言って直ぐ傍まで近寄って来ていたＭＳを撃ち落していた。

「え？何で撤退を？」と誰かが聞いていた

「あんた等は此処のコマなんだ。今から資料を送るから直ぐに撤退しろ」
と言ってデータを送られてきた。

そして直後に

「アークエンジェル聞こえるか、直ぐに撤退しろ！コイツは酷い作戦だ」
と言ってムウ・ラ・フラガの声が聞こえて来た

「この地下にサイクロプスが仕掛けられてやがる、アラスカが攻められた時にザフトの戦力を吹き飛ばす連合の人間達を犠牲にしてな、それが上の考えたシナリオだ！」

「此れで判っただろ？あんた等は使い捨てのコマとして扱われていたんだよ」
とキマイラのパイロット言い放った

（そんな…それじゃあ私達の今までのやってきたことは何なの？）
とマリューが思っていた時に

「こう言うのが作戦なの？戦争だから？私達軍人だからそう言われたら言われたとおり死ななきゃいけないの？」とミリアリアが泣きそうな声で言った。

「どうする？助かりたいなら、俺はお前達を援護する」と言って来た。

（今までは敵だった彼も援護してくれる…なら決める事は）

「ザフト軍を誘い込むのがこの作戦の目的と言うなら、本艦は既にその任務を果たした物と判断します！――なおこれはアークエンジェル艦長であるマリュー・ラミアスの独断であり乗員は一切この判断に責任はありません！」と言い切った

「あんた等の覚悟見せてもらったよ、今からそちらの援護を開始する」と言って通信を切られた

（彼は一体何者なのかしらね？）と思いつつも

「本艦はこれより現戦闘海域を離脱します！」

そう言いアークエンジェルを前進させた。この馬鹿げたシナリオから逃げる為に

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「ふぅ、覚悟も聞けた事だし少し本気を出しますかね」と言い始めた

「シラユキ悪いがちょっと暴れるわ」と言ったが

「余り外しすぎないで下さいよ？」と心配された

「もしもの時はお前が俺を止めてくれるんだろ？」と笑いながら目の前の２小隊と向き合った。

「まぁ無茶しないでくださいね」と言われ通信を切り

「リミッター解除１分」と言いキマイラの運動性を上げた。

そして空を飛んでいたディン２機をショットガンで翼を吹き飛ばしビームソードシールドで切り裂いた。

咄嗟の移動で反応が遅れたが残りのジンとディンがそれぞれ銃を構えてくるが

「その程度の速さだったら遅いね」
と言ってジンの後ろにまわり射出型アーマーシュナイダーをジンの足に括り付けもう一機のジンにぶつけた。

そしてグゥルから落された二機はもつれ合いながら海に落ち掛けている中キマイラの肩に装備しているビームキャノンによって撃ちぬかれ爆散した。

そして残りの二機のジンとディンが連携を取って攻撃してくるが

「それだったらオーブで見たブリッツとイージスのパイロットの方が上手かったな、片方が片方の進行方向邪魔して馬鹿か」
と言いディンの進む方向に狙いを定めアーマーシュナイダーを射出し左腕に括り付け取り外そうとしていたが

「残念、それ中々切れないようにコーティング掛けてるから」
と言って引っ張ディンをりビームソードシールドで斬りおとした。

そしてジンが残り一機に減りジンのパイロットも自分が勝てないと判断しアークエンジェルの艦橋に銃口を向けたが…銃は発射されず一筋のビームが銃を爆発させ1機の機体がジンを斬り飛ばす

「ようやく来たかザフトの最新鋭機フリーダムそしてキラ・ヤマト君」
とシュウは上空を見てそう呟いた。

そしてキラはアークエンジェルと何か会話した後に

「ザフト・連合　両軍に伝えます。アラスカ基地は間もなくサイクロプスを起動させ自爆します！両軍とも直ちに戦闘を停止し撤退してください」
と言う通信が戦場に回ったがデュエルがフリーダムに攻撃をし始めた。

だが戦いは呆気無く終った。デュエルががむしゃらにフリーダムに斬りかかろうとしたが楽々と避けられ腰に付けてあったビームサーベルを抜き両足を斬りおとされ、そして蹴り飛ばされた。そして落ちかけている所をディンが確保して撤退していった。

そして戦場で再び前へと前進して逃げ切れそうな時に、アラスカ基地内に強烈なエネルギー放射を確認し次の瞬間基地を中心とした爆発が起きた。

次々とＭＳがサイクロプスに呑み込まれ、そして爆発していく。建物は砂の塔の様に儚く砕けて倒壊していく

そしてこのままでは、アークエンジェルも飲み込まれかけるだろう

「アークエンジェルは巻き込ませるかよ！」
とシュウは叫びながらアークエンジェルの後部の方に手を当てブーストした。

「このままじゃ、まだ当る可能性が有るのかよ！……此れだけは余りやりたくなかったが、リミッター解除！」そう言って艦の速度が上がり何とか当る事無く撤退する事は出来たが…

「シュウさん！大丈夫ですか！」とシラユキの乗ったエンジェルが

近寄って来る

「あぁ…何とかな、しかし3分使ったから体中がいてぇや。悪いけど飛ぶの手伝ってくれ」
とシラユキに頼み込んだ

「了解です。肩貸しますから一緒に飛びましょう」
と言ってエンジェルの方に姿勢制御しながらアークエンジェルの着地した島にシュウとシラユキは向かった。

そしてシュウはキラ・ムウ・マリュー達が話をしている所を眺めていたが、不意にキラ君達がこっちに顔を向けてきて

「キマイラともう一機のパイロット降りて一緒に話をしないか？」
とムウが聞いてくる。

「拒否する…話がしたいんだったら力ずくで掛かってきな」そう言うと

「判りました。それが貴方の望む事だったら」
と言ってキラはフリーダムに乗り込み、こっちに機体を向けてくる。

「此処じゃ被害が出る、他の小島でやりあうぞ」と言って二機は飛び去っていくが

「シュウさんやめてください！今戦ったら貴方が死んじゃいます！」
とシラユキの悲痛な叫びが聞こえて来た。

「関係無いさ、邪魔はしないでくれ」と頼み込んだ。

～シラユキＳＩＤＥ～
「どうすれば…どうすれば隊長を止められるんだろ。……あのフリーダムのパイロットに頼むしか」
と言ってシラユキはフリーダムのパイロットに対して回線を開いた

「お願いです、あの機体に乗ってる人を止めてください！あのままじゃ確実に死んじゃいます！」
とシラユキはフリーダムのパイロットに対して頼み込んだ

「えっ！？どう言う事ですか？」と驚いて聞いてきた

「あれは、何度もあのような速さを出せるわけじゃないんです！あれはあの機体のリミッターを外してるだけで長く続けたら自分が死ぬような代物なんです！」と泣きながら機体の真実を話した

「お願いですから、あの機体に乗ってるシュウさんを止めてください…お願いします」
と調子が良いかも知れないがそれでもシラユキはフリーダムのパイロットに頼みこんだ

「判りました、あの機体は絶対に止めて見せます」と言って通信を切った。

（お願いですから、私を置いて死なないでください、シュウさん）
と思ったシラユキだった
～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～
「さぁ戦いを楽しもうかフリーダム」と言ったが

「止めてくださいシュウさん！戦うならシュミレーターだけで良いじゃないですか！」と言って来た

「教えてくれたのはシラユキか、アイツもお節介焼くのが好きだな。戦いに理由なんて無いさ、ただキミとは戦いの決着を付けたかっただけだ！」
と言って７６ｍｍ突撃銃とグレネードランチャーを構えそしてフリーダムへと連射した。だがフリーダムには掠りもしなかった。

「流石最新鋭機この程度じゃあたりもしないか」
と言いながらビームソードシールドで斬りかかるが盾で防がれ蹴り飛ばされる

「グッ！やってくれるな！」と言ってビームキャノンを体勢を立て直し撃ち込むが

「止めてくださいシュウさんも、もう限界でしょう！」と未だにキラは戦闘をする気は無いようだ

だがその行動はシュウを苛つかせるだけで

「本気で戦えよ！お前は俺を舐めてるのか！」
と遂にシュウは怒ってしまいグレネードランチャーを撃ちこもうとフリーダムに対してその銃口を向けるが一気に近寄られビームサーベルでグレネードランチャーを切り裂かれてしまった

「クッ！判りました。僕は貴方を全力で止めます！」
と言って急に動きが変わった。きっとＳＥＥＤが割れたんだろう

「ハハッこんなに楽しい戦いは久々だ。バルドフェルドさん以降は全く楽しめなかった。でも君との戦いも楽しいよ」と言って９０ｍｍ対空散弾銃を撃ちこむが盾であっさり防がれ羽の部分を斬りおと

されるが

「甘いっ！」と叫びフリーダムの盾を足で蹴り飛ばし地面に着地した。

「クッ！シュウさん…僕は貴方を撃ちたくない！」と叫んでくるが

「戦場はそんなに甘いところじゃねぇんだよ！キミはラクス・クラインとマルキオ導師と出会って戦う意味を見つけたんだろが、今更迷うんじゃねぇ！」

と言いながら射出式アーマーシュナイダーをフリーダムへと撃ち込むが直ぐにワイヤーが斬りおとされた。

「僕は貴方を落したくない！だから僕は貴方を全力で止める」

そう言って突っ込んできてショルダータックルを食らわされビームライフルの銃口をコックピットに向けられた

「判った、降参……だ」

と言ってコックピットを開けて手を上げるが喋っている最中にシュウは倒れ込んでしまった。

「シュウさん！？大丈夫ですか！？シュウさん！」

と言うキラ君の声だけ聞こえてシュウの意識はその場で失った。

PHASE20（後書き）

シュウ「今回は俺もチョット無茶振りしちゃったもんだな」

抹茶「えぇ、そうですね。しかしシラユキの静止位聞いてあげても良いじゃないですか」

シュウ「それは判ってるんだが、如何しても戦いたかった」

抹茶「あなたは何処の闘争本能丸出し人間に成ってんだよ」

シュウ「さぁ？でも「ぶるあああああ」とかは言い出さないから安心してくれ」

抹茶「何でだろう作者なのに一抹の不安を感じてきたよ」

シュウ「気のせいだろ？さて次はどんな事が起きるんだ？」

抹茶「うーん、取り敢えずオーブ編と懐かしい友人との再会を出そうかな？」

シュウ「せっかく助けたのに会わせなかったら酷いしな」

抹茶「はい、そうですね。まぁ問題は何処で登場させようか悩み中」

シュウ「そうか。まぁ楽しみにしとくよ」

シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

PHASE21（前書き）

シュウ「今回は時間掛からなかったな？」

抹茶「えぇ、疲れましたけどそれでも書くのが好きなんで筆は置きませんよ」

シュウ「そうか、今回はどんな話だ？」

抹茶「アークエンジェルに捕まって質疑応答する場面です」

シュウ「と言う事はキマイラの秘密をクルーに明かすと言う事だな」

抹茶「そうですね。何時までも隠し通せると思ったら大間違いです」

シュウ「そうか、まぁ正論だな」

シュウ・抹茶「では本編をお楽しみください！！」

PHASE21

「此処は…また医務室か？俺はあれに乗ってる限りこの縁はずっと続くのかねぇ」
とベッドに寝たままそう呟きため息をついた

「しかし此処妙に見覚え有ると思ったら、如何見てもアークエンジェルの医務室だな。ばれちまったんだな」と愚痴っていたら

パシュンと言うエアロックが外れドアの開く音が聞こえた。

「おっ、もう眼覚めたんだな。コイツは速めに話が聞けそうで丁度良い」とムウさんが話しかけてきた

「面と向かって会って話すのは久々だね。会うところも前と一緒だ」と苦笑したが

「今回は、世間話をしに来たわけじゃない判るな？」と冷静な声で聞かれた

「あぁ、判ってますよ。どうせ聞きたいのは、キマイラのことだろ？」と聞き返した

「話が判ってるなら良い、だがコイツは一個人で済まされるほど甘い話じゃない。何故俺らの敵に回ったんだ？」と聞かれた

「此処で話しても良いですけど、ブリーフィングルームで皆に話した方が事情も判るんじゃないんですかね？」と返した

「まぁ、それもそうだな」と言ってシュウが起き上ったと同時に腕を掴まれ手首に手錠を着けられた

「悪いな暴れられると困るんでな」と本当に悪かった様に言ってくるが

「いえ、此ればっかりは仕方ないと思いますよ。この判断は間違いでも無いですし」と言い切った

「そうかい、そう言ってくれると此方も幾らか気が楽に成るね。じゃあ行こうか」
と言ってムウさんの後ろに付いて行った

～ブリーフィングルーム～
「隊長もう体は大丈夫なんですか?」と入った瞬間シラユキが近寄ってきた

「あぁ通常通り体は動かせる。まぁ此れから話をするから座っててくれ」と言って部屋の一番前に行った

「まずは、そうだな。今まで敵に回った事申し訳無いと思う、可能な限り質問に答えていくつもりだ」
と全員に対してそう言い放った

「そうだな、まずはあの機体は何なんだ?」とムウが聞いてきた。

「アイツは俺が開発・作成したＭＳだ。一応フリーダムよりはちょっと劣るが使い方によっては同等に戦える」と言い放ったらキラ君が多少驚いていた。

当然だろう、最新鋭に少し劣るが同等な性能を持つ機体を作り出せるのだから

「じゃあ、あの機体は何で動いてるんですか？」とキラが疑問に思っていたが

「残念だがキラ君の予想は外れるよ。あれは一般のＭＳにも積んであるバッテリー駆動のエンジンだ。一定時間動かせばＥＮ切れで動けなくなる」

「じゃあ何時あのＭＳを作ったんだ？」とマードックさんが聞いてきた

「あれは、砂漠の虎の時に一時的に雇われる条件としてキマイラの作成のパーツを全部回してもらった」

「だったら以前シュウが持ってたジンは如何したんだ？」
とムウさんはなくなったジンの行方を引き続き聞くので

「あぁ、あれは雇われる前にバルドフェルドさんの乗るラゴゥに脚部を壊されてキマイラに使える所全部移植したから、もう無いよ」

「そうですか、では何故私達の敵に回ったの？」
とマリューさんから自分が敵に回った理由を聞かれた。

「うーん、こっちとしては穏便に済ませたかったんだが、そっちが攻撃してくるから正当防衛って所かな？あとは前のレジスタンスみたいに命を馬鹿みたいに使用する奴等を予測出来てたから敢て敵に回って救うみたいなかんじかな？」

「ふざけないで！そんな理由で私達の敵に回ったの！？」と聞いてくるが

「確かに砂漠のときの決戦で攻撃を仕掛けたのは悪いと思ってる。だが他の場所ではこっちに攻撃する意思は無かったのにそっちは攻撃を仕掛けてきた。それとも何かあの時態々攻撃を受けろとでも？」

「そんなつもりは…」と言い詰まってたが

「悪い、少し言いすぎた。最近悪い事しか起きなくてね」と素直に謝罪した。

「そういえばシュウさん、何故貴方はあの時小島郡の場所に居たんですか？」
とキラ君が痛い所を付いてくる。

「ん？まぁ、それは後々教えるさ」と言って居た理由を話さなかった。

「最後に一つだけ、あのＭＳは何なの？」と誰もが疑問に思った事を聞いてくる。

「あのＭＳを一言で言い表すのは正直言って難しいな。まぁ簡単に言えばパイロットの命を食うＭＳかな」

「「「「命を食うＭＳ？」」」」と事情の判らない人達は疑問すぎた

「まぁ口で言うよりも見せた方が速いな」とシュウは言って唐突に上着を脱ごうとしたら

「何をやってるんですか！？」と主に女性陣から言われた。

「良いから黙って見とけ」
と怒られたにも拘らずそれを無視し衣服を脱いだ。そして半身の状態を見た瞬間皆の顔が蒼くなった。

「シュウさん、それって…」とキラが恐る恐る聞いてきた

「あぁ、此れがキマイラを操る人間の代償だ」と言って体中内出血を起こしている体を見せた

「今回は3分とちょっと使っていた、これで済んだ事を寧ろ喜ぶべきだな」
と溜息をつきながら再び上着を着た

「それで使い続けると如何なるんだ？」とムウさんも聞いてきた

「言わなくても想像出来てる人居るでしょ？このまま使い続ければ確実に来るのは死だけだ」
と冷え切った声で言った。

「じゃあ、あの時の目視出来なかった速さの理由って…」とサイがそういった瞬間

「あぁ、リミッター解除を使ったからだ」と答えた

「何でそんな危ない物を使うの？貴方ほどの腕だったら…」と聞かれたが

「俺にはパイロットとしての素質は其処まで無いんだ。だから俺は

自分の命を駆け引きに出しても戦わないと弱いままなんだ」

「何で、其処までして戦うんですか？」

「そうだな……戦う理由が自分が大切に思ってる人達を守りたいから守るじゃ傲慢すぎるかな？」

と軽々しく笑ってしまった

「そんな…だったら尚更力を持つ人に頼ればシュウさんだってそんな傷負う必要無いじゃないですか！」とキラが怒鳴ってきた

「君の感情的な所は初めて見たね。まぁ良いや、じゃあ逆に聞こうか守れるだけの力が有るのに逃げ出すのと守れるから全力を尽くすのどっちが良い？」

「「「「「・・・・・」」」」」

「悪い質問だったかな？まぁ良いさ。簡単に言っちゃうと死ぬのは、しょうがない事だと感じてる」

とハッキリ答えた。其れを言ったらみんな唖然としていた。

「何か大きな力を持つ又は何かを成し遂げようとするには、何時かは大きな反動が来るものだ。その一人に俺も入ってるだけなんだ。楽して良い結果が手に入れられるのは物語だけ、だから俺はキマイラに乗り続ける、この自分自身が朽ち果てるまでね」と言って席を立った。

「シュウさん何処行くんですか？」とシラユキが聞いてきた。

「少し長話したから疲れた、寝るよ。……それに俺は一度死んだ身

だ、今更命は惜しくない」
と最後の方だけ全員に聞き取りづらくしてブリーフィングルームを出て行った。

～キラ・ヤマトＳＩＤＥ～
「何であの人は、あんな物に乗るんでしょうね？」とさっき答えを教えて貰っても納得できなかった

「あんな戦い方してれば寿命だって削れて行く様なもんだぜ」とムウさんも軽く同意していた。

「シラユキさんでしたっけ？シュウさんは何であんな物を？」
と常にシュウさんを慕っていたシラユキさんに話を聞いてみたが

「判りません、あの人は前聞いた時も大切な物を守る為としか答えてくれませんでした」

（あの人は何を考えてるんだろ？まるで自分の命を惜しまない戦い方、そう言うなれば死に対して恐怖を抱かずに戦い続ける何か…）
とキラは物思いに耽っていた。

「取り敢えず彼の行動には要注意しましょう、毎回あんなんじゃ何時死んでも可笑しく無いわ」
とマリューさんがそう言った

「そうですね、成るべくあの人には戦闘では負担掛けたくないですね」
とキラも今のシュウの戦い方には同意すら出来なかった。

（シュウさんは何を思って戦ってるのかな？少し疑問に成るな）

と思いつつ今後如何するかを話し合っていた
～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

シュウはゆっくりと医務室に向かってを歩いていたが

「グゥゥゥ…」

そう呻き片膝を付いてしまった。そう3分間とは全くの嘘だ、今回使った時間４分3秒そう生存率など言うまでも無く最悪な数字に成っている筈だろう。

だが、それでも生き残れたのは衝撃吸収剤を少しでも積んでいたからだろう。そして急に咳き込んでしまった。シュウは慌てて口を手で押さえそして確認した。手にはシュウが予想していた通り大量の血がついていた

「全く脆い体だな、せめて最低でもドミニオン決着の場面まで保ってくれよ…」

と愚痴りながらも壁に肩を預けながらも医務室に向かって歩いていた。

そしてようやく医務室に着いたが、体は未だにリミッターを解除しすぎたせいか激痛が走っている。

（コイツは骨にヒビでも入ってるのかな?）と痛みの中そう考えてしまった。

「質疑応答の時良く顔に出さずに耐えれたな、俺自身驚きだよ」

と誰も居ない医務室の中で呟いた。正直言ってあの質疑応答の時ですら激痛で体中が痛かったのだ

「体が壊れるのが速いか、戦争が終るのが速いか勝負だな」
と言ったが、この先リミッター解除無しで戦いを挑む事は厳しくなっていくのは至極当然だろう。

（ただでさえ控えてるのがフォビドゥン・カラミティ・レイダー・デュエル更にはプロヴィデンスだ。完治して、またリミッター解除して吐血した所見られたら搭乗禁止も良い所だな）と自嘲気味に成っていた

「守りたいから守るのは傲慢かな?それでも俺はこの命を捨ててでも皆を救いたいんだ、元々この世界のイレギュラーで有る俺はそれ位しかやりたい事無いしな」
と悲しくなって来たが急に眠気が襲ってきた

（やっぱりもう一つの反動は睡眠欲が強くなる事かな?）
と思いつつも再びベッドに潜り込み目を閉じた。この身を戦いに投じる為すこしでも体を休めたかった。

今はもうそれしか思いつかずに眠りへと入った。次なる激戦も生き残るために

ＰＨＡＳＥ２１（後書き）

抹茶「はい、今回キマイラに乗ったシュウの代償を出しました」

シュウ「うーん、このままじゃ俺死ぬんじゃないか？」

抹茶「まぁ何時か肉体補正でも掛けますかね」

シュウ「それ、何か怖いぞ」

抹茶「冗談ですよ。しかし場合によってはそんな考えもしないとマズいかも」

シュウ「その時が来ない事を期待するよ、そういえば今回４分だったが生存率って何％になるんだ？」

抹茶「あぁ、４分使う２０％の確率での生存なんで有る意味運良かったですね」

シュウ「２０％って良く生きれたな俺」

抹茶「まぁ今死なれると話が進まないので、寿命削り＋吐血で済ませました」

シュウ「そうか俺自身生き残りたいがどうなるんだろうな」

抹茶「さぁ？まぁ考えときますよ。さて今回注意点を申し上げてくれたｒｅｎさんみみさん有難う御座いました」

シュウ「注意点が多いと反省する点も多いな」

抹茶「全くもってその通りですね。では後書きを閉めましょうか」

抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）は生き残れるのか？次回もお楽しみに！！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ２２（前書き）

抹茶「さてフェイズ２２の始まりですね」

シュウ「そうだな、今回は長めに書いたのか？」

抹茶「えぇ、でも一つ問題が」

シュウ「なんだ問題って？」

抹茶「それが俺オーブ壊滅する所うろ覚えなんでヤバイかも」

シュウ「オィィィ！まぁ多少の誤差くらいは許してもらえるだろ？」

抹茶「そうだと良いんですけどね」

シュウ（ヤバイこのままだと作者がネガティブ思考に変わる！それだけは阻止しなければ！）

シュウ「そ…それでは本編お楽しみ下さい！」

PHASE22

「此処は？」とシュウは辺りを見回した。此処には見覚えがあった
そう何も無い白い部屋、以前自分が死んだときに来た場所だ。

「すいませんね、貴方が眠っている間に呼び出しました」と女神が
軽く挨拶してきたが

「前置きは良い、俺はまだ死んでないはずだ。呼び出した理由を聞
かせてくれ」

「そうですか、取り敢えずキマイラに取り続けると確実に死ぬのは
知っていますね？」と確認してきた

「あぁ、設計・作成したのは俺なんだ。そんな簡単な事判らない筈
が無いだろ」と軽く答えた

「そうですね、取り敢えず、このままだとドミニオンと決着着けた
後にキマイラに乗り続けた代償として確実に死にます」

「そうかい、一応俺の望んだ所までは生きられるんだな」と軽く言
ってしまった

「まぁ、そうですけど。一応救済策も有りますよ？」と助かる事が
出来ることを言ってくれるらしい

「まぁ用意してくれてるなら一応聞いておくわ」と言って救済策を
聞いておく事にした

「そうですね、キマイラに乗っても永遠にリミッター解除で死ぬ事は無いし削られた寿命も返ってきます」

「正直に言ってそんなもんだったらいらんわ」とハッキリ断った

「えっ、理由を聞いても？」と不思議そうにしていたので

「自分から望んであの機体に乗っているんだ。それに俺と同じ運命に成ってくれてる奴が居るんだ。もしソイツだけがリミッター解除で死んだら、俺は自分を許せないだろう。ただ望める事が有るんだったら…」

「そうですか、しかし他に何を望むんですか？」

「一つ目はヤキンドゥーエの決戦が終るまで生かしてくれ、二つ目は……を望むよ」

「たったそれだけで良いんですか？」と本当にそれだけで良いのか聞いてくる

「あぁ一度は死んでしまった身だ。こんな俺でも人を最後まで救って死ねれば本望だ」と言い切った

「そうですか、起きた頃には貴方の望んだ事は起きているので頑張ってください。帰りは後ろの扉を開ければ目覚めます」と教えてくれた

「あぁ、ありがとな。今度会う時は俺が再び死ぬときだな」と言ってシュウは扉を押して消えていった

「本当に貴方はそれで満足なんですか？」と女神の呟きだけが部屋に響いた

「もう昼か…アークエンジェルの人たちには世話に成ったんだし挨拶だけして自分の船に戻るか」
と言って体を起こしたら

「シュウさんようやく眼が覚めたんですか？」とシラユキが入って来てそう言って来た。

「へっ？ようやく眼が覚めたって俺は何日寝てたんだ？」と恐る恐る聞いてみた

「2日ですね」と言われて

「マジか…まぁ良いや。リミッター解除の反動の怪我も治ったんだし長く寝てたのは正解かな？」と体を伸ばしてた

「そういえばシュウさん此れから如何するんですか？」と予定を聞いてきた

「アークエンジェルの皆に挨拶して自分の艦に戻ろうと思ったけど、予定変更飯食ったら出かけるわ」

「何処まで行くんですか？」と聞いてくるが

「病院だよ。救出した2人が居る病室まで顔を出すんだよ」と言って部屋を出た

「取り敢えず何かお見舞いの品でも持って行くか」と言って病院まで向かって歩き出した

～病室～

「よっ！二人とも元気かい？」と言って二人の居る病室に顔を出した

「えっと…どちら様でしょうか？トール君知ってるかい？」「いや覚えてないわ」と話してたが

「まぁ俺の事は後で良いじゃん此れお土産ね。フルーツ問題ないよね？」と二人に渡した

「「ありがとうございます」」と感謝してきた

「いえいえ、どういたしまして。取り敢えず俺はキミ達を助けた人間だよ」と教えた

「「えっ！？」」と驚いてたが「すまない、救出を遅れてしまって」と頭を下げた

「何で貴方が謝るんですか！？」とニコル君が言って来て

「貴方は俺達を助けてくれたじゃないですか！」とトール君にまで言われた

「いや、もう少し速く助けてやれれば君達もこんな大怪我をする必要も無かったんだ。本当に申し訳ない」と頭を深く下げたが

プルルルルプルルルル　と電話が来てしまった

「失礼…少し席を外すわ」
と軽く謝って部屋を出て通話可能エリアまで進み送信者の名前を見たらシラユキの名前が出ていた。

「シュウだがシラユキどうかしたのか？」と電話の通話ボタンを押した

「シュウさん、それが明日もしかしたら連合が攻めてくるかもしれません」

「何？如何言う事だ。ハッキリ説明してくれ」と詳しく説明を頼んだ

「それがもし明日までに連合の方に味方しなかったらザフトの方に着くという認識でオーブに攻め入ると言う最終通達が来たそうです」

「如何有っても世界を二分したいのかよ連合とザフトは！」と苛立って怒鳴った

「シュ…シュウさん病院で大声はちょっと不味いかと」と注意された

周りを見回したら驚いてこっちを見ていた「すいません」と取り敢えずシュウも謝っといた

「で、俺らは如何するんだ？」と今後の態様を聞いた

「はい、もし明日攻め入られるようだったら此方からも迎撃と言う事で反撃するらしいそうです」

「オーブを火の海に変えるつもりなのかよ、連合のクソ野郎共は」

と手を握り締めた。余りに強く握りすぎて片手には少々血が流れた

「取り敢えず一旦戻って準備した方が良いかもしれませんね」と言って来たので

「あぁ判った。一度そっちに戻るからエンジェルとキマイラの準備をしといてくれるか？」

「了解しました。それでは失礼します」と言って電話を切られた

「さて此れからが忙しくなるな…連合の連中攻めて来たなら死ぬ覚悟もしとけよ？売られた喧嘩は数倍にして返してやるからよ」とオーブに攻めてくる敵に対してそう呟いた

「と言うわけでちょっと明日からまた忙しくなるから来れなくなるから御免ね」と二人に謝っといた

「えっ如何言うことですか？」とトールが聞いてくる

「どうやらザフトと連合は世界を二分したいみたいでね。連合が此方に戦争吹っ掛けてくるからそれを迎撃しないと駄目なんだよ」と彼等は一応此処に居るのだから最低限の情報を教えといた

「それで僕達は如何すればいいんですか？」とニコル君が聞いてくる

「そうだな、キミ達はアスラン君とキラ君の説得に回って欲しい。今死んでると勘違いされてるから顔を見せて二人を安心させて欲しい」と教えたら

「えっ!?俺達って死んだ事に成ってるんですか?」とトールが驚いていたが

「彼ら二人からの視点から見ても殺しちゃったと思ってるし、爆風でコックピットが無事だったの見えなかったから皆気付かなかったんだと思うよ」
と教えといた

「まぁ俺は明日の準備があるから一度戻るよ」
と言ってキマイラが収容されてるアークエンジェルへと向かったシュウだった

～アークエンジェル　ハンガー～
「シュウさんどっちの機体も最低限準備を完了させました」と入って直ぐに教えられた。

「了解だ。新しいグレネードの弾丸の考えをこっちも纏まったし準備を開始するよ」
と言って機体へと歩き出した

「さぁ今回も、大暴れしようか。ただしリミッター解除は余り使わないのが大前提だがな」と言った

そしてシュウは明日始まる戦争まで準備をし続けていた。

自分の故郷を攻撃する物は例え何者でも許さないと思っていたシュウだった。

「始まるのか…人は戦争をしないと全てを決められないのかね？」
と悲しく呟いた

「仕方ないですよ、今の連合とザフトは殆ど穏健派な人間は少ないんですから」とシラユキが言って来た

「だろうな、穏健派のクライン派も止められないんだ。この戦争全ての元凶が撃たれない限り止らないか」そう言ってカタパルトの準備を始めた

「キマイラ発進どうぞ」とオペレーターの声が聞こえた

「キマイラ　シュウ・K・ライトニング出る！」と言ってカタパルトから射出された。

どうやら既にストライクダガーが進行を開始しているようだ。

「数だけ多くても多すぎたらただの的にしかならねぇんだよ」
そう言って手に持っていたガトリングを構え撃ち始めた

やはりＭＳに乗り込むのが始めてのパイロットが多いのか次々とガトリングの弾が被弾していく

だがそれでも避ける奴は、避けるのか空中にジャンプしこっちに斬りかかって来たが

「単機で突っ込む威勢は認めよう…だが相手が悪かったな！」
と言って射出型アーマーシュナイダーをコックピットに向けて射出した。シュウの予想通りダガーは避けれずにコックピットを貫いてその機能を停止した。

だがアーマーシュナイダーを回収する時に刃の先端に血が少し着いていたが戦争だから仕方ないと今は納得するしかなかった

周りを見るとキマイラの能力の高さに驚きを隠せないのか後方に後ずさる機体が多かったが

「死ぬ覚悟も無い奴が戦争を吹っ掛けてくるんじゃねぇぞ！」とその行動に苛立ちを感じた

そして両足に付けているキャタピラを展開しダガーの群れに突っ込んだ。

しかしダガー達も近づけるとマズイと感じとったのか、ビームライフルも撃ってくる機体が多かったが盾で防ぎつつもビームキャノンで確実に撃ち貫いていった。そして一気に距離を詰め目前に居たダガーをビームソードシールドで縦に切り裂いた。

流石に敵陣の真ん中に来すぎたのか後方からサーベルで斬りかかって来るが咄嗟に足のブースターを使い回し蹴りを食らわせダガーの頭を破損させた。

「突っ込みすぎたな」
と反省しながらも４枚の羽を広げて後方に飛び下がりグレネードランチャーを撃ち込んだ。次の瞬間４～６機くらい居たダガーが次々に爆発していった。

「グレネードランチャー拡散弾　弾の中に爆弾を詰め込んで一つ一つ爆発を起こしていく防げなかったら確実に落ちていく、集団専用武装だが中々の強さだな」

そして不意に何かがレーダーに映った人のようだ…

「マズイな此処は確かフリーダムの攻撃でシン君の家族が死ぬところだ！」

そう言ってフリーダムの方を見たらやはり新型機3機と戦闘中で腰のレール砲が山に向いていたので咄嗟に山を防ぐように山の前に立ち盾を構えフリーダムのレール砲を防いだ

「そこの民間人！死にたくなかったら早くシェルターに避難しろ」と言って山に入る民間人が完全に避難出来るまで機体を盾にして防いでいた

＜ありがとうございます！＞と途中でシン君?らしき少年が感謝してきたが

「感謝は後で良いからさっさと避難してくれ」

と言ってライフルの弾を防いでいた。幾らキマイラといえども何度も弾を受けていたら限界が有る物だ。

そしてようやく避難が完了したのか、喧騒は無くなりサーモグラフティで見ても山には民間人は居なかった。

「全く、酷い目にあったな…だけど俺も、もう自由に動ける。お前らに教えてやる誰に喧嘩を売ったのかを」とシュウは酷く悪い笑みを浮かべていたが

唐突に警告音が鳴り響いた。

「なにっ！？」と言って咄嗟に横に避けようとしたが

「このままじゃ避難してるシェルターに当っちまう」

と言ってシールドで防いだがドロドロに溶けてシールドが使い物に成らなかった。敵を確認したら新型の一機カラミティだった。

「オイオイ、何で悪の三機の内の一機を俺が相手せないけんのだ」

と愚痴ってしまった

「まぁ、やれるだけやってみるか」

と言って戦闘時に荷物に成るガトリングを地面に落とし７６ｍｍ突撃銃を連射するがすぐさま肩のビームキャノンで弾を消され左腕に着いてるケーファ・ツヴァイとバズーカで此方を撃ち落そうとするが、キマイラの機動によりケーファ・ツヴァイは難なく避けバズーカはビームキャノンで破壊しそのままカラミティを狙うが、やはり避けられる。

「やはりアイツは格闘を積んでないか…ならアークエンジェル悪いが対艦刀をこっちに射出してくれ！」

「えっ！？「悪いが事情は後で言う！今はビーム格闘兵器で威力の高い武装が欲しいんだ！」ッ！了解しました。直ぐに射出させます。１分耐えてください！」と言って通信を切ったが

「速くしてくれよ、こっちは、簡単には耐えられない相手なんだからな」

と言っていたがカラミティが攻撃を一瞬だけ止め衝撃を防ぐように

かかんだので

「ヤバッ！」と言ってキマイラは空に思いっ切り飛んだ。

次の瞬間カラミティに積んであるスキュラ・ビームキャノンがキマイラの居た場所を通りオーブの基地と街を火の海に変えてしまった

「チッ！あの攻撃を受けたら幾らキマイラが丈夫とはいえシャレにならねぇぞ」と毒ついた時

「シュウさん今から対艦刀を射出します！」と通信で言われた

「了解！」と言って射出された対艦刀を掴み取り対艦刀を起動させ肩に担いだ

「さぁお遊びは、此処までだカラミティのパイロット。次は俺の本気を見せてやるよ…リミッター解除」

と言ってカラミティの前方に居た筈のキマイラが目視できなくなった。

そして次の瞬間カラミティは、一瞬だけ反応して左に避けたが右腕を斬りおとした。

「へぇ、此れを避けるんだ。楽しい戦いに成りそうだ」

と呟いて、対艦刀を構えて再び斬りかかろうとしたらレイダーが攻撃を仕掛けてきたので咄嗟にブースターを使い右に避けた

「クソ、こんな時に」

と言ってビームキャノンをレイダーに対して撃つがMA形態で動いているので簡単に避けられた。そして反撃とばかりにスキュラをこ

っちに一発放ってきた。難なく避けれはしたが隙が生まれてしまいレイダーはこっちに攻撃を仕掛けずにカラミティをすぐさま回収し海上にある戦艦に向かって撤退していった。

シュウは少し安心して周りを見るとＭ１アストレイが最後のストライクダガーの部隊を撃ち落していた所だった

「ふぅ、取り敢えず終わりか」と言って対艦刀に送ってるＥＮを切ってフリーダムの方を向いた

どうやら紅い機体と話しているようだ。そしてモルゲンレーテの工場へと向かっていた

「あれがフリーダムと対なす機体ジャスティスか」と言ったが

「シュウさん大丈夫でしょうか？」とシラユキの通信が来た

「あぁ、一応大丈夫だが、お前戦闘中何処いたんだ？全く姿が見えなくて撃ち落されたと思ったぞ」

「なっ！ヒドイですシュウさん。私ずっとストライクダガーの部隊と戦い続けてたんですよ！」
と怒ってしまった

「あぁそうなんだ。スマン許してくれ。こっちも色々と大変だったんだ」と返してモルゲンレーテの工場に向かった

「ふぅ、疲れたな。」と言ってキマイラを降りてキラ君とアスラン君の所に向かった

どうやら話が終っていたらしい。

「お二人さん少しお話しが有るんだけど良いかい？」と二人に聞いた

「シュウさん、どうかしましたか？」と言ってきて

「キラこの人は誰なんだ？」とアスランが此方に少し警戒していた

「悪いが警戒しないでくれ、俺はシュウ・K・ライトニングだ。宜しく頼むよアスラン君」

「何故俺の名前を？」とより警戒してきた。

「そりゃザフトの英雄扱いされた人間の名前を知らない奴なんざ居ないだろ」と言っといた

「俺は英雄なんかじゃないです…」と反論してきた

「そうかい、やはり英雄という肩書なんて邪魔で仕方ないと言う顔だね」と言っといた

「はい、仮にも友人を殺そうとしたんですからそんな肩書はいらないです」と正直に言ってくれた

「それよりシュウさん用事は何ですか？」とキラ君が聞いてきた

「おぉ、すっかり忘れていたよ。とりあえず着いて来てくれ、俺があの時小島郡に居た理由を教えて上げるよ」と言って二人を着いて来させた

～病室前～
コンコン

「入るよー」とノックをしそう言ってドアを開けた

「さぁ二人とも入ってくれ、感動の再開だ」と言って二人を入れた
瞬間驚愕した

「ニコル」「トール」と言って「久しぶりだねアスラン」「よぉキラ、久しぶり」と返していた。

「シュウさん　もしかして居た理由って」「そっ、この二人を救う事だったんだよね」と教えた

「だったら何であの時止めてくれなかったんだ！」とアスランが怒ったが

「お前あの時マジで怒っていたから、真実言っても止まるかどうか謎だったんだよ。その後トール君の乗ってるスカイグラスパー叩き落しちゃって最終的に二人ともマジ切れしてたから止める事出来なかったんだよ」とやれやれといった口調で話した

「まぁ良いじゃないかアスランこうして二人とも生きてたんだから」とキラがアスランをなだめていた

「んじゃ、まぁ久々に友人と会ったんだから積もる話も有るだろ。俺は帰るからどうぞごゆっくり」

と言って病院を出て行った。

「何で世界を二分したいのかね。全く戦争に巻き込まれる人達の事も考えろっての」
と一人無事だった広場のベンチに腰掛けそう呟いた

「取り敢えず今度アイツ等見かけたら再起不能になるまでボッコボコにするべきかな」
と逃がしたガンダムに対してそう呟いた。

「さてと俺もモルゲンレーテで自分のＭＳと機体の武器を何かに代用して直す事に専念しようかな」
と言ってベンチから立ち上がりモルゲンレーテへと歩いていったら

「あの…すいません」と少年の声が聞こえた

「ん？キミは？」と誰だか判らなかったので聞いてみた

「いえ、その山に攻撃が来てる時に防いでくれたＭＳのパイロット知りませんか？」と聞いてきた

「あぁ、あの時の少年か家族は無事だったかい？」と聞いてみた

「貴方でしたか…貴方が攻撃を防いでくれたお陰でマユも家族もシェルターに避難できました」
と嬉しそうだった

「そうか、キミ達が無事なら俺も嬉しいよ」と笑顔で答えた

「本当にありがとうございました。俺シン・アスカです。貴方は？」

と名前を聞いてきたので

「俺かい？シュウ・K・ライトニングだ。んじゃ俺用事有るから帰るわ。シン君も気をつけて帰れよ」と言ってシン君と別れた

「さてと、俺も頑張って俺の救える範囲内で無力な人たちを救うべきだな」

と呟きながら改めて戦いに対して決意を持ったシュウだった

ＰＨＡＳＥ２２（後書き）

抹茶「取り敢えず一旦此処でオーブ編を切りました」

シュウ「確か次は宇宙に撤退するんだよな？」

抹茶「えぇ、如何しようか悩んでます」

シュウ「逃げ出すのに何を迷うんだ？」

抹茶「いや、キマイラとエンジェルもクサナギみたいに戦艦の一部に引っ掛って上昇するか、他の事をするかで大悩みです」

シュウ「頼むから普通に宇宙に上げてくれ」

抹茶「まぁ、色々と考えますのでまた少々時間食いますね」

シュウ「時間を食うのは当たり前だろ。そういえば今回も感想来てたよな？」

抹茶「えぇ、５５＃さんに注意点を少しとヒロアキ１４１さんにちょっとした質問が有りましたね」

シュウ「そうか、良かったな」

抹茶「えぇ以前からも注意点を上げられて最近本腰入れて直して行きましたよ」

シュウ「お前なぁもう少し早く本腰入れろよな」

抹茶「サーセン」

ドキュンドキュン

シュウ「さて作者はとある事情で喋れなくなったがちゃんと言っとくから安心してくれ」

シュウ「んじゃ、今日は此処までだ」

シュウ「さて俺は生き残れるのか?次回お楽しみに!」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

PHASE23（前書き）

抹茶「はい、今回でオーブ編終ります」

シュウ「速いな、しかしオーブ編最後はどうなるのか楽しみだな」

抹茶「そうですか、気に成りますか」

シュウ「あぁ内容喋らなくて良いからな？」

抹茶「ごめんなさい、頼むから前回の後書きみたいな惨状は辞めてくれ。あの後怪我治すの大変だったんだ」

シュウ「だったら迂闊に内容喋ろうとか思ってんじゃねぇぞ？」

抹茶「すいません、まぁそれでも今回も必死に書いたんですけどね」

シュウ「1週間以内には書きたい訳なんだな」

抹茶「えぇ、そうです。読んでくれる読者が居るだけで書けますよ」

シュウ「そうか、此れからも頑張れよ」

抹茶「えぇ、頑張ります」

抹茶・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE23

「しかし、すいませんね。急とは言え斬艦刀を借りてしまって」とマリューさんに言った

「いえ、大丈夫よ。でも何故斬艦刀を必要としてたの？」と改めて借りた理由を尋ねてきた

「それがですね。成り行きでシェルターを守る時にカラミティの攻撃のせいで盾が溶けちゃったんですよ。それでカラミティの武装を所々見ても射撃武器しか着いてないのでバスターの派生で格闘武器は一切着けてないと判断し斬艦刀の射出を要請したんです」と理由を話した

「成るほど、判りました。しかしビームサーベルは取り入れないの？」と聞かれた

「うーん、欲しいんだけど威力が心許無いから…正直言うと斬艦刀が欲しい」と本音を言った

「それは流石に現ストライクのパイロットであるフラガ少佐に聞かないとマズイですね」
とマリューさんも了承し辛いようだった

「まぁ、駄目元で聞いてきますよ」と言ってシュミレーター室に居そうな予感がしたので向かった

～シュミレーター室～
「やっぱり居た」と予想を当てれた事が少し嬉しかったシュウだった

「おっ、シュウか如何したんだ？」と聞いてきた

「すいません、ムウさんってソードストライカー良く使いますか？」と聞いたが

「へっ？乗り始めたばっかりなのに何でそんな事を聞くんだ？」とムウさんも疑問に成っていた

「その、もしムウさんがソードストライカー以外のパックで出る時は斬艦刀を借りても良いですか？」と聞いてみた

「え、そりゃ何でだい？」とますます理解が出来ていなかった

「あっ、すいません実はですね…」と先程マリューさんの時に話した事をムウさんにも話した。

「成る程な、判った。俺が使わない時は使っても良いぞ」と許可をくれた

「ありがとうございます、それでは失礼します」と感謝して自分のジャンク艦に向かった

～ジャンク艦～

「さてと、次は盾だけど此れは、右腕にいっその事何かをくっつけ様かな」と考えていた

「シュウさんどうかしたんですか？」とシラユキが聞いてきた

「あぁ、この前カラミティとの戦闘で盾が完全に使い物に成らないから、新しく作るんだけど、どんな形にしようか悩んでるんだよ」

「そうなんですか、でもシュウさん貴方余程の事が無い限り被弾しないのに盾欲しいんですか？」
とシラユキが呆れてそう言ってきた

「時と場合によるっての、今回はシェルター守る為に消費したから次も有ると考えた時には、如何しても欲しいんだ」

「それなら今回戦闘した時に大量のダガーとＭ１アストレイの盾が落ちてるんですからどっちか付ければ良いじゃないですか」と当たり前のように言って来た

「そうだな。今回の戦闘で多くのＭＳが壊れたんだから良い物位落ちてるか」
と言って戦闘の有った場所に向かった

そして戦場跡に着いたと同時に少しだけ戦死して行った者達に黙祷をし周りを見回した

「あん時は激しい戦闘で余裕が無かったが改めて戦場を見ると酷い光景だな」と惨状を見て呟いた

「最初来た時はあんなに綺麗な景色だったのに…」

「悲しみたいのは、皆同じだ。だけど俺らは立ち止まっちゃ行けないんだ。戦争が終るまで」
と言いながらシュウは周りを見回しながら使えそうな物を探していた

そしてそこまで壊れ方が酷くないＭ１アストレイの盾を見つけれたが

「何をしているの？」とエリカさんが近寄って来た

「アンタには関係ないさ」と関りたくないのでそう答えたが

「シュウさんのＭＳの盾が無くなったんで使えそうな物を回収しに来ただけです」

とシラユキが答えていた

「シ…シラユキなんで教えてるんだ？」と軽く唖然としていたが

「えっ？何か良い物くれるかも知れないじゃないですか」と言い切っていたので

「何となくだけど事情は判ったわ、モルゲンレーテでストライクの盾渡すから好きに使いなさい」

「何で俺にそんな事をするんだ？そっちにメリットは無いだろ？」

と聞いてしまった

「そうね、ただ答えるなら貴方もオーブを守ってくれる人間だからかしらね」

と何とも曖昧な答えが帰ってきた

「そうかい、まぁ貰える物はありがたく貰っておくよ」

と軽く答えておいてストライクの盾を貰った

「しかし貰ったのは良いんだが、どう改造しようかな？」

と再び問題に成ってしまった

「そういえば、シュウさん毎回思うんですが、あのガトリングって軽量化出来ないんですか？」

「ちょっと難しいな、あれでもＭＳの腕一本でも持てる様に軽くしたんだが撃つ時は如何しても両手を使うんだ」

「そうなんですか、もしガトリングの軽量化を出来たら盾に付けても良いんじゃないかな？って思ったんですけど」

「そうか、その手があったか、すっかり忘れてた。ＩＷＳＰの盾ってストライクの盾にガトリング付けてたな、ガトリングを４連装にすれば何とか成るな」

と言って凍結していた設計図を取出しストライクＩＷＳＰの盾に酷似した盾を作り出すシュウだった。

だが次の日……

「シュウさん再び連合が攻めてきました！」とシラユキが駆け込んできた。

「はぁ、またなのか」

と原作通り話は進んで居るがオーブに戦闘を吹っ掛けて来る連合に頭を悩まされるシュウだった

「取り敢えず直ぐに準備をして迎撃をして欲しいそうです」と言って来た

「判った、取り敢えず今回徹夜で仕上げて本当に良かった」

と呟きながらキマイラの右腕に装着されたガトリングシールドを見

つめた。

「仕方ない…出るか、今回シラユキは如何するんだ?」と聞いたら

「へっ?一応エンジェルに乗って連合のダガーを迎撃する予定ですが…」と言ってきたが

「駄目だ、お前は今回は出るな。一応アークエンジェルの格納庫にエンジェル積んで休んどけ」

とシュウはシラユキに対してそう言った

「えっ?何でですか?理由を教えてください!」と言って来た

「良いか?良く聞けこのままだとオーブは自爆して連合の思い通りにはさせる気は無いんだ。だから此処は俺が出るべきなんだ」

「そんなの理由に成ってません!」と言われ

「判ってくれ。それに良いか、此処で脱出するにはマスドライバーで宇宙に上がるしかない、それで俺は最後に飛ばされるクサナギに掴まって一緒に上がる。…それにお前は、まだリミッター解除を使った事無いだろ?」

「ッ!……はい。リミッター解除は、まだ一度も使ってません」と言ってきた

「大丈夫だ、責めてるわけじゃない、ただぶっつけ本番でリミッター解除は少し危ないんだ」

とシュウは何とかシラユキを言い聞かせた

「判りました、シュウさんの指示に従います。…ただ無事に帰ってきてくださいね！」と言われて

「ハハッ、俺が今まで一度も戦場で落とされた事なんて無いだろ？今回も大丈夫さ」
と言ってキマイラに乗り込み出撃していった。

～シラユキＳＩＤＥ～
隊長がキマイラに乗って出撃していった。しかし私は何故か胸騒ぎがして止まらなかった

そう二度と帰って来ない様なそんな気がして止まらなかった。しかし「帰ってくる」と約束したのできっと戻って来てくれる筈です。

「シュウさんお願いですから。無事に帰ってきてください」と私はただただ願う事しか出来なかった

（私がリミッター解除を恐れたせいでシュウさんにも負担が掛かる。私も何時か誰かを守れるくらい強い人間になるのかな？）と思いつつもエンジェルに乗り込みアークエンジェルへと向かった。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

とりあえず斬艦刀を射出して貰い

「クッ！敵の数が多すぎる」と愚痴りながらも目の前に居たダガーを切り裂いた。

だが壊し続けても敵は何時まで経っても数が減らない…寧ろ増えてると言った方が正しいかも知れない

「こんだけ数が多かったら迎撃するのも大変だっつーの！」
とバスターのパイロットディアッカも愚痴りながら2つの銃をくっ付け収束火線ライフルの方で敵を薙ぎ払っていた。

「ヒュウ～♪ディアッカやるじゃん」
と言ってガトリングシールドをダガー達に向けて撃ち隙が出来た所をビームキャノンと射出型アーマーシュナイダーで落としていくが

「余所見すんな馬鹿野郎！」と怒られてしまった。

「そうだぜ、あんまし余裕扱いてると足元すくわれるぞ」とムウさんにも言われて

「良い事言うじゃんおっさん」とディアッカが言い「おっさんじゃ無い！」と注意していた

「余裕はこく暇が有ったらこんな事してねぇ…よ！っと、それに漫才する暇が有ったら戦えっての！」
と言いながらダガーがビームサーベルで振り上げて攻撃して来た。だが左腕でビームサーベルを持ってる腕を掴みガトリングシールドでコックピットを撃ち抜いた。

動力系を貫いてないので爆発は起きなかった、そして掴んだダガーを敵の方に投げつけ爆炎弾を撃ち込んだ。結果としては周りにも少数だが爆発でダメージを与えたが反撃とばかりにビームライフルの雨が帰ってくる。

「クソッ！幾ら撃っても数が一向に減らないじゃねぇか！」
と呟きながら盾を構えて後方に下がり始めた所で

「今オーブの為に戦っているＭＳパイロットに告げる、これよりオーブはマスドライバーで戦艦を打ち上げた後自爆する！至急退避せよ。奴等連合の好きにはさせん」

「マジかよ、如何するおっさん」とオーブの決断に驚いてたディアッカはこれから如何するか聞いてきた

「おっさんじゃない！取り敢えず俺らはＥＮが少ないから撤退するしかないだろ」
と言ってアークエンジェルの方に向きを変えて行きかけてる途中で

「シュウも来るんだ！」とムウさんに言われた。

しかし「いえ、俺は此処で少しでも足止めをしときます」と言って敢えて残る方を選択した。

「馬鹿野郎！死にたいのか」とムウさんに怒鳴られたが

「大丈夫です。まだリミッターは解除してないんでギリギリに成ったら自分も撤退します」
と言いながらも迫って来ているダガー達に７６ｍｍ突撃銃や拡散弾を撃って反撃していた

「判った…。無事に帰って来いよ」と唇を噛んで答えていた

ストライクとバスターはそろそろＥＮが足りなくなって動けなくなる、そうなったら援護では無く。むしろキマイラの邪魔に成るのだ。最後には、若い奴に戦場を任して撤退する自分を恨めしく思うムウだった。

そしてストライクとバスターがアークエンジェルに収容されてる所を見て

「さて、此処もそろそろマズイな」

と言ってマスドライバーの方を横目で確認したら、アークエンジェルが飛び出していた。どうやら二機を律儀に待っていたのだろう

「ふぅ、取り敢えず俺も撤退するべきかな？」

そう言って、自分の周りを確認しても味方機は一機も存在せず戦況的に見ても、もう此処は持たないと判断し羽を広げフリーダムとジャスティスが居る場所へと向った。

「キラ君　アスラン君そろそろ撤退だ。もう少しでクサナギが飛ばされる。それを逃したら宇宙に上がる事がキミ達は出来無い」

そう言って近づいてくるフォビドゥンに斬艦刀を振るう、しかし僅かに後ろに下がられ空振りと成り隙が出来てしまった。

そしてフォビドゥンがニーズヘグを振り上げキマイラ目掛けて攻撃してくるが、ジャスティスがフォビドゥンに蹴りを食らわせ吹き飛ばす

「大丈夫か？」とアスランが聞いてくる

「あぁ、すまない。助かったよ」

と言ってリミッター解除を使う前に救われたので身体的危険は無かった。

だが地上の敵に対して気を抜いてしまったのが運の尽きなのか突然後ろから大きな衝撃が走った

「グッ！」と言って地上を確認する。カラミティがこっちにバズーカを向けて放ったらしい

「チッ！気を抜いてたのは失態だな」

とシュウは自分のミスに舌打ちするがカラミティに対して斬艦刀を振り上げる。

だが右に避けられる…しかし

「甘いんだよ！」

と言いながら斬艦刀を地面に突き刺し、それを支点として機体のブースターを巧みに使い機体を回転させ蹴りを放つ。

とっさの予想外の行動に反応し切れなかったのか蹴りはカラミティの頭部に当たりカメラが破損していた。

そして「シュウさん！そろそろクサナギが出ます、行きましょう！」とキラ君が言ってクサナギを掴んでいた

「直ぐに行く」と言って機体の羽を動かすが少し煙が出ていた

「注意して、使わないとな」と呟き羽を広げてクサナギの後方に出ている取っ手を掴んだ。

そしてクサナギも三機が捕まった事を確認すると同時に発進した。

だが連合にもメンツがあるのかこっちに攻撃してくる。

普段のシュウなら、撤退戦なら盾を構えてＭＳには被弾はしなかった筈だ。

そうＭＳなら被弾はしなかった…。だが運が悪かったのか、後方に有るキマイラの掴んでいる取っ手に弾が被弾した。そしてキマイラは空中へと身を投げ出された

「クッ！」と唐突に掛かるＧに驚きつつも羽を広げて空中に留まる。しかし先程までキマイラを運んでいたクサナギは既に宇宙へと飛びだった後だった。

（どうせ狙いはキマイラなのだろう？）

とシュウは思ってしまった。これだけのＭＳを作り出せるのだからパイロットもさぞかし優秀と判断されたのだろう。

だが「俺はあんた等連合には絶対に掴まりたくないね」と言って、クサナギを負う為に再び上昇した。

そして「リミッター解除５分」と呟きブースターを解放し可能か判らないが単機で宇宙（ソラ）へと向った。

（たった…そうたった５％の確立だ。これで死ぬ確立は９５％…。だが俺はまだ死ぬ気は更々無い！）

と思い飛び立った。そして機体が宇宙に到達したのか体が急に軽くなった。そして危険性のあるディンの羽をパージして安心した。だが其処でシュウは意識を失った

～キラＳＩＤＥ～

「アスラン！シュウさんが！」と普段冷静なキラも慌てていた

「判ってる！だけど！」とアスランも歯を食いしばり軽く諦めてし

まいそうだった。

まさかキマイラだけがオーブに取り残されるとは…。さっきまで隣の取っ手を掴んで居た機体は存在しなくなった。

「そんな…そんな事って」

とキラは泣き出しそうに成っていたが、何かが此方に向かって近づいて来ていた

「あれは、キマイラ！？　単機でこっちまで上がって来たのか！」

とアスランが驚愕した。

当然だ。ＭＳと言えども単機で宇宙に上がるには、後付装備で大型ブースターが必要なはずだ。

つまりリミッター解除を使ったとしか考えられない…。そしてキマイラは宇宙に上がったと判ると動かなくなりそして羽の部分がパージされたが、何故か此方には近づかず全くと言って良いほどキマイラが動いていない。

「アスラン！マズイあのままじゃシュウさんが死んでしまう！」

とキラは言ってキマイラの危険性を思い出しすぐさま機体に近づいた。

「！？　どう言う事なんだキラ！」

と流石にアスランも事情が判らないのでイキナリ死ぬという単語には、驚いたらしい。

「事情は後で！今は直ぐにシュウさんを！」

と言ってキマイラを掴みクサナギのハンガーへと入り込みコックピ

ットをこじ開けた。

正直その場に居た全員が青ざめた。そうシュウはリミッター解除の代償なのか大量の血を吐いていて意識が無かったのだ。

「すぐ医務室へ！」と誰かが言っていた。そして直ぐに担架が来て運ばれていった。

パイロットスーツの下もきっと酷い事が起きているのだろう

ただキラは、この惨状を呆然と受け止めるしか無かった。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

PHASE23（後書き）

抹茶「はい、少し速いですが此処でオーブ編が終わり宇宙編へと話が変わります」

シラユキ「そんな事は如何でも良いんです！シュウさんはどうなるんですか！」

抹茶「えっ？今回新しく入ったパートナーってヒロインかぁぁぁぁ」

シラユキ「当然じゃないですか！シュウさん居る所に私有りです！」

抹茶「はいはい、判った判った。取り敢えず惚気話は要らないからな」

シラユキ「なっ…なんで判ったんですか！？」

抹茶「何かそんな気したけど、まさか正解とは自分でも予想外だ」

シラユキ「まぁ良いです。取り敢えずシュウさんはどうなるんですか？」

抹茶「その質問二回目だな。答えたら面白くないだろうが！」

シラユキ「すっ…すいません」

抹茶「判ってくれれば良いよ。まぁ死なないと思う」

シラユキ「そうですか、そういえば今回も感想着てましたね」

抹茶「あぁ、三ノ丸さんから来たね。有難う御座います」

シラユキ「あぁ、そう言えば作者は、感想貰えるとテンション上がるタイプなんですか？」

抹茶「お前は俺の友人と一緒の事聞いてくるな。まぁ良い感想貰えるだけで頑張る気は起きるさ、テンションまでは上がらない」

シラユキ「残念です。テンション上がる人だと思ってたのに」

抹茶「お前は俺に何を期待してるんだ？取り敢えず後書き閉めるか」

抹茶・シラユキ「さてシュウ（さん）は生き残れるのか？次回お楽しみに！！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ２４（前書き）

シラユキ「はいっフェイズ２４始まりますよー」

抹茶「ちょっ！俺のセリフ取るなよ！」

シラユキ「良いじゃないですか、どうせ此処でしか会話出来ないから影薄いから」

抹茶「影薄いって酷いや、シュウの時はもうちょい扱いが良かったのに」

シラユキ「そんな事言われても仕方有りませんよ、作者が小説介入は禁止ですからね」

抹茶「そんな無粋な事はしないっての」

シラユキ「ついでに言うとシュウさんの復活も…」

抹茶「馬鹿な事言ってないで本編入るぞ」

シラユキ「あっ、そうですね」

シラユキ・抹茶「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE24

「えっ…？如何言う事ですか、それって嘘ですよね？」
と今聞いた事をとてもじゃないが信じられなかった

そう、自力でシュウは宇宙まで上がって来たがリミッター解除の反動で意識不明の重体と成ってしまったのだ。

「残念ながら、嘘じゃないんだ」
とムウは答えた、何故自分だけが無事で彼が瀕死の重体に成ったのだろう、あの時に無理にでも撤退をさせてればこんな事には成らなかったはずだ。とムウは思っていた

「今シュウさんは何処に入るんですか！」とシラユキがムウさんに居場所を聞いた

「クサナギの医務室に居る…だが」と言おうとしたが

「その次は言わないで下さい。言ったら例え5%の確立でも私は最後まで奇跡を起きる事を信じます」
と少し声に怒気が入っていた。そしてシラユキはクサナギの医務室へと向かった。

「シュウさん！」と言って医務室に入った。当然だがシュウを心配した他の人達も居た

全員が全員複雑な表情をしてこっちを見てきた。

「重体の人が居るんだから静かにしろ！」

と金髪の女性に注意されたが、今はその言葉すら耳に入らなかった

そしてシラユキは肝心のシュウの方を確認した。正直見るに耐えなかった。体全体に痣や内出血が出ており口には血を吐いたと思われる跡があった。更には骨が折れているのかヒビが入っているのか謎だが、ギブスが体に巻かれていた。そして右腕に点滴のチューブが刺さっており体中には心電計のコードが張り付いていて呼吸も荒かった。正直まだ生きてる方が不思議なほどの怪我だった

「なん・・で・?何でこんな事に?」

シラユキもそう言うしかなかった。オーブのハンガーで無事に帰ってくると…今回も大丈夫と聞いたのに何故こんな事に?

「シラユキさん大丈夫ですか?」とキラ君が尋ねてきた。

だが「どうして?どうしてこうなったの?無事に帰ってきてくれるって…言ってくれたのに」

と他人の言葉すらも耳に入らず、そう呟いて涙を流していた。

さすがに見るに耐えなかったのか

「オイッ大丈夫か!しっかりしろ、お前にとって辛いが此れは現実なんだ受け止めろ!」

と金髪の女性が言ってくるが、この言葉に何故かシラユキは怒りを覚えた

「あなたに…貴方に何が判るんですか!何もしら（パンッ!）…ッ!」

シラユキはカガリに怒りをぶつけようと仕掛けたがキラに叩かれた

「叩いたのはごめん。でも悲しいのはキミだけじゃないんだ。カガリだって父親を亡くしてるんだ、だからそんな事は言っちゃ駄目だよ」とキラが謝りつつも自分の間違いを言われた。

叩かれて少し冷静になったシラユキは自分の言った事を少し反省してしまった

「…すいません皆さん感情的に成って、私ちょっと頭冷やしてきます」と言って医務室を出て行った

「私最低だな…」と呟きながらこっちに来るまでに乗ってきたエンジェルまで向かった。

来た時はシュウさんの事で頭が一杯だったがM1アストレイが並んでるなかキマイラが目に付いた。

何故か違和感を感じたので近づいてみた。良く見ると所々機体がボロボロに成っていたキマイラが居た。後方を確認すると以前背中に着けていた筈のディンの羽が存在していなかった。

「ヒドイ…こんなに成るまで戦わないといけない激戦だったなんて」と思わず呟いてしまった。幾らエンジェルを使っていても、未だにシラユキはシュウには勝った事が無い。もし自分が出ていたらこの程度の損傷で済んでいたのだろうか?と思っていたところを

「あらっ?貴方確かシュウ君と一緒に居た」とエリカさんが近づいてきた

「シラユキ・カグヤです。この機体どうなりますかね?」

とシュウの愛機が如何なるか気に成ってしまった。

「正直言って最悪ね、機体が悲鳴を上げてる様な物だわ。それに所々ケーブルが焼ききれて修理に時間が掛かりそうよ。正直他の機体に乗り変えた方が速いんじゃないかしら？」

「すいません、でも此れはシュウさんが一番大切にしてる機体なんです。何とか直してあげて下さい」
とシラユキはエリカに対して頭を下げて頼み込んだ。

「ふぅ、判ったわ。シュウ君を大切にしてる子にまで頼まれたら引き下がれないわね。何でシュウ君はこんなに可愛い子なのに鈍感なのかしらね？」と溜息を付いてしまった

「仕方ないですよ。シュウさんって何か機械をいじる事が好きですから、そのせいで鈍感に成ってても可笑しく無いです」と軽く諦め気味に成っていた

「あっ、そうだ。もし良かったらキマイラの中に残ってた戦闘の映像でも見る？」と言ってきた

「戦闘データが残ってるんですか！？さっきコードが焼ききれたって言ったからデータも一部無くなってると思ってたのに…」

「データは少し破損してたけど何とか元には戻せたわ。此れを見て戦闘パターンを増やしてみる事ね」
と言ってエリカからＵＳＢメモリーを渡された。

「ありがとうございます。では失礼します」
と言ってエンジェルに乗り込み。ジャンク艦へと向かった

今回得た戦闘データを少しでも真似をするために神経を研ぎ澄まし、本物と見間違える事の無い技を得る為に一人に成りたかった。

「シュウさんと私のメインとしてる戦闘全然違うじゃないですか！これじゃ全く参考にも成らないかも」そうシュウとシラユキはお互いにメインに使っている武器が違うのだ。

シュウが射撃をメイン・シラユキは格闘をメインに戦っているせいで格闘戦以外の場所は全くと言って良いほどに経験に成らなかった。

そしてシュウとシラユキには一つだけ大きな差が出ていた。

そうリミッター解除を使うか使わないかの差だ。正直言って彼女は畏怖していたのだ。エンジェルとキマイラはリミッター解除を使うか使わないかによって戦闘の状況が例え不利でも一気に覆せるでも命の危険性の有る物をそこまで使いたく無いと言う本音も有った。

「はぁ、私って全然駄目だなぁ」と思って映像を見続けていたが次の瞬間キマイラにバズーカが着弾してシラユキも驚いてしまった。

「うそっ…あのシュウさんが敵の攻撃を避けれないなんて」と目の前の光景に絶句した。シラユキが今まで戦場に出てシュウの側で戦った時は、シュウは弾は掠っても、直撃をする事は余り無いのだ。反応すら出来ず、マトモに食らうのは既にこの時に何かが有ったのでは?とシラユキは思うしかなかった。

「シュウさん貴方はまだ何か隠しているんですか?」と呟く事しか

出来なかった。

～シュウＳＩＤＥ～

「はぁ…何でこうなったんかねぇ」と言うしかなかった。

「それは貴方がアホだからですよ」と女神が頭を悩めながら言ってくる

「アホってヒドイですね。しかも頭痛大丈夫ですか？」と聞いてみたが

「誰のせいだと思ってるんですか？今回で此処来るの３回目ですよ？予想外も良い所です」と言われたが

「俺も好きで来てんじゃねぇよ、リミッター解除の反動で死に掛けて来てるだけだ」と言い返した

「やっぱりあの救済策必要だったんじゃ？」とブツブツ言ってるが無視するシュウだった

「まぁ体の方が目覚めるまで精神は此処に滞在させてもらうぞ？」と聞いといた

「えっ？まぁ目が覚めるのも早いですけど、直ぐにはＭＳの方には乗れませんね」と言われて

「はっ？どう言うことだ。今俺の体どうなってんだ？」と聞いてみた

「自分の体を見たいんですか？瀕死の体なのに…」と言われたが

「5分経ったら体がどうなるのか確認したいんだ。まぁ、ようはMSを作り出した物として責任持って最後まで確認してやるもんだ」

「この機械オタめ…」と言われながら目の前に映像を出された。

「ふむふむ、5分間使うと体はボロボロに成るんだな。しかし自分の体酷い有様だな」

と自分の体を見てそう呟くしかなかった

(はてさて、この瀕死の状態から復活したら全員何を思うかねぇ?)

とシュウは其処を気がかりに成りつつもデータを取っていた。

~SIDE　END~

暫くボッーとして窓の外に映る宇宙を眺めていたシラユキだった。

しかし見ている途中でフリーダムとシャトルが飛んでいった。

「何か有ったのかな?」

と呟いた。このまま進路ではヤキン・ドゥーエ方面だ。多少気になりハンガーへと向かった。

「シュウさん今回だけ借りますね」と言ってシュウが使っていたガトリングシールドを装備し出撃した

そしてシャトルとフリーダムに近づき「如何なさったんですか」と聞いてみた

「父上に話をしに行く」とアスランが答えた

「そんなわざわざ死にに行くような物じゃないですか!」と言ったが

「大丈夫、僕もアスランもシュウさんも貴方もまだ死ねないはずだと思います」とキラ君が言って来た

「そうですね、まだ私達は死ねませんね」と言って機体が進める領域まで進みシャトルを見送った

「取り敢えず此処で待機しましょう」とシラユキが言い

「そうですね、待っときましょうか」と言って帰って来るまで待っていたが

～一時間後～

エンジェルとフリーダムの索敵レーダーにＭＳと戦艦の情報が出てきた。

「行きましょう！」

と言ってエンジェルを起動させ戦艦へと向かった。少し遅れながらもフリーダムも着いてくる。

そして確認したところではミサイルがピンク色の戦艦に当ろうとしていたが

「やらせないっ！」と言って近づいていたミサイルを全てガトリングシールドで撃ち落した。

そしてジンとシグーが二機ずつ突っ込んできたが…。

（怖い…怖い…怖い…怖い…怖い…怖い）とシラユキは思っていたが、

（それでもシュウさんは私を信頼してくれた、今こそその信頼に応えてみせる！）と思い切り

「リミッター解除…３０秒間」と唇が震えながらもそう呟いた。シラユキは怖かったが、シュウを心配させない為にもそう呟き機体を動かした。

直後エンジェルは目視出来ない程のスピードで固まって動いていたジン達を後ろからブレードで切り裂いた。

シグーは咄嗟に危険性が判ったのか散開したが

「遅すぎますね」と呟き１機はガトリングシールドで移動先を予測し撃ち放ってシグーをを蜂の巣にし、２機目もキマイラがやったように機体を捻らせ蹴りを放ちカメラを壊した後に追い討ちを掛けるようにガンブレードの貫通弾を撃ち込んだ。

そして最後のシグーが爆破したと同時にエンジェルのリミッター解除は終了した。

そして初のリミッター解除で呼吸が速かったが使いこなせば強くなれると確信したシラユキだった。

フリーダムの方を確認したらどうやらエターナルの艦長と話しているようだ。流石に会話の邪魔をしたくないので

「エンジェル今から帰還します」と言って充実感を持ちながら戦艦へと戻って行った。

ＰＨＡＳＥ２４（後書き）

シラユキ「いやぁ、ようやくリミッター解除出来ましたね」

抹茶「正直言って遅いと思うがな」

シラユキ「酷いです。そんな事言わないで下さい」

抹茶「いや、仕方ないだろ、皆からしたら要約リミッター解除使い始めたかと思った人も少なくない筈だ」

シラユキ「うぅ、本当だったら辛いですよ、でもあれを今まで使わなかったのは死ぬと言う恐怖が有ったからですよ！」

抹茶「そうかい、まぁでもこのまま使い続けられそうだろ？」

シラユキ「えぇ、未だ怖いですけどシュウさんの期待に応えるのと慣れたいですからね」

抹茶「そうかい、じゃあ後書きも閉めるか」

抹茶・シラユキ「さてシュウ（さん）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ２５（前書き）

抹茶「ようやくフェイズ２５を書き上げれた」

シラユキ「お疲れ様です。しかし今回は時間掛かりましたね？」

抹茶「終盤に入れば入るほど話を書くのも難しくなるって物だよ。こう言う時自分の駄文の怨めしさと他の作者の文才能力が羨ましい」

シラユキ「はぁ、そうですか。そういえば今回どう言う話に成ってるんですか？」

抹茶「ん？今回はドミニオンが初登場する場所だ」

シラユキ「メンデルコロニー付近での戦闘ですね。判ります」

抹茶「まぁ本編読めば大抵内容は判るさ」

抹茶・シラユキ「では本編をお楽しみ下さい！」

PHASE25

「ふぅ・・・」シラユキはシュミレーターから出てため息をついしてしまった。

前回エターナル防衛線でリミッター解除を使い始めたが一刻も早く慣らす為に同等のGをシュミレーターに掛けて1分間の事を30分の休憩を入れて訓練をし始めた。

しかし戦場で戦う時と同等のGが掛かるせいか疲労感が半端無く、休憩無しでやるとシュウの二の舞に成る恐れが有るので慎重にやってはいるが

「それでもシュウさんみたいにリミッター解除上手く使えないなぁ」と愚痴をこぼしてしまった

そう、リミッター解除は速度に慣れない限り逆にデブリに突っ込むなど等色々な危険性も残るのだ。

シラユキは今さっきから練習をしているが何度もデブリに突っ込んでいるのだ。その点シュウは、ほぼ練習無しで使い続けているので才能があると言えるだろう。

「はぁ、うじうじ考えても無駄ですね。この後の進路聞かなきゃ」そう言って訓練を切り上げブリッジへと向かった

そしてブリッジに入った瞬間に久々に見た顔が有った。

「バルドフェルド隊長!?」

とシラユキはバルドフェルドが生きていた事に驚きを隠せなかった

「やぁシラユキ君じゃないか、久しぶりだね」
と陽気に挨拶してきたが

「えぇ、お久しぶりです。隣にいる女性はラクス・クラインさんですか？」
と気に成って聞いてみた

「えぇ改めてラクス・クラインですわ。共に平和な時代を創りましょう」
と微笑んできた

「シラユキ・カグヤです。これから宜しくお願いします」と言って軽く会釈した

「そう言えばシュウ君は如何したんだい？何時もシラユキ君と一緒に居ると思ったんだが」
と気まずい事を聞いてきた。

「シュウさんは今キマイラのリミッター解除の影響で意識不明の重体です」とシラユキは答えた

「じゃあ、あの時ミサイルを叩き落してくれたＭＳのパイロットってシラユキ君なのかね？」と聞いてきた

「えぇＭ１アストレイを改造した機体　シュウさんはエンジェルと名付けてます」

「そうかい、良い機体を彼は造ってくれたんだね」と言ってくれた

「はい、そういえば今私達は何処に向かってるんですか？」とシラユキは気に成っていた行き先を聞いた。

「今は私達はＬ４メンデルコロニーに向かってるわ」とマリューさんが答えてくれた

「なるほど…あの場所は一度バイオハザードが起きて廃棄されたコロニーでしたね。其処まで損傷はなかったはずだから隠れ蓑にも最適か…」
とシラユキはメンデルコロニーの内容を呟き考え事を打ち切った

「判りました…では私は、まだ用事が有るので此れで失礼します」と言ってブリッジから出て行った。

「さて…とシュウさん様子でも見に行きましょうかね」と言って医務室へと向かった

未だ目覚める余地が無くてもそれでもシラユキは暇が有る間はシュウを見に行っていた

「シュウさん、そろそろ起きて下さいよ。貴方が起きなきゃ皆何時までも心配してますよ？」
と眠っているシュウに話しかけた

だがシュウは未だに目が覚めようともしない

「何でこんなに成るまで無茶したんですか?私の力が足りないからですか?」
と軽く涙目に成りかけた

「如何してこんなになるまで戦い続けるんですか?もっと私を頼って下さいよ!」
と涙を流しながら怒った

だがそんな怒りは空しくただただシラユキが涙を零していた。しかしそんな中突如出撃要請が鳴り始めた

咄嗟に涙を拭いてシュウの方を向いた

「今度こそ私は貴方を絶対に止めて見せます。貴方が無茶しても私が止めれるように頑張りますから見てて下さい」
と自分の力を見せる様に言い、エンジェルへと向かった。

ハンガーでエンジェルに乗り込もうとしたら

「嬢ちゃん頼むから壊さないでくれよぉ」とマードックが声をかけてくる

「判ってます、被弾したら死ぬかもしれないので私だって当たりたくないですよ」と言ってハッチを閉めた

「あっ、そうだ、もしかしたら使うかもしれないので借りて行きますね」
そう言ってハンガーの隅に置かれていたシュウが使ってたグレネードランチャーを腰に掛けてカタパルトに着いて姿勢をかがめたが

「あっ！嬢ちゃん待った――――！」とマードックの叫びが聞こえたがもう遅くエンジェルは宇宙へと飛び出した

そして目の前の光景シラユキは驚いてしまった、何故なら目の前にもアークエンジェルがいたからだ。だが良く確認したら形は同じだが色彩は白色から灰色へと変更されていた。

つまり形は同じでも色が違うと言う事はアークエンジェル級でも名前が違うのだろう。

そして今は、戦場に居るのだ些細な事は気にせず目の前の事を見なければと思い目の前のダガー達に斬りかかって行った。

敵からも突然の事で驚いたのだろう、こっちに振り向き防ごうとはしたがダガーは両腕を切り落とされ戦闘能力を失った。

そして此方を脅威と受け取ったのか3機のダガーが陣形を組んで迫ってきた。同型機だから連繋をしやすい筈だがお互いの動きを邪魔し合ってるような動きが良く目についてしまった。

だが通信で話し合いが終ったのか二機のダガーがサーベルを抜いて斬りかかって来てもう一機がビームライフルを連射してくる。

（まぁ一般的な攻撃方法としては此れも正しいですけど）と思いながら、体を捻らせる等必要最低限の行動で回避していく

そして突っ込んでくる2機のダガーを体を捻らせた勢いで1機目を斜めに切り裂く。

だが大振りの攻撃で隙が有ると判断したのだろう、もう一機のダガ

ーも攻撃に参加するが

「上半身だけに装備されてる武器だけでしか攻撃できないと判断しないで下さい！」そう言って残った両脚で胴体ががら空きな二機纏めて蹴り飛ばした。

そして先程ハンガーで借りたグレネードランチャーをダガーに構えて引き金を引いたが弾は何も発射されなかった

「えっ？えっ？何で！？」と思いながらモニターを見たら弾切れの文字が出ていた。

きっと暴発を恐れてグレネードランチャーに入っていた弾を全て抜いたのだろう……だが今の状況で此れは酷い

取り敢えずシラユキは

「マ……マードックさんのバカ――――――――――――――！！」

と叫んどいた

そして態勢を立て直したダガーが再び此方にビームライフルを向けるが、ビームを撃たれる事は無くダガー達がビームに貫かれ爆破した。

「何が？」と一瞬驚いたが「大丈夫か嬢ちゃん？」とムウさんが聞いてくる

「ありがとうございます」と感謝して再び意識を戦場へと向けた。

だが「次から気をつけろよ」とムウさんから注意された

しかし、確認しなかった自分も悪いが最悪な事にエンジェルに弾等は積んでいない。

此れではただの鉄の塊と何も変わらない…流石に使えない物を何時までも持っていても無駄なので再びグレネードランチャーを腰に掛けた。

そして少し落ち込んでいる所をキサカさんが

「すまないがクサナギに何かが引っ掛っている切り離してくれ」と頼まれたので

「判りました、直ぐ行います」そう言ってシラユキは先程から動いていないクサナギに近づいて行った。

モニターで何が引っ掛かっているのか確認してみたところワイヤーが幾重にもクサナギに引っ掛かり動きを阻害していた。

だが「この程度でしたらガンソードでも切り離せますね」と言ってワイヤーに向かって抜き放ったガンソードを振り下ろし簡単に切り離した

流石にワイヤーが多く一個斬った位ではクサナギは動かなかった。シラユキもクサナギを動かす為に急いで斬っていたが急に此方に対して攻撃を表す警報が鳴り響いた。

一瞬避ける方を考えたがクサナギに被害を出すわけにはいかないので大人しくシールドを構えて何かから放たれたビームを防いだ

しかしシラユキはこの攻撃には見覚えが有った。そう確かキマイラ

の戦闘記録で見た事が有る攻撃だ。

まさかと思い確認したが存在していたのは、モニターに映っていた青い機体では無くＭＡ形態に変形していた黒い機体だった。

「何だ、あの青い機体じゃないんですか…まぁ良いでしょう撃退させるのは変わり無いんですから」

そう言ってもう一本のガンソードを抜き出した。それが戦闘の合図に成ったのか、レイダーがＭＳ形態に戻りミョルニルを放ってきた。

当れば流石に脅威には成ってしまう、だがそれは当ればの話だ。何故ならミョルニルは直線的なので避けるのも容易いのだ。そしてミョルニルが迫ってきている中敢えて前へとエンジェルは突っ込んだ。そして当たるか当たらないかの所を機体を左に傾けミョルニルを掠らせながらもガンソードでワイヤーを切り落とした。そしてミョルニルは宇宙を漂った。

「さて反撃ですね」とあくどい笑みを浮かべながら「リミッター解除３０秒間」と言ってレイダーの側面に移動し腕を切り落とそうとするが

「クッ！」腕を切る事は叶わず装甲に僅かに削る事しか出来なかった。

だがクサナギは他のＭ１アストレイがワイヤーを切るのを行ってくれたのか再び動き出していたのが目についた。流石に灰色のアークエンジェルは不利と察したのか信号弾を何発か撃ち出し撤退し始めた。レイダーも撤退命令を受けたのか此方を確認した後ＭＡ形態に変形し灰色の戦艦に向かってブースターを吹かしていた。

だが急にストライクがメンデルコロニー内に入っていた。後を追う様にバスター・フリーダムがメンデル内に入って行く

「あぁ、もう何やってるんですかあの人達は！ただでさえ戦力が少なくて何時襲われるのか判らないのに」

とシラユキは何が起きたか知らないが中に入って行ったディアッカ・キラ・ムウ達に対してつい愚痴ってしまった。

それでも流石にシラユキは心配には成ったがこれ以上戦力を割くのは危険と判断したシラユキは大人しくアークエンジェルへと戻った。だが帰還したのは良いが未だに警戒が解かれる事は無く、パイロットルームで待機する事に成ってしまった。

だがシラユキは別の事をずっと考えていた…そうＰＳ装甲への対策がエンジェルには全くと言って良いほど無いのだ。幾らエンジェルの持っているガンソードの攻撃が強力とはいえ攻撃が通用しなければ意味が無いのだ。

「はぁ、こんな時シュウさんが居たらガンソード改造してくれるんだろうな」とシラユキはついつい倒れている人頼りにしたいと思っていたが

「暫くはＰＳ装甲着いてる機体には、仕方ないけどビームサーベルとビームライフル使うしかないなぁ。ガンソードよりＥＮを食うけど背に腹は変えられないよね」と自分なりに対策を考えた。

そして有る事を思いついた。

「そうだ！持つんじゃなくて着ければ良いんじゃ？」

そう言ってジャンク艦で見つけたエンジェルの設計図に幾つか手を

加えクサナギまで向かった。そうシラユキはある人物へと頼ろうとした。

そう、その人は……エリカ・シモンズ他モルゲンレーテの工場で働いていた人達に会いに向かった

「エリカさん居ますか？」と早速クサナギのハンガーへと入り近くに居た整備兵に聞いてみた。

「えぇ、居るわよ。どうかしたの？」と後ろから急に声をかけられた

「うひゃあ！」とシラユキは驚き変な声を上げてしまったがそんな事は、後で良いと思ってしまうシラユキだった

「あのですね。私なりにエンジェルの追加武装を考えてみたんですけど手伝って貰えませんか？」そう言っておずおずと手を加えた設計図をエリカに渡した。

「ん？ちょっと見てみるわね」と言って追加武装を軽く眺めた。

そして「良いわね、確かにエンジェルもキマイラもＥＮ兵器持たないから、ある意味便利な武装に成りそうよ」と言って手伝ってくれる事を了承してくれた。

「ありがとうございます！」とシラユキは感謝したが

「良いのよ、私達もシュウ君の設計したエンジェルには興味が有ったから」と笑っていた

「そうですか、ではジャンク艦へ行きましょうか」と言ってモルゲ

ンレーテの職員達はジャンク艦へと向かった。
以前ドミニオンと戦う前にシュウが使っているジャンク艦を見せたら

「此れ凄いわ…改造する為の設備が殆ど揃ってるからクサナギよりも便利ね。シュウ君戦争終ったら此れ売ってくれないかしら？」
と最後らへんがやけに真面目に言われていた。そして改造するならシュウの戦艦が良いという暗黙のルールが出来ていた

～2時間後～
流石にモルゲンレーテの職員総出で手伝ったお陰で直ぐに完成した。
今回新しく武装を着けたのは左肩にデュエルのシヴァを真似てビームライフルを装着させ、両腕にビームサーベルを着けた。

「ある意味相手が腕の装備がビームサーベルって気付かなかったら予想外の一撃として驚かせれますよね」とシラユキが思わず言ってしまった。

「えぇ、そうね。でも生き残れる為なんですから此れ位しなくちゃね」

そしてシラユキはエンジェルを見上げ（この機体を大切な人達を救える力にしたいな）と物思いに耽っていると、ジャンク艦に着いていたモニターが開きマリューさんが映し出された。

「シラユキさん聞こえる？敵が来たから直ぐに発進して欲しいんだけれど出れる？」

「はい、エンジェルの改造も終了したので直ぐに出れます。それよ

りも敵はどれ位の数ですか？」

「前方からアークエンジェル級のドミニオン・後方から3隻ナスカ級が来てるの。今は強力な戦力が一つでも欲しいのよ」

「判りました。直ぐに出ます」と言ってシラユキはエンジェルへと乗り込もうとして

「エリカさん達はクサナギに避難して下さい。ジャンク艦は戦闘能力が其処まで無いんで危険です」と教えといた

「そうね、私達も避難するわ、気をつけてね」

そう言ってエリカさん達技術者は救命艇に乗り込みクサナギに避難して行った。無事に避難できた事を確認したシラユキもエンジェルのハッチを閉めジャンク艦を出た。

しかし次の瞬間ザフト軍の行動に驚きを隠せなかった。そう戦闘が始まる直前に

＜地球連合軍艦アークエンジェル級に告げる…戦闘が開始する前に本艦において拘留中の捕虜を返還したい＞

（こんな時に捕虜の返還？一時的に戦闘の停戦でもするのかな？）と思ったがその考えは次の瞬間打ち砕かれた。

そう返還したいと申しておきながらも引き渡しは完全に終わらないままザフト軍はＭＳを発進させていた。

そして連合軍の方もザフト軍がＭＳを出した事に反応しＭＳを発進させていた。此れでは捕虜が流れ弾で死んでも可笑しくないものだ。

「クッ！ザフト軍は一体何考えてるの！？」とてもじゃないが正気の沙汰では無いとシラユキは思ってしまった

それにザフト・連合両軍から前後から攻められている為どちらか一方を強行突破して此処から抜け出さなければ損害は最悪な物になるだろう。

そして改めて戦場の状況を確認するとそれぞれの戦艦の向きを見る限りヴェサリウスに対してエターナル・クサナギ・ジャンク艦を攻撃に出しドミニオンにはアークエンジェルがぶつけるようだ。

「正直どっちの援護に着くかは言わなくても充分判りそうね」と言ってエターナルの方を援護し始めた。

正直に言ってＮＪＣ（ニュートロンジャマーキャンセラー）の積んである機体が２機もアークエンジェルへ行ってる時点で戦力として充分すぎる。

逆にエターナル達の部隊は其処まで能力の高い兵士が居るとは見受けられないのでそっちの方が心配だ。

そして自分がこっちに来て正解だと思う通信が来た

「シラユキ君此処から一刻も早くこの宙域から脱出する為に我々の方で戦艦を落そうと思う　その為に周りが疎かに成る危険性があるから敵ＭＳの注意を引き付けて欲しい」

とバルドフェルドから直々に頼まれた

「了解しました。任して下さい」と言ってガンソードを抜き出した。だがこのＭＳの脅威性を知っているのかデュエルＡＳがサーベルを

抜いて斬りかかって来た。

「クッ！この機体相手じゃ私も周りに気が配れない！」
と苦言しながらシラユキもビームサーベルをガンソードで受けると壊れると判断し早速ビームサーベルを展開した。

流石にXシリーズに乗ってるだけ有ってかパイロットもさぞかし強い事なのだろう

しかし「この程度なら！」と言ってもう一本のビームサーベルを下から切り上げる様にと思ってサーベルを展開して切り上げようとするがデュエルの方ももう一本サーベルを展開して攻撃を防いでいた。

「なっ！」
流石にこの展開は予想出来ず鍔迫り合いが起こった。そしてエンジェルはデュエルを蹴飛ばし後方に下がりバルカンで牽制し始めた流石にデュエルの方も回避はするが痺れを切らしたのか再び斬りかかってくる。

「この程度で痺れを切らすなら、まだまだ弱いですね…リミッター解除1分間」と呟き高速で移動をしはじめた。当然目標を失ったデュエルは周りを見回すが此方を見つけられないようだ。

しかしそれは当然だろう、普通にXシリーズより機動性の高い機体を簡単に見付けられる筈も無い。

そして「今回は腕一本で許します」と言って後ろに回り込みデュエルの左腕を切り裂いた。咄嗟に後方に下がったが左腕を失った今エンジェルに勝てる術など向こうには無いだろう。

だが急に横からジンがデュエルの援護の為に７６ｍｍ突撃銃を撃って来た。すぐさま反応したシラユキは落ち着きながら後方に下がる。そしてデュエルとエンジェルの間に弾が通り抜けた。流石のシラユキもジンの無謀さに呆れてしまった。

「敢えて見逃そうと思ったんですが」そう言って苛々しながらジンの後方に移動しサーベルでＸ字に切り裂いた。そしてジンが爆破したのを見届けた後にナスカ級が火を噴いて落ちるのが見えた。

（此れで指揮系統は一時的に混乱するでしょうね。はぁ、今日は連戦だからちょっと疲れたな）

と戦場に居ながらシラユキはついつい他の事を考えてしまった。

そして「シラユキ君ご苦労様。悪いが宙域を出るまで警戒してくれ」と頼まれたので、最後までエターナル付近を飛び回りながら警戒したシラユキだった。

３０分後無事に全ての戦艦が戦闘宙域から出れたのでシラユキもアークエンジェルのハンガーへ着艦し割り当てられた部屋に入り込んだ。そして部屋に入ると同時にシラユキはベットへ倒れた。

「はぁ～疲れたぁー」と言いながら瞳を閉じて次の戦闘に備え眠り始めた。

しかし目覚めた後シラユキは連合の使った手段に大激怒するのであった。

PHASE25（後書き）

シラユキ「今回良く私生き残れましたね」

抹茶「んっ？まぁレイダーと遣り合って次はデュエルだろ？生き残れたって事は実力が有るって意味だろ」

シラユキ「そうですかね？まぁ死ななくて良かったと思いますよ」

抹茶「人間生きているほうが何かと良い事有るしね」

シラユキ「そうですね、そう言えば今回大きな指摘受けたそうですね」

抹茶「はいっ深遠の翼さんからご指摘を受け直ぐに訂正致しました。本当有難いですね」

シラユキ「そうですね、早くシュウさんも復活して欲しいな」

抹茶「オイッ其れって俺に書けって言ってるもんだぞ？まぁ良いやそろそろ復活させようと思ってた頃だし、次も頑張るか」

シラユキ「頑張ってください、では後書きも閉めましょう」

シラユキ・抹茶「さてシュウ（さん）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

PHASE26（前書き）

抹茶「さぁ今回はシュウの大復活が起こります」

シラユキ「やったーー！さぁさっさと本編に移りましょう！」

抹茶「オイオイ前書きはちゃんとしないとマズイんだよ」

シラユキ「そうですか。しかし最近投稿日数に時間掛かってませんか？」

抹茶「気のせいだ。多分」

シラユキ「気のせいじゃないですね。如何したんですか？」

抹茶「いや最終話に行くに連れて書くのも難しいんだよ」

シラユキ「もっと頑張って下さいよ」

抹茶「あぁ頑張るかな。さて前書きを閉めるか」

抹茶・シラユキ「では本編をお楽しみ下さい！！」

PHASE26

～？？？～

「ごめんシラユキ　お前は連れて行けない」とシュウの声が聞こえる

「えっ？待ってください！私を一人にしないで！」

と叫んでシラユキは消えようとするシュウを止めようとして腕を伸ばすが伸ばした腕はシュウには届かず、どんどんシラユキとシュウは距離が離れていく。それでもシラユキはシュウを止めるために走って追いかけるが突然体が石のように固くなり動かなくなっていた。

「お願い、止まって！」と泣きそうな声で懇願するが既にシュウの姿が消えていく

「ごめんな、そして今までありがとう」そう言った瞬間シュウの姿が目の前から消えた

～？？？ＥＮＤ～

「私を置いていかないで！」と叫びながらシラユキは目覚めた。

「何なの今の夢は？」

とシラユキは大量の汗をかきながら手を頭に押さえた。そうシュウが全員の目の前から消え去る夢を見てしまったのだ

（全く夢にしては最悪の悪夢ですね）

とシラユキは思ってしまった。そうシュウが消えるはずが無い、彼は毎回傷ついても最後には起きて助けてくれる。そう思い続けたこんな悪夢が現実に成らないよう願って。

だが考え事をしている所を「起きたかね？少し伝えたい事が有るか

ら至急ブリッジへ来てくれ」とバルドフェルドさんに言われた

何か用らしいが何故モニター越しで伝えないのだろうか、それほど重要な事な事が起きてしまったのだろうか？とシラユキも考えたが言われた通り直ぐにブリッジを向かった。

～ブリッジ～

ブリッジに着いたが内容を聞く前に最悪な事だと判ってしまった。何故なら全員が渋い顔をしていたからだ。

そしてバルドフェルドが此方を見ると口が開いた

「漸く来てくれたか、シラユキ君最悪な事に先程連合の手によってボアズが落ちた」と言われたが

「えっ！？」と正直今聞いたことが冗談だと思ってしまった。

そうボアズは一度シラユキも軍に居た時に聞いた事がある。そうプラントの前にはボアズ・ヤキンドゥーエと言う二つの拠点がある、シラユキも地球に居た時にモニター越しで見た事が有るが堅固な構えに充実した戦力決して生半可な戦力では落ちる筈が無いと考えていた。しかし、それがたった今落ちたと聞いた。

「何でですか？あの場所には何時か攻撃されると予測は出来ましたけど、そう簡単に落ちる筈が無いです。何か連合にも決定打が有ったんですか？」

と正直落としたのは冗談だと思いたかったが

「決定打は……核だ」とその言葉を言った瞬間ブリッジに居た人たちは再び苦虫を噛み潰した表情に成っていた。

「えっ?核ですか?」と正直悪い冗談にしか聞こえなかったが全員の表情を見ても先程の表情と何一つ変わってすらいなかった、。此れでシラユキも要約冗談では無いと判ってしまった。

「そんな、また血のバレンタインの惨劇を繰り返すつもりなんですか!?」

と流石のシラユキも今回の事には、驚きも有ったが怒りが隠せなかった。最悪だ、幾ら落とせないからと言ってこんな手段を用いてくるとは、誰も思いもしなかっただろう。

「判らん、しかし連合も核を使った事でザフトも核を使わないという確証が無くなった。もしかしたらもっと最悪なものを出して来るかもしれん」

とバルドフェルドも今回の件については、未だに信じられなさそうだ

「なるほど。…とりあえず次やる事は連合が再び核撃ってきた時に私達が撃ち落すんですよね?」と判り切って居る事だが一応対策を聞いておいた。

「えぇシラユキさんが言ったとおり私達は連合の核をプラントに撃たせない事ですわ。核を使ったら新たな憎しみと悲しみしか生まないのに何故使うのでしょうかね?」

とラクスも悲しそうな表情に成っていた。

「戦いをやったって、残るのは悲しみと復讐だけと何故判らないんでしょうね?…取り敢えず私も急いで準備するので失礼します」

と言ってシラユキもブリッジを出て行った。

「もしシュウさんが今起きてこの話を聞いていたら怒り狂って連合

を潰しに行きそうですね」
と今シュウがこの状況で眠っている事に少しの安堵を覚えてしまった。彼がこの事を知ったら如何いう行動を起こすのかシラユキでも想像が尽かないのだ。

ただ想像するならば、彼ほどの味方を守りたいと思っている人物が連合が勝つ為の手段が核と知ってしまった瞬間連合の情報を知り尽くして核を持つ戦艦を自分の身を滅ぼしてでも破壊しに掛かるのが目に見えている。

だが彼女は知らなかった。シュウは眠っていても、この事態を既に知っているという恐ろしい事が起きていたなど
～シュウＳＩＤＥ～
「……そうか、連合は核を使っちゃったか」とシュウは表面上冷静にしているが既に心の底では腹が煮え繰り返っているのだ。

「此れは酷いですね、同じ人間同士なのに如何してこんな事するんですかね？」と女神が言っていたが

「さぁな、ただナチュラルとコーディネーターは同じ人間なのに体の出来が違うってだけで戦争だからなふざけてるよ。しかし此れじゃザフトもジェネシス使用して来るのは目に見えたな」
と声に僅かながらも怒気を含めながら座っていたソファーから立ち上がった。

「貴方も起きて戦うんですね？」と聞かれてしまった

「あぁ、今回の件については、俺自身も怒りを隠せない。こんなのは虐殺だ。どっちにも正義が有るんだろうが、こんなの使ってる時点でそれを言う資格すらない」

と聞いた人間が恐怖しそうな位の冷たい声でそう言い切った。

「一つだけ聞かせてください。貴方はまた無理をして体をボロボロにしてまで戦うんですか?」と女神はシュウが部屋を出る前にそう尋ねてきた

「何でそんな事再びを聞くんだ?」と流石に同じ事を聞いてくるので不思議に思った

「良いから答えてください」と真剣な表情で聞いてくる。(流石に今回は冗談を言うより真面目に言うのが女神に対しての礼儀だろうな)とシュウは思ってしまった。

「そうだな…確かに女神様の言った通り俺はまた無理して倒れるかもな。もう生き残れる時間が少ない俺は死にたいと思ってるのかな?」と自分の手を見つめながら皮肉げに言った

「どうして貴方は其処まで無茶をするんですか?もっと仲間を頼っても良い筈なのに」

「判らない、ただ自分の信念を貫き通したいからかな」と笑ってしまった

「自分の行う信念の為だったら周りが悲しんでも構わないと?」と少し女神の声に怒気が入ってきていた

「あぁ、俺の命は本来タイムリミット式で既に死んでいるようなもんだ。確かに皆を悲しませるのは悪いが、此ればっかりは止められない。俺自身誇りにしている信念を貫き通したいんだ」

「ふざけないで下さい！何でそう自分の命をそう軽々しく扱えるんですか！私は貴方を再び死なせるために生かしたんじゃないんです！」と女神は遂に怒ってきた。

「悪いけど、あんた最初に『貴方自身如何したいか良く考えろ』って言ったよな？俺が選択するのは、自分の命と引き換えで可能な限り人の命を救うって選択だ」と冷ややかな声で答えた

「傲慢すぎますね。貴方のような人間が一人で持つには重過ぎる課題ですよ」と睨みつけてきた

「そうだな、確かに傲慢で一人が持つには重たすぎる。だけどな俺は最低でも屑でも何とでも言われても良い。最初から諦めて立ち止まってるより自分が本当にやりたい事が出来てこそ満足な人生ってもんだろ？」とシュウは既に自分の死など受け入れていると思わせる笑みを浮かべていた。

「卑怯者ですね。貴方は卑怯者です。そんなにも固い意志を持っていたら、もう何言っても無駄じゃないですか」
と女神が悲しんでいる。こんな自分の命を軽々しく扱ってる自分の為に悲しんでいてくれていた。

「すいません、貴方まで悲しませてしまって。でも、もう俺には時間が無いから自分が満足できる結果が残せるように向こうの世界に戻るよ」と言って扉に向かって歩いていった

「そうですか、頑張ってくださいね。今まで言い忘れてましたけど、この部屋と現実世界の時間の経過少し違いますからね」と悲しみながらも今思い出すように言って来た。

「へっ？じゃあ今現実世界はどうなってるんだ？」と逆に聞いてしまった。

「そうですね、今は連合が戦力を消耗してるのにもかかわらず2度目の攻撃開始していますね」と言ってきたので

「なっ！最終決戦がもう始まってるじゃん！直ぐに俺も戦線に行かなきゃ！」と言って部屋を出て行った

「全く最後まで慌しいですね。でも頑張ってくださいねシュウさん、貴方のやってる事は、現実の世界では認められないかも知れません。でも決して無駄ではないんです。貴方は自身を削って人を救う行動が私達から認められつつあるんですから」と微かに笑っていた女神がいた。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

やはり連合の核を撃った行動に対しての報復攻撃が先程返ってきた。ザフトが秘密裏に開発していたジェネシス…最初の一度目が連合艦隊に向けて放たれた。流石の私達も一度目のジェネシス発射後は危うかったから戦艦に撤退して補給を行っていた。だけど連合の方は半分以上の戦力を失っていながら全く撤退せず、態勢を立て直して再び直ぐに攻撃を仕掛けている。無謀な行動だと判っている筈なのに理解できてないのだろうか？

私達も連合の艦隊から2度目の核が発射されると言う情報を聞いて、急いで飛び出してきた。だけどどっちも後が無いのだろう、戦闘が先程よりも激化していた。

「クッ！こんなの一瞬でも気を抜いたら落ちちゃいますね！」

と言いながら此方にビームクローを展開して迫ってくるゲイツを蹴り飛ばす。

だがこの程度で安心しては危険だ。常に周囲に気を配らなければ、宇宙なので３６０度何処から攻撃しかけてくるか判らない。

そして背後から危険を感じたので咄嗟に左に移動する為に思いっきりブースターを起動させる。そして嫌な予感は当たり先程シラユキが居た場所にビームが通り抜けていた。もし動かなければ間違いなくあの世行きだっただろう。

「全く危ないですね！」と言いながら背後に居た、ダガーを肩のビームライフルで撃ち貫く、だが今度は左右からシグー１機　ゲイツ二機が襲ってくる。

「あっー！もうリミッター解除！」と言って機体を動かす

（例え相手が新型機でも動くパターンがある筈）と思ってガンソードを抜いて肩のビームライフルを連射する。ゲイツの方はビームライフルの連射を難なく避けるがシグーは避けきれずライフルが右足に貫通し焦った所をガンソードで切り裂かれる。すぐさま誘爆を避けるため後方に下がるがすかさず２機がクローを展開して迫ってくるが

「その程度の実力じゃ甘いです！」と言って内蔵された貫通弾を放つ１機は当りたくない為か後方に下がるがもう一機は頭部を壊しながらも迫ってくるが

「命を無駄にしたいのですか！？」

と正気を疑いながらも腕を突出し着けていたビームサーベルでコッ

クピットを貫いた。もう一機は味方が敗れたという恐怖から逃げ出すが、近くに居たダガーによって機体を貫かれ落ちて行く所が見えた。

今の光景に『戦争だからしょうがない』と一蹴しなければ自分もあなると改めて自負してしまったシラユキだった。

だが幾ら攻撃しても一向に敵の数が減らない

「一体何時までこの攻撃は続くんですか！」と軽く疲労し掛けていた所を再びジェネシスが発射シークエンスに入ってるのが通信で聞こえた

「マズイですね」と言いながら範囲外まで離れる。その直後極太のレーザーが通り抜けた。

「こういう危険な兵器は抑制の為にあるような物なのに何故人は、使ったら自分達も虐殺する人と変わりない事に気付かないんですかね？」

と悲しくなってきたが、此処は戦場だ。甘い感情は今は余り持てない

そして今発射された場所は判らないが、それでも連合にとっては重要な拠点だろう、なのに未だに退かない。死ぬ気しかないのかと連合の最高指揮官に問い詰めたくなるほどだ。

そして再び大切そうにミサイルを持ったメビウスが戦艦から出てきた。正直攻めあぐねた連合はさっき落とされた拠点の報復の為に、完全にプラントを落とそうと考えているのだろ。

だが「核は撃たせません！」と言ってエンジェルは核を持ったメビ

ウスを追った。その後を続くようにフリーダム・ジャスティス・ストライクルージュ・バスターが来ている。

確実に連合の放った核は落とさなければ、こんなものは次の戦争の火種の切欠にしかならない　その為に今自分達が出来ることを精一杯するべきなのだ。

そしてやはりエンジェルも普通のＭＳだ。ミーティア装備の２機が先行して行く、そして一瞬シラユキはあることを思い出した。

（ルージュは今此処に居るけど、もう一機のムウさんのストライクは？）と思ってしまった。そして彼女の中である噂を頭の中で思い出してしまった。

（前聞いた事が有る、エンデュミオンの鷹とクルーゼはお互いの存在を感じ取り戦場であったら殺しあう仲。つまり今此処に居る必要性があるクルーゼ機は存在せずストライクも居ない。つまり…考えられる事はムウさんとクルーゼは交戦中！？）と不安な事が頭に横切り、ストライクの位置を確認し不安に成りながらも急いで向かった。

やはりシラユキの予想通りの事が起きていた。ストライクが灰色の新型機と戦っていた、暫く敵機の様子を見ていたが何も無い所からビームが放たれている。その不思議な現象に疑問を覚えながらも

「ムウさん援護します！」

そう言って新型機へガンソードで斬りかかった。だがやはり新型機一筋縄ではいかない、新型機は咄嗟にビームサーベルを抜いて、ガンソードを防いできた。そしてこっちを蹴り飛ばして距離を離された。この反応と動きから要約クルーゼが乗っているのだろうと少し

だけ確信が出てきた。

だが「馬鹿野郎なんで来たんだ！」と叫ばれるが「ボロボロの癖に何言ってるんですか！この機体ニ機がかりでやらないと到底倒せません！」と逆に叫び返した

そして一瞬クルーゼ機が動きを止めて居た。その隙を見逃すわけ無く

「これでも喰らえ！」と言いながら腕に仕込んであるビームサーベルを展開して斬りかかろうとしたが…再び何も無い所からビームが出てきて左腕を撃ち貫かれていた

「キャッ！な・・・何で？」

と言いながら頭上から危険を感じ後方へと急いで下がった。そして直後ビームが上から落ちてくる。レーダーを確認しても何も居ない。その事にシラユキは不安を覚えつつも機体を動かした。

（何か仕掛けが有るのは判る。だけどそれが見つけるまでは動き回らないと）と思い新型機にビームライフルを連射する、だが狙いも定まってないライフルは掠る事すらしなかった。

正直化物でしかない二機を相手にしているのに全く相手にすら成っていない、そしてムウももう満身創痍なのか遂に何かから放たれるビームによってストライクの右腕と左足を撃ち貫いた。

「ムウさん！…クッ、リミッター解除！」と言って機体を動かそうとするが

「甘いよ」と言ってエンジェルも羽と両足を?がれる。

「なっ・・・何で」と言おうとしたら

「君達　二機の戦闘データを見せて貰ったよ、やはりリミッター解除時に数秒静止しなければ成らない。そこを狙えば動きを止める事なんて容易い事なのだよ」
と灰色の機体から人を馬鹿にした嘲笑いが聞こえてくる

「なっ！」
シラユキですら知らなかったリミッター解除の弱点を言われ彼女は絶望してしまった。

唯一勝てそうな手段は看破し破壊され、攻撃を仕掛けても再び何処からかビームが来るだろう。勝つ方法は彼女は思いつく事すら出来なかった。

「さてキミ達とは悲しいがお別れだ」と言って、コックピットに何かが近づいてくる。小さなビットらしき物が周りを漂っていた

ようやく……ようやくビーム兵器の正体が小型のビットだと判ったが、此処で全て終わり

「すいませんシュウさん、私此処までのようです」と言いながらシラユキは目を閉じた。

……だが何時まで経っても痛みも衝撃も来なかった。

（死ぬときは何も感じないのかな？）と思いつつも目を開いた。そこには、見慣れた機体が羽を広げてビットを撃ち落としていた。

「なっ！？何故ビットを落とせる！私が操作しているんだぞ！？」

と疑問めいた声が聞こえてくる。

「しょせんあんたが空間認識能力を持ってて操作していると言っても６割がたは機械任せだ、次の行動への予想位置を立てて其処を撃ち始めたら後はそっちから勝手に当たりに来てくれるわけだ。その程度も判らないのか？」と人を馬鹿にしているが聞こえてくる懐かしい声

「シュウさん起きたんですね」と思わず涙ぐんでしまった。

「あぁ帰ってきたよシラユキ、大丈夫か？」と心配してくれる

「はいっ、もう大丈夫です！」と言って機体を何とか起こそうとするが機体制御のバーニアが機能しないようだ。

「さてアンタにはシラユキが随分世話に成っちまったな？覚悟は出来てんだろうな？」と殺気を周りに撒き散らしながらシュウはクルーゼ機を睨みつける。

「クッ！だがドラグーンはまだ残っているのだよ！」と言って再び射出してきたが「ふーん、あっそ…リミッター解除」と言った。

「ハッ！キミは自分の機体の弱点を知らないのだね！」と言ってドラグーンをキマイラに向けて放つが

「正直遅いね、その程度だったら何回も落ちるぞ？」

と言いながらドラグーンから放たれたビームは虚空を貫きキマイラは既にクルーゼ機の後方に回り込みの持ってきていた斬艦刀で右腕を切り落とした。

「なっ!?何故だ!リミッター解除の準備時間は如何したんだ!」
とクルーゼが疑問から泣き喚いているが

「はぁ、機体を造った本人が弱点知らない訳ないだろ?」と呆れかえってしまった

「良いかリミッター解除には二つ条件があるんだ、一つはさっきシラユキが遣ったように動きを数秒止めて、起動させる奴　此れはまだブースターの準備すら終えてないんだ。もう一つは既にブースターのロックを解除している状態だ、これは止まってる時よりリミッター解除発動までの時間は長いが、準備が出来たら後は好きな時に動かせる俺は此れをスタンバイモードって言ってけど…死ぬ前に一つ学べて良かったな?」と言って再びキマイラを移動させ始めた

だがクルーゼは此方に攻撃を仕掛けるのではなく

「クソッ!このままじゃ目的が!」と言って機体を翻して逃げ出した。

「はぁ、余りに弱すぎるな」と言いながらシュウも去っていく機体を見つめながらリミッターの解除を止めた。

そしてムウとシラユキはある事を思ってしまった。（（圧倒的過ぎるのは良いが来るタイミング良すぎじゃないか?））とついつい思ってしまった。

「あっ、今来るタイミングよすぎだろ!とか思っただろ?」と二人の思っていることを言ってみた

「「ギクッ!な・・・なんのことだ（でしょう）?」」と焦って言

ってきたが

「はぁ、お前等か隠すの下手すぎ。まぁ良いや、来るのはタイミング良いのは正直何処に居るか判らなくて探し回ってたんだよ」と言って疲れてるポーズを見せてきた

「取り敢えず二人とも機体動かないようだから引っ張るぞ?」と言ってストライクの左腕を掴みエンジェルは射出型アーマーシュナイダーで括り付けて引っ張った。

「うぅ何で私だけこんな運び方するんですかぁ!」と愚痴を言って来たが

「お前はもう少しマニュアルでも読んでリミッター解除の勉強しろ!全くエンジェルボロボロにしやがってこの戦争終ったらたっぷり扱いてやる!」
とシュウは怒りながらそう言っていた。

「うぅヒドイですー私だって頑張ったのにー」と軽く涙を流していたが

「それでもお前が無事でよかったよ」と照れ隠しながらもシュウは言った。

「えっ?何て言ったんですか?もう一回言って下さいよ!」とわざと聞こえなかった振りをした

「もう良い二度と言わん!」と怒りながらもアークエンジェルへと向かおうとしたが

「如何でも良いけど惚気話なら戦争終ってからにしてくれ」とやれやれと言う顔をムウさんはしていた。

だが「「あっ、ごめん。ムウさんの事忘れてた」」と二人はその存在をすっかり忘れていた。

「お前等が一番酷いと思うぞ俺は…」とムウさんが少し涙ぐんでた

そしてキマイラは二機を引っ張りながらアークエンジェルの近くまで戻ったが、最悪の事態が起きていた……そうドミニオンがアークエンジェルへローエングリンを発射しようとしていた。

「クッ！リミッター解除！」そう言ってシュウは掴んでいた腕を放しワイヤーを切り裂いてアークエンジェルの前方まで行き右腕をドミニオンに突き出した。

「なっ、シュウさんダメ！それじゃ貴方が死んじゃう！」と言ってシラユキは前見た夢を思い出し恐怖してそう叫んだが

「大丈夫だ……解放」と呟いてキマイラの右腕の前に何か巨大な盾が出現した。そうシュウが望んだ二つ目の願いは一度だけ攻撃を絶対防御する技をくれと望んだのだ。

そして出てきた巨大な盾はアークエンジェルを包み込んだ。そしてローエングリンが盾に触れた瞬間発射元が故障し爆破が起きた。

「さすが現実では造る事が不可能なものだな。しかし頼んだものより少し凶悪に成ってないかこれ？しかし相手の攻撃防ぐだけじゃなく武器も壊すとは、驚きだな」

と言いながらもドミニオンのハンガーへと入って行った。そう目的は、この戦争に終止符を打つためにシュウは元凶を殺すのだ。

～ナタルＳＩＤＥ～

しょうじき目の前の光景には驚きを隠せなかった、突然大きな盾が出てきてアークエンジェルを包んだと思ったらドミニオンの発射した、ローエングリンは無効にして破壊まで行ったのだ。あの能力を持ってる機体は化物と変わりが無い位恐ろしい物じゃないのか？

目の前の男アズラエルも最後の攻撃が失敗して絶望し顔を真っ青にしていた。

「ふっ、悪事を働いた結果が此れか」と自分の体を見てそう呟いてしまった。このまま私はこの艦と共に朽ち果てるのだろう。

流石に眠たくなってきた（そろそろ眠らせてもらおうかな？）と思っていた頃に後ろのシャッターが開いた音が聞こえた。咄嗟にアズラエルが後ろを向くが両肩が撃ち抜かれた。

「ギャアアアアアアアアアアア」と耳障りな声が聞こえてくる。

「うるせぇよ、今まで殺されてきた奴等に比べれば安い痛みだ」と入ってきたもう一人の男から怒気を含んだ声が聞こえてくる。

「たっ頼む命だけは助けてくれ。金は幾らでも払うからさ」と命乞いしているが「五月蝿いって言ってんだろ？喋んな」と言って再び乾いた音が聞こえて来た。

どうやら相手は容赦なくあの男を殺しに来ているんだろう。私も殺

されるのだろうか？と思っていたが

「まだ生きてるな？今から運ぶからもうちょっと辛抱してくれ」と言って背中に乗せられた。

「お願いだ！置いていかないでくれ！」と後ろから聞こえてくるが

「じゃあな、哀れな死の商人さん」と言ってブリッジから出て再びシャッターが下りた。

「直ぐにアークエンジェルに連れて行く、それまで死ぬなよ！」と私に言ってくれるが

「今更私にクルー達に会う顔が有るのか？」と思わず聞いてしまった。

「さぁな、でもなお互いに本音で話し合って、それで謝れば許してくれるさ、人と人の絆がそう簡単に切れるわけ無いだろ？」と此方に笑いながらそう言ってくれる

「あぁそうだな。そうかもしれないな」と言って私は痛みから気絶してしまった。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「やれやれ、無茶しやがって。ボロボロじゃねぇか」と言ってキマイラの後部座席にナタルさんを置いてドミニオンから出て行った。

「シュウ君？何をやっていたの？」とマリューさんが聞いてきたので

「ナタルさんを救出した、銃で何発か撃たれているから直ぐに医療班を、あとドミニオンは戦争の元凶以外無人だから思いっきり殺っ

てくれ」

「そうですか、有難う御座います。ではアークエンジェルはキマイラ回収後にローエングリンを返します。宜しいですね？」と改めて聞いてきた

「艦長はアンタだろうが好きにしな」そう言ってシュウはアークエンジェルへと着艦した。直ぐにナタルさんは医務室に運ばれて行った。弾は貫通していたから生き残れるだろう。

だが未だにコックピットからシュウは離れようとしなかった。何故なら「ゴホッゴホッ」と咳き込んでいたからだ。そして次の瞬間口から大量の血を吐き出してしまった。

「ははっ、生きる時間を延ばしても、結局は痛みはくるんだな」と自分の吐いた血を見て嘲笑ってしまった。そして次の瞬間シュウにとっても最悪の事態が起きてしまった。

「シュウさん？…って如何したんですか！？その血何処か怪我したんじゃ！？」とシラユキが何時まで経ってもキマイラから降りてこないので心配になってコックピットを覗いてきたのだ。

「クッ！すまないシラユキ！」と言ってシラユキを押し飛ばしてハッチを閉めキマイラを再び起動させた。「えっ？」とシラユキは今さっきのシュウの行動が理解できず呆然となってしまった。

そしてキマイラは再びハンガーから出ていった、数秒間シラユキを含め全員が呆然としたが

「この機体借ります！」そう言って近くに有ったＭ１アストレイを

整備兵から奪い取ってキマイラを追い掛け始めた。

「シュウさん！今さっきの大量の血如何言うことですか？ハッキリ説明してください！」とシラユキはシュウに先程の事について説明を頼もうとしたが

「説明したいのも山々だが悪いがシラユキ　俺にはもう生きる為の時間が無いんだ。だからお前とは此処でお別れだ」
そう言ってホルダーに入ってあるグレネードランチャーを抜き銃口を此方に向けトリガーに指をかけていた。

「えっ？…嘘ですよねシュウさん？」
とシラユキはシュウの行動を信じられず呆然としていたが、無情にも弾は放たれＭ１直撃した。しかし弾は爆発する事は無く機体のシステムをダウンをさせるだけだった。

「ごめんシラユキ　お前は連れて行けない。以前教えただろ？何かを成す為なら何時か大きな反動つまり犠牲が来るって事だ。それが俺だっただけだ」と通信越しにシュウの悲しそうな声が聞こえる

「えっ？待って下さい、まだ教えて欲しい事も有るのに私を見捨てるんですか！？」
と涙ながらに訴えたあの夢と一緒だ。目の前からシュウが居なくなる・・・。二度と私達の前に姿を現さなくなる。

「ごめん、俺お前の事好きだったよ。でも俺はお前を見捨てた訳じゃないんだ。もう教える事も無いしお前に俺は必要ないと判断しただけだ」そう言うと機体が踵を返して消えていこうとする。

「待って下さい！必要無いってそんな事無いです！お願いだから、

もう私を独りにしないで！」
と言って何度も泣きながらシュウにお願いするが機体は止まらない、宇宙の闇によって機体が見えなくなっていく。

「ごめんな、シラユキ。ありがとうでもこんな身勝手な奴よりもっと良い奴見付かるから俺の事は見捨ててくれ」と言ってシュウのキマイラの姿が完全に見えなくなった。

「イ…イヤァァァァァァァ！」と泣き叫ぶ、大事な人がまた居なくなる。

（何でシュウさんを失わなければ駄目なの！？シュウさんが何やったって言うの？私の力が足りないせいで居なくなったの？）と思い続けても本人は帰ってくる事は無く彼女は泣き続けるしかなかった

「ゴホッゴホッ」とシュウは移動中にも関わらず血を吐き続けていた

本人も判っていた。自分と言う存在が無くなっていくのが良く判る。シラユキを悲しませてしまったのは心残りではあったが、それでも俺より良い奴なんて探せば其処等へんに居る筈だ。さすがに休憩時間は長かったが、もう終わりだろう。何故なら先程ハッキングでヤキン・ドゥーエのカメラを確認したがアスランが再びジャスティスに乗り込んだのが見えていた。

「もう終焉が近づいてるな」と言って再び機体の速度を上げた。

そして殆どの機体は戦闘こそはするがキマイラ自体にはその銃口は

向かなかった。シュウもリミッター解除は使っていないがそれでも最高速度で動いているので一般の機体では追いつけないだろう。

だがそれは『一般の機体だけならば』であり後ろから急速に黒いMAが迫ってきた。

「チッ！レイダーか！」と舌打ちをしながらビームキャノンをレイダーに向かって放つ。パイロットが正気だったら当るはずは無かっただろうが左翼に当たり飛行し辛いのが良く判る。

「パイロットが薬切れで狂ってるのか」

とシュウは直線的な攻撃が当たった事を冷静に判断してそう言ったが、それでも破壊衝動は有るのかスキュラを撃ってくる。

「そんな直線的な攻撃当ってやるか」と言ってサイドステップで右に避ける。

「お前も疲れただろう？楽にしてやる…リミッター解除」

と言って機体をレイダーの前まで移動させていく正直隙だらけだがレイダーは何もせずただ突っ込んでくる。そして真っ直ぐ迫って来ている所をシュウは斬艦刀真っ二つにした

「悪いな、助けられなくて」とレイダーのパイロットに謝り再び機体を目的の場所まで動かす。

そしてシュウは目的のジェネシス前に辿り着いたが、予想外の事が起きていた。何故ならフリーダムがボロボロに成っているのにプロヴィデンスは左足こそ壊れているがフリーダムより損傷は酷くなかった。

そして止めとばかりにプロヴィデンスのサーベルがフリーダムに振り下ろされそうになっていた

「クッ！リミッター解除！」

とシュウは焦りながらも急いで二機の間に入り込みフリーダムを蹴っ飛ばして少しでも此処から離れさせるもプロヴィデンスのサーベルは、既に体が限界なのか少しだけしか機体を動かせずキマイラの頭部が斬り飛ばされていた

「シュウさん逃げてください！あの男は僕が！」とキラが怒りながら言ってくるが

「冷静さも持てない奴にアイツを落とせる筈が無いだろ！調子に乗るな役立たずが！さっさと戦艦にもどれ！」

そう言って罵声を飛ばしながらフリーダムにデータを送った。そう、此処に居たらジェネシスの爆破に巻き込まれる警告だ。

直ぐにキラも理解出来たのか此処から避難して行くが「シュウさんも速く！」と言って来た。

「直ぐにコイツを倒して戻るから、先に戻っておいてくれ」と返事をして通信をきった

キラはその言葉を信じようと思ったのか撤退していった。そして正直此方も限界に近づいていた。それでもこの戦いに負ける訳には行かない。

「ウォォォォ！」と叫んで斬艦刀を横に薙ぎ払った。だがプロヴィデンスは後方に下がって回避するがそのまま斬艦刀で突き出しプロヴィデンスの頭部に突き刺して破壊する。

だがお返しと言わんばかりに左腕がビームサーベルで斬り落とされる。

正直お互い戦闘の後なので満身創痍だった。ＥＮも底が近づき次が決着の着く事に成るだろう。プロヴィデンスは残ったドラグーンでキマイラを全方位から貫こうとしたが

シュウは「リミッター解除」と言って残った右腕で斬艦刀を突き出し特攻を仕掛けた。

そしてドラグーンはリミッター解除の直後にキマイラの両足を撃って壊したが、特攻は止まらかった。そして斬艦刀はプロヴィデンスのコックピットを貫き機体は止まる事無くジェネシスの中心部まで突っ込んでいった

シュウは機体を突っ込ませながらあることを思っていた。

（コイツを手放して脱出できるほどＥＮも体力ももう無い…此れで全部終わりか）と考えていたら、途中で何かが横切った気がする。

少しラストは違うが原作通りだとストライクルージュかと思いつつ中心部へと向かった。そして最下部に着くとプロヴィデンスごと斬艦刀をジェネシス中心部に突き刺しシュウはキマイラから降りた。

そして今まで一緒に戦ってきたキマイラを眺め今までのことを思い出した。

（そう言えば最初は小さな子供を助けた所から物語は始まったんだよな。そしてその後女神様に会って、この世界に送られた。そして

最初のＭＳがジンだったな。それで原作を知っていたからＸシリーズを奪取された後キラ君達の救出、そしてその後は砂漠に向かってバルドフェルドさんと出会って、シラユキとも出会った。そしてコイツが作られた。そのあとの戦闘じゃ味方に撃っちゃって直ぐにザフトとは敵に成ったけどシラユキだけは付いて来てくれた嬉しかったな。そして次はオーブでの小島郡でのトール君とニコル君の救出大変だったな。そしてアラスカでのフリーダム登場そして決闘、そしてお互いの事情を喋って仲間に成ってオーブで一緒に戦って俺が倒れた。……本当に色々有ったけど楽しかったな）

とシュウは今までの事を振り返っていた。そしてシュウは皆が居た所を眺めた。周りはジェネシスの壁で見えないが、今でも全員の顔が鮮明に甦る。

「さようなら皆。判れるのは辛いが俺は楽しかったよ」と言って近くに有ったジャスティスが爆発し、それに連動しジェネシスも大爆発を起こした。この日シュウは本当に死んだ。

PHASE26（後書き）

シラユキ「ちょっ！何でシュウさんを殺しちゃったんですか！」

抹茶「へっ？あぁ死んじゃったね。でも本編はまだ続くぞ？」

シラユキ「へっ？如何言うことですか？」

抹茶「いや、彼には死んでも、まだストーリーはあるんだよ」

シラユキ「じゃあ生存フラグも！？」

抹茶「あぁ、当然有るに決まってるだろ」

シラユキ「早く書いてください！」

抹茶「判った！書く書くから首から手を離してくれ。落ちる！落ちるからー！」

シラユキ「判りましたよ、でも嘘つかないで下さいね」

抹茶「判ってる、死後の世界でシュウも頑張るから」

シラユキ「そうですか、では後書きも閉めましょうかね」

シラユキ・抹茶「さてシュウ（さん）は復活出来るのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

PHASE27（前書き）

抹茶「はい、閃光のライトニング今回で最終話（？）に成りますよ～」

シュウ「そうか、今まで長かったな」

シラユキ「そうですねー。しかし今回で終ると成ると寂しくなるものですね」

抹茶「それは自分も思います。でも最後に？が付いてるからどうなるか判らんぜ」

シュウ「如何言うことだ作者さんよ？」

抹茶「まぁつまりですね。此れが終った後にアンケートを取りたいと思ってるんですよ」

シュウ・シラユキ「アンケートだと？（ですか？）」

抹茶「うん、つまりだ。この後のディスティニー編は読者の希望によって変わるんだ」

シュウ「成る程な。理解したよ」

シラユキ「それではそろそろ本編に移りましょうか」

シラユキ・シュウ・抹茶「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE27

「はぁ、全て終ったか、俺の役目は此処までかな？」と言って白い部屋で寛いでいた。

だが「あぁシュウさん　此処に居ましたか、少し用事が有るので着いて来て下さい」と頼んできた

「ん？死んだ後の俺に用事？あぁ、もしかして地獄行きか天国行きかを決める裁判か？」と思わず言ってしまった。

「はっ？何を言っているんですか貴方は、もしかして2択でしたら確実に貴方は天国行きになってますよ」と少し呆れて言って来た。

「ふぅん、確実に天国ねぇ、でも俺沢山の人殺してるからそんな資格あるのかな？」と疑問に成っていたが

「さぁ、着きましたよ。この中に入ってください。くれぐれも無礼を働かないで下さいね？」と目の前の豪勢な扉が自動で開いた

「んっ？無礼って如何言うことだ？」と言った瞬間に後から来た羽の生えた天使？が引っ張って無理やり椅子に座らされた。

目の前に4人の歳は神でも結構離れてそうだが御爺さんが1人・先程の女神を入れて2人美しい女性・好感の持てそうな青年が座っていた。

（えっーと目の前の御爺さんって誰なんだろうなぁ？女神様ですら無礼を働くないって言ってたから全知全能の神オーディンか？）と

シュウは思っていたら

「ホッホッホ最近の若者は博識なのかね？」と一人の爺さんが笑って話してきた。

「へっ！？思ってることが通じちゃったの！？」と驚いていたら

「そうじゃの、ワシ等神様じゃから考えておる事は判るんじゃよ青年」と爺さんは笑っていた。

「ハハッマジかよ。よりにもよって神が４人居るって俺なんか悪い事したかな？」

「いやっキミは何も悪い事してないよ？むしろ此方の関心を寄せた行動ばっかりやってたさ」

「へっ？何で？そういえば俺自己紹介してませんでしたね。シュウ・K・ライトニングです。話し合いにおいて名前で呼んだ方が好感持てそうな気がするんで」と笑みを浮かべながら自分の名前を告げた。

「ホッ　礼儀正しい子じゃの、そうじゃのワシは先程思ったとおりオーディンじゃ」と白い髭を少しくわえて言って来た。

「私はフレイヤと申します、初めまして」と金髪の三つ編みの女性が話しかけてきた

「私はアテナです、まぁ紹介しなくても今まで話しているから無駄ですかね？」と女神様が言って来たが

「いやいや、女神とだけ言われて何の神かは知らなかったよ」とシ

ュウは今まで近くに居た女神が有名な人だとは予想外だった。

「さて最後は僕ですね、僕はフレイヤの双子の兄フレイ「ちょっと待って」…はいどうかしました？」とシュウが途中で遮ったのでフレイは疑問に成っていた

「あれっ？俺フレイって女性のイメージが有ったんだけど、本当の性別は男だったんだな」と少々予想外だった。

「アハハ　そうですねたまに間違われますけど、自分は男ですよ。改めてフレイですよろしくお願いします」と会釈してきた。ちなみに彼はショートだ。

「しかし、こんな自分一人の為に美・愛のフレイヤ　戦略のアテナ　豊穣の神フレイ　全知全能のオーディンが揃うとなると何か怖い物が有るな」と言ってしまった。

「まぁ怖がらずにリラックスして話し合いましょう」とフレイがフォローしてくれる

「そうですか、まぁ良いや。取り敢えず何で俺は此処に呼ばれたんでしょうか？」とオーディンに聞いてみる

「んっ？君が実に面白い子じゃから呼んだんじゃ」と白い髭を揺らしながら言ってくる

「面白い？こんな自分が？傲慢な意思しか持たず皆を悲しませた俺が？」と正直目の前の神達の正気を疑いたくなった

「ん～キミの場合その考えは傲慢かもしれないけど、その言葉を少

しでも行動に移してるんだよね」とフレイヤが言ってくる

「確かに手段は選んでは無いかも知れませんが、貴方は常に最良の選択をしていたので一度話し合いをしてみようと思い、何人か代表で出ようって話で私達が抜擢されですよ」とアテナが苦笑してくる

「そうか、しかし気に入られたって言ってもねぇ…実感が湧かないな」と言ってしまった

「当然じゃ、神に認められるのは滅多に無い事じゃからの」と爺さんが言ってくる

「そうか、でもその反面何か言いたい事が有りそうな気がするけどね」とシュウは神々の考えてる事を言ってみた

「そうですね、貴方の行動は確かに素晴らしい物で目を見張る物では有りますが」とフレイが言い辛そうにしていた

「逆にその自分の命知らずの所が少し問題なんだよねぇ」とフレイヤが言ってきた。

「グッ　戦争終ったから何言われても良いと思ってたけど命知らずとまで言われると流石に来るものが」と痛い所を少し突かれてしまった

「私何度も言いましたよね?でも貴方全く話し聞かずに結局死んじゃったじゃないですか。だからこう言う会話の場を設けたんですよ?」とアテナが言ってくる

「シュウの行動はアテナを通じて見せて貰った、何故いつも一人の

力で全て行おうとした？仲間を信じきれれぬのか？」と爺さんが聞いてくる

「俺はあいつ等の事は信じている、だけど心の何処かではあいつ等の事を疑ってるのかも知れない」と呟いた

「仕方ないよね、人は信じたくても信じきれない時だって有るんだから」とフレイヤが言って来た

「そして貴方は、疑ってる自分が妬ましくも有りまた真実を話すのも怖いんですよね？」とフレイが聞いてきた

「あぁ、転生の事を話したら何を言われるか判らないんだ。怖がられるかも知れないし遠ざけられるかも知れない、それが怖いんだ」とシュウは悲しみながらも言った

「バカモン！それ自体が主の甘えじゃ！良いか？人は確かにお互いの意思は判らん。じゃがその為に言葉が作られ会話があり話し合ってお互いの意思をぶつける。そして双方が納得する結果を作り出すべきじゃろうが」と爺さんに思いっきり叱られた

「そうですね。確かにオーディン様が言ったとおり貴方が遣ってる事はただの甘えです。会話せずに一方的な考えで決め付けるのは貴方自身が皆から逃げているだけです」とフレイからも言われた

「俺の意思自体が甘えで有って、また逃げてるだけ？」と言われた事に納得出来なかったが

「もし速めにそれに気付けれたら、何か運命を変えれたのかも知れないんじゃ無いのかな？」とフレイヤも言ってくる

「そんな…だったら俺が今までやって来た事は何だったんだ?」と疑問が生まれてきた。

「主のやってることは間違いではないぞ?ただ手段を間違えただけじゃ」と言われてしまった

「クソッ…なんで俺は今まで気付かなかったんだよ。心の中で皆を遠ざけて常に自分だけが傷を負って助けれれば、それが最良だと思ってた。だけど今気付かされた自分の遣ってた事は甘えだってこと」と今まで自分のやってた事の間違いに要約気付いたシュウだった。

「ようやく気付けたようじゃの主は一人ではないんじゃ、大切な仲間が居るし、友も居る、常にシュウの後ろには仲間が居て御主を後押ししてくれても居るんじゃぞ?」と爺さんが言って来てくれた

「今まで一人で良く頑張ってきましたね。今だけは泣いても良いんですよ?」とアテナが言ってくる

そして俺は泣いた。涙が枯れるまで泣き続けた。自分がやってきた間違いを反省するためにそして自分が努力して、それは甘えだったとしても無駄ではなく、むしろ神たちが自分の苦しみすらも判ってくれた。こんなにも嬉しい事が有るだろうか?

〜1時間後〜

「はぁ、思いっきり泣くとスッキリするもんだな」と目を真っ赤にしながらそう言った

「ホッホッホ今まで貯め続けてた分が出たのじゃスッキリもするじゃろうて」と言われた

「しかし気付くのが遅かったな。自分が死んだ後にこんな大切な事を思い知らされるなんて」とため息を吐きながら言ったら

「あぁ、それなんですけど余りにも貴方のやる事が他の神々からも尊敬と感嘆が有りまして、もう一回貴方の居た世界に戻るか・神格化する二択の選択肢があります」とフレイが言って来た

「はっ?今なんて言った?」と正直今言った事が冗談だと思いたかったが

「えっーと貴方の居た世界に戻るか・神格化するかの二択ですか?」と聞かれてしまった

「あぁ何で俺が神格化するんだ?と言うか一般の人間が神化しちゃマズイだろ!」と言ってしまったが

「それなら大丈夫じゃ下級や中級の神からは主の神格化は大歓迎らしいそうじゃぞ?」と突っ込まれた

「あぁ、そうなんだ」と軽く自暴自棄に成りたかったが、正直まだ有った。

「それとですね、貴方の造った機体って神関連の名前が有るじゃないですか、もし現世に戻るのでしたら是非とも自分達の名前を使って欲しいと言う要望とか色んな希望がありますね」とアテナが山積みにされてる書類が出てきた。

「な…なんでこんなにも量があるんだよ」と目の前の見上げないといけないほどの高さの書類にシュウは唖然としてしまった

「それがですね。今貴方が使ってる機体名のキマイラとエンジェルがキーホルダー化してるんですよ。あと貴方の生き方が多少脚色され掛けてますが良い神様に成る為の見本みたいな感じでアニメ化されてます」とフレイヤが言ってきた

「む…無茶苦茶だ。と言うか天界にもアニメやストラップ有るんだな」と思わず言ってしまった

「そりゃ有りますよ。こっちの世界の生活も普通の世界とは余り変わり有りませんからね」とアテナに言われた。

「そうなんだ。なんか如何でも良い情報な気がするけど、アニメ化だけは勘弁してくれ。俺はそう言うのは恥かしいんだ」と言ったが

「あぁもう遅いです。既に放映されてるので」とフレイヤに止めを刺された。

「クッ！なんてことだよ」とＯＴＺ状態になっていたら。

バァン！と言って後ろの扉が思いっ切り開き何かが上に圧し掛かって来た。

「えっ？えっ？何が起きているんだ？」とシュウは混乱していたが、何かに舐められた。そしてハッハッハと犬の吐息が聞こえる。

「コラッ　キマイラ人を襲ったら駄目でしょうが！」とフレイが上の生物に叱り上の重みがなくなり確認したら

ライオンの頭・山羊の体・蛇の尻尾が目の前に居た。喜んでいるの

か、尻尾の蛇がぶんぶん振られてる…（酔わないのかな？）と思っていたら

「シュウさん　その子シュウさんに名前使われて軽く貴方の事が好きで懐いてますよ？」とフレイが言ってくる

「マジか…」と言って頭を撫で様と腕を伸ばしたら逆に顔を擦り付けてきた。

「ヤバイ何この可愛い生き物犬みたいで凄く好きに成れそう」とついついにやけてしまった。

「さて主はどうするのかの？別に現世に戻っても良いぞ、死んでも結局神格化するのは変わらんし」と爺さんが言って来た

「んじゃ、もう一度現世に戻らせてもらえますか？やり直したいこともありますし」と言ったら

「皆に謝るんですね？それと貴方には死んで欲しくないのでリミッター解除による寿命の削りと死ぬことが無くなりましたよ」と言って来てくれた。

「あぁそれなんだけど。俺のパートナーにもしてくれ」と頭を下げて頼み込んだ

「それでしたら、もうやってますよ。でもこれでも充分お釣りが帰ってくるんですよね。後一つ位チート付けれますけど何付けます？」とアテナに聞かれて

「んじゃ医療チートを後常に自分の船か医療コンテナには最新の設

備が全て揃ってる事をお願いするよ」とお願いした

「ホッホッホシュウは欲が無いんじゃの。じゃがそれが御主らしい感じじゃ」と言って爺さんが笑ってきた

「ハハッ　今度は皆と協力して頑張ろうと思うよ。間違いに気付いた今なら本当に大切な事が判る気がするし」と言って自分の体が透けていった。

「貴方が今から戻って辿り着く場所は戦争終結から3ヵ月後オーブの自分の墓の前に居るので」と言われた

「あぁ判った。それじゃ今まで有難う御座いました」と言ってこの世界から消え去った。

～シラユキＳＩＤＥ～

シュウさんがＭＩＡ扱いされて3ヶ月経った、最初は他の人も渋ったがシュウさんのＭＩＡは了承され死亡と言う扱いが起きてしまった。しかたが無い事だが彼の言うとおり物語は結局は誰かが犠牲に成る事で終わる事が多い、でも正直そんなことは、もう如何でも良かった。全員とまでは行かないが既に何人かはシュウの死を受け入れている。

私は何時までもウジウジしていたらシュウさんに叱られてしまうと思い立ち直っている。

未だに思い出しては涙を流してはしまうけどシュウさんに迷惑を掛けてしまっては駄目だと思い毎回忘れようとしている。ただ何一つ彼の持っていた物は無く、遺品など殆ど無いと言っても良い物だった

（しかし今夜は月が明るいですね。クリスマスは過ぎちゃいましたが、何か良い事が有りそうな気がします）と思っていたら

流れ星が降ってきた。それも星空一面に掛かっている、とても綺麗な光景だ。（しかし此れはシュウさんと居たらもっと良かったんだろうなぁ）と思っていたら、墓の方に流れ星が行き何かが光って見えた。

「何だろう？あの場所はシュウさんの墓の方向ですね」と言ってコートを羽織って外へと向かった。

月明かりが道を照らしていく、彼は死亡扱いを受けたが何故か希望を捨て切れなかった。（居ないかも知れない。でも見に行きたい、見に行かなきゃ駄目な気がする。）そう思いつつも一歩一歩脚を進めていくシュウの居るかもしれない場所へと

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「ふぅ、やっぱり向こうの世界よりこっちの世界の方が気楽に過ごせるから良いねぇ」とつい笑みを浮かべてしまった。

「しっかし、長らく留守にしてたとは言え俺はＭＩＡ扱いかよ」と愚痴りながらも墓を見つめていた。其処には

《シュウ・Ｋ・ライトニング此処に眠る》と言う文字が掘られたお墓があった。

「全く生きてるのに、死人と勘違いされたら如何するんだよ。まぁ良いか戦場で行方不明だったって事にすればこの墓も無くなるだろう」と言って夜空を見上げた、そこには未だに流れ星が続いていた

「新しい平和への神様達からの祝福かな?」と苦笑していた所を後ろから足音が聞こえた。

「すいません、貴方もしかしてシュウさんでしょうか?」と後ろから女性の声が聞こえて来た。

(はぁ……一番最初に気まずい相手に遭遇するとはね)と思いつつも振り返る

「ただいま、シラユキ　あの時は置いて行っちゃって悪かったな」と言って頭を下げた。

「生きてたんですね。ずっと待ってたんですよ?貴方が帰ってくるの」と少しずつ涙を零していた。

「ごめん、でももう俺は何処にも行かない。お前を置いて消えないよ」とシュウは微笑んだ。

「シュウさん!」と言って抱き付いて来た「もう離さないで下さい。私寂しかったんです、二度と会えないと思ってた。でも私の前に帰ってきてくれた。お願いだから二度と消えないで下さい、私を一人にしないで」と涙を零して頼んできた。

「あぁ、消えないさ。二度と無茶もしないしお前を一人にもしない、そして俺はお前等に一つだけ隠し事をしているんだ。聞いてくれるか?」と自分の秘密を明かそうとした。

「はいっ聞きます。前言いましたよね?私も貴方と同じ境遇で居たいって、つまり苦しみを背負うのも一緒にしますよ」と頼もしい事を言って来た。

「じゃあ聞いてくれ」と言ってシュウはこれまでの事を話した。
自分がこの世界で生まれたが前世の記憶を持ってる事・この世界が話で作られたこと・神からチートを貰った事・この世界の歴史を曖昧だが知っている事当然未来も、そして死んだ後に起きてた事も話した。
正直信じて貰えるかは謎だったが全部話した。そして……

「にわかに信じ難い話では有りますけど、シュウさんが嘘をつくはずが無いですね。それに今までの事を考えれば説明も付きますし」と納得はしていた。

「信じてくれるのは嬉しいんだが、お前は俺が怖くないのか?」と恐る恐る聞いてみた

「怖いも何も、シュウさんは未来を知っていて。それを悪用せずに救える人を救って自分の信念を貫くために使った。別に喜ぶ必要はあっても怖がる必要性が無いじゃないですか」と言ってきた。

「ハッ…ハハハハハハハ何だそれ、今までの俺の悩みがバッカじゃねぇか」と思いっきり笑ってしまった

「ホントですね。そんな小さな事に悩んでたんですか?さっさと言っちゃえば良かったのにもうちょっと信用して下さいよ」と軽くシラユキも怒っていたが

「悪い悪い明日キラ君達にも話すから付いてきてくれるよなシラユキ?」と自分のパートナーに話しかけた。

「当然じゃないですか、何時までも私はシュウさんに付いていきます」と笑っていた。

（今に成って判ったけど、自分は何て事を遣ってたんだろうか？全く最初から話しとけばこんな事には成らなかったのかもな）と思って笑ってしまった。

「あっ、何笑ってるんですか？何か良い事でも有ったんですか？」とシラユキが言ってくる。

「あぁ良い事が有ったさ、俺が此処に居られるって言う良い事がね」と言ってシュウは歩き出した。

自分の何時までも続く終らない明日へと

PHASE27（後書き）

抹茶「はい、今回で閃光のライトニング　SEED編終了と成ります」

シュウ「オイッ！作者さんよ。最後滅茶苦茶臭い終り方だな！」

シラユキ「正直こんな終わり方どん引きですね」

抹茶「グッ！まぁ良いじゃないか。シュウは生き返ってきたんだから有る意味グッドエンドじゃん！」

シュウ「いやいや、何勘違いしてるんだ作者？主人公が死んだら話しオワタに成るのは理解してるだろ？」

シラユキ「まぁ、もし死なせてたら私も許しませんけどね」

抹茶「はいっ理解しております。お願いだからその拳銃を仕舞って二人とも」

シュウ「ちっ、しゃあねぇな。シラユキ仕舞え」

シラユキ「了解しました。さてこの後は如何するつもりなんですか？」

抹茶「ん？そうだな。まだ考えてないけど後日談を書くのも有りかな？」

シラユキ「じゃあ私とシュウさんの後日談も！？」

抹茶「オイ、パートナーが暴走してるぞ？」

シュウ「まぁ放っとけば元通りに成るだろ？」

抹茶「どうも投げ遣りだな。まぁ良いや、とにかく今まで読んでくださった読者には感謝だね」

シュウ「全くだ。主の駄文能力は俺も知ってたがそれでも集まってくれたんだ。感謝感激物だろ？」

抹茶「えぇ、この場をお借りして挨拶とさせていただきます」

抹茶・シュウ・シラユキ「今まで読んでくださった読者の皆様方有難う御座いました」

抹茶「さてそろそろ後書き閉めますか」

シラユキ「寂しくなりますね」

シュウ「仕方ないだろ。取り敢えず其処の作者が再び筆を取るまで皆待ってくれよな」

シュウ・シラユキ・抹茶「それでは、また何処かで会いましょう。さようなら」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

アンケート（終了）

はい、今まで読んでくださった。読者の皆様方本当に有難う御座います。

今回ガンダムＳＥＥＤ―閃光のライトニング―を書かせて貰った抹茶と申します

取り敢えず自分が小説を書いた始まりは大体2～3ヶ月前の事です。

自分は最初こんな駄文しか書けない自分が小説を書いて良い物かとても悩みました。

しかし友人からも「まぁ物は体験だから、色々やってみるのも有りだろ」と言われ

４月２６日に初投稿させてもらいました。その後は戦闘シーンの描写・キャラのセリフ・主人公の行動等等考えるのに凄く苦労しました。

しかしそれでも読者の皆様方からのご指摘・ご感想を頂けた事によって何とか完成まで持って行く事が出来ました。本当に有難う御座いました。

さてアンケートの方ですが今から？・？・？・？・？のどれかを選んでもらいます

？このままガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹを書く事

?ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹを書きながらも他作品を書く事

?ＳＥＥＤで飽き飽きしているからＤＥＳＴＩＮＹ書かずに別作品書くこと

?正直言って主は駄文だから二度と書くな

?その他・意見

の５つに成ります、言葉遣いは最悪で本当にすいません。無理にとは言いませんが成るべくなら答えてくれると嬉しいです。

期限は６月２５日までとさせて頂きます。ご了承下さい

それでは、再び何処かで会いましょう

今日を持ってアンケートを締め切らせていただきます。

アンケートにご協力して頂いた

ｅｘａｌａｎｃｅさん・ハッピーさん・優さん・和樹さん・ルリさん・俊さん・マサトさん・玉喜さん

ムーブさん・ＲａｙＳｔｉｎｇｅｒさん・三ノ丸さん・ホウメイさん・あちさん・絆さん・あさん

本当に有難う御座いました

ＰＨＡＳＥ２８（前書き）

抹茶「はい、読者の皆様お久しぶりです」

シュウ「久しぶりだな。まぁＳＥＥＤ編終ってから其処まで日にち経ってないんだけどな」

シラユキ「シュウさんそれは、言っちゃ駄目な気がしますよ」

抹茶「そうだな、シラユキの言うとおりだ。読んでくださった読者のお陰でこう言う後日談が造れたんだぞ。感謝を言えば良い物を愚痴を言うのは言語道断だ！」

シュウ「クッ！すまない。それより今回は誰の後日談を取り上げたんだ？」

抹茶「今回はＳＥＥＤ編で助けたキャラの中で余り登場しなかったニコル君です」

シラユキ「それ以上言ったらファンの方々に後ろから刺されますよ？」

抹茶「そんな事言わないでリアルであったら夜俺出られないからさ」

シュウ「まぁそんな事は如何でも良いとして、そろそろ本編に行くぞ」

シュウ・抹茶・シラユキ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE28

俺が生き返ってから3週間経った。生きていると言う事を伝える為に色んな人の家にまわりに行く度に全員驚いてしまったが、自分が生き返った理由を一から話すと全員納得してしまった。

大抵の人が「まぁ、シュウさんはリミッター解除でも死ななかったんで、もう驚きしませんよ」
と呆れていた。なんだよそれ、まるで俺が死なない化物みたいじゃないか。

そして俺は全員に自分の正体も話した。だが「まぁ不思議さが有ったんですけど、そんな事が有ったんですね」とあまり驚かなかった。何かもう自分の思ってた事が馬鹿馬鹿しくなって来た。

どうして怖がらないのか聞いたら「シュウさんは信頼しているので今更何が有っても裏切りませんよ」と言われた。これには正直涙を浮かべれた。

「しかしあいつ等も信頼してくれるのは嬉しいものだな」と笑ってしまった。

「ねっ?私の言ったとおりでしょシュウさん」と言ってきた。

「あぁ、でも此れも予想してたのか?だったら驚きを隠せないぞ俺は」と少し呆れながら言った

「勘ですよ、今まで一緒に戦ってきた仲間を疑う事は無いし、怖がる必要なんて無いですよ」と笑ってきた。

「そうか、しっかし今助けた人たちは如何してるかな?」と言ってしまった。

取り敢えず今ナタルさんはオーブ総合病院から退院して出てきているが……

「今の連合は少し信用できない。だから私は今は退職金でオーブに住む予定だ」と言われてしまった

「まぁナタルさんは今は平穏に住んでるらしいそうですが、家事に慣れてないそうですよ?」と苦笑していた。

「仕方ないだろ、今まで軍に居たのに急に普通な生活だ慣れるまで時間が掛かるっての」

「そうですね…あっニコル君から手紙来てますよシュウさん」と言って綺麗な封をしたものを渡してくれた。

「んっ、ありがとう。しかし彼もプラント居るのに送ってくれるとはありがたいね」と言って封を開けて中身を読んだ

「シュウ・K(クサナギ)・ライトニングさん　シラユキ・カグヤさんへ
シュウさんお久しぶりです。死んだと聞いて悲しみましたが再び死んでなくて生きてると聞いたときは驚きました。一体どんなことをしたのですか?まぁ生きている事は嬉しいです。

それよりもシュウさんが死んだと聞いたときは僕の父さんと母さんが『家の息子を助けてくれたのにお礼も言えなかった。本当に惜しい人を亡くしたものだ』と悲しんでいましたが再び生きている事を

聞いた時には『彼とは一度食事したいから呼んでくれ』と頼まれました。

しかし普通にこっちに来るまではお金が掛かるので呼べませんでした。ですが運が良い事に2週間後に僕のピアノの公演が有ります、リハビリも大変でしたが、沢山練習をしたので是非聞きに来てください。

ニコル・アマルフィより」

「そうか、彼も頑張ってるんだな。コイツは見に行かないと後悔ものだな」と言って中に入ったチケットを取り出した。

二枚入っているので席を確認すると…「おっ、一番良い席じゃん。充分楽しもうなシラユキ」と言った

「はい、そうですね。しかし彼も頑張ってるんですね。オーブに居た頃が懐かしいです」とシラユキは一緒に居た頃を懐かしんだ。

（しかし彼も第二の人生歩んでるんだからな、俺も新しい趣味か、それとも誰かと結婚して身でも固めるか？）とシュウは少し別の考えていた

「それで如何します？シュウさん」と何かを聞いてくる

「へっ？何がだ？すまん、話を聞いてなかった」とシラユキに謝罪する。

「はぁ、ボッーとするなとは言いませんが、余り考え事しないで下

さいよ?取り敢えずプラントに行く時にプラント行きのシャトルを使うか、それともシュウさんの艦のジャンク艦を使って行くかの話をしてたんですよ?」と少し怒りながらも言ってくる

「そうだったのか、余り怒らないでくれよシラユキ。今回はＭＳなんて物騒なもの使う必要も無いしシャトルで行こうか」と言ってみたが

「そうなんですか?今回はてっきりジャンク艦を使うと思ったんですけどね」と言ってきた

「何でだ?今回行く道中使う必要性は皆無だろ?」とシラユキの言った事に疑問を覚えた。

「いえ、ただ単にシュウのキマイラは壊れちゃったから、新しいＭＳを造る為に材料が必要なんじゃないかな?と思っちゃって」と痛い所を突かれてしまった。

「そうなんだよなぁ、キマイラはぶっ壊れて、今手持ちに有るＭＳ言ったら前拾った強行偵察型ジン位だしな」と今は必要なくても後々必要と成りそうなキマイラに代わる新しいＭＳが必要に成って来る筈だ。

「それにシャトル使ったら利用費も掛かるのでジャンク艦の方が便利でしょ」と微笑んできた。

「あぁ確かにそうだな。戦争終ったからってジャンクが無いなんて事は無いし集めていっその事強力なＭＳでも造るか」と言い切ってしまった。

「それじゃあ行く準備しましょうか」と言って二人は久々にオーブ港にある自分の艦に向かった。

だが其処には二人ともジャンク艦に意外な物が置いて有ったのは予想が出来なかった。

～オーブ港～

「あらっ二人とも如何したのかしら？」とエリカさんが聞いてくる。

「んっ？あぁエリカさんか、プラントに居る友人に呼ばれて今から向かうんだよ」と言った。シュウはエリカとはもう和解したのだ。

彼も逆恨みだと判っていたが切欠が掴めずに悩んでいた所をシラユキが間に入って仲直りしたのだ。

「そう、じゃあ直ぐに簡易的だけど完成しかけてるマスドライバー使わせてあげるわ」と言って来た

「良いのですか？私達みたいな一般オーブ国民がマスドライバー使っちゃって？」とシラユキが聞いてみるが

「良いのよ、貴方達には世話に成ったんだし此れぐらいしなくちゃね」と言って微笑んでくる。

「そうか、有難う御座います。じゃあ俺らはホーム乗って色々準備するんで」と言って二人は乗り込んで色々と準備をし始めた。

そして発射時に「じゃあ気をつけてね。一応大気圏突入パックはハンガーに積んで有るけど。何か変な物まで入ってたけど知ってる？」と聞かれてしまったが

「変なのって何だよ?変なのって」と何の事かさっぱり判らないシュウはそう答えた

「シラユキは何か知っているか?」とシュウは取り敢えずシラユキにも聞いてみた

「いえ、私も何の事か判りませんね?宇宙に上がったら確認してみましょう」と言って通信を切って宇宙へと飛びだった。

そして十数分してジャンク艦は宇宙へと辿り着いた。そしてすぐさまホームのオートパイロットを始動させた。

(オートパイロット・目的地:プラント)「よしこっちは準備OKだ。シラユキの方は如何だ?」と聞いてみた

「はいっ私のほうもプラントに着港の許可を貰いましたので、あとは大丈夫です」と準備完了の事を聞いた

「んじゃ、エリカさんが言ってた何かを確認するか」と言って二人はハンガーへと向かった。

そこには放射能マークが書かれたコンテナが二つ積まれていた。

「何だ此れ?こんなもの俺入れた覚えが無いぞ?」と思わず目の前の光景に唖然としてしまった

「取り敢えず中身確認をしましょう。と言ってコンテナの外側に出ているコードをパソコンに挿し中身確認を行った。

そこには…（ニュートロンジャマーキャンセラー）ＮＪＣ１コンテナ１個入っています。外に出しても私達の力によって核爆発も起こさずに人体にも影響ありませんで、普通にＭＳ開発に使ってください

ｂｙ神一同を代表してフレイヤより）

パタンッ……「ごめん最近目が疲れちゃってるのかな？変な文字が見えた気がするよ」と言ってパソコンを閉め目じりを押さえながらそう言った。

「そ…そうですよね。幾らなんでも入ってる物がＮＪＣな訳有りませんよねと言いながらコンテナの一つを開けてみた。

そこには大きな球体場の者が放射線マークの上に（有害じゃないです）と書かれた物が置かれてあった。

再び手にとってパソコンを確認すると

（喜んでいただけましたか？それよりも何でパソコン閉めるんですか？酷いですよ）と書かれてあった

「何で内容が変わってるんだよ！可笑しいだろ普通に考えてもさ！」と今の事にもう突っ込む事しか思い付かなかった。

「取り敢えず頂き物なのでそのまま使いたいですけど、条約でＮＪＣの使用禁止の案件出てますしね」

と貰い物が条約の違反に成るのを恐れてしまったカグヤだった。

「でも捨てるのも勿体無いし、此れに付いてはマジで後回しするよりかは今はこのコンテナから出して隠すしかないだろ？」と取り敢

えずの手段を決めた。

「そうですね。今回集めるジャンク品に埋める様な形で入れていきましょうか」
と言ってコンテナ内のＮＪＣを二つ取り出しブルーシートをかぶせた。

「さて此れからプラントまで着くまでの距離が１週間程度だ、その間に色々と設計図でも書くか」
と言って作業スペースへと向かった。

「あっ、待って下さいよ。私の分の設計図も書いてくれませんかね？」と上目遣いで言ってくる

「うーん、でもエンジェルって殆ど完成形なんだよなぁ。どんな機体にして欲しいかによって機体の形状が変わってくるんだ」とシュウはＭＳの設計でどんなタイプにするかによって機体を変えていくのだ、彼はキマイラに乗っている時は射撃がメインなので射撃型のＭＳとして色々な武装を積んでいたのだ。

「そうですね、私としては格闘のほうが得意なので格闘で殴りながらも少し距離の遠いＭＳは誘導性の有る射撃で攻撃したいですね。私射撃は少し苦手ですから」と格闘メインをお願いしてきた

「判った、取り敢えずシラユキはその方向で造っていくわ。しかし俺とは待ったく真逆だな」とついつい言ってしまった。

「へっ？真逆ですか？どうしてまたそんな事を言ったんですか？」
と不思議そうに言ってくる

「俺確かに格闘は出来るけど、格闘より射撃の方が得意なんだよ。ヤキンドゥーエの時は流石に射撃だけじゃ乗り越えられないと思って斬艦刀持ってたんだよ」と言い切った。

「そうなんですか、と言うか私達ってキラ君とアスラン君のＭＳと似てそうですよね」と笑いながら言って来た。

「そうだな。もし俺らがフリーダムとジャスティス乗ってたら確実にフリーダムが俺、ジャスティスがシラユキだったかもな」と言って苦笑した。

（ビッービッービッー　敵機接近敵機接近）と警報が成ってきた。
「なっ！何でこんな時に！」と警報が成ってシュウはキマイラが無い事を怨んでしまった。

「大丈夫です！私がエンジェルで出ます！」と言ってエンジェルに乗り込みに向かっていった。

「チッ！敵の数と機体は何だ！」と自分の戦艦のＡＩに聞いた。（ＭＳは３機　機体はメビウス　ダガー２機です。　多分動き回ってる宇宙海賊の部隊でしょう）と冷静に言ってくる。

「そうか、だったら大丈夫だな。でも戦場に絶対は無いから俺も出るか」
と言って残された強行偵察型ジンに向かっていった
そして戦場に出た瞬間に報告していたＭＳと数が合っていなかった。

「オイオイ増えてるじゃねぇか」と言ってスナイパーライフルを起動させた。

「一対多数には俺は容赦しない。…撃ち落させてもらう」と言ってトリガーを引いた。

次の瞬間弾はダガーのコックピットを貫いた。敵は何事かと動揺していたが、その隙にエンジェルがガンソードで切り裂いていた。

そして後方を攻撃しようとした2機のメビウスが迫ってミサイルを放とうとしていたが

「悪いが、それは無理だ」と言って再びトリガーを引き前方を進んでいたメビウスが爆発を起こしかけ、後ろに居たメビウスが避けきれず突っ込んで爆発が起きた。

「ふぅ」と息を吐いて再びエンジェルを確認すると、最後のダガーを落としていた。

「お疲れさん」とシラユキに声をかけた。「援護してくれて有難う御座います」とお礼を言って来た

「いやいや、見る限り俺が居なくても楽じゃなかったか?」と聞いてみた

「そんな事有りませんよ、攻撃するのに弾幕が厄介だったんですけど、それを一時的とは言え止めてくれたんですから、戦闘が楽でした」とどうやら本音らしい事を言って来た

「そうか、取り敢えずコックピット貫いたダガーだけ回収してヤキン・ドゥーエ付近のジャンク回収するぞ」と今後の予定を言った。

「了解しました。しかしシュウさんは射撃だけは一人前ですね」と痛いところを突いてきた。

「あぁ、射撃だけが俺の取り柄だからな、まぁ其の内誰かから習うさ」と言ってジャンク艦に着艦した

「じゃあ私と如何ですか？」と聞いてきた「んっ？如何言うことだ？」と疑問に成ってしまった。

「えっとですね、私の場合格闘が得意なのに射撃が駄目シュウさんは逆つまり教えあいましょうって事です」つまりシラユキはお互いの苦手な所を補おうと言ってるらしい

「んー良いね、んじゃ直ぐにシュミレーター起動させて訓練に移ろうか」と言ってシュミレーター室に向かった。

そして彼らはヤキン・ドゥーエのジャンクが漂っている場所に着くまで訓練をして過ごしていた。

「ようやく着いたな、今回はシラユキはエンジェルで俺はミストラルで動くから」と言ったが

「何でシュウさんがミストラルなんですか！？危険です」と反論してきた

「あのなぁ、強行型ジンだと回収し辛いんだよ、だからこうしてミ

ストラル使ってるの、もしキマイラが残ってたらそっちで作業出来たんだよなぁ」とつくづく壊したのは失敗だったなと思ってしまった。

「そういえばキマイラやエンジェルって少し便利ですよね、本来ならミストラルでしか出来ない行動も2機は可能って」と今更ながらにエンジェルの使い勝手の良さに感心するシラユキだった。

「何か、今更だな。まぁ良いか。無駄話は終わりだジャンクを回収するぞ」と言ってミストラルでそこまで酷い壊れ方のしてないジャンク品を集めていった。

そのなかに有るものが漂ってきた。そう見るからにフォビドゥンのゲシュマイディッヒ・パンツァーだ。

「コイツは凄いな、まさかこんな物まで漂っているとはね」と言ってパンツァーの使える部分だけを持ってジャンク艦へと戻った。

着艦したときには既にエンジェルがジャンク品を一箇所に纏めてハンガーに掛かっていた

「先に着いてたのか早いな」と思わず言ってしまったが

「シュウさん良い物が手に入りましたよ！」と喜んでいる

「そうか、お前の良い者って何なんだろうな？」と少し小馬鹿にしてしまったが

「変なものじゃないですよ！レイダーのミョルニルですよ！」とはしゃいでいた。

「へっ？でも俺前に斬艦刀で一刀両断した気がするんだが、そんときミョルニル付いてなかったのか？」と少し疑問に成ってしまった。

「いえ、以前私がやり合った時にワイヤーをガンソードで斬ったんですよ、もしかしたらと思ってその場所の付近を捜してたら見付かりました」と言ってきた。

「そ…そうか、まぁ有効活用するから置いといてくれ」と頼んで持ってきたジャンク品を置いてミストラルから降りた。

そして大体のジャンク品を回収したので、彼らは再びプラント郡へと向かった。今回彼らが訪れるのは、プラントの１２市中の１市のマイウス市へと向かった。

「あーあーマイウス市のプラント聞こえるか？以前連絡したシュウ・K・ライトニングの艦だ着艦許可を願いたい」

「了解した。指示に従ってプラント港に入ってくれ」

「了解、通信終了」

そして指示されたとおりレーダー誘導されながらプラント港に到着しプラント内へと入っていった。

「シュウさん、シラユキさん」と近くから声が聞こえてくる。声の聞こえた方向に振り向くと助けた少年ニコル・アマルフィが居た。

「やぁニコル君久しぶりだね。元気だったかい？」と久々に会った友人に挨拶する

「はい、そちらこそお変わりなくお元気で何よりです」と笑ってきた

「さて、取り敢えず予定の日に付いてしまったけど本当に良いんですか？」とシラユキが再び聞いてくる

「大丈夫ですよ、家のお父さんお母さんも是非泊まっていって欲しいってお願いしているんですから」

「そうか、悪いね。じゃあ案内してくれるかい？」と直ぐ近くに停めてあった車に荷物を載せニコル家へと向かった。

「「おじゃまします」」といって二人はニコル家にお邪魔した

「やぁ、いらっしゃい良く来てくれたねユーリ・アマルフィだ宜しくね」と握手を求めてきたのでこっちも手を出した

「これから数日間お世話に成ります」とシラユキが申し訳無さそうに答えた

「そんな堅苦しく無くていいのよ、自分の家みたいにくつろいでね」とのんびり屋みたいな女性が言って来た

「もしかしてこちらはユーリさんの妻でしょうか？」とシュウは恐る恐る聞いた。

「あぁ紹介しよう、妻のロミナ・アマルフィだ。さて玄関で長話もあれだしリビングまで行こう」と軽く自己紹介が終ったところで家を案内された。

「さて本題としては、まずはありがとうシュウ君　キミのお陰の家の息子が生きてくれた」と頭を下げてきた

「いえいえ、結果的にあの場に居たので助けただけであってもっと速く気づく事が出来たならこんな事には」と言って感謝されるためにやってる訳じゃない事を言った

「そうか、それでもキミには感謝を言わざる得ないよ」と笑ってきた。

「ホントね。あなたみたいな人たちが居れば私達は争わなくて済んだのにね」とロミナさんから悲しい感情が伺える。

「その事についてなんですけど、自分は関って居なくてもユニウス・セブンそしてボアズに核を打ち込んで申し訳ありませんでした」と謝る事で頭を下げる事などシュウは自分一人の頭で許して貰えるのならどれだけ下げても良いと考えているのだ

「確かにキミは血のバレンタインの時以前から生まれてた、でも君自身は悪くないよ、だから顔を上げてくれ」と言ってシュウは恐る恐る顔を上げていった。

「まぁ堅苦しい話は此処までとして、紅茶でも飲みなさい」と言ってロミナさんが紅茶を淹れてくれた

「ありがとうございます」と言って紅茶を飲んでいると

「そういえば貴方達って結婚してるのかしら?」とロミナさんから変な事を言われ

「ブッ！…ゲホゲホッ何言ってるんですか、行き成り俺とシラユキはそんな関係じゃ！」と言って目の前に居た人物に紅茶が掛かっていたのを忘れていた。

「ご…ごめんなさい、ユーリさん、シュウさんも悪気はないんです」と冷や汗をかきながら答えた

「ハッハッハ、いや今時の若い子はムキに成って答えるけど、それじゃ肯定したいと言ってるような物だぞ?」と言って紅茶をハンカチで拭きながら笑っていた

「グゥ、だめだこの人達とは口では勝てない気がするよ」と言って多少顔を赤らめながら言った

「もう、父さんも母さんもシュウさんとシラユキさんを困らせないで下さい」とニコルが怒っていた

「スマンスマン久々にニコルの友人が来たからからかって見たかったんだよ」

「すいませんね、家の夫がこんなんで。さっ、ニコル彼らと話したいことが有るんでしょ?」と言ってきた。

「あぁ、はい。じゃあ少し着いて来て下さい」と言って席を立って別の部屋へと向かった。そこには二コル君専用のグランドピアノが置いてあった。

「父が好きに使ったら良いと言って、この部屋をくれました。でも如何すれば良いか判らないんです」と何かに迷っているようだ

「今はシュウさん達とこう話は出来ますけど、何時またどっちかから戦争の火蓋が切られても可笑しくない。そのとき僕は、如何すれば」と凄く迷っているらしい、多分今回は此れの事も聞きたかったんだろう

「正直言って私は反対です。理由はシュウさんから話してもらえるはずです」と言ってシラユキはシュウに顔を向けた

「あぁ、俺もシラユキと同じでニコル君の軍入りには反対の意思を隠せないな」と言い切った

「…なんでですか？理由を話してください」

「それはだな。余りにも君が優しすぎるからだ。今回此れも少し予測して今までのブリッツの戦闘記録を見せて貰った。君は大きな戦い以外は敵機を破壊するんじゃなくて戦闘不能がメインだった。そして最後にはブリッツの武装を壊された事にも関らずストライクに攻撃した事だ」

「あれは、アスランを助けるためであって！」と怒鳴って反論してくるが

「確かに助けるという意思は認めよう。だけどなあの時俺が咄嗟に助けて無かったら悲しんだ人も少なからず居た筈だ。だからあんまし無茶すんなキミが亡くなったら悲しむのは俺も一緒なんだからさ。それにキミはパイロットに成らなくても、ピアニストとしての腕が有るじゃないか、明後日キミのピアノ楽しみにしてるよ」と言ってシュウはピアノ室から出て行った。だがそこにはユーリさんとロミナさんが居た。

「ありがとう、キミには感謝しきれないね」とユーリさんが口を開いてそういった。

「もしかしてニコル君はあなた方には何も話していなかったんですか？」と疑問に成った事を口にした

「えぇ、何時も考え事しているから如何したの？って聞いても「大丈夫だよ」としか答えてこないから心配だったの。でも、あの子今回の事でふっきれたみたいね」

「そうですか、でも俺は相談を聞いただけで、何もしていませんよ。彼自身が切欠を見つけれたのかも知れませんね」と言って部屋の方向を向いていった。そこには綺麗な音色が聞こえてきた。

～3日後～

「本当に帰るんですか？」と再びニコル君が聞いてくる

「もうちょっと滞在しても良かったんじゃないかね？」とユーリさんまで引き止めてくるが

「いえ、俺たちもそろそろ向こうに戻らないと何か言われそうなんで」と曖昧な答えを言った

「そうなの？残念だわ。でもまた来てね。何時でも貴方達を歓迎するわ」とロミナさんも微笑んできた

「はいっ、何時かまた遊びに来ますね。良かったらこっちにも来て下さいね。今度は私達がオーブを案内しますから」と言ってプラント港へと歩き出した

「シュウさん、また話を聞いて貰っても良いでしょうか？」と後ろから声が聞こえる

「あぁ、何時でも話してこい、それとお前は親父さんとお袋さんにも頼れよ」と言ってジャンク艦内へと入った。

「それじゃもう用事は無いしこのままオーブに帰るか」と言ってオートパイロットを操作していた。

だが「家族かぁ、久々に見たけど良いなぁ」と何かを懐かしんでいた。きっとずっと前に居た両親を思い出しているんだろう。

その場に居たシュウは何も言えずにただシラユキを見続ける事しか出来なかったが

「さぁシュウさん帰りましょう、私達の家のあるオーブへ」と言って艦はオーブへと向かっていった。

ＰＨＡＳＥ２８（後書き）

抹茶「はい、今回はニコル君の悩みもついでに解決するという話でした」

シュウ「彼の心情はどうやって書いたんだ？」

シラユキ「そうですね。彼がピアニストに成りたいと言う心情って何処かに有りましたっけ？」

抹茶「ふっふっふ、それはだね小説版ガンダムＳＥＥＤ第２巻に書かれて有るんだよ！」

シュウ「良くそんな細かい所まで読んでるな」

シラユキ「感心を通り越して呆れが出てきましたよ」

抹茶「二人とも酷い、後日談造るの大変だから何度も読み直して書いたのに」

シュウ・シラユキ「「あぁ、はいはい偉い偉い」」

抹茶「お前等何時か後ろを気をつけろよ？」

シュウ「そんなことしたらボッコボコは覚悟しろよ？」

シラユキ「そのまえに今此処で殺っときますかね？」

抹茶「ごめんなさい、ちょっと調子に乗りすぎちゃったよ」

シュウ「まぁ何時までも後書きで喋ってる訳にも行かない閉めようか」

シュウ・抹茶・シラユキ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか?次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

次の後日談希望ありましたら言って下さい。可能な限り速い物順に書いていきます

また新ＭＳのアイディアなどありました、言って来てください。内容によっては採用したり取り入れたりしたいと思います。

PHASE29（前書き）

抹茶「今回は申し訳有りません、此方の身勝手によって読者の皆様の期待を裏切ってしまった事を改めてお詫び申し上げます。すいませんでした。今後このような事が起きない様細心の注意を払って書く事を再開しようと思います。」

PHASE29

「へっ？護衛だって？また行き成りな話だな」とシュウはカガリに頼まれた事に首を傾げてしまった

「あぁ、今度プラントのアーモリーワンでギルバート・デュランダルにに会いに行く、その時の護衛にアスランだけじゃ足りないからシュウとシラユキも付いてきて欲しい」

「私達は今の所暇ですから別に大丈夫でしょう、シュウさんも大丈夫ですよね？」と聞いてきた

「あぁ、プラントの本拠地だから何も無いとは思うんだが、万が一も考えられる着いて行って護衛はするさ」と支度をし始めようと立ち上がったが

「お前らは如何するんだ？アスランはアレックス・ディノという名前で本名を隠しているんだが」

そうアスランは此方に移る時にアスラン・ザラと言う名前からアレックス・ディノと名前を変えてカガリのボディーガードをしているのだ。彼はアイリーン・カナーバ前議長の計らいで今のオーブに居られるのだろうが、プラントからしたら裏切り者扱いにされるのかも知れないだろう。

「そうだな、じゃあザフトの領地に居る時だけ名前を変えて過ごすとしようかな」と言って名前を考え始めた

彼ら二人も良くも悪くも連合からもザフトからも尊敬と畏怖を浴び

せられるほど有名なパイロットなのだ。ヤキン・ドゥーエ終了後シラユキ・カグヤの存在を欲しがっていたプラント側は再三教官に成らないかと言う要求は出ていたが、彼女は頑なに拒んでいたのだ。逆に自分の方は生きていると知っている人はあんまり居ないので知っている人は少ない。

だからと言って戦場に居たころの異名がシラユキの駆るエンジェルは『断罪の天使』そしてキマイラのほうは『閃光の殺戮者』と結構キマイラの方が名前は酷いのだ。

まぁ個人的に厨二病にしか見えないが今更生きてました何て言ったら、本当にやばそうな厨二病を覚悟しなければ成らない気がする。

「じゃあ私は古都春　真衣って名乗りますね、普段一緒に居る時は古都春か真衣って呼んで下さい」

「俺は朝倉　和真にするか、呼び方はカガリに任せるよ」

「判った、和真に真衣だな。これからアーモリーワンまでの間は宜しく頼む」と言って手を差し出してきた

「あぁ、こちらこそ宜しく頼むよ、何かと苦労は多いかも知れないが頑張ってくれ、出来る限りボディーガード兼サポートはする」

「そうですね、以前戦ったもう気を許し合えるほどの仲間ですから何でも頼ってくださいね。可能な限りやる事はしますから」

二人ともカガリに力を貸すのは厭わないし、むしろ頼ってくれた方が嬉しいとも思っているのだ。今は認められない人物も多いかも知れないが、彼女は彼女なりに努力をしているので支えたいと思いた

い。

「あぁ、そうか。有難う二人とも、じゃあ明日には出るから準備をしといてくれ」
と言ってカガリが家から出て基地に戻っていった

「シュウさん一つ聞きたいんですけれど、やっぱりアーモリーワンで何か起きますよね？」と聞いてきた

「あぁ連合のファントムペインって部隊が新しく作られたガンダムを狙って攻撃を仕掛けてくる」
何故彼女がこんな事を聞いたか…それはシラユキにだけ未来を知っていると告げたのだ、其れゆえ彼女は原作が起きる時にだけ対策を練っているのだ。

「そうですか、やはりパイロットは全て改造されているんですかね？」と唯一の気がかりを聞いてきた

「あぁ、全く何時まで経っても連合のやり方には反吐が出る。それにザフトもザフトで浮かれすぎて警戒を怠るとは笑い者にも成らないぞ？」と思わず言ってしまった

「2年間戦争から離れれば平和ボケも起きるから仕方有りませんよ。しかし相手はガンダムですか。厄介な相手ですね」と呟いていたが

「厄介なのはそれだけじゃない、最悪な事にだ連合もザフトの真似してムウさんのクローンを作り出しやがった。コイツは老化現象が無いから世界に復讐は無いな」と言ったが

「クローンまで戦争に出しますか、ますます呆れ帰りそうですよ私

は」と顔に手を置きやれやれと首を振っていた

「まぁ愚痴を言ってもしょうがない、さっさとこんな理不尽な戦争には蹴りをつけたい物だよ」

「でも未来を壊すと不祥事を起こるんではないのですか？」とさも当然な事を言って来た

「あぁ、それでも。本来殺されるようなパイロットは救う、それが俺らのやることだ」と可能な限り救うことを決めているのだ

「えぇ、死ぬな・生きろ・そして可能な限り人の命を救えですね。私達の信条を汚させる訳には行きません」と意気込んでいた

「さぁ、頑張ろうか」と言ってプラントに行く為機能性を最優先にしたスーツを用意した。

「待ったか？」と次の日シャトル乗り場でついつい聞いてしまった。

「いや、時間ピッタリだ。流石に時間厳守と仕事に尽くす精神は褒めるところだな。これから宜しくだなシュウにシラユキ」とアスランが挨拶してくるが

「今は和真だ。教えられた偽名を頼むから使ってくれ、あくまで俺等は目立たないように護衛をしているんだ。それを三人もヤキン・ドゥーエで生き残ったパイロットが居たらどうなるか判った者じゃないぞ？」と本名を言った時に起きる事を危惧してそう告げた

「あぁ、すまない。取り敢えずカガリはもうシャトルで待っている。もう乗ろう」と言ってアレックスを先頭にシャトル内に入り込んだ

「さてと、今回は何でアーモリーワンに行くんだ？途中まで来る時には火急の件と聞いたんだが？」

「あぁ、その事か。再三オーブ戦で流出した国の技術と人的資源の軍事利用を辞めろと言っているんだが中々要求に応えてくれなくてな。今回会いに行って如何言うことか聞きに行くんだ」
この件はザフトから返答が無くてカガリも頭を悩ませているんだろう

「成る程な、でも今回議長に就任したギルバート・デュランダル相当の切れ者らしいからなのらりくらりと回避されるかもしれないな」と多少の警戒を払いながらそう言った

「そうなのか、と言うか和真は何気に私より知っている情報多いんじゃないのか？」と聞いてくるが

「仕方ないだろ？此処1年間色んな情報を集めていたんだ、デュランダル議長の政策も何度か耳に入るし他の情報だって何時かは聞く事に成るさ」と言って懐からスタンロッドを出し天井を突いた

「なっ！何をやっているんだ和真！」とカガリが怒鳴ってくるが

「落ち着け…ッやっぱりな」と言って破損した何かを取り出してきた

「何ですかそれは？」とシラユキが頭を傾げ聞いてくる

「此れは少し形は変わってはいるが、盗聴器だ。多分少しでも情報を得ようとしたんだろうけど正直言ってこっちを舐めているのかね

？」と言って盗聴器を握りつぶした。

「何で壊したんだ？それが有ったら議長に対して弱みを握れるだろ？」とアスランが聞いてくるが

「いや、多分コイツを突きつけても証拠不十分で知らぬ存ぜぬでのらりくらりと逃げられるのが良いオチだ」

「つまり、どうすれば良いんですか？議長が言い逃れ出来ない様にするには」

「まずは、命令や脅迫などの命令をした声やしぐさ等の行動が必要なんだ。それが無いと、付け入る隙が全く無い」と言って今後如何行動するか考えていたが

「それを考えるのも重要だが、和真今はスタンロッドは仕舞っとけ他人が見たら何事？って思って押さえつけられるぞ？」とアスランに指摘された

「おっ、すっかり忘れてたよ」とスタンロッドを衣服の中に再び隠した

「何をやってるんだお前達は、全く頼むから議長の目の前では変な行動を取らないでくれよ？」と心配された。

「判ってる、まぁ問題は起こさないはずだよ…多分だけどな」と流石に自分で自分の行動を大丈夫か不安に成ってしまった

「まぁ、和真には真衣が付いているから問題無いだろう、私は少し眠る着いたら教えてくれ」と言って眠りに入った

「アレックス少し聞きたいんだがカガリは最近眠ってないのか？」

「あぁオーブの首長に成ったんだ。幾つかの問題は解決されたとは言え未だにやる事は多く有る。彼女を支えてやりたいんだが如何しても一人で頑張ろうとしてるんだ。全く頑張りすぎと言いたい所だよ」

「そうだな、まぁ俺等は影からしかサポート出来ないんだ。そこへんは編考えて動かないとな」と言って二人は会話を打ち切ってアーモリーワンに付くまで口を開かなかった。

「着いたか取り敢えず先にアスランを出して、警戒その後カガリが出て、俺ら二人が後ろを警戒するとしようか」と護衛方法を聞いといた

「あぁ、それで良いと思う、というか和真も何気にボディガードの才能有るんじゃないのか？」とアスランが咄嗟に言って来たが

「ボディーガードも良いがそれじゃあ本来俺がやろうとしている事が出来なくなる。だから俺はパスだな」とボディガードに成る事は嫌だとハッキリ応えた

「やはり、君の意思は変わらないんだな。でもそれが君自身の魅力だと思うから俺は反対しないよ」とアスランは残念そうにしても反対はしないようだ

「そろそろお喋りは辞めましょう、行きますよ」とシラユキに促され順番に出て行った。

そして出て直ぐにカガリを待っていた駐在員が近寄って話している、そしてシュウは先ずは駐在員を警戒したあと問題無しと判断し回りを確認した。正直言うと彼自身ウンザリしてしまった。そう彼らは新しい戦艦の有用性について語っていた。確かにユニウス条約で持てる機体の数は決まっているからと言って、この話を聞く限りでは再び戦争でもしたいのかと正気を疑いたくなる。

そして歩いている最中にガラス越しからアーモリーワンが見えていた。正直に言って浮かれているようだ。浮かれるなとまでは言わないが警戒すらしないのは正直連合の人間を舐め切っているのか？と思ってしまう。ただでさえ警戒のなさで最新鋭のカオス・ガイア・アビスを奪われるので笑えやしない。

「和真さん、予定じゃあのモビルスーツハンガー群のどれかから例の3機が出てくるんですよね？」とシラユキにだけ渡した小型の無線から声が伝わってくる

「あぁ、そうなったら互いに行動を開始するぞ、酷いようだが機体はどれであろうと絶対に入手した方が良いかもな」とどんな機体を拾っても対応できるように考えていた

「はぁ、こんなことなら私達の専用機を持って来るべきでしたね」と少し涙声になっていた

「専用機と言ってもキマイラやエンジェルは呼び出せば使えるかも知れないが例の二機はは使えないぞ？あんなもん使ったら何言われるか判ったものじゃない」と作り上げた二機の存在は隠しておきたいのだ。あの機体を教えた瞬間欲しがる人物は多いはずだ

「うぅ、仕方ないですよね」と話している途中でどうやら執務室の前に着いたようだ。

そして中に入っていった。目の前にギルバート・デュランダルが座っていて、カガリにソファーに座るように勧めてくる。自分達はソファーの後ろに立って周りを警戒しながら会話に耳を傾ける。

「で？この情勢下、代表がお忍びで、それも火急の用件とは、一体如何した事でしょうか？」

快活に尋ねてくる、聞くまでも無くこっちの用件なんて知ってるくせに聞いてくるとは喧嘩を売っているのだろうか？

「我が方の大使での伝える所では複雑な用件と言う事ですが？」確かにザフトからすれば技術者を取られるんだタダで持っていかれるのは複雑だろう

「私には、そう複雑には思えぬのだがな」と軽く脱力して呟いた

「だが、未だにこの案件に対する、貴国の明確なご返答を得られないと言う事は、やはり複雑な問題なのか？」と挑発的な口調で言い放っている

「ほう…？」室内に入る双方の随員が彼女の喧嘩腰な物言いに緊張したが、こちらからしたら何時も通りに思える。前大戦でもこんな感じなので今更焦る必要すら感じない。

それにデュランダル議長の方は気を悪くしたようには見えず、むしろ興味深げに首をかしげている。

「我が国は再三再四かのオーブ戦で流出したわが国の技術と人的資

源の、そちらでの軍事利用を即座に辞めて頂きたい、と申し入れている」

だがデュランダルは真面目に受け入れるつもりは無いようでその表情はまるで子供のイタズラを大目に見る教師の物だった。この結果をシュウは予想して少し呆れてしまった

そしてデュランダルは突然工廠を案内しようと言って司令部から出て行く。周囲には格納庫が並びときおり広い路面をモビルスーツが地響きを立てて横切る。

シュウは警戒の為にカガリの近くを遠ざからず離れすぎずを行いながらＭＳを確認していく。ガズウートやゲイツＲ他にもジンやシグーが警戒しつつも動き回っている。そしてたびたび来るオイルの匂いが自分が本来居た場所を思い出させる。

「姫は先の戦争でも自らモビルスーツに乗った戦われる勇敢な方だ」とハンガーの中を時折指示して解説しつつこの行為を言い訳するように言った

「また最後まで圧力に屈せず、自国の信念を貫かれた『オーブの獅子』ウズミさまの後継者でいらっしゃる」カガリは父の名を出されて悲しそうな表情をしていた

（和真さん何時ガンダムは動くんですか？このままじゃどう対応して良いのかわかりませんよ）とデュランダルの言ってる事にウンザリしているようだ

（判らん、でもそろそろ動くはずだろう？あいつ等も今回の件で自分達の間抜けっぷりには、反省してくれる事を願うよ）

（そうですね、同じ人種と言っても此処まで呆けていると、私自身も叱りたい気分です）

（頼むからおまえ自身も自虐はするなよ?真衣は他の人と比べて優秀なんだから、それに俺自身も大切なパートナーを失うのは辛い）と悲しそうな声を出した

（はい・・・ありがとうございます。私も貴方を置いて死なないのでシュウさんも置いてかないで下さいね）と会話をしていた時に

警報が鳴り響いた、シュウとシラユキは周りを見回しながら移動を開始した。

そして一つの格納庫から扉を貫いてビームが撃たれた。扉は溶けて開きビームの飛んで行った向かいの格納庫で何かが誘爆する。

すぐさまザフトのＭＳが出てきている。それを横目で敵機を確認しながらＭＳを探し始める

今は他のＭＳが出撃し3機のガンダムと撃ち合っているが普通のパイロットでは返り討ちにあうのが関の山だろう。

そして移動中に近くのハンガーにビームが撃ち込まれた。

「クッ…見境無しに攻撃しやがって危ねぇな」と思わず言ってしまったが

当たり所が良かったのか一機のゲイツＲが目の前に倒れこんだ。

「良し、ＭＳさえ有ればこっちのもんだ」
と言って迷わず機体に乗り込んだ。そしてゲイツＲを立ち上がらせ、目の前の３機を睨み付けた。

「ザフトもこんな物作り上げるから！」と言って機体のバーニアを吹かせてアビスへと突っ込んだ。

だが直ぐに此方に気付いたアビスはすぐさま２連装ビーム砲を連射してくる。

だがその攻撃を盾で防御しそのまま突っ込みショルダータックルを喰らわす、そして体勢がよろけた瞬間を狙って左足のブースターを吹かし膝蹴りをコックピットに喰らわした。

それでもフェイズシフト装甲のせいで凹みはしなかったが、少し空中に浮き腰に付いていたレールガンを連射する。流石にガンダムタイプでもこの連激を防ぎ切れなかったのか、ビルまで吹っ飛ばされる。

＜何なんだよお前は！＞とアビスのパイロットが激怒して言ってくるが

「さぁな、自分で考えてみろよ。誰を怒らせたらマズイかきっかり教えてやるよ」と言って何時でも格闘が出来るように構える

そして再びアビスが体勢を戻す前に叩こうと再び攻撃しようと突撃したが、すぐさま危険を感じ左へとローリングした、左肩が地面に擦ったが今更メンツ等気にするべき物ではない。直後シュウが居た場所にミサイルと銃弾が降ってきた。

もし反応し切れず直撃していたら、運悪く死んでいたかもしれない、そして追撃する様に2つのポッドが迫って此方に銃口を向けようとしたが、1つのポッドがビームに貫かれ爆散した。

「あぁ、ようやく来たか、少し遅刻してないかシラユキ？」
とこの行動を予想し敢えて何もしなかったのだ。

「仕方ないですよ、私だって使えるMSを探すのに必死で大変だったんですよ？」と愚痴を言いながらももう一機のゲイツRが自分の横に着く

「そういえば、アスランとカガリは如何したんだ？」と心配になってしまった

「あぁ、それなら今ガイアとやりあっていますよ？技量の差は圧倒的過ぎますけどね」と言って機体の居る所を見る。今は互角だが直ぐにアスランの方が優勢に成るだろう

「まぁ良い、今は破壊じゃない足止めで良いんだ」と言って目の前の機体の行動に注意払っていた

「了解、前大戦で生き残った実力相手に見せ付けて上げます」といって、目の前の機体がどのように動いても対応できるよう考えていた。

そしてお互いの準備は整ったのだろうゲイツ二機がカオス・アビスへと突っ込んでいく

だがアビスは肩の3連装ビームとスキュラを放って、此方の固まって動く事を阻止しようとした。

二機は咄嗟に左右に別れビーム砲を避けるがシュウにカオスのビームサーベルがシラユキにビームランスが迫った。

シュウはサーベルを防ぐ事をせずゲイツの左腕を犠牲にし肘打ちをカオスに喰らわせ、あまりの衝撃で後ろによろけて腕をコックピットに押さえていた。当然その様な隙を見逃す訳が無く左足で首を狩る様に振りメインカメラを割った

「幾らガンダム系だとしても機体を最大限使用してない奴に俺は負けない」とメインカメラを割ってサブカメラだけを使って未だに後方に下がろうとしているカオスに言い放った。

一方シラユキの方は突いてくるビームランスを機体を半身にしランスを横切らせた。そのまま持ち手を掴みアビスから引っ張ってぶん取った。

しかしアビスのパイロットも直ぐに反応しランスから手を放し再びスキュラと3連砲ビーム砲を放ってくるが

「クスッ…直線的な攻撃ほど読みやすい物は無いんですよ?」と微笑しながら先程の攻撃を大きく空振りし隙が出来た所を左腕の関節部にランスを突き刺し手を離した。

直ぐに連激に繋げようと思ったが、後方に下がられ右腕でランスを引き抜いていた。だが今は全く使い物には成らないだろう。

そして、ふと上から飛行音が聞こえて来た少しだけ確認すると戦闘機と何かパーツを引っ張って動いてい来るのが見えてきた

～シン・アスカＳＩＤＥ～

誰かがカオス・アビス・ガイアの三機を奪取したと聞き直ぐに奪い返して貰う為ソードシルエットを持ったコア・スプレンダーでアーモリー・ワンまで進んでいった。

「誰だか知らないけど、また戦争でもしたいのかよ！」と激怒してしまったが今は直ぐに対処しなければ成らないと思い目の前の惨状を目撃した。

あたりには大量のＭＳの残骸と燃え盛る格納庫だけしかなかった。

そして肝心のカオス・ガイア・アビスを探して発見したが正直目の前の光景に自分の目を疑ってしまった

今回造られたカオス・ガイア・アビスは、どのＭＳよりも性能は高いはずだ。

今はザクウォーリアがガイアと戦って対等に遣り合っているが此れはまだマシだ。

何をやったのか、ザクウォーリアよりも劣るはずのゲイツＲが何故ガンダムを上回っているんだ？

普通だったら逆の展開が普通な筈だと思うのだが今はカオス・アビスが押されている、正直パイロットは化物じゃないのか？と思いたくなるほどだ。

もしこのあと会える物なら是非会って見たいものだ。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「ふぅ、ようやくインパルスが来たか」と言って機体に不具合の有るカオス・アビスを睨み付けた

流石に増援が来て不利と判断したのか二機は最高火力をコロニーの壁に撃ち出し自己修復を無視して溶けた所から抜け出して行った。
そしてガイアも後を追う様に出て行った。

そしてインパルスは後を追うように壁から出て行った。そして他の赤と白いザクが出てきた。

シュウは、それを見て少し安心しながら有ることを言ってしまった。

「これで再び戦争が始まる。一部の上層部の身勝手な行動のせいで多くの命が失われる」と少し悲しくなってしまった

「連合の此れを図った高官共覚えてろよ?このツケは何倍にも返してやるよ」
と何処かに居る者達に対してシュウは怒りを含めながらも冷たい声で言い放った

ＰＨＡＳＥ２９（後書き）

今回は謝罪なので後書き会話はありません、申し訳ありません

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ３０（前書き）

抹茶「はい、フェイズ３０を今回速めに書き上げました。」

シュウ「2日で速いと思っているのか？」

シラユキ「本当に早い人だったら1日で次話書き上げますしね」

抹茶「ガンダム系統は長いから書く量も不思議と増えるんだ」

シュウ「そうか、やはり今回速めに仕上げたのは」

抹茶「えぇ、自分なりの謝罪です。言葉を言うより行動で示した方が速いと思って」

シュウ「そうか、じゃあ今回は自信作なんだろ？」

シラユキ「話の内容は？」

抹茶「それは読んでからのお楽しみで、それじゃあ本編に移ろうか」

抹茶・シラユキ・シュウ「それでは、本編をお楽しみ下さい！」

PHASE30

「何故こうなったんだろうなぁ」と思わずシュウは今の状況に愚痴ってしまった。

「仕方ないですよ。状況は状況だったからとは言えザフトのMSを使用したんですから、銃を構えられますよ」とシラユキも苦笑いになっていた。

～回想～

そう、彼等はカオス・アビス・ガイアを打ち払った後護衛対象のカガリが負傷してしまったらしい。流石に自分たちも目の前の戦いに忙しかったので決してアレックスを責める事は無いとしてもこちら側が怒られるのは仕方ないと思っていたのだが

「今は、そんな事をやっている暇は無い。カガリを治療したいから今回造られたミネルバに保護を求めよう」と言ってカガリが目を覚ましていたので話しかけていた

「判った、取り敢えず俺と真衣が先行する、アレックスは後ろから着いて来てくれ」

と言って機体はミネルバに向かった。

先程の戦闘で機体はボロボロで不恰好だが守る為なら機体を気にしてる暇など無いだろう

そして片腕を失ったゲイツRと目立った損傷は無いが所々擦れているゲイツRが入った瞬間色々と注目を浴びてしまった。そして後を追うようにザクウォーリアも着いてくる。

先に俺と真衣がMSから降りる、そして直ぐにアレックスとカガリが降りてくるので、容態を確認する為に近づいて確認する

「如何なんだシュウ?カガリの容態は大丈夫なのか?」とアレックスが心配してくる

「あぁ、大丈夫だ。少し頭を切っているが、これなら針を縫えば直ぐに治るだろう。あとは、コイツは軽い脳震盪だな。アレックス肩を貸して運んでやれ。今は歩くのは辛いはずだ。」と的確に言い放った。

「じゃあ俺がカガリに肩を貸しているから和真と真衣は誰か呼んでくれるか?」とアレックスは余程カガリを心配しているが

(何で原作だとカガリ捨てて最後メイリンとくっ付くのかなぁ)とついつい思ってしまった。

「あぁ、判った。直ぐに人を「そこの4人動くな!」…はぁ、何か前もこんな事有った気がする」と言って軽く呆れ掛けてしまった。

~回想終了~

赤服の女性と数人の軍人がこちらに銃口を向けて叫んでくる。咄嗟にシュウとシラユキはカガリとアスランの前に立ち衣服からデザートイーグルを抜き出した。

だがお互いに睨み合っていると艦内放送が流れてきた。

<本艦は此れより発進します!各員、所定の位置に就いて下さい>

(やはり発進か、全ては原作通りに始まって来ているんだな。だが

今のこの状況を如何するかだな）
とツイツイ今の状況に呆れながら溜息を吐き出した。

「そこの４人動くな！その二人も銃を捨てろ！」と艦内の放送に驚いていたが、直ぐに此方に叫ぶ。

まぁ当然の反応だ。文字通り部外者の俺らが、まるで自分の機体のようにザクとゲイツＲに乗り込み軍艦にまで来たのだから

「何だお前達は？軍の者ではないな？何故ザフトの機体に乗っている！？」次々と聞いてくるが。結構気が立ってるようだ。まぁ当然だろうさっきまで同じ様な部外者に最新鋭のＭＳを奪われたので嫌でも疑いたくなる。

だが「銃を降ろせ、こちらはオーブ連合首長国連合代表　カガリ・ユラ・アスハ氏だ」とアスランが高圧的に答えていた。

さすがに此れに付いては驚いたのか赤服の女性と周りの兵士から銃口は降ろされどよめきが走った。

「俺は随員のアレックス・ディノ。そこの二人はアスハ氏のボディー・ガードをやっている古都春　真衣と朝倉　和真だ。デュランダル議長との会見中騒ぎに巻き込まれ、避難もまま成らないままこの機体を借りた」
とアスランが説明し、此方の身元が判明したと思いシュウとシラユキはお互いに銃を懐にしまった

「オーブのアスハ？」

赤服の女性は曖昧に内容を繰り返す、正直アスランの言葉を疑って

いるのだろう。だがこちらがＶＩＰで有る以上、確信が持てないうちは相手も慎重に振舞わざる得まい。本物であろうと偽者であろうと。アスランは居丈高に要求を突きつけた

「代表も軽いとは言え怪我もされている。議長は此処に居るのだろう？お目に掛かりたい！」

此方を取り囲んでいた兵士達は困惑で目と目を交わしていた。

そして一人の兵士が近くにあった端末に連絡をいれていた。

「取り敢えず代表の怪我の応急処置をしたいと思いますので、着いてきて下さい」

と赤服の女性が周りに指示を出し着いて来る様促していた。

そして医務室に向かっている最中に＜システムコントロール全要員に伝達。現時点を持ってＬＨＭ－ＢＢ０１ミネルバの認識コードは有効となった。ミネルバ緊急発進シークエンス進行中。Ａ五五Ｍ六警報発令、ドックダメージコントロール全チーム、スタンバイ――＞

という放送が聞こえて来た。この艦は今から宇宙へと進んでいくのだろう。此れであの艦が連合の物と判ってしまえば再び戦争が始まるだろう。シュウは再び戦争が始まる事を悲しく思っていた

そして意識が少しだけハッキリしてきたカガリが心配そうに「避難するのか、この艦？プラントの損傷はそこまで酷いのか？」と自分が傷ついてるのに未だに他の事を心配している。

女性は肩越しから此方を見やったが何も答えない。一応前後をシュウとシラユキで固めているが未だに武装した兵士に周りを囲まれて動いている。

守るというより此れは監視の類に近いだろう、シュウも今の状況は理解できるが余り気持ちの良い物ではない。

そのとき艦内に警報が流れ始めた

＜コンディション・レッド発令！コンディション・レッド発令！パイロットは直ちにブリーフィングルームへ集合してください＞シュウは原作を知っていたから、理解はしていたが正直今の戦力で勝てるかどうかすら謎だ。

彼自身カガリに頼まれたら出撃するかもしれないが、ザフトに頼まれたら素直にＮＯと言えるだろう。第一この事態の元凶はザフトでもあり警戒を怠り過ぎた故に成った事だ。自分達の不始末は自分達で片付けろと考えている。

「戦闘に出るのか！？この艦は！」

驚くべき事態にアスランがきつく問いただすと女性の方も戸惑った顔を此方に向けた。きっと彼女事態も現状を理解し切れてないのだろう

「アスランッ」その名に女性が反応した「アスラン？」

とたんに真っ正直なカガリが口を押さえる。非常事態の連続なので混乱し思わず偽名を使わなかったのだろう。だが救いは此方の本名まで言われなかった事だ。言われてたらきっと大変な事に成っていただろう

そして女性はさっきまで疑問の目だった筈だが、今は違う目付きに成っていた。そうこれは好奇の目だった。そして今度は此方にも目を向けた。多分此方にも何か有るんではないのかと考えているのだ

ろう。

そして彼等は医務室へと着いたが此処からはシュウの独壇場だった。
「一応俺も医務の資格は持っているアスハ氏の治療を任せてもらいたい」と言って資格を見せびらかした
一応偽名になっている。そう此れは簡単に光の反射で見る所によって名前が変わる加工を加えているのだ

「行き成りなんですか？貴方達は護衛対象なんでその場でじっとして貰いたい」と女性に叱られそうに成ったが

「私は軍の医務より彼を信頼している。だから私の治療は彼に任せたいと思う」とカガリが言って女性は渋々と下がっていった。

「それで如何しますか？針を縫えば治癒は早くなりますが、少し痛いですよ？」と問いかける

「構わない、糸で縫ってくれ、1分1秒でも早く治したいんだ」と言われたので

「判りました。少し痛いですが我慢してください」といって消毒しすぐさま針を通した。この分なら1針で終るので痛みも一瞬で済むだろうと思ったが…。

「痛いっ！もっと優しくしてくれシュウ！」と思いっきり本名を言って来た。

「私は和真です代表、勘違いしないで下さい。前大戦の英雄の名前を私が名乗るなどおこがましい程です。それとあと少しで終るので我慢してください」と言って黙々と作業を続け、最後に上から傷を

触らないように水を弾くテープを頭に張り包帯で巻いて治療を完了した。

シラユキ達の方に振り向いたら、今度は女性だけでなく多くの兵士が興味を持った目でこっちを見てきた

「取り敢えず代表の方の治療を終えました。艦長の方に連絡していただけますか?」とシュウは苦し紛れに頼み込んだ。

そして一人の兵士がブリッジと連絡を取り合い直ぐに返事が返ってきたのか

「議長達が艦長室でお待ちです。着いてきて下さい」と再び誘導され始めた

だがシュウはそんな事は如何でも良く感じてきた。今はこの事態を打開しなければ正体がばれる。

「シラユキ如何すれば良いと思う?」と思わず無線機越しに話しかけてしまった

「あっ、あはは仕方ないですよね。アスランさんに引き続きシュウさんまで正体ばれそうなんですから」

「全く笑い事じゃないぞ?今でも後ろから視線を感じるし、だからと言ってボディーガード役だから後ろ振り向けないし」と少々ウンザリしてしまった。

「確かに、後ろから幾つか視線感じますね、それにそろそろ私の正体を勘ぐってる人も何人か居ますし」

「こう言う時だけカガリの生真面目さが裏目に出てしまったな。だけど今回はしょうがない。まぁばれたらザフトのデータバンク荒らしまくってそんな事気にしてられないようにしてやろうかな」とあくどい事を考えてしまった。

「中にどうぞ」と言ってカガリたちは艦長室内へ入って行く

そしてデュランダルとタリア艦長が座っていた。カガリとアレックスに座るよう促して自分たちはカガリの後ろに待機した。

そしてデュランダルは「本当に、お詫びの言葉も無い」と滑らかな口調で話しかけてきた

「姫まで、このような事態に巻き込んでしまうとは。ですが如何かご理解頂きたい」

ようやくミネルバの艦長室に通されて議長の面会を果たした。これからどれかの艦が戦闘に向かうのは判っていたが、まさかカガリの安全を図ろうとして避難したのによりにもよって行くのが戦場というのは、悪い冗談にしか思えない。

カガリは青ざめた顔を俯けている。多分考えているのは襲って来た部隊の事だろう。

「あの部隊については、まだ何も判ってないのか？」とやはり考えていた事を言っていた

「ええ、まぁ…そうですね。艦などにも、はっきりと何かを示すような物は、何も」デュランダル議長もその部隊の背後に居る者は大体想像しているが確たる証拠が無いので明言できないのだ。

シュウも弱みを握ろうと以前入手した端末から調べようとしたが、流石に別のデータに入れてるのか証拠は一切手に入れられなかった。

「しかし、だからこそ我々は、一刻も早くこの事態を収拾しなくては成らないのです。取り返しが着かない事に成る前に」とデュランダル自体もこの件には焦りも感じてるのだろう

「あぁ、判っている。それは、当然だ議長。今は何であれ、世界を刺激するような事は有っては成らないんだ。絶対に……！」

シュウは当然の事だろうと思っていた。そう今の世界は表面上は平和を保っているかも知れない。だがそのギリギリの状態で保たれている平和に少しでも刺激が来た瞬間に平和という物は崩れ去るだろう。

此れまでの二年間はプラントも地球も多大なダメージを先の大戦で受け、お互いに回復するために平和と言うなの元に手出しを避けていた。

だが今その平和がたった一つの部隊のせいで崩れ去ろうとしているのだ。

「ありがとうございます。姫ならばそう仰って下さると信じておりました」とカガリに笑みを浮かべているが、此方にも笑顔を向けている。だが此れは演技にしか見えなかった。

シュウは油断せず常に警戒を払っていた。この人は此方が気を抜いた瞬間恐ろしい事をやって来るのではと危惧していたのだ

「よろしければ、まだ時間の有るうちに、少し艦内を御覧に成って

下さい」と情報を教えてくれるとかと錯覚しそうに成ったが、

流石の艦長が「議長！」と警告を発していた。まぁ至極当然だろうザフトの最新鋭を他人に見せびらかすのは、正気の沙汰ではないだろう。

だが議長は平然と「一時とは言え、いわば命をお預けに頂く事になるのです。それが盟友としての、我が国の相応の誠意かと」議長がそう言うと最新鋭の艦長だと言えど反論できない。反論などしよう物ならそれは盟友関係を否定しているような物だ。

～ザフト兵ＳＩＤＥ～

「しかし信じられないよな、マジで嘘みてぇ」と赤いザクのコックピットに頭を突っ込んだヴィーノがそう言い放った。

「何でイキナリこうなるんだろうだよ」と軽く戸惑っていた。当然だろう明日進水式もまだなのに、行き成り実戦なのだから戸惑いが出るのは当然としか思えない。

「でも一番怖いのはこのまま、また戦争に成っちゃったりはしないよね？」とヴィーノが声を潜めて同僚に聞くと

「起きないとは思うけどね」とヨウラン自体も肩をすくめてしまった。

だが彼らが一番気に成っていたのは

「なぁ、あのゲイツＲとザクを使ってたパイロットって誰なんだ？」と大きな疑問に成っていたらしい。流石にゲイツの腕を一本切り落としたのは激怒したいが、あそこまでガンダムを翻弄するパイロッ

トは初めてだ。

「あぁ、あれに乗っていたのは、オーブのアスハとその護衛」とルナマリアが答えていた。

彼女は自分の機体に乗りながら疲れたように肩をすくめる「それでさっきは大騒動だったんだから」

だがその言葉にシンは反応し「オーブのアスハ!?」とシンは直ぐに戻ってきた。

ある一人のパイロットのお陰で家族は死ななかったが、オーブを焼いて自分達だけ逃げ出したのだから彼自身恨みを持っているのだ。

「うん。私もビックリした。こんな所でオーブの姫様に会うとはね」とルナマリアは言ったが、再び有る事を無造作に聞いた。

「でも何?あのザクとゲイツがどうかしたの?」

「あぁ、いや…ミネルバに配備される機体じゃないし、それにパイロットの腕が気になって誰が乗ってたのかなってね」とシンは言葉を濁してそう言い放った。

「操縦していたのは護衛の人らしいよ。たしか名前はアレックスと朝倉と古都春って名乗ってたわね」と言っていたがシンは少しだけ疑問に成ってしまった。

(何故此れだけの腕前が有って誰にも気付かれなかったのだろうか?)と考えている時に

「でもアスランとライトニングかも」とルナマリアが秘密みたいに囁いていった

「「「えっ？」」」とその場に居たシン・ヨウラン・ヴィーノは驚いてしまった。

彼等は目を瞬かせた。アスランはジャスティスに乗って大戦を終わらせた。英雄だった。そしてシュウ自体も『閃光の殺戮者』という名で有名に成ってしまった。

「代表が咄嗟に言っちゃったのよ。その人達の事を『アスラン』『シュウ』って、でもアスランの方はオーブに居るって噂でライトニング自体は死んだって事で有名な筈なのにね」

アスラン・ザラ　当時のプラント評議会議長パトリック・ザラの息子にしてザフトのエースパイロット。
大戦中、敵の新型モビルスーツを単機で倒し、ネビュラ勲章を授与されて、特務隊フェイスに配属。しかしその後軍を脱走し行方は不明だったはずだ。
彼のその後の中にはオーブに亡命したという説があったのだ。

だが一番彼らが衝撃だったのがシュウ・K・ライトニングの存在だ。彼は一度砂漠の虎の配下と成りバナディーヤで既にフリーダムと同等の性能を持つキマイラを単体で造り出し、更には整備士として一流なのだ。

また彼の行動は、全く持って不可解な点も多かったが、彼の行動でニコル・アマルフィの生存をさせた。ある意味ザフトでも一目置かれた存在だ。

シン事態も彼にはオーブで世話に成っていたが、ジェネシスの爆破に巻き込まれ死んだと聞いたときは回りが真っ暗に成ってしまった。

「アスラン・ザラ　シュウ・Ｋ・ライトニング」とシンは自分の先輩の名を呟いた。たしかにこの二人ならどんなＭＳに乗ってもガンダム系を圧倒しても不思議ではない。

しかし何故あの有名なパイロット達がアスハの護衛などを行っているのだ？シンは少しの間釈然としない思いを抱いた。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「しかし、この艦も、とんだ事に成った物ですよ」

「進水式の前日に、いきなりの実戦を経験せねばらない事態になるとはね」とやれやれと思った所なんだろう。

ちなみに今自分たちはレイ・ザ・バレルに案内されている。途中ですれ違った兵士が一行に敬礼しアスランも反射的にやっていた。これじゃもう偽名を使っても意味を為さないだろうと思ってしまった

そして「ここからモビルスーツデッキへ上がります」と言ってエレベーターへと乗り込んだ

（正直言うならば此処まで見せて良い物か？まぁ盟友って言う位だし此れ位はするか）と思ってしまった

「艦のほぼ中心とお考え下さい。搭載可能機数は無論申し上げられませんし、現在その数量が乗っているわけでもありません」

まぁ教えられないのは当然だろう、戦艦の中にどれくらいのＭＳを

乗るのかに知った場合には脅威に成る時だって当然あるのだ。つまり敵対した時に数を抑える為にＭＳを多く持ってる戦艦を潰すのは定石だろう

そして目の前の緑色の機体の前で立ち止まり「ＺＧＭＦ－１０００――ザクは既にご存知でしょう。現在のザフト軍主力の機体です」という説明を受けカガリとアスランは感嘆しているが

（正直主力言うけどそこまで魅力を感じないんだよな。此処までも充分強いけどパーツを使わないとそこまで大きい所は見えないし、単体でパックを失った時に使い易い様もっとチューニングしないのか？）と色々と批判をしそうに成ってしまった。

「そしてこのミネルバの最大の特徴とも言える、この発進システムを使うインパルス――工廠（こうしょう）でご覧に成ったそうですが？」とアスランに聞いてるようだ

「あ、はい・・・」話を向けられてたが彼は何故か落ち着いていなかった。

「技術者に言わせると、これは全く新しい、効率の良いモビルスーツシステムなんだそうですよ。私には専門的な事は判りませんがね」と言っていたがシュウもこれには同意した。

「そうですね、このガンダムは戦艦から出ても一々戻ってパーツを取りに帰らずに戦艦から射出してくれるし、レーザー誘導を行っているので外す事も無い。それに移動時は戦闘機に戻っていちはやく戦場を行けるので便利と言えば便利でしょう」とシュウはこの機体の良い所を見つけつい口に出してしまった

「ほぅ、そうなのかい？しかしボディーガードの身分でありながら詳しいね？」と此方に視線を向けてきた

「えぇ、まぁ此れでもボディーガードに成る前は技術者でも有ったので、機体の特徴がわかるんですよ」

と適当に答えておいた。正体を態々明かすまで無いが自分の仕事は喋っても大丈夫だろうとシュウは判断していたのだ

「……しかし、やはり姫にはお気に召しませんか？」

「議長は嬉しそうだな」とカガリの単純な言葉についデュランダルは苦笑していた。

「うれしいと言う訳では有りませんがね。あの混乱の中から皆で懸命に頑張り、ようやく此処までの力を持つ事が出来たと言う事はやはり」

「力か…」カガリはやりきれない表情で呟き、目を上げた「争いが無くならぬから力が必要だとおっしゃったな議長は」

「やはりカガリさんも憤ってますねシュウさん」と無線機から声が聞こえた

「あぁ、一番平和に心から願っているカガリだ。ザフトで造られた機体がザフトを破壊したんだ。力のありようにも疑問を持つさ」

「しかし、何時の時代も人争いを止める事は出来ないんですかね？」と一番の疑問を投げかけてきた

「それは先の時代に成らないと判らないさ、でも人は力が有る内は

争いを止めない。だからこそ俺らが居るんだ。争いが起きても何時かは誰かが止める為に尽力する。それが運命だ」と言い切った。

そのときに会話に集中しすぎたせいか内容は判らないが叫び声が聞こえた「さすが、綺麗事はアスハのお家芸だな！」と馬鹿にした声が聞こえた。

「シン！」と直ぐに此処まで先導したレイという兵士が止めに掛かる。だがシンはそれも聞かずにゆっくりとアスハに振り向き怒りに染まった目を向けた。

シュウ自身も見た事がある。これは以前のキラとアスランが争った時に見られた憎しみと怒りしかない目だ。

そしてカガリがその目にたじろいた時＜敵機捕捉距離８０００＞すぐさまアラートが鳴り響いた。＜コンディションレッド！パイロットは搭乗機で待機せよ！＞

「最終チェック急げ！はじまるぞ！」とたんに凍り付いていたスタッフがその空気を忘れ慌ただしく動き回り始めた。そして激怒していたシンはモビルスーツデッキから飛び出していく。

「シン！」と呼び掛けた後直ぐに此方に向き直り「申し訳ありません議長！この処分は後ほど、必ず！」といって彼も自分の機体へと向かっていった

デュランダルが今更ながら取り直すようにカガリに弁明した。

「本当に申し訳ない、姫。彼はオーブからの移住者なので。よもやあんな事を言うとは思いもしなかったのです」

「えっ・・・？」最初は訳が判らなかったカガリだがすぐさまその言葉に衝撃を受けシンの消えた方に目を向けていた。

そしてすぐさま「取り敢えず私達はブリッジへと向かいましょう」とデュランダルが今度は案内してくれた。

そしてすぐさまブリッジに付いてデュランダルが艦長に話しかけて許可を貰った。すぐさま後ろのシートにデュランダルとカガリそしてアレックスが座っていった。シュウとシラユキは席が空いてないので立っていた。

「ブリッジ遮蔽。対艦、対モビルスーツ戦闘用意！」カガリとアスランは驚いていたが、シュウとシラユキはそこまで驚かなかった。今までの戦艦の欠点を無くしたような物を要約着けたのだから驚く必要性も無かったのだ。

そしてオペレーターが早口で何かを言っている。速くて上手く聞き取れなかったがザクとインパルスの出撃だろう。

「ボギーワンか」唐突にデュランダルがアスラン・シラユキ・自分に視線を回して話しかけてきた。

「本当の名前は何というのだろうね、あの艦の？」と行き成り話を吹っ掛けられ

「「は？」」とシラユキとアスランは焦っていたがシュウは知っているしこの行動は原作で知っているので戸惑う事も無い。

そしてシュウは議長の詞に耳を傾けながら、モニター越しに映った宇宙を確認した。今はブラストインパルスが先行して後を追うようにゲイツR二機がついていく

「名はその存在を示すものだ」と話は未だにもったいぶる様に続く

「ならばもし、それが偽りだったとしたら?それはその存在そのものも偽りという事に成るのかな?」と議長は実存主義的な話をしている。だが次の瞬間爆弾を落とされた。

「アレックス・ディノ　古都春　真衣　朝倉　和真……いやアスラン・ザラ君　シラユキ・カグヤ君　シュウ・K・ライトニング君?」と言って来た。既に正体はばれていたか。

直ぐに艦長が此方に振り向いてきた。1人だったら振り返りはしなかったのだろうが3人も居るのだ確認すらしたくなる。

「ランチャーワンからランチャーシックス、一番から四番ディスパール装填!CIWSトリスタン起動!今度こそしとめるぞ!」と矢次でどんどん指示を出している中

此方をにこやかに見てくる議長にアスランは睨み返す。こいつは隠すまでも最初から気付いていたのだ。

「議長それは・・・!」とカガリが腰を上げて言うがそれを制するように議長は穏やかに笑う

「全ては私も承知済みです。カナーバ前議長が彼らに取った措置の事はね」カガリは再び座りなおすが、判っているなら何故今この場で正体を暴露するんだ?と思った人物は多いはずだろう

そして正体が気に成るのかモビルスーツ管制の少女が此方をチラチラと此方を確認する。ただ要約警戒心を取り戻したアスランは不信の目で議長を睨みつける。

「ただ、どうせ話すなら本当の君達と話がしたいのだよ、それだけのことさ」と言って来た。

シュウは諦めたように掛けていたサングラスを外してある事を艦長に告げた。「正体ばれちまったんだし一つ良い事を教えてやるよ。まず今ガンダムが近づいて行ってるのは囮(デコイ)だ」と言った瞬間ボギーワンの反応は消えて続いてゲイツRの反応が消えたのが聞こえた。

「ボギーワン消失(ロスト)！さらにショーン機もシグナルロストです！」と叫んでいた。

「イエロー六二ベータに熱紋三！これは・・・カオス・ガイア・アビスです！」と言っていた。

「何で教えてくれなかったの？」と此方を睨みつけるように言って来た。「民間人が軍事に参加しろと？それに自分達が原因で起きた事は自分たちで落とし前を付けろ」と言い放った

タリアは口を噛んだ。彼が言っている事はある意味正論だ。それにＭＳを作り出した私達にも原因もあると考え目の前の戦場に集中した。

だが次の瞬間「ブルー一八マーク九チャーリーに熱紋！ボギーワンです！距離五〇〇！」

「えぇっ！」と副官が驚いているが「更にモビルスーツ八！」「測敵レーザー照射、感あり！」

クルーには動揺が走っていたが直ぐに「アンチビーム爆雷発射！面舵三〇トリスタン照射！」

「駄目です！オレンジ二二デルタにモビルスーツ！」索敵人がそう叫ぶ

この状況は不味いとつい考えてしまった。背後を取られて敵にロックオンされ回頭もままならない

「機関最大！右舷の小惑星を盾に回りこんで！」ミネルバは背後から迫るミサイルを振り切るように走り出す。右舷に巨大な岩塊が迫る。

ミサイルはそのまま戦艦に突っ込んでくるが後部の迎撃システムに落とされ、あるいは小惑星の突き出した岩肌に激突し炎を吹かせる。そして衝撃を受けて戦艦が大きく揺れ悲鳴が漏れる。

「カガリ如何する？まぁ依頼なら頼んだから如何にかするが」とシュウは咄嗟にカガリの衣服に無線を付けて話しかける

「如何言うことだ？」と疑問に成っていた

「俺等は今カガリのボディーガードだ。頼まれたらザフトに頭を下げてＭＳを借りる」と言い放った

「しかしっ！「此処で君達を死なせる訳には行かない！」……判った。頼む」と言われ

「メイリン！シン達を戻して！残りの機体も発進準備を！アーサー迎撃！」と言った所で

「グラディス艦長先程の暴言を謝ります。私にどうかＭＳを貸して下さい。今此処で艦を失うのは辛い！」とシュウは言い放った。

「如何言う心変わり？それに貴方は民間人でしょ？ＭＳは貸せないわ」と言ったが

「いや、構わない。私の権限を使う彼にＭＳを貸してあげよう」と議長がこっちを見て微笑んで来た

「有難う御座います」と言ってシュウは出て行った

そしてグラディス艦長は

「一人パイロットが行ったわ。ＭＳを貸してあげなさい」とハンガーに通信を入れ言った。

シュウはハンガーを目指して走っていた、だが急に艦全体に衝撃が来た。

とっさに近くの手すりに掴まり堪えたが有る事を思ってしまった

（隕石の雨でも食らったのか？厄介だな）と思いつつ再び脚をハンガーへと向けて走り出した。

「ようやく着いた！すまないがＭＳを貸してくれ！」と近くの整備兵に頼み込んだ

「判りました、連絡は来ていますのでどうぞ此方へ」と言ってザクの目の前まで案内されたが

「ザクより今はゲイツの方が良い！借りてくぞ！」と言って隣にあったゲイツＲに乗り込んだ

「「「えっ！？」」」と近くに居た整備兵は全員驚いた。

何故性能の低いゲイツＲを選択したのかが全くの謎なのだ。だがシュウは元々射撃の傾向を持つパイロットなので射撃武器を多く積んでいた方が使いやすいのだ。

その証拠に「ライフル一本じゃ足りない、他の武器も借りるよ」と言って在庫に置いてあったビームトマホークを腰に提げビームライフルをもう一本の腕で掴み出て行った。

そして宇宙へと飛び出した。とっさに出て来た所を狙ったのかドラグーンが４方から撃ってくる。

「クッ！…だけどこの程度なら！」と言って機体を捻らせて弾を掠

らせただけで済ませ二丁のビームライフルを大体の次の予測地点へと打ち込んだ。

ドラグーンは一機は落ちたがもう一機は予測でもしていた様に軽々と避けられた。

それでも攻撃は止まず再びドラグーンが銃口を向ける…

だが「機体のロックオン時射撃時の微調整照準のブレの予測を５％から１５％に変更　機体の行動パターン通常オートマニュアルからマニュアルへ変更　機体の必要最低限のエネルギー以外ブースターに全移行」と言って機体の改造を行っていた。

正直こんな危険な真似は余りしないが、状況が状況だったので無理やり変更し再び起動させた。次の瞬間ドラグーンから弾が放たれた。

「ふっ・・・！」次の瞬間機体のＧが一気に加算されたが機動性が早くなった。

そして銃口をドラグーンより少し下に向けていた。

ドラグーンの知能回路は直撃しないと予測したようだが、次の瞬間ネオはすぐさま敵の意図が判りドラグーンを回避させたが再び一機が吹き飛んだ。

そうシュウが遣った行動は敢えて当らない様に見せかけて銃口を下に向けたが先程のブレを１５％に上げた事により調整は難しいが成れたパイロットなら１５％角度を下げた所でも撃てるのだ。

「全くゲイツＲのパイロット君は化物なのかい！？」と多少驚愕し

ながらそう叫んできた。

「さぁね、まぁ喧嘩売ってきたんだし覚悟しろよ？」と言ってビームライフルを連射して翻弄しようと思ったが。

次の瞬間背後にドラグーンが近づき弾が連射される。そして前からはリニアガンの連射して突っ込んでくる。機体を上に上昇させたが、それを狙っていたように

ブーストを最大限にしてビームソードを展開して切りかかってきた。余りに早いので気を抜いたら即死は仕方ないだろう。

だがシュウもビームライフルを一丁をすぐさま破棄してトマホークを展開した。すぐさま斧のビームの部分でソードを受け流したが、その大きな隙を見逃されず左腕をドラグーンの銃弾で貫かれた。

「クッ！」咄嗟に右腕に残ったトマホークを腰に再び提げすぐさまビームライフルを回収し一機に撃ち込んだ。

だが先程の件も考えて今度はマニュアルで動かしているようだ。簡単に避けられる。

「此れだったら」と言ってデブリに突っ込んでいった。エグザズも後を追ってくる。そしてデブリの一つに有る物を仕掛けて隠れた。

～ネオ・ロアノークＳＩＤＥ～

「あのゲイツ何処に行ったんだ？」とデブリ群に隠れたゲイツを探していた

「クッ！あと少しだというのに！」と言いながらレーダーを確認した瞬間にデブリの後ろに熱源を感じ取った。

「ふっ、其処か！」とドラグーンを近づけて撃ち続けたようだが反応は未だにロストしない

「何？如何言うことだ！？」と驚いている所をドラグーン二つはビームトマホークによって切り裂かれた。

「ふぅ、やっぱり騙されてくれたな？こちらとしては嬉しい誤算だ」と苦笑していた。

このときネオ・ロアノークは有る事を思った。知恵もあり実力もある。ある意味ヤバイ奴を敵に回したかもしれない…と

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「どう言うことだ！？何をやったんだ？」と焦っているが

「簡単なことだ持っていたライフルにＭＳのＥＮを込めてデブリに埋め込んだんだ。そして撃ち込んでも岩にしか撃ってないから何時までも経ってもロストしない。更にこっちは機体を切ってるから反応はせずばれない。つまりお前はまんまと俺に騙されたんだよ」と冷たく言い放った。

「やばいんだったら撤退しても良いんだぜ？俺は無闇に命は取りに行かないからな！」と言い切った

「クッ！…撤退だ！全員撤退しろ！」と言って全機撤退させようとしているが

「此方はもう終わっている」と言って白いザクがそう言い放った。

「悪いねレイ君、そちらに多くのＭＳを任しちゃってさ」とつい苦笑してしまったが

「いえ、一番厄介な機体の注意を惹いてくれたので助かります。それに前大戦の英雄に背中を任して貰えるのは凄く光栄です」と言ってくれる。

そして気がついたらミネルバは岩を取り除いていたがボロボロに成っていた。

そして相手の戦艦から何個かの信号が放たれエグザズも撤退していった。「待て！」とレイ君は落とそうとするが

「止めとけ。今攻撃しても俺らじゃ対処できない。しっかしゲイツＲをボロボロにしたんだからコイツは報告書物かな？」と言いながらミネルバに向かっていった。

そして彼が帰って整備班の面々の人とタリア・グラディス艦長そしてシラユキに怒られた。

その後彼は整備班と一緒にＭＳを修理しグラディウス艦長に報告書を書かされシラユキには正座させられ怒られた……（何故シラユキも参加しているんだ？）と思っていたが

「聞いてますか？ちゃんと聞いてください！最近貴方の行動は、勝手過ぎます！」と色々と続いているが

「いや、あの状況じゃあれはしかた「黙って聞いてください！」・・

・はい」と怒られ続けた。それは３０分続き彼は密かに「俺頑張ったのに…何で」と涙を流してしまった。

ＰＨＡＳＥ３０（後書き）

抹茶「今回は此処までです。読んでいただき有難う！」

シラユキ「そうですね、有難う御座います。それと何で今回シュウさんが大量に被弾してるんですか！？」

シュウ「そりゃあねぇ、作者説明しろ」

抹茶「俺かよ！？まぁ良い。元々ゲイツＲは一般兵に作られた普通なＭＳだ。それを高機動をメインにしている戦いをしているシュウからすれば何時もの感覚で戦っていたら被弾しやすいんだ」

シュウ「そう言う事だ。キマイラだったらリミッター解除有るから普通に便利なんだけどな」

シラユキ「へぇ～今思うと私達の機体って便利ですねぇ」

シュウ・抹茶「「要約気付いたのかよ！」」

シラユキ「何時も乗ってるから凄さが良く判ってないんですよ」

抹茶「そ…そうか、それよりも今回ご指摘を下さった見たら死ぬ死神さん・シーバスさんご指摘有難う御座います」

シュウ「二人とも助かるよ…でシラユキは何をやっているんだ？」

シラユキ「えっ？あぁ今回出されたゲイツＲとザクとキマイラ・エンジェルのスペックの差を見てたんですよ」

抹茶「お願いだから、後書きでいらん事はしないでくれ」

シラユキ「いらない事言わないで下さい！…そろそろ後書き閉めますか」

抹茶・シュウ「「そうだな」」

シラユキ「こんな時にもはもらないで下さい！」

シラユキ・抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ３１（前書き）

抹茶「はいＰＨＡＳＥ３１を完成させました」

シュウ「今回は少し遅かった気がするんだが気のせいか？」

抹茶「多分気のせいじゃないかも」

シラユキ「作者の都合って奴ですか？」

抹茶「まぁ、そんな所かな」

シュウ「どうせ、また何かの隠れ蓑を使うつもりか？」

抹茶「すみません、真面目に御免なさい。正直に言うとネタが閃かないんです」

シラユキ「それを日夜考えるのが貴方の仕事でしょう」

抹茶「日夜って無理だっての俺だって寝るし、勉強もせんといけん。２年だから本腰入れて勉強してる所だし」

シュウ「此処にリアルを持ってくるな。さっさと本編入るぞ」

シュウ・抹茶・シラユキ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE31

「ありがとうございます。シュウさん」とヴィーノを代表して整備士達から感謝された

「いやいや、こっちもＭＳを好きなだけいじくらせて貰ったんだし感謝してるよ。ありがとう」と言って再びミネルバ内を適当に歩き出し始めた

そう、彼が何故こんなにもフリーに動けるのか？それは以前の戦闘から数時間後にカガリからは

「とりあえずシュウ達の正体もばれたんだし、ボディーガード役は解任好きに動き回って良いぞ。でも偶には私の護衛もしろよ？」と言われ

議長からも「君達はある意味ＶＩＰだからね。オーブに帰るまでミネルバの艦内機密以外だったらを好きに楽しむと良いよ」と愛想笑いを浮かべてくる。

そう言う事があったので久々に技術者として働きたくてハンガーまで出向いたら逆に御願いと頭まで下げられてしまった。

「全く俺になんか頭を下げるほどの価値なんか無いのになぁ」と愚痴っていると

「お久しぶりです、シュウさん」と懐かしい声が後ろから聞こえて来た

「あぁ、シン君か久しいね。家族は元気かい？」と当たり障りの無い事を聞いといた。

「えぇ、あの時の事は感謝しています。…一つ聞きたいんですけど何でオーブの味方をするんですか？」と凄く真剣に聞いてくる

「オーブの味方というより俺はあそこが生まれで、故郷だしね。それに今回は頼まれたからやっているんだ。まぁ頼まれなくても勝手に遣ってたかも知れないけど」と言って頬を少し掻いていた

「貴方は、憎くないんですか？オーブが勝手に決めて焼いて！」とオーブを焼いたアスハ家にに対して激怒しているが

「うーん、確かに最初は俺も憎かったよ。それこそモルゲンレーテの人達を皆殺しにしてやりたいほどだった」と思い出しながら苦笑していた

「だったら！」と言ってくるが

「でもね。怨んでその人を殺したりして何が残るのかな？嬉しい？喜べる？答えは全部ＮＯだよ」と悲しそうに呟いた

「何故ですか？その憎しみを残しとけとでも言うんですか貴方は！」

「憎しみを残せと言ってるんじゃない、そんな物を果たした所で最後には虚しさしか残らないんだ」

「やっぱり貴方もあのアスラン・ザラみたいに偽善者で居るつもりなんですね。失望しましたよ」

「あぁ、好きなだけ失望して貰っても良い。俺の行動が偽善と言われても何もせずに見ているよりかは数倍マシだ」と言っていたところで

「シュウさん～助けてください」と馴染みの声が聞こえて来た

「ど・・・どうしたんだ？シラユキ　何か疲れているようだが？」と聞いてみたら

「疲れるも何も私とシュミレーターで対決したいって言ってる兵士が何人も居るんですよ」と肩で息をしているようだ。更には後ろから何人も兵が見えている。

「はぁ、仕方ない。俺も付いていくから案内してくれ」と言って最後にシン君に有る事告げとく

「シン君、俺は君の生き方も否定しないし力を幾らでも手に入れても良い。でもね、決して力の矛先を間違い無い様気をつけてね。それとキミの戦う意味を何時か僕に教えてくれるかい？」と言ってシュウはシンに背を向け去っていった。

～シュミレーター室～

「ようやく来たんですか？前大戦で生き残った力を見せて下さいよ」と好奇な目を向けて言ってくるが

「よせ、ルナマリア。シュウさん、シラユキさん私達にどうかご教授してくれませんか？」とレイが礼儀正しく言ってくる

「俺等みたいな戦争から一歩身を引いた存在がベテランのパイロットに勝てるとは思えないけど」と言ったが

「ご謙遜を、貴方の実力は以前の追撃戦で充分見せてもらいました。充分現役ですよ」とお世辞でも案外嬉しい物だ

（しかし、どうするべきか。此処でレイ君達を鍛えても良いんだが後々此方で戦う時に厄介な相手に成りかねないんだよな。）とシュウは今後の事も考えていた

まぁ此処でシュウが鍛えないといって周りの兵士から怪しまれるよりかは、今は本気を出して徹底的に叩き潰して練習にも成らないほどにするべきの方が賢明と考えれるだろう。

「判った、使用ＭＳに何か制限はあるかい？」と一応聞いといた。

ちなみに現在造られているザクですらキマイラと比べると少し劣るので、制限が無かったら使うだろう。

だがそれは一般のパイロットが乗っていた場合のみだ。流石にレイとルナマリアを相手にするならキマイラで本気を出しても問題は無いだろう。

「いえ、特に無いです。戦いは２ｖｓ２のどちらかの負けの宣言または撃墜ですが宜しいですか？」

「あぁ、それで良いよ。俺は当然シラユキと組むが、そちらはレイ君とルナマリアさんかな？」

「はい、宜しくお願いします」「宜しくね。赤服の実力見せてあげるわ」

「あぁ、こちらこそ宜しく頼む。君達となら手加減無く遣り合えそうだ」と言ってシュミレーターに入りこんだ。

「如何しますシュウさん?あの二人は確実に厄介ですよ?」と作戦を聞いてくるが

「なに、何時も通りに遣れば良いさ。それに俺等は何時だって負けを見た事は無いだろ?」と言ったが

「いえ、私は一度敗れてますね。あの大戦で・・・」と唇を噛んで言ってくる

「あれは仕方ないさ。原理の判って無い奴は負けやすいっての」と言ってデータを送り込んだ

「宜しいですか?」とレイが聞いてくる「あぁ、それじゃ始めよう」と言って砂漠へと飛び出した。

「「懐かしい（な）（ですね）」」と見事にはもってしまい苦笑してしまったが

すぐさま二機はその場から飛び退いた。そして其処にミサイルの雨が降り注いだ。

「散開だ。シラユキ!」「了解!」と言って行動を開始した始めた。

そしてオルトロスが横薙ぎに撃ってきたのでキマイラとエンジェルはすぐさま上空に飛んだ。だが、それが狙いなのかシラユキにビームトマホークが飛んでいったが、すぐさまガンソードを抜き出し刃の部分だけ丁寧に切り取り投げ返していた。

「チッ！」レイは忌々しげに其れをビーム突撃銃で撃ち落としシラユキに連射している。

「白は頼んだ！俺は赤を殺る！」と言って機体をガナーザクに突っ込ませた。

だが遠距離戦を目的とするガナーザクを遣らせない為に妨害するようにミサイルが飛んでくるが今回持ってきたガトリングシールドで撃ち落す

シュウは赤はシラユキに任せ反撃をする為に両足のホルダーから二連装ハンドガンを二丁抜き出しザクファントムへと連射した。

流石はエースパイロットなのか簡単に避けていくが「誘導されてるのに気付こうな」と言ってザクは気づいた時には右側と後方に岩群が広がっていた。そして狙っていた位置に来た瞬間に気付かないように少しチャージしていたビームキャノンと射出型アーマーシュナイダーを撃ち出す。

アーマーシュナイダーは銃に巻きつけ回避したようだがビームキャノンが引っ張られていた右腕に当り破損した。

だが誘導されたのも予定内だったのか「やれ！ルナマリア！」と岩山に立っていたザクにそう叫んだ。

そしてレイ君が囮の行動の間にオルトロスのＥＮが貯まったのか此方に砲口を向けてくるが

「なっ！此処ままじゃ！……なんてな」と不適に笑ってしまった。

「一機だけに集中すると周りが疎かに成ってますよ」と言って先程までどちらかのザクのジャマーが働いていたのかザクを探していて無視されていたエンジェルが頭部を切り裂いていた

「クッ！カメラを失ったからって！コンノォォォォォ！」と言ってオルトロスを破棄し右腕でビームトマホークで切り裂いて来ようとしたが

「射撃型のタイプの人がマトモに練習もしてないくせに！」と言って右腕を掴み脚を払い背負い投げをし地面に投げ出した。

「キャッ！」と怯んでいる隙に肩に着けているビームライフルを連射しザクに大量の風穴が開き爆発した。

「ルナマリアッ！」と言ってエンジェルを警戒しているが「大丈夫ですよ。私の遣る事は終わったのでどうぞご勝手にシュウさんと撃ち合って下さい・・・アッ、危ないですよ?」と言ったが既に遅かった

「ハッ！」と言って膝蹴りを食らわせ機体を浮かせた。すぐさま左腕で頭部を掴み岩に叩きつける

「ガハッ！」と通信越しから衝撃の強さが伺える。だが此処からは俺の攻撃だ。

そのまま機体の片腕を持ち「リミッター解除３０秒間」と言って空中まで駆け上がり腕を放した。流石のザクも空中では余り動けないのか落下速度を少しづつ下げていても、キマイラからは唯の的にしか見えなかった。そしてホルダーから７６ｍｍ突撃銃を抜き出し連

射した。
そして下から爆発音と少量の爆発の明かりだけが響き
――――バトル終了――――
と言う文字が出され戦場から出された。
「ふぅ、疲れたなぁ。しかし久々にトレーニングした気がするよ」
と言ってしまった
「有難う御座いました」「流石は歴戦のパイロットですね」と言って来てくれる
「しかし悪かったねレイ君、流石にやりすぎてしまった。謝罪するわ。申し訳ない」と言って頭を下げる
「いえいえ、此方も戦術を学びさせて貰って嵌めちゃったのでお互い様です」と笑顔で許してくれた。
「そういえば、砂漠の場所を戦場にした時に『懐かしい』と言ってましたけど何か有るんですか？」とルナマリアが聞いてくる
「別に喋っても良いよな、シラユキ？」と一応許可だけは取っといた。
「えぇ別に良いですよ。と言うより私の方から話したら良いんじゃないんですかね？」といってシラユキが代わりに話し始めた。
「あの砂漠の場所のバナディーヤに凄く似てたんですよ」と言ったら

「確か以前砂漠の虎と呼ばれる方がいらっしゃった場所ですよね？」とレイ君も聞いてくる

「そうだね、私達が会ったのはバナディーヤのシュミレーター室なんだけど、戦った戦場も砂漠なんだよね」とアハハと苦笑しながらそう言ってしまった。

「そうなんですか？で結果はどうなったんですか？」とルナマリアが続きが気に成るように聞いて来た。

「結果惨敗だったよ、その頃からシュウさんは、キマイラに乗り始めてたし私達はバクゥだったからボロ負けだったんだよ」

「へぇ～シラユキさんは何時からエンジェルに乗り始めたんですか？」とルナマリアたちの会話が続いている中シュウは有る所に連絡を取っていた。

「もしもし、俺だけど聞こえるかい？」と電話の相手に話しかけた。

「えぇ聞こえるわシュウ君、どうかしたの？」と電話の相手が心配して聞いてくる

「いや、特には無いんだけど、悪いんだがキマイラとエンジェルを打ち上げてくれ。俺の予感が当らなきゃ良いんだがもし当たったときの事を考えると自分の専用機で戦わないとな」
とこの後を予見して呼んで置こうと考えておいたのだ

「判ったわ、直ぐにカグヤから打ち出すわ。パックは大気圏突入パックで良いんでしょ？」と一応確認してくる

「あぁ、それで頼むよ、あと武器入れられるようなコンテナも入れてください。それではエリカさん早めの打ち上げを頼みます」と言って通話を切って後ろを振り向いた

「何で皆でそう冷たい目で見てくるんだい？って言うか睨みつけてないか？」と何がなんだか判らず呆れて言った瞬間に

「いや、シュウさんって訓練の時に自分の機体馬鹿にしたせいで徹底的に潰したんですね」とルナマリアがシュウの行動に呆れてそう言って来た。

「しかも何度もシラユキさんの行動の優しさに気付かない鈍感さ…此処まで来るとわざとしか思えないですね」とレイ君も少し呆れたのか冷たい目でこっちを見てため息を吐いている。

「何が何だか判らんが、ちょっとシラユキ来てくれないか？」と言って手招きをして呼び寄せる

（今回必要な可能性があるからエンジェルとキマイラを呼び寄せた。単機で大気圏と地上に降りた時にアスランが乗るザクとシン君のインパルスを救助する可能性が有るから覚悟しといてくれ）と耳元でボソボソと呟くが

「シ…シュウさんの吐息が掛かって・・・はふぅ」とシラユキは何故か顔を赤くして倒れてしまった

「えっ！？シ・・・シラユキ！？大丈夫か！オイッ」と抱きかかえて揺らして言い放ったが

「「「あれで未だに気付かないんだからシラユキさんって報われないよね」」」と全員が頷いてシュウの鈍感さに呆れて言い放っていた。

そうして今回危惧していたユニウスセブンの落下の件に付いて全く話せずシラユキを部屋で休ませ一日シュミレーターにてザフトの兵たちと訓練したのであった。

ＰＨＡＳＥ３１（後書き）

抹茶「今回は此処までにさせて貰います」

シュウ「俺としてはこのあと作者が言うのは文字数が多くなりそうなのが怖いから此処までにしました。って言いそうな気が」

抹茶「お前先読みの才能有ったっけ？」

シュウ「さぁ？それよりもシラユキは如何したんだ？」

抹茶「えっ？今回ぶっ倒れて医務室行きに成ったじゃないですか。あれで一回休みです」

シュウ「あぁ、そうなんだ。シラユキも何で倒れたんだろうな？」

抹茶「（この鈍感め…。）さぁ？彼女も疲れてたんでしょう」

シュウ「それよりも今回も感想でご指摘受けたんだよな？」

抹茶「はい、そうです。今回ご指摘をくださったとぁさん有り難う御座います」

シュウ「さて今回の後書きも此処までかな？」

抹茶「そうですね、ネタも有りませんから閉めましょう」

抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキはどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

PHASE32（前書き）

抹茶「フェイズ32完成しました」

シュウ「お疲れさん、今度から4日おき投稿にしたんだな？」

抹茶「えぇ、此方もそろそろテスト期間に入りましたが、それでも投稿は続けますよ」

シラユキ「それよりも今回はどんな話に成るんですか？」

抹茶「ただ単にユニウスセブン落下の話です。ちなみに久々に例の2機が登場します」

シュウ「そうか、それだったら本編に入るか」

抹茶「そうですね」

シュウ・シラユキ「「！？　珍しい作者が話を伸ばさないなんて…熱でも有るのか？」

抹茶「失礼な・・・ただたんに話すネタが無いだけなんです」

抹茶・シュウ・シラユキ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE32

「しかし、ユニウスセブンの落下ですか。あんな物地球に落ちたら地球の生き物なくなりますよ」

「そうだな、今回の俺らの遣る事はユニウスセブンの落下の阻止とまでは言わないが、ある程度の大きさにして地球に落とすしかない」

今回シュウは原作の知識を持っていたとしても此れだけは余り対処が出来ないのだ。故にザフト軍と協力し隕石を大気圏で焼失しなければ成らないのだが、これは口で言うより簡単な任務ではないのだ。

「でも、地球への突入コースって聞きますけど、何で砕くんですか？」

「あれ？シラユキは知らないんだな？ザフト軍に居たから知ってると思ったんだが…まぁ良いか」

そうやってシュウは自分の持っていた端末を操作し一つの情報を開示した。

三本の支柱の真ん中にドリルが着いており、そしてそれを操作する為の端末が写し出されている。

そう此れがメテオブレイカーなのだが

大きな欠点は自衛の物が一切無い・運ぶ時に複数のＭＳが必要等少々厄介なのだ。

そうして色々とシラユキと話し合っている間にブリッジから

＜シュウ・K・ライトニング　シラユキ・カグヤの両名は直ぐにブリッジまで来てください＞と呼び出しを受けてしまったので二人で向かって行った。

そして入った瞬間にアスランは頭を下げておりＭＳの貸し出しの許可を貰っていたようだ。しかしシュウ達はもう借りる必要性が無いので、何の用か、気に成ってしまった。

「失礼しますグラディス艦長。何か用事でしょうか？」
と敬礼をしながらも用を聞いておくシュウだった

「楽にして良いわよ。貴方達は客人なんだから」と言って楽にして良いという指示が出た

「了解です。じゃあ今回の用事は何ですか？もしかしてメテオブレイカーの防衛任務に着くんですか？」

「えぇ、それなんだけど。貴方はＭＳ何を使うの？前みたいなゲイツＲを持って行かないでくれるかしら？あれのせいで整備班から私はどやされたんだから」

正直予想は当ったがキマイラを持って来てなかった時には再びゲイツＲを使おうと思っていたのだが駄目なようだ。ザクは確かに便利では有るが、シュウ自身は決め手の無いＭＳは苦手なのだ

「あぁ、それなら大丈夫ですよ。今頃ですが、もうすぐ此方に着きますよ」とシュウは機体を借りる必要が無いと教えといた

「それは如何言うこと？」とグラディウス艦長を含めた全員が怪訝

な顔をしていたが

「いえいえ、別に出撃しない訳ではないですよ。ただ自分専用のＭＳに乗るだけです」
そういった次の瞬間に

「不明機二機急速接近！…なっ！ガンダムタイプじゃ有りません！」
とバートが混乱しているが

「あぁ大丈夫ですよ。少し予定より遅かったけど自分のＭＳが届いたようですから」

「予定より遅い？自分のＭＳ？まさか、貴方！」と言ってくるが

「えぇ、自分達の専用の機体キマイラ・エンジェルの二機をこっちまで呼び出させました」

「何て事を遣ってるのかしら貴方は…こんな事に成るなら速めに報告しといて頂戴」

「いやぁ、すいませんね。時にサプライズは必要だと思いまして」

だがグラディウス艦長は一つだけ気に成っていた事が有ったのだ。

「時に聞くけど、あのＭＳ何でブースター一機もつけてないの？もしかして途中で分離したのかしら？」と凄く嫌な予感しかしないが一応聞いてみた

「へっ？ブースターですか？あの二機にブースターなんて必要ありませんよ」

「じゃああの機体は単機で大気圏突破が出来るということなのかね？」とデュランダル議長も聞いてくる

「えぇ、確かに可能ですが、慣れてないと大気圏突破した瞬間に直ぐに死ぬって事も考えられますね」

そう彼の言っている事はあながち間違いではないのだ。スペースシャトルを例えてみよう、あれは宇宙に打ち上がるときに大きなブースターを底部に着け宇宙服には少しとは言えGを和らげる様に成っているのだが、キマイラは衝撃を吸収する物が何も無いので生身で全てのGが人間に掛かるのだ。運が悪ければ単機で宇宙に上がるのは危険だろう

「そうか、ハイリスクな事を遣っているのか」と感心げに言ってくるが

「そろそろキマイラとエンジェルの回収をしてきます。混乱から誰かがあの二機を落としたら洒落に成らないんで」とシュウはブリッジから出て、キマイラまで向かった。

すぐさまシュウとシラユキが宇宙へとパイロットスーツで飛び出した瞬間キマイラとエンジェルは此方を認識し、腕を伸ばしてくる。

そのまま両手でキマイラはシュウをエンジェルはシラユキを腕で引き寄せコックピットまで運んでくれる

「懐かしいコックピットだ。オートパイロット解除…マニュアル操作へ移行」と端末に指示を出しＭＳをミネルバのハンガーへと向かわせた。

すぐさまヴィーノとヨウランが他の整備兵に指示を出し機体を誘導していた。それに従いつつも空いていた二つのハンガーにキマイラとエンジェルを待機させＭＳから降りていった。
だが次の瞬間マッド・エイブス率いる技術者の面々が

「もしかしてあれが君の言っていたキマイラとエンジェルかい？」
と聞いてきた。

彼は技術者では有るがシュミレーター等の本物が映し出されて無い機体には興味が無いのだが、こうやって本物を持ってくると弄りたくなるのだ。

「えぇ、まぁそうですけど・・・どうかしましたか？」

「いや、１世代前のＭＳを組み合わせてこのようなＭＳを造り上げられるとは同じ技術者として君には脱帽するよ」

「ありがとうございます。と言っても此れはパイロットの腕と慣れたＯＳだからこそ真価が発揮出来るんですよ。普通のパイロットが扱っても直ぐに落ちるのが関の山でしょう」

この機体達は高速戦闘・高速移動をメインに戦っている機体なのだ、成れない人がキマイラ・エンジェルを使っても運が悪ければリミッター解除使わなくてもデブリに衝突で死亡・リミッター解除のＧによるショック死・操作が違う等結構熟練者専用ＭＳなので殆ど使えないのだ。

「なるほど・・・ところで話は変わるがこのＭＳを解体しても良いかい？」

「……へっ？」

一瞬エイブスさんが何を言ったか理解出来なかった。

「いや、言い方が悪かったね。あのＭＳの構造を教えてくれないか？」と頼んできてるが

「いやいや、駄目ですよ！オレこの後出撃なのに何で出たら良いんですか！？」

「大丈夫さ、私達技術者に掛かれば直ぐに作り直せるさ。それにキマイラが元に戻せなくてもザクに乗れば良いじゃないか」

（ドヤ顔で言うなよこの技術者は、しかも何だよパンが無ければ菓子を食えば良いじゃなーいって言ってる感じじゃねぇか。しかも全員の目が凄く怖い位光ってるし手には解体用の道具が…もう有無もなく壊す気しかねぇじゃないか）とシュウはついつい思ってしまった。

さすがに此れから戦闘で使うキマイラを壊されては洒落には成らないのでシュウはため息を吐きながら内側のポケットからＵＳＢメモリを取り出しエイブスに渡した。

「この中にキマイラのデータが入っています。それはもうバックアップが取って有るんであげますよ」

「そうか、すまないね。ありがたく貰っていくよ」と言ってポケットに仕舞って再び整備士としての仕事を始めていった。

「良いんですかシュウさん？キマイラのデータを譲渡してしまって？」

「んっ？あぁ別に構わないよ。あれの中身見る為には毎回１２桁のパスワードを打ち込まないといけないし、データの中身は射出式アーマーシュナイダーだけだ」

とネタ晴らしを行っていた。そうシュウはキマイラのデータが入っているとは言ったが、何を入れたかも言っては無いのだ。そして１２桁のパスワードは毎回変わるので、ある意味持ってても使えないので相手からしたら無用の長物でしかないのだ。

「結構あくどい事しますね。毎回シュウさんだけは敵に回したくないですよ」

流石のシラユキも今回の件に付いては顔が引きつっていた

「くっくっくオレの最高傑作を解体するなんてアホな事を抜かした奴にはデータは渡さないよ」と再びあくどい顔へと戻っていった。

だが次の瞬間

＜モビルスーツ発進三分前。各パイロットは搭乗機にて待機せよ。繰り返す。発進三分前、各パイロットは――＞

報告を受けシラユキとシュウは愛機へと乗り込みコックピットを閉めた。

「さて出るぞ。今回の任務はメテオブレイカーの防衛さらに奪取されたガンダムシリーズの撃退だ」

「了解しました。でもガンダム系は他の人が対処してくれるんです

よね？」

「あぁ、俺等はジンをやるぞ…全く以前使ってた愛機の同列機を壊すってのは良い感じには成らない物だな」

そして二機はカタパルトへと向かって歩き出していたところを

＜――――発進停止！状況変化！＞

＜ユニウス・セブンにてジュール隊がアンノウンと交戦中＞

＜各機、対ＭＳ戦闘用に装備を変更してください＞

と言っていたがシュウは少し驚いてしまった。

（もしかしてあいつ等武装を持たずに出撃しようとしてたのか！？それだったら足手まといでしか無かったぞ！？）と思ってしまった。

シュウとシラユキは味方のＭＳを落とされたと言う事を聞いた時から既に装備をしていたのだ。それなのに味方機は武器を全く装備せずに出撃するなど攻撃が当たり辛い訓練機でしかないのだ。

（どこまで戦争ボケをしているつもりなんだ？）と顔に手を当てやれやれと思ってしまった。

＜さらにボギーワン確認！グリーン二五デルタ！＞

先日ミネルバが逃がした未確認機までもが登場してしまった。だが戦う事には変わりないので銃口を向けた瞬間容赦はしない。

「シュウ・Ｋ・ライトニング　キマイラ出る！」「シラユキ・カグヤ　エンジェル出ます！」

二機のＭＳが再び宇宙へと飛び出した。シュウは久々に懐かしく思ってしまった。

あの時はヤキン・ドゥーエ戦以降全く乗れなかった機体だった…シュミレーターに乗ってもリアルですらないのでキマイラに乗ってる気分はしなかった。

だが今は違うキマイラはオーブの技術者の手によって再び帰ってきた。そう思いつつも４枚の羽を広げ戦場へと向かって行った。

戦場へと意識を向けていると敵のジンが味方のゲイツＲに刀を振り上げていたようだが

「リミッター解除１５秒間」と言ってすぐさま2機の間に割って入った。

一瞬の事で驚愕したのだろうジンとゲイツは動きを一瞬だけ止めた。その隙が死に繋がるとはジンのパイロットも思いもしなかっただろう。

直後キマイラによるヒジ打ちで頭部カメラを破壊し機体を捻らせ回し蹴り胴体に食らわせ吹き飛ばしつつも片手で二連装ハンドガンを抜き出しコックピットへと撃ち込んだ。

「そこのＭＳのパイロット大丈夫か?」と一応安否を聞いておく

「ハイ大丈夫です」「そうかだったら直ぐにメテオブレイカーを味方と協力して設置してくれ」「了解」

すぐさまシュウは的確な指示を出し先程壊したＭＳへと近づいてい

く。そして腰に付いてる鞘と腕に持ってる刀を戦利品として持ち再び戦場を駆け抜けた。

鞘は予めエリカさんに頼んでおいて腰に刀を引っ掛けるわっかが何個もぶら下っていた。

だが刀を持っていたのが不味かったのだろう近くに居たジンが刀を抜いて迫ってきた。

「良くも仲間を！何故我等の信念を邪魔するのだ！」と言って刀で切り迫ってくる

「信念だと！？貴様等がやってるのはただの虐殺行為にしかならないんだよ！」

そうして刀をぶつけ合い鍔迫り合いを起こした。

そしてシュウは他の部隊を護衛する為にもコイツには時間を掛けられ無いと思い、機体を引かせる
次の瞬間敵のジンがよろめいた。元々押し気味の攻撃を遣っていたので油断しているのでこうなるのだ。

そのままジンはキマイラを横切っていきそのまま機体の腕とブースターを利用してコックピットを切り裂いた。

「悪いな、お前等にも信念が有るんだろうが、オレはそれを容認できない」と言いながら再び刀を回収し

次のジンへと向かって行ったが、三筋のビームが近くを横切っていった。

一瞬何事か、と思ってしまったが周囲を確認した瞬間ガイアがＭＡ形態で此方に銃口を向けていた。

だがそれで終わりではないのか、ビームを連射しながら翼部分のビームサーベルを展開してくる。

「チッ！」とシュウは舌打ちを行っていた。本来原作ではコイツの相手はルナマリアのはずだった。

だが今は此方に攻撃を向いていると言う事はルナマリアは無視されたか、または撃退されたかのどっちかだろう。だが今はその様な事を気にしている場合ではない。

すぐさまビームキャノンを連射しガイアの動きを乱しつつも

「リミッター解除３０秒間」と呟き機体のわき腹を蹴り飛ばす。そしてＭＳ形態に戻ったが、シュウはそれが狙いだったのだ。

すぐさまショルダータックルをしてガイアの腰に挿してあったビームサーベルを奪い頭部を切り裂こうと思ったのだが、その攻撃を腕を掴まれコックピットに脚蹴りを食らわされた。

「ガハッ」すぐさま態勢を戻すがビームライフルを連射してくる。すぐさま盾を構え防ぐ機体がサーベルを抜き斬りかかってくる。

全く何なんだ一体コイツは、原作が有るからまだ叩き落せないんだよなぁ。とついつい場違いな事を思いつつもサーベルを展開し切りあいを開始した。

～ステラ・ルーシュＳＩＤＥ～

「なんなのコイツは！？」とステラは目の前の機体に驚愕を隠せなかった。

横切ったこの機体を見た瞬間使っているパーツが全て１世代前のＭＳのパーツだから直ぐに落とせる筈と確信はしていた筈だ。なのにその機体は未だに自分の目の前に顕在している。

相手の機体は一度距離を取るために後方へと下がったが、ステラは本能的に攻撃を辞める事をしなかった。

再びビームキャノンを連射してくるが「同じ手を何度も食らうと！」と侮っていたのが失敗だろう

目の前の機体が再び消失してしまった。そうこの機体は気を抜いてない筈なのに常に高速移動を行ってくる。

しかもする時もタイミングもバラバラだ。これでは何時遣ってくるか読めないし常に気を張ってなければ落とされる。

次の瞬間後ろからゾッとする気配を感じサーベルで薙ぎ払うが、実剣を持って防いでいた。あの機体は実剣など持っていたのだろうか？改めて確認すると目の前に居たのは別の機体だった。

そして本来戦っていた機体は自分のはるか上空から何かを射出し機体に括り付けていた。

「なにこれ？」と呟いた瞬間に機体は急激に動き始めていた。すぐさま此れの正体に気付いてしまった。

だが気付くのが一泊遅かったのが原因だろう次の瞬間右腕と両足が吹き飛ばされた。

既にワイヤーはキマイラの腕に戻っておりサーベルとビームキャノンが此方に向けられていた。

（やられる！？）と思ったが2機は向きを変え何処かへと飛び去っていった。

ステラは一瞬だけ安堵したが、次の瞬間そんな事を考えてしまった自分に激怒してしまった。

敵機は手を抜いていただけなのだ。その気に成れば何時でも落とせるはずだった、なのに此方の興味を失ったように何処かへと飛び去ってしまった。

（これほど屈辱的な行為を受けたことは初めてだ。あの二機は確実に落としてやる）とステラはそう思いつつも戦闘能力を失ったガイアを引き連れて、ガーティ・ルーへと戻っていった。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「やれやれシラユキ別に手伝わなくても良かったんだぞ？」と先程助けてくれたシラユキにそう告げる

「そうでしたね。相手は勘違いしてこっちにサーベルを向けて来てるって言うアホな行為してましたし」

「しかし、格闘メインのエンジェルに攻撃しかけようってのは自殺行為でしか思えないけどガンソードの方は大丈夫なのか？」

「正直言って少し刃が溶けてますね。でも片方だけで防いでいたのでもう一本はまだ使えますよ」

と言っているがこちらのカメラでもガンソードの刃を確認しておく、確かにもう一本は無事ではあるがそろそろ新しい格闘武器を造り出して置く必要があるだろうとシュウは感じてしまった。

「あっシュウさんそういえば刀此方でも数本回収しましたよ」と言いながらこちらに腰を向けて話しかけてきた

そこにはジンが持っていた刀が４本掛かっていた。

「悪いな集めてもらっちゃって、今後必要に成ると思うんでな」

「何か造る気ですか？もし数余ったら少しくらい譲って下さいよ？」と聞いてきているので

「判ってるさ、だが此方にも格闘武器が必要なんだよ。射撃専用とは言っても近づかれて何の対処も出来なかったら笑い者にも成らないさ」と呆れつつもゆっくりと近づいていたジンにグレネードランチャー・徹甲留弾を撃ち込んで置いた。

デブリ群に隠れて気付かれないと思っていたのだろうが、索敵レーダーには既に反応が有ったのだ。わざと此処まで近づかせたのは、命中率を上げるためだ。

敵に近づけれて油断する敵ほど多い物は無い物だ。故に先程の徹甲留弾が直撃したのだ。

右肩に弾を埋め込まれ気付かれたとばれたジンは焦って刀を振り上げて迫ってくるが

その刃はキマイラの頭部に当る前にジンは爆散した。

「ふむ、戦闘能力だけ奪うつもりだったんだけど推進剤に誘爆してしまったかな」と思わず呟いてしまった。

「シュウさんそれ言うと結構わざとにしか聞こえないので、もっと穏便な弾使ったらどうですか？」

「そうだな、じゃあスタン弾でも使おうかな？いやでもスーパーアシッド弾も捨て難いな」

と色々と悩んでいるうちにようやくユニウスセブンが砕けたようだ。

しかし「この大きさでも地球に落ちたらマズイな。シラユキやるぞ！」と本腰を入れてシュウは行動を開始した。

流石にメテオブレイカーは大型なのでシュウとシラユキの両機を使わなければ動かす事は出来ないが端末の操作は物の数秒で完了してしまった。

元々シュウは電子系にも特化しすぎているのでこのような作業では、凄まじいスピードで終わらせていくのだ。

どんどんとメテオブレイカーを設置していく中やはり此方の作業を邪魔するのか2機のジンが寄って来る。

だがシュウは作業の手を一向に辞めるつもりは無いのだ。その理由としては、先ずは地球に住んでいる人達を救う為に一分一秒と時間

が惜しい事。二つ目は彼には絶対的に信頼出来るパートナーがいるからだ。

次の瞬間ジンはビームライフルを此方に向かって撃ってくるが、シラユキは其れを守るように盾をかざし攻撃を防いでくれる。

そしてシュウは片腕で二連装ハンドガンをエンジェルに向かって投げつけた。

そしてそれを回収したシラユキは「リミッター解除1分」と言ってジンに対して攻撃を開始し始めた

咄嗟にエンジェルが消えた事によってジンは警戒して正面に盾を構えてガードしていたが、その行動は空しく後ろからエンジェルのガンソードによって真っ二つにされた。

すぐさまもう一機のジンが隙を突くように刀を振り下ろしてくるがガンソードを上に構え刀の直撃を避けすぐさま二連装ハンドガンでコックピットに正確に撃ち込んで行く。

「やれやれ、たまに思うんだがシラユキってホント敵に対しては容赦ないよな。お前が戦闘狂じゃなくてよかったと思うよ」

「酷いですね。私はシュウさんに銃口を向けた敵に対しては容赦しないだけです。後は手加減はしますけどね」

と話している間に放置されていたメテオブレイカーの設置を完了させた。そして再び戦場を見るとカオス・アビスが撤退していた。

「ガンダム系が撤退している?さっきまで戦艦に何か動きでも有っ

たのか?シラユキは何か知らないか?」

「はい、先程敵艦が信号弾を撃ち込んでいましたね。この状況で撤退するって事は」

「あぁ、高度だな」とお互いの高度を確認し始めた。大気圏まであと少しだが、まだ作業は出来ると信じ再び動き始めた。

だが次の瞬間ミネルバから帰艦信号が出された。だがシュウは未だに作業を止めるつもりは無い。シラユキも此方を信じるように手伝いを始めてくれる。元々この2機には大気圏突入パックを積んでいるので大きな危険性は無いが、それでも片方のパックが不具合を起こした時にカバーをする為に残っているのだろう。

そして高度が限界だというのに未だに作業を続けていた機体が居た。認識コードではアスランが乗っていた。

思わず「戻らなくて良いのかアスラン?此方に任しても良いんだぞ?」と聞いてしまった。

「君こそ戻らなくて良いのか?君のMSなら帰れるだろう」と二人とも帰る気は無さそうだ。

だが「何をやってるんです!」と通信から怒鳴り声が聞こえる。

「帰艦命令が出たでしょう!?通信も入ったはずだ!」と文句を言ってくるがアスランもシュウも作業を未だに止めるつもり等更々無い。

「ああ、判っている。君は速く戻れ」

「一緒に吹っ飛ばされますよ！良いんですか？」

シンは唖然としていただろう。それでも敬語を使っているのは此方の力量に敬意を抱いているからだろう。

「ミネルバの艦主砲と言っても外からの攻撃では確実とは言えない！これだけでも・・・」と未だに作業に手こずってる様だ。

シュウはすぐさま自分のメテオブレイカーを終わらせ

「アスラン変われオレがやる」と言ってキマイラの腕でザクを押しのけ再び作業を開始し始めた。

その間にアスランはメテオブレイカーの支柱を正確にはめ込んでいた。

そして離れたメテオブレイカーのセットを完了し離れた瞬間ビームが横切っていた。

すぐさま全機メテオブレイカーの前に立ちふさがりジンを睨み付けた。

「我が娘の墓標、落として焼かねば世界は変わらぬ！」と言って迫ってくるだがインパルスはすぐさまジンの胴を切っていた。

「ここで無残に散った命の嘆きを忘れ！撃ったものらと、何故偽りの世界で笑うか、貴様らは！？」

「軟弱なクラインの後継者どもに騙され、ザフトは変わってしまっ

た！」

この言葉にシラユキ・シン・アスランは呆然としてしまっていた。
彼らはずっと考えていた何故こんな酷い事を？とずっとこの部隊の憤りと疑問を抱いていたに違いないだろう。

そしてシン達は悟る彼らにはユニウスセブンを落とす正当な理由があったんだと

だがシュウだけは違った、彼は刀を抜き出しジンに斬りかかっていた。ジンは咄嗟に防ぐが

「貴様には判らんのか我等の意思が！？」と叫んでくるが

「あぁ判りたくないね、何も判ってない奴に判った振りもして欲しくない」と苛立ちが込みあがってきた。

「たしかにお前等にはコイツを落とす権利も有るし正当な理由もある！だけどな、此れを落として何に成るんだ！死んだ奴でも帰ってくるとでも思ってるのかよ！」と言って機体を捻らせ刀を受け流し機体の腕を切り飛ばしそのまま蹴り飛ばす。

「あんたらが遣っている行為はただの自己満足だ！落としてそれで満足して死んでいくって事だろうが！あんた等は此れを落として何が残るか考えた事あんのかよ！？やったら第二のあんた等を生み出す引き金を引いてる事しかしてねぇんだよ！最悪の事態は此れに対する報復行為による核攻撃だ」

「黙れ！何故気付かぬか！我等コーディネーターにとってパトリック・ザラのとった道こそが唯一正しきものと！」と言ってキマイラ

に組み付き自爆してくる

「ガハッ！」装甲で機体が持ち堪えたとは言え次の直撃は不味いとシュウは一瞬考えつつも

「あんな虐殺行為の行いでどれだけの被害が出たか…確かに連合の取った行動は最悪最低だったかもしれない。だけどな同じ行為した瞬間お前等も俺らナチュラルと何の違いも無いんだよ！結局同じ様に戦争によって生み出された犠牲者を出して如何するんだよ！過去を振り返るなとまでは言わない、だけど過去に何時までも囚われるな！今あんた等がすることはこんな大量虐殺行為じゃなくて未来へと…若者に希望を与える為に何かを残せよ！」と悲痛な叫びをするが

「今更我等は止まらん、この願い、この意思今度こそナチュラルどもにいぃぃぃ」と此方に組み付きそうに成っていたが、一筋のビームライフルがジンを撃ち貫いた。

「そうですね…たしかにナチュラルの遣った行動は悪かったかも知れません。でも！それでも中にはナチュラルでも仲良くしようと考えている人は居るんです！」とシラユキが援護してくれたようだ

「悪いなシラユキ助かったよ」と感謝していた。

「いえ、私も目が覚めました。確かにナチュラルの行為でこのような事が起きたかも知れません。一瞬私自身もナチュラル全員を疑いそうになりました。彼らの言い分は正しいんじゃないのかなって・・・でも全員が全員そうじゃない。シュウさんはナチュラルでありながら自分の出来ること精一杯遣って仲良くしようとしている。だからこんな考え間違いなんだって気付かされましたよ」

と自分の中に貯まっていた考えをぶちまけていた。

「そうか、シラユキの本音を聞けてよかったよ。それで如何する？これからも俺を支えてくれるかい？」と改めて聞いてみた。

「当然じゃないですか、私は何時までもシュウさんのパートナーですよ」といって微笑んできてくれる

「良しニ機は大気圏突入は出来ないはずだ。俺がシンをシラユキはアスランを助けてくれ」

「了解しました」そして二人は同時に機体を動かし機体へと近寄った。

「大丈夫かシン君？助けに来たよ」と言ったが

「助けに来たってこの状況で何できるんですか！？」と此方の内容が把握できてないようだ。

だが次の瞬間キマイラは両腕でインパルスを引き寄せインパルスがキマイラの上に覆い被さる様になっていた。

「もしかして貴方代わりに大気圏突入の壁に成るつもりじゃ…」と予想と大きく外れた事を言っていた。

「だれがそんなMな行動取るかよ！バックパック解放」と操作した瞬間機体の後ろにキノコ状の形をしたパラシュートが出てきた。

「此れは？」と思わずシンは目を点にし聞いてきた。

「此れか?単体でも大気圏突入出来るように造られたバックパックだ」と説明しておいた。

「そうなんですか?相変わらず凄い物出しますね。そういえばシラユキさんとアスランさんは如何したんですか!?」と心配に成って聞いてくる。

「あぁそっちも大丈夫だ。シラユキ向かわせて同じ様な事してるよ」と言って機体の腕を伸ばし右方向に同じ様な物が開いている事を示した。

そしてお互いに喋らずに機体は地球へと降下して行った。すぐさまパックを分離し羽を広げ上空に待機する。

「ザザッ……シュウさん聞こえますか?アスランさんのザク運ぶの手伝ってください。エンジェルだけのパワーじゃとてもじゃないけど空が飛べないんです」

すぐさまレーダーを確認しエンジェルの方に向かったら、確かに少しづつだが下降しているのが判る。シュウはすぐさまザクに肩を貸しミネルバまで着艦して行った。

だが彼自身は今回の件で反省する点が出来ていたのだ、今回機体の出し惜しみをしなければもっと多くのパイロットを救えたんじゃないのか?とずっと考えていたのだ。

そしてシュウは決意の炎に燃えていた。

もう機体の出し惜しみはしないと…次からはキマイラ・エンジェルは使用せず例の二機で出撃する事を心に誓った。

ＰＨＡＳＥ３２（後書き）

抹茶「今回は此処までとさせてもらいます」

シュウ「そうなのか、そういえば新機体はイメージは出来上がってるのか？」

シラユキ「頼みますから変なのは辞めて下さいよ？」

抹茶「…正直まだネタが無いんです。ＭＳの形をオリジナルにすると大変さも増えるんだよ！」

シュウ「逆ギレすんなよ。カッコ悪いぞ」

シラユキ「良い大人が逆ギレってプッ」

抹茶「オレは近頃お前等の方が悪魔じゃないのか？って疑問の方が強くなって来たわ」

シュウ・シラユキ「悪いね（な）作者。でも反省はしているけど言った事に後悔はしていない！」

抹茶「あぁ、そうですか。もう良いもん軽くイジケてやるもん！」

シュウ・シラユキ「その言い方気持ち悪い（ぞ）（ですね）」

抹茶「今回はお前等二人が毒舌家目指してるってのが良く判りそうだわ。んじゃ後書き閉めるぞ」

抹茶・シュウ・シラユキ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ３３（前書き）

抹茶「良し、ようやくＰＨＡＳＥ３３をＵＰさせる事が出来たわ」

シュウ「そうかい、でもようやくＵＰさせる事が出来たってちょっと文章がおかしくないか？」

シラユキ「そうですね。まるでもう完成してて後は投稿するだけみたいな口調でしたね」

抹茶「そうですね。完成はしていたんですけどさっきまで友人と飲んでいて投稿できなかったんです」

シュウ「そうなのか、それにしても呂律が回ってるな？」

シラユキ「普通だったら酔ってこんなにも出来ないはずなのに」

抹茶「まぁ、それが普通なんですけど久々にウコンの力飲んで酔いを避けていたんですよ」

シュウ「なるほどな、それじゃあそろそろ作者もきつい筈だから本編入るか」

シュウ・抹茶・シラユキ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE33

「ふぅ…」シュウはシュミレーターから出てきて息を思いっきり吐き出した。

以前の戦いから彼は既に手加減をしないと決めていた。それ故に常にやっている練習量を増やしているのだ。

以前までは彼はシュミレーターではリミッター解除の1分の状態で練習をしていたのだが、やはりまだ足りないと感じたのだろう。今はリミッター解除2分30秒と時間を増やしたのだ。

一応は神たちの救済策のお陰でリミッター解除で死ぬ事は無くなったが、その代わりに体力消費が激しいのだ。だが体力の消費だけで済むのなら安い物だろう。

以前ならば自分が死ぬ事も有った物が代わりに体力消費で済むのだから体を鍛えれば持続時間も増えるという者だ。

「さてと次は何をしようかな」と言って自分の持っていた端末を弄りながら次の行動を考えていたら遠目からアスランが何処かへ向かっているのが見えた。

すぐさまシュウはアスランに近づき「よう、アスラン何処行くんだ？」と聞いてみた

「いや、特に何　パァン…なんだ?行ってみるか」

通路で話している途中ですぐさま銃声が鳴り響いた。シュウとアスランは多少気に成り鳴り響いた部屋を覗き込んでみた。

中には若い兵士達が甲板に標的を設置して、射撃訓練にいそしんでいた。シュウはその光景を見つつもそれぞれの人のフォルムを確認していた。

（やはり人によって癖等が大きく出るものだな）と色んな人の構えを見てそう考えていた。

そしてアスランはやはり軍に所属していた頃が懐かしいのか甲板へと入っていた。シュウもそれに続き甲板に歩み出ていた。

レイ・ルナマリアそしてモビルスーツ管制を担当としているメイリンの姿も確認できた。

ルナマリアとレイが弾倉一つ分撃ち終わっていた。だがレイの方は中心を狙って撃っていた様だが多少ずれておりルナマリアに至っては中心から大きく外れているのが良く判る。

ルナマリアは結果に不満なのか舌打ちをしながら弾倉を変えていた。そして此方に気付いたのかルナマリアは此方に振り返った。

「あら」「訓練規定か」とアスランは彼女に微笑みかけながらそう言った。

軍籍にあるものは週に何時間か、規定の訓練をこなす必要義務がある。シュウは訓練規定は知ってはいたが砂漠の虎に所属していた頃はバルドフェルドから直接「君は余りやら無くても強いからしなくて良いよ。寧ろ君がやると周りが落ち込むから辞めてくれ」と頼み込まれた物だ。

何故かその頃から射撃が得意なのか訓練時は的の中心にしか当っていなかったので他の兵士が「所詮俺なんか、あの人に比べれば…」と鬱状態になりかけていたので、辞めさせられたのだ。

そしてルナマリアは標的に向き直りかけて、思い付いた様に振り向いて

「いっしょにやります？」「いや、俺は・・・」

アスランは少々戸惑っていたが、シュウは久々に訓練をしようと思っていた。

「悪いけどレイ君代わってもらえるかい？」と訓練中に邪魔するのは悪いと思いつつも頼み込んでみた。

「はい、判りました。銃は如何しますか？最初の時は持っていたようですけど」と聞いてくるが

「今回は流石にデザートイーグルは使えないからＭ９を使うよ」と言ってもう一個銃を取り出していた。

そう彼が選んだのは普通に軍でも採用されるＭ９を取り出し構え始めた。

基本的にはデザートイーグルのほうが強いと思われがちなのだが、実際の所デザートイーグルには大きな欠点が有るのだ。

そうそれは反動の差なのだ。確かにデザートイーグルは小型銃の中でも威力は上位ランクに入るかも知れないが問題は外れた時なのだ。

本来どの銃も弾を撃ち出すとき必ず銃口が火が吹くのだ。故にその反動で銃口が上にあがったり自然と腕が後退し肩に食い込むなど色々と有るのだ。

話は逸れたがデザートイーグルはその反動が常に大きい武器なので、次弾を撃ち込む前に倒される事も良く有る為まさに絶対に外せない武器なのでハイリスクなのだ。

だが今回シュウが取り出した武装は反動は少なく連射出来る。また銃口が正しい構え方をしたら上に余り上がらない便利な銃なのだ。

そしてシュウは集中し始めＭ９を構えマガジンに入っている６発全部的の中心へと命中させた。

すぐさま集中を解き弾倉を変えた後Ｍ９を再びスーツの内側に仕舞いこんだ。

そして何も聞こえないので後ろを振り返った瞬間に「「「すげぇぇぇぇ」」」と声が響いてしまった

「えっ？えっ？何で？さっきのって普通の銃ですよね？」とルナマリアが疑問に成っていたので再び銃を取り出し貸してみた。

しかし貸して撃っても結果は変わらずルナマリア自身も混乱していたが

「銃のせいじゃない。君はトリガーを引く瞬間に手首を捻る癖がある。だから着弾が散ってしまうんだ」とアスランは苦笑しながらもルナマリアにコツを教えていた。

だがアスランはふと視線に気付いて目をやる。何時の間にかドアにはシンの姿があった。アスランは急に落ち込むような様子を見せ。

「こんな事ばかり得意でも、どうしようもないけどな」「そんなこと有りませんよ」
ルナマリアは勢いよく反論する。

「敵から自分や、仲間を守るためには必要です」とルナマリアは言っていたが

シュウは有る事を考えてしまった。（敵から自分や仲間を守る為に力を得る事は確かに大切だ。でも敵って何だ?此方に攻撃して来た者全てが敵になるのか?それともトップが勝手に決めた者が敵に成るのか?）とシュウは思考に沈んでしまった。

そして「敵って……誰だよ?」とアスランが急に問いていた、その言葉にシュウも思考の淵から出てきた。

「えっ?」ルナマリアはその言葉に意表を突かれ目を瞬かせる。

シュウはこのアスランの言葉は仕方ないと思ってしまった。結局は敵である、味方である等という見方には意味など無い。シュウ自身も前の戦争で学んでしまった事でもあった。

アスランは一度捨て去った力に目を背けようと出口へと歩み去ろうとする。シュウも流石に居心地が悪いので一緒に着いて出ようとしてとした時そう言って来た。

「ミネルバはオーブへ向かうそうですね」シンの横を通り過ぎようとした時そう言って来た。

「貴方達も、また戻るんですか、オーブへ？」「ああ」
シンの問いかけにアスランはそう答えたがシュウは何も答えようともしなかった。

「何でです？そこで何をしているんです貴方達は？」とこちら側を攻めるようにそう言い放ってきた

そしてシュウは「今は様子見だけだ。この後にイヤに成るほど動き出さないといけないんでね」と誰にも聞こえない声でそう呟いてを甲板をあとにした。

そして彼らは再びボディーガードの役をしなければ成らなかった。
真衣をカガリの前に出し後ろは和真とアレックスで守るという感じだ。

「カガリ！」「ユウナ？」タラップを降りたかがリは青年の姿を認め、驚いたように足を止める。ユウナという青年は真衣を押しのけカガリに駆け寄りひしと抱きしめていた。

「良く無事で！あぁ本当にもうきみは！心配したよ！」

「あ、あ、いやっ、あのっ！す、すまなかったっ！」
ぐりぐりと髪に頬を摺り寄せてくる青年をカガリは辟易した様子で引き離そうとする。

アスランは此方でも直ぐに判る様に不快そうな顔つきになり、タリア達はあっけにとられて『感動の再会』を見つめる

「これユウナ。気持ちは判るが場をわきまえなさい。ザフトの方々が驚かれているぞ」とオレンジ色の大きな眼鏡をかけた小太りな男

がやや苦笑するような面持ちで歩み出てきた。

「ウナト・エマ！」

カガリは要約抱擁から逃れ、その男に顔を向ける。ウナトと他の政府関係者が彼女に揃って礼をとっていた。

「お帰りなさいませ、代表。ようやく無事なお姿を拝見する事が出来、我等も安堵いたしました」

「大事な時に不在ですまなかった。留守の間に采配ありがたく思う」

カガリは彼らをねぎらったあと、咳き込んでたずねる

「被害の状況など、どうなっているか？」とカガリが話している間に

（はぁ暇ですね～）とシラユキが無線機越しに話しかけてきていた。

（おいおい、こんな時に必要でもないのに無線使うなよ）とシュウは呆れてしまったが

（仕方ないですよ、あのウナトとユウナでしたっけ？見てて目の毒にしか感じられないんですけど）と本音をさらりと言い出してしまっている

（まぁ、そう思うのは仕方ないよな。片や反旗を翻そうとしている政治家デブもう片方はアスハ家を取り込もうと必死な軽薄な馬鹿な青年だろ）とシュウは思わず愚痴ってしまった。

（やっぱりシュウさんもそんな事を考えてるんじゃないですか！人の事言えないじゃないですか！）と怒鳴っていたところで

ユウナがこちら側にわざとらしく微笑んできて
「あぁ、君たちも本当にご苦労だったね。アレックス、和真、真衣。よくカガリを守ってくれた。ありがとう」まるで彼女の正当な所有者で有るかのような口ぶりにシュウは苛立ちが膨らんできた

（ッ！人は…カガリは物じゃないってのにコイツ今物扱いな目だったな。こう言う奴ほど殺意が沸くのは無いな）と奥歯をかみ締めて怒りに耐えていた。

「報告書は後で良いから、君たちも休んでくれ後ほどまた、彼らとのパイプ役などを頼むかもしれないし」とアスランに対して蔑みの目と語調を行っていた。暗にアスランがコーディネーターで有る事をあてこする様なセリフだ。

だが何故シラユキには其れが向けられないのか…それは5時間前の事だがシュウはこの事を思い出し、オーブのデータバンクを改ざんしていたのだ。

シラユキはコーディネーターではなくナチュラルだと嘘の記載をし、アスランの方も如何にかしよう何か対策を…と思ったのだが、危うくばれかけたので何もすることが出来ずこうなってしまったのだ。

そしてシュウ自身もこれ以上何も悪い事が起きないだろうと思っていた所をシュウにとって一番許せないことが次の瞬間起きてしまった。ユウナがシラユキの方に目を当て値踏みをするようにジロジロ見て

「君可愛いね、カガリの所に着くより僕の所に来ないかい？給料弾むよ？」と顎に手を当て見つめていた。

プチッ…シュウの堪忍袋の尾が切れてしまった。すぐさま手を握り締め殴りかかろうとしたが、直ぐにアスランが此方の意図に気付き、此方を押さえつけてきた。

「落ち着け和真！お前の怒りは判らなくも無いが今此処でオーブに喧嘩売ったら不味いだろう！」と小声でアスランが必死に説得してくるが

「放せアレックス！お前俺のパートナーにあれだけの事されて怒りを落ち着けられる訳が無いだろが！」と完全に怒ってしまったシュウは容赦なくアレックスを睨みつけていた

「いえ、申し訳ありませんが、私には他に着く人が居るのでお断りさせて頂きます」とユウナの手を払いのけ苛立ちを隠しながらそう言い放った。

「そうなのかい？残念だなぁ。こんなにも美人な人がボディーガードしてくれないなんてね。まぁ良いや僕にはカガリが居るんだし」とまるでアスランに対する当てつけにしか感じられなかった。

カガリはすぐさま此方に申し訳無さそうな視線を送ってきたが、流石に今回の件についてはシュウは我慢できずに押さえ付けられたままユウナを見ていた。

さすがのタリア達もシュウとシラユキの関係を知ってはいるので、こんな事をされれば怒り狂うのは仕方ないだろうと考えていた。

そしてシュウとシラユキそしてアスランは、仕事から解放されて家へと向かった。

すぐさまアスランが「悪かったなシュウ押さえ付けてしまって。でもあそこで止めとかないと危険と判断してな」と本当に悪そうな表情をしていた。

「気にするなよ、アスラン。俺も悪いと思ってたからさ、自分を見失うなんてかっこ悪いな」と自嘲気味にそう言い放ったが

「いえ、カッコ悪くないですよ、私を守ろうと動いてくれたんですからその気持ちだけでも充分です」と微笑んできてくれた。

（それよりもアスランはオーブに喧嘩を売って負けるとは言っていたが、まずオーブに喧嘩を売る馬鹿は居ないだろう。まぁ例の2機で本気出せば7割型戦力削って終了かな？）とついつい変な事を考えていた。

「取り敢えず今日はお互いに疲れましたね？ゆっくり休みましょうか」シラユキがそういってアスランは自分たちの家の前まで送ってくれた。

「助かったよ、アスラン。まあ困った事が有ったら相談してくれ手伝うからさ」とシュウはそう言葉を残し家へと戻って行った。

「あぁ有り難うな」と言葉を残しアスランは去って行った

「さてと、明日はモルゲンレーテに向かうから作業着の準備しといたほうが良いぞシラユキ」

「判りました。しかし愛着有ったＭＳともお別れですか、寂しくなりますね」と落ち込んでいた

そうシュウとシラユキは神の餞別として貰って置いた、ＮＪＣを使ったＭＳを製造していたのだ。だがこの情報はトップシークレット扱いなので知っているのは、エリカさん他信用できる技術者だけなのだ。

今は他の一般的な整備の方々にも手伝って貰っているがその人達はＭＳにＮＪＣが使われているのを一切知ってないのだ。

「別にお別れじゃないぞ？今回はミネルバを追い掛けるけど、俺らは救助もする為に他のＭＳを使わないといけない時も有るんだ。だからキマイラとエンジェルは引き続き使っていくぞ」

「そうなんですか？だったら嬉しいですね」と心なしか凄く喜んでいるのが判る

「まぁ、今まで使ってたＭＳに愛着湧くのは仕方ない事だけど、明日は速いからもう眠るぞ」

と言ってシュウは自分の部屋に入りベットに倒れこんだ。自分自身気付かなかったのか疲れが貯まったのか速めに眠ってしまった。

彼らは早朝に家を出てモルゲンレーテへと車を走らせていた。途中で軍の確認が必要と成るのだが前日にエリカさんに報告を入れておいたので一般市民のＩＤだけで悠々とゲートを通っていった。

「遅れてすいませんね」と目の前の相手に謝っといた。

「大丈夫よシュウ君それよりも貴方が頼んでいた例の二機もう完成しているわよ。着いてきなさい」

と再び車に乗り一つの格納庫まで走っていった。

其処は関係者以外立ち入り禁止と書かれたプレートと頑丈な壁そして6文字のパスワードを打ち込み網膜認証ＩＤ認証等しなければ入れない程の重要な物が入っているのだ

時間は少し掛かったがようやく3人の認証が確認でき一つのハンガーに入りこんだ。

「貴方達が頼んできたデスペアとホープよ、手間こそ掛かった物の技術者としては此れを作れたのは嬉しいわね」と微笑みながら2機のガンダムを見上げていた。

そうしてシュウとシラユキも同じ様に二機を見上げて感嘆していた。設計図はシュウも書いたのだが大雑把に書き8割方は技術者の面々に協力してもらい名前もエリカさん達に任せていたがこのような出来に成るとは少々驚きで予想外だった。

片方のデスペアと呼ばれたガンダムは全てを黒で統一されていた。そして大きく目に付いたのはWガンダムゼロカスタムで使われていた白き翼が黒く染まり装着されていたのだ。

もう一つのホープガンダムはデスペアガンダムと対を成すように白で統一されていた。やはりこのＭＳも空を飛べるようにしたいのかＨＩ－νガンダムで使われた6枚の翼が背中に着いていた。

シュウは設計図を描いていた時にやはりインパクトのある特徴を出したかったのでこの翼を取り付けたのだが、大半は設計者のお陰でこのような形に成ったのは嬉しい物だ。

既にどっちがどの機体を乗るか等言わずもなが判りきっていたものだ。何故ならシラユキの視線が既にホープに釘付けに成っていたからだ。

「凄いですね。もしかして私が乗せて貰えるのってホープですか？」とシラユキがワクワクしながら聞いてきた。

「あぁ、そうなるな。俺の場合デスペアだ。意味はホープが希望・デスペアが絶望だ。対を成す存在だけど、俺らはパートナーだから離れる事はまず無いな」と自信を持ってそう言い切った。

「そうですね。私この機体上手く使いこなしてみせますよ」と新しい機体を見てやる気を出していた

「取り敢えず今は完成しているけど起動すらしてないから調整は自分でやってね」

とエリカさんが付け加え言ってきたのでシュウとシラユキは新しいコックピットに入りこみ機体の調整などを開始し始めた。

この機体の動力源がばれた時ユニウス条約に違反し言及は酷いものと成る筈だ。しかし彼らはそんな事は気にしないだろう、新たな翼を手に入れ偽善者と蔑まれ様とも二人は戦いを辞めない。

力を使わず核を使って来ている連合にただただ怯えているより犠牲に成ってる人を助けるために二人は立ち止まらない、それが自分たちの正しい事と信じて。

その日シラユキとシュウは新しい機体を慣らす為にシュミレーターに引き篭もっていた。二機の実力は同等だった故勝率もお互い５分５分で終わってしまった。

ＰＨＡＳＥ３３（後書き）

抹茶「今回は此処までとさせていただきます」

シュウ「相変わらず歯切れの悪い終わり方だな？」

シラユキ「もう少し頑張って書いて下さいよ」

抹茶「すいません・・・でもデスペアとホープ出せた事でテンションが上がってるんです」

シュウ「そうなのか、しかしこの名前はどうやって思いついたんだ？」

抹茶「うーん、此れといった物は無いんですけど強いて言うなら頭から希望と絶望の文字が浮んで消えなかったんですよね」

シラユキ「よりにもよって何でその二つが浮ぶんですか」

シュウ「よほどヤバイゲームをしていたとしか思えないぞ？」

抹茶「ヤバイゲームじゃないと思います。基本自分はホラー苦手でやるゲームはアクション・シューティング・ＲＰＧ・格ゲー・レースだけですから」

シュウ「それ殆どだからな？一応ホラーたまに入るジャンルも有るし」

抹茶「そのジャンルでのホラーはしないだけです。まぁ此れ書く前

はｐｓ３のＣＯＤＭＷ２って言うシューティングゲームやってたから思い付いたのかも知れませんが」

シラユキ「そうなんですか、それよりも作者さんまたご指摘を受けたそうですね？」

抹茶「はい、蟻とキリギリスさんと今夜のおかずさんご指摘有り難う御座います」

シュウ「さて後書きは此処までだな、それじゃ閉めるか」

シュウ・抹茶・シラユキ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

（新）機体情報（前書き）

抹茶「ＰＨＡＳＥ３４に入る前にシュウとシラユキの次代のＭＳを紹介しようと思います。一応ＰＨＡＳＥ３４は予定通り１８日に投稿するのでお待ち下さい」

抹茶「また、ＭＳでの疑問が有りましたらご感想の一言で申し上げてくれれば可能な限り答えようと思います」

（新）機体情報

機体情報

デスペアガンダム（シュウ・K・ライトニング専用機）

機体原型　ガンダムWゼロカスタム

色彩：頭部のVアンテナを銀色へ変更

胸の緑のコアが赤へと変更

両肩の円形は黒緑色　黄色い線の所が赤

本来の脚の赤　フェイスマスクの赤は無変更

後の羽・胸部・腕部・脚部は全部黒で統一

両肩：マシンキャノン

左腕：ゲシュマイディッヒ・パンツァー・シールド（形：ストライクと同様の形に加工）

右腕：収納式ニ連装ミサイルランチャー（使用時のみ腕から突出してミサイルが発射される）

両手：近接戦闘用クロー（判らない方はコードギアスの紅蓮の爪と考えて下さい）武器所持可能

左腰：黒刀（絶）　（ユニウスセブン時に手に入れた刀を加工　刀身が黒い）
　伸縮式ビームデスサイズ（展開時のみ持ち手が伸びる。普段はバトンサイズの2倍まで縮小）

右腰：ビームライフル

後ろ腰：大型ビームバズーカ（GNバズーカとほぼ同じ）

右足：スタンダガー（アーマーシュナイダーを小さくした物　スタン効果有り）

左足：小型サブマシンガン（現代の装備で言うPP2000）

OP：羽にビームコーティング仕様
　後ろ腰武装変更可能：6連装ガトリング砲・緊急医療キット・ツインバスターライフル等

　ニュートロン・ジャマー・キャンセラー装備

　大気圏突入・突破可能

リミッター解除（時間制限5分　体力消費に代わったが未だに体力が足りずに限界が5分まで）

　機体全パーツ解放
（時間制限3分　リミッターとの違いはリミッターが速さ・機体制限解放は機体全体の性能を一時的に上昇　トランザムのような物）

注意：リミッター解除と機体全パーツ解放は可能だが普段は同時使

用禁止
（使用したら機体の大破ｏｒパイロットの死亡の危険性有り）
デスペア＝絶望　ホープとは兄弟機であり、対を成す機体

ホープガンダム（シラユキ・カグヤ専用機）
機体原型：ＨＩ－νガンダム
色彩：機体の胸部の青と腰部の青が赤色に変更・頭部の赤色はそのまま

他の場所は全部白色で統一
頭部：イーゲルシュテイン
左肩：斬艦刀（ガンダムスローネツヴァイと同じ様に装着）
右腕：ゲシュマイディッヒ・パンツァー・シールド＋ミョルニル（形：イージスと同様の形に加工）
本来のイージスの盾の尖っていた部分をミョルニルに変更
相手に巻き付けて引っ張る、ミョルニルで叩き付ける等用

途は色々有り

左腕：ビームライフルｏｒハイパーバズーカ

背中：バックパックにビームサーベル２本
　フィン・ファンネル（シラユキが慣れずに練習中の為最初は１個のみ射出）

左腰：白刀（雪）　柄・鍔（つば）・刀身・鞘　全てが白に染まっている
　日本刀（堅守）
一般的な色彩と成っている　名前の由来はシラユキが大切な人達を守る為の意味を込めている

右腰：７６ｍｍ重突撃銃

両膝～両足の爪先まで：ビームブレイド、格闘が得意なシラユキの為に装着
　（判らない方はインフィニット・ジャスティスと同じと思ってください）

ＯＰ：後ろ腰　装備変更可能　デスペアの装備使用可能

　ニュートロン・ジャマー・キャンセラー装備

　大気圏突入・突破可能

　リミッター解除（制限時間５分）　機体全パーツ解放（制限時間３分）

ホープ＝希望　デスペアと対を成す機体。兄弟機であり、常に２機

は同時行動している

ＰＨＡＳＥ３４（前書き）

抹茶「はい、新話完成させましたよ」

シュウ「ようやく完成したのか。ちょっと時間掛かってないか？」

シラユキ「シュウさんそれ突っ込んじゃ駄目ですよ。作者は投稿時間何時もバラバラな酷い人なんですから」

抹茶「グフッ！酷いや。でも毎回四日おき投稿してるから許してくれるよね？」

シュウ「さぁ？しらねぇよ。それより今回はどんな話に成るんだ？」

シラユキ「私達の新機体デスペアとホープは使えるんですよね？」

抹茶「今回はミネルバが連合の艦隊と戦う所です。新機体は出てきます」

シュウ「そうか、じゃあ本編にでも入ろうか」

シュウ・抹茶・シラユキ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE34

「シュウさんミネルバ発進しました」シラユキが報告してきた。

「そうか…こっちも確認できたよ。……連合がまた、核を使った」

シュウはそう言いつつも手に無意識に力が入りすぎていた。再び核を使わないと連合とザフトは誓ったと思っていたはずだ。だがもう既に均衡は崩れきり戦争が起きてしまった。此れで再び戦争と関係無い人達が多く傷つくその事にシュウは怒りを隠し切れなかった。

「シュウさん…怒ってるんですね。再び関係ない人が傷つくから」とシラユキがこっちの怒りと悲しみを判り切った様に言ってきた」

「ああ、何でこんなにも傷つかなきゃいけないんだ!その人達が何したってんだ!」となりふり構わずそう叫んだ。

モルゲンレーテの端っこでそう叫んでしまったせいで色んな人から注目を受けてしまったが、シュウはその事を全く気にせず怒っていた。だがここまで怒るには他に理由があったのだ。

「シュウさん落ち着いてください。…って何ですか!?このザフトの回答は!?」

シラユキ自身もこれに付いては少々驚きを隠せなかった。そこに書かれていたものは『此方からは攻撃は仕掛けはしない、だが連合から攻撃を仕掛けてきた場合ザフトは積極的自衛権を使わせてもらう』と書かれていたのだ。

端から見たら『攻撃』という表現は無い。だが自衛という言葉を使ってしまえば武力を使う事への忌避の念が和らぐ。

さらには自分達は悪くない。向こうが撃って来るからやっているだけだ。向こうがやめさえすれば、こちらは直ぐにも手を引ける。とでも言ってるようなものなのだ。

此れを見たらシュウも激怒するのも仕方ない。彼らは戦争をしたくないのかもしれないが連合が核を撃った時からコーディネーターの怒りも仕方ないだろう。

そしてシュウはようやく落ち着いたのか有る所を目指すように歩き始めていた。

「ちょっとシュウさん!?何処行くんですか?」とシュウの突然の行動に驚きつつもシラユキもついて行き始めた。

「ん?少し怒ってはしまったが、冷静に考えてみれば今此処で動かないより動いた方が良い。だから、そろそろホープとデスペアを起動させるぞ」そう言いながらボロ布を纏って正体を隠したＭＳを見上げていた。

「出るのね?それをやっちゃったら中々此処には帰って来れないけど良いのね?」エリカが心配してくるが

「エリカさん心配してくれるのは嬉しいんですけれど、今のオーブの政策には賛成できないんでね」とシュウ自体も多少悲しそうな表情をしてしまった。

「それは私達も同じよ、ウズミ・ユラ・アスハの後継者がセイラン

家に成っちゃったら私達どうなるか判ったものじゃないわ」とエリカさんもセイラン家には嫌な表情を隠しきれてなかった。

「それじゃあ有り難う御座いました。このＭＳだけじゃなくジャンク艦まで水中移動も可能の様にして貰って感謝しきれませんよ」と言って頭を下げて感謝していた。

そう彼らはオーブから離れる事を画策していた事をエリカさんにばれたのだ。だが彼女は何も言わず自分達の戦艦を水中でも航行可能にしてくれたのだ。

因みにジャンク艦は今はオーブ領域外で水中内に潜んでいる

そうして悲しいと思いながらもシュウとシラユキは故郷オーブを離れ行動しようと考えていたのだ。

「それでは失礼します」と言ってシュウとシラユキはデスペアとホープを起こし羽を広げた。

「シュウ・Ｋ・ライトニング　デスペア出る！」「シラユキ・カグヤ　ホープ出ます！」

そう言って二機は工場から飛び出し上空からオーブを眺めていた。

「何時か…何時かこの地に再び戻ってくるからな。それまで待ってくれオーブ」

そうシュウは呟きミネルバの後を追うように機体を翻して飛んでいった。

～タリア・グラディスＳＩＤＥ～

私達は秘匿通信から来た危険だという指示を受け早朝にオーブを出て行った。

だけど途中までオーブ艦隊に見送りのような物で領域外まで護衛をしてもらったが護衛をするつもりは無かったのだ。

そう相手は空母を含む二十隻以上が待ち構えていたのだ。

だがまた最悪な情報が振り込んできた「後方、オーブ領海線にオーブ艦隊展開中です！」

「砲塔旋回！本艦に向けられています」とバート自身信じられないと言う表情に成っていた。

「領域内に戻る事は許さないと言う事よ。どうやら私達は土産か何かにされたようね」とタリアは怒りを覚えながらそう吐き捨てる

だが次の瞬間タリア自身も疑問を覚えさせる事が起きてしまった。

バートが続いて「更に不明機（アンノウン）二機急速接近！照合…一致機一切ありません！」と叫んでいた。

そしてブリッジ遮蔽中によってモニターから確認してしまったが次の瞬間ボロ布に包まれていた二機が黒と白の刀を抜いて、砲塔を斬り落としていた。

ブリッジのメンバー全員が驚愕してしまった。あのＭＳが来た位置から見てもオーブから来ていた筈なのにオーブの艦隊を攻撃していた。その後直ぐに此方の前に立ち連合の方を睨みつけていた。

（あの機体はオーブの味方じゃないのかしら？だとしたら嬉しい誤算ね）とタリアは思っていたが

「艦長！あの機体味方なんですかね？」とアーサーが聞いてくる

「知らないわよ。メイリンあの機体に連絡を取ってみて。あっちの事情を聞いてみたいわ」

「了解！」

（さてあの機体は私達の味方なのかしらね？だったら嬉しいんだけどね）と思いつつも戦場に意識を向けていた。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「全く、オーブは原則不介入とか抜かしといてこう行動を起こすのかよ。やはりセイラン家にオーブを任せたらオーブと言う名が消え去るだろうな」と言いつつも刀を鞘へと戻した。

そして腰に掛けていた大型ビームバズーカを抜き出しチャージを開始し始めた。

すぐさま危険性を感じたウィンダムが此方にビームライフルを連射して撃ち貫こうと連射をしているが、その攻撃は無駄に終わってしまった。

何故なら次の瞬間二機のウィンダムのコックピットがホープの持っている刀『雪』『堅守』によって貫かれてしまったのだ。

それにより気付いていたとは言え敵機も驚きが隠せないのだろう。

さっきまでもう一機のそばに居た筈…だが今は此方の背後を取って攻撃を仕掛けてきた。多くのＭＳのパイロットが恐怖を覚え硬直し大きな隙が生まれていた。

当然固まっている間にもデスペアの持つ大型ビームバズーカはチャージが完了し終わっていた。

次の瞬間ビームキャノンから無慈悲な一撃が放たれてしまった。何機かのウィンダムが自分達の空母を守ろうと躍起に成って盾を構えビーム砲の直撃を代わりに受けようとするが、その考えは空しく終わりビームはウィンダムを包み込み貫通して空母へと直撃した。

そして空母は大型ビームキャノンを受け貫通してしまった。遠くから見ても反対側が見えるほどの破壊力だった。次の瞬間当然の如く空母は大きく火を噴き海へと沈んでいった。

「ふん、その程度の攻撃じゃ此方をを葬れないぞ？もっと機敏に動かないとただの的にしか見えない」とシュウは冷たく落ちて言った空母へと言い放った

だが次の瞬間その考えを捨て左へと緊急回避をし始めた。そして気づいた時には今回の戦場にて連合の切り札とも言えるザムザザーが近接用クローで切り裂いてきたのだ。

シュウは気付いてないとは言えすぐさま反応し回避しようとしたがそれでもクローが掠ったのか機体をおおっていたボロ布がクローに引っ掛り海へと落ちていった。

その姿を見て誰もが堕天使と思ってしまっただろう。そのＭＳは１対の黒き羽を広げザムザザーを見据えていた。そして次の瞬間左腰

からビームデスサイズを取り出し肩に担いだ。

「機体の正体をばらされたか。まぁ良い……さぁ、貴様等の断罪を始めようか」と黒き羽を持つＭＳのパイロットからそう言い放たれた。

だが威圧的な喋り方に怒りを感じた何機かのウィンダムがデスペアにビームライフルを連射していた。何機かで挑めば落とせるとでも考えていたのだろう。次の瞬間デスペアガンダムが爆風へと包まれていた。

そして此れで止めとでも言うようにビームサーベルで３機のウィンダムが煙が立ってる中へと突っ込んでいった。

だが次の瞬間落ちていったのはデスペアではなく体と脚が分かれたウィンダムが落ちていき爆発が起きていた。

肝心のガンダムの方は右腕一本でビームデスサイズを難無く振り回しつつ全くの無傷でしかなかった。全く何が起きたのか理解の出来ない敵兵だったがシュウは撃ち込まれた瞬間に翼で自機を包み込みビームの攻撃を完全に防いでいたのだ。

「さぁ、お遊びは此処までだ。体も暖まって来たしメインディッシュにでも入ろうかな」と言ったが次の瞬間ミネルバからタンホイザーが援護とでも言うようにザムザザーに向かって放たれていた。

だがシュウも確認しようと思っていた事だが、やはり陽電子リフレクターのせいでビーム攻撃が防がれていたのだ。

「シラユキ…あれやるぞ、練習通りだから出来るな？」と秘匿回線

で何時の間にかデスペアに近づいていたシラユキへと聞いてみた。

「あれをやるんですか？まぁ今回は標的デカイから何とか出来ますけどね」と言ってやる気はあるようだ

そして同時に「「リミッター解除　5分間！」」と言って二機は高速で左右に分かれた

そしてシュウはザムザザーの右側に出現し左足にある小型マシンガンを引き抜き右腕をザムザザーに向けて差し出しミサイルを発射しシラユキは逆側の左側左腕に持っているハイパーバズーカと右腕に付いているミョルニルをザムザザーに向けて打ち込み始めた。

すぐさまザムザザーが陽電子フィールドを張って此方の銃弾を防ごうと考えたんだろう。だが次の瞬間陽電子は何も反応せずそのまま実弾を通しザムザザーへと直撃して言った。

シュウとシラユキは以前から確認していたのだ、陽電子リフレクターはビーム攻撃等の電子系に干渉してダメージを減らす事をしているのだと、故に実弾には干渉できず直撃を受けてしまうと…今回それを試す為に行ったのだが大成功のようだった。

そしてシュウとシラユキは武器を元有った場所に戻しシュウがスタンダガーを投げつつも『絶』を引き抜き格闘攻撃を仕掛けた。だがデスペアが出てきた所はザムザザーの真正面だった。すぐさまザムザザーが爪を振り上げ此方を叩き潰そうと思っていたが爪はピクリとも動いていなかった。

そのままデスペアは『絶』を抜き出しザムザザーの左腕に振り落と

され斬りおとされた。そして時間差攻撃とも言うように斬艦刀をザムザザーの後方右足へと突き刺した。

これによって後方右足は上下左右運動が不可能となり実質使えるのが右手・左足なのだがその程度の時間を与えられるはずも無く、止めとでも言うようにシュウはビームサイズをシラユキは『雪』『堅守』をザムザザーへと振り下ろし後方へと下がって行った。

この行動を改めてシュウは時間を確認したが実質3分しか経っておらずザムザザーは既に海へと沈んで行き海中で爆発を起こし海の藻屑として消え去った。

流石の連合も第三者の軍事介入は予想していなかったのだろう、既にミネルバと言う標的すら忘れてしまい矛先が此方にしか向いていなかった。

流石にシュウもウィンダム相手にリミッター解除は大人気ないと悟ってしまったのだろう。

次の瞬間「リミッター解除終了」と言ってブースターの展開を終わらせた。

「ちょっ！シュウさんなんでリミッター解除切ってるんですか！？」とシラユキが驚いているが

「いやいや、この程度にリミッター解除使う必要性あると思うか？無いだろ？」とシラユキにそう言い切ってしまった。

「まぁ、そうですけどね。でも…いや、貴方に何言っても駄目な気がします。リミッター解除終了」とシラユキも観念したようにリミ

ッター解除を切っていた。

すぐさまウィンダムが静止した此方にビームライフルを連射していたが二機は呼吸が合うように同時に盾を張りビームを曲げていた。

「どうだい？自分達が造っていた兵器が相手に利用される気持ちはさ」と言って微笑んでいた。

そしてシュウとシラユキはお互いの武器を持って敵艦に攻撃をし始めた。

まずシュウから行って見よう

シュウはすぐさまビームサイズを抜いて敵艦へと突っ込み始めていた。

だが敵も既に此方の狙いなど判り切っている様に何十とも呼べるウィンダムで此方を囲んでいた

「やれやれ、今持ってる武装を何とも思わないのかな？」と呆れつつもビームデスサイズを両手で持ち構えた。

次の瞬間ビームサイズからコードを伸ばし機体の一部に繋げビームサイズの刃を長くして大きく振り回した。

この行動に予想外だったのかすぐさま数機は上空へと飛翔するが反応し切れなかったＭＳ達はコックピットを切り裂かれ無様に落ちていった。そして上空に逃げていったＭＳ達も足を切られ余り戦闘が出来ない様にしか見えなかった。

周りのイージス艦を確認しても戦艦自体は早く動けないせいでブリッジは叩き潰され戦闘不能でしかなかった。

「全く歯ごたえの無い連中だな。…おっと危ない危ない危うく俺自身が戦闘狂に成る所だったよ全く」と言いつつも自分の周りに敵が居ない事に呆れてしまっていたシュウだった。

一方シラユキの方は

「今頃シュウさんは速攻で終わらせてるんでしょうねぇ」と言いつつまた一隻のイージス艦を叩き潰していた

彼女は今お気に入りの武器『雪』『堅守』の二本を持ちつつも敵MSと戦艦を相手していたのだ。

すぐさま空中へと飛び上がり再び二機のウィンダムを斬りおとしていた。だがホープに気付かれないようにイージス艦の影に潜んでいた一機のウィンダムが此方をビームライフルで撃ち貫こうとしていたが逆に何か凹型の何かによって機体は撃ち貫かれ爆発を起こしていた。

「ふぅ、此れは疲れるんですけどやっぱり良い物ですねドラグーンは」と思わず言ってしまったが

「おっとっと、間違えましたね。シュウさんが言うにはフィン・ファンネルって言うらしいですけどドラグーンとそこまで代わりないんじゃ？」とシラユキは頭を傾げながらも横から来たウィンダムを斜めに斬り爆風に巻き込まれないように蹴り飛ばした。

そして蹴り飛ばしたところを余り良く見ずにやっていたが運が良かったのだろう。機体は他のウィンダムにぶつかり一緒に爆発してい

た。

それをボッーと眺めつつもシラユキはファンネルを再び操作しながらＭＳを順調に叩き落していた。

だが何時までも長いと感じていた戦いにも決着が付いたかのように一隻の空母から信号弾が打ち上げられどんどんとイージス艦が拠点へと引き返していく。

そしてシラユキはようやく戦いの終わりが来た事を感じ少しの安堵を覚えていた。

だが改めてデスペアとホープが合流し海を確認すると機体の残骸が海へと沈んでいたのが良く判り敵艦も数が少なかったのだ。

「シュウさん今回何機落としたか覚えてますか？」とシラユキが少しの疲労感を覚えながらも聞いてみた。

「判らん、でも結構落としたのは頭に残ってるぞ」とシュウ自体も今回の戦いは疲れを感じているのだろう

そう彼らが今回落としたのは、正直言って軍に居たならば表彰者だっただろう。

今回シュウとシラユキが落とした数はＭＳは八十三機　大型ＭＡ一機　空母を含めた戦艦は十一隻とある意味勲章物に成るほどの撃墜数を誇っているのだ。

今回此れだけで済んでいたのは殆どはシラユキの武装の貧弱性も有ったからだろう、今回シラユキは才能が有ったとは言え未だにファ

ンネルは一本しか使えず更にはガトリングと言った強力な兵器を一切使わなかった為にこの数で済んでしまったのだろう。

今回シュウはそれが少々気がかりに成り聞いてみた

「シラユキ、何で今回は大型武装を使わなかったんだ?」

「今回はザムザザー落とせば勝手に撤退すると思ってたんですけどこんな展開に成るなんて読めなかったんで」と軽く申し訳無さそうにしていた。

「まぁ、仕方ないよな。今回はザムザザーだけで終わりだと思っていたのは間違えでは無いが連合にもメンツが有るんだろうね」とシュウ自体も連合には呆れていた。

メンツやプライドなど確かに人によっては凄く大事な物だろう。だがシュウはその考えは少し苦手でしかなかった。

プライドやメンツにこだわり過ぎると今度は自分の命を危険に晒す為彼自身生き残る為ならシラユキやキラ等前大戦の仲間を救いつつも他の人間を容赦無く利用するだろう。それが例え自分が大きな汚名を被ってもだ。

「そんじゃ「待ってください」…はぁ、何か嫌な予感がする」とミネルバに呼び止められた

「何ですかね?此方とて多少忙しいので速めに用件を言って下さい」とシュウは声でばれたら危険なので砂漠でやった様に変声機で声を変えていた

「幾つか話が聞きたいので着艦していただけないかしら?」とグラ

ディス艦長が頼み込んでくるが

「すいませんが其れは出来ません。今回助けたのは自分達の意思とたまたま戦場に居合わせただけです。それでは」と言ってホープとデスペアの二機は機体を翻しジャンク艦の有るポイントへと機体を走らせた。

後ろから「ちょっと！待ちなさい！」と聞こえてくるが、当然無視に決まっている。

彼らが特に悪い事をしていないのは判っているのだが、機体の情報を教える訳にもいかないので逃げるように撤退して行ったのだ。

そしてシュウは考えていた（此れで連合とザフトの戦争が再び始まる…。どれだけ多くの人達の命を奪い取れば気が済むんだよ上層部は！）と内心怒りを感じつつもジャンク艦へと向かって行った。

ＰＨＡＳＥ３４（後書き）

シュウ「今回はミネルバの獲物を全部俺らが掻っ攫った訳だな」

シラユキ「そうですね。改めて見ると私達の機体って結構チート臭がするんですけど気のせいですかね？」

抹茶「多分それは気のせいじゃないです。結構書いてる内にホープはギリギリチートじゃないとしてもデスペアがチートすぎる気が…」

シュウ「自重しないお前が悪い気がする」

シラユキ「そうですよね。それに格闘専用機にファンネル着いてたら進軍が絶対に止まらない気がしますよ」

抹茶「別にもう良いじゃん。前のキマイラとエンジェルもチートでしかなかったし今回ぶっ飛んだチートも有りだね」

シュウ・シラユキ（開き直ったよこの作者）

抹茶「何か悪い想像された気がするな、まぁ良いや。今回ご感想をくれたｈａｌｌさん有り難う御座いました。と言うか混乱させて申し訳有りませんでした。」

シュウ「作者…あんまり読者を混乱させないようにな？」

抹茶「はい、改めて読者の皆様方にはお詫び申し上げます」

シラユキ「さて後書きは此れぐらいですかね？」

シラユキ・抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

PHASE35（前書き）

抹茶「はいフェイズ35完成させました」

シュウ「今回は早朝投稿だが、朝の1時くらいに投稿できなかったのか？」

シラユキ「また、作者の事だから何かしら理由をつけて投稿出来なかったって言うんでしょうね」

抹茶「うん、正直に言うと寝落ちした。完成した次の瞬間に緊張の糸が切れてグッスリと」

シュウ「駄目じゃん！全く作者のウッカリ具合にも呆れが出てきたぞ？」

抹茶「そう言わないでくれ、と言うか俺のウッカリは何時もだ！」

シラユキ「そんな自慢して言うほどじゃないと思いますよ？むしろ言ってて空しくなりませんか？」

抹茶「うん、今マッハで自分で言った事が空しくなった」

シュウ「それより今回はどんな話なんだ？」

抹茶「今回はキラ君達が暗殺されるところを介入です」

シラユキ「そうですか、それでは前書き閉じますか」

シラユキ・抹茶・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE35

あのオーブ領域外の戦いから1週間が経った。たまたまシラユキがオーブとザフトの方が如何なっているのか、確認していた。

そして彼女は二つの情報を見て驚きを隠せていなかった。それをすぐさまシュウへと知らせる為部屋へと向かっていた。

「シュウさん！大変です！」と言ってシラユキが部屋に入ってくる

「ん？何が大変なんだ？俺には今このコーヒーを飲むと言う楽しみを奪われる以外に大変さは無いんだが？」ととても真剣な顔で言い放つが

「そんな事は如何でも良いんです！取り敢えずこの二つを見てください！」

と言って小型の端末を投げ渡される

シュウは自分の大切な時間としているコーヒーを楽しむ時間を邪魔され多少苛立ちそうに成ったが映像を見た瞬間その苛立ちは吹き飛んだ。

そう其処に書かれていたのは『オーブのアスハ家とセイラン家結婚！オーブ安泰か！？』と書かれた物が目の前に写っていた。

シュウ自体も原作を知っていたが流石にあの鬱陶しい男と結婚するカガリに多少の同情をしてしまった。だが正直シュウも悩んでいた。

此れに介入すると言う事は確実に此方は敵に回ると言う意思表示と

考えられる恐れが有るのだ。それによってオーブの地を二度と踏めないと言う事が起きるという可能性を考えるとシュウは怖さを覚えてしまった。

だが其れを考えながらももう一つの記事を開いた。それは映像付きの画像だったが、シュウ自体も此れは、プロだったら一瞬で見分けられるほどの嘘が書かれていたのだ。

そこには『新造艦のミネルバとそのクルー達オーブ領域外で勲章物の撃墜数』と書かれており詳しく映像を見ると、幾つか不可解な撃破が残っているのが良く判る。

そうまず問題の記事は、シュウのデスペアが大型ビームキャノンで空母を撃ち貫いた所がミネルバによるタンホイザーで行っていた所・シラユキと組んでザムザザーを落とした所ではビームサーベルで爪を切っておきながら切断面がやけに綺麗過ぎる所・ホープがイージス艦のブリッジを潰した所はインパルスのエクスカリバーの斬激で潰している等色々と攻撃と攻撃後の形が合っていない等数え始めたらキリが無いほど多いのだ。

「何だ此れ？最近のザフトの連中ってのは人の手柄を取るのがシュミなのか？それとも騙し映像を見せて置いて此れが本物です。とでも言ってるつもりなのか？」と流石のシュウも此処まで来ると怒りを通り越して呆れと苦笑しか残らなかった。

「ちょっとシュウさん笑ってる場合ですか！？片方はカガリさんの無理やりな結婚もう片方は、手柄の横取りですよ！？」とシラユキはこの件については憤りを隠せないようだった。

「シラユキもそうマジ切れするなよ。こんなもん子供の悪戯にしか

思えないほどだしな」と言ってシュウはあんまり気にはしなかった。この程度の手柄を取られた程度で彼らは痛くも痒くもないのだ。寧ろ彼は、勲章や撃墜数など全く興味を示す事など無いのだ。彼が一番興味を示す事……

それは「そんな事より今は楽しい楽しいコーヒータイムの時間なんだ。頼むから邪魔しないでくれ」と言って造りたてのコーヒーを楽しんでいた。

「はぁ、もう良いです。シュウさんに相談しようとした私が馬鹿だったかもしれません」と言って部屋を出て行こうとしていたが

「悪いがシラユキ　この後暇が有ったらＢａｒｒｅｔｔ．５０ｃａｌとｍｐ５ｋの２丁を用意しといてくれ当然二つともサイレンサーとサーマルスコープ付きでね」とシラユキに向かって頼み込んでいた。

「如何言うことですか？誰かの暗殺でも行うつもりなんですかシュウさんは」と流石のシラユキも武器庫にその二つの武器は有るとは言えそれが必要と言われては怪訝な顔に成るのは仕方ない事だ。

「何そう変な顔しなくても大丈夫だよ。友人を助けに行くだけさ」と言ってシュウは再びコーヒーを啜っていた。

「そうですか、それだったら判りました。直ぐに準備しておきます」と言って部屋を後にしていった。

シラユキもさっきの会話で判ってしまったのだろう、キラ達が危ないと言う事を…。最近ではシュウとシラユキは一言二言話すだけで言ってる事が判る時があるのだ。

そしてシュウは一人部屋で悲しい顔をしながら
「こんな事でオーブを訪れる事に成るなんてね。しかしデュランダルもそれほどまでに俺らを殺したいのかなぁ」と言いながら呆れてしまっていた

そう言いつつも彼は飲み干したカップをテーブルに置き立ち上がって歩き始めた。そう目的はキラ君達を殺害しようとしている暗殺者達の殺害だ。

そうしてシュウは既に準備を終わらせたシラユキから荷物を受け取りＭＳに乗り込んだ。今回はキマイラを使おうと思ったのだが、考えてみれば既にオーブからはキマイラのパイロットは知り渡っているのでデスペアへと乗り込んだ。

そして彼はジャミングを機体に掛けながらキラ君達が住んでいる別荘と海を見渡せるポイントを陣取り夜を待っていた。

そして深夜……予想通りサーマルスコープ越しから敵の姿を確認する事が出来た。そして彼らが動き出した所を見てシュウも狙撃を開始した。

彼らは中腰で動いている為速度が遅い…。故に少し先の移動予測地点に銃弾を打ち込めば後はむこうから勝手に弾に当たりに来てくれると言う訳だ。

そしてシュウの予測通り暗殺者の一人は体をうつ伏せにし動く事が無かった。流石の彼らもスナイパーの存在には驚きを隠せないだろう。そして厳しい訓練を受けてた暗殺者が普通のスナイパーライフルで絶命する等考えてもいなかっただろう。

彼らも生き残るために防弾チョッキくらいは着込んでいる筈だろう。故に普通のスナイパーライフルだったら瀕死程度で生き残れたはずだ。だがそれは普通のスナイパーライフルで撃たれた時の話だ。今回彼が持ってきたスナイパーライフルは対戦車用のライフルである為防弾チョッキなど紙に等しいほど簡単に貫けるのだ。

そして焦り始めた暗殺者は急いで屋敷内に駆け込んで行っていた。それも見逃す訳無く着実に撃ち抜いていくが何人かは屋敷内に入り込んでしまった。

そして中から銃声が響き続いている。シュウは中に入れてしまった事に舌打ちを行っていたが、次の瞬間、その考えを吹き飛ばしすぐさま自分のＭＳの居る場所に走り出した。

そう、シュウが逃げ出した理由は海から何十ものＭＳが出現していたからだ。そして此方の位置が判り切っていた様に先程自分が居たところに背中のミサイルランチャーが撃ち込まれた。

「なっ！マズイ！」と言ってシュウはすぐさま態勢を低くし吹き飛び難そうな木の後ろへと下がった。次の瞬間大きな岩が自分の真横に吹き飛んでおり、あの時の判断を間違えてたら即死だっただろうと改めて思うシュウだった。

そして黒の塗装をしていたカニの形をしたＭＳは此方に興味を失ったかのように攻撃対象を地下のシェルターへと向けていた。

そうしてシュウは意識をされて居ないことに感謝し、片膝を着いて森に隠れていたデスペアガンダムに乗り込みＭＳを起動させた。そ

して森から立ち上がっても未だに向こうは気付きはしなかった。

相手もそうだが此方も黒であり、また森に居るので気付き難いのだろう。そしてシュウは一気に羽を動かし空中へと浮上した。

流石に大きな音で敵ＭＳも此方に気付いたのだろう。すぐさま何機かがミサイルランチャーや機関砲等を連射してくるが

「その程度なら俺には通用しない！」と言って速度を上げながら機体を左右にローリングさせ弾を回避しておいた。フェイズシフト装甲も有るので一応当っても良いのだが、デスペアを傷付けるのも嫌なので回避したのだ。

そして急速の接近に驚き硬直していたのだ。シュウはそのまま止まらずにビームデスサイズを近くの二機のＭＳに振り下ろした。

当然硬直した状態の二機にその攻撃は避ける事は出来ることは無く、二機は斬られた所をスライドし爆発を起こした。

デスペアは爆発に巻き込まれたが、それをもろともしないように炎の中ＭＳ達を睨みつけていた。

そして今の炎のお陰でようやく此方のシルエットがハッキリしたのだろう。やはり情報を改ざんした事をこいつ等も知っているのだろう。何機かが後ろに下がり始めていた。

だが彼らは一つの点に気付いてしまったのだ。あの海上の戦いで居た白いＭＳが居ない事に。

そう今回シュウはシラユキにも手伝って貰うべきか悩んでいたのだ

が、流石に個人的な私用でも有るので一人で相手をしているのだ。
それにあの機体は真っ白なので夜では見付かり易いと言う欠点も多少残っているのだ。

「アイツはフェイズシフト装甲を持っている実弾じゃなくてビームを使え！」と隊長機らしき奴からそう言い放たれた。

そして残った１２機のカニのＭＳが６機が格闘をする為に此方に近づいて来ておりもう６機は肩や頭部のビーム砲を連射してきた。

「オイオイ、たった１機のＭＳ相手に此処までするか普通？」とシュウは疑問に成りながらもビームデスサイズを相手側にブーメランのように投げつけた。

それによって多くのＭＳ達が体勢を崩したり機体の一部を斬られる隊列を乱される等が発生した。そしてシュウは単機で戦っている為その心配が無いのだ。

「落ちろっ！」と言って再び高速でアッシュの方に接近し黒刀『絶』をコックピットに突き刺す。その時にオイルが機体に飛び散ったが、それは暗殺兵の恐怖心を仰いだ。

「ふんっ、たった一機のＭＳに苦戦するお前等ってただの雑魚にしか分類されないんだろうなぁ」と言って苦笑しながらシュウは暗殺兵達に挑発を仕掛けた。

流石に恐怖で心が安定してない為何人かが怒りを感じたのだろう。
ビームクロウを展開させ突っ込んでくるが……。

「やれやれ、しかしお前も着いて来ていたんだなシラユキ」と言い

ながらシュウは、目の前のＭＳを眺めていた。
次の瞬間白いＭＳが迫ってきていた。そしてＭＳを横からビームサーベルで貫いていた。
更に追撃とでも言うようにフィン・ファンネルが後方支援をしていたＭＳを破壊した。

「全く、着いてこなくてもこいつ等俺単機でも潰せてたんだぞ？どれだけ心配性なんだお前は」
とシュウはやれやれと思いながらもそう言い放った。

「何を言ってるんですかシュウさんは。先程までは少々苦戦してたくせに」とシラユキが皮肉を言い放っていた。

そして続いてシェルターが開く音が聞こえた。全員がシェルターに視線を向けた瞬間１機のＭＳが飛び出してきた。

すぐさまシュウは目で追ったが反応が追いつかず何とか見れたのがカニのＭＳの戦闘能力を奪った所だけ確認できた。

そのときシュウは一つの事を思ってしまった。（うわぁ、敵ＭＳが可哀想に成ってきたな。相手はロールアウトされた新型言ってもデスペア・ホープ・フリーダムの前じゃ弱い方にしか分類されないんだろうな）と思いシュウは敵に黙祷をささげてしまった。

そこからは、ただ単に一方的な戦いが始まってしまった。相手がミサイルやビーム砲を放っても叩き落される・回避される等此方は被弾せず一機また一機とどんどん数が減っていく。

そして最後の一機がデスペアの『絶』によって沈み始めた。そして改めて戦場を見回した。

そこには先程のＭＳの残骸だけが残り、あの綺麗だった海の面影が一切残ってなかった。

シュウはその光景を眺め気持ちが沈んでしまっていた。「オーブを守りたいって願ったはずなのに今の俺は、オーブを汚してるだけじゃないのか？」と思わず自分に対して毒を吐いてしまった。

そう意気消沈をしている所を「すいませんが、貴方方も降りてもらえませんか？」とキラ君から通信が入った。

「如何しますシュウさん？この機体ばらしたら不味いんじゃ？」とシラユキが敢えて危惧して来るが

「大丈夫だ。口を滑らせない限りこいつ等の動力源はキラ君達も判らない筈さ」と言ってコックピットから降り立った。

そしてヘルメットを取り改めて全員の前へと立った。

「お久しぶりです。と言ってもこんな風に再会するなんて思ってもいませんでしたよ」とシュウは言い放った

「全くだな。それよりもシュウはこの存在に何時気付いたんだ？」とバルドフェルドさんが聞いてくる

「ついさっきですよ。それで先に自分が先行してあのＭＳ達の相手をしていたんです。間に合って良かったですよ」と思わず微笑んでしまったが、此れが彼なりの演技だ。

「そうなんですか、有り難う御座います。しかし何でラクスが狙われたんでしょうか？」とキラ君ですら疑問に成っていた。

「ふぅん議長は、目障りな物を早急に消す事を決めたんだな」とシュウは考え深くそう言い放った。

「ほぅ？その言い方だと議長の何かを知っているかのような口ぶりだね」とバルドフェルドさんまで聞いてきた

「あぁ知っているさ。確かに表向きは良い政策をやってはいるが、あれはあくまで表向きの方を見たらだ。裏の方を見たら何度か議長が糸引いて厄介な奴を消しているって話がチラホラ見られたよ」とシュウは呆れてしまった

「じゃあ今回ラクスが狙われたのって」

「あぁ議長に厄介と見られてしまったんだろうね。それに今ザフトじゃラクスさんの身代わりが出てるしね」とシュウは端末を操りバルドフェルドに渡しといた。

「ふむ、確かに此れが取られたのは数日前だ。それにその時ラクスは此処に居たからな」

「此れで決定だな。あれは偽者だな、此れで議長は完全に信用できないな。ミネルバも今じゃ信用出来るかどうか甚(はなは)だ疑問に成るな」と言いつつもデスペアに向かって再び歩き始めた。

「シュウさんは此れから如何するんですか？」とキラが思わずこっちに聞いてきた。

「俺か？俺は自分が正しいと思っている道に向かって進んで行くさ。その為に新しい力を求めたんだ」と言ってデスペアに乗り込こもうとして

「俺たちは此れからミネルバを追う。予想が外れれば良いんだがあいつ等につきまとって動いてた方が何かと良い気がするしな」と言ってデスペアのコックピットを閉めた。

シラユキも置いて行かれない様急いでホープに向かい乗り込んでいた。

そしてシュウとシラユキは翼を広げ自分達の艦へと戻っていった。

自分達の戦いを始めるために…。

PHASE35（後書き）

シュウ「今回はどうも短かったな」

抹茶「だってアニメじゃキラ君が決意してアッシュを瞬殺してるんだよ?話だって少なく成るに決まってるじゃん」

シラユキ「だったらシュウさんがリミッター解除すれば瞬殺出来たんじゃ?」

抹茶「数ある戦闘を描写は下手だからと言って秒殺したら面白みとか無くなるだろ?」

シュウ「まぁ、作者の方が一理有るのか?」

シラユキ「多分そうでしょうね。そう言えば今回は多くの感想を貰ったようですね?」

抹茶「はい、ぶれぃぶパパさん・三ノ丸さん・マサトさん・やさいさん・みりんさん・テクノロジーさんご感想有り難う御座いました」

シュウ「今回は6人にも感想を貰ったのか…何時もより多いな」

抹茶「そうですね。何処が悪いか言ってもらえれば次に繋げれるので実に助かってますよ」

シラユキ「作者にも反省って言葉あるんですね」

抹茶「何気に一番シラユキが酷いような気がしてきた。と言うか俺

を苛めるの楽しんでないか！？」

シュウ「気のせいだと思うぞ……多分」

抹茶「オイッ！パートナーがさじを投げるな！」

シラユキ「さて、そろそろネタが無くなりそうですし、後書きも閉めますか」

抹茶「結構シラユキって場の空気を掻き回すの得意なのかな？」

シュウ「もしかしたら、そうかも知れんな」

シラユキ「何か言いました？」

抹茶・シュウ「いえ、何もありません！」

抹茶・シュウ・シラユキ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ３６（前書き）

抹茶「はい、今回は多少速いですが、ＰＨＡＳＥ３６を出させて頂きます」

シュウ「速く投稿するのは良いが混乱する読者が続出するんじゃないのか？」

シラユキ「そうですね。何時もは４日おきに投稿するはずなのにこんなに早いなんて予想できる人居るんですかね？」

抹茶「あーそれに付いては申し訳ないと言うしか有りませんね。実は言うと自分の方がさ来週からテスト期間に入るのでその間に投稿できないと言う事が有り得るので今回早めに投稿させていただきました」

シュウ「あぁそう言えば昨日あたりに活動報告でそんなの書いてた気がするな」

シラユキ「読者が如何思うかは判りませんが、もしかしたら快く思わない人も出るかも知れませんね」

抹茶「そうなるのはちょっと怖いですね。何とかご了承頂ければ幸いだと思いますよ」

シュウ「読者の皆様方も頼むから作者を許して貰えるようお願いする」

シラユキ「そうですね。作者の方も色々と努力してるらしいので見

逃して欲しい者です」

抹茶「二人とも弁解有り難う。さてそろそろ本編入ろうか」

抹茶・シラユキ・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE36

「シュウさんオーブでカガリさんが…」と言ってきた。

「あぁ言わなくて良いフリーダムとアークエンジェルが掻っ攫ったんだろ?」とシュウは判り切った様に言った

そして映像にはカガリがフリーダムに乗せられて飛び去っていくのが見えていた。

「それよりも今は、あいつ等が如何動くかが大事だろ?」と言って目の前に映し出されていた映像を眺めていた。
彼らは今カーペンタリア基地から出てきたミネルバの後をゆっくり追ってきていたのだ。流石に海中にボズゴロフ級潜水艦が2?先に航行しているので、自作の無人偵察機を飛ばしていたのだ。

そしてミネルバが戦闘ステータスへと移行していたので、自分たちも出るように立ち上がる。

「えっ?直ぐに出ちゃうんですか?もう少し休憩できると思ったのになぁ」と愚痴を良いつつもシラユキも立ち上がった

「面倒だったら出なくても大丈夫だぞ?俺としては出撃して怪我をするシラユキなんて見たくないからな」とシュウは特に意識せずにそう言ってしまった。

「シュウさん…いえ、やる気出ました!やります!」と言ってやる気が満々に成っていた。

シュウは何でシラユキがこんなにも元気が出たのか謎に成りつつも自分の愛機に向かって歩き始めた。

そして自分達の機体の準備が整ったので、二人はジャンク艦を出てすぐさま海中から空中へと浮上した。そのとき大きく水柱を立てたので何機かが此方を確認し始めた。

「さぁ戦争介入を始めよう」とシュウは呟きながらビームデスサイズを展開した。

だが此方の戦闘を邪魔するかのようにミネルバから連絡が入ってきた。最初は無視しても大丈夫だろうと思っていたシュウだが、何時までも鳴り響くので苛ついて通信に応じた。

「こちら強襲揚陸艇ミネルバ艦長　タリア・グラディスです。不明機(アンノウン)其方の目的を言いなさい」と話しかけてくるが

「此方から話す事なんて一切無い。ただ邪魔をするなら先にそっちを落とすだけだ」と言って通信をすぐさま切った

相手からすればシュウの言葉は半分冗談にも感じられるだろうが、彼が本気を出せば空母や戦艦を落とすことは容易く出来るのだ。

そしてシュウは戦闘を邪魔をされて苛ついていたので、さっきから近くでビームライフルを連射してくるウィンダムの一機をビームサイズで切り裂いた。

流石にこんなにも簡単に落とされるとは、初めて見た敵から見たら予想外だったのだろう。すぐさま此方を落とそうと考えていそうな、赤紫のウィンダムが突撃してくる。

さすがネオ相手では、油断できないと判断したシュウは「シラユキ！こっちに斬艦刀貸してくれ！」と言いつつもビームサイスの持ち手でサーベルを防いでいた。

「もう、そんなことしなくても『絶』有るんですから勝てるでしょうが！それに今私斬艦刀を使ってます！」と言っているのでホープの位置を確認すると、確かに斬艦刀を振り回していた。

それを見たシュウはしぶしぶ借りるのを諦め目の前の戦闘を再び集中し始めた。そしてお互いに一向に下がろうとしないのでシュウはウィンダムに左足から膝蹴りを喰らわせようとするが、それを読んでいた様に一度後ろに下がっていったが、シュウはそのまま突っ込みショルダータックルを食らわせビームサーベルを一本奪取した。

流石に奪ったのが相手は嫌だったのか「お前ヒトのサーベル奪ってるんじゃねぇよ！」ときれられた

「うっせぇーよ！こっちだってサーベル持ってないんだから一本くらいケチケチせず寄越せよ！」と逆ギレを起こしてしまった

そして会話が終わったように再びサーベルが此方に向かってくるがシュウは奪ったサーベルで防御をし『絶』を引き抜いた。

そしてそのまま蹴りを着ける様に「リミッター解除1分間」と言って振り下ろそうとしていたウィンダムの目の前から消失した。

次の瞬間空振りを起こしたウィンダムは大きく体勢を崩し、シュウはその隙を逃さないように左足からの膝蹴りを頭部のカメラへと喰らわせる。

反撃とでも言うようにサーベルを振ってくるが既にデスペアは移動しており次はウィンダムの後方に現れ両腕を斬り飛ばした。そして止めと言うように『絶』でウィンダムの頭部を切り裂く。

「ふん、あっけないな」と言って興味を失った用に再びその場から離れようとしたが……。

「よくもネオを！」とガイアのパイロットが叫びながら体当りを仕掛けてくる。

「なっ！？」油断していたシュウはその突撃を避けきれず直撃を受けてしまった。すぐさまシラユキが救援へと入ろうとするがカオスが移動を邪魔するかのように、此方に来れないようだった。

そしてロックオンされたアラートが機体から鳴り響いてきた。

（マズイ！）と思って機体を起こそうとしてもガイアがＭＡ形態で此方を抑えているので、全く持って動けないのだ。

「クソッ！此れだけは使いたくなかったが、全パーツ解放！」と言って機体が軋む音が聞こえてくるが自分の命に比べれば安い物だった。そしてパーツ解放をしたと同時にデスペアの機体の色が大きく変化した。

今まで黒で統一されていたデスペアだが白へと変わりガイアを蹴り飛ばした。そしてやられたお返しとでも言うように手でガイアの頭部を掴み何度も岸壁へと叩き付けた。

そして戦う気も無さそうなのに未だにデスペアはマシンガンとミサ

イルをガイアに撃ちを痛め付けていたのだ。そう周りから見たら残虐な行為かもしれないが、

シュウからしたら「自分が手加減していなかったらもう死んでいる。自分の力量を弁えろ」とかつての奢っていた自分と姿を重ねボッコボコにしていたのだ。

そしてガイアはボロボロになった装甲を引き摺りながらも自分の母艦へと逃げ出すように帰っていた。

「流石に遣り過ぎたんじゃないんですかシュウさん？」とシラユキが流石に相手のパイロットに同情しているが

「いや、あの程度痛め付けていたら自分から引き際も判って来るんだよ」と言ってガイアの飛び去った方向を見つめながらも、戦場を見回したが未だにウィンダムやらカオス等が残っていた。

シュウが思うに先程の指揮官は帰ってはしまったが命令は続行しているのだろうと判断してしまった。

「命知らず共が…」と愚痴を呟きながら戦場を改めて見回した。そして気づいた時にはザク二機が海中へと進んでいた事が判ってしまった。

「何で、ザクを海中へ進ませるんだよ！」とグラディス艦長の判断に疑問を覚えながらもシュウも海中へと突入して行った。

そして中の光景を見た瞬間に直ぐに状況が理解する事が出来てしまった。そうアビスが水中で一方的な狩りを行っているのだ。

「確かに増援は必要だとは思うが此れじゃあ増援と言うよりただの的だな」とシュウは思いつつもアビスへと突っ込んで入った。

そして先程までザクとやり合っていたカオスは此方に興味を持つように魚雷を此方に撃ち放ってくるが、シュウはすぐさま小型サブマシンガンを引き抜き撃ち落していく。

だが気づいた時にはアビスは目の前に存在しなかった。

「なっ!?……アビス何処入ったんだ?」とシュウは魚雷の泡でアビスを見失った。

悔しいが一度動きを止めレーダーを確認した次の瞬間シュウは背中に嫌な物が走るのを感じすぐさまその場から避けた。

次の瞬間アビスがMA形態で回転しながら横を通り過ぎていった。あの場に居たらコックピットを貫かれ自分の体はミンチに成っていても可笑しく無かっただろう。

追撃するためにミサイルランチャーとビームライフルを連射するが、再びMS形態に戻りビームランスで薙ぎ払い叩き落している。

「クッ!」とシュウは戦場で久々に冷や汗を掻いてしまった。デスペアも一応だが水中でも戦闘は出来る。

だが機体の水中適正がBランクなので反応する前に回避しなければ直撃等も有りえるのだ。

(如何する?如何すれば良いんだ!)と焦りつつも二度目の突進が来る。それを辛くも避けたが後ろから魚雷が迫ってくる。

シュウはそれを気付いていながらも直撃を受けてしまった。

「ガハッ」後ろ羽は対ビーム・コーティングは掛かっているがＰＳ装甲を着ける事が出来なかったのだ。

話によると対ビーム・コーティングとＰＳ装甲が何故かお互いに反発し上手く機能しないとなりシュウは渋々羽だけを対ビーム・コーティングだけ掛けて居たのだ。

そして今回は魚雷は実弾なので後ろ羽は直撃を受けるが付け根部分はＰＳ装甲を発生しているので?ぎ取られずに済んだが、ホントに不味くなってしまった。

「さっきのがパターン化したら確実に死ぬな…今回ばっかりは本当に運に成るかもな」とある行動に対しての決心を決めていた。

そしてシュウは機体の構えを解いて無抵抗の証のように腕を解除しアビスを待った。

～アウルＳＩＤＥ～

黒いガンダムが着てからザクに興味が亡くなった俺は黒いガンダムを落とすことに専念した。

未だにザク達がバズーカを連射してくるが、当るはずも無くただ横を通り過ぎる事しかない。

そして先程のガンダムはＰＳ装甲は有るし、頑丈だしパイロットは良い腕だしと色々と腹が立つ要素が詰まってる。

「それにしてもアイツ　こっちの得意な戦場で戦ってくるって馬鹿なのか？」とアウルは敵パイロットがアホだと判断した。

あの機体はどう見ても空中用だ。主に羽を見たら誰だってそう思える。先程の魚雷は直撃してもう機体もボロボロの筈だ。

「そろそろキツイだろ？止め刺してやるよ！」と言って再びアビスを回転させながらも黒いＭＳに止めを刺そうとする…。

そうなる筈だったが可笑しな事が起きてしまった。黒いＭＳはビームランスの槍の刃の部分を掴んでいた。

当然手には、傷が着いているがそのまま手に力が入っており槍がミシミシと嫌な音をたて次の瞬間槍が折れてしまった。そして自分は唖然として逃げようとそのまま真っ直ぐ自分の母艦へと走り出すつもりだったがＭＡ形態の時に後ろに出ている足を掴んでた。そのままサーベルを展開してきており左肩の武装を縦に切り裂かれた。

そのまま持ってるのも危険なので左肩のパーツをパージしＭＳ形態へと戻り黒いＭＳを睨み付けた。（まさか此処まで厄介なＭＳが敵に回るとはね…。）とアウルは思いつつも敵を倒す方法を考えていた。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「ふぅ…まさか上手くいくとはね」とシュウは先程の攻撃を防ぐ方歩を画策していたが、思いついたのが（当るのが危険なら槍事態を壊してしまえば良いんだ）と言う発想に思い至ったのだ。

それで先程の突撃を機体を少し傾けて槍を突き刺して動きを止めようとも考えたのだが、それでは腕をえぐられる危険性が有るので試

しに腕の部分だけをリミッター解除にした状態で待ち受けてみた。

当然試みた行動は成功し、腕だけ高速で動く槍を掴んだ。その後リミッター解除を止めパーツ全解放を腕にのみした所、また此れも成功し槍を折りアビスの足を掴んでそのまま左肩をサーベルの最高出力で無理やり切り裂いたと言う流れだ。

「もし、あれが成功してなかったら即死だったのは否めないな。…今度から此方の得意な所からひたすらボコるとするか」と今回戦いを遊んだ事を反省したシュウだった。

「それに今の俺は絶対に死ねない理由も有るんだしな」とシュウは一人呟いていた。あの夜に一人にしないと誓っておきながらその誓いを裏切るのは不味い事だとシュウも理解していた。

未だに目の前のアビスは此方に警戒しているが、既に此方も相手と戦うつもりは無いのだが先程の肩を切り裂いた事で未だに敵対心を持っていると勘違いされても困るのだ。

ただこのままこの海中に居たとしても再び攻撃される危険性も充分有るのでシュウは羽のスラスターを動かし海中から空中へと飛び出した。

それを合図にしたようにアビスは撤退しておりカオスもアスランのセイバーシラユキのホープによってボロボロにされていた。

見るからに一方的なリンチが有ったにしか思えない。カオスの方は何故なら右腕は吹き飛んでおり、左腕はヒジから先は無い、ポッドも1つは破壊され、両足とスラスターが残っているのが奇跡としか思えなかった。

普段は敵を容赦なく狩るシュウだが、今回ばっかりはカオスの方が不憫で仕方が無かった。そして遠くに空母が有ったのだろう信号弾が三つ放たれカオスが撤退していった。

きっとあれは撤退の意味を示す信号弾だったのだろう。シュウもシラユキも余り追撃は仕掛けずに放っといた。そしてシュウはインパルスの姿がおらずふと周りを確認した。

そのときにインパルスが一箇所にずっと留まっているので近くで確認した瞬間にシュウは愕然としてしまった。

そう彼は、既に戦意を失った連合兵に未だに攻撃を仕掛けていた。それに気付いたシュウはすぐさまインパルスに体当りし海の浅瀬まで押し飛ばした。

「クッソ!何すんだよお前はっ!」と怒ってくるが、シュウも同時に怒っていた。

「何をしているのはどっちだ!戦意の無い兵士を殺して楽しいか!」とぶち切れた。

「何!?何も見てない奴がそんな事言う資格有るのかよ!」と言ってくるが

「あぁ、あれだけ見れば直ぐに判るさ。地元住民が銃殺されてそれの敵討ちのように力の無い連合兵の抹殺か?戦争はヒーローごっこじゃねぇんだよ!」と言ってサーベルを展開しインパルスを攻撃する。

「なっ！あんたは一体何なんだよ！」と言ってインパルスもサーベルを展開し鍔迫り合いが起きる。

「シン！今助けるぞ！」とアスランが援護の為に此方に腰のビーム砲で狙おうとするが

ホープが間に入り「彼はやらせませんよ。今から貴方のお仲間が傷つくのをゆっくりと見ておいて下さいよ」と言いながらパンツァーシールドを構えてビーム砲を曲げていく。

「そいつは任せたよ。俺はコイツをやるからさ」とお互いの名前を言わずにどっちをやるかだけを会話しておいた。

そうして話しているうちにインパルスがサーベルで突いてきた。端から見たら不意打ちだがシュウからすれば直線的な攻撃なのでそのまま機体を半身にしインパルスの腕を横切らせた瞬間にその腕を掴み脚を払った。

そのまま倒れた所をミサイルランチャー撃ちこみ再び後ろに下がった。

「何なんだよアンタは！助けたり攻撃したりいい加減にしろよ！」と怒りながらもライフルを連射してくるがパンツァーシールドで防いでいた。

「別に俺はそちらの味方をするなど一言も言った覚えは無い。そっちから勘違いを起こしているの間違いだろう」とシュウはシンの勘違いを馬鹿にしあざ笑った。

「なっ！こんの屁理屈がぁ！」と完全に怒りサーベルで斬りかかっ

てくるがシュウも簡単にやられる事はせずサーベルを出し対抗し始めた。

「それに何なんだよ、何故あの人たちを助けて俺が攻撃されなきゃならないんだ！」と何で攻撃されたのかも判らないようだった。

「お前はアホなのか？あの時に助けたのをお前は正しいと思ったのかも知れないが、この後どうなるのか予測した事は有るのか？」とシュウは彼らの未来を考えても助けた事が正解に成るのか謎だった。

「もしあのまま助けずに見逃したままで居たらあの人達は厳しい労働があったとしても寝食はマトモに出来ていた筈だ。それが今は如何だ？寝食をマトモに出来ると思っているのか？それに再び彼らが徴兵されると言う可能性は捨てきれない」とシュウは今後の事を考えると地元住民が死ぬ危険性も有ったのだ。

「だからって何だって言うんだ！あのまま放っておけとでも言うのか、住民が殺されたんだぞ！？」とシンが正しい事を言っているが

「別に助けるなとは、言ってない　お前はその場その場で自分が正しいと思った事をしているかも知れないがもっと先のことも考えて動けといっているんだ戦場はお前の遊び場じゃないんだよ！」

「なっ！遊び場って俺はいつも真剣だ！」と反論するが「だったら何故自分の持ってる力に気付かない！自分だけで勝手な判断をするな！力を持つ物ならその力を自覚しろ！」とシュウはシンの言う事を一蹴して怒鳴った。

流石のシンも言い返せずに攻撃を仕掛けてくるので「言葉で負けたら次は暴力で黙らせるか…野蛮だな。恥を知って欲しいもんだ……

リミッター解除1分30秒」と呟き

シュウはサーベルとビームサイスを展開してインパルスの四肢を切り落とした。

「やれやれ、パイロットの腕がこんなんじゃ隊長も困るもんだな」と呆れて言い放っていた。

「シン！よくもシンを！」と言ってセイバーが突っ込んでくるが「だからあの人の邪魔はさせないって言ってるでしょう？」と言ってホープが斬艦刀でセイバーの両足を切り裂いていた。

「戦場で冷静さを失うなんて貴方らしくないですね。ザフトに復帰したアスラン・ザラさん？」とシラユキが嫌味ったらしくそう言い放っていた。

「インパルスのパイロット覚えておけ、お前の場合力をただ使うんじゃなく何の為にその力を振るのか考えろ」と言ってシュウはデスペアを浮上させジャンク艦の有る方向へと機体を走らせた

「待て！」と後ろから叫び声が聞こえているが、今のミネルバのクルー達に興味を失った用にシュウとシラユキはその場を後にした。

ＰＨＡＳＥ３６（後書き）

抹茶「さて、今回は此処までとさせて頂きます」

シュウ「少し疑問があるんだが…」

抹茶「はい、何でしょうか？」

シュウ「何で海中戦でリミッター解除使わなかったんだ？」

シラユキ「ですよね。それを使ったらもっと楽に勝てたはずなのに」

抹茶「あぁそれはですね。海中での水の抵抗率も含めると一般の機体の全力で走った時とあんまし変わらない気がするので全体のリミッター解除は使いませんでした」

シュウ「でも腕の方のリミッターは使ったよな？」

シラユキ「これに付いても説明宜しくお願いします」

抹茶「此れはだな、力を一箇所に集めてるから高速で動けるんだ。普段のリミッター解除は力を分散させて全体に行き渡らせてるけど一箇所に集めると完全にその部分だけ目で追いつけない速度で動かす事が出来るんだよ」

シュウ「成る程な。後一つは主はシンがキライだろう？」

抹茶「えぇ大キライです。ウズミがどれだけ悩んで選んだ選択肢かも全然判って無いしシスコンだし、ステラ死んだらルナマリアに移

り変わるわで凄く苦手です」

シラユキ「でも最後のってキラさんも同じですよね？」

抹茶「キラは良いんだよ！俺が個人的に好きだからスルー」

シュウ「この作者無茶苦茶だ。まぁ良いか。それよりも今回も感想来たんだろ？」

抹茶「えぇマサトさんご感想有り難う御座います」

シラユキ「さて後書きも此処までですね」

シラユキ・抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ３７（前書き）

抹茶「はいフェイズ３７を完成させました」

シュウ「そうか、テスト大丈夫なのか？」

シラユキ「落としても私達のせいにしないで下さいよ？」

抹茶「大丈夫です。そんな酷い事は絶対にする気は無いです」

シュウ「そうか、今回はどんな話に成るんだ？」

抹茶「ああ、それならシュウ達の持ってるＭＳ四機でガルナハン基地攻略です」

シラユキ「ついに私達もチートパイロットに属しちゃうんですね」

抹茶「いやいや、前大戦生き残れた奴は殆どエースパイロットの要素が有るからな？」

シュウ「そうなんだな。じゃあそろそろ本編に入るか」

シュウ・抹茶・シラユキ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE37

「しかしアンタも余程物好きだねぇ？こんな所にまで豆を買いに来るなんてさ」と豆を売ってくれたおっちゃんがそういった。

「いや、俺はコーヒー好きだからさ、それに俺は今の情勢には興味は無いさ」とシュウはコーヒー豆の香りを楽しんでいた。

「ハハッ、アンタみたいな旅人だったら、こんな重圧を受けなくて済むんだけどな」とおっちゃんは苦笑しながらそう言っていた。

「ん？如何言うことだ。まるで誰かから重圧受けてるような言い方だね？」とシュウはおっちゃんの悩みが疑問に成った。

「今このガルナハンは連合の情勢下だ。前なんかザフトが攻めて来た時にこっちも暴動を起こしたんだけどザフトは負けて暴動を起こしていた人間は全員処罰されたよ」と悲しい顔をしていた

「そうなのか、連合の人間は全く持って酷い人が居るもんだな」とシュウは人事の言うように言っておいた

「そうだな、兄ちゃんも死にたくなかったらさっさとこの町を離れたほうが良いぞ。たまに連合が…」と話している間に

バン！という入り口のドアが蹴破られる音が聞こえた。

「おう主人　見回りだ。何か隠し事してねぇだろうな？」と2人ほど連合の兵士が入ってくる

「い…いえ、何もしておりません。それよりもコーヒーでも如何ですか？」とおずおずとコーヒーを出していた。

「ん？何だお前此処の町の人間じゃないな？」ともう一人が聞いてくる

「そうですね。自分は旅をやってるんです。それでたまたまこの街に辿り着いただけです」とシュウは嘘をついておく

「そうか、まぁ良い。ゆっくりしていけよ」とニヤニヤと嫌味ったらしくそう言い放ってくる。

（ふん、どうせ逃げたら撃ち殺すとかそう言う事考えてるんだろうが）とシュウは内心毒を吐いていた

「取り敢えず以前のように他の奴と同様に死にたくなかったら大人しくしとけよ？」と最後にキツイ一言だけ言って店から出て行った。

「やれやれ、あいつ等が来るたんびに俺らは気疲れするよ」とおっちゃんは嫌がっているようだ

「そうか、そろそろこの重圧から解き放たれたいかい？」とシュウは確認を取った。

「そうだね。どうせなら連合にも復讐をしたいもんだよ、でもアンタは何か出来るのかい？」と聞いてきた

「出来るさ……アイスピック」と最後に呟いて右手の人差し指で机を三回叩いた。

「!?…アンタだったのか先程のメールは嘘だと思っていたんだけどな」とおっちゃんは驚愕していたがすぐさま表情が真剣になっていた。

「あぁ、流石に連合の横暴は許せないが相手側の情報が判らない限り対策は一切練れないからな」と言って以前頼んでおいた情報の提示を頼んだ

「判った、こっちまで付いて来い」と言って店を閉店にし奥の部屋を指差していた。

そうして中に入って基地の形・武装・ＭＳ・戦術・地形等を書かれた紙を机の上へと纏めて置かれた。シュウはそれを確認する為に手に取り頭に暗記しようと思ったが

「別に暗記はしなくて良いぞ?データを渡してやるからさ」と言ってデータの吸出しが済んでいた。そして此方にＨＤを渡された。

「悪いな、手伝ってもらってさ。でも安心してくれこの作戦は、絶対に成功させる」とシュウは改めて決意を決めていた。

「あぁ、頼んだぞ。何人かはザフトにデータを譲渡する事を決めていたが正直以前失敗してから信用出来ない奴が多く居るんだ」とおっちゃんは心の内を話していた

「それに比べてあんたは信用できる。データを転送させられた時は目を疑っちまうが、あの実力を見ちまえばアンタの方に渡したくなる」とおっちゃんはデータを改めて映し出していた。

そうシュウが渡したデータはデスペア・ホープの機体性能・武器・

戦闘の映像等を見せておいた。その中で全員が興味を出したのがツインバスターライフルだ。

あれは事実シュミレーターでもローエングリンゲートのシェルターを貫く予想が出て来てしまったので有る意味2機でガルナハン基地は攻略可能な事に成るのだ。

だが以前の戦闘で油断は、もうしないと決めて居たのだ。故に今回出す機体はジャンク艦に有る物全てを出すつもりで居るのだ。

「それでそっちも言ってた物を用意しておいてくれたんだよな?」と改めて確認を取ってくる。

「ああ当然に決まってるだろ。何処に持って来れば良いんだ?手持ちだとばれるぞ?」とシュウは改めてバギーを何処に置くか聞いておいた。

「裏の駐車場を使え、其処ならばれる危険性は無い」と言ったのでシュウは再び店外に出てバギーを店の裏に停めた。

そして裏のトランクを開けブルーシートを取り除いた。そこには大量の銃器が乱雑に置かれていた。

そう今回シュウ達が攻めている間に兵士か居ない基地をレジスタンスにも協力してもらう事にしたのだ。

多少の犠牲は目を瞑らないといけない事をシュウは悔しくも思いつつも町を開放されるなら必要な犠牲と割り切らなければ駄目なのだ。

そして今回シュウが出来た事はＭＳを動かすことと強力な銃器を用意する事だけなのだ。

そして今回持ってきた銃器はＡＫ－４７・ＵＳＰ．４５・Ｍｎｉ－Ｕｚｉ・Ｗ２０００・ＲＰＧ－７の４つの銃器を用意しておいたのだ。正直裏の武器商人を経由して買ったせいで金は多く飛んだが、銃器は最高の物を用意したのだから死ぬ人間も少なくて済むはずだろう。

「良くこんなにも用意できたな。予想より多いから驚きだな」とおっちゃんも驚いていた。

「そんな事は如何でも良いそちらが用意した町人に殆ど行き渡るのか？」とシュウは表情を堅くしてそう聞いといた。

「あぁ此れだけ有れば一人二つ位は持てるだろう。しかし此れだけの物を良いのか？」

「良いさ、俺は救うって言ってるのに結局は民間人にも戦う事を頼んでいる。それで犠牲が出るんだから俺は酷い人間さ」

「兄ちゃんが気にする事じゃないさ、これは俺らの総意さ。この町が守れるなら少しの犠牲位は我慢すれば良いんだよ」とおっちゃんは気にする事無く笑っていた。

「判った。ただ死なないでくれ、こっちも直ぐに終わらせてそっちに行くからさ」とシュウはバギーに飛び乗りエンジンを掛けた。

「おう、兄ちゃんも頑張れよ」お互いに会話を済ませてシュウは指定した位置に向かってバギーを走らせた。

そこにはキマイラが存在し、キマイラに乗り移りバギーを回収して

ジャンク艦へと飛び出した。

「おかえりなさいシュウさん。こっちは既に準備を終わらせましたよ」とシラユキも今回はどれだけ重要な仕事か判っているのか既に表情は真剣でいた。

「あぁ助かったよ。デスペアにはツインバスターライフル　ホープには6連装ガトリングを用意してくれて助かったよ」とシュウはシラユキに感謝し一つのプログラムを用意した。

「シュウさんそれなんですか?今まで見た事有りませんけど?」とシラユキもこのプログラムは判らないようだ。

「今までのホープとデスペアの戦闘データだ。あと以前俺らが戦った事覚えているか?」とシラユキに聞いてみた

「えぇ、以前ホープ対デスペアとキマイラ対エンジェルの本気の対決しましたけど其れがどうかしたんですか?」とシラユキは此れだけ話しても未だに理解できてないようだ

「俺らの本気の状態でキマイラとエンジェルを高性能ＡＩに積むんだ。つまり俺らの行動や考えてる攻撃方法を全く同じ様に考えて何十万とも言えるパターンを生み出して動くしリミッター解除もパイロットが乗ってないからある意味俺らより厄介かも知れん」とシュウ自体も敵に回った時落せるかどうか疑問に成ってしまった。

「そうですか、ある意味エゲツナイですね。それよりも敵が本当に可哀想に思えてきました。今まで難攻不落とも言われてたガルナハン基地がたった4機のＭＳに落ちるんですから」とシラユキも苦笑しながらもそう言っている。

「今回は手を抜かない。邪魔をするならザフトですら容赦はしない」と言いながらシュウはデスペアに乗り込み始めた。

そうして４機のＭＳが空中へと飛び出していった。そしてこの後連合にとっては、忘れられない悪夢としてこの戦いは、語られる事にも成ってしまった。

「シュウさん連合のレーダーから捕らわれない場所にまで上昇しました」とシラユキが通信で教えられた。

「判った。シラユキには悪いが囮に成ってくれるか？一応護衛の為にキマイラとエンジェルを僚機にするから確実に安全だが」とシュウはシラユキにそう頼んだ

「判りました。ツインバスターライフルのチャージに感ずかれるのはマズイですからね。それに二機が僚機に着くんでしたら私だけでも蹴りが着きそうですけどね」と苦笑しつつも地上に向かって降下して行った。

そして相手方も此方の存在に要約気がついたのかけたたましくサイレンを鳴らしＭＳ隊を発進させて行く。数分後自分達の周りにＭＳが多く揃っていたがシラユキはそんな事すら眼中には無かった。

「あの人を…あの人をよくも悲しませてくれましたね？貴方達全員

は殺します」とシラユキは久々にマジで怒っていた。

そうシュウが帰って来た時にシュウは無理して笑っていたが、ホントは凄く辛そうだった。それこそ直ぐに壊れてしまいそうな位悲しそうな顔を浮かべていた。シラユキはその痛みを分かち合う事が出来ずシュウ一人だけが持っていた事にショックだったのだ。

故に彼女はその様な表情を浮かべる原因である連合にホントの殺意を覚えてしまった。そう彼には悲しい顔など似合わない、常に笑っていて欲しいと彼女は願っているのだ。

だが向こうは此方を完全になめきっているのか、ウィンダム２０機程度しか存在しなかった。大半の人が見れば驚愕的な数だがシュウとシラユキ多分だがアスランとキラにとっては肩慣らし程度の数でしかないだろう。

（後ろの二機を見ても此方の正体に気付かないと言う事は指揮官は余程の馬鹿ですかね？）とシラユキはついつい思ってしまった。

既に後ろの二機の姿を隠す事無く機体を現しているので知っている人は知っているのだが知らない人は余程知らないらしい。

「さぁ、始めましょう。一方的な殺戮劇（さつりくげき）を」とシラユキは呟いてウィンダムたちへと襲い掛かっていった。

～アスラン・ザラＳＩＤＥ～

俺達はガルナハン基地を攻める為に現地レジスタンスの協力者ミス・コニールに廃棄坑道の地図を貰ってシンに通るよう指示をしようと思って居たのだが……。

「た・・・大変です艦長！ガルナハン基地が攻撃されています！」
とバートがオペレーションルームへと駆け込んできていた。

その瞬間オペレーションルームがざわめきが起きてしまった。

「何ですって？何処の部隊が戦っているの？」とグラディス艦長も
その軍の正気を疑っていたのだろう。

（何でこんな時に？ローエングリンゲートと大型ＭＡが存在しているんだぞ死にに行くような物じゃないのか？）とアスランすら疑問に成っていたが

「そ・・・それが何処の軍でも無いんです」とバートが恐る恐る口を開いた。

「じゃあ何処があの拠点に攻撃したって言うんだ！あそこは難攻不落だぞ！あれを落すんだったら英雄が何人も必要になるだろうが！」
とアーサーまでもがそう言うが

「それが、戦ってる機体が三機で、その三機の内の二機がキマイラとエンジェルのデータを表しているんです」

「何ですって？彼等二人がガルナハン基地を落そうって言うの？無謀すぎるわ」とグラディス艦長は馬鹿にしていたが

「バートさんもう一機は何か確認できましたか？」とアスランは悪い予感が的中しないようにそう聞いたが

「それが、以前此方に対して敵対行動をしていた、白いＭＳまで動いているんです」と悪い予感が見事に的中してしまった。

（まさかだと思うがあの二機は、シラユキとシュウの専用機なのか？だったら説得して話せば何とか味方に着けれるか？）とアスランは色々とあの二人を味方に着ける方法を画策していた。

「艦長、此方で先に偵察を行ってきます」とアスランは珍しく一人で行動を開始しようと決めた。

「判った。仮にも貴方もフェイスの一員だから私には停める権利も無いわ」とグラディス艦長からも許可が下りた。

そしてアスランはすぐさまハンガーへと向かい自分の愛機セイバーに乗り込み発進した。

すぐさま現状を確認する為にＭＡ形態で戦場に向かったが、余りに悲惨な光景が目に映った。

そう既に同等の戦い等をやっていると言う生温い話では済んでいなかった。今やっているのは動きは見えないが時々軽く減速しているキマイラとエンジェルそして白いＭＳが一方的な殺戮を行っているだけでしかなかった。

それ故に恐ろしさから一瞬でも動きを止めた瞬間二度と生きては帰れないだろう。そして今ほんの数秒位しか止まっていなかったウィンダムがエンジェルのガンソードによってコックピットを貫かれた。

アスランも一瞬で理解した。今は気付かれては居ないが此処に居るのは危険だと…。仮にも彼もエースパイロットだが、あの三機には気付かれたら落とされるだろう。

「あれ相手にジャスティスでも勝てるか疑問に成ってくるな…」とアスランは一抹の不安を覚えながらもその場を後にした。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「弱い…弱すぎます！この程度を今まで落とせなかったんですかザフト軍は！？」とシラユキはザフト軍の弱さに呆れ返ってしまった。

今までの戦闘は余り本気を出さず3～6割程度の力しかしてないのに本気を出したら此処までだ。正直期待外れも良い所だったが、機体のアラートが鳴り始めた。

「ようやくチャージが終わったんですね。全機この場から避難です！」とＡＩに命令を下してシラユキ・エンジェル・キマイラは戦闘領域から離れた。

次の瞬間一筋のビーム砲がガルナハン基地を撃ち貫いた。そう彼が狙ったのは、連合の自身の塊であったローエングリンゲートだった。

そしてシュウの予測通りツインバスターライフルはシェルターを貫きローエングリンへと直撃した。

直後シュウの乗るデスペアは此方に興味等無いようにこの戦闘領域から離れ町の有る方向へ機体を飛ばせていた。

シラユキはそれを止める事無くただ見送る事だけおこなって後の始末を開始する事にした。そう最後の連合の抵抗とでも言うように、まだ残していたウィンダム十機ゲルズゲー一機が戦場へと飛び出してきた。

「さてと、正直ザフトの方にプレゼントしてあげても良いんですが、このＭＳ達が町人を襲ったら危ないので此処で落としておきますか」と言ってビームサーベルを二本抜き集団へと襲い掛かった。

当然ウィンダム達も反撃しようとそれぞれ得物を出してくる

「行きなさいファンネル！」と此れも二個展開する事が可能になっていた。そして援護射撃のキマイラからの７６ｍｍ重突撃銃の連射が来る。

だが此れはあくまで牽制用でしかなく当てる気等一切無いのだ。それでも判断できないパイロット達は回避を専念しその間にエンジェルとホープが確実に一機ずつ切り落としていく。

そして一機のウィンダムがキマイラにサーベルで切りかかろうとするがファンネルが攻撃しようとする腕を貫きもう一つのファンネルがコックピットを貫いた。敢えてシラユキは自分の方にファンネルは置かずにキマイラの方に置いたのだ。キマイラには援護を優先して貰いたいので邪魔な物は此方で対処しているのだ。

「残りはゲルズゲーを含めてもたったの八機ですか。シュウさんに置いて行かれない様此処で一気に終わらせますか…リミッター解除３分」と言って残りのＭＳに迫って行った。

その移動中敵パイロットでもギリギリ確認できるのはサーベルが発しているピンク色の光だけだろう。

そして気づいた時には既に一機のウィンダムがサーベルによってコックピットが貫かれていた。それを落とす為に他の機体がライフルで集中砲火を浴びせようとするが、それすらも意味を成さないのか、

直撃を受けていたのは壊されたウィンダムだけしかおらず既に白い機体は、もう一機を真っ二つにしていた。

全員が白い機体に集中していた時に、また2機のウィンダムが壊されていた。そうキマイラとエンジェルがお互いの得物を持って叩き落して居たのだ。

しかもその二機に背後を取られ正面には白い機体が存在している。まさに前門の虎後門の狼の状態だ。

あまりの部隊の壊滅速度に残ったMSのパイロット達は動揺を隠せず一人また一人と抵抗も空しく落とされていった。

故に気づいた時には、ゲルズゲー一機だけがポツンと残り司令部は、レジスタンスによって壊滅状態に追い込まれていた。

「やれやれ、やはりこの程度でしたか、ザフトも所詮口だけですかね?」とシラユキもザフトの対応の遅さには呆れを隠しきれて居なかった。

(どうせ、この戦いも一部改ざんされてザフトのMSがやっていると言う事に成るんでしょうけど、もう戦闘の所を誤魔化せられるか見物ですね)と一人思っていたところを機体のアラートが鳴り響いた。

だがシラユキは対応せずにエンジェルとキマイラがホープの前に現れて攻撃を止めた。

「ザフトの挨拶の仕方は攻撃でするんですか?だったら初めて知りましたよ」と機体を振り向かせそう言っておいた。目の前にはミネ

ルバとレセップス級・ピートリー級　ＭＳ隊が並んでいた

だが今回はシラユキも戦う気は無いので「それでは、私達の用は済んでいるので失礼させて頂きます。再び会いましょうノロマなザフト軍さん」と言って３機は戦闘空域から飛び去っていった。

「シュウさん聞こえますか？ザフト軍が到着しました。私達の出来ることは此処までですから退きましょう」とシュウの端末に話しかけていた

「判った。途中で合流してさっさと退くぞ」と短く答えられ端末を切った。まぁこの対応は正しいだろう。ミネルバに会話を聞かれたら無駄だと思うが正体がばれると厄介なので簡単な会話で済ませたのだ。

そしてシラユキとシュウは僅かの満足感だけを残して戦地をあとにして行った。

PHASE37（後書き）

シラユキ「今回も終わり方微妙ですね」

抹茶「すいません、話を切る方法自分全く下手なんです」

シュウ「一体何時に成ったら主はマトモな小説家に成るんだよ？」

抹茶「小説家に成る気は有りません。自分が書いている理由は、人気は出なくても良いけど自己満足の様に好きに書いてるだけです」

シュウ「一歩間違えたら問題発言にも聞こえるが、自分が満足出来ればそれで良いのか？」

抹茶「多分そうかも知れませんね。書き終わったときの満足感が毎回楽しいので何を言われても書き続けるのだけは辞めません」

シラユキ「そうですか、頑張ってください。それより今回も感想が一件来たんですよね？」

抹茶「そうですね。マサトさん有り難う御座いました」

シュウ「さて、今回はもう後書きを閉めるのか？」

抹茶「ええ、今回は残念ながらネタが其処まで無いんです」

シラユキ「そうなんですか、頑張ってネタを考えてください」

シラユキ・抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はど

うなるのか?次回お楽しみに!」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ３８（前書き）

抹茶「今回は拠点編に成ります」

シュウ「へぇ今回は一切戦闘が無いんだな」

シラユキ「それで今回はどんな話に成るんですか？」

抹茶「えっ？そ・・・それは本編を読んでからのお楽しみで」

シュウ「？・・・今回は言い辛そうだな？」

シラユキ「どうせ変な事でもやっちゃったんでしょう」

抹茶「シラユキさんその言葉きっと後悔すると思いますよ？」

シュウ「シラユキに変な事したらデスペアのツインバスターライフルをプレゼントするぞ？」

抹茶「ごめんなさい。勘弁してください」

シラユキ「訳が判りませんが、本編入りましょうか」

シラユキ・抹茶・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE38

「ティオキアか初めて来たが、オーブとそう変わらない美しさが有るもんだな。そう思わないかシラユキ」と隣で一緒に車に乗っていたシラユキにそう聞いといた。

「そうですね。しかし此れが見回りじゃなくて、デートだったらどんだけ良かった事やら」と何か後ろでブツブツと愚痴を呟いていたが

「見回りでも次の戦場を把握しないと此方が不利に成る危険性もあるんだぞ、さっさとする事する」とシュウは戦場の写真をどんどん撮っていた。

他の人から見ていればただの風景好きの観光者にしか見えないだろうが、彼らは次の戦場の使えるポイントを考えて居たのだ。だがシラユキはそんな事を露知らず着いていってこうなってしまったのでテンションがガタ落ちだったのだ。

「はぁ、シュウさん何時も私の事をバトルマニアと思ってる様ですけど、私からすれば貴方の方が充分バトルマニアに見えますよ」とシュウもシラユキの愚痴がどんどん酷くなっている事に救済策を思いついてしまった

「判った判った　何時も此方の用事に着き合って貰ってるんだから、あとで幾らでも買い物やカフェに連れて行ってあげるよ」とシュウと気楽に言ってしまったが、後で後悔してしまった。

「ホントですか!?約束ですからね!」とやけに食いついてくる。彼女もこの街は楽しみだったのだろう

（シラユキも何か探し物でもしてるのか?それだったら悪かったな。幾らでも手伝ってやるか）と苦笑しながら思ってしまった。全く何時まで経っても彼は鈍感でしかなかった。

そして彼らは予定していた時間より速めに終わってしまった。大抵の理由はシラユキが急にやる気を出して速攻で終わらせてしまったからであった。

多少街の熱気で気分が乗ってしまったシュウは「さてどちらまで送りましょうかお嬢様」と調子に乗って言ってしまった。

「お…お嬢様!?わ…私がお嬢様…。それではシュウ適当にアクセサリーショップまで乗せて行って下さい」とシラユキも顔を赤くしながら調子に乗ったようだった。

「はいはい、判りました。それでは参りましょ」と言ってシュウは青のスポーツカーにエンジンを掛け発進させた。

普段は軍用に近いバギーを使って居たのだが流石に正体を怪しまれる上に折角綺麗な町に居るので新しい車を購入したのだ。ちなみに即決で小切手で購入したので店側からお偉い様と勘違いされ掛けて大変だったのだ。

しかも車の生産場所を確認してみればオーブ産と書かれていたので、シュウは（オーブは色んな所に手を出しているんだな）と一人納得していた。

それよりも車を走らせている間何か声が聞こえて来た。

＜そしてディオキアのみなさーん!一日も速く戦争が終わるよう、

わたくしも、切に願ってやみませぇーん＞そう言ってフェンスに群がっていたティオキアの人達が歓声を上げていた。

＜その日の為に、皆で此れからも頑張っていきましょーう！＞とシュウとシラユキは何時の間にか車を止めてげんなりしていた。

「何なんだあれ？」とシュウは思わず言ってしまった。

「あっ、あはは　あれでバレテナイって未だに凄いですよね」とシラユキですら顔引き攣らせて笑っていた。

流石に一瞬だけ考え事をした後「一日も速く戦争が終わるよう願っているって言うけど結局は、ザフトは何もして無いじゃん」と毒舌を思いっきりしてしまった。

「そうですね。今まで戦ってきているのは私達であってザフトじゃないのに」とシラユキも多少の怒りが篭っていた。

そしてこの前のガルナハン基地での戦場ではシラユキのホープに攻撃しておいた映像だけを消失させ『閃光の殺戮者』『断罪の天使』の異名を持つ両名が一時的な協力によりガルナハン基地攻略などと嘘を吐かれてしまったのだ。

「ふぅ、取り敢えず買い物如何する？」とシラユキに聞いてみた。正直自分の中では結構しらけて来ていた。

「この事を忘れるために速く何処か適当に行きましょう」と言われ、車を発進させた。そうしてシュウは遠くに写る海を眺めながら考え事をしていた。

（平和のため…か　全員目指す物は一緒でありながら争うなんてアホらしいな。それにこの戦争は、勝ってもそいつ等が正しいなんて事は無い。戦争を終わらせた後に如何するのかを考えるのも大切だよな）とシュウは、未だに見えないこの先の未来に付いて考えていた。

「あっ、シュウさん。この先にアクセサリーショップあるので其処に行きましょう」と指示を出されたので意識を運転に戻しアクセサリーショップを目指した。

「しかし、シラユキも何時もそのアクセサリー着けてるよな?そろそろ新しい物にしたら如何なんだ?」と以前バナディーヤでプレゼントしたラピスラズリのアクセサリーを未だに着けて居たのだ。それにシラユキは気に入っているようだが、宝石には既に汚れも着いていて気に成る点が多かった。

「良いんですよ此れで。私からすればシュウさんに貰った物は宝物ですから」とシラユキはラピスラズリに目を向けて微笑んでいた。

「そうか、でも無理しなくて良いからな?欲しい物が有るんだったら幾らでも言ってくれよ」

そうしてシュウとシラユキは目的のアクセサリーショップに辿り着き中へと入って行った。其処にはいかにも男性が入り辛く、見るからに他の男性は隣の女性と手を組んでいるのでカップルと予測出来た。

だがシュウは其処まで気が回らずにショーケースに入っているリングやアクセサリーに目が行っていた。

（もうっ、シュウさんは何で気付かないんですかね！）とシラユキは久々にシュウの鈍感さを呪ってしまった。

そうしてシュウは何故か急に身震いを感じ辺りを見回した。其処にはやけにニコニコしたシラユキを見て恐怖を感じてしまった。

（な・・・なんでシラユキあんなに怒ってるんだ？俺行くところ間違ったか？）と怒っている理由に見当がつかずその場に居る恐怖の対象に震えながら目をショーケースへと向けて時間を潰していた

～1時間後～

シュウとシラユキはお互いに欲しい物が見付かったので購入していた。

シラユキはピンク色の貝殻が乗った新しい髪留めをシュウは十字架と盾の中に剣が描かれている首に掛けるアクセサリーを購入しておいた。

「お互い買う物買いましたしご飯でも食べに行きましょうか」とシラユキが言ってシュウも着いて出ようとした時有る物がショーケースが目に映った。

シラユキは自分が着いて来ていると勘違いをしてもう店外に出ているが、シュウはペアルックに成っているハート型に彫られたピンク色の宝石の着いたリングに目を離せなかった。

（そう言えばシラユキとパートナー組んでからマトモに何もプレゼントしてなかったな。…ハァ、そう思うと俺も結構酷い人間かもな）と思いつつもシュウは即断即決で買い込んだ。

流石のシラユキも着いて来ていない事に少し怒りを表していたが、ちゃんと自分を待っていてくれた事にシュウは嬉しさを感じていた。

「シュウさん！何してたんですか！？」と流石にお怒りのようだったが

「悪い悪い　ある物買ってたら意外に時間が掛かっちゃってさ」と軽く謝罪しながら購入したペアルックのリングをシラユキの右手の人差し指に着けてあげた。

「ふぇ！？何ですか此れ？」とシラユキは、着けられたリングを見て少々戸惑っていた

「いやぁ、遅れちゃったけどパートナーに成ってから2年くらい経って今更遅いけど有難うな。それと此れからも宜しく」と言ってシュウも自分の右手の人差し指に同じ物を着けて太陽の方に手をかざして指輪を眺めていた。

「よし、それじゃあ飯でも食いに行くか」と言ってシラユキの方に向いたら……泣いていた。

「えっ！？シ・・・シラユキ何で泣いてるんだ？怪我でもしたのか？」とシュウは突然の事態に少し動揺してしまった。

「いえっ…グスッ…違うんです。ただ余りにも嬉しすぎて　グスッ涙が止まらないんです」とどうやら嬉し涙のようだった。

「そうか、ただこう言う時如何すれば良いのか判んないけど、止まるまで幾らでも流して良いよ」と言ってシュウもガチガチだがシラ

ユキが涙を止めるまで胸を貸していた。

そして泣き終わるとシラユキが決意を決めたように「シュウさん…少しお話したい事が有るんで海辺の方に行きませんか？」と聞いてくる

「ん？飯は「今はそんな事より話がしたいんです」…判った」とやけに真剣なのでシュウも大人しく従った。

そして言われた通り海辺へと行きシラユキが砂浜をゆっくりと歩き始めた。シュウは流石に訳が判らずにただ着いて行く事しか出来なかった。

「私今まで何してたんでしょうね？シュウさんと今まで一緒に居たのに、ずっと戦闘とかでホントの私の気持ちを見てなかった」とシラユキが急にそんな事を言い出した。

「ホントの気持ちって何だよ？何か決心でも着いたのか？」とシュウは未だに何の事か判らなかった。

「あんまし茶化さないで下さいよ。乙女心は繊細なんですから」

「ふぅーん、でも俺女性に成った事無いから良く判らないや」とシュウは頬を掻きながら苦笑してしまった。

「だから私のホントの気持ちは・・・！」と言ってシュウの唇に柔らかい何かが触れてきた。

「こう言う事です！シュウさん私は貴方の事が好きです！」

とシラユキは顔を赤くして言って来ているが

シュウはそれ所じゃなかった。彼は今自分の身に何が起きたか必死に理解する事で精一杯だった。

（キスされたのか俺は？……シラユキに？あれ？でもシラユキの好きな人って他の奴じゃないのか？）とシュウはグルグルと同じ事を考えていた。

「えーとシュウさん？大丈夫ですか？」と何時まで経っても反応しないシュウにシラユキが心配し始めた。

「えーと、冗談じゃないよな？」とシュウは改めて確認を取ってしまった

「じょ・・・冗談って、私は至って真面目です！貴方が考えているのは多分ｌｉｋｅでしょうけど私の場合ｌｏｖｅです！勘違いしないで下さい」とシラユキは凄く必死に話していた。

「あぁ・・・うん、ちょっとごめん少し理解に追いつかないから、説明して貰って良いか？」とシュウは頭を悩ませてしまった。

「何がですか？」とシラユキは何を説明すれば良いか疑問な事に成っていた

「えーと何時から俺の事好きに成ってたんだ？」とシュウは説明を頼んだ。

「最初はカッコイイ人だなって思ってたんですけど、ホントに好きだなって思ったのは前大戦でのヤキン・ドゥーエでシュウさんが私に別れを告げようとして一人死のうとしてた所で好きかな？って思

ってましたが？」とシラユキに教えられてシュウは瞬く間に顔が赤くなっていた。

（あの時から！？でも今までの行動を振り返ってみると確かにシラユキに手を出されて凄く怒りを感じた事何度も有ったな…。もしかしてあれは、俺がシラユキの事好きだったから）と考えていくと合点が着いてきてしまった。

「それで如何なんですか？」とシラユキが改めて答えを聞いてくる

「あーその、俺は気の利いた言葉も言えないし相手の気持ちもたまに理解出来ない酷い奴かも知れないけど、シラユキ　俺もお前のことが好きだ。付き合ってくれ」と言ってシュウはシラユキにキスをした。

「はい、私も大好きです。何時までもシュウさんと一緒に生きて居たいです」と顔を赤らめながらそう言ってくれた。

（ハハッ時間は掛かっちまったが、俺にも好きな人が出来るとはね。何時までもシラユキは俺が守り続けてやる）とシュウは心の中で一番大切な物を守ると決意した。

例えそれがナチュラルとコーディネーターの両方から非難を受けてもだ。

そうしてシュウは、今の最高の幸せを充分楽しんだ。

ＰＨＡＳＥ３８（後書き）

シュウ・シラユキ「／／／」

抹茶「いやーお二人ともおめでとうございます」

シュウ「……」

抹茶「えっ？何々今回は恥かしいから作者だけで後書きを閉めて欲しい？貸し一つですからね」

抹茶「はい、と言うわけで久々に一人で喋る事に成りましたね。…酷く寂しいです」

抹茶「まぁ今回はシラユキとシュウの恋愛を出してみました。恋愛の所を書くのは初めてなんで下手なのは許してください」

抹茶「さて、今回は話し相手が居ないんで直ぐに後書きを閉めましょうかね」

抹茶「今回感想を下さったマサトさん有難うございます。さて話す事が無いので速いですが此処で失礼させていただきます」

抹茶「さてシュウとシラユキはどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ３９（前書き）

抹茶「はい、ＰＨＡＳＥ３９完成させました」

シュウ「そうか、それよりもテスト期間は大丈夫なのか？」

シラユキ「ですよね。こっちに集中しすぎてテストを落とす無様な事をしないで下さいね？」

抹茶「ええ、判ってますよ。だから一度ＰＨＡＳＥ３９で一旦止めます」

シュウ「そうか、何時テスト始まって何時終わるんだ？」

抹茶「だいたい８月３日から８月１０日までテストなんでその間は投稿できません」

シラユキ「そうなんですか、読者の皆さんも待っててあげてくださいね」

抹茶「それはオレのセリフ。相変わらずの駄文な自分ですがテストが終わるまで待っててくれると有難いです」

シュウ「それじゃあ本編入ろうか」

シュウ・抹茶・シラユキ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE39

「オーブが派兵ねぇ、やっぱりセイラン家にオーブを任せるのは失敗かな」とシュウはタケミカヅチのカメラに写っていた映像を見て言い切ってしまった。

「そうですね。映像から見てもトダカさんとアマギさんがウンザリした顔してますからね」とカグヤも二人の苦労を同情しているようだ。

「それにネオ・ロアノークに利用されてるって事に気付かないとは、やっぱりアホだな。今度俺自らオーブに向かってセイラン家という名の毒でも排除しようかな?」とシュウは至極真面目に言ってしまった。

「シュウさん、幾ら何でも殺すには、まだ早いですよ。カガリさんがオーブに戻るまで生かして置いてあげましょう」と何気にシラユキの方が酷い事を言ってる気がして成らないシュウだった。

「まぁ、そうだな。しかしオーブの理念は今は既に無く、逆にオーブが焼かれそうだな」とシュウは同じ国の人間が死ぬ結末を見たくなかった。

「その結末を出さない為にも私達も動くんですよシュウさん。まだ絶望するには早いですよ」

「そうか・・・そうだな。考えるより先に機体を動かした方が俺には合ってるかもな」

「そうですよ、さあ出ましょう。手段は酷いですけど、オーブの人達を助けに」

そう言って二人は会話を切り、何時もの戦場の様に集中力を上げ機体を始動させた。同時にキマイラとエンジェルがそれに反応し、機体が動き始めた。

そして先に出るようにキマイラとエンジェルを先行させ、それに続くようにホープとデスペアの上のハッチが開き二機は空中へと飛び出して行った。

そう今回彼らの目的はダーダネルス海峡で行われるオーブ軍と連合とミネルバの戦闘の軍事介入なのだが、大きくの目的は二つに分けている。

そうまず一つ目は、オーブ軍から出てくるＭＳ　Ｍ１アストレイとムラサメの戦闘力の無力化を決めている。此れはキマイラとエンジェルのＡＩにも命令しており、オーブ軍認識を持つＭＳだけは戦闘能力を奪うように設定している。他の奴等は目標を着けられたらご愁傷様ということだ。

二つ目はハイネ・ヴェステンフルスの救出だ。此れは完全にシュウとシラユキの本当の目標なのだ。

今回出てくるグフはフリーダムが攻撃してしまって戦闘能力を奪ったせいでガイアによってコックピットを切り裂かれ死んでしまったと言う事。

だがそれを防ぐ為にもフリーダムの攻撃を防いでグフを生かすか、戦闘能力を奪われた所を死なない程度に大破を狙ってパイロットを救出させる二択が有るのだが、正直言うと後者は後遺症を残してし

まう危険性も有るので前者の方が基本的に良いのだ。

だが戦場で一箇所に気を配っていてはシュウ自身も流れ弾で落とされる危険性が有るので救出出来るかどうかは、本当タイミングが掛かっているのだ。

「はぁ、成功してくれると良いんだがな」とシュウは思わず愚痴を言ってしまった。

だが「大丈夫ですよ。今まで成功しているんですから、今回も絶対上手くいくはずです」
とシラユキが励ましてくれる。

「ははっ有難うなカグヤ励ましてくれてさ」とシュウは何時も気を使ってくれるパートナーに感謝した

「いえいえ、それよりも直ぐには直ぐ名前で呼ばれるのは慣れませんね」とカグヤは頬を赤く染めていた。

「頼むから慣れてくれ。何時も俺はカグヤに名前で呼ばれていたから気には成らんが、カグヤがそれが原因で落ちたら俺が悲しいわ」
とシュウはカグヤが今回の戦場で落ちない事を心から祈ってしまった。

「ううん、判りました。頑張って慣れますから、シュウさんも落ちないで下さいね？」と此方の心配もしてくる。

「ああ判っている。それじゃ戦闘領域だから通信終了」と言って通信を強制的に切ってしまった。

そうしてふやけた顔を元通りに戻し再び戦場へと意識を向けていた。
其処にはタイミングが良かったのか、タケミカヅチから多くのＭＳが出撃しており、ミネルバからもセイバー・インパルスが出てきたのが確認できた。

そうしてシュウはすぐさま出てきたアストレイ・ムラサメ・戦艦に対して連絡を送った。

「此方オーブ民間軍所属シュウ・Ｋ・ライトニングだ。オーブ軍こんな無益な戦いを辞めて撤退しろ！」とシュウは無駄だと判っていても呼びかけていた。

「なっ、シュウ様ですか！？その機体は一体！？」と微かな同様とトダカが聞いてくる

「久しぶりだね、トダカさん。あと様付けは、辞めて下さいって前も言いましたよね？この機体については教えられないが出来れば軍を退いて欲しい」と民間軍でありながら正規軍に頼み込んだ。

「何だお前は？今の指揮官は僕だ。さっさと何処かに行けよ！」とユウナが叫んでくるが

「黙れ小僧。死にたいならまずお前から殺してやろうか？」と言ってライフルをタケミカヅチに向かって構える。それによって通信越しに警報が鳴り響いた。

「お止め下さい、シュウ様！こんな青二才は死んでも良いですが、我々まで巻き込まないで頂きたい」とトダカも思わず本音が漏れていた。当然後ろに居たアマギが少々慌てていた。

「冷静なトダカさんがこんな事言うなんて色々とストレス貯まってるんですね」と流石のカグヤもトダカに同情していた。

そして何故か苦労を判ってもらえる人に会えて嬉しいのか目じりに涙が浮んでいたが、次の瞬間

「さっさとあの2機を殺(や)れ！此れは命令だ！」と再びユウナが喚いていた。

「何を言っているのですかユウナ様！あのお二人も前大戦で戦争を止めてくださった英雄なんですよ！？」とアマギが怒鳴っていた。

「それは、こっちのセリフだ！ホントにあいつ等がオーブの国民なら首長の僕に恥を掻かせる訳が無い！さっさとあの英雄の名を語ってる偽者を撃つんだよ！でなけりゃこっちが連合に撃たれるオーブも！攻撃開始！」と喚いていた。

「ミサイル照準…所属不明(しょぞくふめい)モビルスーツMS」と言って警告音が今度は此方が鳴り響いた。

「トダカ一佐！」とアマギが止めようとするが

「止めなくて良い、すいませんねアマギさん嫌な役を押し付けてしまって」とシュウはトダカ一佐に謝ってしまった。

「こちらこそ申し訳有りませんシュウ様・シラユキ様」と謝って通信を切り此方に大量のミサイルを撃ってきた。

そして20機のM1アストレイ・ムラサメの銃口が一斉に此方に向いてしまった。当然シュウとシラユキも大人しく遣られる気は無い。

「許してくれ同じ国民を傷付ける奴として罵ってくれても良い」とシュウは下唇を噛みながらそう言ってＭＳ群へと突っ込んだ。

当然ミサイルは此方の４機の速度の機動性に付いて来れず海面にそのまま直撃してしまった。

そしてシュウは『絶』とサーベルを抜きアストレイに斬りかかった。当然シュウ自体も殺す気は無く狙っていく所はバックパックのシュライクを切り裂く。

これによって片方にしかないプロペラで不安定に飛ぶ事しか出来ず、戦闘不能に近い筈なのだが。

未だに攻撃しようとライフルを此方に向けてくるが、「許せ」とシュウはボソリと呟きライフルを持っている腕を切り落とし、連激の様にサーベルで頭部を切り落とす。

此れによってＭ１アストレイの能力は完全に削がれ撤退していった。シュウは、其れを見てホッとしてしまった。

だが気を抜いたせいで後ろから警告音が鳴り響くが、キマイラのビームキャノンによって両肩を撃ちぬかれもう一機のアストレイも戦闘不能と成った。

カグヤの方を確認するとフィン・ファンネルを一本だけ展開し、器用にムラサメのブースターだけを掠めさせ、海面へ不着陸させていた。

エンジェルの方を見れば片翼・ブースターだけをガンソードで切り

落とし完全に空を飛ぶ事すら許さないようだった。

戦闘パターンはカグヤの方をメインにしているので「アイツ前大戦でどんな戦いしてたんだ？」と思わず気に成ってしまった。

そう思いつつも、今度は脚に着けているスタンダガーを引き抜きムラサメへと投げつける。

当然効果を知らない相手側からすればタダのナイフだと思うのだが、此れはスタン能力の他にシステムダウンを改めて着けたのだ。

故に2～3本機体に刺さった瞬間プログラムはダウンしただの鉄の塊へと変貌してしまうのだ。

相手側も此方の危険性を感じ取ったのかそれとも無謀な指揮官が命令したのか、一機ずつ此方を取り囲むような動きを見せてくるが

「その程度の包囲網幾らでも抜ける！」と言ってビームサイズと小型サブマシンガンを取り出し包囲の薄い場所に突っ込み始めた。

突っ込んでいる間に左手に持っているサブマシンガンを連射撹乱し、近づいた瞬間にビームサイズの刃の幅を一気に広げ3～4機の腰の部分を一気に切り落とした。

だがその内の一機が動力部に斬り付けてしまったのだろう、火を噴きながら海へと落ち爆破が起きてしまった。

だが、殺した事が功をそうしてしまったのか、何機かが恐怖し戦線を離脱し始めた。

此れによって頃合いと見たシュウは、心苦しく思いつつも「オーブの軍人よ、これ以上無駄な抵抗を行うと言うならば先程のＭＳの様に叩き落すぞ！」と脅しを掛けていた。

それによって戦線は一気に崩壊し、オーブ軍のＭＳ達は撤退し始めていった。流石に多くのＭＳを投入しても無駄死にと考えれるキサカ一佐とトダカ一尉のお陰だろう。

要約撤退を行ってくれた事にシュウは安堵をしてしまったが、次の瞬間モニターから一つの映像が映し出された。そうそれは、一気に面倒なオーブを潰そうと考えたミネルバがタンホイザーをタケミカヅチへと向けていた。

そしてシュウは咄嗟にオーブ軍を守る為に、パンツァーシールドを構えミネルバの前へと立ち塞がった。そのままタンホイザーは撃ち放たれシュウは絶対に後ろに有る大事なものを守る為にと両翼までも前に出し攻撃を受け止め始めた。

だが所詮戦艦の攻撃を単機で防げる訳も無く、まずパンツァーシールドがドロドロに成って溶けていく。それでもシュウは防ぐ事を辞めず次は、両翼で自分の機体の全身を包み込んだ。

そして最後の盾とも言える羽が少しづつ溶け始め、限界だと思った次の瞬間ミネルバのタンホイザーに一筋のビームが降り注いだ。

それによってタンホイザーが爆発を起こし、ミネルバは傾き始め海面へと突っ込んでいった。

シュウは一安心しながらもライフルを撃った機体を改めて確認した。其処には以前オーブで確認したフリーダムとアークエンジェルが存

在していた。

それだけ確認するとシュウは、機体をふら付かせながら空中へと舞い上がろうとしたが、次の瞬間両翼から火が噴き海面へと沈んで行った。

「シュウさん！」と言う自分を心配してくれるパートナーが機体を引き上がらせ、キマイラに肩を貸された。若干だがキマイラもＡＩでありながら此方を心配してくれる素振りをしていた。

「シュウさん、今のデスペアでの戦闘は危険です。下がってください」と頼み込まれたが

「其れは出来ない。俺らの任務はまだ終わってないだろ？」とシュウはタンホイザーの余波によって体が少し赤かった。きっと体内に多くの熱を持っているのだろう。

シラユキはシュウの意思も汲み取りたかったが「ごめんなさいシュウさん。それでも私は貴方には死んで欲しくないんです」とだけ言って

「全パーツ解放１５秒間」と呟いてデスペアのコックピットへ膝蹴りを喰らわせた。

相手側からしたら仲間割れか？と多少の動揺を起こしていたが通信越しでは「カグヤお前…」とだけ言って気絶していた。

「キマイラ後は頼みましたよ。シュウさんを安全な場所まで運んであげてください」とだけ言ってシラユキは改めて戦場を見回した。

そこにはストライクルージュも出ており、オーブ軍を説得しようとして無駄に終わっていたようだ。

そして第4者の介入によって連合もザフトもMSを惜しみなく出してきていた。

シラユキは、今回の任務を思い出しオレンジ色のグフとそれの相手をしているガイアに迫っていった。本来は、任務も関係しているのだが。

彼女は「よくもシュウさんをあんなにも傷付けてくれましたね?」と思いっきり私情が入っていた。

当然ガイアとグフが此方に警戒しようとするが「遅いですよ」とシラユキは『堅守』とサーベルを引き抜いてガイアとグフの間を通り抜けた。

当然二機は焦ってしまったが何も起きていないと確認すると安堵していた。

「貴方達は何を安堵しているんですか?さっきのが本気だったらもう落ちてますよ?」とシラユキが二機へと挑発を仕掛けた。

「「なっ!?」」と挑発をまんまと受けた二機は

「今回だけは共同戦線だ」「判ってる。アイツ撃つ!」と二機が協力するようだ。もし戦争じゃなかったら犬猿の仲でも知り合い程度には成っていたかも知れないだろう。

「お喋りせずにさっさと掛かってきたら如何なんですか?」とシラ

ユキは完全に相手を舐めきった。

「ふんっ！言われなくてもやってやるよ！」とハイネがグフの機動性を生かし撹乱しようとするが

「遊んでないでさっさと攻撃するべきですね…リミッター解除３０秒間」とシラユキは、最初からハイネの撹乱行動は遊びとしか受け取らず、『堅守』で左腕を切り落とした。

当然３０秒なので直ぐに終わり、終わった所を狙うように「そこだぁぁぁ」とガイアがＭＡ形態で此方を切り裂こうとサーベル翼を展開するが

「大きな隙も見せてないのに大振りの攻撃は危険性しか残りませんよ？」と言って左足でガイアを蹴り飛ばし追撃にサーベルで右前足を切り裂いておく。

すぐさまガイアはＭＳ形態に戻って浅瀬へと着地するが「厄介な機体から先に潰しに掛からせて貰います」と言って『堅守』を戻し斬艦刀を引き抜いて両足を薙ぎ払う。

Ｍｓ形態に戻ってから数秒後の攻撃なので当然パイロットは反応出来ず、両足を無様に切り落とされた。

「この厄介な奴がぁ死ねよ！」とハイネが突っ込んでくるが

「何も警戒せずに突っ込むのは悪手ですよ」と言って以前シラユキが遣られたように背中のバックパックをファンネルで打ち抜き、機体を海へと突っ込ませた。

「やれやれ特殊な機体を使ってるのにこの程度ですか、それとも私が強くなり過ぎたんでしょうかね?」とシラユキは歯応えが有ると思い2機を同時に相手して居たのだが余りの実力の差にガッカリしてしまった。

そうして彼女は目的を達するためにエンジェルを使ってグフをジャンク艦に運ぶ事を命令した。

だが次の瞬間シラユキは身の危険性を感じサーベルを展開し空中へと薙ぎ払った。そこにはサーベルを持って此方を攻撃しようとしたフリーダムが存在していた。

「なっ!キラ君何故!?」とシラユキ自体も混乱してしまった。

「それはこっちのセリフだシラユキさん。こんな一方的な!」とキラが理由も知らず言ってくる

「だったら大人しく殺られろとでも言うんですか貴方は!」とキラの無茶苦茶な言い分に怒りを感じた

「何も知らない人が此方の事に口を出さないで下さい!あなた達だって手当たり次第に攻撃して…自分の遣っている事が正しいとでも思ってるんですか!」とシラユキはサーベルを振り払って後方に下がりライフルを連射する。

だが攻撃が、当るはずも無くシラユキはライフルを捨てもう一本サーベルを展開し再びフリーダムと切り合う事に成った。

「それに私達は貴方達とは、違って自分たちの出来る事を遣って来ていたのに、貴方達は何も遣っていないのに急に出てきて此方の遣

り方に口出ししないで下さいよ！」とシラユキは苛立ちながらそう言い放った。

元々シラユキは、行動しない人は好きではないのだ。こんな風に行き成り出てきて「戦争を辞めろ」と無茶苦茶な発言をし、挙句の果てには攻撃まで開始する。此れでは「自分たちは正しい事を行っている」と言われても全然説得力の欠片も納得する所も存在しないのだ。

そうしてシラユキは自分たちの任務の目的を達成するために今は目の前の敵を排除する事を完全に決めた。たとえ前大戦で仲間だったとは言えここまでされて腹の立たない者等居ないだろう。

故に彼女は手を抜かない「リミッター解除3分」と呟き一気に勝負に出る事を決めた。

最初はリミッターを解除している事を勘付かせない為に普通に切り合いを行うがシラユキはある程度の攻撃でわざと問題無い程度に攻撃を掠めたりして慌てて背中を向けて撤退する素振りを見せた。

それを見逃すはずも無くフリーダムが追撃してくるが「此れで終わりです！」と言ってフリーダムの反対側に回り込み左腕を切り飛ばした。

本当は両腕を飛ばす予定だったのだが、如何やらパイロットの腕は鈍ってないようだった。

だがシラユキは本来の任務であるグフのパイロットの回収を目的としており今回収完了のメッセージが出てきたので素直に撤退する事を決めた。

「貴方達は、今遣ってる行為が正しいと思ってるんでしょうけど、ハッキリ言って迷惑です。私達の遣る事の邪魔をしないで欲しいです」とだけ言い残してシラユキは戦場を後にして行った。

正直相手側も何機か此方を追いたい様だがフリーダムの攻撃で戦闘能力を奪われたのでそれすら出来ないようだった。

シラユキは、フリーダムのそれだけを感謝し悠々と撤退して行った。

ＰＨＡＳＥ３９（後書き）

抹茶「はい、今回はシュウが一回休みですね」

シラユキ「シュウさんの居ない後書きに何の意味が有るんでしょうか？」

抹茶「酷いや、俺がいるじゃないか！」

シラユキ「ふざけないで下さい。作者とシュウさん比較対照に成ってると思ってたんですか？」

抹茶「グフッ！つまりオレとシュウは月とすっぽん位の差が有るのね」

シラユキ「そうですね。そういえば今回も感想来ていたようですが？」

抹茶「ああ、はいマサトさんご感想有難うございました」

シラユキ「それじゃあ今回も此れで終わりですかね？」

抹茶「ちょいタンマ　少しだけ自分が話したい事が…」

シラユキ「何か有るんですか？じゃあどうぞ」

抹茶「えっーと今回ガンダムＳＥＥＤを少しとは言えほっぽり出して待ちわびていた読者には申し訳有りません。言い訳がましいですが、ネタが思いつかなくなり思わず他の小説を書いてました。一応

もう片方は、此方が完結するまで余り書かないと言う事をさせていただきます。色々と身勝手で本当に申し訳有りません」

抹茶「さて今回はちゃんと謝罪も出来ましたし後書きはこの程度ですね」

抹茶・シラユキ「さてシュウとシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４０（前書き）

抹茶「はい、投稿を再開します。お待たせしました！」

シュウ・シラユキ「「！？」」

抹茶「ん？如何したんだい二人とも驚いちゃってさ？」

シュウ「なぁ…お前さんテスト如何したんだ？」

シラユキ「ま…まさか諦めたんですか？最後まで頑張りなさいよ！」

抹茶「お前等結構失礼だな。テストの方だが、今まで１０日まで有ると思ってたんだが予定表見たら俺９日で終わるしテスト勉強したからこうして投稿しているんだ」

シュウ「そうなのか・・・でテストの方は如何だったんだ？」

シラユキ「まさか最悪とは言いませんよね？」

抹茶「まぁ、結構な手応えを感じたから大丈夫だと思うぞ？」

シュウ「そうか、それじゃあ信じるよ」

シラユキ「それじゃあそろそろ本編に入りましょうか」

シラユキ・シュウ・抹茶「それでは本編をお楽しみ下さい！」

ＰＨＡＳＥ４０

ようやく戦闘が終了した私は、急いでシュウさんの容態を確認する為にジャンク艦へと着艦して入った。だが其処に有った光景はグフのパイロットと思われる青年がデスペアのコックピットへと近付いていた所だった。そして此方の存在に気付き、少々動揺していた。

シラユキも護衛をキマイラとエンジェルに任して居たのだが、このようにコックピットの近くに取り付かれて、攻撃でもしてしまったらシュウ自体にも被害が出ると考えて何も行動していなかった。

すぐさまシラユキはホープのコックピットを開き自分が常に携帯しているＵＳＰ．４５カスタムを抜き出しパイロットへと構えた。

「其処の貴方撃たれたくなかったら、そのＭＳから離れなさい！」と顔を見られるわけにもいかないので被ったまま銃口を向けていた

「此方に抵抗の意思は無い。それに抵抗していたら其処の二機によって俺が殺されてるわ」

「戯言をよくぬけぬけと言えますね。その乗ってる人の命が貴方達の目的でしょうが！」と未だにシラユキは警戒を緩め様とはしなかったが次の瞬間その考えは打ち切られた。

「それに、このＭＳのパイロットはミネルバのタンホイザーを受けたんだろうが、速く救出しないと命に関るぞ」と警告された。

シラユキは青年に警戒されたことに集中しすぎて、シュウの事をすっかり忘れて居たのだ。先程までタンホイザーの直撃を受けＭＳも

修復出来るかどうか謎なほど損傷し熱を持っているので中のパイロットも下手すれば致命傷な可能性も有るのだ

シラユキはその事態に焦りを感じながらホープのコックピットから離れデスペアへと取り付いた。
オレンジ髪の青年も先程の攻撃には全く気にせず、デスペアのコックピットを開く装置を探していた。

そして肝心の外から開くボタンらしき物を発見したが…

「なぁ、ボタンって此れ一つだけか?」と聞いてくる。

「見付かったんですか!?だったら速く開けて下さい!」とシラユキも急かして言うが

「だから其れが利かないんだよ!さっきからボタンを押しては居るが何にも反応が無いんだよ」
とその青年の一言にシラユキは驚愕と少々の焦りを感じてしまった。

「如何すれば…如何すればシュウさんを助けられるの?何か…何か無いの!?」と焦りながら辺りを見回した。

元々シラユキは自分のＭＳを整備はするにはするのだが、工具などは何時もシュウが持って来ているので何処に置いているのか全く判らないのだ。

そうしてどうやってシュウをどうやって助けるか考えていると「一か八かだが、ＭＳのコックピットのハッチだけを上手く斬るしかない」とオレンジ色の青年が提案してきた。

その言葉にシラユキは怒りを感じて「貴方はシュウさんを殺せと言うんですか!?幾らなんでも無茶苦茶です!」と思いっきり怒鳴ったが

「だったらそれ以外に方法が有るのかよ?中のパイロットは今も衰弱してるかも知れないんだぞ!?」と至極正論を吐いてくる。

そう彼女も判っていた。手っ取り早く救出するなら其れが一番便利な方法だと。しかし失敗してしまえば中のパイロットごと死んでしまう危険性が有るので敢えて其れを回避する方法を画策していたのだが、もう無理だろう。

「判りました。斬るのは私がやります。だから貴方はさっさと此処から離れてください」

と言ってホープへと向かい再び乗り込んだ。

流石に狭いジャンク艦のハンガー内で刀を振り回すのでキマイラとエンジェルは艦外へと出て行った。

シラユキはすぐさまホープの自動演算によってどのように振れば良いのか一応仮想映像で確認し集中し始めた。

そして覚悟が決まったように、『堅守』の柄を握り締め居合いの形を取った。少々大袈裟かも知れないが、デスペアの場合ＰＳ装甲だけでなく、普通の装甲もガンダム系統なので少々厚いのだ。

故に剣速を落とさずに一瞬で切り裂いた方が速めに済むのだ。

「絶対にシュウさんには当てません。だから……成功してっ!」と叫びつつも『堅守』を振り抜いた。

シラユキは成功した感覚だけを腕に感じ、中を確認する為にホープから降り切り裂いたデスペアのコックピットを確認した。

其処には、多少息苦しそうに気を失っているシュウを確認してシラユキは安堵しシュウを思わず抱きしめてしまった。

「良かったシュウさん・・・生きててくれて有難う」とシュウに感謝している所を

「あっー取り込み中悪いんだが、直ぐにソイツを医務室に連れて行かないと不味いんじゃないのか？」と少々目を背けながらもそう言われた。

「ッ！？そ・・・そうですね。早くシュウさんを運ばなきゃ駄目ですね」と少々顔を赤くしたシラユキはシュウを背負って医務室まで運んでいった。

～医務室～

取り敢えずシュウをベットに寝かし適切な処置を施した後にシラユキは改めてオレンジ色の青年の方に顔を向けた。

「取り敢えず、何も話さずにこの艦まで運んだ事を許してください。一応お互いに名前が判らないと困るので先に名前を伝えておきます。私はシラユキ・カグヤそして今倒れてる人が私のパートナーシュウ・K・ライトニングです」と一応自己紹介を済ませたが

「断罪に閃光の二人が動いているのか…おっと失礼。俺はハイネ・

ヴェステンフルスだ。気軽にハイネと呼んでくれ」

「判りました。取り敢えずハイネさん悪いですが貴方を連れ去ったのは、理由があります」

「理由？戦場から俺を放すほど途轍もなく重要な事なのか？」とハイネはすぐさま真剣な顔に成った。

「はい、酷いようですがあの時私達が貴方を攫ってなかったら貴方はあの場所で死んでました」とシラユキは顔を背けてそう言い放った。

「何だって！？だが俺は、今でもこうしてこの場で生きているんだぞ如何言うことだ！？」とハイネは少々焦りシラユキの両肩を掴んで揺さぶりながら問いただした。

「それは・・・「良い、其処からは俺が全部話すよカグヤ」シュウさん！？」とシラユキは思わず振り返りシュウの傍へと近寄った。

「大丈夫ですか？」

「ああ何とかな。それより初めましてだねヴェステンフルスさん」と体を動かしベッドに腰かけ頭を下げ挨拶をした。

「ああ、それより俺のことはハイネで良い。それで続きを頼む」と一刻も早く急かしてくる。

「そうだな。まずその事に付いては一度簡単に平行世界に着いて説明して置いた方が良いかもな」

「平行世界？」とハイネは何が何だか判らないような顔をしていた。

「まぁ、普段は余り聞かない言葉だから頭を傾げても可笑しくないよな。簡単に言うと平行世界ってのは、良く似た全く別の世界という存在だ。例えるなら今俺が左腕を上げたりしよう、だが少し違えば右腕を上げてたかもしれない。もし、もしも、もしかしたら、かも、だったならそんな別の世界の事を平行世界って言うんだ」と長々と説明してしまったが如何やら理解できたようだ。

「つまり、もしライトニングとシラユキが俺を助けなかったらガイアに真っ二つにされてたって事なのか？」とハイネは少々恐ろしくなってそう言って来た。

「ああ、そうだ。俺とカグヤは其れに気付いたから起こる前にハイネを助けようと画策していたんだが、信じてもらえるか？」と説明したが、シュウとしては納得してもらえるか不安な所があった。

「ああ、所々不安な所が有るがさっきの話を聞けば納得出来ない事も無い。それに一つ気に成った点なんだが最近議長の行動に不安を覚えてきたな」とハイネは怪訝そうな顔をしていた。

「不安な行動だと？正確に教えてもらえると助かるんだが？」とシュウは少々疑問に成っていた。

「ああ、以前議長の部屋の前に通った事が有るんだがその時に『暗殺』だの『改ざん』だの色んな事が聞こえて少々疑問を覚えてきているんだ」

「シュウさん、もしかして其れって」と此方に目を合わせてくる

「ああやっぱり予想通りだったな…ハイネちょっと付いて来てくれ」とシュウは自分の部屋へと向かって歩いて行った。

～ハイネＳＩＤＥ～

最初はこのジャンク艦まで連れ去られた時は少々不安も大きかった。だが抵抗しようにも此方のグフは既に戦闘不能な状況にまで追いやられているので焦っていた。

だがすぐさまその考えは消え去ってしまった。そう此方まで運んできたのは、自分ですら憧れていた『断罪の天使』『閃光の殺戮者』の名を持つ二人だった。

此れは何か有ると思い話を聞いたが、平行世界等でもしかしたら自分は死んでいたかも知れないと言う事を聞かされ少々恐怖に陥ったがその為に自分たちがボロボロになっても助けてくれる事に嬉しさを覚えてしまった。

そして彼らは俺がふと漏らした言葉に興味が有るように聞いてきた。其れに付いて話したら「見せたい物がある」といって部屋まで誘導された。

そしてライトニングの部屋だろう、そこらじゅうにＭＳの設計図やＰＣでも完成予想図画組み立てられている。それに興味が湧いた俺は、すぐさま壁に張ってあったＭＳに目をやった。

其処には前大戦で使っていたエンジェルやキマイラ等も書かれ他にも支援型・遠距離型・近距離型・量産型等一つ一つがとても価値のある設計図にしか見えなかった。

そして一つの設計図に目が着いてしまった。其処にはガンダム系統

と同じで有りながらずっと目が離せずに居た。
それに気が着いたシュウは此方に近寄り
「このＭＳに興味が有るのか？でもコイツは作ってもきっと乗る奴が居ないんだ」と少々苦笑しながら言ってきた。
「如何言うことだ？このＭＳに欠陥なんて無いはずだが？」と自分自身何処も可笑しく無い様に見えてしまった
「確かに外側から見たら可笑しくは無いんだけど、このＭＳ殆ど射撃武器を積んでないんだ。形では、ハイネが乗ってたグフに凄く近い感じに成るだろうね」
「成る程ね。それよりこのＭＳに名前は着いているのか？」と其れだけが疑問に成っていた。
「この機体の名前かい？レストアガンダムだよ」と説明しておいた。
「レストア？如何意味なんですか？」と思わず聞いてしまった自分が居た。何故かこのガンダムにだけは惹かれてしまった。
「ん？レストアの意味かい？修復だよ。たとえ全ての関係が壊されたとしても修復出来ない事は無いからね。その名前をこのガンダムにも着けたんだよ」と説明をし終えて映像の準備を終わらせたようだった。
（レストアか…気に成ってしまうが、今は俺はザフトなんだこの設計図を貰う事すら許されないだろう。それ以前に生きて帰れるかどうか謎だな）と一抹の不安だけを残し映像を見始めた。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

（ふむ、ハイネが凄くレストアガンダムに興味が有ったようだな。この映像を見せて此方側に引き込めれば良いんだがな）と思いつつも映像を流していった。

其処に映し出されていったのはオーブ沖でのザムザザー戦・ガルナハン基地での戦闘映像を流していった。最初は怪訝な顔をしていたハイネだが、次々流される新情報に驚きを隠せなかったようだ。

そう彼らは戦闘改竄の映像を流し続けて居たのだ。そして極めつけは最近要約シュウが危険な橋を渡って手に入れたラクス暗殺を命じた議長の映像の一部始終を流し始めた。

「此れは・・・如何言うことだ？」とハイネが言葉を失ってそう告げてきた。

「如何もこうも、全て議長の思惑通りなんだよ。あの基地に居たラクスもミネルバが落としたと言われてるオーブ沖の戦闘・ガルナハン基地の戦闘全て俺たちが遣った事だ。それを議長は改竄しミネルバの手柄にしていった。正直言って議長を信用しない方が良い、奴は自分の思ったとおりに動かない駒は消す人間だからな」と告げておいた。

そう告げた後シュウのＰＣからピピッピピッと小刻みな電子音が聞こえて来た。シュウはその音を聞きすぐさまＰＣの前まで動きキーボードをひたすら打ち続け、要約終わったかのようにキーボードを打つのを辞め画面をずっと見ていた。

「要約尻尾を掴めたな。全くのらりくらりと逃げやがって連合の連

中は面倒だな」と愚痴を吐きながらシュウは自分の部屋を出て行こうとして。

「シュウさん何処に行くんですか？」とカグヤが行き先を聞いてくる。

「ん？連合の作ったロドニアの研究所まで行ってくるよ。カグヤは監視を頼む。…ハイネは悪いが今ザフトに戻っても良い事は余り無いだろ、これから如何するかは自分で決めてくれ。俺はハイネが決めた決断を止めたりもしないからさ」とシュウは良い残して自分の機体へと向かった。

だが今回デスペアは本人が知るように、中破しているので修理するまで全く乗れないのだ。だが今から整備していては、ザフトに先越される危険性も考えられるので、キマイラに搭乗し出撃するしかないのだ。

そしてキマイラを久々に起動させハンガーから離れていった

目的地はロドニアのラボだが其処は連合の強化人間（エクステンテッド）の研究所なのだ。強化人間と言えば前大戦で戦ったレイダー・フォビドゥン・カラミティの３機のパイロットだ。

以前に比べれば禁断症状などを抑えられているかも知れないが、同じ人間を調整等と言って肉体をいじり兵器としか見ていない事にシュウも微かの怒りを感じていた。

そうして考え事をしている内にＰＣでも表示されていたポイントに辿り着いた。シュウも攻撃の危険性が有ると思い暫く上空を旋回したが攻撃の気配は無く、かなり広い敷地内と言うのに人影一つ見当

たらない

だが廃棄されたのはつい最近なのか、アスファルトや整備された地面には其処まで大きな傷は残っていなかった。シュウは、安全と感じキマイラで地上に降り問題の施設内を覗いた。

シュウは内心恐怖しながらビル内に入り其処から続く地下内へと入って行った。だが階段を下りている途中に無機質な臭いが鼻に突いた

シュウはすぐさま薬品だと気付き、ガスマスクを装備して異常性を確認したが特に問題は無かったようだった。そして要約問題の地下に辿り着いて安心したように一息着いたが微かに部屋の奥から物音が聞こえた

シュウはすぐさま腰に掛かっている銃を抜き出しマガジンを変えておいた。今回は戦闘兵が居ると警戒し実弾を入れていたのだが、その気配は無く研究者だった場合の時も考えて麻酔弾へと変更したのだ。

そして地図の図面を思い出し、部屋に入って直ぐ右にあるスイッチを押し明かりを着けた。次の瞬間自分の左から殺意を感じ咄嗟にその場で転がり手術台の近くまで動いた。そして改めて姿を確認すると其処には、まだ幼い子供が居た。だが右手に持っているメスを改めて見ると其処には少量の血がこびり付いていた。そしてその子の目を見ると、多少の恐怖と殺意しか見えなかった。

シュウはこの子供が大人に対して怒りと恐怖しか持って居ないと悟った。そう思うと多少の戦意を失ったが次の瞬間再び子供が此方の頭上まで飛び上がりメスを振り下ろしてきた。

だがシュウは其れを避け様ともせず左腕を差し出して自分からメスに刺されていたのだ。

「グッ」と多少の痛みを堪えながら数発子供に対して麻酔弾を打ち込んだ。即効性の有る薬品でも有るので子供が驚きつつもメスを手放し数歩下がった瞬間糸が切れたかのように眠り出していた。

すぐさまシュウは子供に近付き安否を確認するが、特に擦り傷等が多く見えたが特に大きな怪我は無かったようだ。

ほっとして安心してしまったシュウだが、メスが深く突き刺さったせいか多少の痛みを感じてしまった。だが痛みに耐えつつもまだ生きている一つの端末を探しハッキングを開始した。そこには此処で起きた事・命令内容・調整法・強化兵士の製造方法等とても人間が遣る事とは思えない事が書かれていた。

シュウは、そのデータを全て自分持ってきたＰＣに移し入れ幾つか研究所内の写真を撮っておいた。此れによって戦争が終結後連合を壊滅させる事が出来る決定的な証拠の一つとなるのだ。

そしてもう一つシュウには探し物をしていた。そうそれは強化兵士の治療方法を探して居たのだ。幾ら研究員達が酷い奴等だとしても、その何人かは良心的な人間が居たはずだろう。

そして1時間ほど研究所のフォルダを探し回っていた所一つのデータが残っていた。其処にはシュウの予想通りエクスンテッドの治療法そしてこれを書き残した研究者の思いがつづられていた

研究員のレポート
此れを読んでいてくれる人間が正しく使ってくれる事を切に願う。

私は、今此処でエクスンテッドの作成を行っている。正直嫌な作業だが、こうして動いて置かなければ私の家族の命すら危うくなってくる。

だから私は、今此処でこうやって誰かに見られる事を願ってこのレポートを書き記す。

正直言ってエクスンテッドを生み出した私達にも原因が有るだろう。しかし私は、これ以上戦争での犠牲者を生み出したくない。勝手なお願いだが、私が育てたステラ・スティング・アウルを助けて私の代わりに育てて欲しい。この下に私が考えたエクスンテッドを治療する方法を書いている如何かあの子達を救ってあげてくれ。

「有難うよ。名も知らない研究者さんアンタのお陰で今此処に居る子を一人救えそうだよ。そして可能な限りアンタの願いも叶えてやるよ」と感謝をし願いを聞き入れて未だに麻酔弾によって眠っている女の子を抱きかかえ自分のＭＳへと戻っていった。

だがシュウには、少しだけ不安が残っていた。それは、この後のカグヤの説教だ。

（こんな怪我をするなら私も連れて言って下さいよ！全くシュウさんは、何時も無茶ばっかりして）

とカグヤの声がシュウの頭の中で再生され、そう思うと少々背中に冷たい物を感じゾッしてしまった。

「このまま傷を隠すのは無理だよな…ハァ」と溜息を付きながら自分のジャンク艦へとキマイラを向かわせていった。

ＰＨＡＳＥ４０（後書き）

抹茶「はい、今回は此処までにさせて頂きます」

シラユキ「さて私は次話でシュウさんとＯＨＡＮＡＳＨＩをしないと駄目ですね」

シュウ「ちょっやめ！作者如何にかしてくれ！」

抹茶「うん、如何にも出来ない。止めたら俺が撃たれそうだからってＯＨＡＮＡＳＨＩを受けといてくれ」

シュウ「クソッ！ＯＨＡＮＡＳＨＩされる前に逃げ切ってやる！」

シラユキ「あぁ、シュウさん逃げたらもっと酷いＯＨＡＮＡＳＨＩに成りますので」

シュウ「俺終わったかな？」

抹茶「ドンマイ。さて今回感想を下さったマサトさん前原圭一さん有難う御座いました」

シラユキ「さて今回は此処までですかね？」

シュウ「そうだな。喋る事も無さそうだし後書き閉めるか」

シュウ・シラユキ・抹茶「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４１（前書き）

抹茶「はいＰＨＡＳＥ４１完・成！」

シュウ「何時もよりテンション高いからキモいな」

シラユキ「ドン引きですね。さっさと消えてくれませんかね？」

抹茶「お前等酷いな。そんな事するんだったらカップルかいしょ・・・」

パンッパンッパンッ

シュウ「おやおや急に眠たく成ったんだね。こんな所で寝ちゃってさ」

シラユキ「ホントですね。さて作者は眠ったようですし本編入りましょうか」

シラユキ・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE41

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「はぁ、もう謝らなくて良いですから何でこんな事に成ったんですか？」

シラユキはシュウとのＯＨＡＮＡＳＨＩを終えて女の子と傷の件に付いて聞いてみた。

「はっ！？そ・・・そうだな。簡潔に言うとだな地下のラボまで入ったのは良いんだが、この子が生き残ってて此方を敵として勘違いして襲ってきたんだよ。それで殺すのもヤボだからわざと攻撃を受けて多少動きが止まった所を麻酔弾で眠らせたんだよ」

と説明し刺さった所を見た。

流石に何時までも左腕にメスを突き刺したままなのは、気味が悪いので針を縫って包帯をしているのだが、まだ痛みを感じてしまい顔をしかめ左腕を押さえた。

「大丈夫ですかシュウさん！？それより先程熱心に薬の調合して女の子に注射していましたけど何を注射したんですか？」とカグヤは傷の事を心配しつつも薬の方が気に成っていた。

「ん？あれはラボに残していた心優しい研究員が残したエクスンデッドの治療薬だ。ただ一回注射したら終わりじゃなくて強化兵士に成るまでに打たれた薬の量が量だから定期的に治療薬を打ち込まないと駄目なんだよな」とシュウは、溜息を吐きながら未だに眠りに付いている子を眺めた

「酷いですよね。戦争に勝つためと言う理由の為に孤児を利用して戦争に駆り出させるなんて人の遣る事とは到底思いませんよ」とカグヤも女の子を見つめながら悲しそうに呟いた

「あぁ、連合の上層部はきっと人間の皮を被った悪魔なんだろうな。……それよりハイネの方はどうなってるんだ？」と今医務室に居ない彼を心配し始めた

「それが…今まで自分が信じていた人間に騙されていたんですから落ち込み様も凄いですよ。今は一人にして欲しそうなので監視していませんが」

「そうか、まぁハイネはこの程度じゃへこたれる人間ではない事を信じとくよ」と言っていたら、急にポケットに入れていた端末が震え始めた

シュウは会話が打ち切った所だったので丁度良いタンミングと思いつつも端末を動かし始めた。
其処に映し出されていたのはロドニアのラボから１ｋｍ離れた所で監視していた強行偵察型ジンのモノアイを経由して映し出されていたザクとインパルスの映像だった。

「ふむ、今更ロドニアの位置を割り出したか…正直言って遅いし其処まで必要なデータを見つけることはあいつ等には不可能だろうな」とシュウはうんうんと一人納得しつつも画像を眺めた。

カグヤも気に成るように覗き込んだが、何が何だか判らず一人？マークを浮かべながら混乱していた。それから２０分後にレイを引き摺ったままシンが研究所から出てきた。

流石に端末越しで見ているせいも有るのか二人の表情が良く見えなかったので強行型にズームして貰った。改めて映し出された映像には顔を青くして震えているレイと戦艦に連絡し様としているのに何度も打ち間違いをして焦っているシンが居た。

「シュウさん何故レイ君はあんなにも震えているんですか？もしかして薬剤でも！？」とカグヤは一つの可能性を言い出したが

「いや、それはまず有り得ないだろう。もしそうだった場合先に入った俺がそうなっていたはずだ。だが現状俺には何の症状も現れては居ない。つまりだ考えられるのは、何個か有る。一番有力なのは、彼が造り出され者か、エクスンデッドみたいに改造されたかだな」と自分の思いついた事を取り敢えず言ってみた。

そうして要約連絡でも着いたのかさっきからシンが喋り続けている。シュウはそれを見つつも後ろから聞こえる布が擦れる音をしっかり感じ取った。カグヤの方を向くとカグヤも気付いたように一度だけ目を合わせて頷き同時に腰の銃に手を置きながら後ろに向いた。

其処に居たのは、研究所で見せた大人への恐怖を瞳に宿した女の子が目を擦りつつも此方に対して警戒心剥き出しの状態で睨みつけていた

「此処何処？また私を他の人達みたいに改造して研究するの？」と言い放ってきた。

「そんな気は無い。寧ろ俺たちは、キミ達みたいな戦争の犠牲者を救う為に活動しているんだ」とシュウは如何にかして女の子の警戒を解こうと思ったが

「嘘だ！そう言って私が逃げたら腰に着けてる銃で撃ち殺すつもりでしょうが！」

と震えつつもそう叫んできた。此処まで過敏に反応すると言う事は、仲間が殺されたのだろう。

「判った。じゃあ俺たちも攻撃しないと言う意思を見せてあげよう…カグヤ」そう言ってカグヤとシュウは自分の腰に着けている銃を取り外しマガジンから1発に成るよう弾を外し女の子に投げた。

カグヤは其れを気にしつつも銃からマガジンを取り外し部屋の扉を開け弾を投げ捨てた。当然銃身も警戒される要員でも有るので自分の足元に置き遠くに蹴り飛ばした。

「さて此れで良いかい？」とシュウは女の子に弾の入った銃を向けられていながらもそう聞いた。

「何で？何でこんな事をするの？私が貴方を撃たないとは言い切れないのよ？」と女の子が聞いてくる。

「うーん。まぁ撃たれた時は、そん時はそん時で仕方が無いとしか言いきれないかな」とシュウは苦笑しつつもそう言いきってしまった。

「はぁ、貴方も諦めてください。この人は、今貴方に撃たれても良いと言うのは本音でしょうね。正直言ってシュウさんは、これ以上他の人たちを救えないと言うだけは悔やんでも貴方だけを救えた事だけを嬉しがって逝く人でしょうから」とカグヤも呆れたようにやれやれと首を振っていた。

「なっ、あなた達正気なの!?本気で色んな人を救う為に自分を犠牲にするなんて命が惜しくないの!?」と女の子も少々驚きを隠せないようにそう叫んだ。

「命が惜しい惜しくないとかそんなの如何でも良いじゃん。ようは自分が如何有りたいか如何したいか一番大事なんだよ。それに人の一生なんて凄く短いからさ、悔いが残らないように生きてるだけだ」とシュウは笑いつつもそう言い放った。

「馬鹿じゃないの?ホント今まで聞いてても馬鹿馬鹿しく思えてくるわ。……少なくとも今まで理想だけを語ってた人よりかは数倍マシね」と要約女の子も笑ってくれていた。

「全く馬鹿馬鹿言わないでくれ。それよりも腹減っただろ?直ぐに飯持ってくるから待っててくれな」と言ってシュウが再び部屋を出ようと次の瞬間

女の子は、何かに苦しむかのように胸に手を押さえて体を震えさせ始めた。流石にシュウも尋常事ではないと思いすぐさま女の子の傍に近寄った。熱や体に異常が有るのかと思い額や体に聴診器を当てて確認するが特に危険な所は無い。

つまり考えられる事は、エクスンデッドの治療薬が切れ始めているのだろう。今回は初めてなので少量しか注射しなかったが失敗だったようだ。

「カグヤ　この子に薬を打つから体を抑えておいてくれ!」と頼み込み注射器の中を特効薬で満たしていく。

「シュウさん速くして下さい!この子体が冷たくなって来てます!」

とカグヤが焦りつつもそう叫んでくる。

シュウは、入れたのが完了したのと同時に腕を思いっきり掴んで注射器を突き刺し薬を投入した。最初は女の子の方も苦痛に顔を歪ませつつも徐々に落ち着きを取り戻していく。

「ごめんなさい。こんなに暴れちゃって…医務室広げちゃってごめんなさい」とぼんやりとした意識の中暴れたのを正確に覚えているらしく涙を流しつつも謝ってくる。

「大丈夫だよ。キミだけでも助けられてホント良かったって俺もカグヤも思ってるよ」とシュウは優しく微笑みながらそう言った。

「ありがとう。そういえば私名前言ってなかったね。私の名前は…風舞　つばさだよ」とだけ言い切って眠りに入っていった。

シュウはそれだけ聞くと再びつばさをベッドへ寝かして

「おやすみつばさ」とだけ言って髪を優しく撫でた。

「今まで頼る人が誰も居なかったんでしょうねつばさちゃん。例え私達が力を失ってもこの子だけは守りきりたい物ですね」とカグヤも優しい顔をしながら髪を撫でていた。

「ああ、こんな子まで戦争に駆り立てようとする輩は一度殺さないと学習しないのかな？」

と言いながらシュウはつばさが持っていても全く似合わない近くに放り出された拳銃を拾い上げスライドし弾を捨てホルダーに仕舞い込み医務室を後にした

ＰＨＡＳＥ４１（後書き）

シュウ「今回は拠点編だけだったのか」

抹茶「そうです。戦闘まで入れると長くなると思い今回は拠点だけで済ませました」

シラユキ「もう復活したんですね。案外復活速いんですね？」

抹茶「復活が早い？当然じゃないか！俺はしゅじんこ・・・」

パンッパンッ

シュウ「主人公は俺だから勘違いするなよ？」

シラユキ「それより今回出てきた新キャラ如何するんでしょうね？」

抹茶「あーつばさちゃんの方かあの子は、如何するかは本編で書きますのでお待ちしてください」

シュウ「幽霊に成っても未だに役目を果たす気か…」

シラユキ「呆れ通り越して賞賛に成りそうですよ。そういえば今回感想来てたらしいですね？」

抹茶「はい三ノ丸さんご感想有難うございます」

シュウ「それじゃあ今回は此処までか？」

シラユキ「そうじゃないですかね？作者も深夜で眠たそうなんで閉めましょうか」

シラユキ・シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４２（前書き）

抹茶「はい、結構時間掛かったけど要約ＰＨＡＳＥ４２が出来た」

シュウ「普段は昼とかに投稿するお前が珍しいな？」

シラユキ「何か有ったんですか？話ぐらいなら聞きますけど」

抹茶「今回のステラの救出の話何度も納得行かなくて書き直してたんだよ。それで今日が投稿日だったから自分の中で一番良い奴を選んでた」

シュウ「そうなのか、主ってもしかしてオリジナルストーリー作るの苦手なのか？」

抹茶「うっ、それは言わないでくれ。それより重大発表だ」

シラユキ・シュウ「「重大発表？」」

抹茶「そう、今日８月１７日は自分とシュウの誕生日なんです！」

シュウ「ふぅーん、でも前書き利用してまで言うか普通？」

シラユキ「普通言いませんよね？それだけが言いたかったんですか？」

抹茶「そんなつもりは無かったんだけどな。まぁ良いやそろそろ本編入ろう」

抹茶・シラユキ・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE42

「ふぅ、やはり物語は史実通り進むのか」
と強行偵察型ジンから映し出されていた映像を眺めつつもシュウはそう呟いた。

「そうですね。しかし此れから如何するんですか？ザフトが救出すべき対象とガイアが鹵獲してしまいましたけど？」とカグヤが聞いてくる。

「ん？如何するって決まってるだろ？何時も通りのようにステラとガイアガンダムを此方が実力行使で入手する」

「はぁ、此処最近何か有る度に相手側に攻撃しかけてるのはこっちの気のせいでしょうかね？」とカグヤは少々頭を傾げながら言った考えていた。

「多分気のせいじゃないと思うぞ？しかしどうやってミネルバに攻めに行くべきかな。普通に攻めに行った所でミネルバからの砲撃・ザクによる撹乱攻撃・インパルス・セイバーによる止めが少々恐怖を生み出すんだよな」とシュウは多少の戦闘での危険性をカグヤと

そして一つ面白い作戦が頭の中をよぎってしまった。

「なぁカグヤ　お前さんとエンジェル・キマイラでミネルバとMS達何分位引きつけられる？」

「はい？何でそんな事聞くんですか？」

「これからの作戦でもしかしたら重要になるからだ」

「そうですね。だいたいですけど１０分位は、無傷で引きつけられますね。それ以上は、集中力もちょくちょく途切れますし、仮にミネルバとＭＳ落としてもキマイラかエンジェルのどちらかは大破してホープも少しの損傷は目を瞑らないと厳しいですね」

と軽そうに言ってくるが、新造艦を三機で攻略できる方が余程凄いと思ってしまったシュウだった。

「そうか、それほどの時間は耐えれるのか。じゃあカグヤには悪いが、暫くミネルバを引き付ける囮に成ってくれ」と何時もの事を頼むシュウだが普段カグヤに頼りっきりなのが心苦しいと思ってしまう所だ。

「判りました。取り敢えず作戦の説明をお願いできますか？」と言われたので、今回の作戦内容を大雑把で有るが説明をしておいた。

「と言う訳だ。まぁ話し合いで済めば戦闘は殆ど無いんだけど、戦闘に成ったら最初の２～４分は、単機で戦うから厳しいかも知れないけど此れが成功すれば相手側の戦艦・ＭＳに大打撃を与える事は可能だ」

「確かに成功すれば向こうも此方の条件を飲んでもらえる可能性も有り得ますけど、もし話し合いを拒否した場合は如何するんですか？」

「ん？そん時はそん時で実力行使でステラ・ルーシェとガイアガン

ダムを貰っていくさ。まぁガイアガンダムはオマケ程度だから手に入れなくても良いが確実にステラだけは救出したい」とだけ言って机の上に広がっている資料とジンから映し出されていた映像を切っていった。

「作戦は明朝　順番はカグヤ・エンジェル・キマイラの順で5分毎に出撃だ。俺はお前等が出撃する30分前に出撃するから機体の武装の最終チェックは忘れるなよ?」とシュウは告げて医務室へと歩き出した。

「やぁつばさちゃん調子はどうだい?」と先程目覚めたとハイネから言われたので会いに来た。

「お陰さまで調子は良好よ。全く貴方は何なの?私達エクスンデッドの治療法を知ってるなんて」と先日の弱っていた時と違って強気になっていた。

「ははっそれは秘密だよ。それより一つ聞きたいことが有るんだけど大丈夫かい?」
とつばさが薬を打ったと言えど昨日の事でも有るので体調位は心配はする

「それだったら大丈夫。それで聞きたいことって何？」

「つばさちゃんが居た研究所でステラ・ルーシェって子も居なかったかい？」とシュウは悪いと思いつつも口を濁さず聞き出した。

「ん？ステラ？ステラって…ああ、あの子か知ってるよ。暇が有れば研究所から出て鳥とか海とか眺めてた変な子だけど如何かしたの？」と如何やら知っているようだ。ただ何故聞くのか判らないように首をかしげている。

「そのつばさちゃんの知り合いのステラがザフトに捕まったから救出しに行くんだよ。このまま放置していたら確実に起きる事は、ステラの衰弱死かザフトの一部のパイロットが離反して連合に返すかの二択だ」とシュウは冷静に話をしていく

このまま数日間放っておけば此方の手を煩わせる事無くステラは、シンによって連合に引き渡され何かしらの治療をしてもらえると信じ込むだろう。だが所詮連合ではエクスンデッドは治療等と言う生易しい言葉ではなく『調整』と人を人として扱っていない行動なのだ。更には調整が終了した後はデストロイに乗り込まされて戦死と言うふざけた結末を迎えさせる等許せるはずが無い

「そう…だったら絶対にあの子を助けてあげてくれない？ステラは人一倍死に対しての恐怖が有るから」

「そうなのか、確か何度か噂じゃ聞いたこと有るけど、それぞれに用意されてるエクスンデッドの禁句用語を聞くと精神が一時的に不安定に成るってことだよな？」とシュウはエクスンデッドに対しては知識が曖昧なのだ。

「そうね。私は、まだ完全に洗脳される一歩手前で実験中止に成ってたから幸い禁句用語は無いよ」と此れからの会話で一々気を使わなくて済んだ事にシュウはこころなしかホッとしてしまった。

「んじゃ、そろそろ俺も眠るからつばさちゃんも速く寝とけよ？もしかしたらステラと有ったら話したい事が一杯出来るかもな」と苦笑しつつも部屋を出て行こうとしたとき

「そんなこと知らないわ。……とにかく無事に帰ってきなさいよシュウ」と恥かしそうにしつつもつばさちゃんのその呟きが聞こえて来た。

私は、今単機でミネルバの場所まで向かっている。キマイラやエンジェルは作戦通り別行動を行っている。流石に単機でザフトの最新鋭に挑むには余程の勇気が必要だと自負もしているが

それ以上にシュウが私を信頼しているので、その期待を裏切らないのが一番重要なことだと思う。

「さて・・・そろそろミネルバのレーダーの探知機の範囲内に入る頃ですね」

と呟きつつも肩に掛かっているファンネルを始動させておく。

仮に話し合いに応じてくれたとしても、一部の人間の勝手な行動によって攻撃される危険性も有るので直ぐにでもファンネルを展開出来るように常に後先の事を考えておくのも必要な事なのだ。

「そこの白い機体　これ以上近付くな。これ以上の接近は認められない」
とミネルバの通信が聞こえてくるが歩を止める事をやめなかった。

「聞こえますかミネルバのクルー及びパイロットの方々?私はシラユキ・カグヤ　このホープガンダムのパイロットです。今回は、ちょっとした交渉をしに来ました」

そうして直ぐに向こうも応じるようにミネルバの艦長タリア・グラディスが映像に写ってきた。

「お久しぶりですね。グラディス艦長…まぁ、こんな事で再び再開などはしたくはなったんですけどね」とシラユキは表面上だけ辛そうな顔をした。

「ええ、そうね。でも話すならＭＳから降りて話すのが礼儀って物じゃないかしら?」

「面白い事を言いますね。今そちらに着艦したらあなた達の考える事はホープのデータを奪ってパイロットも捕縛って所でしょう?そんな馬鹿な事誰がするんですか?」とシラユキは若干相手を馬鹿にしつつも話を進めようとした。

「まぁ、そうでしょうね。それで話ってのは何かしら?」

「簡単なことですよ。先日此方にガイアガンダムが此処まで来たでしょう?こちらの要求はそのガンダムに乗っていたエクスンデッドのパイロットを此方に引き渡してくれるだけで良いんですよ」とシラユキは右腕を差し出しながらパイロットの引渡しを求めていた。

「其れは出来ないわ。仮に引き渡すとしても此方に利益が無いでしょう？」と如何やら対価交換がしたいらしい

「そうですね。じゃあ此方が秘密裏に入手したエクスンデッドの治療方法との交換で如何でしょうか？」と画像越しに一つのデータを開示した。

「なっ！？何でそんな情報を持っているの？ロドニアのラボにもそんな物は無かった筈よ？まさかあなた達連合と繋がってるんじゃ？」と疑ってくるが

「全く面白い冗談を言いますね。私達が彼らと同盟を組むなんて百害有って一利無しですよ。それで如何します？データを貰って彼女を渡すか…それともデータを破棄して彼女を渡さないか」とシラユキは途轍もなく気持ちの悪い薄ら笑いを浮かべて話していた。

「答えはノーよ。今此処で連合のエクスンデッドを渡す事は出来ないし、情報は虱潰(しらみつぶ)しに探せば見付かる筈でしょうね」

「そうですか。交渉は決裂ですか…それでは方法を変えましょう」と言って彼女は右腰に掛かっていた重突撃銃を上に向け連射した。

だが出てきたのは実弾ではなく眩しい位の赤と青を照らした照明弾だった。それが合図のようにミネルバの前方に有る左翼が一筋の大きなビーム砲によって撃ち貫かれた。

「あなた何をやったの！？」と流石のタリアも警告も無しにイキナリ攻撃を仕掛けてきたので驚きを隠しきれて居なかった。

「何って此れは先程の生易しい交渉とは違ってお願いでも何でも無いただの命令をしているんです。……次はありません。早くあなた達が捕縛したステラ・ルーシェを此方に引き渡しなさい」と先程とは違って完全に命令口調に成っていた。

「クッ！ブリッジ遮蔽・対ＭＳ用戦闘準備！ＭＳ出撃用意！」と人の話を全く聞かずにＭＳを出撃させようとするが

「遅いですよ？」と既にシラユキは其れを読んでいた様に急速に接近し白刀『雪』をブリッジへと突きつけていた。

「まぁ、そちらが用意しなくても此方は何時でも奪取は出来るんですけどね」とシラユキは言った瞬間リミッター解除で一気に距離を縮めていたエンジェルとキマイラがミネルバの一部へと格闘を仕掛けミネルバの装甲を？ぎ取り始めた。

この予想外の行動にモニター越しから見て判るようにミネルバのブリッジのメンバーが絶句していた。そしてシラユキもキマイラの行動を見続け、そして当たりを引いたかのように、純白のベッドを大事そうに両手で抱え込みミネルバから離れていた。

そして容態を確認するためかシュウが乗り込んでいるデスペアガンダムが上空から降りてきていた

そしてキマイラとエンジェルはシュウから命令でも受けたのか首を縦に振ってジャンク艦有る方向へと飛び去っていた。

「シュウさんステラさんの容態は如何でしたか？」とシラユキも流石に気になり聞いてみた。

「速めに救出したのが功をそうしたのかステラは先程の無茶苦茶な回収の時に負った切り傷以外は少し衰弱しているだけで特に問題は無かった」
と如何やら無事なようだが、切り傷に至っては完全に此方に非が有るだろう。

「さて、目的の人物を救ったんで、私達は此処らへんで失礼させてもらいますよ」

「待ちなさい！貴方達は一体何がしたいの！？こんな戦場や軍を荒らすような行動をして！」とタリアは如何やら理由を聞きたいようだ。

「戦場を荒らす行為ねぇ。じゃあ逆に聞くけど力を扱う貴方達は何ですか？貴方達平和平和と何時も提唱しているけど、実質何一つ行動を起こしてすら居ない。逆に撤退する気のあったオーブ軍を追撃して殺そうとする始末」とシュウは呆れつつも怒りを滲ませて来ていた。

「あれは貴方がタンホイザーを止めたから実質被害は無かったでしょう！」と当然反論してくるが

「へぇ、そういう言い訳するんだ。まぁ良いさ仮に俺があの攻撃止めずにオーブ軍に直撃してたら如何なってたと思う？判らないだろ？まず一つ目は『ザフト軍は撤退しようとしていた無抵抗のオーブ軍に対して攻撃をした』という事だ。此れによって運が悪ければ指示をしたと考えられる艦長・副長は確実に叩かれるのは間違いない。更には、ミネルバに命令を下した議長にも被害が被る危険性も否定できない。

二つ目は『ザフトの領地下に居るナチュラルの暴乱または連合によるザフトの領地に居る同じナチュラルの大量虐殺行為』此れだけ言えば判るよな？

あの時お前等の攻撃を阻止してなかったら世界各地で殺し合いが始まりザフトには多少なりとも被害が出て来ていた事は可能性として否定できないんだよ。何も考えずにただ敵を撃てばそれで終わりじゃない。撃った後如何言うことが起きるかも考えないと何時か死ぬぞ？」とシュウなりの忠告をしておいてホープとデスペアはミネルバから少しずつ離れた。

当然此れだけの被害を被って何かしらの反撃をしたそうだが、今此処で此方に攻撃を仕掛けても無駄な消耗と判り切っているのだろう。

デスペアとホープが機体をひるがえし撤退しようとしているのに何もせずただただその場で待機する以外他に無かった。

そしてミネルバの射程圏外から離れた時にシュウは

「全くこの程度で心が揺らぐぐらいなら戦場に出てくんなっての」と少々の苛立ちを覚えながらも愚痴を零していた。

「シュウさんもこの程度で苛立たないで下さいよ。今回の目的はステラの救出以外にミネルバに危機感を持たせる事も一つの任務なんですから」とシラユキはシュウをなだめていた。

そう今回の目的はステラ・ルーシェだけの救出ではないのだ。シュウは最近ミネルバが手柄を如何しても手に入れる為に躍起に成っていたのを知ったため、此処で一度喝を入れて置く事にしておいたのだ。確かに軍では戦績が一番重要だが、後の事を考えずにただ敵を倒すのは危険なのだ。

「しかし今回カグヤは面白いぐらい悪役に成っていたな」とシュウは苦笑していた。

「幾ら演技とは言え二度とあれは遣りたくないですね。それに何時も私にばっか汚れ役させてたまにはシュウさんがやってくださいよ！」とカグヤは今回ばかりは少々怒っているようだ。

「判ったよ。今度は俺が遣るけどカグヤ長距離射撃宜しくな？」とシュウも少し意地悪をしたくなった

「えっ！？酷いですよ！私が射撃苦手なのシュウさんが一番知ってるでしょうが！」

「ははっごめんごめん。さて冗談は此処までださっさと帰ってもう一人も治療するぞ」とシュウは、レバーを握りなおしてジャンク艦へと向かって行った

ＰＨＡＳＥ４２（後書き）

抹茶「はい、今回は一切戦闘シーンが有りませんでした。申し訳ない」

シュウ「そうだな。しかし今回はブリッジ制圧して一気に動きを止める作戦か」

シラユキ「一番戦艦の動きを止めるのに有効な手段では、有りますけど実質良い戦艦程取り付くのって難しいんですよね」

抹茶「そうらしいですね。まぁ詳しくは、自分も良く判りませんけど」

シュウ「お前はＦＰＳやってるのに知らないんだな。そういえば今回も感想来てたらしいな？」

抹茶「はい、ＲａｙＳｔｉｎｇｅｒさん・杉やんさん・前原圭一さん・＜ｏＯｏ＞さん有難う御座いました」

シラユキ「さて今回の後書きは此処まですかね？」

シラユキ・抹茶・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４３（前書き）

抹茶「あーもう今回は予想外に時間掛かっちまった」

シュウ「そうカリカリすんなって苛々してたら物事が上手くいかないぞ？」

シラユキ「そうですよ。もっと冷静に落ち着いて動いてください」

抹茶「す…すまない。だけど今回は小説書く時に限って用事が舞い込んで来るから中々打てなくて腹が立ってた」

シュウ「あっーそれは、もうご愁傷様だな」

シラユキ「絶対にＲＰＧで作者の運の数値見たら１なのは確実せいが出てきそうですよ」

抹茶「グフッ、それは言わないでくれ」

シュウ「まぁ、んな事は如何でも良いとして。今回はどんな話に成ってるんだ？」

抹茶「あんまし言いたくないので、さっさと本編入りましょう」

シラユキ「そうですね」

シラユキ・抹茶・シュウ「それでは本編をお楽しみ下さい！」

PHASE43

「ふぅ、全く酷い目に合ったもんだよ」とシュウは引っ掛れた所を消毒しながらベッドで眠ってるステラを見つめた。

そう、シュウは任務の後ステラの治療を行う為にステラを固定しているベルトを緩めたのだが、流石はガンダムのパイロットに選ばれる実力なのだろう医務室の中を暴れまくって抵抗してきた。

だが流石にザフトも何も薬が打ち込めなかったので当然ステラは衰弱しており数分暴れた後に再び倒れ始めた。それを機と見たシュウは鎮静剤を打ち込んだのだが、最後の抵抗とでも言うように爪で頬を引っかかれ少々血が出てしまった。唯一幸いだったと言えるのならつばさちゃんに被害が出ていない事だった。

「全くステラも変わったわね。研究所で一緒に居たときはもっと大人しかったのに」と昔を懐かしむような目に成っていた。

「そうなのか、やはり人格が変わるのは薬のせいでも有るんだろうな」

「かも知れないわね。如何見ても昔の時の大人しかった性格が今さっきのように急激に変わるなんて何かされない限りは有り得ないわ」とつばさちゃんも自分と同じ様な考えのようだ。

「こればっかりはステラじゃ無くて他のエクスンデッドの奴等に聞いといた方が良いんだろうな」とシュウはステラに話を聞くのは半分諦めていた。

「そうでしょうね。だってステラ何時も説明下手だったから常にアウルかスティングが傍に居なきゃ全く会話が出来てなかったしね」と今非常に大事な事を言っていた。

「えっ!?つばさちゃんってアウルとスティングとも知り合いなのか!?」とシュウはその情報を聞きだしたかった。

「え、ええ一応最終的に生き残った実験体は私を含めてアウル・スティング・ステラ位だったわ。途中から私は3人とは離れ離れだったけどね」と少し辛い過去だったのだろう顔をしかめながら話している

「そうか、無理に聞いて悪かったね」と軽く頭を撫でて部屋を出ようと踵を返そうとしたが

つばさちゃんが服の袖を掴んで「お願い。…もっと撫でて」と上目遣いでお願いしてくる。

「ん?判ったよ。幾らでも気が済むまで」と軽く微笑みながら撫でるが

(ヤッベェェェ!さっきのつばさちゃんマジで可愛かったな。……って!待て待て待て。こんなんじゃ俺ロリコンに成るんじゃ!?でも俺にはカグヤが居るし、これ以上進んだらカグヤからＯＨＡＮＡＳＨＩも否定できん)と心の中で大きな葛藤を繰り返していたシュウだった。

「んっ、有難うシュウ。これから用事有るんでしょ?頑張ってね」と屈託の無い笑顔で言ってくるが

「ああ、有難う。行ってくる」とシュウは別の意味で恐怖を感じつつも作戦室へと向かった。

だが其処には、先程まで一緒だったカグヤが居たが
「まさかシュウさん…貴方ロリコンなんですか？」と凄く失望したような目で見てくる

「ち…違う！俺はカグヤ一筋だ！勘違いしないでくれ！」と土下座をして謝っていたのだが

「じょ…冗談ですよシュウさん頭を下げないで下さい。其れに本音を聞けて嬉しいですし／／／」と少し顔を赤らめていた。

「いや、それでもゴメンな。カグヤにはやきもちを焼かせる気は無かったんだけどな」と頬を少しかきながら苦笑していた。

「もう、それだったら私にやきもち妬かせない様もっと構ってくださいね」と微笑んでくる

「判った判った。……さて、そろそろ本命に入ろうか」と言って先程の緩い表情から一変して真面目な表情となっていった。

「そうですね。取り敢えず先程再び放っていた強行偵察型ジンが監視を行っていた所ミネルバが移動を開始しました」と言って機材を操作しミネルバが動く映像と地図が現れた。

「そうか、このミネルバの進行方向から見るに、エーゲ海の有る方向だな」とシュウは冷静に判断し始めた。

「はい、シュウさんの予想通りこのまま行けばミネルバはエーゲ海のクレタ島沖で戦闘に成る事は間違いないでしょう」とカグヤは自信を持ってそう言い切っている

「ん？何でそう言い切れるんだ？ミネルバの目標の最終目標はジブラルタルだが接触する可能性は有るとは言い切れないぞ？」とシュウは怪訝そうな顔で聞いたが

「はぁ、シュウさんってたまに何処か抜けてますね。以前シュウさんが盗んできた連合兵の一般端末に地球のクレタ島沖でご丁寧に戦闘を行うとデカデカと書かれているんですよ」と言って此方に端末を向けてきた。

「そうなのか！？」と言ってシュウはカグヤから端末を受け取るが其処には確かにクレタ島沖でオーブ軍と協力してミネルバを落とす事が書かれていた。

しかも予想外な事に一般兵士用の端末でありながら作戦がオーブ軍を囮とし連合がミネルバが弱った隙を狙って全ての手柄を奪っていくと言うシンプルながらも自分たちが被害を負わない為の効率的な手段だ。此れでは同盟と言うよりただ利用出来る駒としか見れないだろう。

「まぁ、今のオーブは統率者がアホだからこう言う作戦に成っても可笑しくは無いけど、死んで貰っちゃ困る人が居るな」とシュウは目を細めながら二人の男性の写真を眺めていた。

其処にはトダカ一佐そしてアウル・ニーダが写った写真があった。

「そうですね。トダカさんは、私達の事を誰よりも支援してくれた

人ですからね」とカグヤが過去を懐かしむような目に成っていた。

そうシュウとシラユキが前大戦終了後に一緒に住み始めた事に対し事情を知っている人なら賛成する人たちも多かったのだが、逆に事情を知らない人たちからすると反対も多かったのだ。反対する多くの人の理由が『コーディネーターとナチュラルが一緒の家で住むなど信じられない』と何とも馬鹿馬鹿しい理由だった。

当然其れに怒りを持ってくれた仲間も何人か居たが『こっちはそんな事気にしてないから大丈夫だ』とだけ告げ怒りを納めて回ったのだ。

だが事情を知らない中で唯一此方を祝ってくれたのがトダカ一佐だったのだ。

最初はシュウもカグヤも疑問に思って『トダカさんは俺たちが一緒に暮らしててへんに思わないのか？』と聞いたことが有るのだが

『コーディネーターもナチュラルも結局は同じ人間です。差別する理由が何処にも有りません』と言い切って居たのだ。

その時からシュウとカグヤはオーブでこの人は信頼できると思い戦争が始まるまでの2年間の間お互いの事を知り合って居たのだ。

故に今ではカグヤとシュウにとってはトダカ一佐は家族と何ら変わりない絆を持っているのだ。

「ああ、そうだな。それじゃあそろそろ出るぞ、作戦は何時もの通り臨機応変に戦うぞ。僚機は俺がエンジェル　カグヤはキマイラにする」と言って格納庫へと歩き始めた。

だが格納庫に入った瞬間今まで全く話さなかったハイネが居た。
「ハイネ？如何したんだこんな所に居て？」と思わずシュウは聞いてしまった。
一応彼が乗っていたグフは元通り修理をしているので、今では四肢と頭部は新品と何ら変わらない位整備されている状態なのだ。
「ああ、シュウ　俺はお前と少し話がしたいんだが」と如何やら真面目な話のようだった。
「判った。カグヤ先にキマイラを連れて戦場まで行っておいてくれ」
「えっ？でもエンジェルは如何するんですか？」と疑問に成っていたが
「もしかしたら使うも知れないから此処に待機させておく」
と言った瞬間カグヤも理解したようにホープへ向かって歩き始めた。
「流石に此処で聞くのは悪いが時間が無いから手早く済ませたい。用事はなんだいハイネ？」
と顔をハイネに向けてそう聞いた。
「俺は、今まで議長の遣っている事が正しいと思って動いてきた。だが今までシュウが持ってきたレポートを全部読んで今じゃ議長の行動が怪しく感じてきた。もしシュウが持ってきたレポートが正しくて俺らが駒のように操られてたなら正直言って議長を許せない。だから頼むシュウ！俺も真実が知りたいだから俺をお前のチームに入れてくれ！」と頭を下げて頼んできた。

「どんな真実であろうと後悔はしない…それだけは誓えるか？」

「ああ、例え其れが非情な現実であっても俺は目を背けない。前を向いて歩き続けるさ」とハイネの目を見たが如何やら本気のようだ。

「判った。じゃあハイネ　今からお前にエンジェルを貸すよ。流石に慣れないとは思うがグフよりかは幾らか性能はマシなはずだ」

「ああ！有難うなシュウ　これから宜しく頼むぜ」と言って握手を求めてきた

「ああ、此方こそ宜しく頼むな」
と言って握り返しハイネはエンジェル　シュウはデスペアに乗り込み上部ハッチを開放した。

「シュウ・K・ライトニング　デスペア出る！」「ハイネ・ヴェステンフルス　エンジェル出るぞ！」と言って二機のガンダムはジャンク艦から飛び立ち戦場へと向かって行った。

やはり戦場は、シュウがカグヤを送り出していたせいでほぼ一方的な戦争と化していた。

だがカグヤは此方が戦場に到着した事に気付いたのか機体を翻らせ此方まで接近してきた。

「ようカグヤまかせっきりで悪かったな。それで今は如何言う状況だ？」とシュウは今の状況を聞いておいた。

「はい、一応ミネルバは此方を敵と認識しているようですが、全く持って此方には攻撃を仕掛けて来ません。ちなみにオーブの方は、戦闘能力だけを奪っておいてます」と状況を告げてくる

「そうか、それじゃあ引き続き各自の判断で戦闘続行。一応アビスガンダムに乗っているアウル・ニーダとタケミカズチに搭乗しているトダカ一佐の救出は絶対に行え！」と言ってシュウはその場を離れた。

「「了解！」」とハイネとカグヤも作戦を了解させその場を離れた。

そしてシュウはサーベルを腰から抜き出しサーベルを横に薙ぎ払った。其処に居たのは、シンが搭乗しているインパルスがサーベルを持って対抗していた。

「ステラを…ステラを返せよシュウ！」

と言ってもう一本サーベルを抜き放って左手のサーベルを頭上にそしてもう一本のサーベルを右手でコックピットを狙って横に薙いでこようとしていたが

「悪いが、其れは出来ない相談だな」と言ってデスペアの両腕を使ってインパルスの両腕を掴み攻撃を止め前蹴りを放った。

当然両腕を捕まれている状態で避けれるはずも無く。綺麗に吹き飛んでいた。

「あの子は、俺が守らなくちゃ駄目なんだ！アンタにだけは絶対に渡さない！」と諦めないように突撃してくるが

「何も知らないクソ子供（ガキ）が甘ったれた事言うんじゃねぇぞ」とシュウはサーベルで突き刺そうとしてる腕をそのまま掴み逆に引っ張り隙だらけの右腕をサーベルで切り落とす

「なんだと！？何も知らないって如何言うことだよ！？」と如何やらインパルスの腕をなくしても話を聞きたいようだ

「ホントお前は何も知らないんだな。もし俺があのままステラを奪ってなくてそのまま放っておいたら確実に死んでいたぞ。それにお前等の軍医は、副作用が怖いからマトモな治療を一個も施してなかったよな？お前ホントにあの子を救う気有るのか？」と言いながら今度はシュウが攻撃を仕掛けていく。

当然シンも反撃をする為にサーベルを抜いて斬りかかって来るが

「その程度なら甘いっ！」と言って左腕を掴み膝蹴りを食らわせそのまま空中で縦に一回転しかかと落しを叩き込んだ。

当然下は海なのだが、先程の重力とデスペアの重量を合わせた攻撃なので暫くは気絶して海へと沈んでいくだろう。

「少しは頭を冷やしやがれバカシン」とだけ呟きつつも海上へと戻るが手柄目当てなのだろう6機ほどのウィンダムを此方を取り囲んでいた。

シュウは「連合はこの機体の危険性一切教えてないのか？だったらオーブよりもっと重傷すぎるぞ」と頭を押さえながらやれやれとしてしまった。

だが何もしない事を隙と思ってしまったのか6機のウィンダムが一斉にサーベルを振り上げて斬りかかって来るが

「所詮は、連合に実力を求めようとした俺が馬鹿だったか」とだけ呟きビームサイズをその場で展開しデスペアを支点としその場で一回転した。

そして手柄を狙おうとして居たウィンダム達は全機コックピットだけが丁寧に切り裂かれ無残に海へと落ち爆散していく。

そしてそのウィンダムによって起きてしまった赤い爆炎がデスペアを赤く照らし出し、獲物を狩るような赤い一対のガンダムアイが鈍く光その場に居た連合の兵士達を畏怖させてしまった。

当然恐怖に陥った連合の兵士達はに冷静に物事を判断する事は出来ず

「さぁ、次は誰が死にたいのかな？死にたい奴はさっさと前に出てきな命を狩ってやるよ」と不気味な笑いを上げながらそう告げた。

その言葉だけでウィンダムに乗っていた連合の兵士は我先にと言わんばかりに戦場から離れていこうとしていたが。

一機のウィンダムが赤紫のウィンダムによって打ち貫かれていた。

そして命令とばかりに「さっきの奴みたいに死にたくなければさっさとザフトとあの黒いガンダムを落とせ！」と叫んでいた。

当然死にたくないウィンダムのパイロット達は死に物狂いで襲いかかろうとライフルやサーベルを展開し迫ってくるが、その瞬間３機のウィンダムが弾によって貫通し爆発しそしてビームによって貫かれた。

「やれやれ、お前らは心配性だな。俺が簡単に殺されるとでも思ってるのか？」とウィンダム達を囲んでいた３機のＭＳにそう言い放った。

「全くシュウさんは、そんな余裕持ってたら落とされますよ？」「一人だけ撃墜数増やそうたって層はいかないぜシュウ」とハイネとシラユキが皮肉な事を言いつつも笑っていた。

「ったく、まぁ良い各機最終目標は、赤紫のウィンダムだ！絶対に逃がすなよ！」「「了解」」と言ってキマイラ・エンジェル・デスペア・ホープによる一方的な殺戮劇が始まった。

～ハイネＳＩＤＥ～

「こんな一対多数なんて久々だな。だが…この機体ならやれる！」とガンソードを二本抜き出し背中に切りかかってくるウィンダムに振り向きざまコックピットを横に裂きそしてそして左右から迫ってきたウィンダム二機を両腕を左右に突き出しサーベルを展開させほぼ同時に２機のウィンダムのコックピットを貫く。

流石に近距離戦はマズイと思ったのだろう今度は６機のウィンダムがバックパックのミサイルランチャー・ライフルを連射してくるが

「えっと確かシュウたちは…リミッター解除３０秒間」とためしに

ハイネは起動させ始めた。

そして其れと同時にミサイルランチャーとライフルはエンジェルに直撃し爆風が起きたが……

「グフとは違うんだよ！グフとはぁ！」と何時の間にか一機のウィンダムの背後に回り縦に一刀両断していた。

そして急激な動きに戸惑っているウィンダムをハイネは見逃す事無く2機のウィンダムを貫通弾によってパックパックを撃ち抜き中に内蔵されているミサイルランチャーを誘爆させウィンダムを大破し残り3機のウィンダムに振り向くが

「辞めてくれ！撃たないでくれこっちにはもう戦う意思なんて無い！」と何処に持っていたのか謎な白旗を振り投降していた。

一瞬如何するか戸惑ってしまったハイネでは有るが直ぐにシュウから一枚のデータが送られ脱出する手段が書かれていた。

「だったら誓えそのMSで人たちを襲わないと」と言ってガンソードの剣先をウィンダムたちへと向ける

「判った！絶対に人を殺したりはしない。だから見逃してくれ！」と如何やら演技ではなく真面目に言っているようだった。

「じゃあ今からデータを送る其れにそって脱出しな」と言って3機のウィンダムにデータを送った。そしてウィンダム達はそれぞれ持っている武装をその場で破棄し

「恩にきる」と言って戦場から消えていった。

「全くシュウは甘いんだが厳しいんだか良く判らないな。……だがそれがアイツの良い所なんだろうな」とハイネは呟き心配は無いとは思うがキマイラの援護へと向かった。

～ハイネＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

～カグヤＳＩＤＥ～

「ああ、もう！何で勝敗は決まってるのに逃げないんですか！」と目の前のウィンダム達にそう叫んだ。

だが「こっちだって死にたくねぇんだ！それにその機体を落とせれば俺だって大佐みたいに」と如何やら死に物狂いだけでなく欲も有るようだった。

「この下種が！貴方達みたいな人が居るから！」と言いながらシールドミョルニルをウィンダム目掛けて飛ばす

「はんっ！そんな簡単な攻撃・・・」と言っている間に既にウィンダムは落ちていた。

「全くお喋りが過ぎますね。それに態々直線的なのは囮本命はライフルなんですよ」と笑いながら咄嗟に引き抜いていたビームライフルを再び腰へと掛けた。

だがそのゆったりした行動に対して怒りを感じた何機かのウィンダムはビームライフルを連射しホープを爆風へと包み込んだ。

「殺ったか？」「判らん。だがあれだけの物を喰らえば無傷じゃすまないだろう」「此れで俺らも昇格だ！」と各々喜んでいる中爆風

の中から突如弾が放たれてきた。
気を抜いていたウィンダム達は防ぐ事も出来ずただただガトリングの直撃を受け、無様に海へと沈んでいった。

「一つ忠告をしてあげますよ。最後まで敵を倒せてるかどうか確認するまでは気を抜いては駄目ですよ？」と言い放ちながら煙が晴れてきていた。

そこには４つのフィン・ファンネルによって発生していたピラミッド型のバリアを発生していて無傷なホープが存在していた。

「改めて説明書読んでて助かりましたね。……このホープ貴方達程度には、落とさせませんよ？」と言いながら腰の『堅守』『雪』を抜き出し辛うじて生き残った残りの２機のウィンダムに対して刀を横に薙ぎ払った。

流石のウィンダムたちも直撃しては即死だと判っては居たのだが、バックパックやブースターなどに先程のガトリングによって支障が起きたのか避ける事無くコックピットは切り裂かれ爆発する事無く海へと沈んでいった。

「ふぅ、死ぬくらいなら戦場に出て欲しくないですね。こう言うのをきっと無駄な犠牲って言うんでしょうね」と言いながら気を抜いた瞬間

海面からの攻撃警告音が鳴り響き「要約狙いの機体が来ましたか」と言いつつも機体を上昇させ三本のビームを回避した。

だが上空に居た所でアビスは全く浮上する事は様子は全く見られな

いので

「しょうがないですね。…水中戦は苦手なんですけどやるしかないですよね」と覚悟を決め水中へと潜っていった。

そして其れを待っていたかのようにアビスのパイロットが「お前の兄弟機には酷い目に合わされたからな。……今度は俺がお前の機体をボロボロにしてやるよ！」と水の中で３つのビーム砲を放ってくるが

「何時誰が貴方の得意な戦場で戦うと言いました？…全パーツ解放１分間」と言い放ちアビスへと急接近し始めた。

「クソッ！何なんだよコイツ急に動きが！」と近付いた瞬間ランスを横薙ぎに払おうとしたが

「その程度で当てようなんて舐めないで下さい！」そう言い放ちながら横に払われていたビームランスを右腕一本で掴み取っていた。

「なっ！？マジかよ！？」と焦っている間にカグヤは咄嗟にランスを手放しアビスに近付き両脇を掴んで海面へと投げ飛ばした。

「あと…３０秒」と解放の時間を確認しつつホープも後を追うように海面へと飛び出し、空中を舞っているアビスに対しシールドミョルニルを括り付け一気に近くに有った小島へと叩き付けた。

そしてアビスは機体を完全に叩きつけられ仰向けの状態で此方の方を向いて態勢を起こそうとしているが「そのまま倒れ続けてくださいね」と再び頭部を掴み地面へと叩き付けた。

「クッてめぇふざけんなよ！」とアビスのパイロットが叫んできているが

「ふざけてる？失礼ですね。何時も私達は真面目に行動していますよ。ただ人を駒としか見てない連合と違ってね」と言いながら両手を握ってアビスのコックピットと頭部のメインカメラを殴り始めた。

いっけん無駄な行為にも見えるような攻撃でも有るのだが、此れは敵パイロットを殺す為にやっている行動ではないのだ。正確には敵を恐怖を陥れる為に行っているのだ。元々人間と言う生き物は暗い部屋に閉じ込められると物事を正しく判断する事が出来ず。外からゆっくり与えられる衝撃や音だけでも恐怖を植えつける事が可能なのだ。

そうやって1分間だけ外から殴り続けて装甲が少々凹んでいる中様子を見ていたが如何やら効果覿面（てきめん）なのか此方は隙だらけというのに全く攻撃すらせず寧ろ両手で頭を抱え込んで恐怖から逃げようと必死な所が見える。

流石に此処まで来ると攻撃するのも気が退けてくるので手持ち無沙汰のキマイラにアビスを回収させ戦場を見回した。

既に戦場もＭＳの数が減り撤退していく艦が多く見られた。そこには全く被害すら出していないオーブ軍までもが撤退していた。

「可笑しいですね？シュウさんの聞いた話じゃ此処でタケミカズチが沈んでフリーダムがまた戦場を荒らすはずなんですが……考えられる事は一つだけですね。此れがシュウさんの言っていた原作ブレイクって奴ですか」と言いながらシュウの居る方向へと機体を向けた。

其処に居たのは、予想通り無傷で未だに顕在していたデスペアの姿が映っていた。しかし次の瞬間ウィンダムの最後の一機を落とした瞬間デスペアガンダムの左腕が斬りおとされていた……。

～カグヤＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「チッ！」

とシュウは舌打ちしながら自分の目の前に居る機体に対して後方に下がり距離を取っていた。

そうシュウは、今さっきまで相手していたウィンダムを撃墜し戦闘終了だと思い気を抜いてしまって居たのだが、それが失敗だったのだろう。急激に機体から警告音が鳴り始め、ギリギリで反応し僅かに機体を動かしたが、それでも機体の直撃は回避する事すら出来ず左腕がエクスカリバーによって斬り飛ばされてしまった。

「ようやく隙を見せてくれたなシュウ。ずっと機体にダメージを与えられる隙を狙っていたよ」と顔が見えないがシンはきっと今ひどく気味の悪い笑顔をしているのだろう。

「ふぅん。左腕を?ぎ取った程度でデスペアが弱体化すると思っているんだなシン君は?」

「ああ　死にたくなかったらステラを差し出して土下座すれば逃がさない事も無いぞ?」と挑発的発言をしてくるが

「戯言だな。左腕一本を失っても実力さは変わらないよ。何時まで経っても君は俺には勝てないさ。それこそ実力も今自分が背負ってる物の重さもな!」と言ってサーベルや刀を抜かずに素手で突っ込

んで言った。

「何だと!?・・・だけど舐めるな!武装が無い状態で勝てると思ってるのか!」と叫びながらエクスカリバーを正面に持ってきて突っ込んできたが

「ああ勝てると思ってるさ」と呟きながらエクスカリバーの突きを擦れ擦れで避け残った右腕でインパルスの頭部を掴み

「パーツ解放15秒　エネルギーを右腕に移行」

と言った瞬間デスペアの残った右腕もギシギシと軋みを上げながらインパルスの頭部を握りつぶし?ぎ取った。

「ハハッ、此れで頭部なくなったから少しは軽くなったんだから感謝はして欲しいな」とシュウは笑いながらサーベルを展開した。

「なんだと!たかだかメインカメラをやった位で調子に乗るな!」とサーベルに持ち替えて突こうとするが

「攻撃が直線過ぎて当らないよ。もっと近付いて体術やサブ武器も組み込んで戦わないと落とせないよ・・・見本を見せてやる!」そう言って突っ込んできている中右腕を突き出しミサイルランチャーを撃ち始めたそして撃ち終わったと同時にデスペアも突撃した。

インパルスは突っ込んでいる最中だったのでホーミングの攻撃を避けれず自分から直撃を受け多少の体勢を崩していた。その隙を見逃す訳も無くシュウは見逃す事無く左腕で持っているサーベルを容赦なく振り下ろし持っているサーベルごとインパルスの腕を斬りおとし、その場でコックピットに当るように前蹴りを食らわせ無理やり距離を離した。

「ほらな。俺が武装一個でも持ってるだけでも実力の差が開くんだよ」と格の違いを見せ付けていた。

だが未だに諦める気は無いのか「ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」と我も忘れて突っ込んでくるが残っていたバックパック・左腕・両足は何時の間にかカグヤが放っていたフィン・ファンネルによって撃ち抜かれた。

「大丈夫ですかシュウさん？」とカグヤは心配して通信を送ってきてくれているので

「ああ、大丈夫だ。しかし落とせる奴は落とせなかったし原作も話が少し拗(ねじ)れて来るかもな」と一抹の不安を覚えながらも残っていたミネルバとそのＭＳたちにも興味を示さないように一度も向かずにシュウ達は戦場を去って行った。

そしてただ戦場に残っていったのはシンの圧倒的な実力の差による敗北に対しての悲しみの叫び声とミネルバが全くダメージを受けていないでクルー達が安堵しているという矛盾している物だけが残っていた。

ＰＨＡＳＥ４３（後書き）

抹茶「今回は此処までと成ります」

シュウ「デスペアは今回少破したか…あのバカシンめ」

シラユキ「何時も以上にシュウさん苛ついてますね。作者止めて下さいよ」

抹茶「よし、拒否する。今手出したら確実にやられそうだ」

シラユキ「じゃあ私はその拒否を拒否します！」

抹茶「ヒデェ！鬼かお前は！」

シュウ「煩いぞ作者少し黙ってろ！」

パンッパンッ

抹茶「な・・・なんで俺だけ」

シラユキ「それは作者がボコられ要因だからだと思いますよ。そう言えば今回感想来てましたね？」

抹茶「はい、Ｒａｙｓｔｉｎｇｅｒさん・アンティークー珈琲店ーさん有難う御座いました」

シラユキ「さて、今回は此処までですかね」

抹茶「そうだな・・・シュウ閉めるからそろそろ正気に戻れ」

シュウ「判った。今度シンとインパルスは滅多打ちにしてやる」

抹茶「何か最後物騒な子と言ってるけどまぁ良いか」

抹茶・シュウ・シラユキ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４４（前書き）

抹茶「皆さんお待たせして申し訳ありませんでした。ようやく復活しました」

シュウ「要約帰ってきたか作者死亡でも起きたのかと思ったぞ？」

カグヤ「ホントですよどうせやる気失せたから書く気無くなったとかそう言う奴ですよね」

抹茶「いや、それがマジで車にひかれちゃいました」

カグヤ・シュウ「「は？」」

抹茶「しかもその一週間前には愛犬が死んじゃうしで精神的にも身体的にも追い込まれて大変だったんですよ」

シュウ「あーそのなんだご愁傷様」

カグヤ「怪我のほうは大丈夫なんですか？」

抹茶「ご心配なく、何とか打撲と擦過傷で済みましたから。さて暗い話はここまでです、此処からは心機一転また書き始めますよ」

シュウ「そうか、それじゃ何時ものやるか」

シュウ・抹茶・カグヤ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE44

「全くデスペアの左腕が持って行かれるのは予想外だったなぁ」とシュウは愚痴をこぼしながらも修理を行っていた。

「いや、シュウ。俺はあの時絶対に殺されそうな一撃をギリギリで回避して左腕一本で済んでる事とインパルスを中破まで行っている方に驚きを隠せないぞ？」

「ん？あれ位訓練すれば普通だろ？……それにシン達の行動パターンって真っ直ぐ過ぎるから逆に読みやすいんだよ」とシュウは7割方修理したデスペアを見つつそう言っておいた

「へぇ、じゃあどういう事されるとシュウも不味いんだ？」と少しハイネも興味があるようだ

「そうだな。…例えばサーベルで斬り合ってる時に後ろから弾幕が張って来られたりとかインパルスのレッグフライヤーを装着じゃなくてこっちに突っ込ませて来たりすると回避し辛いかな」

「そうなのか、でも辛い程度で対処する事は出来るんだろ？」

「そうだね。まぁ対処する事は出来るけど戦闘中に何処か一部反応が悪い事が起きたら確実に不味いだろうね」とシュウはコックピットの中に入り込み切り落とされた左腕の回路を改めて確認していた。

ここの所多くの戦闘が有った事や4機の機体のリミッター解除やパーツ解放のせいでMSに使われる電子回路や接続コードが戦闘終了後焼き切れたり部品にヒビが入っているなどして取り替える事が多

かったのだが今回の件でエンジェル・キマイラ・ホープは何とかマトモな修理を施せたのだがデスペアは今回の一件で全体の七割ほどしか修理出来ていなかったのだ。

「このままじゃ確実に不調を起こすだろうな。……この際何処かの街によって部品を集めておくか」そう言って今出来る限りデスペアに修理を行い最低限動かせる所まで修復させようとキーボードを叩いていたが唐突にドアの開く音が聞こえたのでシュウとハイネはその音の方向へと顔を向けた。

其処にいたのは、面倒臭そうにしつつも車椅子を動かして此方に近づいて来ようとしていたつばさちゃんが居た。

「あれ？もう起きても大丈夫なのかいつばさちゃん？」とシュウは心配しそう聞いておいた。

一応診断結果では、体内に残っていたナノマシンの殆どは駆除されており体は正常通り動く様には成って居たのだがシュウは、少し様子を見る為に寝かせておいたのだがこうして動き回っていたので心配したのだ

「おかげさまで大丈夫よ。それよりもカグヤさんがシュウを探してたよ？」

「カグヤが？何の用なんだろう…つばさちゃん何か聞いていないか？」

とシュウも思い当たる節がなくつばさに聞いてみた。

「いや、判らないわ。でも何かすごく深刻そうな顔をしていたのは確かね」

「そうか、ありがとう。・・・取敢えずカグヤに会ってからだな。話はそれからだ」
と車椅子の後ろの取っ手を掴みシュウとつばさとハイネはハンガーを出てカグヤのもとへと向かい始めた

～作戦室～
「シュウさん来てくれましたか。」と確かにカグヤは深刻そうな目で此方を見つめて来ていた。

「如何したんだカグヤ?簡単な件ならお前に一存してるけどお前だけで解決できないことって?」とシュウは怪訝そうな顔をしつつもそう聞いた

「それが、これを見てください」と一つのプリントされた真新しい紙が一つ机の上を丸まって転がっていた。

「何だこれ?」とハイネは言いつつも紙を広げシュウはそれを隣で覗き込んだ。

其処に書かれていたのは、どうやって此方のＩＤを知ったのかは知らないが、来ている所は嘗ての仲間がいるアークエンジェルからの伝達だった。そして書かれているのはたった一行の簡素な言葉だっ

た。

「話がしたい。指定しているポイントに来てほしい」

「如何考えても怪しいだろシュウ。以前攻撃してきたのに話がしたいってどんな心変わりなんだよ」とハイネは会うのは嫌そうにしていた

「それは、有り得ませんよ！私たちは前大戦で共に戦った仲間なんですよ？話がしたいのは当然でしょう！」とカグヤはどうやらキラ達と会いたいようだ。

「そう甘く見ていると行き成り撃たれるかもしれないぞ！」

「彼らを知らない癖に良くそんな事が言えますね。この臆病者！」

とシュウが考え込んでいる間にも二人の討論は続いていた。

そしてシュウは一つの決断を下した「俺はキラ達に会ってみたいと思う」と明確に答えた

瞬間ハイネはこちらを睨み付けて

「正気かシュウ！？何も警戒せずにホイホイ行くなんて」と言ってくるが

「まぁ、待てハイネ。こっちも何の考えもなしにただアークエンジェルに乗り込むなんて馬鹿な考えはしないさ、ハイネには俺らがアークエンジェルに乗り込んでいる間にエンジェルに乗り込んでアークエンジェルに何時でも攻撃できるように武装を持って隠れてほし

い」

そうシュウも嘗ての仲間を疑う事は余りしたくないのだが、以前カグヤが攻撃されてることを考えると何かしらの対処をしなければいけないのは当然だろう。

「判ったシュウがそういう考えなら俺はもう何も言う気はない」
「シュウさんがそういうなら」
そう言ってハイネとカグヤはしぶしぶ納得しながら作戦室を出て行った。

そしてシュウは一人作戦室へと残りＰＣの前に座り込み連合の情報を得る為にキーボードを叩き始めた。そして何度か危険な綱を渡りながらようやく一つの情報を手に入れた。

其処に書かれていたのはＧＦＡＳ－Ｘ１『デストロイ』

映像に映し出されているのはほぼガンダムタイプと同じ形をしているのだが、その違いはやはりその問題は計測上ではデスペアに比べてデストロイの全高はデスペアの二倍も有るので、ただの的にしか成らないと考えがちだが、装備にゲルズゲーやザムザザーに装備されている陽電子リフレクターが装備されているせいで強制的に実弾を打ち込むか接近戦を挑むしかないのだ。

だが実弾を撃ち込んだ所でデストロイは元々の装甲は厚いうえにヴァリアブルフェイズシフト装甲まで有るので余り意味は成さないだろう。

故に最後の選択肢は「格闘で確実に叩き落とすしかないのか」と愚痴をこぼしてしまった。

それが最良の選択と思われがちなのだがシュウは一つの事を危惧してしまった。それはデストロイに機体を掴まれた時の対処だ……たとえ此方がＰＳ装甲を着けているとは言え結局は圧倒的な力の前では握りつぶされるのが当たり前だろう。それがコックピットだというのならもっと最悪なことが起きるだろう。

そう考えるとシュウは、頭を悩ませながらも「デストロイのコックピットの装甲を引き剥がして中のパイロットを無理やり救出するべきか？」とシュウは一人朝日が昇るまで対策を考え込んでいた

PHASE44（後書き）

シュウ「また中途半端なところで終わらせたな・・・」

抹茶「すいません、続き書いてたら上手く切る所が此処しか思いつかなくて」

カグヤ「そしてデスペアが意味深的な事起きてますが大丈夫ですよね？」

抹茶「まぁ、気のせいでしょう。デスペアが落ちたら新しい機体を考えるのもまた作者の仕事ですから」

シュウ「ちょっと待て？さっきの言葉じゃなんかデスペアが落ちそうな気がしてきたんだが？」

抹茶「気のせいでしょう？」

カグヤ「まぁ、ネタバレに成るかも知れないのでこの話は辞めましょう。取り敢えず今回も感想が来たんですよね？」

抹茶「そうですね。彩理さんご指摘有難う御座いました」

カグヤ「今回は此処まで位ですかね？」

抹茶「でしょうね。取り敢えず自分は頑張って４日更新を目指そうと思っているので待っててくださいね」

抹茶・カグヤ・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどう

なるのか?次回お楽しみに!」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４５（前書き）

抹茶「取り敢えず何時も通りの４日更新始めました」

シュウ「何かかき氷始めました。みたいに聞こえるのは気のせいか？」

抹茶「気のせいじゃないんですかね？」

カグヤ「そうですかね？そういえば今回はどんな話になるんですか？」

抹茶「……い…言えない」

シュウ「おいおい、なんでそんなにも汗かいてるんだ？」

カグヤ「まさか酷い事に成ってませんよね？」

抹茶「ここは逃げる勝ちだ！」

シュウ「逃がすか！待て作者！」

カグヤ「…逃げるのは良いんですけど前書き如何するんですかね？」

カグヤ「仕方ありません今回だけは私だけがやりましょう」

カグヤ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE45

「…何で此処にこいつ等が居るんだ?」とシュウはキラ達と対面しそう言った

だが其れを答えたのはキラ達ではなくアマギ一佐が答えてきた。

「それは、私たちがセイラン家を見限ったからです。此のままではオーブの意思は無くなり兵は無駄死にするだけです。故に私たちは今や信用できるキラ様たちと連絡を取り合流したのです」とこの時シュウは何故クレタ島沖でオーブ軍が出てこなかったのか疑問だったのだがアマギ一佐の言った内容で疑問が解消された。

「成るほど。クレタ島沖での連合との協力はフェイク…本当はキラさん達と合流するのが目的だったんですね」とカグヤも納得していた。

「ええ、そうよ。今回の件でオーブ軍は少なからず戦闘要員を失って真面に戦争する事も出来ない筈よ」とマリューさんが答えてくるが

「だけど、俺らに話したい事は此れだけじゃないんだろ?オーブの事だったら連絡越しで伝えれば良い事だし…何より俺はお前らの事を許す気はない」とシュウは声冷たくそう言い放った。

「ああ、それについては此方が申し訳無いとは、感じているさ。…ただ今の俺達に出来る事を考えたらあれしかなかったんだ」とムウさんが弁明してくるが

「あれしか無かっただと?無理やり戦争に介入して『撃ちたくない』

と言っておきながら出てきて誰にも味方をせずただ戦場を荒らす無茶苦茶な行為だけ行って…余りふざけるなよ？」

だが「私は…私はオーブを守りたくて戦争に介入してそれで…」とカガリが何かを言おうとしていたが

「だから何ですか？オーブを守りたい？…だったら最初からずっとオーブ軍にでも所属して戦い続ければ良かったじゃないですか。それなのに守るべき対象まで攻撃して他の人達は全員叩き落として正直私達を舐めてませんか？」とカグヤも怒りを堪えきれずに言葉に怒気が含まれていた。

「取り敢えず…明確な敵も見つけられないまま、ただ戦場に出て荒らすだけだったら出てくるな。正直言って兵士が無駄死にするのが見えてくる」とシュウも少し怒りを抑えてそう言い切った

「じゃあ僕たちは間違ってるんですか？本当は僕たちが遣る事よりシュウさんの方が正しくて、それで僕たちの遣ってる事は馬鹿げてるんですか？」とキラが俯いてこちらに向かって聞いてくる

そしてアークエンジェルのクルーたちもその答えを聞くためにシュウに視線を移していた。

だがシュウは「それは誰にも判らないさ」

思わず予想外の答えを言いカグヤを含め全員が驚きを隠せず目を丸くしていた。

「確かに今回キラ君達が遣った事は多くの人達から見たら馬鹿げた事なんだろうけど、結局は何が正しい何が悪いなんかは誰にも判んないんだよ。…ただ判り切ってるのは、自分が正しいと思った事は

最後まで遣り遂げるって信念が必要なんだよ。俺はただそれを遣ってるだけさ」

「とまぁ、それでもたかだか２０年しか生きて無い子供の戯言だ。適当に受け流してくれよ」とシュウは雰囲気を一変させるために笑いながらそう言った。

「いや、ただそれだけの言葉で十分さ。今さっきの俺達には道はなかったがシュウのお蔭で何とか新しい道が見えてきたさ」とムウも先ほどとは打って変わって顔が変わっていた。

それは不安定に漂う決意から新たなしっかりとした決意を持った顔に変わっていた。

それを見たシュウは（此れでアークエンジェルの方も道を間違えずに進んで行きそうだな）と少しの安堵を感じていたがそれは束の間の平和でしかなかった。

急遽（きゅうきょ）シュウが持ち込んでいた小型の端末が断続的に震え始めた。一瞬何事かとシュウも思い端末から直ぐにハイネの顔と連合の情報が入り始めた。

「此方のハイネだ。シュウ聞こえるか？連合が動き始めたらしい。今は強硬偵察型ジンが後を追っているがデストロイの進行方向に街が幾つか有りやがる。連合の奴らは避難勧告を出さずに攻め続けてやがる。このままじゃ壊滅するぞ！」とハイネが説明してくる

その事を聞いたシュウはすぐさまデスペアに乗り込むために隣接していたホームに戻ろうとするが、

「シュウ…今回の件は貴方たち2人じゃ荷が重すぎます。私たちも手伝うわ」とマリューが提案してくるが

「良いのか?これは俺たちが勝手にやる誰にも喜ばれない意味も無い事なんだぞ?」

「そんな事は有りませんよ。…このまま放っておいたらそのMSは確実に街を焼き払うんですよね?だったら今力の有る僕達が何とかしなくちゃ」

「それに感謝もされず戦ってきたのは前大戦も同じだろ?今更名声とかそんな事気にする事なんか無いさ。それに困ったときはお互い様だろ」とキラとムウの順番で答えきて

シュウは少し悩みつつも「判った。手伝ってくれ危なくなったら撤退してくれても構わないデータは後で機体に送っておくから後でな」とシュウとカグヤは駆け足でアークエンジェルとジャンク艦を繋ぐパイプを駆け足で渡りMSに乗り込んだ。

「判っているなカグヤ今回は時間との勝負でもあるんだ。速攻で勝負を決めるぞ」と忠告をしておく

「判ってます。…それにしても幾らなんでも連合の遣り方には何時まで経っても反吐が出ますね」と言いながらMSを始動させていく。

そしてお互いの準備が整ったと同時にハッチも開き終わりシュウとカグヤそしてキラとムウは自分たちの機体を駆って戦場へと向かい始めた戦争に無関係な人たちを殺す破壊を齎(もたら)すものを壊すために

そしてシュウ達が到着した頃には既に一つの街が壊滅しており、少しでも動きを止める為に先行していたハイネの乗っているエンジェルも機体は、ボロボロに成っていた。

「大丈夫かハイネ？」とシュウは機体とハイネを状態を確認する為にそう聞いた。

「ああ、何とかな。…だがこれ以上の戦闘は少々無理そうだ。連合の奴らあのデカブツだけじゃなくてＭＳも多く投入してやがった。おかげでこのざまだ」とハイネは悔しそうに歯を食いしばっていた。

「そうか、ありがとうハイネ。先に戻ってくれて構わない此処から先は俺たちが引き受ける」そう言ってシュウはモニターに映っていたデストロイを睨み付けていた。

「生きて帰ってくることを願うぜシュウ」
とハイネがそういった後にエンジェルは戦闘区域を離れ戦艦へと撤退していった。

そうしてシュウは「各機散開！３人は此方がデストロイを破壊するまでの時間稼ぎを行ってほしい」と命令を下した。

「何か策があるんですか？でなければあの機体は一機じゃ到底」と

流石のキラも心配してくるが

「心配するな。でなけりゃこんな事言わないさ」

そうしてシュウは外部からの話を聞かない為に無線を切り一人デストロイの前方へと機体を進めため息をついた。

「はぁ、連合も何でこんな兵器作るのかな?…余計俺の怒りを買うだけだと何故判んないだろうな?」と目の前の機体に呟きながら腰に掛けていたバスターライフルをデストロイへと撃ち込んだ

だが殆どチャージもせずに撃ったせいかデストロイに傷を着けるまでには、至らなかった。だが先程の攻撃によって此方の存在を気付かせるのには十分だったのかデストロイの目は確実に此方に向いており。

まるで邪魔なハエを叩き落とすかのように指に着いている5つのビーム砲が此方へと向けられそして放たれた。

だがシュウも撃たれる訳にもいかないので上空へと上がりデストロイの頭部を眼前へと捉えたが既に胸に装備されていたスーパースキュラのチャージが開始していたのか胸に砲口にエネルギーが貯まっていくのが良く判ってしまった。

シュウは一瞬背筋が冷える思いがしたが直ぐに「リミッター解除1分!」と言いながらすぐさまその場から退避した。その数十秒後スーパースキュラは撃ち放たれ、キラ・ムウ・カグヤは辛うじて回避できたものの近くにいた連合のMSはそれを回避することも間に合わずただただ火線へと巻き込まれていった。

だがシュウは「こんな事して何時までも許されると思うなよ！」と叫びながらもまだ残っている1分30秒でデストロイの頭部へと近づき腰からビームサイズを展開し口のあたりにあるドライツェーンを中心に大きく薙ぎ払い頭部を破壊した。

だがこのビームサイズを大きく薙ぎ払ったのは失敗だっただろう。何故なら気づいた時にはデストロイの手のひらがデスペアへと迫っており、シュウは反応しきれずに機体を掴まれていた。

シュウはこの時自分の先ほどの行動に苛立ちながらも「リミッター解除キャンセル…その後解放3分間腕と脚部だけに回せ！」と言いながらもデストロイは此方の機体を握りつぶそうとしているのかコックピットから警告音が煩いほどに鳴り響いていた。

「こんな所で死んでたまるもんかよ！」と叫びながら両手をデストロイの手に置いて力を入れ続けた。

だが余りにもビクともせず一瞬駄目かとシュウも思ってしまったが次の瞬間一瞬だけ手が緩むのを感じすぐさまシュウは右腕に収納されているミサイルランチャーをその場で全弾撃ち込み爆風によって手のひらから抜け出した。

だが零距離からミサイルを撃ったせいか既に右腕は原形も止めずにひしゃげて煙を上げていた。

そしてシュウはまだ殆ど傷の着いていないデストロイを見つつも機体のダメージ量を確認していった。そして全体の6割ほどがダメージを受けているにも関わらず

「まだやれるよな…最後まで耐えてくれよデスペア」と呟きながら

解放の時間が残って居る内に一気に勝負に出ようとシュウはボロボロのデスペアを駆りながらもデストロイへと近付こうとするが此方を完全に破壊する気なのか両手・胸のビーム砲が完全に此方に向けられていた。

デスペアの予測ではこのまま行けば直撃は免れないだろうと表示しているが

だがシュウは「だから如何した！直撃するから逃げろだと！？そんな事出来るもんかよ俺は逃げない、絶対にデストロイのパイロットを救うんだ！だからお前の可能性を魅せてみろデスペア！」と怒鳴りながらも言葉も通じるはずもないデスペアにそう叫んだ瞬間

（…リミッター解除）とモニターに有り得ない表示が書き込まれていた…。

本来ならばリミッター解除と解放は同時に使用してはならないのだ、その大きな理由が二つあるそれは、パイロットへと負担または機体の大破が起きてしまうからだ。

機体の大破と言ってしまうと大きな語弊が生まれてしまうが、この場合の大破は機体が壊れるのではなく、機体のパーツがすべて、情報の処理に追いつけず電子系やパネル系統が一切焼き切れ溶けてしまうのだ。

つまりこの戦闘が終了後デスペアは各部のパーツが壊れある意味死んでしまう事にも成るのだ。

それを知っているシュウは

「今までありがとうな」とだけ告げデストロイの火線を避けきりコックピットへと取りついた。

そしてパイロットを救うのに邪魔なハッチを近接用クローで突き刺しハッチを引きちぎった。そして中にいたパイロット見ると意識は無く、ただデストロイを扱う部品のようにコードが体に巻きついていた。

それを見たシュウはすぐさまデスペアの腕を伸ばしパイロットを握りつぶさない程度の力で掴みコックピットから引き離し

そして「此れで終わりだ！」と両肩に掛かっているマシンキャノンをデストロイの計器が集まっているコックピットへと撃ち込んだ。

そしてデストロイは、その機能を完全に停止し、その巨体を支えていたホバーやブーストは機能しなくなりデストロイは地面へと沈んだ。

それを見た連合の兵士は、ザフトを攻める駒が無くなった事で戦力的に勝利出来ないと判断したのだろう、次々と撤退していこうとしていたが、唐突にＭＳの一機が火を噴き爆発を起こした。

当然、カグヤ・キラ・ムウの三人は撤退している機体を撃つという非人道的行動をする程酷い人間ではない。

つまり考えられるのは「連合及びフリーダム・デスペア・ホープ・ムラサメのパイロットに告ぐ既に我々は其方を包囲している大人しく抵抗を辞め銃を下せ」とザフト軍からの警告が出てきた。

「シュウさん此処は撤退しましょう。流石に此れだけ居たら…」

と通信をＯＮにした瞬間カグヤからそう言われたが

「そうは言っても全員が一斉に撤退したらこっちの位置もばれるだろ？せめて一人は足止めしないと」

「でも、残った人は生き残れる確証は」とキラも悪い結末を考えそういったが

「俺が此処に残る。皆は先に戻っておいてくれ」

「そんな、シュウさんは先程デストロイとやって機体がボロボロじゃないですか…！」とカグヤが辛い事を言ってくるが

「今ここで一番消耗が激しいのはこの機体だ。足手纏いをチームに入れてもザフト軍に追い付かれるかも知れない。だから先に行け！俺も一当てしたら絶対に帰る！」

と言い近付いてきたホープにスティングを渡した後にバスターライフルのチャージを開始した。

「絶対…絶対戻ってきてくださいね！約束ですからね！」とカグヤが言ってくる

「ああ、約束だ」と言って通信を切りバスターライフルを包囲している一部へと撃ち込んだ。

そしてそのバスターライフルのビームの後を追うようにフリーダム・ムラサメ・ホープの順に撤退していった。

それをゆっくりと眺めたシュウは

「約束…か。また破っちまったな」とシュウはそう呟きながらももう一度バスターライフルのチャージを開始した。

そうボロボロに成った機体でこの包囲網を抜けるのはほぼ無理だろう。故にシュウはあの3人が少しでも遠くに逃げられるようにたった一機で孤軍奮闘するつもりなのだ。

そして予想通り逃げた3機は追わずにザフト軍の標的はデスペア一機へと向けられた。

だが「雑魚が俺に勝てると思ってるのか?つくづく舐められたもんだな」と周りを飛んでいるバビやバクゥやガズウートの方向が此方に向いているがシュウはチャージの完了したバスターライフルをもう一度周りに対して撃ち放つはずだった。

急にデスペアは右腕を持ち上げる動作を辞め全ての機能を停止し地面へと落下した。

そうしてシュウは、デスペアが壊れたことを感じ

「お疲れデスペア」とだけ言いデスペアのコックピットで静かに地面に落ちるのを待ち

そして地面に激突したと同時にシュウもその衝撃で気絶した。

ＰＨＡＳＥ４５（後書き）

カグヤ「作者、此れは如何言う事でしょうか？はっきり答えてくれないと困りますね」

抹茶「は…はい、シュウが捕まったので今回もまた二人だけ…」

カグヤ「二人だけですか…そうですか、そうですか」

抹茶「ご・・・ごめんなさい、許してください！」

カグヤ「ふふっ、何を言ってるんですかね？私怒ってないですよ」

抹茶「その邪悪な笑みが俺の震えの原因なんだけど…」

カグヤ「知りませんよ、それよりも今回も感想来てましたよね？」

抹茶「はい、マサトさんご感想有難う御座います」

カグヤ「それじゃもう、用も終わったし後書き閉めましょうか？」

抹茶「い…嫌だ！お前此れ終わらせた後持ってる銃で撃つ気だろ！」

カグヤ「嫌だなぁ、そんな事考えませんって。さぁ閉めましょうか？」

抹茶「は・・・はい」

抹茶・カグヤ「さてシュウとシラユキ（私）はどうなるのか？次回

お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

カグヤ「さぁ処刑の開始です貴方の罪を数えなさい！」

抹茶「やっぱり殺るんじゃないか！……ギャアアアアアアアアア！」

ＰＨＡＳＥ４６（前書き）

抹茶「投稿遅れてすいません！！」

シュウ「へぇ、自覚有ったんだな？良い覚悟だ。一瞬で楽にしてやる」

カグヤ「前回の処刑で少しは反省したのかと思いきや此れですか良い度胸ですね？」

抹茶「マジでごめんなさい。許してください…尋問をする所なんて初めて書いたんで如何書けば良いのか全く分からなかったんです」

シュウ「そうかそうか。でもそんなのは関係ない後でお前はデスペアで・・・」

抹茶「デスペア壊れちゃったから意味ないでしょ？」

パンッパンッ

シュウ「ふぅ、話の腰を折るのが好きなんだな作者は」

カグヤ「でも、シュウさんの専用機もそろそろ考えないとキマイラに逆戻りに成るかも知れませんね」

シュウ「かもな。ほら作者マトモな機体考えておけよ？」

抹茶「うぅ、了解です」

カグヤ「それじゃそろそろ本編に入りますか」

カグヤ・抹茶・シュウ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE46

「・・・此処は？」とシュウは目覚めてそう呟いてしまった。

一瞬シュウ自身も何故知らない場所にいるのか疑問に成ったが、直ぐに自分が何故此処に居るのか三つの答えが導き出された。

「まだ、死んでないのは、俺に利用価値があるのか、それともデスペアの情報を得るためかキラ達の位置を聞く為かな」と言う割には殺す為なら捕虜の治療などは行わないだろうと思い最初の答えを切り落とした。

そうして残り二つの情報を聞かれたとしても、デスペアの方は既に内部が壊れ元となる設計図すらもオーブにある自分の家の地下の金庫に有るためパスを知っている自分しか手に入れられないし、キラ達の位置を聞かれても今頃何処かに逃げているだろう。

ただ一つ気がかりとなるのは

「カグヤが暴れて無きゃ良いんだけどな」とため息を吐きつつも、心配に成ってしまった

仮にもカグヤは冷静な方だが、自分が関わると後先考えずに行動する為キラ達が止めない限り一人自分を助ける為に単機で拠点まで襲いに掛かって来るだろう。

そう考えるとシュウは此処から抜け出してすぐさまキラ達の所に戻りたいが、自分自身が治療を施されたとは言えベットにベルトで縛り付けられている上に服の裏に隠していた道具類の感触が無い為取

られたのだろう。

そうして何も出来ないため大人しく寝ていた所、部屋の外からカンカンと何かが歩いて此方に近づいてきたのに気付いてしまった。

「目覚めはどうかしらシュウ君？」と牢屋こしに聞きなれた声が聞こえてきた

「タリアさんですか、お久しぶりですね。…目覚めに関しては最悪ですよ。こうして荷物が取られた事、ベットに縛られてる事は実に腹立たしいですね」

と治療をされているのには感謝しているが、個室で縛られていることには多少の怒りを覚えていた。

「はぁ、仕方ないでしょ？貴方を拘束もない状態で牢屋に入れたとしても抜け出しそうな気がするし」と扉越しからため息が聞こえるが

「まぁ、そうかもしれませんけど。今回は、お喋りをする為に来た訳じゃ無いんですよね？だったらさっさと本題に入りませんか？」

「そうね…でも流石に此処じゃ話は出来ないから部屋変えるわよ」

と言って扉がガチャッと言う音と共に数人の兵士が入ってきた。

そして暴れられては困るのか、両手両足に手錠を着けられ車椅子に乗せられ再びベルトで縛り付けられ尋問室へと運ばれていった

途中で何人か見知った顔を見つけたが、多くの人物は何とも言えがたい表情をして此方を見つめて来ていた。だがシュウはそんな事を気にすることもなくただただ無視して尋問室へと向かっていった。

「さて、貴方には幾つか答えてもらうわ。当然貴方には、喋りたくない事が有れば喋らなくても良いわ」と何とも生ぬるい対応にシュウは何も出来ないとは言え警戒をしてしまい

「如何言う事ですか？知りたい情報を聞きたいのなら拷問でも何でもするべきでしょう？」と思わず聞いてしまった。

「それもそうしたいんだけど貴方を拷問とかで殺したりして『断罪の天使』が来たら厄介だからって事で極力暴力をふるうなって上層部から命令が来てるのよ」
とタリアがカグヤが攻めて来た時の事を考えたのか頭を押さえていた

「そうなのか、それよりも聞きたいことはなんだ？極力答えるようにはするぞ？」

「そう、協力感謝するわ。それじゃ幾つか質問するけど、まずアレは何？」と聞いてきた

「アレとは？色々と心当たりが有りすぎてどれか迷うんだが？」
とシュウ自体も何を聞きたいのかさっぱり謎だった。

「貴方が乗ってたデスペアについてよ、整備班が調べた所じゃ動力原はＮＪＣ…入手経路が気に成る所だけど、一番重要な事は内部が、もう壊れて正常に動かないし一体如何言う使い方すればあんな風に壊れるの？」
と整備班すらも外側は一部だけが壊れているとは言えそれだけが原因で全てが壊れるはずがないと判って居るらしい。

「ＮＪＣは、普通に造った。……デスペアについてはパーツの許容熱量に耐えられなくて全てショートしてしまったって所だろうな」と自分が気を失う前の事を考えてリミッター解除と解放の同時使用が壊れた原因になるだろうと思いそう答えた。

「ＭＳが壊れた理由が判ったけど、ＮＪＣはそんな簡単に造れる代物じゃないわ！何処で手に入れたの」

と如何やら此ればかりはちゃんと聞いておきたいようだ。

「いや、造ったってば、完成には2年の月日を掛けたけど設計図さえあれば俺は基本何でも造れるさ」

とシュウは敢えて貰ったのではなく作ったと答えておいた。仮に神から貰ったと言った所で正気を疑われるのは目に見えているので敢えて貰ったと嘘を着いたのだ。

「はぁ…ＮＪＣについてはこれ以上聞いても無駄そうね。取敢えず次の質問に入るわ…貴方の仲間は何処に居るの？」

「別に教えても構わないが、あいつ等の事だろうからきっと別の場所に移動しているはずだぞ？」とシュウは仲間を裏切るような発言をしているがこれは嘘だ。

彼にとってアークエンジェルやジャンク艦の位置を見つける事など今までやってきた行動の中でも一番簡単な行動と言っても良い位楽勝なのだ。だから敢えてアークエンジェルが居る場所から全く離れた場所を言うつもりなのだ。

「そう、だったらそのポイントだけでも教えてもらえる？」

「ああ、判った。ポインｔ…」
と言おうとしたとき唐突に大きな音と共にシンが尋問室へと言ってきた。

そして其れを止めようと廊下で待機していた兵が

「まだ尋問中だ。部屋を出ろ」
と言ってシンの腕を掴んで外に連れ出そうとしていたが

「離せよ！」と兵士の腕を振り払いそして此方の胸蔵を掴んで

「答えろシュウ！ステラは何処に居るんだ！」と言葉を荒げて聞いてきたが

「アホかお前は？なんでお前にそんな事を教えなくちゃいけないんだよ？仮に連れ戻しに来たとしても、また衰弱させてあの子を苦しめる気か？それじゃあ俺があの子を治療した意味がない。故に俺はお前たちには教えない。強化人間は俺が責任もって俺が治療する。だから目の前の感情で好き勝手行動する子供（ガキ）はさっさと失せろ。見てて苛々する」とシュウも拘束をされている身でありながらシンに対して言葉の暴力を吐き続けた。

だがこの言葉が余計シンを苛立たせたのか

「何だと！」と今にも殴り掛かりそうな勢いだったが

「それとも俺が何か間違えた事でも言ったか？仮にこっちに連れてきたとしてもお前にあの子をどうこうする権限はない。つまりだ…直ぐに上層部の命令で研究所送り・実験に成るのが目に見えている」

その言葉で完全にシンの沸点は突破したのか

「アンタは理屈ばかりでもう少し人の気持ちとか考えないのかよ！」と怒鳴ってきたが

「人の気持ち？たかだかお前はあの子に会いたいために此処まで連れてこいと言っているのか？それだったら馬鹿馬鹿しい誰がするかよ。それに理屈で物を言って何が悪い？理想ばかり語る奴らより現実的に物事を解決していく方がよほど正しい事じゃないか」

そして遂には言葉で勝てないのか、拳を振り上げて此方を殴ろうとしていたが

「止めなさいシン！捕虜に暴力を振るうのは、条約で禁止されて居る事よ！あなたの個人的な感情でこれ以上彼を傷つけるというなら貴方にも独房に入ってもらうわよ」

と艦長の権限を行使して脅しをかけていた。

流石のシンも独房入りは嫌なのか振り上げた拳を下げていき忌々しげに此方を睨み付けながら尋問室から出て行った。

「ごめんなさいね…でも貴方も貴方で彼に挑発するのは辞めてくれないかしら？止める方は大変なのよ？」と忠告を言われ

「すいませんね。・・・だけど俺も子供みたいに騒げば何でも許されるって奴は正直見てて苛々するんで」とシンに対しては、毒舌を吐くことすらを辞めなかった。

「そう・・・それよりも尋問の続きをするわよ」と言って再び尋問が再開された。

そして尋問が終了したときに

「そういえば此の艦は何処に向ってるんですか?」
と兵士に車椅子に押されて尋問室を出る前にそうタリアに聞いた。

「ジブラルタル基地よ。そこで正式に貴方に何らかの処罰を受けてもらう事に成るわ」

「そうですか、それでは」
とだけシュウは告げて尋問室から出て再び牢屋へと運び込まれた。

そして彼は牢屋に入れられた後　誰にも聞こえないほどの声で

「……長く捕まっても良かったんだが、そろそろ皆の所に帰るか」
と呟いていた。

PHASE46（後書き）

シュウ「作者よ」

抹茶「はい」

シュウ「何だこの短さは！」

カグヤ「これが長く時間かけてできた集大成ですか！」

抹茶「ごごご・・・ごめんなさい！」

シュウ「今までは何かしらの理由で逃げていたが今度は逃がさん！」

抹茶「ちょっ！お前ロープで俺を縛るな！首がっ」

カグヤ「良い気味ですね。・・・ん？作者から何か紙落ちてきましたね？」

司会進行後頼んだ

カグヤ「やっぱりですか・・・仕方ありませんね」

カグヤ「さて今回感想ご指摘をくださった最弱戦士さん前原圭一さん有難う御座いました」

カグヤ「さて・・・後書きで話す事が思いつかないのでそろそろ閉めますか」

シュウ「そうだな」

カグヤ「あれ？シュウさん作者はどうしたんですか？」

シュウ「抹殺してきたが、幽霊になってでもまだ書く気は有りそうだったぞ」

カグヤ「ある意味凄い執念ですね」

シュウ「そうだな。じゃあ今度こそ閉めるか」

シュウ・カグヤ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４７（前書き）

抹茶「はい次話完成です」

シュウ「そうか、お疲れさん」

カグヤ「今回はどんな話にしたんですか？」

抹茶「えっ？今回はジブラルタル基地から抜け出す話ですね」

シュウ「捕まって一話で脱走ってある意味凄いな」

抹茶「まぁ、シュウ自身の技能あってこそ出来た技だろ？」

カグヤ「そうですね。それじゃそろそろ本編入りますか」

カグヤ・抹茶・シュウ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE47

～ハイネSIDE～

「落ちつけよシラユキ！今からシュウの機体が消失（ロスト）した場所に行きたい気持ちも判るが、それじゃあシュウが命を懸けて逃がしてくれたのが無駄になるだろうが！」

とハイネはシラユキを羽交い絞めしながらそう言った。

「離しなさいハイネ！それでも私は、あの人を失いたくないんです！」

と叫びながら此方の拘束を解き放とうと暴れている。

因みに何故こんな事に成ったかと言うと大元の原因はシュウに有るのだ。シュウのお蔭で何とか追っ手に追われる事無くホープ・フリーダム・ムラサメの三機は撤退する事が出来たのだが、３人とも一機もこちらに追っ手が来ないのに疑問を覚えカグヤがマリューに如何言う事なのか聞いたが返って来たのは残酷な現実しかなかった。

ハイネ自体は既に３人が帰って来る前に見たのが何度見ても気持ちの良い物では無かった。シュウの乗っていたデスペアの反応が消える前のレーダーの映像を再生したが、そこに映し出されていたのは、中央に味方を表示する緑色の光点そしてその周りを囲むように大量の赤の光点が示し出されていた。

そして赤い光点は徐々に緑の光点に迫っていき距離が後３００ｍと言う所で突然緑の光点が点滅しそして消失（ロスト）した。

その瞬間カグヤは信じられない物を見たかのように大きく目を見開いた後ショックで気絶し、医務室へと運ばれて行った。当然マリュ

ーやキラ・ムウ等は残念そうに顔を俯けてシュウに対して愚痴を零していた。

そして何時の間にかシラユキが目を覚ましていたのかホープに乗り込もうとしていたので数人掛かりでシラユキを止めて今に至るわけだ。

「仮にシュウがザフトに捕まってたとしてもホープ一機じゃ物量差で押し切られてシュウの二の舞に成るかもしれないんだぞ！？」

「そんなの遣って見なきゃ判らないでしょうが！」

と此方を睨み付けながら、再び暴れ始めたが

要約準備できたのか、白衣を着ている人が数人注射器を持って此方に近づきシラユキの腕に突き刺した。

どうやら即効性なのかすぐさま「シュウさ…ん…」とだけ言いながら眠りに入った。

そう今刺したのは、鎮静剤＋睡眠薬の二つの効果を組み合わせた薬剤なのだ。直ぐには用意出来ない代物では有るのだが、シュウは此れを予想していたのか医務室に組み合わせ方法とサンプルを置いていたのだ。

「全く、さっさと帰ってこいよなシュウ」

とハイネもやり切れないように愚痴を吐きだしつつも数人が持ってきたストレッチャーにシラユキを乗せようとしたとき、シラユキのズボンから端末が床に落ち震え始めた。

一瞬何事かと思い、ハイネは端末を拾い上げ内容を確認した。
其処に書かれているものを見て思わず「何だこれは？」と言ってしまった。

其処に書かれていたのは

≪１２／７１／３２０／６３０／９１／９３／４１／９３／２２／４２／５２／１２／９３／３３／２３０／５２／７５／４５０／９３　シュウより≫

と書かれておりシュウの事だから何かしらの法則が有る数字の羅列なのだがハイネはこの暗号についてはシュウからもシラユキからも教えられてないので今ここで解くしか無いのだ。

（此れに重要な事が書いているのか？だったら直ぐに解かないとな）

とハイネはシラユキを眠らせた事を後悔しつつもキラ達の居る所に向かって歩き始めた。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「ふぅ、何とかカグヤに連絡入れといたし、心配かける事はないだろう」

と言いながら先程まで持っていた小型端末を床へと投げ捨てた。

「しかしザフトもあれだな。一部を除いてマヌケだな全く…」

と言いながら先程まで牢屋の看守だったものに目を向けてそう言い放った。

そうシュウは、ジブラルタル基地に着いた後に、直ぐにミネルバの

牢屋から基地の牢屋へと移されたのだが、その時にグラディス艦長が

「彼は危険なので厳重に縛って動かさない方が良い」

と再三忠告されたにも関わらず牢屋内じゃ流石に何も出来ないだろうと判断したのか、基地側が判断したのか、何にもせずにただ牢屋に放り込んで放置したのだ。

それを機と見たシュウは自分の着けていた厚底ブーツの底の部分を引き千切り中からナイフそして小型の端末を取り出し、自分の牢屋のロックを解除し警戒しながら牢屋の扉を開いて看守を確認したが、出て来れないと判断したのだろう、完全に眠りに入っていた。

そしてシュウはそれを機を見て一気に距離を縮め兵士の首をナイフで掻っ切って今に至るわけだ。

「しかし如何するかな…外は雨が降ってるとは言え軽歩兵が3…いや4人か」

と壁を背にしながら窓から外を覗いてそう呟いた。

そしてどうやってばれずに外に出て行くか考えた瞬間今さっき殺した兵士を見て

「……案外簡単に抜け出せそうだな」

と呟きながら死んだ兵士へと近付き服そしてシュウと兵士の服装を入れ替えた。

「良し、此れで何とかなるな」

と言いつつも残った死体に自分の服を着させベッドに寝かせて出て行こうとした瞬間

バンッ！と言う音と共に扉のドアが開いたのでシュウは腰に掛けていた銃を抜き出し銃口を向けた。だが其処に居たのは、敵ではなく何処か神妙な面持ちをした嘗ての仲間アスランとミネルバでＭＳの通信管制を務めていた女性が傍らに控えていた。

思わずシュウも

「アスラン？・・・如何して此処に？」

とシュウは思わず銃をおろしそう聞いてしまった。そう彼もザフトの軍人の筈であるのに誰かに追われたのか、着の身着のまま合羽も着ずに逃げ出して居る様にしか見えなかった

「話は後だシュウ。今は直ぐに此処から逃げるぞ」と踵を返して外に出ようとするが

「ちょっと待て。此のまま外に出ても、また追われるかも知れない。だったら此処で少しの間撹乱しちまえば良い」と言いながら看守室のｐｃを弄り始めた。

そして少しの間ｐｃを動かし準備が整った瞬間

「良し…此れでザフトに一泡吹かせてやれるな」とあくどい顔をして口を大きく歪めた。

「何をやったんだ？」とアスランが聞いてくるが

「その話は後でする。此れだけの嵐だ、合羽を頭まで被って外に出れば誰か判らないだろ」と言いながら自分の分そしてアスランに二人分を投げ渡して外に出始めた。

当然外は、何かが原因で喧騒に包まれドタバタと動き回り、合羽を着て姿の判らない此方の姿などを全く気に留めずただ横を通り過ぎていた。

だが突然「おいっ、そこの兵士！」と唐突に後ろから声を掛けられアスランと女性はビクッとして固まった。

「はい、何でしょう？」とシュウは振り返り保安要員に顔を向けずにそう聞いた。

「ここ等へんにアスラン・ザラとメイリン・ホークを見かけなかったか？あの二人を探しているのだが？」と聞いてくる

「あぁ、あの二人ですか全く先程は酷い目に合いましたよ。会うと同時に無理やり気絶させられたんですから。ただ気絶する前にあっち側に逃げてましたよ」

と頭をさすりながらアスランが居た場所とは全く正反対の場所を指さしていた。

「そうか、協力感謝する…その前に後ろの二人は？」

と顔を俯けて此方を向かないから不審に思ったのだろう

「あぁ、此処に入った新兵ですよ。ただ覚えの悪い奴らでホント大変ですよ」

と肩を竦めため息を吐いた。

それを聞いた兵士は「そうか、それでは失礼する」と言って指差したところへと走り出し行った。

「さぁ、さっさと逃げるぞ。此のまま真っ直ぐ行けば格納庫だ。此

れだけの喧騒だ。ＭＳは使われずに放置されてるだろうな」とシュウは再び踵をかえし歩き始めた。

二人も後を追うように自分の後ろへと着き歩き始めた。

そして無事に格納庫に着いたシュウとアスラン・メイリンは並んでいるＭＳ群を選び乗り始めた。

アスランとメイリンは原作通り『ＺＧＭＦ－２０００グフイグナイテッド』に乗り込んで入ったのをシュウは確認し、目の前の『ＡＭＡ－９５３バビ』に乗り込もうとした瞬間パンッ！と言う音と同時に左肩を撃ち抜かれていた。

一瞬シュウは撃った主を確認する為に振り向いた。其処に居たのはミネルバでもそこそこ頭の回るレイ・ザ・バレルの姿が有った。

「何で此処がばれたか聞いても？」

とシュウは自分の行動にミスがあったか再度思い返したが

「いや、貴方の行動は完璧でしたよ。…ただ貴方が基地にウィルスを放り込んで基地を混乱させてから貴方方が目指している物を考えれば脱出できる手段つまりＭＳの格納庫へと向かう可能性が一番高い」と言いながら再び銃を連射するが

「確かに正解だが、俺が基地にウィルスを放り込んだのは、それだけじゃないんだよ」

と言いながらもシュウも此れ以上撃たれる訳にもいかないのでバビに乗り込んで起動させた。

「俺も無用な殺しはしたくないんでな、此処は帰らせてもらうよ」と目の前の壁に胸のビーム砲を撃ち込んで飛び出した。

ザフトの方も要約此方の狙いが要約警報を鳴らすが

「今ごろ警報を鳴ったが、此のままだったら無事に帰れるかもな」とアスランがほっとしているが

「そうだといいんだがな…それより何で追われてたか聞かせて貰おうか？」

とシュウは機体をオートパイロットへと変更しアスランに事情を聴いた

「それは・・・」とアスランは言い渋っていたが

「アスランさんがデュランダル議長に殺されそうだったんです。それで私が匿って一緒に逃げて来たんです」とメイリンが事情を話してくれるが

「それこそ意味が分からないな。アスランはフェイスで議長のお気に入りだったはずだが？」

「あの人は、自分の命令通りに動かない人物は消すらしい、シュウも議長が会いに来たんだろ？」とアスランが重たい口を開いてそう言ってくる

それを聞いてシュウは、『やはりか』と思ってしまった。確かにジブラルタル基地に着いて直ぐに議長との会談が有ったが、議長の話は自分の理想と仲間に成ってほしいの話だったがシュウは、頑なに拒み残念そうな顔をしていたが、あれはただの演技だったのだろう。

そう考えるとザフトに対する怒りも沸々と沸いてきたが直ぐにその考えを切り捨て操作をマニュアル操作に変えて大きく右にターンした。

次の瞬間先程までバビが居た場所に大きなビームの火線が通り過ぎて行った。

「何だ!?」と一瞬アスランは驚いていたが

「やっぱり追い付いてきたか厄介な存在だなディスティニーそしてレジェンド」

と舌打ちをしつつも機体のカメラを後方へと向けた。

そこには所々武装が異なっているがそれでも厄介な存在であったプロヴィデンスに良く類似した機体とソード・フォース・ブラストの長所だけを取り入れたような機体が並んで此方を追ってきていた。

「やっぱり幾ら距離を離してても最新鋭には、追い付かれるな」

と言いながら、まだ追い付かれるのには少し距離が開いているので

「アスランもう少し速度を上げれるか?」と聞いてみたが

「俺だけだったら何とか速度は上げれたんだがメイリンも乗っているから悪いが…」

と残念な答えが返って来た

流石に今の速度で走り続けていては、確実にディスティニー・レジェンドに完全に追い付かれ結果撃墜されるだろう。そうシュウは考えると今此処で、二機の内のどちらかを戦闘不能まで追い詰めて何とか撤退させるのが合理的だろう。

そうして決意したシュウは、機体を翻して未だに追いかけてくる二機のＭＳにミサイルランチャーとビームライフルを連射した。

だが流石に牽制用にしか考えてない武装なので直ぐにビームサーベルと対艦刀によって薙ぎ払われ落とされてしまった。だが直ぐにこの一瞬を見逃さず一気にディスティニーとの距離を詰めコックピットへ向けて前蹴りを放ち体勢を崩すが、もう一基のレジェンドがこのような大きな隙を見逃そうとする気はなくビームライフルを此方に向けて構えるが右手に持っている航空ガンランチャーをライフルへと撃ち込み爆破させた。

「何やってるんだシュウ！？量産機じゃその二機には！」

とアスランが辛い事を言ってくるが

「アスランこの先にカグヤが俺らを探すためにここ等辺を動き回ってるかもしれない。だから探して此処まで連れて来てくれ！」

と簡潔にしか書いてない暗号で此方までの最短距離周辺を捜しに来てくれるはずだと望んでいたが、この時アークエンジェルではカグヤは寝かされているので全く増援など当てにも成らないのだ。

「判った。それまで生き残れよシュウ！」

とアスランが叫んでアークエンジェルの居る方向に飛び去って行くが

「マジで生き残れるかな……此れ」と呟きながらも直ぐに右に機体

を捻らせた。次の瞬間右では対艦刀を振り上げて突っ込んできたディスティニーが迫ってきており避けれたと一瞬シュウも思いきってっしまったが唐突に斬艦刀を手放し右手を此方に向けて突き出してきた。

「不味い！」

と思いとっさに左腕で突き出された右手をガードするがパルマ・フィキオーナの前では簡単に左腕をもぎ取られたが此れがシュウの狙いだった。

「確かにパルマ・フィキオーナは単発の攻撃の中でも威力は高い…だがこのＭＳの前にその武装は失敗だったな！」と言い既にチャージを完了していたアルドール福相ビーム砲をデスティニーに放つ直ぐに射線から避けようとデスティニーも機体を動かしたが既に発射されたビーム砲は避け様は無く右腕の肘から下の部分を全て吹き飛ばした。

だがビーム砲を撃ったことでバビにもほんの数秒の硬直が生まれこの隙を見逃すまいとレジェンドがライフルを連射してくる。シュウも直撃だけは控えようとギリギリ機体を動かすがレジェンドのライフルはバビの左翼に被弾し海上へと一気に落とされ始めた。

何とか機体を持ち直そうにも既に片翼しか無い状態では、真面な飛行など見こめる筈もなくフラフラしながら空を飛んでいた。そして止めの一撃でも指すかのようにレジェンドがサーベルを展開して迫ってきた

シュウも「此処までか…」

と諦めが着き相手の攻撃をただ眺めて置く事しか出来なかったが突然右から大きな衝撃が起こり

一瞬何事かと思ったがディスティニー・レジェンドに3筋のビームライフルが降り注ぎ後方に下がる事を余儀無くさせていた

そしてシュウもある程度ぶつかってくる機体を予想をして確認したが、そこに居たのはホープではなく、今ではハイネの専用機と成りかけていたエンジェルの姿だった。

「全く暗号を解くの大変だったんだぞ?シラユキの方は暴れて落ち着かせるのも大変だったし」と愚痴を吐いていたが

「悪い・・・でも助かったよ」

と感謝して居る所で流石に手負いのディスティニーとレジェンドだけでは、グフ・エンジェル・フリーダム・ムラサメに勝てないことが判ったのだろう、若干悔しそうな感じをしつつも機体を翻しジブラルタル基地方面へと戻って行った

其れを確認して「ふぅ、助かったな」と呟いたが

「何言ってんだお前?この後シラユキからのO・HA・NA・SHIが有るに決まってるじゃないか」とある意味死刑宣告を言われ

「嫌だぁぁぁぁぁ!またカグヤのO・HA・NA・SHIを受けるのは嫌だぁぁぁぁ!」

と虚しい叫び声だけが海上に残りつつもシュウの乗っているバビはエンジェルに抱えられながらアークエンジェルへと帰艦していった

ＰＨＡＳＥ４７（後書き）

抹茶「はい、今回は此処までとなります」

シュウ「それは良いんだが、今回出た数字の羅列はなんだ？」

抹茶「いやだなぁ、あれ暗号じゃないですか」

カグヤ「多分判らない人が多かったと思いますよ？」

抹茶「かも知れませんね。後で暗号文の表を下に出しといた方が良いかも」

シュウ「それが正しい選択だな。そういえば今回も感想来てたらしいな？」

抹茶「ああ、はい。ｉｏｒｉ．ｎｅｗｔｙｐｅさん最弱戦士さんご感想有難うございました」

カグヤ「こんな物ですかね？」

抹茶「ですね。それじゃ後書き閉めますか」

抹茶・カグヤ・シュウ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

横　１２３４５６７８９１０　０＝濁点

縦１　あかさたなはまやらわ

２　いきしちにひみ　り

３　うくすつぬふむゆるを

４　えけせてねへめ　れ

５　おこそとのほもよろん

横→縦で言葉ができます（例９５＝ろ）

さて今回出された数字の羅列は

１２／７１／３２０／６３０／９１／９３／４１／９３／２２／４２／５２／１２／９３／３３／２３０／５２／７５／４５０／９３

←

いまじぶらるたるきちにいる　すぐにもどる

←

今ジブラルタル基地にいる。直ぐに戻る

と言う訳です。判り辛くてすいません。

ＰＨＡＳＥ４８（前書き）

抹茶「はい、少し早いけどＰＨＡＳＥ４８完成させました」

シュウ「それは構わないが、４日置き更新はどうしたんだ？」

カグヤ「ですよね？また日数を早めるなんて馬鹿なことするんですか？」

抹茶「日数を早めるような事はしないけど以前４日置き投稿出来ずに長く時間掛かった事有るじゃん」

シュウ「ああ、確かに有ったな。うろ覚えだがＰＨＡＳＥ４６くらいだったか？」

抹茶「そうですね。だから待たせた謝罪を含めて今回は早めました」

カグヤ「成るほど、今回はどんな話になるんですか？」

抹茶「今回は拠点フェイズですけど自分が一番気に成って居た事を書きました」

シュウ「そうか、それじゃ本編入るか」

シュウ・抹茶・カグヤ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE48

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
とブルブル震えながらシュウは目の前の人物に対して言い続けていた

「全くシュウさんこれ以上約束を破るようだったらもっとキツイO・HA・NA・SHIしないと行けなくなるんですよ?だから今度からは、破らないでくださいね?」
と事情を知らない人から見たらカグヤが綺麗な笑みを自分に対して向けて良い仲と判りそうだが

実際はシュウも此れ以上のレベルの内容のO・HA・NA・SHIは普通に身体的にも精神的にも危険なので

「ハイ、ワカリマシタ」とカグヤをこれ以上怒らせない為にカタコトで答えておいた。

だがカグヤもまだ話が有るのか

「全く、此れだけ言っても何かまた約束破りそうですね。……それに心配したのは私だけじゃないんですよ?」と腕を組みため息を吐いてそう言ってきた。

「カグヤ以外で心配してくれてた人ってマリューさんたち以外に誰か居たか?」
と思わず誰の事か謎でシュウは頭の上に?マークが出そうになっていたが

「はぁ…全くシュウさんは何時まで経っても鈍感ですね。…って今こっちに来てるじゃないですか」と言いながらブリッジから通路へと続く扉を眺めていたので

シュウも耳を澄まして聞いてみると確かにパタパタと言う共にブリッジに近づいて来ている人物が居るようだった。取敢えずシュウも入ってくる人物が誰か気に成り扉を眺めていた。そして入ってきた人物はつばさちゃんだった。

一瞬シュウもつばさが元気だったのは驚いたが、それ以上に自分なんかを心配してくれる事に嬉しさを覚えていた。そしてつばさが此方を見た瞬間勢い良くこっちに突っ込んで来た。

「シュウ無事だったの!?何処も怪我してない?」
と正座していたシュウの周りをクルクル動き回りながら体の心配をしてくれた。

「あぁ、心配してくれてありがとうつばさちゃん。それよりも走り回れる位元気に成ったんだね」
と微笑みながらつばさちゃんの頭が丁度良い位置に有ったので思わず撫でていた

「うん、シュウの作った薬のお蔭で元気に成ったわ」
と撫でられるのは嬉しいのか少し頬を紅くしながらそう言ってきた。

「そうか、良かった良かった。それだけ元気に成れただけ俺も薬を作った甲斐が有ったもんだ」と言いながら撫でるのを辞めようと手を離して立ち上がった

一瞬つばさちゃんが「辞めるの?」と残念そうな顔で多少上目使い

に成って居たがシュウは、それに堪えながらもつばさちゃんの上目使いに内心悶えそうに成っていたが

「それでお礼したいんだけどシュウにお礼したいんだけど少ししゃがんで貰って良い？」

とつばさちゃんが手を後ろに回してもじもじしていたので

シュウはきっと首飾りだろうと思いつつ、つばさちゃんの目線に合うようにしゃがんだ。だが次の瞬間つばさちゃんが急に顔を前に突出しシュウは頬に柔らかい感触を感じて居た。

シュウは一瞬予想を反した事を行われて固まってしまったがつばさちゃんは顔を紅くしながらブリッジを出て行った。直ぐにシュウもつばさちゃんに行われた事を思い出して顔を紅くしてしまったが後ろに居た人物を思い出し冷や汗をダラダラと掻きはじめた。

「へぇーシュウさん…私と言う人が居るのにつばさちゃんの方が良かったんですか？」

そう後ろから冷ややかな声を放ちながら肩を掴まれる

一瞬シュウが「ヒィッ！」

という声を上げ再びカタカタと先ほどのＯＨＡＮＡＳＨＩを思い出し全身が震え始める

「もう少しＯＨＡＮＡＳＨＩする必要が有りそうですね？…それじゃあ私たちは先に失礼しますけど良いですね？」とカグヤが全員に対してそう言い放ち

「「「は・・・はい！お好きなように！」」」と全員が口をそろえてそう言ってきた

せめてシュウも何とか希望を掛けて此の艦でもマトモな人物ムウ・キラ・アスランに対して

「ムウさんキラ君アスラン！助けてくれ！」と懇願するが

「ごめんシュウさん、僕もとばっちり受けたくないから」

「悪いなシュウ　俺もシラユキのＯＨＡＮＡＳＨＩは受けたくないんだ」

とキラ・ムウの順番で言ってくるがアスランは我関せずとでも言うように顔を背けて何も言ってこない

「裏切り者ぉぉぉぉぉ」

と言う声だけがブリッジに響きシュウはカグヤへと連れて行かれた。

～シラユキ・カグヤＳＩＤＥ～

「なぁ、カグヤ怒らないでくれよー。あれは俺の意思じゃなくてつばさちゃんが勝手にやっただけであってだなぁ」と弁解をしているが今はなぜか聞く気に成れなかった。

確かに大人気無いかも知れないがつばさがシュウに頬とは言えキスしたときに胸にモヤモヤした気持ちが渦巻いていた。自分自身この感覚がやきもちなのか嫉妬なのかは謎だがそれでも怒りを自分よりも８つも下の女の子に対して向けるには、流石に酷いのでシュウを引っ張って行く。

「そういえばシュウさんは、つばさちゃんや助けた強化人間をどうするんですか？」

と何故か気に成って聞いてみた

「ん?そうだな…一応アイツ等のデータを見たんだけど孤児だったんだよ。だから此のまま助けて後はあの子たちの遣りたいように遣らせてみようと思うんだ」
とシュウは先程のだらけ切った顔から真面目な顔に成って居た

「つまり、あの4人を養子にするんですか?」
と声が多少震わせながらそう聞いてしまった

「そうだな。保護者がいなけりゃあいつ等も何も出来ないだろ?だから成人に成るまでは俺が代わりに父親に成るってことだな。ただアイツらが俺を受け入れてくれるか心配だけどな」と多少頬をかきながら言っていたが

カグヤはそれを聞いて多少の焦りを覚えてしまった。ただでさえシュウと過ごしている時間が少ないうえに最近は、事有る毎に戦闘等を行っているので恋愛すら真面に行っていないのだ、こんな情勢に不謹慎だが、それでもカグヤも一人の女性でもあるのでシュウに構ってほしいのだ。

そして思わず「そ・・・そんなの駄目です!」と何時の間にかカグヤは叫んでいた

一瞬シュウは「へっ?」という顔をしていたが

「何でダメなんだよ?そうしないとあいつらが生きていけないだろ?」
とシュウは、カグヤの気持ち等気付かずにそう言ってきた

だがその態度が余計にカグヤを苛立たせ

「シュウさんは何時も何時も口を開いたら強化兵士や他の人達を助ける事ばっかりで何で私の事を気にかけてくれないんですか！それとも私よりも他の人の方が大切なんですか！」と少々怒りを爆発させていた

「なっ！・・・別にそんな事無いだろが！俺はお前のことだって大切に」
と言おうとしているが

「何処がですか！？何時も大切にしているって言ってますけど何処が大切にしてるんですか！？私の事は何時もそっちのけで強化兵士の治療ばっかり気にかけて私には、労いの言葉の一つもくれやしなかたじゃないですか！……こんなんだったらあの3人をたすけなければ」と言おうとした瞬間頬に痛みが走った

目の前を向くとシュウが手を此方に向けて叩きつけた手を戻さずに此方を睨み付けていた

「カグヤ叩いたのは悪かった。だけどそんな事言っちゃ駄目だ。アイツ等だって好きで戦場に出たかったわけじゃ」とシュウがまだ彼らの味方をしていた。

（結局私は愛されて無いの？）
そう考えると目じりに涙が浮かびシュウを思いっきり叩き走り出してしまった。

何か後ろで叫んでいたが今はシュウの言葉は聞く気に成れずただ逃げだしたくなった。
～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「クソッ、カグヤの奴思いっきり叩きやがって……だけど、泣かせちまうなんてな」

と言いながら拳を作り壁を殴りつけた。確かに行き成り叩いてくるカグヤに対しても怒りたくなるが今一番腹立つのは自分自身だった。

シュウとしてはカグヤを悲しませる事は有っても泣かせる気など更々無いのだ。だが事実シュウは他の人を優先させすぎてカグヤを全く構って無かったのだ。それ故に寂しい思いをさせその上に泣かせてしまった。

そう考えると自分自身に対して完全に怒りが生まれ壁に自分の拳を叩きつけていた。

そうして自分自身が許せないから壁を殴り続けて居る所でハイネがそれに気づき止めに来た

「何やってるんだシュウ！そんなんじゃお前自分の拳を壊すぞ！」

と既に手から血を流しているにも関わらず止まる気が無かった

「離してくれハイネ！俺は最低な人間なんだよ。こうでもしないと俺は俺が許せないんだ！」と言いながら再び暴れはじめる

「何が言いたいんだシュウ！というかお前に何が有ったんださっきはシラユキが泣いて走り去って次はお前等に何が有ったんだよ！」

と言って必死に羽交い絞めし何故こんな事が起きたのか聞いてみた

そう言われるとシュウは拳を動かすのを辞め先ほどの起きたことを隠さずハイネに話した。

「成るほどな。両者の意見の食い違いか」とハイネが言ってきた

「ああ、俺はカグヤも優先しようと思ってたんだが救った奴らの方を優先してたからな」
と言いながら拳をきつく握りしめた。
確かにハイネに止められて気付いたが左手は皮が剥け血が出ているが、カグヤが感じた苦しみに比べれば天と地ほど差が有るだろう。

「まぁ、どっちも悪いな。確かにシュウもシラユキを構わなかったのは、救った奴に治療を施すのは当たり前だがそれでもシラユキと会える時間は有っただろ？」
そうハイネに言われシュウは何も言い返せなかった。
確かに救った人たちに薬を打ってある程度怪我に治療を施したら時間など１０分でも空いていたが医者は自分しかいないし患者が病気を再発させたら不味いと考えてその場から動かなかったのは最悪だろう

「でも、シラユキもシラユキで悪い所は有る。アイツはシュウの苦労を余り理解して無い所だ。シュウお前最近寝てないだろ？」と此れも当たりだった。

「ああ、俺が作ってる薬は効果は良いが作成方法が特別だから一セット作るのにも時間はかかるしカグヤやハイネを殺させない為に機体にも癖とか治すために扱いやすいようにカスタムはしてる。後は機体が破壊されてもコックピットが脱出ポッドとしても兼用している」

「やっぱりか、道理で機体が使いやすい筈な上に何かコックピットに違和感を感じたんだ」とハイネはシュウの手腕に相変わらず感心

してた

「まぁ、此れで決まりだな。シラユキの奴は愛されて無いと勘違いしてるかも知らないが普通好きでもない奴に機体をカスタムするはずがないわな」

「当然だ。カグヤが誰かに殺されるもんなら俺が体を使って庇ってやるし殺そうとした奴一族郎党皆殺しにしてやるさ」

「あーはいはいその言葉だけでもシュウがどれだけシラユキを思ってるか十分判るわ。
まぁ、取敢えずお前らの事は俺等に任しておけ。お前とシラユキの仲が悪い所なんて誰も見たくないだろうからな」と言いながらハイネが離れていく

「全くシュウもあんまし自分を傷つけるなよ?シラユキと元通りの関係に成った時にアイツ自分を責めるぞ?」

「判った。悪いなハイネ　俺とカグヤの為にわざわざ」というが

「気にすんな。お前と俺の仲だろ?それに俺はお前に助けられたっていうデカい恩が有るからな此れ位じゃまだまだ返しきれねぇよ」と言いながら手をひらひらと揺らしながらアークエンジェルのブリッジ方面に向かって歩いて行っていた

シュウはそれを見届けた後自分の左手を治療するために医務室へと向かって歩き始めた

ＰＨＡＳＥ４８（後書き）

抹茶「はい、今回はシュウとカグヤのケンカの場所です。主も書いてて思ったんですけどシュウとカグヤは恋人に成ってからそういうの全くしてないでほかの女性とイチャイチャするのは怒りを覚えるだろうと思い書きました」

抹茶「因みにシュウもカグヤもケンカした後だから会うのが凄く気まずいらしいので帰りました」

抹茶「さてと感想をくれた最弱戦士さんご感想有難うございました」

抹茶「やはりソロで喋るのは寂しいな。もう後書き閉めるか」

抹茶「さてシュウとシラユキはどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ４９（前書き）

抹茶「新話完成！」

シュウ「そうか、良かったな」

抹茶「…あらら、予想外以上に落ち込んでるんだな」

シュウ「当然に決まってるだろ？カグヤに振られそうなのにテンション上げろってのは無理な話だ」

抹茶「ですよねー。因みにシュウとカグヤの新機体の名前だけ登場しますよ」

シュウ「またか…作者よ。お前はオリジナルユニット今作で何機出す気だ？」

抹茶「流石に、オリジナルユニットは此れで終わりですね。…でも性能から言えばデスペアやホープが可愛いかも知れないや」

シュウ「マジかよ…さて前書き長くなったがそろそろ閉めるか」

シュウ・抹茶「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE49

「全く生真面目すぎるのも考え物よシュウ君？」
と言いながらエリカさんは此方に呆れていた

しかし何故こんな事に成ったのか簡潔に言えば、こうだ。

アカツキ島の秘密ドッグに着いた後エリカさんに会った
←
エリカさんが何時も居るカグヤの存在が無い事に気づき理由を聞いてくる
←
カグヤと喧嘩をしその発端を話し今に至るというわけだ。

「取敢えず今は、彼女の事はそっとしておいた方が良いわ。喧嘩して後に直ぐ会ってもまた、喧嘩するかも知れないしね」

「……判りました。それよりもデスペアの件についてはすいません。造って貰ったのに壊すなんて」
と言いながらシュウは頭を下げて謝った

「良いのよ。形有る物は、何時か壊れるんだから…。それにデスペアの方は仮に取り戻しても使い物にはならないでしょ？」
と何かを聞いてくるようにそう言ってくる

「そうですね。自分とアスランが帰って来るときにウィルスを流し込んでるんですけど、今頃は其れの対処に追われてデスペアに構ってる暇なんかありませんよ」

そういうとエリカさんは「やはりか」と言う顔と同時にザフト軍に対して軽い同情を覚えていた。そうシュウは、この戦争が始まる一年前に一つのウィルスを制作するのに成功していたのだ。そのプロトタイプに興味を持ったエリカさんに見せた所驚愕して普段使ってはいけないとまで注意されたのだ。

たかだかウィルスごときにそこまで警戒する必要があるのかと思うのだが今回作ったウィルスの大きな特徴は『成長・自己思考』とウィルスバスターを投入してもそれを即時理解し対策を考えそれ自体を取り込んで耐性を作り成長していくのだ。

だが其れなら大元となる核(コア)を潰せばウィルス自体も止まる筈だが其れの対策を考えないシュウではなくコアすらも『自己再生・自己増殖』を繰り返しているためほぼ同時に全ての核(コア)を潰さない限りウィルスに感染した基地は殆どの機能がダウンすると言っても過言ではないのだ。

「それよりも自分の専用機が無いんで新しく二機の開発を頼みたいんですけど」
そう言ってシュウは持っていた二枚の設計図をエリカさんに渡そうとしたが

「レストアは、話の通り作っておくけど…もう一枚は、必要ないわ」
そう言うとデスペアの後継機となる機体の設計図は見られる前にクシャクシャに丸められ海へと投げ捨てられていた

「ああ！…何するんですかエリカさん！」
とシュウは、ある意味最高傑作の一枚を捨てられて睨み付けたが

「まぁ、シュウ君話を聞きなさい。正直に言って貴方の両親が作っ

た機体がもし有ったら貴方は如何する？」
と訳の判らない質問をしてきて首を傾げていた

もし話通り両親が自分の為に遺産としてＭＳを残していたなら当然自分の機体として扱う予定だが、両親が死ぬ前までは仕事で忙しくそんな暇が一切無かった筈なので機体を作り上げられる筈も無く

「あれば欲しいですけど実際は、父さんも母さんも仕事で忙しくて作る暇が無かったでしょう？」
とシュウはハッキリと言ってしまったが

「いえ、見つかったというよりは予想外な場所に隠されてて今まで気付けなかった方が驚きだったわ」
そう言うと一枚の写真を此方に差出て見せてきた。

其処には過去に一度シュウも見た事のある機体だった。だがあの機体自体は、父親も母親も書いたのは良いが作り上げる事に躊躇っていた機体だった

そしてシュウは、その機体の名前を忌々しげに呟いた。

「何で…何で作られてるんだよ悪魔（ディアブロ）が…！」

「知ってるのシュウ君？」
と思わずエリカさんも見せた機体を知っているのは予想外だったのか目を見開いて驚いていた

「ええ、でも…もう一機が足りない」と意味深な言葉を呟いた。

元々シュウの言った悪魔（ディアブロ）にはもう一機と同時に運用しなければ成ら

ないのだ。その理由としては、一度悪魔（ディアブロ）が暴走を引き起こすと、見境無く破壊する為手を着けれないのだ。だが其れを止める為にほぼ同時に作られて居る筈なのだがこの写真には映し出されて無いのだ。

思わずシュウはエリカさんの方に向き

「この機体以外にもう一機の存在は見つけれませんでしたか？」

と聞いてしまった。

「残念ながらね…でも、ディアブロの脚部の影に有るけどロックが掛かった扉が有ったのよ。…もしかしたらシュウ君の探している機体がまだ奥に眠ってるのかもね」

「何で疑問形なんですか？…もしかして奥の扉が開けなかったんですか？」

「ええ、予想外だったのはデスペア以上の厳重なロックだったわ。多分貴方の両親が作ったなら貴方しか開けれないんでしょうね」

そう言うとエリカさんは、その場から離れて行った。

一瞬シュウも何処に行くのか疑問に思い「何処に行くんですか？」

と言ったが

「貴方がその機体を如何するか考えてる間に私は、拗ねてる貴方の彼女に会いに行ってくるわ。…それにその機体余り乗りたくないんでしょ？だったら考える時間は必要よ」

そう言うとエリカさんに一つ鍵を渡されカグヤの居るジャンク艦へと向かって歩き始めた。

そしてシュウは「ありがとうエリカさん」

と言うとドックから出てすぐ傍に有る簡易的な小さなマンションが幾つか立ってる中の一室へと向かって歩き始めた。

悪魔(ディアブロ)と双対した存在裁き(ジャッジメント)を下すものが隠されている場所そしてそれが居なかったとき悪魔(ディアブロ)を撃墜できる機体を考える為に…。

ＰＨＡＳＥ４９（後書き）

シュウ「今回は仲直りフラグは出さなかったんだな？」

抹茶「ですね。でもエリカさんが説得しに行きました」

シュウ「成るほど、次回の伏線？って奴か」

抹茶「そんな感じですね。それよりも新機体の名前が今回も微妙な件について」

シュウ「ああ、うん。正直主に機体名を着けろってのは無理だな」

抹茶「酷いや、此れでも頑張ってるのに…」

シュウ「それよりもディアブロが暴走するってエ○ァかよ！」

抹茶「流石に機体を食う程ディアブロは危険では無いけどストフリでも種割れして落とせるか謎な部類なんだよね」

シュウ「ちょっと待て…そこまで危険な代物なのか？」

抹茶「それは、まぁ本編進めたら出てきますよ。それよりも感想の方が大事です！」

シュウ「無理やり話をそらすな！」

抹茶「ヤダ！最弱戦士さんご感想有難う御座いました」

シュウ「どうしても言う気はないんだな？」

抹茶「ええ、此れだけは主人公とは言え機密の部類なので喋れません」

シュウ「そうか、じゃあ後書きも閉めるか」

シュウ・抹茶「さてシュウ（俺）とシラユキはどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ５０（前書き）

シュウ「さて…祝５０話突破だな」

カグヤ「そうですね。まだまだ話は続きますけど５０話越えた事は良い事ですよね」

シュウ「ああ、そうだな。…さてもう一つ遣る事が有ったけど作者よ何か弁明は有るか？」

抹茶「ムームームームー（ちょっ！何で前書きから縛られて猿轡されなきゃ成らんのだ！取り敢えず助けて！！）」

シュウ「えっ？早く死にたいって？せっかちだな作者も」

抹茶「ムッーー！！（そんな事言ってねぇぇぇぇぇ！）」

カグヤ「あなたには自分の立場ってものを理解しなくちゃダメですよ？…だから少しＯＨＡＮＡＳＨＩしましょうか？」

抹茶「ムゥーーーー！（いやだぁぁぁぁぁぁ）」

シュウ「ご愁傷様だな。…それよりもカグヤ本編入るぞ」

カグヤ「了解です！」

カグヤ・シュウ「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE50

「ふぅ…あの3人は目覚まして食堂に案内したからもう大丈夫だな…。次はホープの整備にディ…アブロを越え…る…MSを設計しないと」
と持っていたレポートを捲りながらシュウはふらついていた。

「クソッ…流石に疲れが貯まって来たのか？…だけどまだやることが…あるん…だ」
そう呟いて次の一歩を歩き出した瞬間目の前の光景が反転しシュウは自分が倒れて居る事に気づく前に意識を失っていた。

～カグヤSIDE～
「はぁ…」
とカグヤはため息を吐きながらアークエンジェルの食堂に向かって歩いて行った。

シュウ達はアークエンジェルと合流した時から食事はアークエンジェルの食堂で食べているのだが、カグヤは食事中にシュウが来たり居たりしたら気まずく成るので余り行きたくないのだ。

其れならばインスタントやカロリーメイト等の栄養食品を食べれば良いのだが、如何も味気無いので食べる気には成らなかった。そしてカグヤは覚悟して食堂に入る扉を開けて中に入ったが、シュウはその場に居らずホッとしたが普段は居なかったシュウ達が助けた強化兵士たちが一つのテーブルを占領していた。

そして強化兵士の一人が此方に気づくと他の2人話しかけ3人は立ち上がり此方に向かって歩いてきた。

「えっと?姉ちゃんが兄ちゃんの彼氏かい?」と青髪の青年がそう聞いてきた

「え?……えぇ、そうですけど如何かしましたか?」
とカグヤは答えたが3人が話しかけてくる理由が無いので疑問に思ったが

「その…ありがとうな。俺達の事助けてくれて前の事は、シュウが危険な事だったから消したって言ってたから一応感謝したけど…」
と緑髪の青年は途中から言い辛そうだった

「感謝したけど…?」と何故言い辛そうにしたのか疑問に成りカグヤはそう言ったが

「そのシュウが…『君たちを助けれたのは俺だけじゃなくてカグヤのお蔭でもあるんだ。もし俺の傍にカグヤが居なかったら俺は何にも行動しなくて君達や他の人達を助けてなかっただろうね。だから感謝するのは俺じゃなくてカグヤにしてくれ』…って」
と金髪の女の子はそう言ってきたが

「何で今更そんな事言うんですかシュウさん……。私だってシュウさんが居なかったら何時までも独りのまんまでしたよ…」
と言いながらカグヤはあの時一人で勘違いしてシュウを引っ叩いて逃げ出した事を後悔して爪を立てて自分の手を握りしめていたが

「でもあの兄ちゃん大丈夫なのかな?」
と青髪の青年が不安に成る様な事を言い出していた

「如何言う事ですか?シュウさんが如何かしたんですか!?」

とカグヤは焦って青髪の青年に問い詰めようとしたが

「落ち着いてくれカグヤさん！…俺達が目覚ました時はシュウは喜んでたけど、其の後はちょっと顔を青くしてふらついてたんだ。シュウは俺達に成るべく感付かれない様に話してたけど時折立ってるのも辛そうだったよ」と緑髪の青年がそう言った直後に

何かが走ってくる音が通路から聞こえて来て

「シラユキ此処に居たか！」

と言いながらムウさんが食堂内に駆け込んで来た

カグヤは何時もとは違ったムウさんの剣幕に嫌な予感を覚えながらも

「そんなに慌てて如何したんですかムウさん？」とカグヤは冷静に聞いてみたが

「シラユキ今から俺が言う事を落ち着いて聞いてくれ……シュウが倒れた」

其れを聞いた瞬間カグヤは顔を青くして直ぐにムウの肩を掴み

「シュウさんの容態は如何なんですか？あの人は無事なんですか！？」

とカグヤはムウを揺さぶりながらそう聞いた

「ああ、シュウの方だが一応大丈夫だ。ただ容態としては、睡眠不足と働きすぎによる体調不良と高熱を出してるらしいが此れも医師から見ても数日寝てれば治るそうだ」

とムウは揺さぶられて目を回しながらもそう言ったが

「そうですか……それでシュウさんは、今何処で寝てるんですか？」
とカグヤはシュウの居場所を聞いていた。

「そりゃ教えても良いけど今仲悪かったん…」とムウが何か言おうとした時

「大切な人を看病するのに仲とかそんな如何でも良い事大切ですか？」
と言わざるえない程の睨みをカグヤはムウに放っていた

「あぁ…そうだな。シュウの方だが今は、アークエンジェルの医務室で…」
とムウが言っている間にもシュウの位置が判ったカグヤは既に食堂を出て医務室へと走り出していた。

～カグヤＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

～夢～
「此処は…？」
とシュウは先程まで自分が居た場所とは違う場所に居たので疑問に思ったが、直ぐに此処が自分の家だと言う事が判っていた。

何故なら壁一面にＭＳの設計図やそれに対するデータ等が大量に張り出されていたからだ。

だがシュウは見覚えの無い設計図が多く有ったので内容を確認しようと壁に近づこうとした次の瞬間唐突に部屋の扉が開きシュウは設計図から扉に目を向けたが其処に居たのは、間違いなく自分の父親ヨハン・ライトニングの姿だった。

「何で親父が此処に居るんだよ…？確か死んだはずじゃ？」
と目の前の死んでいた人物が存在して居る事に唖然としていたが

「父さん待ってよぉー」と言いながら部屋にもう一人の子供が入ってきた。

「あぁ悪いシュウ。ただお前に一つ良い事を教えてやろうと思ってな」
とヨハンは笑顔を向けて小さい頃の自分に対して笑顔を向けてきた

「良い事？」と小さい頃の自分は首を傾げていた。

だがヨハンは小さい頃の自分に対して

「あぁ、もうすぐ父さんと母さんの仕事が終わるかも知れないんだ。そしたら何時までもお前と一緒に居られるぞ」と言った瞬間

幼い自分は目を見開いて
「ホント！？ホントなのお父さん！？」と喜びからぴょんぴょん飛び跳ねていた。

「あぁ、ホントさ。だからシュウに今まで構ってやれ無かった分ずっと遊んでやるからな」
とヨハンは笑いながら幼い自分を抱き寄せてくれていた。

「うん。約束だよ！」

「あぁ、約束だ。あとシュウもそろそろ父さんの設計図が気に成るだろう？今後は好きに入っていいからな」

と幼い頃の自分はその細部までは判らなかったが、それでも父親のMSを見る事が好きだったのを思い出したシュウは苦笑していた。

だが今更に成ってこんな事を思い出すのは何故なのか首を傾げていたが、暫くシュウは、この夢を静かに静観する事にしていた。

そして数日後幼い自分は設計図が大量に詰め込んであった箱を引っ繰り返してしまい泣きそうに成って居たが、直ぐにヨハンが駆けつけて来て自分の心配と同時に箱の片づけを行い始めた。そして幼いシュウも手伝おうと手一杯に設計図を持って箱に入れようとした瞬間一枚の設計図が腕から零れ落ちその図面を開き出していた。

だがその設計図には大きく×の形が書かれており失敗作なのかと思い二人のシュウはその図面に覗き込んだが、未来のシュウは、それを見た瞬間大きく目を見開き驚きを隠せずにいた。

……そう其処に居たのはエリカさんが写真を撮って見せてくれたディアブロの形状をそのまま映し出していた。

「何でこんな所にディアブロが…？」

とシュウは思わず呟いたがヨハンが書いたのだから有って当然だろう。

だがシュウが思った事は幾らヨハンが造りたくないとは言え何故その設計図を燃やしたりせずこんな場所に乱雑に保管していたのか疑問に思ってしまったが

（親父は最初から幼い頃の俺が箱を引っ繰り返す事を予想してわざと此処に混ぜていたのか？）
と一瞬シュウは思い自分の父親を疑ってしまったが

「最近見つからないと思ったら此処に有ったのか…」
とヨハンすらもディアブロの設計図を探していたのか幼い自分から取り返そうとしたが

「ねぇ、お父さん……何でこのＭＳだけ×印が着いてるの？仲間外れは可哀相だよ」
と幼い自分は父親を見上げてそう言った後設計図を思いっきり握りしめていた。

それを聞いたヨハンは、一瞬驚いた後シュウの頭に手を乗せた後同じ目線に成るようにしゃがみ

「良いかシュウ。お前にはまだ難しくて判らないかも知れないがそのＭＳを作っちゃ駄目なんだ」

「何で？この子が何か悪い事したの？」

「いや、そうじゃ無いんだ。此れは造ったら此れが原因で奪い合いが起きるかも知れないから危険なんだ。だから他の人達に見られる前に燃やして無かった事にしなくちゃ駄目なんだ」

「そんなことしちゃ駄目だよ！お父さんはＭＳの開発者でオーブの偉い人なんでしょ。だったらこの子が隠れる場所と止める子を造れば良いじゃないか！」
と幼い自分は大人の事情等知った事じゃ無いとでも言うようにディ

アブロの設計図を手放す事は無かった。

「やれやれ、困った。…でもシュウ　それを造っても乗る人が居なかったらその子も可哀相だろ？」
とヨハンはその機体があまりに危険すぎるから乗るパイロットも居なさそうな顔だったが

「じゃあ僕が乗る！僕が大人に成ったらこの子に乗ってこの子と一緒に戦う！」
と子供ながらの意地なのか自分の父親に向かってそう叫んでいた。

一瞬ヨハンもシュウが乗る事に驚きは隠せずに焦っていたが、幼いシュウはディアブロが燃やされない様に父親の部屋から出て行って自分の部屋に入り鍵をかけていた。

その日の夜ヨハンは自分の妻エリーゼ・ライトニングに話した所驚きと同時に笑いを零していた。

「仲間外れや燃やす事はダメな上に造ったら自分が乗る……か、全くあの子は優しいわね」
とエリーゼはシュウに対して怒りはせず苦笑していった。

「全く、笑い事じゃないぞエリーゼ　シュウは如何あってもディアブロを燃やさせてはくれないぞ？」
と如何にかして危険なＭＳの設計図を燃やして無かった事にしたいヨハンだったが

「良いじゃない造ってあげれば。あの子が決めた事なら私は反対しないわ」

「正気かエリーゼ!?お前もあの危険性はお前も良く知ってるだろう!?」
とヨハンは椅子から立ち上がってエリーゼにそう怒鳴ったが

「落ち着いてアナタ　私もディアブロだけを造る気は更々無いわ。ただお互いを抑止できるＭＳをもう一機造るのよ」
と言いながら先ほどの優しい目から同じ職人としての眼へとエリーゼは変わっていた

「如何言う事だ?」とエリーゼが入ってる事が良く判らずヨハンはそう言ったが

「つまり　アナタがディアブロを設計図を書いてた時に機体が暴走したら外部からの通信は一切受け付けないって話をしたでしょ?」

「ああ、暴走時は、他の所からデータに干渉されてディアブロ自体を乗っ取られたら不味いからな」

「だから、その外部からの通信を受け取れる機体を一機だけ造るの。そして逆にその機体が暴走した時にディアブロからのプログラムだけ受け取れるように造り上げるのよ」
とエリーゼはディアブロの対策方法を提案していた。

「成るほど、そのプログラムが暴走を抑えるシステムを組み込んでたりしたら……」

「えぇ、お互いを止める役目を果たすからディアブロにも危険がなくなるわ」

それを聞いてたシュウは

「成るほど……ジャッジメントが造られたのはディアブロを破壊するんじゃなくてお互いを止める為に造られたのか」とシュウは真実を知って少々驚きが隠せていなかった。

「そうだったら何でその情報が残されて無かったんだ?あの二機はお互いを止める為のキーに成るなら戦場に出せば……」と言おうとした時に

「それが危険だから私たちはディアブロとジャッジメントを隠したのよシュウ」
と聞きなれた声が聞こえた

「そうなのか……って、え?」
そういうとシュウはお袋は目の前に居ながら後ろからお袋の声が聞こえ冷や汗を掻いてしまった。

そしてシュウは嫌な予感がしたが恐る恐る後ろへと振り返り後ろに居た人物を確認した。

其処に居たのは、シュウの予想通り自分の父親と母親の姿だった。

「お袋?親父?何で…?」
とシュウもまさか自分の両親に会えるとは思えず唖然としていたが

唖然として居る内にも両親はシュウに近寄ってきて

「全くお前は馬鹿か!」
と行き成りヨハンに頭に拳骨を落とされシュウは頭を押さえたが

「女の子を泣かしちゃ駄目って……お母さん教えなかったっけ?」

とお袋すらもシュウに対して黒いオーラを放っていた。

「いや、親父もお袋も仕事で全く俺には教えｔ……許してくださいお母様」

と教えて貰って無いと言おうとした瞬間黒いオーラが増大したのでシュウはすぐさま母親に向かって土下座を行っていた。

だが土下座しても無駄なのかシュウは自分の母から正座するよう命令され説教をされていた。流石のシュウも夢の中で説教を受けるのは嫌なので父親に向かって

『助けて』と目で訴えたが

『悪いが俺もとばっちり受けるのは御免だから大人しく受けとけ』と目で言ってきた後に顔を逸らして此方を見てこなかった。

そして数時間後

「さて説教も終わった事だし本題に入りましょうか」

と満足そうな顔をしていたお袋だったが

「し……死ぬ。此れで説教だなんてウソ……だろ」

とぐったりしたシュウはそう呟いていた

「お前の気持ちも判るが……さっさと起きろシュウ」

とまるで父親の言う事では無い事を平然と言ってきた

だがシュウは母親の説教でボロボロに成りながらも直ぐに立ち上がり

「ディアブロが造られた意味を改めて教えて貰うぞ」

とシュウは真面目にそう言った

「ああ、まずあの機体を何故戦争に出さなかったか、あれは正確には俺達が隠したんじゃなくてアスハ家の命令だ」

「何でアスハ家がディアブロとジャッジメントを止めたんだ?」

「それは、あの機体が余りにもオーバーテクノロジーだったからよ。元々私たちもあの機体を隠して製造してたんだけど私たちを見張ってたアスハ家の密偵がたまたま二機を見つけて呼び出しを受けたわ。性能を見せたら直ぐにあの機体は破棄か譲渡の二択に成ったけど私たちはその二択は許容できなくてもう一つのプログラムを組み込んだの……」

「もう一つのプログラム?」

「ああ、そうだ。それは……ディアブロとジャッジメントが自分で自分の主を選ぶことだ」

それを聞いた瞬間シュウは少々驚きを隠せず

「有り得ない!MSが自らの意思を持つなんて……そんなこと」

とシュウは反論し意思が有る筈ないと否定したかったが

「でも、シュウは一度経験したでしょ?自分の制作したデスペアが自分の意思とは関係なくリミッター解除したのを」

そう言われるとシュウは否定できずに口籠ってしまった。

「まぁ、信じられないかも知れないが事実なんだシュウ」
と父親は否定せずに真顔で言ってきた

「…判った。仮にディアブロとジャッジメントに意思が有ったとしよう。その二機が認められない人間がコックピットに乗ったらどうなるんだ?」
とシュウは悪い事を考え不安と成りそう言ってしまった。

「ああ、シュウが思ってるみたいなパイロットを殺すみたいな事はしないぞ。認められないパイロットが乗ったらディアブロとジャッジメント自体が起動しないんだ」

「そうなのか……だけど、俺にディアブロに乗せて貰える資格なんてあるのかな?」
とシュウは自嘲気味にそう言ってしまった。

「それは誰にも判らないわ。決めるのはディアブロとジャッジメントだから…でも貴方達ならディアブロもジャッジメントも認めてくれると思うわ」
とお袋が嬉しい事を言ってくれるが

「そうなのか…?確かにカグヤはジャッジメントに認められるとは思うが、俺は……」

「一つシュウに質問してみようか…シュウもし普通の人間が強力なMSに乗ったらどうなると思う?」と父親にしてはやけに簡単な質問をしてきたことに疑問を覚えながらも

「そりゃ力に溺れるだろ?弱い人間が強い力を持つとMSの性能を自分の実力と勘違いする奴が多いし、それが原因で落ちるなんてたまに有るからな」
とシュウは自分が思ってる当たり前の事を親父に向かって告げた

「ああ、そうだ。一概には言えないがシュウの言うとおり力に飲み込まれる奴が多い。酷い時にはその力を使って悪用する奴も居るだろう。だがシュウお前は如何だ?お前はMSの性能に頼った戦闘をしたか?力に溺れてその力を悪用した事が有ったか?」
そう父親から言われ

「無い…とは言い切れないが、それでも俺は俺が正しいと思った事しかしなかったよ」
と自分の両親に向かって自信を持ってそう言い放った。

「そうか…合格だシュウ。アテナに頼んで一度だけ会わせて貰う機会貰ったが、やっぱりお前にならディアブロとジャッジメントを託せる」
そう父親が言うと二人の姿が薄くなっていくのが見えていた

「何だよそれ…消えんなよ!まだ話すことは終わってねぇよ!」
とシュウは夢の中とは言え久々に会えた両親とまた離れる事に怒りを覚えていた

「ごめんなさい、シュウ。でも私たちの役目は貴方達がディアブロとジャッジメントを見つけた時シュウが必ず乗らないって言い出す事を予想出来たから本当の真実を伝えよう…ってヨハンと話し合ったの」

「だからって…真実を伝えるだけで消えるなんて…俺はまだ父さんと母さんに謝って無い！それに話したい事が沢山有るからお願いだから消えないでくれよ！」
とシュウはどんどん消えていく両親に対して涙を流しながら近づこうとしたが

「駄目よシュウこっちに来ちゃ」
と言われた瞬間シュウの体は動かず石のように固まっていた

「何でだよ！…動けよ！動いてくれよ！父さんと母さんが消えるだろうが！」
と言いながらも必死で体を動かそうとするが

「シュウお前はまだ生きてるだろ？だったらこんな所に何時までも居ないでさっさと現実世界に戻れ」
そう父親が言うとシュウの体まで透けていった

「嫌…だよ…。また離れ離れに成るなんてそんなの嫌だぁ！」
とシュウは駄々をこねる子供のように叫んだが

「さようならシュウ。…最後に貴方の事を構えなくてごめんなさいね。でも私たちは貴方の事を愛していたわ」
と最後の母親の言葉を聞くとシュウの意識は閉ざされていった
～夢ＥＮＤ～

「…ュウ…ん…シュ…さん…シュウさん！」
と誰かから名前を呼ばれながらもシュウは目を覚ましていった

「大丈夫ですかシュウさん！？」
とカグヤが心配して此方の顔を覗いてくる

「う…あ…カグヤ?…何で此処に?」と思わず疑問に成りそういってしまった

「何でってシュウさんが倒れたからずっと看病してたんですよ?…それよりもさっきまで泣いてましたけど悲しい事が有ったんですか?」

とカグヤがそう聞いてきた。

その直後にシュウは夢で起きた事を思い出し

「なん・・・で消えるんだよ。俺はまだ父さんと母さんに謝って無いのに……」

と涙を零し始めたシュウだった

「よっぽど辛い事が有ったんですねシュウさん……今だけ泣いて良いですよ全て私が受け止めますから」そう言うとカグヤはシュウを抱きしめた。

「うっ・・・うぁあああああああああああああああ」

とシュウはカグヤに抱き締められた事により涙は止まらずその場で泣き叫んでいた。

そしてカグヤは洋服が濡れる事を構わずシュウの涙が枯れるまで抱きしめ続けていた

PHASE50（後書き）

シュウ「ウッ…グスッ…」

抹茶「あぁ、シュウの心に傷を負わせちまったかな？」

カグヤ「……やっぱり作者には物理的に何度か地獄見せた方が良かったかな？」

抹茶「勘弁してくれ、正直ディアブロとジャッジメントに危険性なんて無かったんだよ。…ただ最初から強力な力を持つと力に溺れたりするから敢て両親は危険性の有るＭＳと教えてたんだよ」

カグヤ「そうですか…そういえばシュウさんが本編でまだ謝ってないって言ってましたけど何を謝ってないんですか？」

抹茶「ん？それは秘密だ。…教えたらつまらないだろ？」

カグヤ「そんなものですかね？…さて今回も感想来てたんですよね？」

抹茶「ん？ああ感想と言うより指摘だな。飛竜要さんご指摘有難う御座いました」

カグヤ「取り敢えずシュウさんがあんな事に成ってるんでもう後書き閉めましょうか」

カグヤ・抹茶「さてシュウとカグヤ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

ＰＨＡＳＥ５１（前書き）

今回は前書きは無しとさせて頂きます。

ただ自分個人のお話があるので、もし宜しければ本編を読んだ後に後書きを読んでくれる事を幸いと思います

PHASE51

シュウが目覚めた後シュウはポツリポツリと夢の中で起きた事を説明してくれていた。当然ディアブロやジャッジメントの危険性には危険性は無く己の意思を持つと聞いた時は、驚きは隠せずＭＳの意思の否定をしてしまったがデスペアにも壊れる寸前にその現象が起きたと聞きカグヤも渋々だが納得したが、話はそれだけで済まされなかった。

「俺は……謝れなかった。お袋と親父に謝れずに……」
そういうとシュウは自分の手から血が出るほど握りしめていた

「……何を謝ってないんですか？」
と思わずカグヤはシュウが泣きそうな顔に成って居たので相談に乗ろうと言った瞬間

「俺が…俺が親父とお袋を殺したんだ」
と重たい口を開いてそう言ってきた

思わずカグヤは自分の知ってる内容とは違い

「ちょっと待ってくださいシュウさん、貴方の両親は確か過労死で死んだんじゃ？」
と自分がシュウ本人から聞いた死因とは違う事を言われ思わずそう言ってしまった

「ああ、確かに親父とお袋は過労死で死んだ…。でも原因は俺だ…
カグヤに話した幼い頃の続きには俺と親父とお袋が喧嘩したんだ。
理由は単純子供のころの俺は親の仕事がどれだけ大変かわからず何

時まで経っても構って貰えないから遂に怒ったんだ『話が違うじゃないか』ってね。親父たちは『もう少し待って』って頼んで来たんだけど『何時も何時もそう言って僕の事なんか大事じゃないんでしょ！』そう言って嘘を着く両親の顔を見たくなかったから部屋に籠ってたんだよ……そして数日後父さんと母さんは死んだ」

そういうと乾いた笑いを上げていた。…自分が殺した原因でもあるのにも関わらず、両親に謝る事も出来ず自分だけのうのうと生きて居る事に対して苛立ちを感じていたのだ。

「ちょっと待ってください、今の会話でシュウさんがシュウさんの両親を殺したような行動や言葉は一度も」

とカグヤは一瞬シュウが親を殺すような原因の言葉や行動が一つも出て無い事に疑問を覚えたが

「そうだな・・・傍から見たらそう思えるんだろうけど、今思い返せば喧嘩した時両親の顔色は、まるで死人のように青かったんだ。あの頃は親父とお袋は、俺との約束を果たす為に頑張って仕事を片付け続けていたのにも拘らず俺は、感謝や労いの言葉を掛けもせずそれどころか文句を言って親を困らせたんだからな」

「そう・・・だったんですか、でも！シュウさんがディアブロに乗って誰かを救う為に戦ったら貴方の両親だって……」

「俺はディアブロに乗る資格なんてない！」

そう言ってカグヤの言葉を打消し頭を抱え込んだ

「結局俺は無理なんだよ。自分の親を苦しめた人間が誰かを助けよう何て事は…」

とシュウは自らやってきた事を否定し目を背けようとしたが

「お前は本気でそんな事を言ってるのかシュウ？」
と医務室に入ってきたハイネがそう言ってきた。

「ハイネ？何で此処に？」
とカグヤはハイネが何故此処に来たのか疑問に成りそう聞いた

「あぁ、少し厄介な事が起きてな。それを伝えようと思ってきたんだが先に其処に居る馬鹿野郎をぶん殴らないと気が済まない」
そういうとハイネはシュウに近づき頬にパンチを一発入れ

「ふざけるなシュウ！お前の信念はこんな簡単な事で崩れ去るほど脆い物だったのかよ！」
そう言って胸倉をつかみそう叫んでいた

「うるさい！お前なんかに俺の気持ちが判るか！目の前で親に謝れずにそのまま再び気持ちが判るのかよ！」
とシュウは、もう自分の事など構ってほしくないと思いそう言ったのだが

「ああ、お前の気持ちなんか判らないさ！寧ろ今のうじうじしたお前を見てると苛々するんだよ！」と再び声を荒げながらハイネはシュウにそう叫んでいた

「だったらほっといてくれよ！俺の事なんか如何でも…」
と言おうとした瞬間再びハイネから殴られた

「如何でも良いだと…お前は本気そう思ってるのかよ！俺はお前に助けられてから憧れたりもしたし尊敬もしている！一度は俺はお前を心の底から羨ましいと思い同時に妬ましくも思った！何故だか判るか？それはお前が誰に命令されてるわけでもないのに自分の身を

投げ出すことを躊躇いもせず誰かを救うために戦い続けているからだ。……そんなお前が誰かを助ける事なんか出来ないなんて弱音を吐かないでくれよ。お前は俺らの希望なんだよ。頼むからもう一度立ち上がって俺らを救ってくれよ…俺らはお前が居ないとダメなんだよ」

そう声を震わせながらハイネはシュウに対して言い叫び胸倉に掴んでた手を話し背を向けた。

そうして部屋を出て行こうと扉の前に立って

「シュウ…俺はお前が再び立ち上がってくれるのを待ってる」

そういうとハイネは部屋を出て行き、カグヤはシュウの事も気に成ったがハイネが言っていた厄介なことについて聞く為に後を追った。

「ハイネ貴方の気持ちは痛いほど判りました。…それよりも厄介な事とは？」

「その事か…ザフトがヘブンスベースを落とした。だが肝心のジブリールは捕まらずオーブのセイラン家に逃げ込んだらしい…つまりだ。ザフト軍の次の目標はオーブに成るってことだ」

「そんな…じゃあまたオーブは」

そう言ってカグヤは絶句してしまった。

やっと立て直したオーブだが、今は主導権を握っているのは、他ならぬセイラン家だ。しかも今までセイラン家の愚息ユウナ・ロマ・セイランのやってきた軍事指揮能力を見てもそこまでの戦略眼は無くオーブの火の海に包まれるのは目に見えて確かだろう。

「ただ…俺は、ジブリールだけが議長の目的じゃないだろうな」

「え？」

「もしジブリールが目的なら交渉でもして引き渡して貰えれば済む事だ。だが今ザフト軍は軍をオーブに進める事を決めている…考えられることは、ジブリールはオーブに侵略するための建前　本当はオーブが議長の狙いに気づいた時軍を出させない為にもオーブの戦力を減らすのが目的かも知れない」

とハイネは、自分の考えをカグヤに対して告げていた。

「そうなんですか…しかし此れをシュウさんに伝えなくても？」

「今のシュウに言っても無駄だろう。あれだけ親の事について引き摺ってるんだ。もうしばらく時間は必要だろう」

とハイネは敢えてシュウに伝える事をよしとしなかった。

「そうですか・・・そういえば、ザフト軍がオーブに攻めてくるまでの猶予は何時までですか？」

「大体一週間後だ。……それよりももっと不味い事が有るんだ」

とハイネは何時切り出そうか迷っていた顔をしていたが話すようだった

「まだ不味い事残ってるんですか？これ以上の不安定要素は、排除しておきたいんですけどね」とカグヤは額に手を置いてやれやれとして首を振っていた

「不味いというよりも不安定要素が満載だ。良いかヘブンスベースが落ちたのは、決してザフトが物量で押したからじゃない最新鋭の機体を３機出したから落とせたんだ」

と一瞬ハイネが最新鋭の機体の数を言い間違えてるのに気付いて

「何を言ってるんですかハイネ　ザフトの最新鋭と言えばデスティニーとレジェンドの二機だけでしょう？」

「俺も最初はそう思ったんだ。だがな、最後の一機の存在がデスペアだって噂されてるんだ」

「マジですか……それが本当なら不味いですね」

とカグヤも少々焦りを隠せず爪を噛んでいた。

「あぁ、今までならシラユキのホープ一機でデスティニーとレジェンド同時に戦ってもきつさは無かったんだろうが、デスペアまで加わるとな」

「えぇ、如何にかして一対一まで持って行かないと確実にホープが落ちますね」

とパイロットが乗っているのか不明だが、それでもデスペアはホープと性能が全く一緒なのでカグヤも苦戦することは間違いなく確定だろう。

そう考えるとやはりシュウには、悪いが無理やりにでも戦って貰うしか無いだろう。だが、カグヤは如何しても無理やりシュウを戦わせる事に嫌気を感じシュウが自分の力で立ち直なおり、再び肩を並べて戦えることを期待しつつ迫り来るザフト軍に対抗する為にカグヤはシュミレーター室へと向かって歩き出した。

ＰＨＡＳＥ５１（後書き）

さて読者の皆様毎度自分の執筆させて貰っている
『ガンダムＳＥＥＤ－閃光のライトニング－』を読んで頂き誠に有難う御座います。

今回これほどまでに執筆を遅れた事まことに申し訳有りませんでした。

既に弁解や弁明の言葉などはせずただ謝らせてほしいです。

別に今回こんな真面目な話をしているのは
執筆の打ち切りなどではありませんのでご安心ください。

ただ以前自分の執筆していた
『ＩＳ　復讐を願った少女』を自分の我儘で打ち切り読者に多大な怒り・迷惑をかけてしまってから小説を書くのが怖くなってしまいました。

ですが、こんな拙い文章でも読んでいてくれる大勢の読者様の事を考えると手はワードを打つことに向いてしまいます。

正直に言って、此れは傲慢でしょうか？

それともこんな誰かに迷惑をかける作者が此れ以上小説を書いて良いのでしょうか？

ごめんなさい…正直こんな弱音を後書きで書くなんて迷惑な上に投稿すらマトモにしてない自分は最低最悪の作者でしょう。

ただもう最近それの事ばかり考えると怖くて精神的にも不安定な事が続きます。

故に此処で一つ聞きたいことがあります。

『こんな作者でも再び筆を執る事をして良いのでしょうか?』

本当に申し訳有りません。本来ならば自分の力で解決するべきなのでしょうが自分も所詮誰かの力を借りなければ一人で立つ事も無理なちっぽけな臆病者の存在でしか有りません…。

それでは失礼します

機体情報（シュウ・カグヤ・ハイネ専用機）（前書き）

もしかしたら次話で登場させるかも知れないので先に機体紹介を行っておきます

判りづらい点などありましたら感想の一言で申し上げてくださいましたら。

なるべく判りやすく説明したいと思います。

しかし自分で考えた機体とは言え最後の最後でちょいチートすぎたかな?としばしば思いそうです。

機体情報（シュウ・カグヤ・ハイネ専用機）

ディアブロ（シュウ・Ｋ・ライトニング専用機）
機体原型　グリープガンダム
機体情報：色彩：青色の部分を全部赤色に変更
　背中の翼をゾイドのプテラスの翼に変更
　頭部をハルートガンダムに変更　常時４つ目の状態
　後部腰部に逆三角形（▽）の形をしたビットを装備
　縦に連なって下ろしている為尻尾の様にも見える

武装一覧
頭部：イーゲルシュテイン
背中：ビームサーベル
左肩：斬艦刀（デスティニーと一緒で背中側に斬艦刀を滞刀させている）
右肩：折り畳み式ビームキャノン
両腰：リフレクションボール
両腕：ビームシールド発生装置
背中：リフレクトビット
左手：ビームライフル
ＯＰ　鬼神化　リミッター解除　ＮＪＣ搭載
　ジャッジメント抑制プログラム

補足説明
背中翼
骨組みだけなので飛べないと思われがちだが、戦闘時は羽の骨組みからＥＮを放出エネルギー翼を形成し飛行（判りづらい方はコードギアスのランスロットアルビオン参照）

折り畳み式ビームキャノン
ＥＮ兵器。展開時は肩を支柱とし射出

威力はスキュラより劣るが、チャージすればストライクのアグニにひけを取らない程の火力を持つ。

リフレクションボール
投擲武器。此れ単体で用いても殺傷能力は皆無だが投擲した直後にＥＮ兵器（ビームライフル等）を撃ち込むとリフレクションボールがビームを吸収後ビームを撃った所とは全く反対方向（範囲は前面約１８０度）に低威力だがビームの雨を浴びせられる。またビーム兵器の威力によってビームの雨の威力が変わる。

リフレクトビット
基本は腰にぶら下がっているが、切り離し可能。切り離し直後は▽から六角形となりディアブロ周辺を飛び回っている。ただしシュウは、ドラグーンを操る才能が皆無なので機械任せ故に単調な動きしか出来ない。だがリフレクトビットに対してビーム兵器で攻撃した場合リフレクトの表面に着けられているヤタノカガミによって反射する。またビットの角度によってビームの進行方向が変わる

鬼神化（制限時間３分）
ディアブロの持つ特殊能力
効果としてはリミッター解除と解放の効果を併せ持つほどの能力
また特殊能力としては、ビーム兵器の威力の向上。
エネルギー翼からビーム攻撃可能（威力はビームライフルと同等・連発可）
欠点は使用後著しく機体性能の低下とジャッジメントの持つ抑制プログラムを送信または撃墜しなければ視界に入る物を全て破壊する。

ジャッジメント（シラユキ・カグヤ専用機）
機体原型　Ｆ９０一号機（後付装備無型）
機体情報・色彩：色彩変更無し

背中にストフリと同じで八枚羽を装備

武装一覧

頭部：イーゲルシュテイン

背中：スーパードラグーン

右肩：折り畳み式レールキャノン

両腕：ビームシールド発生装置

左腰：ビームチャクラム内蔵型ムラマサ・ブラスター

右腰：ビームライフル

右足：ビームナイフ（ガンダムＸ　コルレル参照）

ＯＰ　光神化　リミッター解除　ＮＪＣ搭載

ディアブロ暴走抑制プログラム

補足説明

光神化（制限時間3分）

ジャッジメントが持つ特殊能力

効果としては、リミッター解除と解放の効果を併せ持つほどの能力

また特殊能力として光神中は敵機に対しジャミング効果　自機に移動時機体の分身を出現

欠点は、使用後著しく機体性能の低下とディアブロが抑制プログラムを送信または撃墜されない限り視界に入った物を全て破壊する。

チャクラム内蔵型ムラマサ・ブラスター

ドラグーンｏｒファンネル適正有のパイロットのみ使用可能武装

普通に使用すれば、其処ら辺にある斬艦刀と全く一緒でただのビーム格闘兵器に成る

だが適性の有るパイロットは、ムラマサ・ブラスターの持ち手を一回捻るとブラスターが開き内部に入っているビームチャクラムが４基射出される。射出後は、開閉部を閉じ元通り通常のムラマサ・ブラスターとして使用可能

ビームナイフ

形状はコンバットナイフ。ビームを展開しなくても実刀としても使用可能。基本は足に収納されており使う時だけナイフ収納部が突出し内部から射出される。

折り畳み式レールキャノン
実弾兵器。展開時は肩を支柱とし射出する。
一直線にしか飛ばないが弾速はＭＳであっても捉え切れないほどの速さ。
故にロックオンされて相手が直線に居る時は、相手が反応しきる前に直撃する事が多い
また実弾兵器ではあるが、フェイズシフト装甲持ちに対しても直撃をすればよろめかせる事が出来る程の威力

レストア（ハイネ・ヴェステンフルス専用機）
機体原型　ハイペリオン

機体情報・色彩：ハイペリオンの胸の灰色を橙色へと変更
　　両肩をガンダムベルフェゴールの腕に変更

武装一覧
頭部：イーゲルシュテイン
両肩：パイルバンカー内蔵型ストライククロー
背中：バスターソード内蔵型伸縮式ストライククロー
左腰：バスターソード（ガンダムＸのサーベルの形）
右腰：ビームソード
右腕：内蔵型ビームマシンガン（ゲルググＭ参照）
左腕：両刃直刀剣（エクシアが装備しているＧＮソードと思ってください）
ＯＰ
リミッター解除（制限時間５分間　シュウと同じく体力消費による発動）

フェイズシフト装甲

補足説明

機体

機動重視の為装甲を可能な限り薄くした為ビームライフルを一発でも受けるとその部位が壊れる。だが従来のブースターを１．５倍の大きさを持つブースターに変更また機体各部に大型ブースターを装備。機動性では、シュウとカグヤの専用機であるデスペア・ホープを上回るほどの能力を持つ

両肩

ＥＮ消費を考え内蔵ビームサーベルを廃止

ただし両肩のストライククローで掴んだ時の致命傷を与える時の事を考え

パイルバンカーを内蔵しコックピットやメインカメラをクローで掴みバンカーで貫く事をメインにした。

背中

当初格闘特化型の為アルミューレ・リュミエール搭載を考えたが、ＥＮ消費が激しいせいで装備する考えを廃止

背中の基礎部分だけ残し軽量化の為外部装甲を破棄。関節部分が丸出しに成ったが

邪魔な外部装甲を外したため３６０度対応可能前面に出すときは自分の腰部と腕の間を通る。

範囲はストライククローと同じで自分の近くにしか伸ばせないがストライククローと同じで３つの鉤爪で敵を掴み内蔵されたバスターソードで敵を貫く。

シュウが格闘特化を考え書いた設計図。格闘に特化され過ぎたので搭乗するパイロットが居ないだろうと考えて机上の設計図で終わる

と推測していたが、ハイネが興味を持ち製造以後ハイネの専用機と成る

レストア：修復の意味を持つ

ＰＨＡＳＥ５２（前書き）

読者の皆様お久しぶりです。

あの件から８日程の時間が経ちましたが自分は何とか立ち直れました。

こんな自分に色んなお言葉を送って下さった読者には、感謝しても感謝しきれません。

本当に有難う御座います

PHASE52

～ハイネSIDE～

「良い今回製造したレストアは、貴方が以前乗っていたグフと同じで射撃武器が一つしか載ってないわ。あくまで目的は零距離での格闘戦でも被弾はしないでね?高機動なんだけど装甲が薄いから一発でも当たったら致命傷よ」

とハイネはエリカからレストアの説明を受けていた

「判った。……しかし被弾するなってのはキツイ提案だな」

と目の前に立っているレストアを見ながらそう呟いた

「知っているわよ。貴方元フェイスなんでしょ?だったら出来るわよ。シュウ君だって貴方が出来ると思ってるからレストアを託したのよ?」

「だろうな…だけど今のアイツは見るに堪えない」

とハイネは、言ったが、シュウが落ち込んでいるにも関わらず自分は何も出来ない事に歯痒さを感じていた

「そうね…でも、待ってればシュウ君も復活してくれるはずよ。それまで待ちましょう」

とエリカさんはシュウが自分の力で立ち上がるのを信じているらしいが

次の瞬間その希望すら打ち壊される事が起きてしまった

「エリカさんシュウさん此処に来てませんか!?」

とシラユキが慌てて格納庫に入ってきた

「シュウ君は此処に来てないけど慌てて如何したのシラユキさん？」

「シュウさんが…シュウさんが何処にも居ないんです！」

「マジかよ…シュウの奴遂には逃げ出すとわな」
とハイネはシュウが逃げ出した事に怒りを覚えたが

「そんな事よりも早くシュウさんを探さないと！」
とシラユキは格納庫に置いてあるホープに乗り込もうとしたが

「止めときなさい時間の無駄よ。それに彼が本気で逃げ出したら誰も見つけれない筈よ」
とエリカはシュウを追いかける事を反対していた

「だったらシュウさんをこのまま見捨てろって言うんですか貴方は！」
とエリカさんがシュウを見捨てる事に怒ってしまったが

「ええ、そうよ。それに臆病者に時間を掛けれるほど私達は暇じゃないわ。そんな事をしてる暇が有るなら貴方も訓練に時間を費やしなさい」

「なっ！もう良いです！こうなったら私一人だけでも探します！」
そう言ってシラユキはホープに乗り込みシュウを探しに出撃して行った

「流石に言い過ぎじゃないか？…アンタにも何か考えが有るのかもしれないが臆病者は言い過ぎだ」
とハイネも今のシュウは見てはいられないが臆病者呼ばわりは許せ

なかった。

「そうね…悪かったわ。……でもシュウ君は見つける事は不可能よ。だって此処は悪魔の縄張りなんだから」

とエリカは残ったハイネに謝罪した後誰にも聞こえない声でそう呟いた

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「全て此れで良いんだ…此れで」

とシュウはゴムボートを動かしながらそう呟いていた

（戦う気の無い俺があんな所に居たって邪魔なだけだ。そんなだったら何処かで誰の邪魔もせず生きてた方が皆の為だろうな）

と既に戦う意思すらなくしシュウは一人考え事をしていた。

そうシュウはオノゴロ島から逃げ出し一人で生きようと考えているのだ。仮にあの場所に戻ったとしても自分の様な腑抜けにカグヤは呆れるしハイネや他の仲間も逃走した自分の事など完全に失望しているだろうから居場所はないだろう。

そしてシュウは最後の心残りで着けていた。人差し指のリングを取り外し手のひらに置いた。

「コイツともお別れだな。……今の俺にカグヤのパートナーを名乗る資格はない」

そう言って思いっきり握りしめたリングを海に向かって投げ放とうとした

「……何で出来ないんだよ。投げる事なんか簡単なのに…」
とシュウは腕に全く力が入らず投げる気力すら湧き上がらず上げた腕をゴムボートの底へと置いた。

「相変わらず女々しいな……こんな簡単な事すらできやしねぇ」
と自分自身に悪態をついていたがシュウは気付いていなかった。ゴムボートを中心として海中に黒い影が出来て居る事に…。

そして次の瞬間ゴムボートは海中の何かによってひっくり返されシュウは海へと沈んで行った。一瞬何が起きたか理解できなかったが、目の端で光るリングが目に映り其れを追いかけに泳ぐが体が何かに捕まれ身動きを取れなくなった。

何が自分を掴んでいるのか確認する為に振り返った瞬間シュウは驚きが隠せなかった。

（な…何でディアブロが此処に居るんだよ！）
と海中では喋れずそう思ったが、ディアブロよりも先にどんどん海中へと沈んで行くリングを優先するためにリングに腕を伸ばすが届かなかった。

だがシュウはリングを諦める事は出来ずリングを拾う為にディアブロの手の中でもがくが

（主よ、暴力事を許してほしい）
とディアブロから謝罪を表す単調な機械音声が聞こえてきた。

だがシュウはそんなディアブロの声を無視し未だに手から抜け出そうとジタバタしているが次の瞬間腕の力が強まりシュウは空気を吐き出し大量の海水をのみ込んでしまった

（クソ野郎…が）

シュウは自分の意識を奪おうとしているディアブロに恨み言を思い海底に沈んで行くリングを悔しそうに眺めながら意識を絶った

ＰＨＡＳＥ５２（後書き）

ちょっと短いですが、リハビリ期間だと思ってください。

今回も読んで下さり有難う御座いました。

ＰＨＡＳＥ５３（前書き）

シュウ「何かもう作者の投稿の遅さは亀級と言っても良いんじゃないのか？」

抹茶「うっ！…元々自分にはオリジナルストーリー書く才能無かったんですかね？」

カグヤ「さぁ？それでも投稿しているだけマシだと思いますけどね」

シュウ「そうかも知れないな。それよりも作者が完全に立ち直って良かったよ」

抹茶「そだねー。色々迷惑かけちゃったけど復活出来て良かったよ」

カグヤ「それじゃそろそろ本編入りますか！」

シュウ「だな。んじゃ何時ものやるか」

シュウ・カグヤ・抹茶「それでは本編をお楽しみください！」

PHASE53

～カグヤＳＩＤＥ～

「…何処に居るんですかシュウさん」

とカグヤは数少ない小島で休憩しながらそう呟いた。

しかし先ほどから探しているにも拘らず何時まで経っても見つからないので一瞬エリカの言った通りシュウが本気を出して逃げ出せば見つかる事は無いと言った事を思い出したが、カグヤは直ぐに見つからないという考えを頭から消して再びシュウの探索を開始した。

（あの時は冷静じゃなかったですけどシュウさんが出て行ったときＭＳは一機も失われて無かった……つまりシュウさんは船で移動してる事に成る。だったら此のまま探せば船が見つかる可能性も）とカグヤも僅かながらの希望を持ちそう思っていた。

そしてカグヤの予想通りゴムボートを見つける事は出来たが、既にゴムボートは転覆し辺りにはシュウが持ち出したと思われる資材の箱が浮いているだけだった。

一瞬嫌な結果を予想し顔を蒼くしてしまったカグヤだったが溺れているのではないかと思いホープを海中に潜らせてゴムボートが転覆した場所付近を探索したがシュウは見つかる事は無かった。

だがカグヤも諦める事は無く再び海中深くにホープを潜らせた。しかし深度から見ても人間が活動できる深度では無い事をカグヤは思いだし本当に諦めそうになったが目先で何かが光っていた。

（この深度で活動出来るのはＭＳが限界だってのに何でしょうか？

……一応確認しておきますかね）

そう思いながらも光っている何かに近づいて確認したが砂に紛れて上手く確認できずカグヤは少々面倒臭がりながらもホープの手で光る何かを砂ごと掬い海上まで浮上していった。

そして海面に着くと同時にホープの手をコックピット前まで動かし砂に紛れる光る何かを改めて確認した。

「何で…何で此れだけあってシュウさんが居ないんですか」

とカグヤは拾った物を見た瞬間大きく目を見開きそう叫んで思いっきり拾った物を握りしめていた。

そう見つけたものは、シュウとカグヤのパートナーの証でもあり彼氏彼女の関係に成った時にお互いに着けていたピンク色の宝石を飾ったリングだった。

「嫌ですよシュウさん。…アナタが死ぬなんて　そんな事信じたくないですよ」

と持っているリングを胸元に持って行きそう呟いていた。

だがその直後ホープに何処から来ているか謎なメールが着信しカグヤは少々不審に思いつつそのメールを開き内容を確認し始めた。

其処に書かれていたのは

≪貴方の探し人を預かっている。ただ今は返せない、必ず返すから暫く待ってほしい≫

とカグヤは、誰が送って来たか判らないがその内容に驚きを隠せていなかった。

そして直ぐにカグヤは活力を取り戻しホープのコックピットのハッチを閉めた。

相手が賢い人間なら逆探知すらさせず位置を判明させてはくれないだろうが、もし相手がその事をやっていなければシュウを見つける大きな手掛かりとなるのだ。その事を考えるとカグヤは自然とアカツキ島の秘密ドックへと向かっていた。

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

「ゲホッゲホッ！……此処は？」

とシュウは目覚めて直ぐ飲み込んだ吐き出し周りを確認した。

辺り一面壁壁壁ディアブロ壁壁が並んでいた。

一瞬シュウは何かの見間違いだと思い目を擦って再度周りの壁を確認した。やはり先ほどの事は夢ではなくディアブロはシュウの目の前に立ち此方を見つめていた。

「目覚めたか主よ。なかなか起きないので心配したぞ」

とディアブロが単調な機械音声が聞こえてきた

「そりゃ…あんな方法で気絶されられたら誰だって目覚め辛いというよりも一歩間違えたら死ぬぞ？」と呆れながらもそう言っておいた

「そうか、すまない主　次から気を付ける」

と本当にすまなさそうに顔を下げて謝ってきた

「二度は無いと思うけどな…。しかしお前ホントに人間みたいに感情あるな…いや意思が有るから当然か。しかしなんでお前は俺を主と呼ぶんだ？」

「それは我が主に恩を感じているだから」

「恩？俺はお前が造られた時に会った事有るか？」
とシュウはディアブロの言っている恩が身に覚えの無い為疑問に成ってしまった

「我が主と会うのは、造られてから此れが初めてだ」

「だったｒ「主が我の存在を求めていたからだ」
とシュウが言う前にディアブロがそういってきた

「我は造られた時から我の存在意義を知りたかった。…我は造られた時から誰からも必要とされず寧ろ破棄すらされそうに成った事もあった」

「破棄ってアスハ家の事だよな。あの時お前に何が有ったんだ？」

「そうだ主よ。あの時アスハ家の人間は、我の存在を知って創造主を呼び出した。その後創造主が我の存在を引き渡すことを読んでおり、我に乗って奪い取ろうとしたのだが我は、アスハ家の間諜達を拒絶したのだ」

「その時にお前は、既に意思を持っていたのか！？」とシュウは驚きを隠せなかった

「持っていたが、表に出す事は出来なかった。だが、その後創造主は我に感情・意思を与えてくれた。そして言ってくれたのだ『お前の主はお前が決めろ』と、だが我は、我を必要とする人間が居ない。故にその日は一生来ないと考えていた。だが…」

「だが？」

「創造主は我に主の事を教えてくれた。今まで我が認めぬ人間または、我に恐怖して乗らない人間だけだったが、主だけが我の存在を否定せず我を受け入れ乗ってくれると言ってくれた。…それだけで我は嬉しく一目会ってみたいと願った」

とディアブは既に自分の主と認めてくれているようだが

「ディアブロ　お前が俺を認めてくれるのは、嬉しいが、今の俺…いやこの先ずっと俺はお前に乗る資格なんて無いさ」と顔を俯かせてそう喋った。

「何故乗らない？……もしや主は創造主を殺した事について未だに悩んでいるのか？」

とディアブロはシュウの考えていた事を当てシュウは驚きを隠せなかったが

「あぁ、そうだ。俺は、俺の手で両親を殺してはいないが結局間接的には殺している事に違いないんだ。そんな自分が…最愛の両親を殺してしまった自分が誰かを救うなんて事許される筈が無い！結局俺のやってる事は、偽善なんだよ！ただ自分の罪から逃げる為に許される為にやってる自己満足でしかないんだよ！」

「そうか、やはり創造主の予想していた事が起きたな……主よ、今から流すのは創造主から主に向けて残した最後の言葉だ。如何か聞いてほしい」

≪ザザッ…あー　あー聞こえるか？今から流すのは、俺　ヨハンとエリーゼからディアブロに認められたパイロットに流す言葉だ。と

言っても其処に入るのは最愛の息子シュウなんだろうな≫

≪ヨハン　余り時間が無いから手早く用事は済ませましょう。≫

≪そうだな。シュウ　お前はきっと今悩んでいるんだろうな。ディアブロに乗るか乗らないかを…≫とビデオレコーダーの声に反応しシュウはビクリと体を震わせていた。

≪もし、そのまま乗るんだったらこのレコーダーは使われない筈だが、乗らずにレコーダーを使われるって事は、お前はきっと俺とエリーゼを間接的だが殺した事に罪悪感を感じて『自分に誰かを救う事なんか無理』とか言いだしてるんだろうな≫

とピンポイントに言われシュウは、両親に未来予知でもあるのかと一瞬思ったが次の言葉が自分を責める事だと考え耳を塞ぎ両親の声を聞こうとしなかったが

≪だがシュウ　お前が罪悪感を感じる必要は無い。確かにお前は、俺達に言うだけ言って閉じ篭っていたがあの程度の言葉で死ぬほど、俺達大人は軟(やわ)じゃない≫

≪寧ろ私たちがシュウに謝りたいわ。私たちは一刻でも早くシュウとの時間過ごす時間を作る為に必死に成って貴方には目を向けず仕事を処理を優先してたけど貴方の本当は気持ちは、一緒に居られるだけ…それだけで良いって気持ちに気づかなくてごめんね≫

≪お前が閉じ篭ってから漸くお前の気持ちに気付いた父さんと母さんの無知を許してくれシュウ≫

≪そしてお願いシュウ　此れ以上自分を責めるのは辞めて…。今更こんな馬鹿らしい事を言っても無駄かもしれないけど、貴方は立ち

止まらないで前を見続けて…きっと今の貴方は皆の希望だから…だからお願いもう一度もう一度立ち上がって皆と私達を安心させて≫
そう言うと録音されていた画面はノイズが起こり完全に両親の顔が見えなくなっていた

「何で…何で今更そんな事言うんだよ。何で誰も俺を責めないんだよ！父さんと母さんを奪って、その罪から逃れる為に誰かを救う為という理由付けをして他人を殺してる俺を何で…！」
と親が自分を責めず自分を心配している事に驚きを隠せずシュウは涙を流していた

「我には創造主の意思は判らないが、何で創造主が主を責めないか我には判る気がする」
とディアブロはシュウが泣きじゃくってるそう告げていた

「何だと？…じゃあ教えてくれディアブロ　何で父さんと母さんは俺を責めなかったんだ」
と既に自分の体面など気にせずディアブロに答えを求めていた。

「それは創造主が主を愛してたからだろう」

「えっ？親父とお袋が…俺を愛してくれていたから」
とシュウは、一瞬ディアブロが何を言っているのか理解できなかった。

「そうだ…何処の世間に子供を責める親が居るだろうか？何処に幼い主が言った事を叶える両親が居るだろうか？答えは簡単だ主よ。それは創造主が主を愛していたからだ創造主が主を愛していなければ我が生み出されても己の地位を安泰させる我は差し出されていただろう。そしてこのように他人から見れば邪魔な感情も主に向けて

のメッセージも残さなかっただろう」

「そうか…俺はずっと気付かなかっただけで本当は…本当は愛されてたんだな」

とシュウはそう呟くと少量の涙を零していた。

今までのシュウいや転生前からずっと彼は、両親の愛も理解出来ずに育っていた。どちらも親の仕事と言う事で忙しくお互いに会う事も出来ず友人から『愛される事』の意味を聞いても理解出来ないか説明されないのどちらか二つだったが、たった今彼も漸く親の愛に気づくことが出来嬉しさから涙を流していた。

～数分後～

「ディアブロ　お前の力を俺に貸してほしい」

と自分の目の前に居る機体に向かってシュウはそう告げた。

「元より我の力は主に貸す為に有る。だが一つ聞かせて欲しい主は何故戦うのだ？」

とディアブロはシュウにそう問いかけていた

「ん？そんなこと決まってるさ。俺が戦う意味は皆を守る為に使ってるんだ。仮に誰かに偽善者とか虐殺者と言われても構わない。俺は皆を守る為の楯であり敵を倒す為の矛であり続けるさ」

そう言うとディアブロはシュウに手を伸ばしてコックピットを開いた

「主の信念確かに聞かせて貰った。此れから宜しく頼む主よ」

「あぁ、此方こそ宜しく頼む。如何やらお前とは此れから一生の付き合いに成りそうな気がするからな」

そう言うとディアブロの手に乗りコックピットまで導かれた後シー

トに座り込んだ。

「それで此れから如何するのだ?」

「皆の所に帰るに決まってるさ。心配かけたし一発は覚悟しないとダメだな」

と苦笑しつつもコックピットを閉めアカツキ島の秘密ドッグへとディアブロを発進させた

ＰＨＡＳＥ５３（後書き）

抹茶「今回はシュウが立ち直り＋シュウディアブロの主に認められるの二本で終わらせました」

シュウ「まぁ、歯切れは良いけど相変わらず展開とか色んな物がｇｄｇだな」

抹茶「うっ！それは言わない約束で」

カグヤ「無理ですね。そういえばジャッジメントとデスペアは如何するんですか？」

抹茶「ジャッジメントは１～２話の間にカグヤを主と認めさせます」

シュウ「なるほどな。…そういえばカグヤがジャッジメント乗ったらホープが残るな。それ以前に機体とパイロットにストックあるんだし乗せたらどうだ？」

抹茶「あーそれ考えたんですけど、誰に何乗せるか検討中なんですよね。いっその事アンケートで決めますか」

カグヤ「アンケートに答えてくれる人が居たら良いんですけどね。それよりも感想来てたらしいじゃないですね？」

抹茶「はい、最弱戦士さん・大神さんご感想有難う御座いました」

シュウ「んじゃ今回はこれまでか」

シュウ・抹茶・カグヤ「さてシュウ（俺）とシラユキ（私）はどうなるのか?次回お楽しみに!」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＩＤＥで何か有りましたら言って下さい

アンケートの方ですが
パイロットにつばさ・アウル・スティング・ステラの４人が残ってるので機体に乗せて出撃させようと考えています。此れまでストーリー上で入手した機体を書きますので、好きな組み合わせを選んで一言で出してくれると有りがたいです。

パイロット
風舞　つばさ
アウル・ニーダ
スティング・オーグレー
ステラ・ルーシェ

機体一覧
強行偵察型ジン
バクゥ
バビ
ムラサメ
エンジェル
キマイラ
アビス
ホープ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7546s/

ガンダムSEED－閃光のライトニング－

2011年11月27日03時46分発行